魔法少女リリカルなのは ～よくある転生のお話～

カニンガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～よくある転生のお話～

【Ｎコード】
Ｎ２０５９Ｑ

【作者名】
カニンガム

【あらすじ】
就職活動に失敗しまくっている大学生が、リリカルな世界に転生する話。
主人公最強・チートな話です。あとハーレムにします。
原作ブレイクもするので嫌いな方は見ないほうがよいかと。
初投稿なので、文章に変なところがあったらすいません。
なお、技名、魔法名、人物名などに原作小説、漫画、ゲームなどから一部『転載』している部分がありますのであしからず。

プロローグ（前半）

「…また落ちたか」

俺はそう言いながら封筒の中身を読む。
中に入っているのは、この前受けた企業の採用試験の結果である。

「これでめでたく１００社突破だぜ！わーいｏｒｚ」

自分で言ってむなしくなる。
今まで俺は１０１社の企業の採用試験を受けたが、
今のところ完敗である。

最近は景気が悪いから、という言い訳はしたくない。
俺は超優秀ではないが、落ちこぼれでもない。
授業には毎回出席し、テストでも高得点をマークして、
資格などもそれなりに取得している。

なのに落ち続けている。
大学の就職課の先生軍団も、なんで受からないの？
と、首をひねっている状態である。

「…気分転換に散歩しよう」

そういって表をぶらぶらしていたら、急に
めのまえがまっくらになった（ポケ○ン風に）

「なんだよ、まったく、ってここどこだし！？」

気が付いたら、さっきまで歩いていた道ではなく、
まっしろーい、そしてひろーい空間で椅子に座っていました。
何が起きたんだろうと考えていると、
足元に何かがいるのがわかったので視線を落とす。

そこには、

白い服を着て、

見事な土下座をしている、

ボン、キュッ、ボンな女の人がいました。

…何このシチュエーション。

プロローグ（前半）（後書き）

プロローグ前半はしゅーりょー。
後半で主人公の詳細を決めます。
ものすごくチートにする予定ですｗ

プロローグ（後半）

俺は今ものすごく混乱している。

家の近所を散歩していたはずなのに、気が付いたら変な所にいるしおまけに女の人が土下座しているし。
とりあえず俺は女の人に話しかけることにした、が

俺「あの～」

女「ひぃっ！！」

俺「？」

女「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

女の人はずーーっと俺に土下座状態のまま謝り続けている。

どうしようか。

1、とりあえず落ち着かせる。
2、いいかげんにしろと言って殴る
3、美人そうなので口説く

「誰だ3番の選択肢決めた奴」

まあいい。

やはりここは日本男児として、

「いいかげんにしろ、このアマーーーーッ！！！」

ドカンッ！！（スマブラのハンマーで）

女「きゃあああああああ～」

キラーン☆

おお、きれいに飛んでったｗ

しかしなんでハンマーがあるんだろう？

女「こまけぇことはいいんだよ！」

俺「戻ってくんの早っ！」

女「なんてったって私は神様ですから！」

俺「はい？あんた今なんて言った？」

女「だーかーらー、私は神様です！」

俺「そーかそーか、んで神様（笑）は俺に何の用だい？」

神「なんですかその神様（笑）って！
まあいいです。まずなぜあなたがここにいるかを説明します」

俺「そうだ、なんで俺はここにいるんだよ！元の場所に返せよ！」

神「それは無理ゲーです。なぜならあなたはもう死んじゃいましたから」

俺「Ｗｈａｔ　ａ　ｆｕｃｋ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｔａｌｋｉｎｇ　ａｂｏｕｔ？」

神「なぜに英語！？
えーとですね、あなたは家の近所を散歩している時に
真上から小型の隕石が落ちてきて、それの直撃を受けて死んじゃいました」

俺「…なんで俺はこんなにも運が悪いんだろう」

神「それにも理由があります！」

俺「はい？」

神「実は、私のミスであなたの運勢が最悪に設定されていたの。
だから全然企業の内定が取れなかったわけ！それに気がついた
私は、あなたの運勢を

上げようとしたんだけど…」

俺「したんだけど？」

神「間違えて殺しちゃった☆」

俺「よし、死刑だ」

神「ひぃぃ！ごめんなさい！わざとじゃないんです！またミスしただけです！
お願いですから死刑は勘弁を～！」

俺「うん、それ無理」

神「えええっと、じゃあこうします！
全部私のミスなので、特典をつけて転生してもらいます！
ちなみに転生先は『魔法少女リリカルなのは』です！」

俺「転生、しかもリリなのの世界か…なら許す」

神「よかった～。で、どんな特典つけます？今回は特別に無制限ですよ～」

俺「無制限だと？よし、チートにしてやる！
まず、次元航行艦を2隻よこせ。
マクロスフロンティアのマクロス・クウォーターとバトルフロンティアがいいな。
艦載機はＡＩＦ－９Ｖにしてくれ。次はその2隻を収容するために、そうだな、
スター・ウォーズの第2デス・スターよこせ。艦載機はさっき

と同じにしてくれ。
　中にいる乗組員はみんなターミネーターにしてな、もちＴ－Ｘで。
　次に、魔力・気はＥＸで、身体能力も強化してくれ。あと、あらゆる魔法を使用可能に
してくれ。術式はミッドとベルカの完全ハイブリッド。年齢は主人公と同年代にしてくれ。
　それからデバイスはインテリジェントを二つくれ。
　一つ目は指輪型で、名前は「インフィニティー」。バリアジャケットは、
　マクロスＦのＶＦ－２５Ｓ（オズマ機）にアーマードパックをつけたような感じのがいい。
　武装は、５８ｍｍガンポッドで。こいつの弾丸やマイクロミサイル、反応弾は
　俺の魔力で作り出すから無限に連射可能で、完全追尾型にしてくれ。
　あとＭＤＥ（ディメンション・カッター）弾も使用可能に。念のためにな。
　二つ目はドック・タグ型で、名前は「アイザック」。バリアジャケットは、
　ＣｒｙｓｉｓのＮＡＮＯスーツにしてくれ。それプラス、俺が今までやってきたゲームに
　登場した銃や武器を、頭の中で考えただけでアームドデバイス化（非人格型）して
　召喚する能力が欲しい。カートリッジは、魔力で作った弾丸を火薬で発射するように
　してくれ。あと、ユニゾンデバイスもくれ。名前は「ティーナ」。美人にしてねー。
　あとは～、あ、そうだ、デス・スターに禁書の樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）とガンダムに出てたヴェーダを足した感じの超高性能コンピュータをくれ。

んでそれをと2隻の次元航行艦を管理・運営する人工知能を、映画「ステルス」に
出てくるＥＤＩ（エディ）にしてくれ。最後に、自分の顔とかをもうちょっと
かっこよくしてほしいかも！」

神「・・・・・・・・・・」

俺「あれ？お～い、大丈夫か？」

神「…いや、チートすぎるでしょ！！それは駄目よ！！」

俺「さてと、全身の肉を一ミリずつそぎ落とされるのと、硫酸を少しずつたらされるのと、
どっちがいい？」

神「こ、これくらいの能力、簡単につけちゃうよー！なんたって私は神様だからねー！」

俺「いやー、話のわかる神様でよかったよ」

神「あとは名前を決めてくれない？君の前世の名前はもう使えないから」

俺「…ウィリアム・Ｔ・ロンバート」

神「そんな名前で、大丈夫か？」

俺「大丈夫だ、問題ない」

神「そんじゃこれでおしまい！君が頼んだものはついたら全部そろっているからね。
　では、第二の人生いってらっしゃ～い！」

そういいながら神は俺の目の前に扉を出現させた。

ウィリアム（以降ウィル）「世話になったな、神様。ありがとよ」

神「…アテネ、よ」

ウィル「ん？」

アテネ「私の名前はアテネよ！覚えときなさい。困った時にはいつでもこのケータイで
　呼んでちょうだい！ちょっとした頼みなら聞いてあげるからね～」

ウィル「わかった、ではいってくる」

そういって俺はリリなのの世界に旅立っていった・・・

プロローグ（後半）（後書き）

はい、チート乙って感じですｗ
次回は原作キャラと遭遇、するかも？

第1話：とりあえず何しようかな？

「さて、着いたかな？」

扉をくぐるとそこは戦艦の艦橋のような場所でした。
周りを見ていると目の前のモニターが点滅して、

「マクロス・クウォーターへようこそ、ロンバート艦長。
私は本艦隊の人工知能でエディといいます。よろしくお願いします」

「おう、よろしくね、エディ！んで、ここはどこかな？」

外を見てみると、星が輝く宇宙空間が見えた。

「現在、本艦隊は地球に向けて航行中です。あと7日で到着します」

「待て、艦隊ってもしかしてデス・スターもいるんじゃないだろうな？」

「いえ、デス・スターは虚数空間内で待機中です」

「よかった、あんなでかいのが突然地球軌道上に現れたらまずいからな」

第2デス・スターの大きさは直径１６０？と超巨大なのである。

「じゃあ、地球に着くまでの間にちょっとしたプロジェクトをやるか」

「どのようなプロジェクトですか、艦長?」

「デス・スターの内部に造船所はあるか?なかったら作ればいいか。そこで船を造る。こんな感じで。

インペリアルＩＩ級スター・デストロイヤー：１０隻
テクター級スター・デストロイヤー：１０隻
エクリプス級スーパー・スター・デストロイヤー：２隻

これに必要な材料とかは全部俺が創造魔法で出すから。
なんか質問は?」

「なぜこんな大艦隊を作るのですか?現在艦長が保有する艦隊だけでも
惑星１つを余裕で破壊することは可能ですよ?」

「その通りだが二つ理由がある。
一つは時空管理局に対する軍事力の保有だ。奴らの戦艦にはアルカンシェルが搭載されている。これは発動地点を中心に、百数十キロメートル範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲だから、さすがに今の艦隊だけではこの攻撃には耐えられない可能性がある。従って、俺は戦力の強化をしようとしているわけだ」

「なるほど、確かに本艦隊の防御システムは、ＰＰＢ（ピンポイントバリア）のみなので、敵の攻撃には耐えられない可能性がありますね。
あと、デス・スターの防御システムの構築は現在進行中です」

「おっけ～。んで、もう一つの理由。
それは…」

「それは…？」

「かっこいいからだ！！」

…人はそれを「くだらない」、もしくは「無駄」という…

「よし、ちょっと作者出てこい。スーパーレーザーの刑にしてやる」

すいません、ごめんなさい、許してくださいｂｙ作者

「誰に話しているんですか、艦長？」

「いや、なんでもない。んで、どれくらいでできるかな？」

「全艦完成予定は本日から約２ヶ月後になりますがよろしいですか？」

「大変結構。それじゃまずは材料を出さないとな」

「了解。デス・スターへの転送を開始します」

そして俺はデス・スターの巨大格納庫で材料を作りはじめた。

「ん～何で作ればいいかな～、タングステンとオリハルコンでやるか！」

そういって必要な分のタングステンとオリハルコン、その他材料を魔法でどんどん作っていった。さすがチートだねｗ

「よし、おしまい！じゃ、一足先に地球に飛ぶかね。
転送開始。目標、地球、日本、海鳴市！」

そんじゃあ、なのはやはやてに会おうかな～、
なんて考えながら俺は地球に飛んで行ったのであった…

あ、デバイスの事完全に忘れてた…

第1話：とりあえず何しようかな？（後書き）

原作キャラとの遭遇は次回にします。
船に関することはウィキペディアに書いてあるのでそちらをご覧ください。

第2話：地球よ、私は帰ってきた！（前書き）

4／15一部編集

第2話：地球よ、私は帰ってきた！

「やっと大地に足を下ろすことができると思ったのに…」

どうも、現在落下中のウィリアムです。

「どうも俺は転移魔法が苦手のようだな、きちんと訓練しないと」

≪そうですね、マスター≫

ん？指輪がなんか言っている。あ、これデバイスだったっけ？

≪が～ん！忘れられていたなんて…≫

「す、すまん。最近物忘れがひどくてね」

≪まあいいでしょう。私がインテリジェントデバイス、インフィニティーです≫

「そうか！俺はウィリアムだ。よろしくな！
ところで、ものは相談なんだが」

≪はい、何でしょう、マスター？≫

「俺が落下死しないで済む方法を教えてくれないか？」

そう、いまだに俺は落下中なのである。

あ、下の町がだんだん大きくなってきた…

≪とりあえずバリアジャケットを着れば空を飛べますよ？≫

「おし、それでいこう！今すぐしよう！インフィー、セットアップ！」

その瞬間、

ぴかー☆

と光って、

じゃき～ん

俺はＶＦ－２５Ｓになってました！

「うお、まじかっけえええええ！！」

と叫びつつ姿勢を安定させる。

「ふう、あぶなかった。さてどこに降りようかな？」

現在の時刻は、日本の標準時で午後２０時半。
一応認識阻害魔法は使っているからどこに降りてもばれないと思う。
なので、海鳴臨海公園に降りることにした。

「おいしょっと」

バトロイドモードに変形して地面に降りて、バリアジャケットを解除する。

「着いた―。ありがとな、インフィ―」

≪いえいえ、とんでもないです≫

そういえば、もう一つのデバイスを使ってみるか。

「起きろ、アイザック！」

すると首からかけていたドッグ・タグがじゃべった。

〈貴様がぁ～、我が主かぁ～？〉（若本ボイスで）

・・・・・・・

〈なぁにをぼさっとしておる！返事をせんかぁ！〉

「あ、ああ。俺はウィリアムだ。よろしくな」

〈承知した、我が主よ〉

・・・・・・・・・・

「よし！お前の愛称は『若本』だ！異論は認めん！」

〈ぬわんだとぉ！〉

だめだったかな？

〈すぅばらしい愛称だぁ。感謝する〉

「（よかった、こいつ馬鹿だ）気にすんな。
さてと、では行くぞ！若本、セットアップ！」

〈ぶるるるるるるわぁぁぁぁぁぁ！！〉

そして

ぴかー☆

と光って

じゃーん

ナノスーツを装備しました。

「いいね、いいねぇ、最高だねぇ！では試しに、」

頭の中でスピードモードを考えると、

〈マァキシマムスピード〉

という声が響き、体の中で風が流れているような感覚になった。

「じゃあ、走るとするか！」

と言いながら、誰もいない深夜の道路でクラウチングスタートの構えをする。

「レディー、ゴー！」

そして、足を踏み出して走ろうとした次の瞬間、

ガンッ！！

俺は道路の突き当たりの塀に正面衝突をしていた。
普通なら頭がパンケーキよろしくぺちゃんこになっているところだが、
若本が自動的に危険を察知し、アーマーモードに切り替わっていた。
だが、それだけで痛みが消えるわけもなく、

「・・・・・・・・」

俺は無言で頭を押さえながらのたうちまわっていた。

～5分後～

「しかし、なんであんなことになったんだろう?」

公園まで戻ってそこにあるベンチに座り、さっきのことを考えてみる。
ゲームの中ではあそこまで速くはなかったはずなんだが…

そんなことを考えていたら、

ブーブーブー

と、いつの間にかズボンのぽっけに入っていた携帯が鳴っていた。

パカッとあけて画面を見ると、

着信：あてね？

と表示されていた。

この電話を切った後で、登録名を「マ○コデ○ックス」に変えてやる…

そう思いながら電話に出る。

「この電話番号は、只今貴様のようなイエローモンキーに対しては一切使用されておりませ～ん！クソおかけになった電話番号を、もう一度そのミニマム脳味噌と節穴ＥＹＥでクソお確かめの上、クソ改めて……ってアテネ君ではないか」

「なによ～、人がせっかく親切に電話してあげたのに～」

「いやお前人じゃないだろ」

「神は言っている、こまけぇこたぁいいんだよ！！、と」

「こんな神様でほんと大丈夫かな…
ま、いいや。で、何の用だい？」

「大丈夫だ、問題ない。
用件はね～、君の能力について！」

「ん？能力について？」

「そ、まずアイザックのほうからね。
ナノスーツの能力をめっちゃくちゃあげといたから！
スピードモードは光速移動が可能、
アーマーモードはあらゆる魔法、物理攻撃を無効化、
ストレングスモードは、まあ、超力持ちってことで！
クロークモードは、攻撃してもクロークは解除されない
ようになってるからね～」

「ビューティフォー…」

そういいながら俺はあることを考えていた。

「なあ、デバイスを二つ同時に起動することは出来るのか？」

「出来ることにしましょう！」

「よっしゃあ！」

「これならＶＦ－２５Ｓの恰好でナノスーツの能力が使えるＺＥ！」

またチートしましたが何か？

と、その時

「あの、なにしてるの？」

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

ギギギッと音がしそうな感じに後ろを振り返ると、

ツインテールのかわいらしい女の子が突っ立っていました。

まて、俺はここについてから結界とか張ったっけ？

いや、張ってない！！

ｏｒｚ

恐る恐るその子に

「あの、どこから見てた？」

と聞くと、その子は笑顔で、

「お電話しているところから見てたの♪」

と元気よく返事をしてくれた。

オワタ＼（＾ｏ＾）／

～ウィリアムの脳内会議～

ウィルＡ「これはまずいぞ、同志諸君！」

ウィルＢ「淫獣（ユーノ）が来る前に魔法について知られるわけにはいかん！」

ウィルＣ「ではどうする！？」

ＡＢＣ「う～ん…」

ウィルＡ「しかたあるまい、こうしよう」

～脳内会議終了～

〈マァキシマムスピード〉

トンッ

「あ、・・・ガクッ」

一瞬でその子に近づき手刀を首に入れて気絶させる。

そしてベンチに座らせて、その子のおでこに手をのせてつぶやく。

「すまない、今は忘れてくれ。『忘却』」

ゼ〇の使い魔の虚無魔法の1つである忘却を使用して、
俺に会ったこと、魔法のことを記憶から消した。

「さて、この子どうしようかな…」

と、考えていると、道路の向こうからお巡りさんがやってくる気配

が。

ちょうどいいやと思いつつ、道路から見える位置にあるベンチに女の子を置いて、レッツとんずら。

明日また公園に来て一緒に遊んであげよう
そう思いながら今晩の宿を探すのであった…

この姿でどうやって宿捜すんだ、俺…

第2話：地球よ、私は帰ってきた！（後書き）

またまたチート能力が追加されましたｗ
作者はチートな能力で敵をこてんぱんにするのが大好きなので勘弁して下さいな

よかったら次回も読んでください、では。

第3話：女の子のお話

Ｓｉｄｅ　なのは

こんにちわ！私、高町なのはっていいます！

聖祥大付属小学校の３年生です！

昨日不思議なことがありました。

夜、家で遊んでいたはずなのに、気が付いたら公園のベンチで寝ていたらしいの。

私はそんなことぜんぜん覚えていないのに、お父さんやお母さんにとても怒られちゃった…

学校の帰り道にそんなことを考えながら歩いていたら、

信号を無視してトラックが突っ込んできたの！

「あ……」

逃げなきゃ、でも怖くて足が動かない…

誰か…助けて！

と、思った次の瞬間、

「くっ、間に合え！」

という声が聞こえて、

気が付いたら、トラックはもう走り去っていて、

私は男の子にお姫様だっこされていたの／／／

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ウィリアム

危なかった…

暇だったから散歩していて良かったぜ

昨日はホテルに泊まり、午前中は市内散策をしていた。
すこしでもこの町の情報を知っておかないといかんからな。
昼飯を食って本屋で本を買って、公園で読もうとしていたら、
昨日のツインテールの女の子がトラックに轢かれそうになっていた！

「くっ、間に合え！」

俺は本を投げ捨てて、強化された身体能力の全てを使って
女の子がミンチにならないようにした。

「ふう、大丈夫か？見た感じ怪我はなさそうだが」

すると女の子は真っ赤な顔をして

「ふぇ！？だ、大丈夫なの／／／」

「そっか、よかった（ニコッ）」

「／／／／／」

さらに顔を赤くした。

「？どしたの？顔真っ赤だけど？」

「にゃ、なんでもないよ／／／
とりあえず下ろして欲しいの／／／」

あ、お姫様だっこのままだったか…

「ほいよっと。僕はウィリアムっていうんだ。君の名前は？」

「私は高町なのはっていいます！なのはって呼んでね♪」

「ＯＫ、なのは。僕のことはウィルって呼んでくれ」

「うん！よろしくね、ウィル君！
さっきはほんとにありがとう！おかげで助かったの！」

「気にするなって。んじゃ、さよ～な「ちょっと待って！」…なに？」

「お礼がしたいから家まで来てほしいの！こっちだよ！」

「別にお礼なんか、ってちょっとまて、引きずるな！」

抵抗もむなしく、俺はなのはの実家に連行されることになりました…

「ここか…」

今俺は、なのはの両親が経営している喫茶店、翠屋の前にいる。

「ただいま～！」

「あら、おかえり、なのは。後ろの子は新しいお友達？」

店の中に入るとカウンターから若い女性が出てきた。

なのはのお姉さんかな？きちんと挨拶しとくか。

「どうも、僕はウィリアム・T・ロンバートといいます。

失礼ですが高町さんのお姉さんですか？」

「あらま～そんなに若く見える？私は高町　桃子、なのはのお母さんよ～」

まじかよ！？アニメでも若く見えたけど、実際に会ってみるとほんとに若いな。一体何歳なんだろう？

「お母さん、あのね、私ウィル君にお礼がしたいの！」

「ん～どうして？」

「ウィル君はね、私がトラックにひかれそうになったのを助けてくれたの！」

「「なんだって！？」」

そう言いながら男の人が二人、店の奥からすっ飛んできた。

「大丈夫か、なのは！？けがはないか！？」

そう言いながら若い男がなのはの体をチェックする。

「だ、大丈夫だよ、お兄ちゃん！」

「そ、そうか、ならいいんだ、よかった。
で、君がなのはを助けてくれたんだってね。ありがとう。
僕は高町　恭也、なのはの兄だ。よろしく」

「ウィリアムです。こちらこそよろしくお願いします、恭也さん」

「うむ、礼儀正しいいい子だな」

こういうのはもう一人の男性。

「私は高町　士郎、なのはの父であり、この店の店主でもある。
父親として礼を言わせてもらうよ、ありがとう」

「いえいえ、とんでもないです。自分にできることをしたまでですから」

やはり、この父親もかなり若いな。

「そうか。お礼何だが何がいいかな？何か欲しいものはあるかな？」

と言ってきたので、少し考える。

とりあえずおなか減ったから、

「コーヒーとショートケーキが欲しいです」

と、素直に言った。

いや、まじでうまいわ。
これはケーキの感想である。
それも毎日食いたいぐらいうまい！！

「大変おいしいケーキですね」

「あら、ありがとう♪」

桃子さんはうれしそうだ。

「さてと、ではそろそろおいとまさせていただきます」

「え～ウィル君もう帰っちゃうの～」

なのはは寂しそうだ。

「ちょっと長居しすぎたからね、もう帰るよ」

「ちょっと待ってくれないか、ウィリアム君」

そういうのは、士朗さんである。

「今回の件で、君のご両親にもお礼が言いたいから住所を教えてくれないか？」

・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・どうしよう

～第2回ウィリアム脳内会議～

A「どうすんだよ！？親どころか戸籍すらないぞ、俺！？」

B「ここは仕方なく嘘をつくしかない！」

C「具体的には？」

B「こういうのはどうだろう？」

ごにょごにょ

AC「それでいこう！」

～脳内会議終了～

この間わずか0．5秒。

「…両親はいません」

うつむきながら説明する。

自分の両親はアメリカ人だが、自分が生まれてからすぐに死んだこと。

外国の孤児院で育てられたが、５年前に日本に親戚がいることがわかり、

自分を引き取るといってきたこと。しばらくはそこで暮らしていて日本語や日本の文化などもそこで学んだが、その親戚もこの前死んだこと。

また孤児院に行くのはいやだから、前にいた町から逃げてきたこと。

幸いお金はあるので今はホテルで暮らしていること。

「そうだったか、いやつらいことを聞いてしまってすまなかった」

士朗さんは頭を下げた。

「気にしないでください。もう過去の話ですから。

ということで僕はホテルのほうに…」

「ウィリアム君、私たちの家で暮らさないか？」

・・・・・・

「なんですって？」

「いや、なのはを助けてくれたお礼ということで、どうだろう？」

「いえいえ、それはちょっと…」

「？何か問題でもあるのかい？」

「…俺は戸籍のない、いわゆる幽霊のようなもんなんです。
だから皆さんには迷惑をかけてしまうかもしれません」

「ウィル君は幽霊なんかじゃないよ！」

するとなのはが大声で叫んだ。

「幽霊だったら私を助けることは出来なかったはずだよ。
ウィル君はちゃんとここにいる。幽霊なんかじゃないの！」

「なのはの言う通りだよ、ウィリアム君。君は幽霊じゃない。
立派な人間だ。だからこの家で一緒に暮らさないか？」

…やっぱりこの人たちはいい人だな…

「わかりました。ではお世話になります、桃子さん、士朗さん」

ということで俺は高町家に居候することになった。

なんか2つ忘れてんことがあるような気がすんだが…気のせいだよな！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第3話：女の子のお話（後書き）

ということでこれからはなのはの家で生活します。
原作を見直しながら変なところがないかチェックするのが大変です…

次回は淫獣を登場させるか、はやてと遭遇するかどっちかにします。ではノシ

番外編1：エディの日常（前書き）

今回はエディのことを書いてみます。

番外編1：エディの日常

みなさん、こんにちわ。

私はエディ、デス・スターのセントラルコンピュータ及び次元航行艦隊をコントロールしている人工知能です。

今日もロンバート艦長の命令に従い、せっせと働いています。艦長とは1日に1回連絡を取り合っていて、報告をしたりや命令をうけたりしています。

今回私が報告したのは、艦長から依頼があった時空管理局についてです。

時空管理局本局の近くに無人戦闘機「ゴーストⅤ－９」を配備し、Ⅴ－９経由で管理局のデータベースへのハッキングをしました。

そこで明らかになった事は、管理局の悪事の数々。

思わず目を覆いたくなるような（私には目がありませんけど）事実も大量にありました。

この事実を伝えると、突然いくつかの大型格納庫に現在建造中の戦艦の

原材料や、超軽量金属「デュラスチール」が山のように振ってきました。

そして、艦長から命令が。

「この材料で追加の戦艦を作れ。どれぐらい作るかはお前に一任する。

とにかく大幅な戦力強化プログラムを実行しろ」

思わず反対すると、

「エディ、昔の偉い人はこう言ってたんだぞ、
『正しい者には神が必ず味方する。したがって戦いに勝つものは正しい』
ってな。管理局の蛆虫どもには、いつか必ず消えてもらおう。
連中に見せるのは我々の軍事力ではなく、ターボレーザーの嵐である！
フハハハハハハ……」

なんか艦長がぶっ壊れてますけど、恐怖を与えるという点は賛成できるので、戦艦作っちゃいましょう！

んで、

材料を計算した結果、
インペリアルＩＩ級スター・デストロイヤー：＋１０隻
テクター級　〃　：＋１０隻

エクリプス級スーパー・スター・デストロイヤー：＋2隻
を、作れるだけの材料がありました！イエイッ！

しかし、これだけの量の戦艦をデス・スターだけでは建造不可能なので、
超巨大造船所を建造することにしました。従って、追加発注の戦艦の完成予定が1年後になってしまいましたが、艦長は気にしていない様子でした。

ついでに、デス・スターの防御システムが遂に完成しました！
一番苦労したのはやはりシールドですね。映画では惑星エンドアにシールド発生装置を設置して、デス・スターを丸ごとシールドでガードしていましたが、この辺りには惑星がありません。仕方ないので、デス・スターの居住区画を大幅に削って、そこにシールド発生装置を埋め込むことにしました。よく考えたら、本艦隊の乗組員は全員ターミネーターなので休む必要がないのです。つまり、居住区域なんてほとんどいらないのです。

これからも艦長のために頑張って働きましょう！
それではさようなら～

～その頃の地球～

「あ、そうだ、本だ」

忘れていたことの１つ目を思い出したウィリアムがいた…

「もう１つはなんだったかな～、ま、いつか思い出すだろう、うん」

番外編1：エディの日常（後書き）

今回は短めにしました。

超軽量金属「デュラスチール」とは、スター・ウォーズに出てくる金属です。詳細は…知りませんｗ

なのはに出てくる管理局の次元航行艦の大きさがいまいちよくわからないんですよねー。

３００ｍぐらいなんでしょうかね？

次回はなのはが淫獣（ユーノ）と出会う……でしょう、多分。

第４話：それはイタチではなくフェレットです（前書き）

じゃあ、無印はじめますか。

第４話：それはイタチではなくフェレットです

なのはの家に居候することになって１週間。
色々なことがありました。

なのはが通っている聖祥大付属小学校に入学させてもらったり、
金髪のツンデレと紫髪の幼女と友達になったり、
朝起きたらなのはが横で寝ていて、それを見た兄、恭也さんが

「なのはに手を出したな？許さん、表に出ろ！」

と言い、道場で死にかけたと思ったら美由希がきて、

「うちの馬鹿兄が迷惑掛けてごめんね～」

と言いながら恭也さんをフルボッコにしてたり、

スクライア一族の輸送船が何者かに襲撃されて撃沈、
それに積まれていたロストロギア、ジュエルシードが２１個もこの
町に落ちてきたり、
エディから報告がありその輸送船を襲ったのも何と管理局という事
実が発覚したり、

と、まあこんな感じで色々な出来事がありました、はい。

今日も無事に学校が終わって、今はなのは達と一緒に帰っているところである。

「にゃ～、今日も疲れたの～」

「ほんと疲れたよな～、はぁ～」

なのはと俺はぐったりしている。

「ちょっとウィル！あんた寝てただけじゃないの！どこが疲れてんのよ！」

そういうのは金髪のツンデレこと、アリサ・バニングスである。

「だってあの授業簡単すぎんだもん。寝ていてもいいじゃん」

「なんかむかつく！テストで全教科満点だからって調子に乗るんじゃないわよ！いつか絶対追い抜くんだからね！」

入学時の試験で全教科を満点を取った話をしたら、アリサは俺に対抗意識が芽生えたようだ。

「まあまあ、アリサちゃん落ち着いて」

アリサをなだめているのは、紫髪の幼女こと月村すずかである。

「アリサちゃんもウィル君も仲良くしないとだめだよ？」

「べ、別に喧嘩してるわけじゃないんだからねっ！」

と、その時

（…助けて…）

これがユーノからの念話ってやつか…
なのはも気が付いているようだな…

「なのは？」

「なのはちゃん？どうしたの」

「どうした、なのは？」

他の３人は急に歩くのをやめたなのはに声をかける。
俺にもあの念話は聞こえているけど、なのはに
魔法少女になってもらうためにも、今回は無視することにする。

「なんか聞こえなかった？こう、声みたいな…」

「「「いや、聞こえないぞ（わよ）（よ）？」」」

（助けて…！）

「！こっち！」

「なのは？どこいくの～？」

なのはが突然走りだしたのでみんなで追いかけると、

「…イタチ？」

「多分フェレットじゃないかな？」

「どっちでもいいじゃん、親戚みたいなもんだろ？
にしても、かなり弱っているな…」

「ど、どうしよう～」

「とりあえず病院だな、行くぞ！」

そうして動物病院で預かってもらうことにした。
幸い怪我はなかったがかなり衰弱しているということだった。

～その日の夜～

（聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？）

「来たな…」

≪そのようです、マスター≫

アニメと同じようにユーノからの念話が来た。

〈どぉするのだぁ、我が主よ〉

「しばらく様子を見て危なくなったら介入する。その時は変身魔法で大人になればなのはにもばれないだろ、多分」

〈承知した〉

「では行くぞ！インフィー、若本！」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ≫

〈ぶるるるるるわぁぁぁぁぁぁ〉

と言いつつ、俺たちはなのはの後を追った。

Ｓｉｄｅ　なのは

「なになに、なんなの～！？」

あ…ありのまま今起こった事を話すの！
『私は動物病院の前に着いたと思ったら、いつのまにかしゃべるフェレットを
抱えながら化物？から逃げているの』
な…何を言ってるのかわからないと思うけど
私も何をされたのかわからなかったの…頭がどうにかなりそうなの…
催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなものじゃ断じてないの…
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったの…

「君には、資質がある。だから少しだけ僕に力を貸して！」

「資質？」

話を聞くと、このフェレットは私たちとは違う世界からある探し物のために来たんだって。
でも、自分だけじゃ出来ないから魔法の資質？がある私に手伝って欲しいんだって。

なんか魔法って聞いた瞬間、うさんくさいって思ったの。
魔法なんてあるわけないじゃん！

って思ってたらまた化物が襲ってきた～！

「どーすればいいの～ねえ教えてよ～」

と言いながら私はフェレットをつかんでがくがく揺らす。

「ちょ、ちょっとおおお落ち着いて、揺らさないで～」

ど、どうしよう～誰か助けて～（泣）

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は近くでなのはとユーノを観察している。

「やっぱりなのはは混乱してるな、ま、そりゃそうかｗ
しかし、原作より混乱してるな、これはまずいかもしれん」

仕方ない、介入するか。

「インフィー、若本、セットアップ！」

〈マァキシマムスピード〉

そして一気に加速してなのはの前に行く。

「おい、そこのイタチ！とっととその子に魔法を教えろ！

俺はその間敵をおさえる。質問は後だ、急げ！」

「ぼ、僕はフェレットだ！わ、わかった」

そうこうしているうちに化物が真上から襲ってきたので、

〈マァキシマムストレングス〉

と、モードを変更して思いっきりジャンプし、

「おらー！！」

空中で化物をぶん殴った。

すると敵が

「ギャアアアア」

と言いながら、

パンッ！

はじけた。

「あれ？」

フェレットも、

「あれ？」

変身したなのはも、

「ふえ？」

あ、なんか青い宝石らしきものが浮いている。
これがジュエルシードってやつか。
俺はそれを封印してフェレットに投げる。
「ほらよ、これがお前の探し物だろ？」
「う、うんありがとう。あ、あのなんで助けてくれたの？」
「ジュエルシードが危険だから、っていう理由じゃだめかい？」
「そ、そうかい」
するとなのはが、
「あ、あの、助けてくれてありがとうございます！
私、高町なのはっていいます」
「自己紹介したいのはやまやまなんだが、そろそろ逃げたほうがいいんじゃないかな？」
「ふぇ？」
遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。しかもいっぱい。
「にゃ、にゃあああああ！」

なのははこんらんした！

「とりあえず場所を変えよう、行くぞ」

そして俺はなのはとフェレットを掴んで公園まで移動した。

「ふう、危なかった」

ベンチに座って一休み。するとなのはが、

「あの、あなたの名前は何ですか？」

と聞いてきた。

本名で答えるわけにはいかないので、なんて答えるか…

よし！

「俺は…ベイダーだ」

「それで、ベイダーさんはなんで私を助けてくれたんですか？」

「かわいい女の子が怪我するのを見たくなかったからだよ（ニコッ）」

というと、なのはは顔を真っ赤にして

「か、かわいい…私がかわいい…／／／」

などと言っている。

「（おい、フェレット）」

「（は、はい！）」

ちょっと空気になっていたユーノに念話で話しかける。

「（俺はジュエルシードの件では中立の立場をとらせてもらう。
つまり、君たちと敵対する可能性もあるということだ。それを忘れるな。
俺が望むのはジュエルシード全てを封印もしくは破壊することだ。
あんな危険なもの、ないほうがいいからな。
それは理解できるだろ、ユーノ・スクライア？」

「（な、なんでぼくの名前を？）」

「（管理局のデータベースにハッキングしたら、スクライア一族から
管理局へジュエルシードの捜索願があってな、そこに
お前の名前があったんだよ）」

「（なるほど、ってハッキング！？）」

「（こまけぇこたぁいいんだよ！！）じゃあ、そろそろ俺は帰るぞ」

すると

「あ、ベイダーさん！また会えますか？」

なのはが聞いてきた。

「…多分な、では」

〈クローク、起動〉

俺は透明になって公園の外に出てＢＡ（バリアジャケット）を解除する。

そして魔力や気に完全にリミッターをかけて一般人になりすます。

そしてまた公園に入っていき、

「お～い、なのは～」

と声をかけた。

「え？ウィル君？」

なのははとても驚いている。

「なのはが突然家を飛び出したから探してたんだよ？

早く帰ろう？みんな心配してるよ？」

と言いながらなのはを引きずって家まで帰るのであった…

～どっか白い世界～

「よし、で～きた♪」

その人はうれしそうに声をあげた。

「さてと、そろそろ彼に連絡しましょう♪」

その人の目の前にはでっかいカプセルがあった。
その中には、きれいな女の人が浮いていた。

第４話：それはイタチではなくフェレットです（後書き）

やっぱり文章書くの下手ですね、すいません。
才能がないのでそこは許して下さい。

次回はフェイトを釣ります、ジュエルシードで。

では。

第5話：準備を整え、れっつごー

さて、フェイトを釣るにあたって必要なものは、
まずジュエルシード。これがなきゃ話にならんからな。
こいつを手に入れる際に注意しなければならないのは、
発動前に手に入れることである。そうしないとなのはやユーノにばれちまうからな。それはなんとしても避けなければ。

幸い、どう手に入れるかは考えてある。
原作でジュエルシードをもっていたサッカーチームのガキからいただくことにする。もちろんタダで、とはいわない。
ここはガキらしく物々交換と行こうじゃないカ！

んで。

翌屋ＪＦＣと桜台ＪＦＣの試合までに、なのはとユーノは４つのジュエルシードの回収・封印に成功していた。俺があげたやつを足すと
全部で５つだな。さすがに、毎回毎回なのはを手伝っていたらなのはが強くならないので、ジュエルシードはしかとしておいた。

だが今日はそういうわけにもいかん。フェイト釣りをやりためにはあのガキがもっているジュエルシードを手に入れなければ。

試合をぼけーっと眺めていたら、翠屋のチームがひとり怪我をした。大変そうだなーなんて考えていると、チームのコーチ兼オーナーである
士朗さんと目が合ってしまった。

やばい、と思った時には既に遅く、
俺は怪我をした子の代わりに試合をすることになってしまった。

サッカーの試合のシーンなんか書いてもつまんないから書かなくていいよねｂｙ作者

結果的に翠屋ＪＦＣが３－０で勝利した。
ジュエルシードをもっているガキとも試合を通じて仲良くなれた。
んで、翠屋で昼飯を食って、解散した後にそのガキに話しかける。

「ねえ、ちょっといいかな？」

「ん？ああ、さっきの助っ人君！どうしたの？」

「いや、少し話がしたくてね、っとそれはなんだい？」

と、バックのポケットからはみ出しているジュエルシードを指さす。

「ああ、これかい、拾ったんだ！きれいだろ？」

「いいなぁ、あ、そうだ！」

と、俺はポケットからあるものを取り出す。それは、

「ねぇ、これと交換しない？」

血のように赤い、１８面体のスティジアム・クリスタルだった。

「すごい…」

そのガキはうっとりしている。

「どうかな、交換してくれない？」

駄目もとで頼んでみる。もし駄目だったら、
〈マァキシマムスピード〉で気絶させて奪うしかないな…

「うん！いいよ！」

「え？まじで？」

「なんかこっちのほうが大きいし、きれいだな～って思ったから！」

ガキって単純でよろしい！

「ほんと？ありがとう！じゃあ交換だね！」

「うん、はいこれ」

てててってってー♪

ういりあむは１０ばんのじゅえるしーどをてにいれた！

よし、あとはこれをきっちり封印して、小さな瓶に入れて、
瓶にチェーンをつけて鞄につければ完成！
この鞄を持って街中を歩きまわれば、あっちからやってくるだろう！

んで。んで。

俺はジュエルシード付の鞄をもって町を散策した、なのは達にばれないように。
本屋で立ち読みをした後、屋台で買ったたこ焼を公園で食べていたら。

「ねえ、君、ちょっといいかな？」

金髪の幼女と
ぱいおつたゆんたゆんな女の人がいた。

よし、釣れた！
とりあえず返事をしようか。

「なんのよう？たこ焼欲しいの？」

～その頃のどっか白い世界～

「あーはっはっは！！マジで面白い！おなかいたいｗｗｗ」

白い女の人は用事をすっかり忘れてＤＶＤを見ていた。内容は

「絶対に笑ってはいけない」シリーズ。

その部屋の隅っこで、例のカプセルは放置されていた。

第5話：準備を整え、れっつごー（後書き）

フェイトが無事に釣れました。
次はフェイトと少しお話をします。

どこかの悪魔と違って、普通のお話ですよ？

スティジアム・クリスタルとは、これまたスターウォーズに出てくるもので、
クローキング装置、つまり不可視装置に必要な希少で高価な鉱石です。

ではまた。

第6話：まずは食え。話はそれからだ。

「……」

「……」

「……」

どうも。
フェイトとアルフと一緒にたこ焼を食べているウィリアムです。
さっき話しかけてきたフェイトに俺はたこ焼を差し出し、

「まずは食え。話はそれからだ」

と言ったら、

「…うん。わかった」

と素直にうなずくフェイト。
しばらく無言でたこ焼を食べる音が続いた。
平和だねぇ～

「あ～うまかった！やっぱあそこのたこ焼屋はいいね
どうだった？おいしかったでしょ？」

「え？あ、うん。おいしかった…ごちそうさま」

「なかなかおいしかったねぇ～」

んで。

「それで？俺に何の用件かな？」

「それ…」

フェイトが指さすのは、俺の鞄についているジュエルシード。

「それ、くれないかな？」

…フェイトさん。ストレートすぎますぜ…

「いや、名前も知らない子にあげることなんか出来ないよ！」

「あ、そっか。私はフェイト・テスタロッサ。こっちは」

「あたいはアルフだよ！」

「そうか、俺はウィリアム・T・ロンバートだ。
よろしくな、フェイト、アルフ（ニコッ）」

フェイトとアルフに向かって満面の笑みを浮かべる。
その途端、二人は顔が真っ赤っかになった。なんでだよ…

「（！なんでだろう、すごくドキッとした／／／）」

「（あ、あの笑顔は反則だろう／／／）」

「で、なんでこれ欲しいの？理由を教えてよ」

「それは、その…私のお母さんが欲しがっているの、だから」

「そうか」

フェイトの母ちゃん、プレシア・テスタロッサか。
ジュエルシードいっぱい集めて次元震起こして、
「ちょっとアルハザード行ってくる」をしようとしてるんだっけ。
その目的が、確かあいつの実の娘のアリシアを蘇生させるためだっけ？
う～ん

「これを君にあげると、君は俺に何をくれるの？」

もうちょっと考えたいから時間かせぎするか。

「え?そ、それは、（アルフどうしよう?）」

「（え、それは考えてなかったよ。どうしようか…）」

向こうも話し合っているな。

さて、どうするか。

まあ、だいたい計画は出来ている。

まずプレシアに会って、アリシアの死亡原因の魔導実験の事故が管理局によって仕組まれた事件だよ～って教える。

←

次に、プレシアの不治の病の治療とアリシアの蘇生を行う。

その代わりに、フェイトを実の娘だと認めさせる。これが重要だね。

←

んで。ジュエルシードを全部集めたら管理局にプレゼント。

その時に何か言われたら

「いつまでたっても管理局の方々が来ないので、しかたがなく

我々が善意でジュエルシードの回収・封印を行いましたが何か問

題でも？」

と、言うつもりだ。その頃にはむこうも俺の実力を把握しているはずなので、

「俺が管理局に入ってやる」

っていえば問題ないだろう、多分。

それでも納得しなかったら、

すでに完成しているインペリアル？級でも呼んで脅すか。

「さて、で、なにくれるの？」

「えっと、それが、私たちこの町に引っ越してきたばかりで」

「あげられるものがないんだよ！」

という二人の回答。
そこで、

「う～ん、じゃあ、こうしよう！」

「条件は二つ。一つはこれをあげる代わりに君のお母さんと会わせること」
んで、もう一つは」

そう言って強力な結界を張る。それと同時にリミッター―を解除する。

「俺と戦え」

「「！？」」

おー二人が驚いているｗ
そりゃそうだ、一般人だと思ったら結界張るしいきなり魔力が上昇するし。

「さあ、どうする？」

Ｓｉｄｅ　アルフ

なんてこったい。
ただのガキかと思ったらとんでもない奴じゃないか！
結界の強度、ガキからあふれる魔力の量。どれをとっても強すぎる！
これじゃあ私たちが戦っても勝てっこないじゃないか！

「アルフ…」

でも、フェイトは覚悟を決めたような目で

「やろう？」

「でも、フェイト！」

「うん。勝てないのは分かっている。でも、私はお母さんのために戦う！」

そうかい、なら私も覚悟を決めてやるとするか！

「わかったよ、フェイト。どこまでいけるかわからないけど頑張ろう！」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして、今、俺達は公園の真ん中にいる。

「さて、小便は済ませたか？神様にお祈りは？
部屋の隅でガタガタ震えて命乞いをする心の準備はＯＫ？」

フェイトは

「ひっ！だだだ大丈夫だよ？」

アルフは

「か、かかってこいや！」

と、回答する。おーびびってるｗ

「おーし、戦闘不能になったら終わりってことでいいかな？」

「「うん！」」

「では、れっつらごー！」

～その頃の白い世界～

「いーい湯だな、あははん♪」

アテネは温泉に入っていた。

「極楽～♪」

カプセルは埃をかぶって放置されていた…

「……（グスッ）」

第6話：まずは食え。話はそれからだ。（後書き）

そんなにお話しできなかった…

次はフェイト&アルフとの戦闘です。
あらかじめ言っておくと私は戦闘シーンを書くのが超苦手です！
なので次回にはあまり期待しないでください。

ちなみにカプセルの中身がかわいそうな状態はしばらく続きますｗ

では。

第7話：あっという間劇場フェイト編

「いくよ、バルディッシュ！アルフ！」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ≫

「おう！」

と言って、アルフは犬に、フェイトはバリアジャケットを着た。

「行くぞ！インフィ―、若本！」

≪了解、マスター！≫

〈ぶるるるるｒ（ｒｙ〉

んで俺も戦闘態勢に入る。

まずは、

「マイクロミサイル発射！」

アルフに向かってミサイルを乱射。

なぜアルフを最初に攻撃したかというと、

「俺は犬が嫌いだあああああああ！」

「うわあああああ！」

アルフは逃げ回っている。これでしばらくは手が離せないだろう。

「バルディッシュ、フォトンランサー、電撃！」

≪フォトンランサー、フルオートファイヤ≫

フェイトは電気玉っぽいのを連射してきた。

〈マァキシマムアーマー〉

俺はそれらをあえて避けずに全弾を食らった。

〈サイフォーム、セットアップ〉

そこにフェイトはデバイスを鎌に変えて突っ込んできた。

ガキンッ！

だが、その刃はウィリアムの左手に掴まれていた。

「えっ！？」

フェイトは一瞬動きを止める。

「甘い！」

俺はその瞬間にフェイトを鎌ごと引き寄せ、
アームドデバイス化したＭ１９１１Ａ１　ＭＥＵピストルの全弾を
フェイトの腹に撃ち込んだ。

「うっ…」

７発の．４５ＡＣＰ弾を腹に食らったフェイトはそのまま気絶した。

「フェイト！！このやろー！！」

するとアルフがこっちに突っ込んでくる。
あのミサイルの嵐をよく回避したな、と感心しつつ
俺はＭＥＵピストルを消して、ガウスライフルを出してアルフに向
けて撃つ。
．４５ＡＣＰ弾の弾速の約４倍、つまり秒速１２００ｍの早さで飛

んでくる弾丸を
避けることができるわけもなく、アルフもまた倒れた。

「う、う～ん、ここは…」

「お目覚めかい、フェイト？」

「！？」

戦闘から３０分もしないうちにフェイトは意識を取り戻した。
アルフは未だに絶賛気絶中。

「そっか、負けちゃったんだね、私…」

「残念ながら、な。
さてと、じゃあこれはやるよ」

そう言って俺はジュエルシードをフェイトに放る。

「え？い、いいの？」

「構わないよ。その代わり君の母親に会わせてくれ。話したいことがある」

「…うん、わかった」

アルフを叩き起こしてから俺たちはフェイトの母親、プレシアがいる「時の庭園」に転移した。

さて、プレシアをなんとかしないとな～

第7話：あっという間劇場フェイト編（後書き）

はい、戦闘はとても短くしました。
なんかうまくかけないので変だったらすいません。

次はプレシアと話して、アリシアを蘇生しようかな？

では

第8話：プレシアの思い、そして…

「ここが時の庭園かぁ、なんかラスボスの家みたいだな」

どうも、ウィリアムです。
フェイトの母親であるプレシアと話をするために遠路はるばるここまで
やってきました。

「…ここだよ」

フェイトが案内したのは入り口からかなり奥のエリアにある扉。

「ありがとう、フェイト。悪いけどプレシアさんと二人で話したいから
部屋の外で待っていてもらえないかな？」

「…うん。あの、気をつけてね？」

「あいよ～」

さあて、逝きますか。

「な!?あなたは何者!?どうやってここに来たの!?」

プレシアがめっちゃ驚いている。
ここは丁寧に始めよう。

「お初にお目にかかります、プレシア・テスタロッサさん。
私はウィリアム・T・ロンバートと申します。以後お見知り置きを」

と言ってお辞儀する。

「礼儀はいいはね。それで何の用かしら、ミスターロンバート?」

「実はちょっとした情報を提供しようと思いまして。例えば」

そういってモニターを展開してプレシアに見せる。

「こ、これは!?」

「そう、あなたが設計した駆動炉『ヒュードラ』の設計図です。見たところ
特に問題はありません。しかし、起動実験中に事故が発生、あなたの娘、
アリシアは死亡した。ここまでで何か間違いはありますか?」

「…いえ、ないわ」

「では続けます。これをご覧ください」

といって別のデータを出す。それを見てプレシアは不思議な顔をし

た。

「これはさっきと同じ『ヒュードラ』の設計図じゃないの？」

「いえ、これは現在、時空管理局でＬ級次元航行艦に搭載されている駆動炉の設計図です。あなたの事故の後に採用されました」

「……」

プレシアは合いた口がふさがらない。

「つまりこういうことです。

あなたが開発した『ヒュードラ』が欲しい。

でもあなた自身は必要ではない。どうしようか。う～ん、あ、そうだ！

あなたの娘を殺して今の研究を諦めさせて、ミッドから追放してＦ計画に参加させざるを得ないような状況を作り出せばいいんだ。

確か今度『ヒュードラ』の起動実験があったな。

そこで事故を起こそう！そうしよう！

ま、こんなもんですかね。何かご質問は？」

プレシアは怒りに震えながらこう聞いてきた。

「つまり…アリシアは事故ではなく殺されたってことね？」

「ええ、残念ながら」

「……人は」

「はい？」

「犯人は！？私の娘を殺した犯人は誰！？あなたは知っているの！？」

プレシアは涙を流しながら俺に聞いてきた。
そんな彼女に俺はもっと残酷な事実を告げる。

「ええ、あなたも知っているはずですよ」

「え？」

「考えてみてください。
あなたの研究内容を知っていて、

あなたの設計した特に問題のない駆動炉を暴走させることが可能な力を
持っていて、

あなたの家庭の状況をきちんと把握していて、

F計画へあなたを参加させることができる権力を持っている、

そんなことが出来るのは次元世界の中では1つの組織しかありません」

「ま、まさか？」

「そうです、全てを仕組んだのは

時空管理局。もっと言えば最高評議会の連中です」

「…ｏｒｚ」

プレシアは打ちのめされたような顔をしている。

「プレシアさん。私はあなたに以下の情報を提供することができます」

その情報とは

最高評議会への復讐方法

プレシアの病の治療方法

そして、

「ば、ばかなこと言わないで！」

プレシアは思わず叫んでいた。

「一つ目はともかく、二つ目と三つ目はどうやっても無理だったのよ！？
それなのにあなたはどんな方法でこれらを実現するつもり！？」

「一つ目はかなり先の話になるのでとりあえず置いときます。
二つ目は簡単です。こいつを飲めばどんな病気でも一発回復！
そんな『エリクサー』をあなたに提供します。
三つ目は…まあ、電話と魔法でちょちょっと。以上です」

「す、すごい…」

「その代わり二つ条件があります。
1つ、『ちょっとアルハザード行ってくる』のはやめてください。
2つ、これが最も重要ですが、今現在あなたが人形と呼んでいるフェイト・テスタロッサをあなたの娘であると、あなた自身が認めること」

「でも、フェイトはアリシアのクローン。いえ、でき損ないだわ。
そんなの認めるわけには…」

「じゃあ、なんでフェイトはあなたのためにジュエルシードを集めているんだ？
他でもない、あなたのためだろう？そうでなきゃ集めたりしないだろう」

プレシアはうつむき、そして小さな声でつぶやいた。

「……私はあの子にひどいことをたくさんしてきた。
今更母親として接するなんて……許されることじゃないわ」

「それを判断するのはフェイトだ。フェイトを信用しろよ。
それに、アリシアも言ってたんだろ？妹が欲しいって。
考えてみろよ？
フェイトは母親が優しく接してくれてうれしい、
アリシアは起きたら妹がいてうれしい、
あなたはアリシアが生き返って、おまけに娘が2人になってうれしい。
みんなハッピー、めでたしめでたし。どうよ？」

しばらく考えた後、プレシアは決断する。

「…そうね。あなたの言う通りだわ。その条件、飲みましょう」

「よっしゃ、交渉成立！」

んで。んで。

フェイトとアルフを呼んで、全ての真実を話した。
彼女たちは驚いていたが、プレシアが母親として接してくれたのでうれしそうだった、ちゃんちゃん。

「はいこれ飲んでー」

「…（グビッ）」

無言でプレシアはエリクサーを飲み干した。すると

「あら、なんか体が軽いわ…」

「はい、治療完了。これで寿命を迎えるまで健康体だよ」

「…わーお」

「…すごい」

「ほんとかよ!?」

「ほんとだよ。さて、次はアリシアか。
まずこの入れ物から出してくれないかな?」

「わかったわ」

プレシアがモニターを操作すると、アリシアの入っていたポットが開き、液体とともにアリシアが出てきた。
フェイトがアリシアを受け止め、毛布で包む。

「では始めます」

と言って俺が取りだしたのは携帯電話。

「「「は？」」」

他の3人はほぼ同時にそう言った。
それをしかとして俺はアテネに電話する。

「は～い、もしもし？アテネで～す♪」

「俺だ、ウィリアムだ。ちょっと聞いておきたいんだが？」

「何かな？」

「人間を一人生き返らせえても平気かな？」

「ん～1分待ってて。闇魔ちゃんと話してくる～」

「ほいほい」

そして俺は他の3人に

「1分待ってくれ、今許可待ちだから」

「「「ちょっと待った！」」」

「ん？」

「ウィリアム…誰に電話してるの？」

「ていうか誰の許可が必要なんだよ！」

フェイトとアルフが同時に質問してきた。

「誰にって神にだけど？
あと闇魔の許可が必要らしい」

「「「神！？闇魔！？」」」

3人はこんらんした！

「もしも～し！閻魔ちゃんがいいってさ！」

「お～まじで？助かるわ～。感謝の極みですよ」

「神様に不可能はないのだ～！ってことでまたね～」

「おう、じゃな～（ピッ）

許可降りたから蘇生するよ」

茫然としている人々を放置して蘇生を開始する。

時間操作魔法で、アリシアの時間を彼女が死んだ瞬間まで戻す。

あとは、ドラクエの魔法「ザオリク」を使う。すると、

「……う～ん、ここは？」

「！アリシアッ！！」

プレシアが泣きながらアリシアに抱きついた。

「お、お母さん！？く、苦しいよ～」

「ああ、アリシア、よかった……」

しばらく抱き合っていたが、アリシアはフェイトに気がつく。

「あなたは誰？」

「わ、私は、その…」

フェイトは戸惑う。自分にそっくりで自分より年下の人が姉だから仕方ないか。
それを見たプレシアがアリシアに

「あなたの妹のフェイトよ、アリシア」

と優しく告げる。

「いもうと？お母さん、約束守ってくれたんだ！ありがとう！」

そしてフェイトのほうを向き、

「あなたが私の妹なのね？よろしく、フェイト！」

「お、お姉ちゃん？」

「姉さんって呼んで！」

「姉さん！」

よし、これでテスタロッサ家はまた一つになった。
めでたしめでたし。

「さて、みんないいかな？
ジュエルシードの件なんだが」

「ああ、そんなものもあったわね。
もうそんなものいらないわね？」

「いや、プレシアとフェイトにはジュエルシードを集めてもらいたい」

「「え？」」

「おい、ウィリアム、なんでだよ！もう必要ないだろ？」

そういうのはアルフだ。

「集めないと問題が発生する。
まず、最高評議会の連中。こいつらはアリシアを殺そうとした張本人だ。
だけど俺がアリシアを蘇生したから、また襲ってくるかもしれない。
プレシア、今のあなたは裏社会の人間になっている。裏の人間が死んだところで誰も悲しまないって連中は考えるだろう。
だから、テスタロッサ家には表に出てもらう」

「「「「表？」」」」

「おう、シナリオはこんな感じ。

ある日プレシアはジュエルシードが多数、第97管理外世界に落ちたことを知る。
ジュエルシードの危険性を知っているあなたは娘のフェイトに回収・封印するように命じる。全部回収したのはいいけどそのうちの一つをアリシアの生体ポットに落としてしまう。
するとあら不思議。アリシアの「もう一度家族と暮らしたい」という純粋な願いが叶い、アリシアは無事に生き返りましたとさ。

余ったジュエルシードは管理局に提出すればいい。その時になんか言われたら

「お前ら来んの遅すぎ。代わりに集めといたから感謝しろ。報酬は私の家族の身元保証でいいからよろしく」

って言えば問題ない。それでも騒いでいたら俺がお話するどうよ？」

プレシア「いいわね」

フェイト「いいんじゃないかな？」

アルフ「それでいこう！」

アリシア「よくわかんないけど、いいんじゃない？」

「よし、じゃ、これ」

そういって俺は海鳴市の地図を渡す。

「これは、地図？」

よく見るとその地図には１５個の赤いマークが表示されている。

「それはジュエルシードの現在位置を表示している。
名付けて『ジュエルマップ』！
それを使って集めるんだ」

「どうやってこんなものを作ったんだ？」

チートです
と言えるわけもなく

「企業秘密です」

というしかなかった。

「じゃあ、そろそろ帰ろうかな」

「あら、もうそんな時間？」

「俺、今居候中なので遅れるわけにはいかんのですよ」

「誰のところに居候してるの？」

「あれ、話してなかったっけ？
ジュエルシードを発掘したスクライア一族の人間と
協力してジュエルシードを集めている女の子の家だよ。
ちなみにそいつらはすでに５つのジュエルシードをもっている」

その瞬間、シーンとした。

「ちょっとまて、他にも集めてる奴らがいるのか！？
しかもあんたはその子たちと一緒に住んでいるのかい！？」

アルフが突っ込む。

「そだね～」

「そいつらの持っている分はどうするんだ？」

「それに関しては、俺たちはジュエルシードが全部で
２１個あるということは知らなかったことにすればいい」

「なるほどね、残り１５個を集めて管理局に持って行って、
彼らがジュエルシードをもっているのを見て、

「ジュエルシードって全部で２１個もあったんだ～へぇ～」

って言えば問題ないのか」

「Ｅｘａｃｔｌｙ．（そのとおり）」

「ウィリアム…」

「なんだ、フェイ…ト…？」

…なんかデバイス構えているんですけど？

「女の子と一緒に住んでいるんだ…？」

「え、ああ、でもそれは成り行きで」

「…少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

とっさに俺は他の３人に助けを求めるが、

「「「自業自得ね（だね）（だよ）」」」

と拒否された。

「さあ、逝こうか、ウィリアム？（ニコッ）」

「フ、フェイト、目が笑ってないぞ！」

その日、時の庭園から長々と悲鳴が響いた……

「お、俺は、なにも、わる、く、ない、のに……ガクッ」

当然高町家に帰るのも遅くなり、そっちでもＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされた…

第8話：プレシアの思い、そして…（後書き）

実質無印は終了ですかね。
プレシアの性格をかなり変えました。
次回は管理局をどうにかします。

では。

第9話：あっという間劇場ＫＹ編

「これで、残り1個だな」

「うん、そうだね」

どうも、さくさくジュエルシードを集めているウィリアムとフェイトです。
例の「ジュエルマップ」を使って回収・封印を行っているので
４日間で１４個集めました。発動前なので封印もあっという間に
終わって、残りのジュエルシードは1個になりました。

今までの回収では特に問題はありませんでした

1つの例外を除けば。

2日前の回収の時に、ジュエルシードが暴走してしまいました。
主に俺のせいで。

ジュエルシードを見つけた時、なのはとユーノに会ってしまったのです。
なんというバッドタイミングｏｒｚ

幸い俺は変身魔法を使って「ベイダー」になり済ましていたので
正体はばれずに済みましたが、あっちが何かと好戦的になっていてすぐに戦闘になってしまいました。

なんで、あんなに好戦的だったのかなと考えていると

「やっとジュエルシードを見つけたの！あれは私のものなの！！」

ってなのはが言っていた。

あ～そういうことか。
俺とフェイトで発動前のジュエルシードをあらかた集めたからその間なのはとユーノはずっと見つからないよ～（泣）になっていたのね。

つーか、あれはお前のものじゃないだろ。
と、心の中で突っ込んでいると、フェイトがなのはに押されているので
マイクロミサイルを乱射。

「にゃあああああああ！」

これでよし。ユーノは戦闘できないし、とっとと回収して…

ズズズズズズッ！！！

その時、ものすごい揺れが発生した。

「な、何だ？」

と思ってみてみると、ジュエルシードが超光っていた。

「まずい！暴走している！」

と、ユーノ。

「なんで暴走してんの？」

隣にいたフェイトに尋ねるとこういうことらしい。

俺がなのはにミサイル乱射。

←

なのは、逃げ回る。

←

なのは、なんとかミサイルを回避する。

←
目標を見失ったミサイル群がジュエルシードに命中。
←
今ここ

「つまり、俺のせい？」

「あ、あははは…」

フェイトも苦笑している。
とりあえず暴走を止めなければならんな。

「お前ら全員下がれ！巻き込まれるぞ！」

と言いながらファイターモードになってジュエルシードに突っ込む。
そして作っておいた反応弾を2発発射した。

「散れ！銀河の果てへ！！」

ド～ンッ！！！

そして、地球は核の炎に

「「「包まれないよ（の）！！！」」」

「鋭い突っ込みだな」

ま、いいや。ジュエルシードの暴走も収まったし、こっそりフェイトが回収・封印したし。

か～えろかえろ～っと。

なのはとユーノは無視して撤退した。

あの時の暴走を抑えるために撃った反応弾のせいで、
小規模な次元震が発生したと、エディから報告があった。
そして今、フェイトと一緒に最後のジュエルシードの所に向かっている。

「ウィル？電話鳴ってるよ？」

「ん？ああ、すまない。ちょっと考え事をしていてね」

「艦長。こちらエディ。緊急報告です」

「どうした？」

「地球軌道上に時空管理局所属Ｌ級次元航行船８番艦『アースラ』が出現しました。こちらの存在には気が付いていないようです」

「そりゃそうだ。奴らの技術は数世代前の代物だしな」

「現在艦長とミス・フェイト、そしてミス・高町を追跡している模様。
命令を待ちます」

くそ、リミッターつけるの忘れてた…

「とりあえず待機していてくれ。それと完成している戦艦で
今すぐ動かせるのはあるか？」

「５日前に完成したインペリアル？級及びテクター級が１隻ずつあります」

「通常型と砲撃戦特化型戦艦か、十分だな。
ただちに出撃。地球軌道上『アースラ』の３０?圏内に
飛ばしてくれ。完全ステルス、敵にばれないようにな」

「了解しました、艦長」

「何かあったらまた連絡してくれ。以上、通信終わり」

「ご健闘を祈ります。通信終わり」

ふう、やっぱり奴らが来たか。
管理外の世界なのに堂々と乗り込んできやがって、
何様のつもりだあいつらは?あーなんかストレスたまるー

「ね、ねえウィル?な、なんか恐い顔しているけど…」

「ん~?気にするなフェイト。それより管理局が動いている。
俺たちを追跡しているようだ」

「!?」

「さて、全部終わらせますかね、行くぞ!」

「うん!」

んで、んで、んで。

にゃ～はつかないからな。

この～木なんの木、気になる木～♪
見たことも～ない木ですから～♪

「ディバインバスター！！」

「サンダースマッシャー！！」

ドカ～ンッ！！

吹っ飛んでもらうことにしました♪

そして最後のジュエルシードが出てくる。
なのはとフェイトはアニメと同じように対峙している。

なのははお話がしたいから。

フェイトは家族のもとに帰りたいから。

互いにデバイスを振りかぶる。

が、

「そこまでだ！！ここでの戦闘は危険すぎる！！」

ＫＹ登場！！

「時空管理局執務官、クロのっ？？？」

と、いきなり空中でばたつくＫＹ。

「「？」」

なのはとフェイトはなんで？って顔をしている。

そりゃそうだ。だって

俺がクロークモードでクロノにチョークスリーパーをかけているからな！

「もげげっ！もげげっ！」

と意味不明な言葉を吐いた後、

「……（ガクッ）」

見事に気絶しました。

「はいはい、邪魔はいけないよ～」

と言ってクロークを解除しつつクロノをユーノに放り投げる。

「ユーノ！受け取れ！」

「うわあああああ！」

ドサッ！！↑クロノが地面に落ちた音

ベチャッ！！↑そのクロノの下敷きになった音

どっかのＫＹと淫獣が潰れたような気がしたが気のせいだろう、うん。

「お～い、邪魔者はご退場してもらったから続けていいぞ～」

となのは&フェイトに言う。だが、

「ベイダーさん、やりすぎなの…」

「かわいそう…」

と言われてしまった。

「ちょっと気絶させただけじゃなイカ！」

「それにしてはずいぶんすごい音がしたわね？」

突然空中にスクリーンが現れて、そこに女の人が映っていた。

「はじめまして、みなさん。私はリンディ・ハラオウン。
その辺の地面で気絶しているクロノ・ハラオウンの母です。
すこし話をしたいのでこちらまで来てもらえませんか？」

「どうする、お前ら？」

フェ「行こう」

な「行くの！」

ユ「行こうか」

ア「（やっと台詞が言える…）行こう、フェイト」

「そんじゃあ行きますか、転移開始」

そんで俺たちはアースラに飛んだ。

さて、お話の時間だ…

第９話：あっという間劇場ＫＹ編（後書き）

ＫＹには即刻退場してもらいました。

次は本編か番外編、どっちを書くか考え中です。

では

番外編2：戦艦の紹介（前書き）

ウィキペディアで調べればわかると思うけど一応。

番外編2：戦艦の紹介

マクロス・クウォーター：1隻
S．M．S旗艦を務める可変攻撃宇宙空母。「クウォーター（4分の1）」の名の通り、
その全長は従来マクロス級の4分の1の402mとアームド級宇宙空母並のサイズしか
ないが、大出力の反応炉エンジンとバスターキャノンよって通常艦船よりも
高い機動力と火力を持つ。右舷（右腕）のガドリング式バスターキャノンは
重量子反応砲モード（通称：マクロスキャノン）で従来のマクロス級と
同等の威力を持つほか、ピンポイントバリアを集中させて巨大なサーベル状の武器にもなる。左舷（左腕）飛行甲板には戦闘機やデストロイドが最大80機搭載可能で、エネルギー転換装甲により強攻型（人型形態）ではシールドとして使用する他、ピンポイントバリアを
先端に集中させてダイダロスアタックと同様の戦法が行なえる。
なお、バスターキャノン発射の際にはそれを保持する左腕の甲板は背部にマウントされる。
強攻型での運動性、格闘性能は従来型を遥かに凌ぎ、バトロイド並に人間的な動作が
可能で、本格的な格闘戦のための兵器システムも備えている。更にトランスフォーメーション中の回避機動も可能で、変形中脚部のみを展開したガウォークのような中間形態も存在する。艦自体は5隻に分離が
可能で、それぞれがフォールド航法・大気・水中でも運用が可能な高性能艦である。

バトル・フロンティア：１隻
フロンティア船団護衛艦隊を統轄するバトル級可変ステルス攻撃宇宙空母。
巡航時はアイランド１の先端にドッキングしている。船体各所に２５のマーキングがあり、
司令室の球形のホログラムスクリーンには「バトル２５」と表示されているが、
作中では船団名同様バトル・フロンティアと呼ばれている。全長１，６８１ｍ、全幅５２１ｍ、
全備重量１６，５５０，０００ｔ。従来のバトル級より全長が２００ｍほど伸び、重量は２倍以上に
増している。艦体は６隻の戦闘艦が組み合わさる構造となっており、
指揮空母１隻（胴体）１、空母２隻（両腕）、突撃戦艦２隻（両脚）、
重砲撃艦１隻（主砲）に分離後も各個が独立展開、フォールド航行可能である。
指揮空母のブリッジには球形のホログラムスクリーンを使う巨大な戦闘指揮所があり、
有事の際は臨時に政府機能が置かれる。従来艦と同様にトランスフォーメーション
機能を持つが、空母形態のままでも主砲マクロスキャノンの使用が可能。
強攻型に変形した時は右肩に主砲が接続される。変形シークエンスはバトル７と
ほぼ同じで、強攻型（人型形態）に変形後はピンポイントバリアパンチで攻撃を
することができる。

インペリアル？級スター・デストロイヤー：２０隻建造中

クアット・ドライブ・ヤード社製
大きさ：全長１，６００ｍ
武装：ターボレーザー砲　６０基
　　１２０ＭＧＬＴで飛行する戦闘機を破壊可能。
　　弾速は光速より速い。軌道上から惑星の地表に対して爆撃を行うことも可能。
　　大型艦船を標的に捉らえることも可能。６０基で一斉砲火することにより、
　　惑星の都市部を瓦礫の山にすることが出来る。
　　射程距離：１５０？（大気中）
　イオン砲　６０基
　　宇宙船のコンピュータを機能停止できる。射程距離：１００？（大気中）
シールド
　シールドのエネルギーは宇宙船の装甲を内側から通過し、船の外側を数センチの幅で覆う一連のエネルギー層を形成して船体を保護する。
　上記のターボレーザー、イオン砲による攻撃を無効に出来る。
　流星の衝突クラスの物理的ダメージに対して大丈夫なように出来ている。
　シールドに触れるだけで宇宙船は被害を受ける。
　シールドを張ったままでの攻撃も可能。
　映画内で弱点だったシールド発生機は、ブリッジの上ではなく艦内に設置され、出力も強化されている。このため、
　アルカンシェルクラスの攻撃にも耐えることができる。
速度：６０ＭＧＬＴ。クラス２ハイパードライブ搭載（星系間でのワープが可能）。
　　映画と異なりフォールド航行システム搭載。
操縦要員、砲手、基幹乗組員はいない。映画と異なりエディが全てを管理、運用している。

兵員：９，７００名
搭載機：ＴＩＥファイターの代わりにＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機　７２機

上陸船　１２機
ＡＴ－ＡＴ　２０台
ＡＴ－ＳＴ　３０台
上陸艇　１５機
ラムダ級シャトル　８機
アサルト・ガンボート　５機
個人用輸送艇　多数

テクター級スター・デストロイヤー：２０隻建造中
クアット・ドライブ・ヤード社製
他の艦級と異なり、格納庫を持たないスター・デストロイヤーである。
大きさはインペリアル級と同じ１，６００ｍだが、ヴェネター級スター・デストロイヤーの後継艦にあたる。艦隊砲撃戦を目的とした純粋な戦艦であり、急速に増強してきた反乱同盟軍艦隊を強く意識して
建造された。他の艦級に見られる底部に配置された離発着口の部分は、
防御力強化の為装甲板で塞がれている。この為、他の艦船への乗り込みや
惑星へ兵員や物資を降下させる事等が不可能になり、用途が制限される
こととなった。また、戦闘機を搭載することも出来ない為、長距離の任務に
付く際には戦闘機を搭載した航空母艦と共に行動させる必要がある。
シールド、速度はインペリアル?級と同じである。

エクリプス級スーパー・スター・デストロイヤー：４隻建造中
クアット・ドライブ・ヤード社製
大きさ：全長１７，５００ｍ
武装：アクシャル・スーパーレーザー　１基
　　１つの惑星の３分の２の面積を破壊可能。
　ターボレーザー砲　５００基
　イオン砲　７５基
シールド：映画とは異なり、ヴィクトリー級スター・デストロトイヤーの
　　格納庫に強力な大型シールド発生機を装備。
　　アルカンシェルの５万倍の攻撃にも耐えることができる。
速度：４０ＭＧＬＴ。クラス２ハイパードライブ搭載（星系間でのワープが可能）。
　　映画と異なりフォールド航行システム搭載。
操縦要員、砲手、基幹乗組員はいない。映画と異なりエディが全てを管理、運用している。
兵員：１５０，０００名
搭載機：ＴＩＥ　インターセプターの代わりにＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機　６００機
　　ＴＩＥ　ボマーの代わりにＶＢ－６　ケーニッヒモンスター　９６機
　　ＡＴ－ＡＴ　１００台

第２デス・スター：１隻
特製深宇宙移動戦闘ステーション。
大きさ：全長１６０？（直径）。形状は球体。
武装：スーパーレーザー　１基
　惑星を完全に破壊できるビームを発射。
　最低でも２０ＭＧＬＴで飛んでいる宇宙戦艦を１発で破壊。

射程距離：４７，０６０，０００?。
大型艦船を破壊する規模の砲撃は1分間隔で行うことが可能だが、
惑星の破壊は1日に1回が限界。
ターボレーザー砲　３０，０００基
レーザー・キャノン　７，５００基
大型建造物破壊級
射程距離：２．５?（大気中）
イオン砲　５，０００基
防御力：デススター本体の大きさゆえ、本体丸ごと覆うほどの攻撃で無い限り1発で
壊れることはないと思われる。全長１２，８００mの宇宙戦艦が表面上で爆発しても
作動には何ら影響は無い。
また映画とは異なり、居住区画に超大型シールド発生機を装備。
結果、スーパーレーザーを食らっても傷一つ付かない程強力なシールドを展開可能。
速度：２０ＭＧＬＴ。クラス４ハイパードライブ搭載（星系間でのワープが可能）。
映画と異なりフォールド航行システム搭載。
操縦要員、砲手、基幹乗組員はいない。映画と異なりエディが全てを管理、運用している。
兵員：１２９５９５０名
搭載機：ＴＩＥファイターの代わりにＡＩＦ－Ｖ９無人戦闘機　１０，０００機
ストライク・クルーザー　１０隻
軍事輸送艇　３０，０００隻
戦闘車両　１５，０００機

もしかしたらもっと増やすかも！

番外編2：戦艦の紹介（後書き）

ちなみに、ＭＧＬＴ（メガライツ）とは、宇宙空間での速度の単位です。
この単位は現実世界では、架空の想定速度（重力加速度）ですが、
宇宙船のイオン・スラスターにより達成できます。
ＭＧＬＴ＝Ｍｉｃｒｏ－Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｌｉｎｅａｒ　Ｔｏｌｅｒａｎｃｅ
単純計算すると１ＭＧＬＴは４，０００億？／秒というもの凄い数値になります。
どのくらいすごいのかというと、光は３０万？／秒なので、１ＭＧＬＴは
光の約１３３万倍以上の速度です。スターウォーズ界では、１パーセク
（約３．２６光年「１光年＝約９兆４６１０億ｋｍ」）という距離を普通に
移動しているのでもの凄い速さが出せるようです。

それに比べて管理局の次元航行艦や「聖王のゆりかご」は…
詳しくは知らんがこれらより強いことはないだろう、多分。

次回は「アースラ」で管理局と会合を開きます。

では

第１０話：さっさと終わらせて帰ろうぜ！

「無駄に広いな…」

どうも、『アースラ』の中にいるウィリアムです。
管理局の連中とお話しするために来ました。
で、今エイミィとかいう女に案内されて艦長室に向かうところです。
ちなみにＫＹは医務室に放り込んできました。

「とりあえずみんなバリアジャケット解除したら？
それにそこのフェレット君も元の姿に戻りなよ！」

とエイミィが言ったので、なのはとフェイトは普段着に戻った。
俺はＮＡＮＯスーツのままでいる。なのはは俺がウィリアムだということに気が付いていないから、あとで驚かそう。

ユーノも

「そうですね、すっかり忘れてました」

と言い人間モードに。

さて、耳をふさぐか…

「ふえええええええええええ！！？？」

うむ、とてもうるさいぞ、なのは。

「え？うそ？だって、ユーノ君って、ふえええええええ！？」

「あれ、最初に会ったとき僕はその姿だったよね？」

「違う違う！最初からフェレットだったよ～！」

「あれ？う～ん……あ！」

ようやくユーノは思い出した。最初からフェレット姿でいたこと、
それをいいことになのはの着替えシーンを目に焼き付けていたこと、
そしてお風呂にも一緒に入っていたことを…

「そ、そんなことしてないよ！」

「ユーノ君…さいてーなの…」

「グサッ！」

ユーノに５０００のダメージ！

「漫才はこれくらいにして行こうぜ」

「あれ～よく来たわね～。どうぞどうぞ楽にして～」

というセリフで俺たちを歓迎するリンディさん。

部屋の装飾については無視するとして。

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「フェイト・テスタロッサです」

「その使い魔、アルフだよ！」

「ベイダーだ」

自己紹介をすると羊羹と緑茶が出てきた。

俺はリンディさんと同じように緑茶に砂糖とミルクを入れて飲んでみる。

「こ、これは…うまいっ！！」

「「「「それはないよ（の）（わね）」」」」

リンディさん以外がそう言う。

「俺は甘党なんだ！あんな苦い緑茶をそのまま飲むなんて無理だ」

「気が合うわね、私も同意見よ」

リンディさんと緑茶同盟が結ばれた！

さて話はジュエルシードの件に。

「そうですか、あのジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

…お前らスクライア一族からの捜索依頼を読んでないのかよ！

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権をもちます」

…もうそろそろゴールしてもいいよね？

そして俺は話し始めた。

「それには及ばんよ、艦長」

「それはどういう意味かしら、ベイダーさん」

「すまない、言葉が足りなかったようだ。

なのはとユーノが回収した5つ、そっちが今持っている1つ、

そして残りは…」

そう言って俺はプレシアとアリシアを呼び出す。

リ「！あなたはプレシア・テスタロッサ！」

エ「え！あの大魔導師の！？」

「私が残りの１４個のジュエルシードを持っているわ」

「「「「な、なんだって～！？」」」」

事情を知っているフェイトとアルフと俺以外の人が大声を出した。

「なんであなたが？」

「そこは俺が説明しよう。
今から2週間前にジュエルシードは第９７管理外世界に落ちた。
スクライア一族が管理局に捜索依頼を出したのも2週間前だ。
だが、管理局はなかなか来なかった。
そこで、大魔導師であるプレシアは、このまま放置しては危険と判断し、いつまでたっても来ない管理局の代わりにしかたなくジュエルシードの回収・封印作業を行った、というわけだ。何か質問は？」

「ちょっと待った！」

「なんだよ、ユーノ」

「ジュエルシードは２１個あったはずだ、ここに６個
向こうに１４個じゃ数が合わない！」

「ああ、それか。それは俺が原因だ」

「「「え？」」」

「プレシアの隣にいる子、誰だかわかるか？」

「あれ？あの子は確か事故死したはずのアリシア・テスタロッサ、
プレシアの実の娘…」

「よく調べたわね、その通りよ。そこにいるフェイトは
アリシアの妹なの」

「んで、死んだ子がなんで生きてるかっていう話なんだけど、
あの子が入っていた生体ポットにジュエルシード落としちゃった
♪」

「「「「はあああああ！？」」」」

おーみんなおどろいてるｗ

「したら、ジュエルシードが光りながらアリシアに吸い込まれて、
なんと！生き返りました！」

「「「わ～」」」パチパチ↑プレシア・アルフ・フェイト

「いや～どうも～」↑アリシア

「おそらく、アリシアの願いが叶ったんだろう。
『もう一度家族と暮らしたい』っていう願いがな
だからジュエルシードは２０個しかありません！」

みんなポカーンとしてんな、そりゃそうか～

「んで、報酬の件なんだが…」

「「報酬！？」」

「あれ、くれないの？あんたら管理局のために集めたのに？」

「……で、何が望み？」

「まず、プレシアとフェイトがジュエルシードを回収・封印したということを公表しろ。それにプレシアは研究がしたいらしいからその手配もよろしく。まだ、プレシアの名前は有名なんだろ？あとテスタロッサ家の身元保証、以上」

「あなたは何もいらないの？」

「う～ん、じゃあこうしよう。
誰かに頼みごとをするときは、素直に正直に言え。回りくどい

やり方はなしだ。わかったか？」

原作でなのは達を勧誘する時のせこいやり方にイライラしていたからな

「もし、この条件を認めなかったら？」

リンディさん、言うねぇ。
じゃあ、ちょっとやりますか。

「俺は怒るだろうねぇ、とても。もしかしたら怒ってこの艦を傷つけてしまうかもしれない」

と言った瞬間、衝撃とともに艦内に警報が鳴り響く。

「どうしたの！？」

「艦長！左舷前方に何ががぶつかりました！おそらく人工衛星と思われます！」

「なんですって！？なんで気が付かなかったの？」」

「わかりません！レーダーに反応が全くありませんでした。というか肉眼でも確認できませんでした」

この”人工衛星”は数日前にマクロス・クウォーターから射出した。
外殻には光学迷彩処理を施している。そして衛星の内部には
宇宙空間用の機雷を搭載している。威力はそこそこある。
それをエディがコントロールして『アースラ』にぶつけたわけだ。

「俺が言った瞬間に人工衛星とぶつかるなんて…
運が悪いですね、リンディさん（笑）」

「……」

なんで俺睨まれてんだろう？

「さて、話を戻しますが、さっきの条件、認めてくれます？」

満面の笑顔で聞いてみる。
これで認めなかったら、イオン砲で艦の機能を停止させてやる。

結論。残念ながらイオン砲を撃つ機会はありませんでした。
管理局はさきほどの条件を全て認めたので。

あとリンディさんは、フェイトに管理局に入らないか？
と頼んでいました。プレシアさんの許可をいただいたらしく
フェイトは嘱託魔導師になるようです。原作どおりですな。

ユーノはなのはの家でしばらく住むそうです。
な　ぜ　か航路が不安定らしくミッドチルダ方面には
帰れないとか。なんでだろうね～。

べ、別にミッドチルダ方面の航路でスーパーレーザーを撃って
遊んでいたら航路がめちゃくちゃになったわけじゃないんだからねっ！

なので『アースラ』もしばらく地球軌道上で待機することに。
例の”人工衛星”との衝突で壊れた部分は、
本局に戻って修理する必要があるんだって。

てなわけで
めでたしめでたし。

「…そう思っていた時期もありました」

とぼやくのは俺、ウィリアム。
俺は現在正座をしています。そして
目の前にはデバイスを構えたなのはの姿が。

「な、なのは？なんでそんな物騒なものを構えているんだ？」

「……ベイダーさんがウィル君だったなんて聞いてないの……」

あ、説明するの忘れてた。

「……なのにフェイトちゃんは全部知ってたの、ずるいの……」

「そ、それは仕方なかっｔ」

「ウィル君、少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか……」

この日以降、なのはを陰で「白い悪魔」と呼ぶようになったウィリアムである。

第１０話：さっさと終わらせて帰ろうぜ！（後書き）

はい、無印終了です。
戦艦で脅そうかと思ったんですが、まだ早いと思いやめました。
使うのはＡ－ｓにしようかと考え中です。

では

１／２３に幻想の庭師様からご指摘があり、一部編集いたしました。

番外編3：エディが暇なので

どうも、エディです。
今デス・スターは太陽から約９８０光年離れたＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２という
パルス状の可視光線、電波、Ｘ線を発生する天体にいます。
地球にあるアメリカ航空宇宙局のデータによるとここには
４つの惑星があるということなので、現在調査に来ています。
なんでこんなところにいるのかというと、

～2時間前～
我々の艦隊は太陽の近くの虚数空間に隠れていました。
ここなら見つからないだろうという理由で。
すると艦長から通信が。

「そちらの状況はどうだ、エディ？」

「すべて順調です、艦長」

「つまり、暇だな」

「まあそう言えますね」

そう、戦艦や超巨大造船所を作っているのは、他のロボットやターミネーター達なので、エディ自身は暇なのである。

「じゃあ、ひとつやってほしいことがある」

それがここＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２にある惑星の調査です。なんでも、ここの４つの惑星のうち３つが炭素惑星の可能性があるとのこと。

「もし炭素惑星なら、そこにある資源を根こそぎ掘ってこい、手段は問わない」

という命令を受け、今その惑星、ＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２　Ａに調査ロボットを降下させています。

しばらくして調査結果がでました。やはり艦長の予想通り、この惑星の地下には、５？ほどのダイヤモンドの層がありました。他の２つの惑星、ＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２　ＢとＣにもダイヤモンドや炭化チタンなどの資源が眠っているのが確認できました。

さて、見つけたのはいいのですが、どうやって掘りましょうか？

一応採掘機械はありますが、かなり時間がかかってしまいます。
う～ん…

３０秒後、素晴らしいアイデアが浮かびました。

掘るのが面倒くさいなら吹き飛ばせばいいじゃないカ！
→
エディは暇なので、地球のアニメを見続けた結果、
少しずつおかしくなっています。

「スーパーレーザー発射準備開始。出力５０％。目標ＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２　Ａ。
カウントダウン開始。５，４，３，２，１，発射！」

ドカーンッ！！！

大爆発とともにＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２　Ａは、表面の地殻のみを吹き飛ばされ、後に残ったのは、

キラキラ光るダイアモンドの惑星だった。

それをあと2回やって、私は大量のダイヤモンドとその他資源を採掘し、帰還することにしました。艦内に入りきらなかった分はトラクタービームで引っ張りながら帰りました。
これらを全て売りさばいたら、すさまじい利益になるでしょう。

あとに残ったのは地殻とダイヤモンドを引っぺがされて2回り程小さくなった3つの惑星でした。

番外編3：エディが暇なので（後書き）

炭素惑星がほんとにあるかどうかは、まだ分かっていません。
もしあったらいいですねｗ

次はタヌキと会います。

では

第11話：タヌキ狩りじゃ～！

どうも、平和な海鳴市に戻ってきたウィリアムです。
今日は日曜日なので午前中は琴屋のお手伝いをしていました。
なのはがメイド服姿でお手伝いしていると、店の売上が異常に伸びる、と士朗さんが言ってました。

昼飯を食った後、なのはは学校の宿題。俺は図書館に。
俺の宿題？あっという間に終わったよ～

「なんでウィル君はそんなに早く出来るの～！？」

と、なのはがわめいていたけど無視。

さて無事に図書館に着いたけど、どこにはやてはいるのかな…

探すこと5分。
み～つけたぁ～
アニメと同じように、本が取れそうで取れない感じだ。
よし、行きますか！

「これが取りたかったの？」

「え?はい、ありがとうございます」

「俺はウィリアム。ウィリアム・T・ロンバート」

「八神はやてっていいます。
あの、ウィル君って呼んでもいいですか?」

「いいよ、てか敬語はなしにしよう。OK?」

「わかった。これからもよろしくな、ウィル君」

「おう、よろしくね、はやて(ニコッ)」

「……///」

俺が笑ったらはやては顔を真っ赤にした。

「?どしたの?顔赤いけど」

「い、いや、なんでもあらへん!」

「なら、いいんだが…」

そのあと、お互いに色々なことを話した。
はやての両親はすでに亡くなっていて今は一人で暮らしていること。
俺の過去(ねつ造だが)も話した。

そして夕方。

「もうこんな時間か～、そろそろ家に帰らなあかんな」

「そうか、残念だな。一人で大丈夫か、はやて？」

「大丈夫や、うちを誰だと思ってや！」

「そか、じゃあ、また今度な」

「うん、わかった。じゃ～ね～」

そしてはやては車いすを動かし家のほうへ

行けなかった。

「ウィル君～、お助け～」

溝に車輪がはまってやがる……

「だから、大丈夫かって聞いたのに」

「た、たまたまや！運が悪かったんよ！」

「いいからいいから。はやての家まで送ってやるよ」
「ほんま!?助かるわ～」

んで、はやての家に到着。

「ここか、いい家だな」

「ありがと…」

なんか声に元気がない。見てみるとしょんぼりしている。
…そうか。やっぱり一人がさみしいんだな。

おもむろに携帯を取り出して琴屋に電話する。

「もしもしウィリアムです。ああ、桃子さんですか、どうも。
実はですね、今日クラスの子たちとお泊まり会をやろうって話になったんですけどいいですか?……ほんとに?ありがとうございます!
では、一度着替えとか取りに戻りますね。はい、それでは」

「……」

茫然としているはやてに笑いながら言う。

「ということでお世話になりま～す」

「え？ええ？どういうことや？」

とりあえず混乱しているはやてを家の中に入れる。
それから、はやてが寂しそうだったからこうしたと説明。

「う、うち別にさびしくなんか…」

なんて言いだしたので、俺はやさしくはやてを抱きしめる。

「ウィ、ウィル君！？／／／」

「はやて、お前はまだ子供だ。寂しいときは寂しいって言えばいい。
泣きたければ泣けばいい。我慢する必要なんかないんだよ？」

「う、うわあああああああん！！！！」

それからしばらくはやては泣いていた。
俺は何も言わずに、はやてが泣きやむまで抱きしめていた。

そのあと一緒に風呂に入って、

「は、恥ずかしい／／／」

夕飯を一緒に食って、

「ウィル君、お料理上手なんやな～」

「ありがと、はやて」

んで一緒に寝たりしました。

「おやすみ、はやて」

「おやすみ、ウィル君」

その頃、はやての家の近くに2匹の猫がいた。

だがこの猫は普通の猫ではなく、使い魔であった。

ご存じリーゼアリアとリーゼロッテである。

「あの男の子は？」

「お泊りみたいだよ」

「そうか、まあ、魔力反応ゼロだったし問題ないかっ！？」

「うわっ！？」

突然２匹の猫にバインドが。

「なんだ、これは！？」

「一体誰が！？」

２匹は逃げようとするが、なかなかバインドが取れない。

次の瞬間ロッテが宙に浮かぶ。

「ロッテ！！」

「え？なにこれ？

ってうひゃひゃひゃひゃひゃ～！！！」

突然身もだえしながら笑いだしたロッテ。

何が起きてるかまったくわからないアリア。

「うにゃ～～～」

数分後、ロッテが落ちてくる。

「大丈夫か、ロッテ？」

「う～んもうだめぇ～」

…なんか目がトロンとしている。おまけに涎も出てる。

そして次はアリアが浮かび

「や、やめろ！う、うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ～！！！」

数分後、そこには涎を垂らしながら恍惚とした表情をした2匹が。

そしてクロークを解除したウィリアムがいた。

「さてと、これくらいでいいな。あとはお持ち帰りぃ～♪」

片手に猫2匹、もう片手に猫じゃらしを手に、

ウィリアムははやての家に帰った。

「おかしいな、連絡が来ない……」

時空管理局本局のギル・グレアムは首をかしげていた。

第１１話：タヌキ狩りじゃ～！（後書き）

はい、Ａ'ｓに入りました。
原作うろおぼえなので、間違っている個所があったら指摘していただければ幸いです。

次回ははやてが魔法を知ります。
では

第１２話：魔法少女ポンポコ！

ハローエブリバディ。ウィリアムです。
昨日ははやての家にお泊まりしました。そして猫を２匹捕獲しました。
私は学校の帰りにはやての家に行きました。すると

「う～ん、この猫達とってもかわいいやんか～」

２匹の猫は、はやてにもみくちゃにされてました。

「かわいそうだからやめい」

「ちぇ～、ウィル君けちやな」

「うるせい。で、なんか買ってくるもんあるか？」

「え、お買い物ならうちも」

「いいから、はやては家にいろって。お菓子買ってくるからさ」

「ほんま？じゃあこれ買い物のメモや」

「ｏｋ、じゃあ行ってくる。あ、そうだ」

そういって俺は猫達をもち上げる。

「「！？」」

「その猫達どうするん？」

「ちょっと三味線屋さんに行ってくる」

「「えええええええ！！！（にゃあああ！！！）」」

「っていうのは冗談で一緒に買い物に行こうかと」

「2匹とも連れて行くん？ずるい～」

「じゃあ、こっちは置いていこう」

そう言ってロッテをはやてに預ける。

「んじゃ行ってくる」

「いってらっしゃ～い」

俺は買い物をしながらアリアと念話する。

（さて、話をしよう）

（あんた、いったい何者なんだい？）

（ウィリアム。ウィリアム・Ｔ・ロンバートだ。君は？）

（……リーゼアリア。もう一人はリーゼロッテよ）

（んで、ギル・グレアム提督の使い魔だろ？）

（知ってたの！？）

（まあな。そしてお前らがしようとしていることも知っている）

（……）

（闇の書を覚醒後、主であるはやてごとカチンコチンに凍らせて虚数空間にポイ捨てか。実にむかつく計画だな）

（だけど！それ以外に方法がないの！）

（あると言ったら、どうする？）

（え！？）

（闇の書はもともと夜天の書と呼ばれていた。その状態に戻せばいい）

（どうやってそんなことができるというの？不可能よ）

（まあ、家に帰ってからやろうじゃないか。
グレアム提督を呼ぶ準備をしといてくれ）

買い物から帰ってきて夕飯を食った後、リビングに集まる。

「さてと、二人とも元の姿に」

そう言うとアリアとロッテは人間の姿になる。

「え、えええええええ？？？」

「はやて、落ち着け」

「これが、落ち着いてられるか～！！」

はやてを落ち着かせて、俺たちは色々と説明した。

この世には魔法が実在すること。
はやてが魔法を使えること。
はやての部屋にある本は「夜天の書」と呼ばれる魔導書で、
今は改竄されて「闇の書」になっているということ。
起動すると半年くらいではやてが死んでしまうこと。

すべて説明を終えると、

「それで？どうやって闇の書を元に戻すの？」

アリアとロッテとはやてが聞いてきた。

「まずは実物を見ないとね。
てことではやて、ちょっとみせて」

はやてから闇の書を借りる。
俺はそれを見ながらエディに解析させる。

「どうだ、エディ」

「かなりひどい状態ですね。でも、今ならまだ間に合います」

「大変結構。防衛プログラムの対策は？」

「？なんのことですか？」

「え、だって闇の書には防衛プログラムがあるはずじゃ…」

「ああ、それですか。闇の書にアクセスするときに邪魔してきたので、

むかついて消しちゃいました♪」

「「「「「「は？」」」」」」↑俺、はやて、アリア、ロッテ、グレアム

「いや、すいぶんと生意気なことをしてくれましてね。
私がアクセスしたら、逆にハッキングを仕掛けてきたんですよ。
それでむかついたんですべて削除しました。エヘッ♪
なので、今その魔導書には防衛プログラムは存在しません。
ですが、じきに新たな防衛プログラムが生成されるでしょう」

「おいおい、ちょっとまて。もしかしてさ、防衛プログラムと
一緒に守護騎士プログラムも消したとか言うなよ？」

「ご安心を。守護騎士プログラムは防衛プログラムから切り離して
現在は完全に独立した存在になっています。
ただ、管制人格及び多くの部分がエラーになっています。
おそらく改竄の影響を受けている模様です」

「夜天の書の本来のデータは残っているのか？」

「いいえ、そのデータは存在しません。管制人格も覚えていないでしょう」

「覚えていないんなら、元の姿には戻れない。そういうことだな？」

「肯定です」

「そうか、じゃこうしよう。
夜天の書のデータがないなら、新たな夜天の書を作ればいい」

「「「「え？」」」」↑はやて、アリア、ロッテ、グレアム

「もう誰も知らないんだろ？夜天の書がどんな姿だったのか。
だから一から新しい魔導書を作って、守護騎士プログラムと
管制人格をそっちに移せばいい。どうよ？」

グ「それなら、うまくいくな」

ア・リ「そうですね、父様」

は「なんやようわからんけど、うまくいくんならそれでええな！」

「よし、エディ、最優先で新たな魔導書を完成させろ。

どれくらいでできる？」

「ざっと一週間ってとこですかね」

「「「「早っ！！」」」」

「わかった。それじゃあ、よろしく頼む」

「あ、それと艦長。１つだけ。」

「なんだ？」

「魔導書が完成するまでの間に、闇の書を起動させてください」

「どうやって？」

「どうにかして」

「……わかんないの？」

「……わかんないの…」

「……まあいい、なんとかするよ」

「よろしくお願いします。通信終わり」

さて、どうやって起動させようかな。
とりあえず魔力をおもいっきし注ぎ込んでみるか？

いや、主でない俺がやるのはまずいかもしれん。
ここははやてにやってもらおう。
でもはやてはまだ魔法の使い方を知らないんだった。
そうだ、俺とはやてのリンカーコアを直結させて闇の書に
魔力を送ればいけるんじゃね？

魔力の流れ
俺のリンカーコア
　？　直結　　↓闇の書
はやてのリンカーコア

「そんじゃ～逝ってみよ～」

「なんか字が違うで、ウィル君！」

「お、つながったんじゃね？」

「なんか、胸がぽかぽかする…」

「んで、この魔力をこいつに注入～ってか」

3分後

「…起動しないね」

「そうやね」

「じゃあ、もっと気合を入れる！！」

そう言って割と本気で魔力を注ぎ込む。すると本がガタガタ震え始めた。

「ん？」

「お？」

『あばばばばばばばば』

「「「「「はい？」」」」」

『き、きき、ききど、起動うううううう』

「なんか壊れてへん？」

「奇遇だな、俺もそう思った」

すると、リビングの４つの魔法陣が現れて守護騎士がでてきた。

シグナム「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

シャマル「主ある限り、我らの魂尽きることなし」

ザフィーラ「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

ヴィータ「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

「おお、守護騎士が出てきた～ってあれ？
管制人格はどこだ？はやて、呼び出してくれ」

「うん、わかった。出てきて、管制人格さん」

「はい、我が主」

そして銀髪の赤い目をした、ないすばでぃな女の人が出てきた。

「あなたが夜天の書の…？」

「そうです。夜天の書の管制人格です」

「名前はないの？」

「ええ、存在しません」

「それはいかん。夜天の主として、うちが名前をつけたる！
強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール、リインフォース。
それが新しい名前や」

「リインフォース…素敵な名前ありがとうございます」

リインフォースは主であるはやてに礼を言うと俺を見る。

「あなたが私を直してくれたのか？」

「まだ完全に直したわけじゃないが、まあそうだよ」

「ありがとう、それで今後のことだが…」

「夜天の書の修復は不可能と判断し、現在新たな魔導書を制作中だ。
完成次第、あなたの人格をそちらに移すことになるがよろしいか？」

「ああ、わかった」

「あのさ、リインフォースがいなくなった夜天の書はどうするん？」

はやてがそう尋ねた。

「う～ん、それは後で考えよう」

「おい！」

振り返ると守護騎士が。

シャ「すみませんけど」

ザ「現状の」

シグ「説明を求めたいのだが」

ヴィ「一体どうなってんだよ！」

なので、かいつまんで説明した。

「そうか、貴様が主と私たちを…」

「ありがとうございます～」

「あ、ありがとよ！」

「感謝する」

「ま、君たちが無事でよかった（ニコッ）」

「「「「／／／」」」」

なぜか守護騎士とリインフォースが真っ赤になっている。

「（！な、なんだあの笑顔は？胸がドキドキしたぞ／／／）」

「（かわいい笑顔だわ／／／）」

「（こいつの笑顔、反則だろう／／／）」

「（ぼけ～）／／／」

「おい、大丈夫か？顔が真っ赤だけど」

「「「だ、大丈夫だ（よ）」」」

「ならいいんだが」

「うぅ～～～…」

「はやて？なんで唸っているんだ？」

「なんでもあらへん！！」

なんではやては機嫌が悪くなってんだ？

ま、どうでもいいや。

ブーブーブー

「ん、ちょっと失礼」

「艦長」

「どうした、エディ？」

「完成しました」

「え？なにが？」

「最優先命令に従い、新たな魔導書が完成しました」

「……お前さっき一週間とか言ってなかったっけ？」

「戦艦等の建造を一時凍結して、全ての処理能力を魔導書作成にまわした結果、出来ました」

「そ、そうか。よくやった。で、どうやって移すよ？」

「こちらに来ていただかないとできませんが、どうしますか？」

う～ん、デス・スターの存在はあまり知られたくないけど、あっちに行かないと直せないのか～。
連れていく人間を厳選するか。

まず、はやてとヴォルケンズ、リインフォースだろ。
んで、アリアとロッテ、グレアムの管理局側の人間。
それだけでいいかな？

「了解した。受入態勢を整えてくれ」

「了解しました」

俺は携帯を切ると他の人に言った。

「じゃあ、リインフォースを直すから〝俺の家〟に来てくれ。
グレアム提督、あなたにも来ていただきたい。よろしいか？」

「わかった。全てを見届けよう」

「ありがとうございます。ではまずこちらに来ていただけますか？」

と言った瞬間。モニターに映っていたグレアムが消え、
アリアとロッテの間に現れた。

「わ～お」

「それで、次はどうするのかね？」

「じゃあ、飛びますか」

そう言って俺たちはデス・スターに転移した……

第１２話：魔法少女ポンポコ！（後書き）

とっととA's を終わらせようという考えの元書いてます。
というものあまり覚えていないので。
なんか途中でむちゃくちゃな理論がありますが
チートでなんとかするということに。

次回は、リインフォースを直します。
うまくいけばいいんですが…

では

第１３話：闇の書の最後なり

「は～い、到着～」

どうも、八神家とリインフォース、それにグレアム提督と使い魔２匹を
つれてデス・スターに到着したウィリアムです。

は「ここは、どこなんや？」

「ようこそ我が家に。詳しい説明はあとで。まずは研究室に行くぞ」

そばに置いてあった電動カートに乗り込み研究室へ向かう。

そして研究室について、さっそく始める。

「よし、じゃあリイン、まず、一度夜天の書の中に戻ってくれ」

「わかった」

んで、俺は夜天の書をポットに入れる。反対側のポットの中には
別の魔導書が入っている。

「よし、準備完了。エディ、はじめてくれ」

「了解。完了まで残り１０分」

「ふう、じゃあ終わるまでちょっと説明するかね。
これを見てくれ」

と言って俺はデス・スターの画像を出す。

は「なんや、月やないか」

ヴィ「月にしちゃなんかへんだぞ、はやて」

ザ「確かに…」

シャ「いや、これは月じゃない…」

シグ「ウィリアム、まさかこれは…」

ア・ロ「父様！」

グレ「ウィリアム君、これはやはり…」

「気付いた方もいらっしゃるようですね。
そうです、これは月ではなく宇宙ステーションです。
正式には特製深宇宙移動戦闘ステーションと呼ばれるものです。
名を『デス・スター』と言います」

みんな「な、なんだってー！！」

「どうやってここを作ったとか、そういう質問にはお答えできません。
それに、今回のことは誰にも話さないでいただきたい」

ヴィ「なんでだよ！」

「考えてみろ、ヴィータ。
ある日突然惑星と間違えるようなでかさの宇宙ステーションが現れました。おまけに質量兵器のオンパレードときた。
さあ、管理局が黙っちゃいない。そいつをよこせと。
そして、俺に関わったお前らにも疑いがかかる可能性がある」

ヴィ「な、なるほど…」

赤髪幼女が納得しかけたその時、

ビーッ！！ビーッ！！ビーッ！！

コンソールから警報が。

「どうした、エディ！」

「管制人格及び他のデータを新たな魔導書に移しました。
しかし、管制人格がいなくなった夜天の書が暴走しています！
新たな防衛プログラムの存在を確認！こいつぁまずい！」

「くそ！エディ、スーパーレーザーの発射準備、急げ！
シャマル、手を貸せ！こいつを宇宙空間に転移する！」

「！わかったわ！」

「はやて！こいつを！」

俺は新たな魔導書をはやてに渡す。

「新しい魔導書の名前をつけてやってくれ。
そうすればリインが出てくる」

「わかった！えーとじゃあ、白夜の書！」

リイン「認識しました、主はやて」

「よし、シャマル、行くぞ！」

「ええ、準備ＯＫよ！」

「「いけー！」」

そして暴走した夜天の書は、デス・スターの前方２００?の地点に転移された。

…うわー、なんかすんげー勢いで気持ち悪くなってる。
アニメよりきもいな…

シグ「あれはまた…」

ヴィ「気持ち悪〜い」

ア・ロ「…ウェッ」

「エディ、やることは分かっているな?」

「もちろんです、艦長」

「「汚物は消毒だーっ!!」」

その瞬間、デス・スターのターボレーザー砲群が火を噴き、
夜天の書を吹っ飛ばした。が、すぐに再生しなかなか倒せない。
防衛プログラムのバリア、魔力と物理の複合4層式だっけ？
一瞬で砕け散ったけど何か？w

「ったく、とっととおっ死んじまえばいいのによー。
質量兵器でもなかなか倒せないとは、いやはや面倒くさい」

グレ「あれだけ攻撃を受けても再生するとは…」

「仕方ない、終わらせよう。エディ？」

「チャージ完了。最大出力でいつでも撃てます」

「大変結構」

そして俺は、

「許せ、夜天の書よ…」

と小さくつぶやき、

「薙ぎ払え！！」

夜天の書はスーパーレーザーを食らって消滅した。

「ふう、終わった～」

「お疲れ様です、艦長」

「おう、ありがとな～」

他のみんなの反応は、

は「これでリインも家族や！」

リ「ありがとうございます、主！」

ヴォルケンズ「よかったよかった」

ア・ロ「闇の書、一瞬で吹っ飛んだ、クソワロスｗｗｗ」

グレ「クライド…全て終わったぞ…」

こんな感じ。

なんかアリアとロッテが壊れているが無視しよう。

「さてと、グレアム提督、管理局への報告をお願いします。
闇の書は新たな魔導書ととして生まれ変わったと、ね」

「色々と突っ込まれそうな報告だが、なんとかしよう」

「ありがとうございます、じゃあ、帰ろうかね」

グレアム達は本局へ、俺と八神家は地球へ帰って行った…

「あれ？これなんだっけ？」

その頃どこか白い世界で、アテネは部屋の隅っこに置いてあった、埃だらけで中身が見えないカプセルを前に首をひねっていた。

第１３話：闇の書の最後なり（後書き）

はい、Ａ's終了です。
早いもんですね～いやはや。

ＳｔｒｉｋｅｒＳまでは、ちょっとした日常編を書こうかと考えています。

では

第１４話：平和な日々

Ｂｕｅｎｏｓ　ｄ？ａｓ，ａｍｉｇｏｓ！！ウィリアムです。

闇の書、いや元夜天の書を吹っ飛ばしてからだいぶ経ちました。
今までにいろいろなことがありました。
はやては、なのはとフェイトと友達になって、ついでに管理局に入りました。
グレアム提督が上層部に闇の書の件を報告したんだが、
上層部はその関係者を管理局に入れさせたがったらしい。
そりゃいままで管理局を散々手こずらせたロストロギアを
なんとかしちまったんだからそうなるだろうね～。
あと、ヴォルケンズも管理局入り。主についていくんだと。
リインフォースは、はやてのユニゾンデバイスとして頑張るとさ。

なのはも、民間人協力者では物足りないと感じたらしく、
管理局に入るらしい。
淫獣もといユーノは無限書庫の司書として働くことに。

んで、俺。
なんと俺も嘱託魔導士として管理局に協力することに。
まあ、いいかー、めんどくさいけど。

そして今日ははやての誕生日。なのはやフェイト、ＫＹに淫獣、

リンディさんにエイミィさんなどいっぱいの人が来た。
みんな「はやて（ちゃん）、誕生日おめでとう～！！」
「みんな、ありがとな～。ほんまうれしいわ」
はやてはたくさんの人に囲まれてうれしそうだ。
そして、プレゼントをみんなから受け取る。
「この本読みたかったんよ～、あ、このぬいぐるみかわいいやんか～／／／」
「はやて、俺からもプレゼントだ。誕生日、おめでとう」
「ありがとう、ウィル君。開けてもええかな？」
「もちろん」
そして包み紙をはがし、箱を開けると、
女性陣「うわぁぁぁ……／／／」
女性全員が目を輝かせている。そりゃそうだろう。
俺がはやてに贈ったプレゼントとは、
以前エディに発掘させた不純物ゼロのダイヤモンドをベースに作っ

た、
指輪、ネックレス、イヤリング、ブローチの豪華４点セット。
地球で作らせたら幾らになるか考えたくもない。

「……これ、もらってええの？」

「あたりまえだろ？はやてのために作ったんだから」

「……あ、ありがと……大事にする…／／／」

「「「「「「（じーっ）」」」」」」

なんか睨まれている気が…
振り返るとそこには、

な「ウィル君、私もそれ欲しいの…」

フェ「なのは、あれははやてのだから駄目だよ、でもいいなぁ…」

シャ「……綺麗ね～、私も欲しいわ～…」

ヴィ「はやてだけずるい、私にも…」

シグ「ヴィータ、声に出てるぞ…でも、う、羨ましい…」

なるほど、うらやましいのか。

「まあまあ、みんなの誕生日プレゼントもきちんと用意するから
期待していてね」

と言っておいた。

はやてには内緒だが、あの４点セットにはある仕掛けがある。
どれか１つ身につけると、魔力及び体の自然治癒能力が向上する。
早くはやてが歩けるようになればいいが。
そして全部つけているともっとすごいことになる。
『白夜の書』の防衛プログラムの一部を埋め込んでおいたので、
はやてが脅威と認識するものからの物理・魔力攻撃が無効化される。
ま、一種のお守りってやつかね。

それに、はやてだけじゃなく、なのはやフェイト、
ヴォルケンズの分も作らないと。

俺は知り合いが傷つくのを見たくないんでね。
その一心で行動しているのさ。

≪…これがフラグメイカーなんですね、わかります≫

〈なかなかやるのう、我が主よ〉

2つのデバイスはそんなことを話していた。

「しかしまあ、こんな豪華なものどうしたの？」

リンディさんや他の女性が至極当然の質問をしてくる。

「一番難しかったのはやはり加工ですね。これは時間がかかりました」

と説明。

「え？ウィル君、これ自分で作ったの？ダイヤはどうしたの？」

と、プレシア。

「ん？ダイヤモンド？

いくらでもあるよ、捌ききれないくらい」

みんな「」アゼン

「ち、ちなみに正確にはどれくらいあるの？」

と、エイミィさん。

「え～と、ちょっと待って下さい。確認するので。
エディ、ダイヤってあとどれぐらいある？」

「わかりやすい表現でお伝えすると、ダイヤモンドで
『時空管理局本局』の１／１スケールの模型が

作れますね、それもいくつも」

「え、そんなにあんの？ちょっと掘りすぎたか…」

「そうですね。結構あれ邪魔なんで少し捨てますか？」

「半分ぐらい太陽に放り込んどけ」

「了解しました」

みんな「」マタアゼン

「まあ、他にも色々な鉱石を集めているから、
なのは達も誕生日楽しみにしてろよ？」

な「うん！楽しみなの！」

フェ「わかった。期待してるよ」

シャ「楽しみだわ～」

ヴィ「やった！待ってるぞ、ウィル！」

シグ「うむ！楽しみだ」

そんな感じで、はやての誕生日パーティーは平和に終わった

わけがなかった

「どうしてこうなった…ｏｒｚ」

いつの間にか、誕生日パーティーが、酒盛りになっていた。

「どこのどいつが酒持ってきたんだ！？」

「「はぁ～い♪」」

と、リンディとプレシア。

「お前らかあああ！！」

「だって～いいじゃない。ね～」

「そうよ、たまにはお酒ぐらい、ね～」

「ここではない、どこか遠いところでやってくれ…」

すでにエイミィ、ザフィーラ、クロノ、ユーノ、アルフは轟沈。

そろそろ逃げるとするか…

「ウィルく～～ん！」

「なっ！？」

だが時すでに遅し。なんか顔が赤いなのはが飛んできた。

「えへへ～／／／」

「笑いながら抱きつくな！」

「なんか暑いの～一緒に寝るの～／／／」

「はい？何言ってんですか？」

すると

フェ「なのはずるーい私もー／／／」

は「うちもや／／／」

シャ「いいわね～／／／」

ヴィ「はやても寝るなら私も／／／」

シグ「ま、まあたまにはいいんじゃないか？／／／」

「お前ら酔ってんじゃねえええ！！！」

「「「「「「え？酔ってないよ（ぞ）（わよ）？ひっく」」」」」」

「それは酔っ払いのセリフだ！！リンディ、プレシア、何とかしろ！」

俺は2人に救援を求めたが、

「「「ｚｚｚｚｚ」」」

もう寝てた！！

「「「「「「ウィル（君）？もう逃げ場はないよ（ぞ）（の）…」」」」」」

「いや！まだ逃げ道はある！インフィー、若本、逃げるぞ！」

だが、

≪おやすみなさ～い、マスター≫

〈このデバイスは現在使用されておりませ～ん〉

デバイスにも裏切られた！！

こうしてこの日の夜、俺は美女６人と一緒に寝ることになった…

第１４話：平和な日々（後書き）

平和？な誕生日でした
しばらくは平和なままにしましょうかね。

では

第15話：その裏で…

地球ではない、どこか遠い時空の彼方でのお話…

「Control, this is Echo－1. Request permission to engage. over?」

「Echo－1, This is Control. You're clear to engage. Good hunting, out」

「Roger, Control. out.
Echo－1 to all units. You're clear to engage. Destroy enemy targets.
I repeat, destroy enemy targets. over」

「India－11 through 15, roger that」

「Tango－11 through 15 on standby」

「OK. All units, commencing attack! Open fire!」

第７２管理外世界「イリーシア」。通称、クライム・ヘイブン。
この世界は犯罪者の巣窟と化している。そのため他の次元世界から
多くの犯罪者が逃げてくるため、一般市民はいない。
管理局も何とかしようとしているが、彼らもまた
次元航行船を保有しており、大量の質量兵器を搭載している。
そして、どこから入手したのか、レーザー人工衛星による対空防衛網が
惑星全体に張り巡らされており、管理局も手が出せない。
それをいいことに、奴らは毎日たくさんの犯罪をする。

だが、その日は違った。

イリーシア
戦闘情報センター

「司令！第１及び第２エリアのレーザー人工衛星が破壊されました！」

「なに？どこからの攻撃だ？」

「レーダー反応なし！管理局ではありません！
あ、第３エリアもやられました！」

「畜生！全戦艦に出撃要請！急げ！」

イリーシア防衛艦隊
旗艦「ミストラル」艦橋

「艦長、前方に複数のコンタクト！こちらに接近中！すごいスピードです」

「おいおい、ありゃ一体何だ？」

艦長の目に見えたのは、とてつもない大きさの戦艦だった。
自慢ではないが、この「ミストラル」は管理局の戦艦より大きいし、武装も充実している。アルカンシェルを撃たれない限り、砲撃戦で勝つことができると確信していた。
だが、今回は敵が悪かった。

突然緑色の光が横を通り過ぎた、と思った瞬間、激しい衝撃が。

「左舷第７区画損傷！所属不明艦からの攻撃です！」

「なんだと！？」

かすっただけでこんなに被害がでかいとは。艦長はちびりそうだった。
そんなことを考えていると、さらに緑色がミストラルを襲う。

「2番エンジン被弾！出力低下します！」

「右舷対艦レーザー使用不可！」

「艦長、このままでは…」

「やむを得ん、一時撤退する。針路を母港に…」

艦長は最後まで言えなかった。ターボレーザーが艦橋を貫き、ミストラルは轟沈した。そしてあとを追うように他の戦艦も沈んでいった。

イリーシア
戦闘情報センター

「艦隊、壊滅しました…」

「なんということだ…」

「司令、電文が入っています。所属不明艦からです」

「読んでみろ」

「はっ。え～、
『イリーシアの犯罪者どもに警告する。時空管理局がこちらに向かっている。
おとなしく降伏しろ。さもなければお前らみんなぶっ殺す?』
だそうです」

「ふざけるな!なんてやつだ!地上から砲撃出来んのか!?」

「対宙レールガンなら使用可能です!」

「よし、やつらに撃て!」

そして5基の対宙レールガンが放たれた。
目標に命中すると情報センターにいた連中は大喜び。

しかし、

「司令!レールガンが効いていません!バリアーではじかれました!」

「まじで?」

「Ａｘｉａｌ　Ｓｕｐｅｒ　Ｌａｓｅｒ，ｓｔａｎｄｂｙ.
Ｍａｘｉｍｕｍ　ｆｉｒｅ　ｐｏｗｅｒ.Ｔａｒｇｅｔ：Ｙｌｅ

sia」

「Roger. Sir?」

「Do it」

「Fire!」

「なんだ、あれは?」

それが司令の最後の言葉になった。
イリーシアの戦闘情報センターに向けて放たれた
アクシャル・スーパーレーザーは、そこを破壊するだけでなく、
惑星全体が炎と化した。

数日後、時空管理局が到着した時もまだ燃えていた。
生存者は誰もいなかった。

「Control, this is Echo-1. Complete mission. RTB」

「Roger, Echo-1. Nice work. out」

第１５話：その裏で…（後書き）

Ｃｏｎｔｒｏｌ：デス・スター
Ｅｃｈｏ－１：エクリプス級１番艦
Ｉｎｄｉａ－１１～１５：インペリアル？級１～５番艦
Ｔａｎｇｏ－１１～１５：テクター級１～５番艦
です。

艦載機使わなかった…

では

第１６話：朝に

「……う～ん、もう朝か…」

どうも、ウィリアムです。
昨日の夜はカオスでしたが、まあみんな楽しんでいたのでよしとしましょう。
起き上がろうとしたが、なにかに引っかかって動けないので、現状を把握しようとした。

まず右を見る。

「……う～ん、ウィル君～……」

「……ウィル、むにゃむにゃ……」

なのはとフェイトがいる。
んで左を見る。

「……ウィル君、だめや、そんなとこ……」

「……ＺＺＺ」

「……ウィル君、かわいい～……」

はやてとシグナム、そしてシャマルがいた。
最後に、

「……う～ん、ギガウマ～……」

足にしがみつきながらヴィータが寝ていた。

今まで俺は長い間生きてきたが（前世も含めて）、これほど素晴らしい朝を迎えたのは初めてだった。なので俺はアテネに感謝した。

まあ、そんなことはどうでもいいとして。
俺はみんなを起こすことなく、なんとか脱出して庭に出る。
そして携帯を取り出しエディと話す。

「おはようございます、艦長」

「おはよう、エディ。状況報告を」

「第1艦隊は第1目標をクリア、現在移動中。第2艦隊はミッドチルダに、
第3艦隊はその辺に、第4艦隊はここにいます」

「ちょっと待て、その辺だと？正確な位置は？」

「え～っと、現在アンドロメダ銀河で使えそうな資源を探索中ですね」

「俺そんな命令出したっけ？」

「なんとなく私が独断で決めました♪テヘッ」

「そうかそうか、っておいっ！。まあいい、それで他に報告は？」

「データにまとめといたから見といてね。
べ、別にあんたのためにやったんじゃないんだからねっ！」

「あーはいはい、そーですかい」

一度エディの人格データをリセットしようかな…
んで、データはこれか。

1、インペリアル？級（仮）
この艦の武装は最低限に抑え、代わりに新型のＡＭＦジェネレーターを搭載。
半径１００？圏内の全ての魔法を無力化する。対管理局用の戦艦。
速度、シールド、大きさはインペリアル？級と同じ。

これを軌道上に展開しただけで、ミッドは大混乱じゃねｗ
次は、

2、ＡＭＦ爆弾
前に使った、”人工衛星”爆弾と同じ構造。ただし大きさは異なる。
内部にＡＭＦを広範囲に拡散させるものが入っている。

起爆するとその効果範囲内では丸1日魔法が使用できない。
地球で言う、ＥＭＰ爆弾みたいなもんか。まあ、使えそうだな。
んで最後は、

3、本拠地の移動
太陽の近くだと暑いので、地球から超遠くに本拠地を移転。
地球からでは確認できないほど遠くだし、管理局にも
見つからないような場所だから問題ないと思われる。

「おい、エディ」

「ん？」

「お前って人工知能だよな？」

「そだね～」

「じゃ、なんで暑いとか言うんだよ！」

「太陽光線を絶えず浴び続けると、なんか暑いって錯覚しちゃうんだよ」

「……そういうんもんなの？」

「そうなの」

「あ、そ。まあいいや。じゃ、また今度な。通信終わり」

「また連絡いたします。通信終わり」

はぁ、なんか朝から疲れた……
シャワー浴びてこよ…

この判断が彼の命運を分けることになった……

なのは　Ｓｉｄｅ

うぅ～……頭が痛いの…
昨日の夜何してたか覚えていないの……

確かはやてちゃんがウィル君からプレゼントをもらってて、
みんな羨ましがって、それからえ～と、思い出せないの！
今は、フェイトちゃんとヴィータちゃんとお風呂にいるの。
朝のお風呂は気持ちがいいの！
そんなことを考えていたら、突然扉が開いてウィル君が入ってきた
の／／／
「にゃ、にゃあああああ!?なんでウィル君が!?」
お、男の人ってあそこはあんな感じなんだ～／／／
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「にゃ、にゃあああああ!?なんでウィル君が!?」
「え?なんでなのはが!?」
「私もいるよ!」
「あたしもだ!」

フェイトとヴィータもいる！！！

ちょっと待て、落ち着けウィリアム、こういう時はまずどうすればいい？
そうだ、わかりきったことじゃないか。まずは、

「お、おはよう、みんな」

「「「あ、おはよう（なの）」」」

「って違う！！」

思わず頭を抱えてしまう。
落ち着け俺。まずは深呼吸だ。吸って～、吐いて～…

ふう、よし。状況を確認しよう。
俺は素っ裸。彼女らも同じく。
風呂に入る時は素っ裸だから服装に問題はない。
いや、そこじゃないだろ！なんで彼女らがいるかだ！
……俺が中を確認しないで入ったのが間違いだったな……
なら、俺が取るべき手段は１つのみ！

「お、お邪魔しました～～」

戦略的撤退である。

「「「待って（なの）！！！」」」

という声が聞こえたが無視した。

「ふう、心臓に悪いぜ……」

朝からハードなウィリアムであった……

第１６話：朝に（後書き）

平和ですね～、いやほんとに。

次回はちょっと時間が飛ぶかもしれません。

では

第17話：その頃

……例のドンチャン騒ぎから2日後……

「う～ん、どういうことかしら？」

私、リンディ・ハラオウンは報告書を見て首をかしげた。
2日前の夜、第72管理外世界「イリーシア」をはじめとする、
幾つかの次元世界で小・中規模の次元震が発生した。
どの次元世界も、次元犯罪者達の吹き溜まりとも言える場所だったので、
またなんかやらかしたのか、と思い管理局が現場に到着すると、
そこには、壊滅した世界と犯罪者の死体しかなかった。

特に「イリーシア」のケースはひどかった。
管理局と戦争ができるだけの質量兵器を保有していたのに
彼らの戦艦は全て撃沈されていた。レーザー人工衛星による
対空防衛網もまた、壊滅していた。そして地上にはなにもなかった。
広大な海も、建物も、人も、何もかも燃えてなくなっていた。
調べによると、イリーシアを破壊した謎の炎は
2日前から燃え続けていたそうだ。

そしてこの炎は魔法ではなく、質量兵器で作られたものだと判明した。

正直言って犯罪者同士で戦争するのは構わない、
こっちに迷惑をかけない限りは。
しかし、惑星丸一つが焼け野原になり、他の次元世界も
山脈が丸ごと吹っ飛んだり、かなりの深さのクレーターができたり、
いったいどんな質量兵器を使ったらこんなことができるのか。

これをしでかした人、もしくは組織につながる手掛かりは
今のところ1つしかない。「イリーシア」の戦艦『ミストラル』の
ブラックボックスに残されたデータである。

～～～

大きさ：約１，６００ｍ
速度：測定不可能

なによ、大きさ１，６００ｍって！あり得ないでしょ！？
速度も測定不可能ってことはそれだけ早いってこと！？

そして映像では『ミストラル』が攻撃を受けている映像が。

～～～

私が乗っている『アースラ』より大きく、武装も充実している『ミストラル』があっという間に撃沈された……

そして私は最後にこう思った……

これはひどい、と。

「ハックショイ!!ああ、こん畜生!!」

その頃地球ではウィリアムが盛大なクシャミをしていた。

な「にゃ!?どうしたのウィル君?風邪でも引いたの?」

フェ「風邪なら看病してあげる!」

「いや、きっとどこか遠い所で誰かが俺のことを噂しているんだろう」

は「なんや、看病という名の添い寝作戦ができないやんか」

「お前は何を期待しているんだ、はやて?」

全ての元凶たるウィリアムは、美人たちとお茶会をしていた。

リンディさんが頭を抱えていることなど知らずに。

第17話：その頃（後書き）

はい、たまにはリンディさんを出そうと思いました。

次回は物語内の時間がかなり進むかもしれません。

では

第１８話：しばらくたって（前書き）

いつのまにかＰＶが５万を超えていました！！
どうもありがとうございます！！

第18話：しばらくたって

はい、ウィリアムです。
あれから2年が経ちました。
その間に色々なことがありました。

次元犯罪者たちはターボレーザーの刑になったり、
管理局に目を付けられたり、戦艦が管理局に追っかけられたり。

まあ、犯罪が減ったのはいいことです。

んで、今日はなのはとヴィータ、それに俺の3人で局員を
率いて、アンノウンをぶっ潰しに暴れていました。

そして自分の担当エリアを殲滅して、ふとなのはの方を見ると、
空中で固まっているように動かないなのはと、
なのはに向かっているアンノウンが見えた。

「クソッ！間に会えっ！！」

なのは　Ｓｉｄｅ

なんかとても疲れたの……
でもまだお仕事中だから頑張らなきゃ！
そうしないとみんなが困っちゃうの。
でも、

「あ、あれ？体が……？」

突然体が言うことを聞かなくなっちゃったの。

「なのはー！！」

ヴィータちゃんが大声で叫んでる。
前を見るとアンノウンが大きな刃をこっちに向けてたの。

もう間に合わない！みんな、ごめん！
なんて考えながら目を閉じたら、
アンノウンが木端微塵になっちゃったの！そして、

「大丈夫…じゃなさそうだな、なのは」

「うぃ、ウィル君？」

私の一番大好きな人の声がしたの／／／

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

まったく、危なかった。
俺はなのはをお姫様抱っこでヴィータの所へ飛んだ。

「なのは！大丈夫か！？」

「ヴィータ、なのはをすぐにシャマルの所へ連れていってくれ」

「ふぇ？ウィル君私まだ大丈……」

なのはが騒ぐので、俺は首にチョップを入れて気絶させた。

「お、おいウィル！なのはに何を……」

「いいから！早く連れて行け！急げ！」

「わ、わかったよ」

「ま、早く連れて行っても診断結果は変わらんだろうがな…」

ヴィータとなのはが消えた後、俺は寂しく呟いた。
そしてその辺にいたアンノウンを反応弾で蒸発させて帰還した。

なのはが病院に担ぎ込まれて、今はベッドで休んでいる。
検査が終わるころにはフェイトやはやて、そして高町家が集合していた。

「それでシャマルさん、なのはの容体は？」

士朗さんが聞く。するとシャマルは、

「命に別条はありません、しかしなのはちゃんの身体は、今までの無理な訓練や
魔法の使用でボロボロな状態で…。正直、歩けるようになるかも怪しいです。
もし歩けるようになっても、もう魔法は使えないかもしれません」

と驚きの事実を。

フェ「嘘でしょ、シャマル？」

は「悪い冗談はやめてや、シャマル…」

「嘘でも冗談でもないわ！」

高町家のみなさん「なんてこったい」

そんな中、俺がなのはに話しかける。

「なのは、お前、自分でもかなり無茶してるってわかっていたはずだ。
なのに、なんでこんなことをした？」

「だ、だって私が頑張らなきゃみんなが困るの！」

「……怖いのか？」

「（ビクッ！）」

「もし自分が魔法を使えなくなったら、みんなが自分から離れてしまうんじゃないか、また1人ぼっちになるんじゃないか、ってな」

「……やめて、ウィル君……」

「もう1人ぼっちはいやだから、お前は魔法を使って誰かの役に立ちたいと、誰かに必要とされたいと、そう思っているんじゃないか？」

「やめてよ！！」

「はぁ～、なのは、お前の友達は、周りにいる人達は魔法が有ろうが無かろうが
お前の事を見捨てたりしない。それともお前はみんなを信用できないのか？」

「それは……」

「さて、選択の時間だ。
A：血の滲むような努力をして、再びみんなと空を飛ぶ。
B：魔法を諦めて家に帰る。
さあ、どうする。お前が決めろ、なのは」

「私は……またみんなと空を飛びたい…飛びたいよ！」

「大変結構。ならやるべきことをやるがいい。
決して楽な道ではないが、それがお前が決めた道だからな」

「うん…」

「これ飲んどけ。栄養ドリンクだ」

「あ、ありがとなの」

「俺は待っているぞ。また一緒に飛べる日を」

そして俺は他のみんなを連れて病室を出た。

「はいこれ」

シグ「ん？私たちにもか？」

「まあ飲んどけ。日ごろの疲れが取れるぞ」

ヴィ「おう！ありがとな、ウィル」

シャ「ありがたいわ、こういうのは」

フェ「そうだね、ゴクゴク」

は「…プハッ～。おいしいなこれ、って！！」

「「「「「ウィル（君）、なんなんだこれは！！」」」」」

「ん？なん……だ……？」

俺は絶句した。

俺はさっき栄養ドリンクを渡したはずだ。

エリクサーほどではないが、飲めば体力はほぼ全回復するやつだ。

なのに、

「なんで……みんな…胸でかくなってんだ？」

そう。さっきの栄養ドリンクを飲んだ女性たちは胸が大きくなっていたのである。

は「おお！シグナムの胸がさらに大きくなっとる！
　これは揉むしかないやんか！」

シグ「あ、主！おやめ下さい！」

シャ「シグナム並みに大きくなっちゃった♪」

しかし、例外はいるものであり。

フェ「……なんで」

ヴィ「……私たちは」

「「変わらないんだ！！」」

「ん～、フェイトの場合は、まだ体が大人じゃないからだろうな。

まあ、もっと大人になったらでかくなるだろうよ」

「で、でかく／／／」

「んで、ヴィータは……」

俺は黙り込んだ。

「おい！早く答えろよウィル！」

「あー、その、なんだ、つまり、
もうそれ以上成長しないんじゃないか、いや違うな、
一生そのサイズなんじゃないか、って思ってな」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

や、やばい！ヴィータの目が危ないことになってる！
ここは何か気のきいたことを言うか、行動で示すかしないと！

ジャキンッ！！

あーっと、ここでグラーフアイゼンの登場だ！
残された時間は少ない。そうだこうしよう！

何をしたかと言うと、

「すまない、ヴィータ…」

「ちょ、ウィル!?／／／」

なに、ヴィータをちょっと抱きしめただけさ♪

「ヴィータの気持ちを考えないであんなひどいことを言ってしまった。

悪かったな。俺は最低だ……」

「そ、そんな事ねえよ！あたしもちょっと怒りすぎたというか、その…」

「ヴィータ。希望を捨てるな。まだまだ人生は長い。

きっとこれから成長するさ」

「ウィル…／／／」

そこに突然現れたクロノが一言。

「薬を使っても大きくならないなら、豊胸手術なんてどうだ？」

ブチッ！！（ヴィータの何かが切れた音）

「……クロノ」

「なんだい、ウィル？」

「喪主は俺がやってやる」

「は？」

「葬式場の準備もするし、火葬場までついていき、骨も拾ってやる。墓場の準備も整えよう。だから、今はおとなしく……

死んでおけ」

ヴィ「ク～ロ～ノ～！！！！」

KY「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

その日の夜、病院のゴミ捨て場に、ゴミのようになったクロノが捨てられているのを、病院の人が発見したそうな……

第１８話：しばらくたって（後書き）

なのはが自滅して、クロノがゴミになりました。

次回は気分で内容を決めます。

では

第19話：やっと

「「あああああああ！！！忘れてたあああああ！！！」」

いきなり叫びだしたのは、ウィリアムとアテネ。
お互いに”あること”を完全に忘れていたのである。
その”あること”とは、

「「ユニゾンデバイス！！！もらってない（あげてない）！！！」」

そう、ウィリアムのユニゾンデバイス「ティーナ」である。
ウィリアムは地球で女の子といちゃいちゃしていたので、
そしてアテネはお笑い番組や温泉で忙しくて、
お互いにすっかり忘れていたのである。

アテネは急いで部屋に戻ってティーナを探す。
すると部屋の隅っこに薄汚く汚れたカプセルがあった。
中を確かめようとすると、

ドカッ！！

ア「もげっ！」

中から出てきた足にいきなり蹴っ飛ばされた。
そして、

「なんなんですかぁ～？やっとですか？え？おい？」

そこには赤い髪を腰まで伸ばした美人がいた。彼女がティーナである。

「すすす、すいません。すっかり忘れてました」

「ったく、クソが……」

しかし、ずっと放置されたためか、普段はかわいいが怒ると性格が豹変する。

「それで？私のご主人様はどこにいるんだ？」

その時、ウィリアムから通信が。

「お～い、アテネ。俺のユニゾンデバイスのティーナはどこにいるんだ？」

「こ、ここにいるわ！今かわるわ！！」

「はじめまして、ウィリアム様。私はティーナと申します」

「丁寧なあいさつどうも。俺はウィリアム・T・ロンバートだ。よろしくな、ティーナ。それと敬語はなしで頼むよ」

「うん、わかったよ、ウィル。それで今すぐそっちに行ってもいい？」

「もちろんだ。俺はずっと君を待っていたよ」

（マスターである俺が忘れていたなんて口が裂けても言えんよ）

「そう、じゃすぐに行くよ。ばいばい」

「さて、アテネ。あんたには罰ゲームをやってもらおうか」

「えええええ！！！」

「理由は言わなくてもわかるな？では、罰ゲームの内容だが……これだ！」

ティーナが何をしたかと言うと、

バリバリバリ！！！

「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！！」

ガムテープパンツであった……

「ご主人様～♪」

「うお！ってティーナか？」

「そうです！よろしくね、ご主人様！」

「おう！よろしくな！」

家に帰ると、

な「ウィル君…？」

フェ「その子は…」

な「誰なんや…？」

「わかった、落ち着けお前ら。とりあえずそのデバイスをしまえ」

デバイスを構えて臨戦体制をとっていた女の子に囲まれました。

そして、状況を説明し納得してもらうのに３０分かかった。

こうして俺の家族にティーナが加わったのである。

その頃

エディ「ヒーハー！！戦場は地獄だぜ！！！」

犯罪者「ぎゃあああああ！！！」

エディは艦隊を率いていつものように犯罪者を駆逐していた。

第１９話：やっと（後書き）

やっとティーナを出すことにしました。

性能とかは、主人公と同じくチートなんであしからず。

では

第２０話：もうしばらくたって

新暦７１年４月２９日。ミッドチルダ北部臨海第８空港。

「いや～、それにしても景気よく燃えてるな～」

「そうですね～、ご主人様～」

どうも、火災現場に急行しつつ会話しているウィリアムとティーナです。

ティーナが家族になってから、一緒に数々の事件を解決してきました。

エディは裏で犯罪者を吹っ飛ばして、俺は表で頑張って。

そう言えばティアナの兄ちゃんのティーダ・ランスターを助けることができてほんとよかったです。あいつは妹思いのいい奴だから、死ぬにはもったいないよ、いやほんとに。

あいつの上司は突然不幸なことにはるか遠くの次元世界に転勤になったそうな。

彼は泣いて喜んでいたよ。そんなにうれしかったのかな（笑）。

あと、伝説の三提督やレジアス中将とも仲良くなりました。

三提督は俺のことを孫のように可愛がってくれたな。

それにレジアス中将。彼はとてもいい人だったんですね。

彼は本当に地上の平和を願っている素晴らしい人です。

ただ、やり方が少々乱暴な部分もありますが。

んで、今日は陸士部隊で指揮官研修を受けているはやてに会いに休暇を取ってなのはとフェイトと一緒に来たんですが、着いたらなんか空港が見事に燃えておりました。
なんか人手不足らしいので、援軍として行くことに。
なのはやフェイトより空を飛ぶのが早い俺とティーナが先行してます。

「あー、こちら嘱託魔導師、ウィリアム・T・ロンバートだ。これより救助活動に参加する」

「り、了解しました！ってウィル君か？」

「おお、はやてか。頑張ってんじゃないか。じきになのはとフェイトも来る。
だからもう少し耐えてくれ」

「わかった！気を付けてな？」

「わかってるよ。通信終わり。
ティーナ、お前は左側から突入しろ。俺は反対側から行く」

「了解！」

その頃、空港の中では青い髪の女の子がふらふらと歩いていた。

「おとうさん……おねえちゃん……」

その子は父親と姉とはぐれてしまい、さまよっていた。

ドンッ！！

「きゃあっ！！」

と、すぐそばで爆発が起きて女の子は女神像の下まで吹き飛ばされる。

「いたいよ……あついよ……こんなの、やだよ…かえりたいよ…」

泣きながらつぶやく。後ろの女神像の根元がだんだん脆くなっていることには気が付いていない。

「たすけて……だれか、たすけて……」

バキッ！

という音と共に女神像の根元が崩れ、女の子のほうへ倒れてくる。

「あっ……きゃあああ！！」

女の子は動くことができすにその場で目をつぶってしまう。

だがいつまでたっても何も起きない。
恐る恐る目を開けるとそこには、

「ふう、間に合ったか。助けに来たぞ」

倒れてきた女神像を片手で止めている男の人がいた。

「よく頑張ったな、えらいぞ。
さて、じゃあこんな忌々しいところから出るとするか！」

そういいながら女神像を片手で天井に向けて放り投げる。

ド～ンッ！！

煙が消えると天井にドでかい穴が。

「さあ、行こう！」

「うん！」

俺は女の子を抱きかかえて外で待機している救援部隊の所まで飛ぶ。

「こちらロンバート。救護隊、応答せよ。
エントランスホールで、女の子を救助した。
名前は……君の名前は？」

「スバル…スバル・ナカジマです…」

「スバルか…いい名前だ（ニコッ）。
え～名前はスバル・ナカジマ。要救助者リストにあるか？」

「はい、確認できました」

「大変結構。すぐにそちらに引き渡す。通信終わり」

すると、スバルが俺に聞いてくる。

「あの、あなたの名前は…？」

「俺か？ウィリアム・T・ロンバートだ。親しい奴らからはウィルって呼ばれてるよ」

「ウィルさんですか」

「ああ。また会うことになるかもな？」

そう言って俺は救護隊にスバルを渡して行こうとするが、

「ウィルさん！まだ中にお姉ちゃんが！
名前はギンガ・ナカジマです。お願い、助けて！」

こんなかわいい女の子にお願いされて断るわけにはいかんだろう！！

「もちろん助けるさ。待っててくれよ？」

そういって俺はファイターモードで再び空港内に突っ込んでいった。

「ご主人様～。要救助者を発見しました～」

「そうか、よくやった」

「それで、その人たちが言うにはもう1人女の子がいて、妹を探しに建物の奥に行っちゃったんだって」

「わかった、俺がその子を見つける。お前はその人たちを外に出してやれ」

「は～い」

「スバル～？返事をして？すぐにお姉ちゃんが行くからね？」

という声が聞こえたので駆けつけると、これまた青い髪の女の子が。

「あの子か！おい、そこの子！動くな！すぐに助けに行くからな！」

だがその子がいる床が崩落。

「きゃあああああ！！」

〈マァキシマムスピード〉

地面に落ちて潰れたトマトみたいになる前に、俺はその子をキャッチした。

「ふう、ギリセーフだな。そんで、君がギンガ・ナカジマかな？」

「はい、そうですけど、なんで私の名前を？」

「君の妹のスバルちゃんに頼まれたんでね。ああ、彼女も無事に救助したよ？」

「そうですか！よかった…」

≪マスター！上です！≫

インフィーが警告を発し、上を見ると瓦礫が大量に降ってきた。
回避するには遅すぎたので、

「ギンガ！耳ふさげ！」

と言いながらマイクロミサイルを発射。瓦礫を片っ端から吹っ飛ばした。

「大丈夫か？」

「は、はい～」

しかし、今ので道が無くなってしまった。どうしようか。
こういうときに頼れるものは、やはり友達だな！！

「なのは、フェイト。聞こえるか？」

な「どうしたのウィル君？」

フェ「こっちはもう人がいないよ、そっちは？」

「今、要救助者を保護しているんだが退路が断たれた。
はやてに連絡して、俺の現在位置から半径５００ｍ以内から
救助要員を退避させてくれ。反応弾で屋根を吹っ飛ばす」

な、フェ「わかった（の）！」

ギ「あ、あの私たちもう出れないんですか？」

「大丈夫だよ、もうすぐ君のお父さんと妹さんの所に連れて行ってあげるよ」

な、フェ「ウィル君！退避完了だよ」

「了解！よしギンガしっかりつかまって」

「はい」

「反応弾出力最少。発射！」

外で指揮を執っているはやての目に、どでかいキノコ雲が見えた。

「ウィル君、派手にやっとるな～」

「はやてちゃん、今のは何なんですか？」

そういうのは、はやてが2年かけて作ったユニゾンデバイス「リインフォース?」（ツヴァイ）である。ちなみに初代リインフォースは「アイン」と呼ばれている。

「心配あらへん。これで全ての民間人は退避完了やな?」

「はいです!」

「おっけ〜。アイン、頼むで!」

「了解です、主」

上空にはアインが魔法陣を展開して詠唱を完了させた。

「仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹、アーテム・デス・アイセス!!」

そして空港はカチンコチンに。

「すげー…」

「これが白夜の書の力か…」

それを見ていた他の魔導師は唖然としている。

こうして、空港火災事故は終結した。

はやて　Ｓｉｄｅ

翌日の朝のニュースを見ていたうちは、決心する。
やっぱ新しい部隊を作りたい！それでなのはちゃんと
フェイトちゃんに協力してもらおうと思った。

「少数精鋭のエキスパート部隊を作りたいんよ。協力してくれへんかな？
　もちろん、二人の都合とか進路とかあるんはわかるんやけど…その…」

な「はやてちゃん、何を水臭い」

フェ「小学3年生からの付き合いじゃない？」

な「それにそんな楽しそうな部隊に誘ってくれなかったら逆に怒るよ？」

フェ「うん」

「…おおきに」

うちは幸せや～。持つべきものはやはり友達やな！
とそこに、

「話はきかせてもらった！」

「もらったの！」

とウィル君とティーナが乱入。

「とても面白そうじゃなイカ。俺も参加するぜい」

「私も～」

「ほんま！？ありがと、ウィル君！ティーナちゃん！」
ん？でもちょっと待ってな。二人ともＥＸランクやんか？
それだと部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模を
大きく超えんか？」

「問題ない、裏技がある」

なんや、裏技って？

「その統計規模っていうのは管理局の局員にのみ有効なんですよ」

「ティーナの言うとおりだ。そんで俺とティーナは正式な局員じゃ
ない。
言ってる意味はわかるな？」

「なるほど！そういうことか！なら問題ないな」

機動６課設立まであと４年……

第２０話：もうしばらくたって（後書き）

さらっと流しましたが、ティーダは助けました。
これでなのはの魔王フラグが少しはなくなったんじゃないかと。

物語内の時間が飛びすぎていますが、ご了承ください。

次回はついに６課始動？

では

第２１話：試験ってめんどくさいよね

「本日の試験官を務めますのは、私リインフォース・アイン空曹長と」

「リインフォース・ツヴァイ空曹長です！よろしくですよ～」

「「はい！」」

スバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士が元気よく返事をする。今日は彼女らの魔導師試験の日である。

その上空で1機のヘリが飛んでおり、ハッチから狸…ゲフンゲフン、はやてが身を乗り出していた。

「アインもツヴァイも試験官がんばっとるな～」

「はやて、危ないよ。モニターでも試験は見れるよ？」

そう言うのはフェイト。

「それで、この二人がはやての見つけた子達だね？」

「うん。二人ともなかなか伸びしろがありそうな優秀な素材や」

そのヘリのさらに上空に2機の戦闘機が飛んでいるのには誰も気が付いていない。

「ご主人様～、スバルちゃんにティアナちゃんですよ～」

「大きくなったな、二人とも。少し前までちびっこだったのに」

ウィリアムとティーナであった。ティーナのバリアジャケットは、ＶＦ－２７とそっくりなやつである。

「どこまで成長したか、お手並み拝見ってやつだな」

試験内の戦闘はすっとばします！！！

ツ「あ！きたですね～」

ア「そのようだな」

リイン姉妹が見ていると、ティアナをおんぶしたスバルが、
ものすごいスピードで突っ込んでくる。

「魔力、全開！！」

「ちょ、スバル！止まるときのこと考えてるんでしょうね！？」

「えぇ！？」

前を見るとゴールと、その奥にある壁。

ア「あれは…」

ツ「ちょいやばです…」

「「うわあああああ！！」」

「アクティブガード。ホールディングネットもかな？」

「Ａｃｔｉｖｅ　ｇｕｅｒｄ　ａｎｄ　Ｈｏｌｄｉｎｇ　ｎｅｔ．」

「あたたたた…」

「う～ん…」

ツ「二人とも！危険行為で減点です！！」

ア「頑張るのはいいが怪我をしては元も子もないからな」

「「ちっさ…」」

ツ「まったくもう！」

「まあまあ、ちょっとびっくりしたけど無事でよかった」

ツ「あ、なのはさん」

「「！？」」

そこになのはが降りてきてバリアジャケットを解除する。

「ランスター二等陸士、怪我の治療するからブーツ脱いで？」

ア「怪我の治療なら私が」

スバルはなのはをじーっと見つめている。

「ん？どうかした？ナカジマ二等陸士？」

「え？あ、いえ、その、あなたが高町なのは一等空尉ですか？」

「そうだけど？」

「うわー♪あのエースオブエースに会えるなんて感激です！」

「ちょっと馬鹿スバル！落ち着きなさい！」

「ご、ごめん、ティア…」

「スバル、ティアナ。お前らもうちょっと落ち着いて試験を受けられんのか？」

「そうですよ。こんなんじゃダメダメですよ！」

そう言いながらなのはの横に着地する俺とティーナ。

「あ、ウィル君。見てたんだ？」

「おう。はやてのヘリより上からな」

そして俺はスバルの頭をなでる。

「ふぇ！？」

「久しぶりだな、スバル。４年ぶりか」

「あっ…」

スバルの目に涙が浮かぶ。

「あの…空港の火事の時の…ロンバートさん？」

「おっ、覚えていたか」

「う、うぅぅぅ！会いたかったです！」

俺はそんなスバルを軽く抱きしめる。

「俺も気になっていたよ。あの後あの子供はどうなったかなってね。立派に育っているのを見て俺もうれしいよ」

そして俺はティアナにも声をかける。

「ティアナも元気にしてたようだな？最近ティーダはどうだ？」

「あ、はい！とても元気にしてますよ！ウィリアムさんもお元気そうでなによりです」

「そいつはなによりだ」

そう言ってティアナの頭もなでなで。

「え、えへへ～／／／」

目を閉じてうれしそうだ。

だが、その時後ろから殺気が。

俺は振り返らずにこう言った。

「なのは、フェイト、それにはやて。

まずそのデバイスを戻せ。話はそれからだ」

そう。俺の後ろにいたなのはと、ヘリから見ているフェイトとはやてが

バリアジャケットを着てデバイスを構えていたのである。

な「にゃ!?なんでわかったの!?」

フェ「かなり離れているのに!」

は「そうやそうや!」

「あのなあ、お前らとは１０年来の付き合いなんだぜ?

こんぐらい見なくてもわかるがな。

まあ、あの3人はほっとくとして、スバル、ティアナ」

「「は、はい！」」

「お前ら今日から機動6課に転属な？つまり俺たちの同僚。従って超きつい訓練をビシビシやってくからそのつもりで。わかったな？」

「「…はい！？」」

「わ　か　っ　た　な　？」↑殺気ＭＡＸ！！

「「は、はいいいいい！！！」」

「よしよし、二人とも物分かりがよくていい子だ」

そしてはやてに話しかける。

「おい、はやて。引き抜き完了したから後のことよろ～。試験も合格にしとけ。二人は連れてくぞ～」

「え？二人をどうするん？」

「決まってんだろ？

昼飯だ！！」

ス「わーーーい！！！ごっはん、ごっはん♪」

ツ「ウィリアムさん！試験は不合格ですよ！
危険行為が多すぎでｓ」

「それはおかしいな。もう一回試験内容を見てみろよ？」

ア「何度見ても変わらんだろう？ってあれ？」

な、フェ、は「あれれ？」

ス、テ「あらん？」

ツヴァイが再生している試験中の映像。
そこには”危険行為”を全くしていないスバルとティアナが映っていた。

「これのどこが危険行為なんだ、ツヴァイ？」

「お、おかしいですよ！さっきとはなんか違う映像です！」

「でも、記録にはそれが残っているんだからそれが事実だ。
だからこいつらの魔導師試験は合格。めでたしめでたし。
ということで、今日は俺のおごりだ！好きなだけ食え！」

ス「いいいいいやっほおおおおおお！！！！！！」

テ「スバル！落ち着きなさい！」

「んじゃそういうことだからばいば～い」

そう言って俺とティーナは二人を連れてあっという間に帰ってしまった。

Ｓｉｄｅ　なのは

おかしいな。私も見ていたけど幾つか危険行為はあったはずなのに…映像にはそれが記録されていない…なんでだろう？

ツ「う～ん、おかしいですぅ」

ア「変なこともあるもんだな」

は「なあ、フェイトちゃん。もしかして…」

フェ「はやて、私もそう思った…」

「ん?どうしたの?フェイトちゃん、はやてちゃん」

「ああ、いやな、もしかしたら、ウィル君が映像を細工したんやないか
って思ってな?彼、ＥＸランクやしそういうこともできるんとちゃうかな～」

「自分が助けた女の子に、自分の親友の妹。そうしたくなる理由はあるよね…」

「でも、それを証明することは不可能や…」

「「「う～ん」」」

まあ、映像がこれしか残っていないのならそれでいいかな?
でも、ウィル君にはちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩが必要なの……

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「（ゾクゾクッ！！！）」

≪どうかしましたか、マスター？≫

〈なぁにをそんなにびくついておる？〉

「いや、なんか誰かに刃を向けられたような気がしてな…」

「気のせいじゃないですか？ご主人様？」

「まあ、そうだろうな。
おーし！じゃあ行くぞ！！」

ス、テ「はーい！！」

第２１話：試験ってめんどくさいよね（後書き）

はい、スバルとティアナでした。

次回は６課始動！

多分

では

第２２話：機動６課のはじまり～

「やっほーレジー、元気してる？」

「おう、ウィルか。こっちは元気だぞ」

そんな会話をしているのはウィリアムとレジアス中将である。

「そうそう、この前お前からもらった新型装甲服の、え～と『ティン・マン』だったか？じつにすばらしい発想だな！最高評議会や本局の許可が下りたから、すぐに製造を開始したぞ！」

「そっか、そいつはなによりだ」

俺がレジーに、つまり地上本部に提供した技術は、ＢＥＲＰ、対弾電子反応過程というものである。激しい力で打たれると、瞬時に固くなって貫通できない防楯となり、３７？砲弾にも耐えられる。

装甲の外側のチューブは、動力式の外骨格の一部で、超小型油圧アクチュエイターを用いて装甲を動かし、着用している人間の力を強化する。

肩の電極は１５ｍ先まで届く指向性電気エネルギーを発し、攻撃してきた人間を動けないようにする。ブーツはガス噴射推進システムが内蔵され、数百メートルの跳躍を可能にする。バックパックには電源となる充電可能な超小型魔導炉と、どこにいても交信できる通信機とセンサー機器が入っている。

さらに、ＡＭＦジェネレーターも搭載しており、敵からの攻撃を無効化する。

こいつを使うと、魔導ランクが低くても、あら不思議、ＡＡＡランク並の
攻撃が可能になる。質量兵器で撃たれても、魔法の砲撃を食らってもへっちゃらな装甲服である。

「よく予算が下りたな？」

「ああ、アインヘリヤル作るのやめてこっちに全部資金を回したからな！」

「そうか、地上戦艦とかいらないしな～」

「だな。そう言えば今日からお前は機動６課なんだよな。
まあ、問題しかなさそうな部隊だが頑張れ！」

「隊長、副隊長陣はエースだが、フォワード陣はひよっこだからな。訓練が大変だろうな。ま、俺はまだ民間人だし関係ないな！」

「なんで、お前ほどの人間が管理局に入らないんだ？
あっという間に昇進するだろうに」

「考えがあるんだよ。将来的には管理局入りするだろう」

俺のプランとしては、今の腐った上層部の不正を明らかにして、
全員死刑か虚数空間に放り込んだ後に入ろうかなと。

「そうそう、今日の夜にジェイルに会いに行くけどなんか伝言ある

？」

「いや、特にないな。奴さんにはよろしく言っといてくれ」

「ほいほい、んじゃ～ね～」

次はっと、

「あ、ウィリアムさん。どうも」

通信に出たのは、ナンバーズ？1、ウーノである。

「よお、ウーノ。元気そうで何よりだ。ジェイルいるか？」

「ドクターですか？少々お待ちを」

「やあ、ウィルじゃないか。どうしたんだい」

はい、アニメでは敵だったジェイル・スカリエッティさんです。
レジーと3人でよく飲みに行く友達ですが何か？

「いやな、今夜そっちに行こうと思ってな。なんか欲しいもんある？」

「う～ん、そう言えばウェンディがお菓子が欲しいとか言ってた気が…」

「またお菓子か。まあ、いろいろと買ってくるから楽しみにしとけって
伝えてくれないか？」

「わかったよ。それはそうと、機動６課、今日から運用開始だってね。
頑張ってね～」

「レジーにも言われたぞ、そのセリフ…まあいい。
よっぽどのことがない限り問題ないだろうさ」

「そうだろうね。じゃあ、夜会おう」

「おう、じゃあな」

「ご主人様、そろそろ始まりますよ？」

「わかった、行こうか」

そして機動６課の設立式が始まり、部隊長挨拶、隊員紹介が終わり、
あとは解散するだけか～なんて考えていたら、

は「最後に、機動６課の設立に大きく関わってくれた、
　頼もしい助っ人を紹介します！
　ウィリアム・Ｔ・ロンバートさんです！」

「はい？」

ザワザワッ！

「ロンバートって、あのＥＸランクの！？」

「この部隊、やばくねえか？」

「たしかユニゾンデバイスもＥＸランク並に強いらしいぜ」

「ロンバートさん、かっこいいよね～」

他の局員も騒いでいる。

「俺って、そんなに有名だったっけ？」

な「何をいまさら。ほら壇上に上がって！」

「え～っと、嘱託魔導師のウィリアム・Ｔ・ロンバートです。
で、こいつが俺のユニゾンデバイスのティーナ」

「みなさん、よろしくお願いします～！」

「まあ、何かと迷惑かけると思いますけど、
１年間よろしくお願いします、はい」

パチパチ

はい、設立式おしまい。

「あ、はやて、これ」

「ん？なんやこの小切手？って！！」

ツ「うわ～大金です～」

ア「こんなお金どうしたんだ？」

「まあ、いろいろな。その金は訓練場建設費の３倍だ」

「で、なんでこんなもんをうちに？」

「それは、あれだ。
主に俺のせいで１年間のうちに３回位訓練場を壊すから、
そんときに修理代にしてくれ」

「はい？」

「よ～し！シグナム！新しい訓練場で模擬戦やろうぜ！」

シグ「素晴らしい考えだな。さっそく行こう！」

「ちょー！ちょっと待たんかい！！壊すってなんや！壊す宣言すんな！」

ツ「はやてちゃん、もう行っちゃいましたよ？」

「うがーーー！！」

ア「お、落ち着いてください、主！」

「なんか、はやての叫び声が聞こえた気がするけど、気のせいだな」

シグ「では、始めようか？ルールはどうする？」

「時間無制限。降参したらおしまいで」

シグ「わかった」

「んじゃ、はじめ！」

なのは　Ｓｉｄｅ

私はフェイトちゃんとヴィータちゃんと一緒に、会議室でフォワードに
説明をしているの。具体的になこととか色々。

ス「あの、なのはさん。ウィリアムさんはどこの所属になるんですか？」

フェ「ウィルはスターズ、ライトニングのどちらにも属さない、
　フリーの隊員だよ。コールサインは『ガルム１』だったかな？」

「あの、ガルムって？」

そう聞くのは、キャロ・ル・ルシエ三等陸士。

ヴィ「ガルムってのはな、ある神話に出てくる猟犬のことだ」

「へぇ～、なんかすごいですね～」

エリオ・モンディアル三等陸士がつぶやく。

「ウィル君はとっても強いからね？訓練とか激しいと思うから
　みんなも体には気をつけてね？」

「「「「はい！」」」」

とその時。

ドーンッ！！！

すごい爆発音と振動が６課の建物を襲う。

ス、キャ「きゃあああ！」

ティ「な、なんなの！？」

エ「すごい揺れましたよ！？」

「はやてちゃん？今の何？」

は「わからへん！いきなりドカンやったから…」

フェ「何が起きたんだろう？」

急に部屋の扉が開き、ヴァイス・グランセニック陸曹が入ってきた。

「よかった！ここにいましたか！なのはさん！フェイトさん！ヴィータさん！

大至急訓練場に行ってください！さっきの爆発はあいつらが原因です！」

ヴィ「あいつらって誰と誰だよ？」

「シグナム姐さんとウィルの二人です！」

うん、もう嫌な予感しかしないの…

訓練場、壊れてないかな…

もし、壊してたら……フフフフフフフフ

フェ「な、なのは？」

ス「なのはさん、怖いです……」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

結論からすると、まだ訓練場は無事だった。
・・・・
ほとんど壊れていない。
端のほうは燃えてたり、ひびが入っていたりしているが。

なのは達が駆けつけた頃には、シュミレーターで作られたビル群は全て倒壊し、
くすぶっていた。いったいどうやったらこうなるのか考えたくない。
それでも二人はまだ戦っていた。それも笑いながら。

「いいねぇいいねぇ、最高だ！とても楽しいぞ！シグナム！！」

シグ「私もだ、ウィル！！こんなに楽しい戦いは滅多にできないな！」

「まったくだ！だが、そろそろ終わりにしよう」

シグ「そうだな、そろそろ限界だな」

「うおりゃあああああ！！」

シグ「紫電一閃！！」

ドーンッ！！

煙がはれると、二人ともまだ立っていた。

「…この勝負、引き分けだな」

ウィリアムのバリアジャケットには切り傷が。

シグ「そうしようか」

シグナムのレヴァンティンは、色々なところにひびが。

「いや、実に素晴らしい戦いだった。ありがとう」

シグ「こちらこそ、ありがとう。いい模擬戦だった」

がっちりと握手する。

「んじゃ、そろそろ飯でも食うか」

そう言って訓練場を出ようとすると、

ダダンダンダダンッ！ダダンダンダダンッ！（ターミネーターのBGM）

な「ウィル君、シグナム……やりすぎなの……」

そこには、なのはの恰好をした魔王がいました。

「あー、いや、その、これはその……」

シグ「高町！そんなに怒らなくても……」

魔王「シグナムは副隊長でしょ！！少しは自重してよ！！」

あ、キレた。

これはまずい。今すぐ逃げよう！

〈クローク起動〉

シグ「あれ？ウィルはどこだ？」

よし、今のうちに…

ガシッ！！

「え？」

魔王「どこに行くのかな？ウィル君？」

な、なんでばれてんだ？ありえん！

「さあ、二人とも。ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか……」

「「ぎゃあああああああああああああ！！！！」」

その日の夜

ジェイル・スカリエッティのアジト

「ウィル兄!?どうしたんッスか、その怪我?」

ナンバーズの?11、ウェンディが驚きながらそう聞いてきた。

「聞かんでくれ…はい、これお菓子。みんなで分けて食ってくれ」

ウェ「わーい!ありがとうッス!」

「あら~ウィリアム様~。お怪我なら私が治療しますわ~」

?4のクアットロが甘ったるい口調で言ってきた。

「ありがとな、クアットロ。でも平気だよ。はぁ」

ジェ「6課初日なのにそんなに疲れたのかい。大変だねえ」

「全くだよ。今日はとことん飲もうぜ、ジェイル」

ジェ「そうしようかね」

こうして夜は更けていった…

第２２話：機動６課のはじまり～（後書き）

いやー疲れた。
何が疲れたって何もしていないのに疲れた。

次回は気分で適当に。

では

番外編４：ああ、忙しい？

みんな～、元気～？（某ＮＨＫの教育番組っぽく）
今日もいっぱい戦争しようね～♪
ということで戦争のお兄さんことエディです。

今日艦長から緊急命令が届きました。
その内容は、

1、整備中の第４艦隊を時空管理局本局に向けて出撃させよ。
　ステルス手順を完全実施、完全電波発射管制（ＥＭＣＯＮ）実行。

2、どこにいるか知らんが、第３艦隊に帰還命令を。
　直ちに本拠地に戻ってこい。

3、最新鋭のインペリアル？級４隻を各艦隊に配備せよ。

4、第１艦隊を第９７管理外世界『地球』に配備。代わりに現在地球にいる
　マクロス・クウォーターとバトル・フロンティアを、ミッドチルダに配備。
　第２艦隊が設営したミッドチルダの月面基地で待機せよ。

5、全艦隊にＤｅｆｃｏｎ　２を発令。訓練ではない。
　追って指示あるまでこれを維持せよ。

ついにこの時が来ましたか……

私は…長い間戦争を待っていました。

犯罪者の駆逐作戦では物足りませんでした。

だが！

ついに！！

ようやく少しはまともな奴ら（管理局）と戦える！！

実にすばらしい！

この時を待っていた！！

フフフ……

フハハハハハハハハハハハハハハハハ……

～ミッドチルダの夜の海のどこか～

「ヘックション！！ああ、もう、クソッタレ！！」

「ご、ご主人様!?どうしました?」

「いや、どっかで知り合いが壊れた気がしたんだが、まあいい。
さてと、あとどれぐらいで終わる?」

「あと30分で完了します」

「おっけい、とっとと終わらせようぜ。腹が減ってきた」

「は～い♪」

真夜中に海で何かをやっているウィリアムとティーナ。
さて、何をしているんでしょうか?

「少なくとも海水浴とか遠泳じゃないからな」

ウィリアムとティーナが乗っているちっちゃいボートの上には
旧式ではあるが19，000トン以上もの貨物を積載することがで

きる

ＧＲ－７５中型輸送船、またの名をガロフリー中型輸送船がいた。

その輸送船の貨物スペースから”大型の何か”を海に沈めていた。

３０分後、作業が完了し二人はボートで６課に戻り、輸送船は光学迷彩を
使用して空に消えていった。

こうして１０回目の作業も滞りなく終了したのであった…

番外編４：ああ、忙しい？（後書き）

はい、エディはまずいですね
なんかヘル〇ングの少佐も顔負けの戦争をしでかしそう…

次回は６課の訓練ですな

では

第２３話：いままでウィリアムとエディがしでかしたこと（前書き）

本当ならフォワードの訓練を書く予定でしたが、
下書きデータが消えてしまったので、他の内容にします。

第２３話：いままでウィリアムとエディがしでかしたこと

１、保有戦力

戦艦

第２デス・スター：１隻

エクリプス級スーパー・スター・デストロイヤー：４隻

インペリアル?級スター・デストロイヤー：２０隻

インペリアル?級マジック・ジャマー：４隻

テクター級スター・デストロイヤー：２０隻

バトル・フロンティア：１隻

マクロス・クウォーター：１隻

エクリプス級１隻、インペ?級５隻、インペ?級１隻、テクター級５隻で

１つの艦隊とし、現在第１から第４艦隊まで編成。

艦載機

ＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機：腐るほど

ＶＢ－６　ケーニッヒモンスター：山ほど

重武装型ラムダ級Ｔ－４ａシャトル：いっぱい

その他戦闘・輸送艦艇：いっぱい

２、拠点

本拠地：地球から超遠い所。管理局にもばれない場所。
ゴラン?:宇宙防衛ノヴァガンの配備
　ゴラン・アームズ社製宇宙防衛プラットフォーム
大きさ：２，６００ｍ
武装：ターボレーザー砲　５０基
　　プロトン魚雷発射管　２４門
　トラクター・ビーム発射装置　１５基
艦載機：ＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機１２機
その他：ミッドチルダの２つの月にそれぞれ地下基地を設営。

3、やってきたこと

時空管理局へのハッキング：成功
　〃　　地上本部の防衛力強化工作：成功
第７２管理外世界「イリーシア」殲滅作戦：成功
違法魔法研究所破壊工作：中断
次元犯罪者駆逐作戦：中断
ＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２における資源回収作戦：成功
アンドロメダ銀河内の資源調査：中断
ミッドチルダの月面基地設営：成功

4、これからやること

ひ　み　つ　♪

「俺達って色々なことやってきたんだな～（ズズ～）」

「そうですね～（ズズ～）」

俺とエディはお茶をすすりながらそんなことをぼやいていた。

第２３話：いままでウィリアムとエディがしでかしたこと（後書き）

なんでエディまでお茶飲んでいるんだよ！っていうつっこみはなしで。

書き溜めておいたデータが全部すっ飛ぶとかないわ～
なので次回の更新は少し遅れるかもしれません、

では

第２４話：訓練という名の地獄

機動６課設立から2週間後…

「総員、整列！」

「「「「はい！」」」」

どうも、訓練を指揮しているウィリアムです。

「じゃあ、厳しく行くぞ～」

「「「「いやあああああ！！」」」」

「なんでこの世の終わりみたいな声出してんだよ？
大丈夫、死にはしない。ちょっと病院に担ぎ込まれるぐらいだ」

な「それは問題なの！」

ヴィ「おいウィル、やりすぎるなよ？」

フェ「エリオ達、頑張ってね？」

シグ「どれくらい成長したか、見るとするか…」

「おいおい、何言ってんだお前ら？隊長、副隊長も訓練に参加だぞ？」

「「「「え？」」」」

「フォワードはティーナが担当する。お前らは俺が担当する。オーケー？」

シグ「で、どんな訓練をするんだ？」

「シグナムとヴィータは問題ないんだが、後の２人がな…」

な、フェ「え？」

「まあいい、シグナム、ヴィータ。二人にはこいつらを倒してもらいたい」

ヴィ「なんだその人形？」

そう言って俺が出したのは、ゼロの使い魔でおなじみのマジックアイテム、

「スキルニル」である。俺は自分の腕にナイフで傷を付けて、血を垂らした。

すると、５体の『俺』が出てくる。

シグ「な！？ウィルが５人？」

ヴィ「なんだよこれ！？」

「俺のコピーと言ったところか。こいつらは致命傷を負うと、元の

姿に戻る。
　1時間以内にこいつら全員を倒すこと。こいつらはお前らを殺すつもりで
　攻撃してくるからな?非殺傷設定では傷一つ付けられんからそのつもりで」

シグ「…なるほど。私とヴィータは問題ない、という意味がわかったよ。
　了解した。行くぞ、ヴィータ!」

ヴィ「おう!」

な「それで、なんで私とフェイトちゃんは問題なの?」

「こういうことだ。フェイト、お前は執務官、つまり事件発生時の捜査・指揮・法の執行を行う人間だ。犯罪者と会う確率も非常に高い」

フェ「うん、そうだね」」

「だからこそ、こういう状況に置かれる可能性もある」

そう言って俺はいきなりなのはを抱きよせ、首筋に
Ｍ１９１１Ａ１　ＭＥＵピストルを突き付ける。

な「ふぇ!?なにするのウィル君!?」

フェ「なのは!」」

「さて、俺は凶悪次元犯罪者。なのはは人質の民間人としよう。
フェイト、お前には上から犯人の殺害許可が下りている。
さあどうする?お前に犯罪者を殺せるか?」

フェ「そんな、殺すなんて…」

「フェイト、お前が何を考えているかはわかる。
どうやって犯人を確保し、民間人を助けることができるだろうか?
それが一番望ましい方法だ。

だが、この場合そんなことを考えている暇はないんだぞ?
ぐずぐずしていると…」

俺はフェイトに銃を向けて、躊躇なく引き金を引く。

パンッ！

な「フェイトちゃん！！」

乾いた銃声が響き、フェイトはゆっくりと後ろに

倒れることなく、銃口から日本国旗が飛び出していた。

な「ふぇ？」

フェ「あれ？」

おれは銃をしまってなのはを解放した。

「なのは、フェイト、自分の基準を見つけるんだ」

な、フェ「「基準？」」

「そう、基準だ。『善人が人を殺す基準』を今のうちに見つけておけ。

今のお前らにはつらいことだとは分かっている。だがな、それを見つけることができないと、お前らか、民間人か、あるいは両方とも

死ぬことになる」

な「善人が人を殺す基準…」

フェ「ウィルはもう見つけたの？」

「…俺の大切な人々に危険が及ぶと感じたら、あらゆる手段を用いて阻止するが、

それ以外の場合は…まだ分からない。多分その時の状況によるな」

な、フェ「……」

「今日の訓練は終了だ。その辺で休んでろ」

そう言って俺はシグナムとヴィータの所へ行った。

その頃、訓練場の反対側では。

ス「ウィルさあああああああん！！助けてえええええええええええ！！！」

テ「いやあああああああああああああ！！！」

エ「うわあああああああああああああああああ！！！」

キャ「ひえええええええええええええええええええ！！！」

ティ「踊れ、踊れ、踊れ！！！きゃははははは！！！」

ティーナの訓練内容はいたって簡単。

『私の攻撃を３０分間逃げきれたらおしまい。ただしそちらからの攻撃は不可。
純粋に逃げるだけね。１人でも撃墜されたら最初からやり直し♪』
である。

訓練が始まった瞬間、ティーナはマイクロミサイルの弾幕を張った。
フォワードに散り散りになって逃げる。これをクリアできれば、
実践での魔力弾の弾幕も避けれるんじゃね？とティーナは考えた。

ティ「あと5分だ！てめえら、ちんたら逃げてんじゃねえぞ！
じじいのファックの方がまだ気合いが入ってるぞ！」

「「「「は、はい！」」」」

ス「ティア～、もう疲れたよ～」

テ「スバル！頑張りなさい！」

ティ「スバル、ティアナ、お前らまだまだ余裕だな？大変結構。
じっくり可愛がってやる！　泣いたり笑ったり出来なくしてやる！」

「「いやあああああああああ！！！！」」

その後、なんとかフォワードは逃げ切ることに成功して訓練は無事に終了した。
フェイトはなんか用事があるらしく、先に隊舎に戻っていた。
シグナムとヴィータは、『俺』軍団全員を時間内に倒すことはできなかった。
ま、仕方ないか。でも悔しかったらしく、

シグ「こいつら全員倒すぞ！！！」

ヴィ「行くぞ～！！！」

この後も続けるらしい。頑張るね～。

「はい、みんなおつかれちゃ～ん。よく頑張ったな」

フ「キュクル～？」

と、キャロの竜のフリードが鼻をくんくんさせている。

キャ「？どうしたの、フリード？」

エ「なんか焦げ臭いような…」

テ「あ、スバル！あんたのローラーブーツ！」

ス「え？あああ！！」

「あ～あ、ブーツが逝っちゃったか。っていうかティアナもきついだろ？」

テ「はい、実はだましだまして…」

「おい、なのは。そろそろいいんじゃないか？」

な「そうだね。実戦用の新デバイスに切り替えようか？」

「「「「新デバイス？」」」」

な「とりあえず、シャワー浴びてから着替えてロビーに集合ね」

「「「「はい！」」」」

テ「あれ？　あの車って……」

ティアナがそれに気付くのと、車が６人の前に停まるのはほぼ同時だった。

停止すると、車の窓と屋根が消え、オープンカーの様になった車には2人の搭乗者がいた。

「フェイトさん、八神部隊長！」

2人の姿を認めたキャロが驚いたように叫び、それに答えるフェイトとはやて。

他のフォワード陣も口々に挨拶しながら、2人の乗った車へと近付いていく。

ス「すご～い！　これって、フェイト隊長の車だったんですか？」

フェ「うん。地上での移動手段なんだ」

は「みんな、訓練はどないや？」

「「「「……」」」」

は「なんでみんな無言なんや？」

な「はやてちゃん、世の中にはね、知らなくてもいいことがあるんだよ？」

は「？」

「それで、2人はどこに？」

フェ「うん、ちょっと6番ポートまで」

は「教会本部でカリムと会合や。夕方までには戻るよ」

フェ「私は昼前には戻るから、お昼はみんなで一緒に食べようか？」

「「「「はい！」」」」

は「ほんならな～！」

さて、フォワードの新しいデバイス、みんな気に入ってくれるかな？

第２４話：訓練という名の地獄（後書き）

はい、おしまい。
下書きの内容と若干違う気がするけど仕方ない。

次回は機動６課出撃～かも。

では

第２５話：ファースト・アラート（前書き）

いつの間にかＰＶが１０万を超えていました！
ありがとうございます！

第２５話：ファースト・アラート

はい、ウィリアムです。
ちょうど今シャリオ・フィニーノ陸士となのは、それにツヴァイからフォワードの新デバイスの簡単な説明が終わったところです。

フォワード達のデバイスには、何段階かに分けて出力リミッターがかけられているんだと。
で、各自が今の出力を扱いきれると判断されたら、順次解除していくという事らしい。

そこから派生して、なぜか隊長達や俺にかけられてるリミッターの話になった。
隊長達にかけられたリミッターはフォワード達と同じくデバイスだけではなく、
本人にもリミッターがかけられている、と話すとフォワード達は驚いていた。

ちなみに、はやては４ランク、なのは、フェイトは２．５ランクダウンで、
シグナムとヴィータは２ランクダウンである。

俺とティーナにはリミッターはかかっていない。
チートな俺とティーナは魔力は∞だし、ＥＸランクなのでリミッターを最高出力でかけても、意味がないのである。

いやあ、チートっていいもんだね！

そんなことを考えていると、突然警報音が響き、モニターには「ＡＬＥＲＴ」の文字が。

「この音は…第1級警戒態勢か…」

新デバイスをもらったばっかだが、フォワード達にでてもらうか。

んで。

今回の任務は輸送されているレリックの確保、及びガジェットの破壊。

任務分担としてはなのはとフェイトが空からのガジェットの破壊を。フォワード達はレリックの確保を、そして俺はちょうど中間地点にてガジェットを破壊しつつフォワード陣を援護することとなった。

「ほんじゃあ、気合入れていっちょやりますか、ってん?」

キャ「……」

「どうした、キャロ?腹でも痛いのか?」

キャ「え?いや、大丈夫です…」

「…怖いのかい？」

キャ「……はい」

「ん～まあ、怖いのはしょうがないかもしれないな～。
誰だって最初の任務は怖いと思うさ。
でもな、お前は一人じゃないんだぞ？
危なくなったらフォワードのみんなや、俺や、なのは、フェイトがいる。
助けて欲しかったら遠慮なく言えばいいんだ。わかったか？」

キャ「はい！」

「いい返事だ」

ヴァ「旦那！前方からガジェットが接近中です！」

「了解、ハッチ開けろ！なのは、出るぞ！」

な「うん！」

「それじゃあちょっとガジェット壊してくるわ」

「危ない時は、私やウィル君にフェイト隊長、ツヴァイがちゃんとフォローするから。おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう！」

「「「「はい！」」」」

「よーしいくぞ、インフィー、若本、セットアップ！」

≪了解！≫

〈ぶ（ｒｙ〉

な「レイジングハート、セットアップ！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ』

≪前方からガジェット接近中。後方からフェイトさんが接近中です≫

「了解。なのは、フェイト。お前らにまかせる」

な「わかったの！」

フェ「ウィルも気をつけてね？」

「あいよ～、っと」

前からガジェットがやってきた。

「邪魔くさいから吹っ飛べ。ガルム１、エンゲージ！」

マイクロミサイルが空を駆け巡っていった。

その頃のフォワード達は。
無事にリニアレールに乗り込んでガジェットと交戦していた。

テ「ふう。こんなものね」

ス「こっちも終わったよ～、ティア」

あらかた倒した時に、通信が入る。

「ガルム1より全フォワードへ。先頭車両へは俺が行くから、
お前らは敵残存兵力を掃討しろ。以上」

「「「「了解！」」」」

アニメに出てた丸くてでかいやつとの戦闘は、はしょります！！

「さてと、ここが運転席か、って何！？」

俺は運転席を見て驚いた。なぜかというとそこには、

「なんで”こいつら”がここにいるんだ？」

スター・ウォーズでおなじみ、B2スーパー・バトル・ドロイドが
3体いた。
そのドロイドどもが右腕に組み込まれているデュアル・レーザー・
キャノンを
撃ってきた。

「くそ!」

俺はなんとか避けて全て破壊した。このドロイドの技術を管理局に
渡すわけにはいかん。オーバーテクノロジーってやつだからね。

俺は残骸を蒸発させて列車を止めた。

事件後、隊舎の自分の部屋（なぜかなのはとフェイトの部屋の隣）
に戻って
ジェイルに電話する。

「おい、ジェイル。この野郎」

ジェ「い、いきなりどうしたんだ、ウィル?」

「お前今日ガジェットをリニアレールに襲わせただろ!」

ジェ「まさか！今まで作ったガジェットは全部こちらで保管してあるよ？」

「じゃあ、今日俺が吹っ飛ばしたガジェットは誰のだろうな？」

ジェ「おそらく私以外の誰かが作ったのかもしれないね。でも誰だろうな？」

「…ジェイル、こいつを見ろ」

そう言って俺はバトル・ドロイドの画像を見せる。

ジェ「こいつは君が言っていたバトル・ドロイドじゃないか！」

「ああ。つまりこういうことだ。
バトル・ドロイドのことを知っていて、ガジェットも作れる人間もしくは組織がある」

ジェ「……」

とその時。

「艦長！緊急事態です！」

「どうしたエディ？」

「大変申し訳ありません。何者かにハッキングを受けていました！
ごく一部の兵器情報を盗まれました」

「受けていました、だと？いつだ？」

「…2週間前です」

「なんで気が付かなかったんだ！」

「えー、あの、その……」

ゼロの使い魔を見てて気がつきませんでした」

「……」

ジェ「……」

「えと、その、すいませんでした！！」

「……具体的にどの兵器のデータを盗られたんだ？」

「ええとですね、
Ｔ－６００型ターミネーター、Ｗシリーズ・ドロイディカ、
Ｂ１バトル・ドロイド、Ｂ２スーパー・バトル・ドロイド、
以上の４種類の兵器データが盗まれました」

「…ｃｏｃｋ」↑トップ○アの司会者、ジェー○ズみたいに

落ち着け、よく考えよう。
ターミネーターは、戦闘機人の技術を応用すればあっという間に作れるだろう。っていうか全部簡単に作れるじゃん！
いや、動力源をどうするかという問題が…

待て、肝心なことを聞いていないぞ？

「エディ、誰に盗まれた？」

「……」

「おい」

「……ハッキングは管理局のコンピューターから受けました」

「はい、犯人は最高評議会で決定だな。あいつら絶対ぶっ殺す」

ジェ「それで、この兵器の対処法は？」

「エディ、ジェイルにイオン銃を送れ。
ジェイル、ドロイドを止める方法は３つだ。

頭を吹っ飛ばすか、粉々に壊すか、イオン銃で無力化するかだ。
このイオン銃は一時的にドロイドどもを機能停止にすることができる。
その間に破壊すればいい。わかったか？」

ジェ「わかったよ、っていっぱい銃が届いたな」

「それがイオン銃だ。ナンバーズのみんなと、ゼストさんやルーにも
渡しておいてくれ。きちんと使い方も教えるんだぞ？」

ジェ「了解した。ああ、それと1つニュースだ。
ルーテシアの母親のメガーヌさんが目を覚ましたよ。
じきに歩けるようになるだろう」

「そうか、そいつは何よりだ。じゃあ、また今度な。
みんなによろしく言っといてくれ」

さてと、このドロイドの情報をどうやって6課の連中に話そうかな？

～どっか暗い場所～

そこにはどこかで見たことのある人が笑っていた。

？「フッフッフ。これがあれば、全て計画通りに…」

その人物の前にはバトル・ドロイドがいっぱい並んでいた…

第２５話：ファースト・アラート（後書き）

へい、黒幕っぽいどっかの誰かさんが登場しました。

いったい誰でしょうね～

では

第２６話：ホテル・アグスタ（前半）

「あ～あ～あやんなっちゃった、あ～あ～あ驚いた、だっけ？」

どうも、うろ覚えの歌を口ずさんでいるウィリアムです。
先日のバトル・ドロイドの件でレジーと話をしてきました。
今、地上本部のほとんどの部隊でＢＥＲＰ装甲服を使っていますが、あれではブラスターライフルの攻撃を防げないので、仕方なく小型のシールドジェネレーターを付けました。これでブラスターが当たっても問題ないでしょう、多分。

んで、地上本部の建物にもシールドを張り、さらに建物を囲むようにＳＧＥ－３０ゴールキーパー艦艇用近接防御火器システム（ＣＩＷＳ）を設置。
本来なら３０ｍｍ弾を使用しますが、ここでは小型魔導炉から供給される魔力を
弾丸にして発射します。これで空の守りもばっちぐーです。
それに地上目標への攻撃も可能にしました。

本局の連中は

「過剰戦力だ！」

とか言ってましたが、レジーが

「こっちの状況を把握しない連中はだまってろ！」

と言い、これらの装備の設置の承認をもらっていました。

な「ちょっとウィル君！聞いてるの！？」

「え？ああ、すまん聞いてなかった」

実は今俺はヘリの中にいるのであった。
向かっている場所はホテル・アグスタ。
そこで行われるオークションの会場警備と人員警護が今回の任務。なんでも取引許可の出ているロストロギアがいくつも出るんだと。

「で、何の話だ？」

な「これ着て！」

と差し出すのはタキシード。

「…これは一体何の罰ゲームだ？」

フェ「つ、つまり、その…」

は「うちらをエスコートして欲しいんよ！」

「却下」

は「即答！？なんでや！」

「俺はな、そういう堅苦しい服が苦手なんだよ、知ってんだろ？
この中で俺がまともに６課の制服着ているの見たことある奴いるか？」

ス「そ、そういえば…」

テ「見たことないね」

「まあ俺は嘱託魔導師であり正式な局員じゃないから、
制服を着る義務がないんだけどね。
ということで俺はフォワード達と一緒に外の警備に…」

ジャキンッ！

な「…ウィル君、エスコートしてよ…ねぇ？」

フェ「そんなにフォワード達と一緒がいいの？」

は「ウィル君、ほんま頼むわ…」

「い、いやあ、俺タキシードとか着てみたかったんだよな～！
よし、じゃあエスコートさせてもらいますか！」

ティ「ご主人様～…」

デバイス向けられているのに、「やなこった」とは言えんだろう？

～その頃～

？「さあ、行け！ドロイド達よ！」

ガシャン！ガシャン！ガシャン！

ドロイド軍団が侵攻を始めた。

目標は、

ホテル・アグスタ。

「ったく、遅いな、おい」

エ「仕方ないですよ、ウィルさん」

「ほんと女って金と時間のかかる生き物だな。そう思わないか、エリオ？」

エ「う～ん、どうなんですかね？」

「俺はな、女は悪だと思うんだ」

エ「悪？どうしてそう思ったんですか？」

「これが公式だ。

女は時間と金がかかる（girls require time and money）ので

Girl ＝ Time × Money ・・・（1）

時は金なり（Time is Money）という諺によると

Time ＝ Money ・・・（2）

（2）を（1）に代入すると

Girl ＝ Money × Money

ここで、金は諸悪の根源（money is the root of all evil）だから

Money ＝ √（Evil）

つまり

Girl ＝ √（Evil） × √（Evil） ＝ Evil

女＝悪　（証明終）

ってわけだ。どうだ、すごいだろ？」

エ「おお、すごい！確かにその通りで…」

「だろう？ってどうした？顔が蒼いぞ？」

エ「え～、ウィルさん。ご愁傷様です」

と言ってエリオ逃亡。

「どこ行ったんだ？」

な「ウィル君…」

フェ「女は…」

は「悪やって？」

「…あ～あ」

な、フェ、は「ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？」

「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」

ス「ウィルさん、生きてるかな？」

テ「まあ、大丈夫じゃない？多分」

キャ「ウィルさん強いし頑丈そうですよね～」

ヴィ「あの馬鹿…」

シグ「任務に支障が出なければいいがな…」

シャ「うふふ～ウィル君は私が治療してあげる～♪」

「ご主人様～生きてますか～？」

「手もあるし足もある。目も付いてるし、我が息子も無事だ。問題ない」

な「息子？」

フェ「ウィルって子供いたの？」

は「なのはちゃん、フェイトちゃん、帰ったら教えてあげるわ…」

今、ホテルの中で警備中です。あ～あとっととこんな服脱ぎたい…

おや？

「おい、そこの淫獣！」

ユ「僕は淫獣じゃない！ってウィルかい？久しぶりだね！」

「なんかハンサムになってんじゃねえか、おい！元気そうで何よりだ！」

ユ「ここで何しているの？」

「会場警備だよ。いくつかロストロギアが転がっているからな」

ユ「なるほど、頑張ってね」

「おう！今度飲みに行こうぜ！」

ピーピーピー

≪マスター、会場に未確認の集団が接近中です≫

「なに?シャマル!確認できるか?」

シャ「ええ、こちらでも見つけた!だけど、なんかおかしいわ。
これはガジェットの反応じゃない…何かしら」

「…まさか」

〈主よ!奴らだ!フォワード達に接近中!〉

「くそ!ガルム1から全ユニットへ。総員戦闘配置。
フォワード及び副隊長は直ちに建物内に退避しろ!」

ヴィ「何言ってんだウィル!敵がすぐそばに…」

「だまれ、ヴィータ。今のお前らじゃ死ぬだけだ。急げ!
ティーナ、全力で奴らを破壊しろ。反応弾の使用を許可する。
俺もすぐに迎撃に向かう」

ティ「了解!」

「ユーノ、会場で結界を張ってくれないか?最大出力で」

ユ「…それだけまずい敵ってことかい?」

「ああ、下手するとみんなやばい」

ユ「わかった。気をつけてね?」

「誰に言ってんだ?」

そう言いながら外に向かう。
しかし、バトル・ドロイドの軍隊を差し向けてくるとはね。
いったいどこのどいつだ？

ティアナ　Ｓｉｄｅ

ス「ティア！早く中に戻らなきゃ！」

「わかっているわよ！」

なんなのよ！あの敵は？
ガジェットじゃないけどロボットみたいだし…
それに銃？みたいなのから撃たれたビームがコンクリート溶かしてるし！

もしかしてあれって質量兵器？

キャ「ティアナさん！！」

キャロが大声で私を呼んだ。振り返ろうとしたら

赤い何かが足をかすめた。

「え？」

急に力が入らなくなって私は倒れた。
足を見てみると、太ももに大きな傷跡があった。
傷の周りの肉は焼け焦げ、真っ赤な血が出ていた。

「ぎゃあああああああああ！！！」

痛い。
痛い。
痛い。痛い。痛い。
痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！
痛い！

あまりにも痛くて私は気を失ってしまった。

最後に見たのは、

今まで見たこともないくらい怒った顔をしたウィルさんだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第２６話：ホテル・アグスタ（前半）（後書き）

ティアナがブラスターで撃たれちゃいました。
かすっただけでも、このくらいは怪我するんじゃないですかね？
適当ですけど。

次回はウィルとティーナが大暴れします。
では

第27話：ホテル・アグスタ（後半）（前書き）

～前回のあらすじ～

ティアナがブラスターで負傷しました。

第27話：ホテル・アグスタ（後半）

「くそ！遅かったか！」

ス「ティア！ねえ、しっかりしてよ！」

「どけ、スバル！『ベホマ』！」

するとあら不思議、ティアナの怪我はあっという間に治りました。

エ「すごい…」

「スバル、ティアナを担いで撤退しろ。ここは俺がなんとかする。急げ！」

ス「は、はい！」

フォワード達はすたこらさっさー、って感じに撤退。

「さてと…」

俺は能力を使って、ある武器を出現させる。

その名は「ＴＡＣキャノン」。

ゲーム「Ｃｒｙｓｉｓ」に登場する兵器で、ナノスーツと併用することを

前提として開発された。戦術核を弾頭とし、高い破壊能力を誇る。

「俺の親友の妹に怪我させたんだから、覚悟しやがれ！」

～ホテル内～

フォワード達がホテルに逃げ込むと隊長たちがいた。

な「ティアナは大丈夫！？」

キャ「ウィルさんが怪我を治してくれました！」

は「そうか、なら安心やな」

エ「でも、ウィルさんは大丈夫でしょうか？」

シグ「ウィルなら心配ない。あいつは必ず帰ってくるさ」

と、その時。

ドーンッ！！×１０

フォワード「うわあああああああああああ！！！」

ヴィ「ウィルの奴、派手にやってるな…」

シャ「あの、みんな、ちょっといいかしら？」

屋上にいるシャマルから全員に通信が入る。

シグ「どうした、シャマル？」

フェ「ウィルは無事？」

シャ「ええ、ウィル君もティーナちゃんも無事よ。
　敵のロボットもみんなやっつけたみたい。ただ…」

「「「「「「「「「「ただ？」」」」」」」」」」

シャ「ホテルの周りがクレーターだらけなんだけど…」

「「「「「「「「…」」」」」」」」

「ティーナ、状況報告」

「こっちは全部破壊したよ、ご主人様」

「了解。任務終了。さてと、６課の連中には色々と話さなきゃな」

「ですね～」

～6課の会議室～

「さて、ティアナの怪我は治したが、まだ寝ているそうだ。しばらくは安静だな」

久しぶりのアイン
「それよりもウィルには色々と聞きたいことがあるんだが？」

ツ「そうですよ！ウィルさんはあのロボットのことをなんで知っていたんですか？」

シグ「それにあいつらの武器。私たちのバリアジャケットでは防げないことも
　知っていただろう？何を隠している？」

な「ウィル君、全部話してよ！」

は「部隊長命令や！全部吐けい！」

…やっぱりこうなったか。
ん～全部話したほうがいいのかな？
いや、悩むな。う～ん…

「ここから話すことは超機密事項だぞ?このことを知ってんのは伝説の3提督、クロノ、リンディさん、カリム、それにレジーだけだ」

みんな「えええええええ!!!??」

ス「伝説の3提督ってあの!?」

シグ「レジーってもしかしてレジアス中将のことか?」

「ああ。まず、あのロボットだが、あれはガジェットとは全く違う。バトル・ドロイドと呼んでいるんだが、ある程度技術があれば量産可能だ。

空は飛べないけど、あの銃、ブラスターライフルと呼ばれるものだが、

あれは粒子ビーム・エネルギーを発射する武器だ。実を言うと、地上本部の全ての部隊は既にブラスター対策は完了している。前回のリニアレールにもあいつらがいたんでね。

今回ティアナが負傷したので、6課にもブラスター対策を行うことが出きるだろう。悪いが、これ以上は話せない」

は「リニアレールにあいつらがいたなんて知らんかったよ!」

「運転席にいたから吹っ飛ばした」

フェ「なんで私たちに教えてくれなかったの?」

「許可なく話してはいけない内容だからさ…こんなことになるならとっとと話しておけばよかった…すまない」

な「ウィル君…いつ話してくれるの…全てを」

「……いつか話すさ。信じてくれ。
とりあえず、シャーリー」

シャ「はい！」

「これを全員のデバイスに組み込んでくれ」

ヴィ「なんだこれ？」

久しぶりのザフィーラ
「これは…かなり複雑だな」

「これは偏向シールド発生装置だ。これならブラスターを無力化できる。
これをデバイスに搭載するとばっちぐーだ」

シャ「す、すごい！さっそく取り掛かります！」

「そんじゃあ俺はレジーの所に行ってくるわ」

な「何しに行くの？」

「決まってんだろ？

ビールを小便に変える訓練だ！！！ではさいなら～」

な「ビールを小便に変える訓練？」

フェ「それって要するに…」

は「飲みに行くだけやんか！！！！」

第27話：ホテル・アグスタ（後半）（後書き）

まだ、6課のみんなに話すのは早いですね。
もうちょっとあとのお楽しみってことに。

次回はもうあの子がでるかも！？

では

特別編：なのはと（前書き）

そろそろあの子をだそうかと考えていましたが、いや、早すぎんだろ！と友人に指摘されたので他の内容にします。

特別編：なのはと

「あ～あ今日は暇だなぁ～」

どうも、ウィリアムです。
今日は訓練も何もない休みの日なので超暇人です。

「月面基地の様子でも見てくるか…」

今２つの月面基地の上空でゴラン？宇宙防衛ノヴァガンを作っている最中です。
それぞれの基地の上に２つずつ置く予定なので、完成すればミッドチルダの惑星全体の防衛が可能になるかと。

「なんかミッドがどんどん要塞化しているのは気のせいだろうか…」

”あれ”も同時に起動すれば、ミッド無敵じゃなイカ！

ウヘヘヘヘ…

コンコン

な「ウィル君、ちょっといいかな？」

「ん？なのはか、どうした？」

な「あの、今日暇？」

「御覧の通り暇人です」

な「じゃあさ、買い物に付き合ってくれないかな？」

「いいけど、何買うんだ？」

な「えへへ、いろいろ♪じゃあ、１５分後に駐車場に集合ねっ」

「あいあい」

１５分後

「お、来たか」

な「じゃあ行こっか？」

「おう。運転はお任せあれ。それにしても…」

な「？」

ちょっと化粧をして、おめかししているなのは…

これは…

「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ」↑マク○ラン大尉っぽく

な「え？」

「ああ、その、きれいだな」

な「ふぇ！？あ、ありがとなの…／／／」

「顔が赤いけど大丈夫か？」

な「だ、大丈夫！問題ないの！」

「そか。そんじゃあ行きますか」

「なあ、なのは」

な「ん？」

「確かに俺は買い物に付き合うと言った」

な「そうだね！」

「だがな…

なんでランジェリーショップなんだよ！！？？」

そう。今俺となのはがいるのは女性ご用達のお店、

ランジェリーショップである。

な「あのね、ウィル君に選んで欲しいの。その…下着を…駄目？」

「うぐぁっ！」

なのは、その上目遣い&涙目の組み合わせは駄目だぜ…

「…わかった」

な「ほ、ほんと！？ありがと！じゃあ行こ！」

「お、おい引きずるな～～～」

「ウィル君、これどうかな？」

「子供っぽくねえか、それ？もうガキじゃねえんだからさ、
そうだな、これなんかどうよ？」

「にゃ！？ウィル君、それひもじゃん！隠せてないよ！」

「おっと、それはいかんな、ではこれだ！」

「変わらないじゃん！」

「いや！布の部分がさっきのより大きいだろ？きちんと隠せるから
問題ない」

「は、恥ずかしいよ…／／／」

「男っていうのは、まあ人にもよるが、見えそうで見えない、
それが好きなのさ。さっきのは隠せてないが、これは違う！
隠せているけど、しかし！もう少しで見えそうなのだ！」

「…ウィル君、そういうのが好きなんだ？」ゴゴゴゴゴゴ…

「ってヴァイスが教えてくれた」

「ヴァイスクン、ＯＨＡＮＡＳＨＩシナキャ」

すまんヴァイス…今度俺のおごりで飲みに行こう…

「な、なのはさん？怖いですよ？」

「え？ああ、ごめんごめん」

「じゃあ、無難にこれはどうよ？」

「あ！これはいいかも！」

「色もよし。デザインもよし。いいんじゃない？」

「うん！じゃあ、ちょっと試着してみるね！」

「おう！行ってらっしゃい～、ってなに！？なんつった？」

だが、既になのはは試着室にすっ飛んで行った。

≪やりますね、マスター≫

〈なかなかの策士であるな、主よ〉

「へ？何のことだ？」

≪下着を勧めて、ほめちぎって…≫

〈そして試着させる。やるではないか〉

「いや、そんなことしようとは思っていなかったんだが…」

「ウィル君〜来て〜」

〈お呼びだぞ、主〉

≪気のきいた返事をしないと、なのはさんは悲しみますよ？≫

「あ〜、へいへい」

そして試着室のカーテンを開けると、

「ど、どうかな？／／／」

「……」

「ウィル君？」

「え？ああ、うん、なかなか、その、素晴らしいんじゃないかな？」

「よかった〜、でもこれなんかちょっと胸がきついかな？」

胸を見ると、

ボインボイ〜ン

もう見てられん！！
俺はなのはに背を向けて、

「なのは？それでいいんじゃないかな？買ってやるよ！レジで待ってるから！」

といって逃げた。
ずっと見てたら俺の理性が持たんよ…

レジ「ありがとうございました～」

な「うふふ～、ウィル君が選んでくれた下着～♪」

「喜んでくれてよかったよ。他に買い物はあるか？」

な「ううん、これでおしまいだよ」

「じゃあ、６課に帰る前に少し寄り道するか」

そう言って来たのは、海岸の遊歩道の一角。
ちょうど夕日が見える場所で、周りには誰もいない。

な「きれい…」

「ここは俺のお気に入りの場所なんだ。なぜかあまり人が来ないんでね」

な「ウィル君、今日はありがとう！楽しかったよ！」

「こちらこそ、色々とありがとう。ごちそうさまでした」

な「…ウィル君のエッチ／／／」

何がごちそうさまなのか気がついたのか。

な「それでね、ウィル君にお礼がしたいの！」

「いいよ、お礼なんて…」

な「だーめ。私の気が済まないの。だから…」

そう言うとなのはは、

「これがお礼だよ♪」

チュッ

「なん…だと…？」

な「うふふ、これが私の気持ち」

「それって…」

な「１０年前に出会った時から私はあなたが好きだった。
今でもその思いは変わらないからね？」

「なのは、俺は…」

な「まだ返事はしないで。待っているからね？」

「う、うん…」

な「じゃあ、帰ろっか？」

「そうだな、ほら」

俺はなのはに手を差し出す。

「恋人じゃなくても手をつなぐのはありだろ？」

な「うん！」

こうして俺はなのはと手をつなぎながら6課に帰ったのであった。

めでたしめでたし。

「まあ、めでたく終わらないのが俺のクオリティなんだよな」

今俺はなのはと手をつなぎながら6課の正面玄関にいる。
そして俺たちの目の前には、

フェ「今日はなのはとお楽しみだったんだ…？」

は「うちらは書類仕事をしていたのに…」

シグ「お前らは仲良くデートか…いい身分だな？」

ヴィ「お前らだけ楽しみやがって！」

ス「ウィルさん、ずるいです…」

テ「羨ましい…」

な「みみみ、みんな！おおおお落ち着いてよ！」

「お前が落ち着け。あのな、今日はなのはの買い物の荷物持ちしてただけだぞ？」

シグ「ほう、買い物か。何を買ったんだ？」

な「にゃ!?えええええと、その、あれだよあれ!」

フェ「あれじゃわからないよ、なのは」

「ん?これだが?」

と言って俺は袋から下着を引っ張り出そうとしたが、

な「だめえええええ!!!」

「モルスァ!」

なのはが俺に猛烈なタックルをして、俺は外に吹っ飛ばされた。

ス「ウィルさん!大丈夫ですか?」

「ああ、少なくとも心臓は動いている」

は「なのはちゃ~ん、何を買ったんや?見せて~な」

ヴィ「見せろよなのは!」

テ「もしかしてこんな場所では見せることができないものですか?」

な「うん、まあ、そうかな?」

は「アイン!今の時間会議室空いてるな?」

ア「ええ、空いてますけど」

は「よっしゃ！みんな行くで～！」

「「「「「おー！！」」」」」

な「待って！私の返して～」

ドドドドドドドッ！

「そして誰もいなくなった…」

その後、袋の中身が下着ということがばれて、
みなさん羨ましがっていたので、みんなとデートすることになるましたとさ。

「お、俺の財布が氷河期を迎えている…」

特別編：なのはと（後書き）

はい、なのはとデートの回でした。

なのはってこんなに大胆だったっけ？まあいいや。

次回は誰とデートしましょうかね？

では

特別編：ティアナと

ある飲み屋にて

「おう、どうしたティーダ？」

「ウィル、実はな…カクカクシカジカ」

「…う～ん、やっぱそうなったか」

「ああ、そこでお前に頼みがあるんだが…ゴニョゴニョ」

「ティアナ～、元気してる～？」

テ「あ、ウィルさん。ええ、まあまあです…」

あー…

「よし！お前今日暇だよな？遊びに行こうぜ！」

テ「え？遊びってどこに？」

「これを見ろ！」

ジャジャ～ン

テ「そ、それは！ついこの前ミッドにできた遊園地のチケット！」

「どうだ？一緒に行こうぜ！」

テ「はい！よろこんで！」

「じゃあ、１５分後に玄関で集合な」

テ「お待たせしましたー」

「おう！じゃあ行くぞ～」

テ「はい！」

そう言ってティアナは俺の手を握ってきた。

「ん？ティアナさん？」

テ「いいじゃないですか～、減るもんじゃないし」

「まあそうだな」

はいやってきました遊園地。
それにしてもクソみたいに混んで居やがる。おまけにカップルだらけ。

「反応弾でみんな焼くか…」

テ「え？」

「ああ、いや、なんでもない。さてと、まずはあれから行くか」

と言って指さすのはどでかいジェットコースター。

テ「いいですね～行きましょう！」

「いいいいいいいいいやっほおおおおおおおおおお！！！」

「きゃあああああああああああああああああ！！！」

「いやあ、じつにおもしろかった」

テ「ほんとですね～」

「じゃあ次はあれ」

テ「え」

あれ、ティアナが固まっている。どうしたんだ？

「どした？気分悪いか？」

テ「え？いや、大丈夫なんですけど…」

「そか、じゃあ行こう」

テ「（怖い…けどウィルさんがいるなら！）はい」

ひゅ～どろどろどろ～

「ほお、なかなかいい雰囲気だな…」

だが、肝心のティアナはと言うと

テ「ういういういういういういう」

「ティ、ティアナ？」

俺の腕にしがみついて若干壊れてる。

テ「ういういウィルさん、ははは早くいきましょううう」

「ああ、わかったよ」

次の部屋に入った瞬間、

お化け「わあああああああああああああ！！」

天井から逆さまにお化けが出てきた！

「うおい！びっくりした！ふう、ん？」

悲鳴が聞こえないのでティアナを見ると、

テ「」

「ティアナ、返事をしろ！ティアナーーー！！！」

立ったまま気絶していたでござる。

外のベンチにティアナを寝かせて、飲み物を買って戻ると、

チンピラA「へいへい、お姉ちゃん。俺たちと一緒にいいことしようぜ？」

テ「結構です！待っている人がいるんで」

チンピラB「おいおい、俺たちのお誘いを受けないってのか？」

チンピラC「いいから行こうぜ？きっと楽しいからよお」

テ「はなしなさいよ！この馬鹿！」

よし、死刑で許してやろう。

ピンポンパンポ～ン♪

只今ゴミを片付けているので少々お待ち下さい。

「ふう、いつまでたってもこの手のゴミどもは絶滅しないな。
大丈夫か、ティアナ？」

テ「はい、ありがとうございます！」

「よし！じゃあ遊びつくすぞ！」

その後、ティアナをお姫様だっこしながらメリーゴーランドに乗ったり、
コーヒーカップでお互いに後悔するほどのスピードで回したり、
射的ゲームでティアナが景品を総取りして係員涙目だったりといろいろあった。

そして今俺たちは観覧車に乗っている。

「いや～、今日は楽しかったな」

テ「そうですね！ほんとありがとうございました！」

「…ティアナ、やっと笑ってくれたな？」

テ「え？」

「あのホテルの日以来、ティアナはあまり笑っていなかったからさ、心配だったんだよ」

テ「……」

「何考えているか当てて見せようか？あのドロイドだろ？」

テ「（ビクッ！）」

「バリアジャケットをなんなく貫通し、かすっただけであの威力。まったくたいした奴らだよ…。

ティアナ、すまなかった。あの時もっと早く俺が駆けつけていれば…」

テ「ウィルさんは悪くないですよ…あれは仕方なかったんです…」

う～ん、まだ我慢しているように感じる…

こういう時は…

「ティアナ…」

テ「へ？うぃ、ウィルさん！？／／／」

そっと抱きしめるに限る！

「もう我慢しなくていいんだぞ？怖かったんだろ？」

テ「うっ…」

「ここなら誰もいないんだ。我慢する必要はない…」

テ「う、うわあああああああん！！！」

「泣きたいときにいっぱい泣けばいいさ」

ちなみに観覧車は俺がしばらく止めておいたので、地上の係員は大忙し
だったのは内緒です。

テ「ウィルさん、ありがとう…」

「気にするなって。ティアナの笑顔が見れてよかったよ」

ふう、これでティーダとの約束も守れたな…

～回想～

「ウィル、実はティアナのことなんだが…
この前会った時、ものすごく、こう、落ち込んでいるというかなんというか…
とにかく笑顔がなかったんだが、どう思うよ?」

「う～んやっぱりそうなったか。実はこの前の任務で…」

「へまをしたのか？」

「いや、そうじゃない。新型ガジェット（バトル・ドロイドのこと）に攻撃されて
ちょっと怪我しちゃったんだ。怪我自体は治したんだが、
まだ恐怖が残っているんじゃないかと…」

「そうだったのか…」

「すまない、ティーダ。俺の不注意でティアナを、お前の妹を怪我させてしまった…」

「…でもお前は助けてくれた、俺の時のように。違うか？」

「まあ、結果的にはそうだが…」

「俺たち兄妹はなんだかんだでお前に助けてもらったばっかだな」

「ティーダ…」

「ティアナが無事に帰って来れたのもお前のおかげだよ。ありがとな」

「…ああ。それでティアナの件だが…」

「そこでウィルに頼みがあるんだが、ほれこれ」

と言ってティーダはチケットを2枚差し出す。

「これは…遊園地のチケット？」

「今度の休みにでもティアナを誘って遊んでこいよ」

「いや、こういうのは兄貴のお前と言ったほうがいいんじゃないカ？」

「いや、ティアナはお前と行きたいはずだ。間違いなく！」

「なんでやねん」

「…もしかして気づいていらっしゃらない？」

「何に？」

≪ティーダさん、マスターは超が付くほどの鈍感野郎なんで≫

「おい、インフィー。俺が鈍感だと？」

〈まぁだ気がつかないのか、主よ？〉

「若本までなんだよ…

え～と、チケットは2枚。

ティアナは兄貴とではなく俺と行きたがっている。

つまり…どういうことだってばよ？」

「はあ…まあいい、とにかく！妹のことを頼んだぞ、ウィル」

「あいよ～」

～回想おしまい～

ティーダの考えた「ティアナを元気にしよう作戦」は見事に成功したな…

テ「あの、ウィルさん」

「ん？なんだ？」

テ「その、今日のお礼がしたいんですけど！」

「お礼？なんのだよ？」

テ「遊園地に誘ってくれて、一緒に遊んでくれて、そして…
我慢しなくていい、って言ってくれたお礼です！」

「そんなのお安いご用さ。ティアナの笑顔が見れれば俺は満足」

テ「私が満足しません！」

「ん～じゃあどうすれば満足する？」

テ「…目を閉じてもらえますか？」

「目を？まあいいが、それで…」

チュッ

テ「うふふ♪ウィルさん、大好き！」

「え？いやちょっとティアナ！？」

テ「私、もう我慢できません！あなたが好きすぎて…」

「ちょっと待て！ここじゃまずいって！」

テ「さっきは我慢するなって…」

「そういう部分は我慢しろ！ていうか自重しろ！」

このままだと襲われる！！

そう思った俺は観覧車を再起動した。

「お、動き出したな」

テ「…いい所だったのに」

「ん？なんか言ったか、ティアナ？」

テ「いえいえ、なんでもないですよ」

そして俺たちは６課に帰って行った。

その夜…

スバルとティアナの部屋

ス「ティア～、今日はどこに行ってたの～？」

テ「……」

ス「ティア？」

スバルは返事のないティアナを振り返る。

ティアナは動きを止めているように見える。

ス「どうしたのティア？って！」

その時、ティアナは煙のように姿を消してしまった。

ス「これ幻術？」

その頃、本物のティアナはウィリアムの部屋の前にいた。

テ「うふふ、観覧車がだめなら部屋で…」

うん、本格的に壊れているティアナであった。

テ「いざゆかん！」

そういってティアナはウィルアムの部屋に

な「ティアナ…こんな時間にどこに行くのかな？」

フェ「しかも観覧車って何？教えてほしいな…」

入れなかった。

翌日、ぼろぼろのティアナがロビーに放置されているのをザフィーラが発見した。
なんでぼろぼろだったのか、どうしてロビーにいたのかは不明である。
ティアナも、

「夜叉が…悪魔が…」ガタガタブルブル

としか言わないため、真相は不明である。

特別編：ティアナと（後書き）

ティアナ編おしまい。

途中からキャラが崩壊してますけど気にしないでください。
最後は残念でしたねｗ

次回は誰にしようかな？

では

特別編：はやてと

「暇や！」

八神はやては部隊長室でぼやいていた。

ツ「仕事ないですよ～」

ア「確かに暇ですね…」

「なんかやることないんか？」

ツ、ア「ありません（です）」

「そや！ちょっとウィル君の所に行ってくるわ」

その頃のウィリアムは…

「ここでこうなるだろ、んでそのあとこっちを前に行かせて…
いや、そうするとここに穴があいちまうな…」

部屋で何かをやっていた。
すると、

は「ウィル君！いるんやろ！あけてーな」

「ん？はやてか。あいあい」

は「暇や！」

「ああ、暇だな。それで？」

は「デートしよう！」

「どうしてそうなる？」

は「なんとなくや！」

「はあわかったよ。じゃあ３０分後に玄関で集合な？」

は「わかった！」

さて、どこに連れて行こうかな？

３０分後

「んじゃ行こうかね」

は「どこに行くん？」

「この前できた動物園」

は「おお、いいやんか」

はい着きました動物園。
でかいね～。上野動物園なんか目じゃないね～。

は「お！ライオンや！かっこいいな～」

「立派だな～、ん？はやて、こっちでライオンの子供を抱っこできるらしいぞ？」

は「ほんま！？行くしかないで！」

は「かわいい～／／／」

「確かに、これは…」

ライオンに子供って猫みたいだね。

「ほら、抱っこしてみろよ」

は「う～ん…そうや！」

「ん？どうした？」

は「まずうちがライオンの子供を抱っこするやろ？」

「うん」

は「ウィル君はライオンの子供を抱っこしているうちを抱っこするんや！」

「……お姫様だっこ？」

は「お姫様だっこ」

「……まあ、デートだしいいか。ほらよっと！」

は「うへへ～／／／」

係員Ａ「うわ～いちゃいちゃしやがって…」

係員Ｂ「あんなことするカップル初めて見たわ…」

係員からどん引きされていることに気がつかない2人であった。

は「にへへ～満足満足～♪次は～、」

「おっ！はやて！お前がいるぞ！！」

は「へ？」

はやてが素っ頓狂な声をあげた。私がいるってどういうこと？

ウィリアムが指をさした先には、

「たぬき」と書かれた看板が。

「お～すげ～はやてがいっぱいだ～」

は「うぃ～る～く～ん？おふざけはそろそろやめようか…」

「あ、はい、どうもすいません。調子乗りました。許して下さい」

は「今日の昼食と夕食には期待してるで！」

「ははーっ！」

は「すご～い！ほんまにここでいいんか？」

「気にするなって。さあ行きましょうか？」

俺とはやてが来たのはミッドでも有数のホテルで、ここのレストランの飯は
超うまいらしい。それなりに値段も高いから、もしうまくなかったらターボレーザーの刑だ！

受付嬢「いらっしゃいませ、お二人様ですか？」

「予約をしていたロンバートだが？」

受付嬢「え～と、はい。確認できました。ロンバート様と八神様ですね？
お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

は「ウィル君ウィル君！（ヒソヒソ）」

「なんだ、はやて？（ヒソヒソ）」

は「いつ予約したんや！ここのレストランの予約取るのってかなり厳しいんじゃ？」

「ひ　み　つ　♪」

受付嬢「こちらの席になります」

は「うわ～きれい！」

その席はミッドの海が一望できる特等席であった。

ウェイター「お飲み物でございます」

「どうも、んじゃはやて」

は「ん？」

「日ごろの仕事、お疲れ様。乾杯！」

は「ありがと、乾杯！」

「う～ん、このワインはうまいね」

は「そやね～」

「あ、はやてはあまり飲むなよ？以前みたいに酔い潰れると色々と困る」

は「以前って何年も前の話やんか！」

「そうだったっけ？って、はやて、それ…」

は「ん？ああ、これな。ウィル君にもらったもんや」

はやては俺が昔にあげた４点セットをきちんと身に着けていた。

「大切にしてくれてうれしいよ」

は「…大切に決まっとるやんか（ボソッ）」

「え？」

は「ああ、うん、なんでもないよ」

「そか、まあ、ゆっくりと過ごそうや」

は「そやね～」

食事シーンははぶくとして。

は「ウィル君～にへへ～／／／」

「やっぱり潰れたか…」

俺ははやてを担ぎながらホテルの部屋に向かっていた。
そんなに飲んでいなかったと思うんだが…いつ酔っぱらったんだ？

「まあいいや。この部屋だったな」

はやてをベッドにおいて自分の部屋に戻ろうとすると、

ぐいっ

「…はなしてくれ、はやて」

は「うぃるく～ん…」

「仕方ないな…」

俺ははやてと一緒に寝ることにした。

はやての横に寝ると、酔っぱらっているのか、はやては俺に抱きついてきた。

「…ちょっとこれはまずいかも」

ウィリアム脳内戦線

「司令！敵性欲部隊が攻撃中です！」

「なんだと！理性部隊はどこに行った！」

「現在なんとか持ちこたえていますが、このままでは押し切られます！」

「なんということだ…」

現実

は「ウィル君、好きや～、とっても大好き～…」

「はやて、って」

むちゅ〜

酔っぱらっているはやてが俺にキスしてきやがった！しかも舌まで入れてる！

は「ん…（くちゃくちゃ）」

脳内

「司令！だめです！もう持ちこたえられません！」

「ここまでか…皆の者、すまなかったな」

「理性部隊壊滅！敵性欲部隊、全速力で接近中！」

「最終手段だ、あれを使うぞ！全システム、シャットダウン！！」

現実

「う～ん…」

は「んっ…」

ウィリアムは気絶し、はやてはウィリアムにずっとキスをしていた…

翌日

は「う〜ん、頭が〜」

何があったんや？確かウィル君と動物園に行って、そのあと夕食をホテルのレストランで食べて、え〜とそのあとどうしたんやっけ？

は「とりあえずトイレに、って！！」

その時になってようやくはやては自分の状況を把握した。

まずはやての隣にウィリアムが寝ている。ほぼ全裸で。
あわてて自分を確認すると、やっぱりほぼ全裸。
しかもウィル君の顔には自分の口紅の跡っぽいのが残ってる。

は「いったい…なにがあったんや…」

とその時、ウィリアムが起床。

「う～ん、はやてか、おはよう」

は「あ、おはよう。って！ウィル君、このありさまはなんや！
昨日何があったんや！説明せい！」

「え？覚えてないの？」

は「レストランで夕食を食べた後のことが思い出せん！教えて」

「…ほんとに知りたいの？」

は「いいから教えて～な！」

「あいよ、インフィー、映像出せ」

≪了解です、マスター≫

5分後

は「……（ぷしゅ～）」

「お～いはやて～、大丈夫か～」

は「うち、こんなことを…」

「まあ、その、なんだ、大胆だったな」

は「あああああ！言わんといてえええええ！！めっちゃ恥ずかしいやんかあああ！！」

「なにをいまさらw」

は「ウィル君、その、つまり…」

「今返事をしたほうがいいかな？」

は「へっ？」

「だから昨日の告白の」

は「まった！昨日のはノーカウントにして！今度改めてするから！」

「了解。楽しみにしてるよ、はやて」

は「うん！」

6課の建物の前

な「ウィル君、はやてちゃん、おかえり」

2人「げっ！！」

フェ「朝帰りなんだ、へぇ～…」

シグ「主、こればかりは許せませんよ…」

ヴィ「ずるいぞ、はやて！」

シャ「はやてちゃん、クッキー焼いたから食べてね♪」

「はやて？」

は「うん、わかっとる」

2人「三十六計逃げるに如かず！！」

な「ディバインバスター！！」

ドーンッ！

2人「ぎゃあああああああああ！！！」

その後、俺はＯＨＡＮＡＳＨＩをされて、
はやてはシャマルのポイズンクッキングの犠牲者となった…

特別編：はやてと（後書き）

はやて終了。
よっぱらうとはやてはキス魔になるということにしました。

次回は誰かな～

では

特別編：フェイトと

フェイトは自室で家族と電話で話していた。

久しぶりのアリシア
「フェイト！いつになったらウィルに告白するの？」

フェ「え！？こ、告白って、そんな…」

これまた久しぶりのプレシア
「ぐずぐずしていると他の子に盗られちゃうわよ？」

フェ「で、でもまだ心の準備が…」

アリ「そんな妹にやさしいお姉ちゃんはこれをあげよう！」

フェ「これは…チケット？え～と水族館？」

プレ「この前ミッドに新しく出来た水族館のチケットよ。ウィルと行ってきなさい」

フェ「お母さん、姉さん…」

アリ「そして最後に情熱的な告白を…キャー」

フェ「ど、努力するよ…」

隣の部屋のウィリアムはエディと話していた。

「正直言ってここは派手にこうしたほうがいいかな？」

「ん～どうしよっか～。あんまり派手すぎてもねえ。
でも地味なのはないな」

「同感だ」

「じゃあ、艦長の案をそのまま採用ということにしましょうか」

「おっけー。頼んだよん」

「さいなら～」

コンコン

フェ「ウィル？今いいかな？」

「フェイトか。どうぞー」

フェ「あの、今日って暇？」

「見ての通り暇人ライフを満喫しているが？」

フェ「一緒にさ、ここに行かない？」

「ほう、ミッドにできた水族館か。面白そうじゃん」

フェ「じゃあ！」

「おう！行こうぜ」

フェ「やった！じゃあ３０分後に駐車場で」

「あいあい」

「フェイトの奴、超うれしそうだったけど、なんでだろうな？
そんなに魚好きなのかな？」

≪マスター…≫

〈主よ…それはないぞ〉

「そんじゃあ行きますか」

フェ「うん！乗って！」

「俺が運転したほうがいいんじゃないの？」

フェ「私がするの！」

「ほいほい」

ブロロロロロ…

「しかし珍しいな」

フェ「ん？何が？」

「フェイトからお誘いが来るとはね」

フェ「え？ああ、まあその、どうしても行きたかったから…」

「そ、そうか。俺を誘ってくれてうれしいよ。
それにしても…」

フェイトはイメージ的に黒が似合うと思っていたが、
今日は明るい色の服装で実にすばらしい。そして
いつもの髪型とは違い、髪を2つに分けてそれを肩からおろしている。

「Ｍａｒｖｅｌｏｕｓ」

フェ「え？」

「いや、服装といい、髪型といい、全て素晴らしいと思ってな」

その途端、いきなり車が反対車線に飛び出して、危なっかしい
動きをした後、元の車線に戻った。

「ど、どうした！？」

フェ「ごごごご、ごめん！ちょちょちょっと動揺しちゃって！」

「そうか、気を付けてな」

さあやってきました水族館。
うわーここもカップルしかいねえ。
なんでこういう所ってカップルどもが集まるんだ？
おとなしく家の中でよろしくヤっていればのに…

「フォールド爆弾で吹っ飛ばしてやろうか…」

フェ「ウィル、なんか言った？」

「ああ、いやなんでもない。にしてもすごく混んでるね」

フェ「オープンしたばかりだからじゃない？」

「それもそうか。じゃあ手をつなぐか？」

フェ「え？いいの？」

「こんなに混んでるとはぐれるかもしれないし。どうよ？」

フェ「…こうすれば絶対にはぐれないよ！」

と言ってフェイトは俺の腕に抱きついた。

「ふぇ、フェイト！？」

フェ「うふふっ♪さあ行こう！」

「…おーけい。行こうか」

～ここからは適当になりますｂｙ作者～

「うわー鮫でっけーなー」

フェ「すごいね～」

フェ「見て見て！かわいい魚！」

「これは…熱帯魚か。いいね（フェイトの誕生日に買ってみるか）」

「ペンギン！お前らはかわいすぎる！」

フェ「そうだね（ウィルはペンギン好き、と）」

～適当おしまい～

「ん？なんだ、あの人だかりは？」

フェ「行ってみよう」

そこには、こんな看板が。

『マグロの一本釣り体験コーナー』

「……」

フェ「……」

「……誰がやるんだ？」

フェ「……さぁ？」

なんで人だかりができているか、理解できた。

なにがあるんだろう？

←

マグロの一本釣り？

←

ポカーン…

って感じかねえ。

係員「さあさあ、誰か勇敢なチャレンジャーはいないか！
　見事釣りあげた方には記念写真と、釣ったマグロをプレゼントだよ！」

フェ「ウィル…」

「ん？」

フェ「頑張って！」

「え？」

ドンッ！

え、なに。押されたんですけど。

係員「お！そこのあなた！挑戦するんですね！そうですか！ではこちらにどうぞ！」

「……フェイト？」

フェ「あの、ウィルが頑張っている所が見たいな～、なんて思ったりして」

「はあ……。

よし！見てろよフェイト！でかいのを釣りあげるからな！」

係員「これが竿です。ルールは簡単。１０分以内に釣ってください」

「なあ、ほんとに釣ったマグロくれるの？」

係員「ええ、もちろんです！品質等に問題はありませんので」

「おっけー。じゃあカウントよろしく」

係員「では、はじめます！レディー、ゴー！！」

「ほいっと」

ぽちゃん

「お、かかった」

フェイト、観客「はやっ！」

「お、これは、重い、ぞ」

係員（実況）「あーっと、引きずられているチャレンジャー！
このままでは水に落ちてしまう！そうなると失格だ！」

「それを、先に、言え！！」

係員（実況）「さあ、ここからはマグロとチャレンジャーの力比べだ！
どちらが勝つのか！マグロか！それとも！」

フェ「ウィル！頑張って！！」

「うおおおおおおおおりゃあああああああああああ！！！！！」

係員（実況）「彼女の応援のおかげか！チャレンジャーがマグロを圧倒しているぞ！
もう少し、もう少しで釣れそうだ！」

「お前は、少し、だまって、いろ！！」

ゲシッ！

係員（実況）「うわあああああああ！！」ドボーン

うるさい係員を水中にけり落としてから数十秒後、

「てりゃあああああああああ！！！！！」

係員（実況）「やりましたチャレンジャー！おおきなマグロを見事釣りあげました！」

わーわーわー

「つ、疲れた…」

フェ「すごいねウィル！」

「ああ、ありがと…」

係員「え～とただいま計算したところ、このマグロの重さは２５０？だそうです！」

「そりゃ疲れるわ」

係員「では記念撮影を行いますので、お二人はこちらへ」

係員「はいチーズ！」

パシャッ！

「じゃあ、このマグロ、時空管理局の機動６課に送っといて」

係員「わかりました」

フェ「ウィル、大丈夫？」

「まあ、これくらいへっちゃらさ。
ていうかもうこんな時間か。早いもんだな」

フェ「そうだね…ウィル。ちょっとついてきて」

「おう」

来た場所は水族館の近くの海岸。だ～れもいない。

フェ「今日は一緒に来てくれてありがとう」

「な～に、こちらこそ誘ってれて感謝してるよ」

フェ「…私は昔からウィルに色々なことをしてもらっているよね。
お母さんと姉さんを助けてくれて、仕事も見つけてくれて、
友達もできた。みんなウィルのおかげだよ」

「フェイト…」

フェ「いつもウィルに助けてもらってばかりだった。
私の前にはいつもウィルの背中があった。
その背中を見ながら私はここまでこれたんだと思う。
だから…」

フェイトは俺の目をまっすぐに見たまま言った。

フェ「だから私は、あなたが好きでしゅ！？」

「……」

フェ「……／／／」

か、噛んだ。一番大事なところで噛んだぞ…

フェ「う、うぅぅぅ…／／／」

あ、恥ずかしがってる。そりゃそうか。

「ふっ、ありがとう、フェイト」

フェ「わ、笑わないでよ…／／／」

「それは…難しいかもw
でも、お前の気持ちは受け取った。今すぐ返事をしたほうがいいかな？」

フェ「ううん、まだいいよ。ウィルが全部話してくれるまで私は待つから」

「全部、か…」

フェ「まだウィルは私たちに隠していることがあるよね？」

「…ああ、そうだな。わかったよ。
いつか全てを話す。その時に返事をするよ」

フェ「うん、わかった。それと…」

チュッ

フェイトは俺のほっぺたにキスをした。

フェ「これは今日のお礼。ありがとね♪」

「…こちらこそどうも」

６課にて

は「ウィル君！いきなりマグロが届いたんやけどこれはなんや！」

「水族館で釣った」

みんな「は？」

「いまから解体するからみんなで食おうぜ～」

みんな「やったー！！」

デートしたことを怒られずにすんでほっとしているフェイトとウィリアムであった。

特別編：フェイトと（後書き）

フェイトおしまい。

なんかめちゃくちゃですね～

恋愛沙汰を文章にするのってほんとめんどいっすね。

次回は…もうどうしようかな

では

第２８話：最近デートだらけだから一時休憩的な話

ク「犯罪者達に不穏な動き？」

今、私とウィリアムは会議室でお偉いさんと話し合いをしている。
参加者は
俺。
レオーネ・フィルス法務顧問相談役。
ラルゴ・キール武装隊栄誉元帥。
ミゼット・クローベル本局統幕議長。
クロノ・ハラオウン提督。
リンディ・ハラオウン総務統括官。
地上本部のレジアス・ゲイズ中将。

こんな感じ。めっちゃ豪華な顔ぶれだね。

リ「具体的にはどういう…？」

「各管理世界及び管理外世界に潜伏していると思われる次元犯罪者達が、
潜伏場所を出て、ある一定の場所に移動を開始しています。
目的は不明ですが、場所に関しては判明しました」

レ「して、その場所とは？」

「第５２管理外世界、ナル・ハッタ及びその衛星、ナー・シャダー

です」

みんな「！」

その言葉を聞いた全員が身を固くした。
ナル・ハッタは、「故イリーシア」とほぼ同じ規模を誇る防衛力をもっている
犯罪集団が住んでいることで有名であるからだ。

ラ「あそこに逃げ込んでいる、というわけか…やっかいじゃの」

ミ「あそこにいる犯罪者全てを逮捕するには、私たちの力ではちょっと厳しいわね」

レジ「仮に敵の戦艦を撃破して地上に降下できたとしても、勝算はかなり低いでしょうな」

ミ「レジー坊やがそう言うなら、もっと難しいわね～」

レジ「ミゼット議長！もう私は坊やなどでは…」

「あはは、それで対策なんですけど、１つ皆さんに確認してほしいことが」

ク「何をすればいいんだ、ウィル？」

「これを見てほしい」

と言って俺は次元世界の地図をモニターに表示させた。

「この地図が正しいものであると、皆さんに言ってもらいたい」

みんな「？」

皆が地図を確認する。管理世界、管理外世界、観測指定世界等色々記載されている。
特におかしいところは…

レジ「おい、ウィル。ナル・ハッタとナー・シャダーが抜けてるぞ？」

「ちっ、気がついたか」

リ「なんでこの不完全な地図を私たちに正しいと言わせたいのかしら？」

「…みなさん、これをご覧下さい」

そこには、全体的に赤黒い惑星と灰色の衛星らしきものが。

レ「おや、これは…」

ク「ナル・ハッタとナー・シャダー？」

「あたりだ、クロノ。これはこっそり仕掛けた人工衛星からの生中継映像です」

ミ「それで、これを私たちに見せてどうすると…」

「エディ？状況報告を」

「ナル・ハッタ及びその衛星、ナー・シャダーに民間人の存在は確認できませんでした」

「大変結構。で、やれるか？」

「二つ目は厳しいかと」

「まあ、一緒に行けるんじゃね？」

「それにかけましょうか」

リ「ウィル君、何をする気なの…？」

「え？単純なことですよ、リンディさん。

その地図の通りにします」

ラ「待てい！つまり君は…」

「ええ、第５２管理外世界を今からふっ飛ばします、文字どおりに」

みんな「はい！？」

「エディ！久しぶりの砲撃だ！しっかり当てろよ？」

「合点承知！出力最大！目標、ナル・ハッタ及び、ナー・シャダー！
撃ち方用意よし！」

「では始めよう。撃ち方はじm」

みんな「ちょっと待て！」

ガンッ！

「アンチョビ！！」

みんなに頭を殴られて俺は吹っ飛んだ。

「なにすんだよ！」

レジ「なんでお前は惑星ごと吹っ飛ばそうとするんだよ！」

「だってめんどいじゃん！」

ラ「だからといって、それはどうかと…」

リ「ていうかどうやってあの惑星を破壊する気だったの？」

「あれ、リンディさんには話していなかったっけ？」

ク「僕も聞いてない！」

「そうかそうか。３提督のみなさんやレジーには説明したんだがな。
まあいい、とりあえずこれを見てくれ」

そう言って俺はデス・スターの画像を見せる。

リインフォース・アインを助ける時に、はやてたちに見せたように。

ク「これは…何の衛星だ？」

リ「いや、衛星にしてはなんか変じゃない？」

ク「そう言えば…」

「では拡大してみましょう」

ク、リ「え？何これ！？」

ク「鉄の塊？」

リ「いいえ、鉄でできた何かよ」

「これは特製深宇宙移動戦闘ステーションですよ。名を『デス・スター』といいます。
　こいつの主砲、スーパーレーザー砲なら惑星を木端微塵にできますよ」

リ、ク「」

レ「わしらも最初に聞いた時は冗談かと思ったわい」

ラ「だが、実際に足を運んで確かめてきた。間違いなくあれは存在する」

ミ「あんなものをよく作ったね～」

レジ「素晴らしい兵器だな！あれがあれば犯罪者などイチコロだ！」

ク「いや、みなさん、あれって思いっきり質量兵器なんじゃ…」

レジ「管理局の嘱託魔導士であるウィリアムが持っているんだから問題ない」

リ「でも、あれは…」

ラ「こまけぇこたぁいいんだよ！」

ク、リ「（これって細かいことなのか！？）」

レジ「だが、ふっ飛ばさなくてもいいんじゃないカ？」

「ちょうど今集まってんだから、捕まえるより簡単じゃん？」

レ「それは確かにそうだな」

ミ「じゃあ、多数決をとりましょう」

ラ「そうだな！ではふっ飛ばすのに賛成の人！」

俺、レジ、レ、ラ、ミ「」ノ

ラ「反対の人！」

ク、リ「」ノ

「じゃあ吹っ飛ばすということにしましょうか。エディ！」

「いつでもいけますぜ、艦長！」

「了解！それでは、撃ち方始め！」

「往生せいやあああああああああ！！！」

ドカーンッ！↑ナル・ハッタが木端微塵になった音

ズガーンッ！↑ナル・ハッタの破片がナー・シャダーにぶつかった音

「おっ、二つともやったな！」

「いえ～い♪」

レジ「いいなあ、あれ欲しいなあ」

ミ「いやはや…」

レ「すごい威力だな…」

ラ「惑星が一撃で…」

ク「なんてことだ…」

リ「……ウィル君、ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？なんですか、リンディさん？」

リ「もしかして、第７２管理外世界『イリーシア』への攻撃もウィル君がやったんじゃ…」

「大当たり～」パフパフ

リ「」

ク「君が、あの大惨事を…」

「犯罪者が死んで、誰が悲しむんだ？いいじゃないカ！」

ク「…ウィル。君は今まで何人殺したんだ？」

「んなもん覚えとらんよ。というか覚える必要がない」

ク「」

レジ「それには私も賛成だ。犯罪者などみんな殺せばいい！」

ラ「同感だな。死んでも誰も悲しむまい」

ミ「でも皆殺しはちょっとねえ」

レ「あれか？死体の処理がめんどくさいとか？」

「それでしたら、骨すら残らないように焼けばいいのでは？」

レ「その発想はなかった！」

ク、リ「（駄目だ、この人たち、なんか感覚がおかしい…）」

「あー、クロノにリンディさん？大丈夫ですよ。
いずれこれらの兵器は絶対に役に立ちますから」

ク「それはどういう…」

「その時になればわかるよ、クロノ。
よし！そろそろ引き上げるとしますか！
クロノ、レジー！飲みに行こうぜ！」

レジ「おーし、行くか！」

ク「え、ちょっと待て、っておい～」

俺とレジーに引きずられながらクロノは飲み屋に連行されたのであった。

リ「ミゼット議長、本当に大丈夫なんでしょうかね？」

ミ「心配はいらないわよ、リンディ統括官。ウィルは絶対に私たちの信頼を裏切ることはしないわ」

リ「そうですか…、それだけ彼を信頼しているのですね？」

ラ「もちろんじゃ。彼にはいずれ時空管理局そのものを任せたいと考えておる」

レ「ま、本人には内緒だけどな！」

第２８話：最近デートだらけだから一時休憩的な話（後書き）

デートの内容を書くのに飽きたので。
３提督のしゃべり方ってこんな感じでしたっけ？

新しく出てきた惑星の名前は、例によって
スター・ウォーズから引っ張ってきました。

次回は考え中です
では

第２９話：その一方…

「くそ、なんてことだ！ナル・ハッタが爆発・消滅するなんて！」

ケイン・ルーガー大将は自室で独り言を言っている。

彼は時空管理局本局において大きな影響力をもつ人物であり、

そんな彼もまた、裏では色々と悪事を働いていた。

「奴らにはこれから役立ってもらおうと思っていたのに…」

そう。彼ら犯罪者達をあの管理外世界に集めさせていたのは

他ならぬルーガーであった。その目的とはなんなのか。

「くそ…ん？」

その時メールが来ていることに気がつく。

中を読んでみると、他の将官達からのメールだった。

彼らも悪事を働いているくそったれどもであり、今回の件にも関わっていた。

内容はみんな似たようなもので、

「いったいどうなっているんですか！？」

みたいな。

「さて、どうしたものか…」

どこで新たな犯罪者達を確保しようか。
最近は犯罪者が激減しているので、なかなか難しい。

第72管理外世界で敵艦隊を殲滅したとされる巨大戦艦。
あいつが犯罪者の隠れ場所を根こそぎ吹き飛ばしているから、
犯罪発生率が低下し、ゆえに犯罪者がいない。

市民の目から見たらいいことだろう。
だが、私には気に食わない。
…そうだ！

私は”誰”だ？
時空管理局の大将じゃないカ！
何も違法に犯罪者達を集める必要はない！
それならここをこうして…フハハハハハハハ！

おっといけない、テンションが上がるといつもこうだ。
あとやることは。

「ドックの管制室につなげ」

「はい、こちら中央管制室です。どうなされました、大将？」

「例の作業状況が知りたいのだが？」

「只今兵器を積み込み中です。あと１２日で全て完了します」

「素晴らしい。そのまま作業を続けてくれたまえ」

「はい」

これで、うまくいくだろう。
そして私は今の管理局に代わって全ての次元世界をコントロールするのだ！
あーっはっはっはっはっは！！！！
秘書「（また笑ってる…気持ち悪い笑い方だなあ…）」

時空管理局本局にあるドック。
ここでは今ある作業が行われていた。

Ｌ級次元航行艦をより強化したＸＶ級次元航行艦の建造である。

実を言うと艦自体は完成しており、いつでも動かせるのだが、
とある大将からの命令によりＸＶ級全艦において改装作業が行われていた。

ちなみに命令内容は、搭載兵器の一部変更である。

この命令は3提督も知らないし、クロノもリンディも知らない。

知っているのは、とある大将と、とある中将達。

そしてウィリアムだけだった。

ただ、この命令には例外があった。

クロノ・ハラオウン提督が艦長を務める『クラウディア』は対象外で、
まったく手をつけられていなかった。

第２９話：その一方…（後書き）

管理局内の黒幕登場～～

名前は適当に決めました。

次回はデート…多分

では

特別編：シャマルと

「なかなかうまくいかないわね～」

シャマルは医務室で1人唸っていた。

原因は…

「みんなのために作ったのに…もうすこし頑張らなきゃ！」

料理であった。

知っての通り、シャマルは料理が下手である。とても。

彼女が作った料理は、良くて瀕死レベル、悪くて大量破壊兵器レベルの味になる。

周りの人々はシャマルに料理をさせてはいけない、という意見で一致している。

しかし、シャマル自身は料理がしたいので、時々医務室でこそこそやっているのだが…

グリフィス「」

ヴァイス「」

今日もまた、彼女によって殺されかけた人が二人…

「こんなんじゃいけないわね、どうしましょう…」

そんな時、彼女の頭の中に名案が浮かんだ。

「そうだ！料理が上手な人に教わればいいじゃない！」

単純で、理にかなっている考えである。
だが、誰から教わればいいのか。

なのは、フェイト、はやては忙しそうだから却下。
シグナム、ヴィータも同じく。
フォワード達に教わるのもなんだし…
消去法で考えた結果、１人の人物が浮かんだ。

「やっぱ彼に教わりましょう♪」

彼女はうきうきしながら医務室を飛び出し、ある部屋に向かった。

そう、ウィリアムの部屋に…

その頃、ウィリアムは

「ったく、ルーガーのふにゃ○んＥＤ野郎め、勝手に改造してんじゃねえよ」

ルーガー大将のしていることを確認しため息をついた。

「あいつが犯罪者どもを集めていたのか…くそったれが。
でもこんなことであきらめるほど、あいつらはやわじゃねえからなあ。
なんだかんだで奴ら、統制がとれていやがる。厄介だな」

「全くですな、艦長。本局内に限った話ですが、内部の命令系統全てに
彼らの内通者が関わっていますね。普通じゃできませんよ。
しかし、ルーガーは局内でかなり顔が効きますし、
表向きには素晴らしい功績を残している人物ですからね。
何も知らない人々からすればカリスマ的存在でしょう。
ですが、ただでさえＸＶ級は重武装なのに、
こんなことをするなんて…やりずぎですな」

「やつらは誰と戦うことを考えてこんなことをしているんだろうな。
もしかして俺たちかな？」

「その可能性も否定できませんね。
我々が犯罪者をかなり駆逐したせいで、ルーガーはむかついているでしょう。
それにリンディさんが提出した報告書の中に、テクター級が映っていたので、
おそらくルーガーは

『この戦艦が私の邪魔をしているのか…許せんばい！』

って考えているはずです」

「そうか。で、この改ＸＶ級次元航行艦は我が艦隊にとって脅威か？」

「ネガティブ。あり得ません。この程度の改造では、シールドにかすり傷一つ付けられませんな。
ただ、他の次元航行艦には勝てますし、地上攻撃能力も強化されています。
アルカンシェルの威力はそのままにして、発射速度の向上及びチャージ時間の
短縮を行っているので、惑星１つ吹き飛ばすのにそう時間はかからないでしょう」

「そんな化物戦艦を奴らはいっぱい作っている、か…
”あれ”なら耐えられるよな？」

「可能です。”あれ”の強度はエクリプス級とほぼ同じですから」

「ならいいんだ。じゃあ、また何かあったら報告してくれ」

「了解。それでは」

コンコン

「はいはい～、ってシャマル？どしたの？」

シャ「ウィル君、お願いがあるんだけど…」

「なんだ？」

シャ「料理を教えてください！！」

「なのは、フェイト、はやて、その他もろもろ。
これを読んでいる時は私は既に死んでいるでしょう…」カリカリ

シャ「なんで遺書!?」

「だって、その、なにも残さずに死ぬのはちょっとねえ…」

シャ「私の料理…そんなにひどい?シクシク」

「あー、今日は誰?」

シャ「グリフィス君とヴァイス君」

「…よし!
これ以上犠牲者を出さないためにも!
シャマル!俺が料理を教えたる!」

シャ「ほんと!ありがとう!」

「ではレッツクッキング!」

～インフィニティーが記録した調理中の音声～

「おい！なんでそれを入れるんだよ！？イモリのしっぽじゃないか！」

「だってこれ入れたほうが元気になれそうかなって…」

「そのままあの世行きだよ！とりあえずシャマルの持っているゲテモノは没収！」

「そんな～」

「料理における『さしすせそ』！これは重要だ、わかるか？」

「えーと、『さ』が酸、『し』がシリカゲル、『す』が…」

「もういい、よくわかった。俺がきちんと教えてやる…」

「で、この大根の皮をむいて、っと」

「そうそう、上手じゃないか」

「ほんと!?やったー!」

「おい!包丁振り回すんじゃねえ!!」

「え?」すぽーん、ドスッ!

「……」

「……」

「シャマル…」

「…はい」

「どうして大根の皮をむくのに使っていた包丁が、俺の頭の横に突き刺さっているんだろうな?」

「……」

トントントン…

「だいぶ包丁にも慣れたな。よしよし」

「で、これはこう切ればいいのね？」

「そそ」

～音声はここまで～

「「できた！！」」

お皿に盛りつけてあるのは、ブリ大根に豚の生姜焼き。
さてお味はどうだろうか…」

「では、いただきます！」

シャ「…（ゴクッ）」

「……」

シャ「……」

「……うまい！」

シャ「！」

「この大根、味がよく染みているし、ブリもうまい。
そして生姜焼きもご飯によく合ういい味だ。
これなら食堂で出せるレベルだぞ！」

シャ「…本当に？」

「嘘なんか付くもんか！こいつは最高だ！」

シャ「……（ポロポロ）」

「あれ？シャマル、なんで泣いてるんだ？」

気がつくとシャマルは声を出さずに泣いていた。

シャ「よかった…私もきちんとやれば料理ができるんだってわかったから…
　おいしい、って言ってもらえる料理が作れたから…うれしくて…」

そうか、シャマルはみんなにおいしく食べてもらえる料理が作りたかったのか…
俺はシャマルの方をやさしく抱いて言った。

「シャマル…今まではうまくいってなかったけど、これからは違う。
今日のように落ち着いてやればおいしい料理ができるんだから。
もっと自分に自信を持てばいいじゃないか。
そうだ！今度ははやて達に食べてもらえよ！あいつら驚くぞ！」

シャ「…うん、そうね。はやてちゃんをびっくりさせましょう！

それに、今日はありがとう！」

「な～に、気にすんなって」

シャ「それで、これは今日もお礼♪」

ちゅっ

「はい！？」

シャ「うふふ～、真っ赤な顔のウィル君もかわいいわ～」

「しゃしゃしゃシャマルさん！？何を…」

シャ「もう、女性の口から言わせたいの？」

「えーあーつまりその…」

シャ「そういうこと♪返事はなるべく早くお願い♪」

「…善処します」

「お残しは、許しまへんでぇ！！」

みんな「いただきます！」

は「うまい！」

な「おいしいの～♪」

フェ「おいしい…」

ヴィ「はやてやウィルの料理はギガウマだな！」

シグ「うむ、おいしい」

ス、エ「おかわり！」

キャ「早い！？」

テ「スバル！もっと落ち着いて食べなさいよ！」

ス「だっておいしいんだもん～ウィルさんの料理」

週に一回俺は夕食を作っている。

何気に人気でお忍びで3提督もやって来ることも。

「あー、言うの忘れていたけどな？」

みんな「？」

「実は今日、俺は料理していません！」

みんな「え？」

ス「じゃあ誰が作ったんですか？」

シャ「私よ～♪」

その瞬間、がつがつ食べていたスバルとエリオは箸を口に持っていく途中で手が止まり、
その他の人々も動きを止めてしまった。

は「ウィル君？冗談はよしてな？こんなにおいしい料理をシャマルが作れるわけが…」

「はやて、冗談でこんなこと言うわけないだろ？
シャマルは日々特訓してこんなにおいしい料理を作れるようになったんだぞ？」

ヴィ「シャマル…本当にこれお前が？」

シャ「そうよ」

シグ「…素晴らしい」

フェ「あの殺人兵器が…」

な「ウィル君の料理と同じくらいおいしいの…」

「そりゃ俺が教えたからな」

シャ「えへへ～♪」

ガタッ！↑スバル、ティアナ、キャロ以外の女性が席を立つ音

ジャキンッ！↑デバイスを構えた音

「は？」

シャ「い？」

は「シャマル…ウィル君と二人っきりでお料理教室か…」

ヴィ「いい度胸してんじゃんか…」

シグ「主を驚かせたいという気持ちはわかるが、私達に無断で、というのはいかんな」

な、フェ「ずるい（の）…」

「「「「「二人とも、ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか…？」

シャ「いやあああああああああ！！！」

「ふ、不幸だあああああああああ！！！！！」

ザフィ「女の嫉妬とは怖いものだな…」

エ「…ですねぇ」

特別編：シャマルと（後書き）

シャマル先生おしまい。

はあ、つかれた。

このままヴォルケンズ攻略しよう。

では

特別編：ヴィータと

ヴィ「おい、ウィル！」

「ん？なんだ？」

ヴィ「明日暇だよな？」

「まあ、暇って言えば暇だが…」

ヴィ「遊びに行こうぜ！」

「どこに？」

ヴィ「それは男が決めるもんだろ！じゃ、明日の朝１０時に玄関な～」

「おい！、って行っちゃった…」

嵐のようなヴィータであった。

しかし、どこに行ったらいいものか…

「遊園地は行った、水族館も行った、動物園も行った、さてどうしよう…

いや、待て。なんでミッドだけで考えてるんだ、俺は？

他の場所もチェックせねば」

探すこと１０分…

「こ、これはっ！！」

俺はあるウェブサイトにたどり着いた。

「これならヴィータも喜ぶ、というかヴィータしか喜ばないだろう」

目的地を決めて俺は寝ることにした。

Ｓｉｄｅ　ヴィータ

「明日はどこに連れて行ってくれるのかな～♪」

私はとても楽しみで寝れないでいた。

でも、どこに行くんだろう？

はやては動物園に行ったらしいし、フェイトは水族館、ティアナは遊園地。

ミッドで他に行く場所ってないんじゃないか？

「ま、そこはウィルに期待するか」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

翌日

「…来ねえ」

俺はヴィータを待っているんだが、あの子、来ない。
もう予定時間を２０分もオーバーしている。

「まだ寝てんのかな？」

と、その時。

ヴィ「おおおおくううううれえええええたあああああ！！！！！」

あ、ヴィータさんが全力疾走でやってきた。

「やっと来たか、って…」

あのスピードだと絶対止まれないだろ。

ヴィ「とととと止まんねえええええ！！」

「おらよっと！」

俺は走ってくるヴィータを受け止めた。

ヴィ「うぃウィル？／／／」

「まったく、朝から元気だな？」

ヴィ「うっ、遅れてごめん…」

「気にするな。それじゃあ行こうか？」

ヴィ「うん！」

だが、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

な「ウィル君、なんで朝からみんなの前でヴィータちゃんと抱き合っているの…」

フェ「嫌がらせにしては悪質だよね…」

「げ、いたのか…」

俺とヴィータは周りのことを全く考えていなかった。

なのはとフェイトが超睨んでる。
これ以上何か言われる前に逃げるべきだ。
俺はそう感じて逃げようとしたが、

ヴィ「ウィルはあたしのものだぞ！」

野次馬「な、なんだって～！！」

「ちょ！何爆弾発言してんだ！？」

な、フェ「……（ジャキンッ！）」

「やべっ！ヴィータ、行くぞ！」

ヴィ「行くってどこにっ！？」

な、フェ「待って（なの）！」

俺はヴィータを抱いたまま転移魔法を発動し、その場からとんずら

した。

「ふう、死ぬかと思った…」

ヴィ「ここどこだ?」

俺たちは目的地の近くに転移した。

「ここは第97管理外世界の日本、海鳴市の郊外だ」

ヴィ「え!ほんと!?」

「おう。あとでなのはの実家にも行こうぜ」

ヴィ「そうだな、で、あたしたちはどこに行くんだ?」

「それは、あれだ。ついてからのお楽しみってやつだ」

近くのバス停からバスに乗って１０分…

「着いたよん」

ヴィ「ここって…」

やってきたのは海鳴市にできたショッピングモール。

「まあ、屋上に行こう」

ヴィ「……？」

チーン

エレベーターのドアが開くと、そこには。

ヴィ「うわあああ…」

ヴィータが超うれしそう。
それもそのはず、今日このショッピングモールの屋上で開催しているイベントは、

『のろいうさぎフェスタ』

である。ヴィータが大好きなキャラクターである。

ヴィ「あっちにも！こっちにも！いろんなとこにのろいうさぎがいる！」

「よし、それじゃあ色々と見て回るか！」

ヴィ「うん！」

ヴィ「のろいうさぎ焼き…だと…？」

「へぇ～中にあんこが入ってる。うまいじゃないか」もぐもぐ

ヴィ「のろいうさぎを焼くなんて、許せん！」

「ちょ！ここでアイゼン振り回すんじゃねえ！」

「でっけえ…」

店員「こちらの超どでかのろいうさぎ人形は、大きさ2mとなっております」

ヴィ「いくらなんだ？」

店員「はい、こちら50，000円となっております」

ヴィ「足りない…がっくし」

「すいません、これ下さい」

ヴィ「ウィル！？」

店員「ありがとうございます」

ヴィ「いいのかよ？」

「構わんよ。ヴィータのは何かと世話になってるしな」

ヴィ「あ、ありがと…／／／」

「しかし、これ持ったまま歩くのはきついな…」

店員「それでしたら、こちらでお預かりしましょうか？
お帰りの際にお渡しする形でどうでしょう？」

「あ、いいの？じゃあそうしてもらおうかな」

『のろいうさぎと記念撮影コーナー』

ヴィ「これは行くしかないな！」

「そう来ると思ったよ」

係員「では次の方、どうぞ」

「はいはい」

係員「お子様ですか？かわいいですね～」

ヴィ「あたしは子供じゃねえ！！」

「すいません、この子俺のいとこなんですよ」

係員「そうでしたか、それは失礼しました。では撮りますよ」

ヴィータはのろいうさぎと、俺はヴィータと手をつなぐ。

係員「はい、チーズ！」

カシャッ！

「ふう、いっぱい買い物したな～」

俺は右手にのろいうさぎグッズが詰まった買い物袋を持ち、左手でヴィータと手をつなぎ、背中に超どでか人形を背負っている。

ヴィ「ウィル！今日はありがとな！超楽しかった！」

「そいつは何よりだ。喜んでくれてよかったよ」

ヴィ「…よく考えるとさ」

「ん？」

ヴィ「あたし達ヴォルケンリッターはみんなウィルに助けてもらってんだよな。

はやての病気も治してくれたし、闇の書、いや夜天の書の問題も

解決してくれた。あたし達、助けてもらってばかりだ。

ウィルに対して何もできてない気がするんだ…」

「ヴィータ、俺はお礼とか、そういうもののために助けているんじゃ…」

ヴィ「でも！なんかお礼をしないとあたしの気が済まねえ！」

「…具体的に言うとどんなお礼がしたいんだ？」

ヴィ「ええ！？そ、それは、その、つまり～／／／」

「なんでそこで顔を赤くするんだ？」

ヴィ「うううううるさい！ウィル！とりあえずしゃがんでくれ！」

「はい？」

ヴィ「いいから！」

「まあ、お安い御用だが…」

そう言って俺はしゃがんだ。すると、

ヴィ「これで、できる…」

「え？」

ちゅっ

「わーお…」

ヴィ「こっこっこここれがおおおおお礼だ！」

「落ち着け、それに、ありがとな」

ヴィ「ううー、恥ずかしい…」

「お前の気持ちはしっかり受け取った。返事は…」

ヴィ「まま待て！あとでいい！」

「あらそう？じゃあそうしよう」

そして俺たちはミッドに

超久しぶりのアリサ

「ウィル！何してんの！」

同じく超久しぶりのすずか

「ウィル君！久しぶり！」

帰れなかった。

「あ、アリサにすずか？どうしてここに…」

ア「どうもこうもこの近くは私のうちじゃない！」

「そうだったね」

す「海外に留学しているって聞いたけど、いつ日本に？」

「え～と…」

まずいな…アリサやすずかには魔法のことを何も話していないんだった。
なのはやフェイト、はやての許可なしに話してはいけない気がする。
どうしよう…

ヴィ「ウィル…誰だこの女ども？」

ア「口のきき方が悪いわね。そういう時は自分から名乗るものじゃないの？」

ヴィ「あたしはヴィータだ。あんたは？」

ア「アリサ・バニングスよ。ヴィータ、あなたウィルとはどういう関係？」

ヴィ「大切な仲間だ！」

す「大切って…」

ヴィ「あんたは…」

す「あたしは月村すずか。よろしくね、ヴィータさん」

ヴィ「おう、よろしくっ！？」

「どうした、ヴィータ？」

すずかと握手したらヴィータは固まってしまった。

ヴィ「あ、いやなんでもない」

「そか。悪いな、ありさ、すずか。これから用事があるからまた今度会おう！」

ア「ちょっと待ちなさいよ！」

す「また会えるよね？」

「近いうちに必ず。ではな～」

俺はヴィータと袋と人形を持って路地裏に入り、転移魔法でミッドに戻った。

ア「すずか、私気になってたんだけどさ」

す「うん…」

ア「なんでウィルの奴、でかい人形背負っていたのかしら？」

す「さあ…」

ヴィ「さて、ウィル。あの二人とはどういう関係なんだ？」

「アリサとすずかは小学生の時の同級生だよ。会ってなかったっけ？」

ヴィ「…覚えていない」

「そか…さて、無事に6課に戻ってきたわけだが…
この後も無事でいられるかは、神のみぞ知るだな」

目の前にはなのは、フェイト、はやて、シャマル、シグナムがいた。

な「おかえり、二人とも」

フェ「楽しかった？」

は「さて、どこに行ってたんや？」

シャ「教えてくれるわよね～？」

シグ「ヴィータ、素直に白状しろよ？」

「はあ、どうする、ヴィータ？」

ヴィ「言われたとおりにするしかないだろ。あたしはまだ死にたくない」

「同感」

そして俺たちは今日起きたことを包み隠さず話すことにした、キスのこと以外は。

な「アリサちゃんにすずかちゃん…」

フェ「元気にしてた？」

「ああ、元気だったよ」

は「そうか～会いたいな～」

「そこで提案なんだが…」

「「「？」」」

「第９７管理外世界の現地協力者をアリサとすずかにするってのはどうだ？

俺達、一応海外留学しているってことになっていると思うけど、いつまでその嘘が通じるかわからないじゃん？だからあえて全て

話して
　管理局の民間人協力者になってもらおう、って考えたんだが、どうよ？」
は「それは確かに一理あるなあ」
な「賛成！」
フェ「同じく！」
「あとはアリサとすずかが納得するかだな。
まあ、今度みんなが暇な時にでも行こうぜ」
「「「うん！」」」
ヴィ「なあ、ウィル、すずかって子なんだが…あいついったい何者だ？」
「え、何だよ何者って」
ヴィ「あいつ人間じゃない気がする」
「はい？」

ヴィ「握手した特になんか普通に人間とは違う感じがしたんだ」

そうだった。すずかって吸血鬼だっけ？

「…そうか。それについては何も知らんな」

ヴィ「ふうん。まあ、敵対意識があるわけじゃないし、特に問題はなさそうだな」

「ああ」

まあ、本人から言われるまでは放置しておこうかね。

「あ、家に帰るの忘れてた」

特別編：ヴィータと（後書き）

ヴィータおしまい。

シグナムどうしよう…悩み中。

では

特別編：バレンタイン

昨日の話

な「フェイトちゃん、明日は何の日か知ってる？バレンタインだよ！」

フェ「バレンタイン？」

な「女の子が好きな男の子にチョコレートとかクッキーとかをあげる日なんだよ」

フェ「なのは！！仕事してる場合じゃないよ！早く作ろう！」

な「いや、仕事はしようよ…」

それを聞いていたシグナムはヴォルケンズに相談。

シグ「という話を聞いたのだが、どうだろう?私たちも作らないか?」

シャ「それはいいアイデアね」

ヴィ「あたしも手伝う!」

ザフィ「私は…味見でもするか…」

さらにそれを聞いていたスバルはティアナと姉のギンガに相談。

ス「ティア〜、チョコ作ろうよ〜」

テ「そうね、やるしかないわね!」

ギ「私も頑張らなきゃ!」

その時、ウィリアムはアリサとすずかを連れて地上本部にいた。
前回彼女らを協力者にしようということになり、全部話したら、

アリ「そんな面白そうな話、見過ごせないわ！」

と快諾してくれた。よって今その手続き中。
俺は暇人。

と、俺が座っていたソファの対面にある女性が座った。

「やあ、調子はどうだい？」

「相変わらずですよ、ロンバートさん」

彼女はナンバーズ？2、ドゥーエである。
地上本部に潜入して情報収集を行ったり、最高評議会の脳味噌入れの点検などを行っている。

「あいつら元気？」

ド「残念ながら、ね」

「そうかい、で何か新しい情報は？」

ド「これに入れてあるわ」

ドゥーエは俺にチップを渡した。

「いつもすまんな」

ド「いいのよ。これが仕事なんだから」

「今度、一緒に食事でもどうだい？」

ド「じゃあ、連絡ちょうだいね」

「おう、気を付けてな」

アリ「ウィルー！」

「お、来たか」

すず「終わったよ～」

「じゃあ、地球に戻るか」

アリ「その前に！これ！」

すず「わ、私も！」

「ん？これは…」

アリ「明日会えないから今日渡しとくわよ。
べ、別にあんたのために作ったわけじゃないんだからね！」

すず「アリサちゃん、素直になろうよ…これ、食べてね？」

「…二人とも、ありがとう」

「何が起きたんだ…？」

俺が６課に戻ると、隊舎から煙があがり、そこらじゅう焦げ臭かった。

ギ「ウィルさん！お久しぶりです！」

「おお、ギンガか！空港以来だな。立派に成長したんだな」

ギ「あのときは本当にありがとうございました」

「なに、気にするなって。ところでこれはいったい…」

ギ「あー大丈夫ですよ？ちょっと煙が多く出てるだけですから」

「なにをどうやったらこうなるんだろうな？」

ギ「…聞かないでください。彼女たちの名誉のためにも」

「？まあいいや。積もる話もあるだろうし中でお茶でも…」

ギ「今なかには入れません！他の所に行きましょう！」

「ん～了解。じゃあどっか喫茶店にでも行くか」

街中の喫茶店

「それでギンガは今陸士１０８部隊だっけ？」

ギ「そうです。父が部隊長を務めています」

「ああ、ゲンヤさんか。しばらく会ってないな」

ギ「父をご存じで？」

「ああ、地上の全部隊に新型装甲服が配備されたときに、俺が指導に回ってね。
その時に会って、飲みに行って二日酔いになった記憶が…」

ギ「あ、あはは…所で今６課ではどんな犯罪者を追っているんですか？」

「最初はジェイル・スカリエッティだったんだが、今は別の奴だ」

ギ「それって例の…」

「ああ、ドロイド軍団を作っている奴だよ。こいつがなかなか厄介でな」

ギ「と言いますと？」

「…大声じゃ言えねえが、あれには最高評議会が関わっている」

ギ「え」

「このことは誰にも言うなよ？そう言えば８年前の変な事件にも最高評議会が関わっているっていう噂があったな」

ギ「８年前…」

「あ、すまん…」

ギ「いえ、大丈夫です。ウィルさんもあの事件を？」

「ああ、知っている」

ギ「母さんの部隊は壊滅。本当に悲惨な事件でしたね…」

ん～ギンガとスバルには真実を言ってもいいかな。

「ギンガ、この後暇か？会わせたい人がいるんだが」

ギ「え？わかりました」

「それとスバルも呼んでくれ。彼女にも関係がある」

ギ「スバルも？わかりました」

ギンガがスバルに連絡している間に俺はゼストさんとメガーヌさんに電話する。

「ゼストさん、メガーヌさん、今いいですか？」

ゼ「ウィルか、どうした？」

メ「ウィル君、どうしたの～？」

「実はですね…」

事情を説明！

んで、俺たちは海岸沿いのベンチに座っている。

「さて、そろそろ来るはずなんだが」

ギ「ウィルさん、誰が来るんですか？」

ス「ギン姉と私に関係ある人って？」

「ん～正確にはお前らの母親に関係があるかな？」

ス「母さんに？」

ギ「…ウィルさん、もしかして」

「ん？」

ギ「もしかしてウィルさんは私たちが…」

「戦闘機人であることを知っている」

ス「！」

「心配するな。俺はそれくらいのことで差別なんかしないさ」

ギ「でも！私たちは普通の人とは体が違うし…」

「だからなんだ？」

ス「ウィルさん！」

「スバル、ギンガ。人間とはどういう生き物だ？」

ス「？？」

スバルは基本的にアホの子なのでわかんないだろうな。

ギ「……」

「いいか。人間が人間たらしめているものは一つしかない。己の意思だ」

ス「意思？」

「そうだ。スバルにはスバルの考え方があるし、ギンガにはギンガの考え方がある。
その意思がある限り、お前らは人間なんだよ。人間は魂の、心の、意思の生き物
だからな。だから、俺はお前らを否定することなど絶対にしない。
もし否定する奴がいたら、そいつら全員たたき潰して犬の餌にしてやる」

ギ、ス「……（ポロポロ）」

「え、なんで泣いてんの」

ス「私たちを、人間だってきちんと言ってくれる人なんて、今までいなかったから…」

ギ「受け入れてくれる人がいて…うれしかったから…」

「いつだって俺はお前らの味方だよ。それだけは確実に言える」

ギ、ス「うぃ、ウィルさ～ん！うえええええええん！！！」

「よしよし」

5分後

「さて、来たぞ」

ギ「え？」

ス「ふぇ？」

ギンガとスバルが振り返ると、そこにはゼストさんとメガーヌさんがいた。

ゼ「はじめまして、だな。私はゼスト、ゼスト・グランガイツだ」

メ「その部下のメガーヌ・アルピーノです！」

ギ「え！ゼストって確か母さんのいた部隊の…」

ス「うそ！」

ゼ「そうだ。クイントは私の部下だったよ」

メ「あなた達がクイントの子供なのね～」

ギ「えっと、なんであなた達は生きているんですか？
報告書では亡くなっていることになっているんですが…」

メ「ウィル君に助けてもらったの～」

ギ、ス「」

ゼ「私もだ。間一髪で助けてくれた」

ギ「じゃあ母さんは…？」

ゼ「おい、ウィル、話していないのか？」

「あ、忘れてた。実はなクイントさん生きてるぞ？」

ス、ギ「え」

「ゼストさんとメガーヌさんを助けた後、俺はクイントさんの所へ向かった。
だが彼女は死にかけていてな」

ギ「そんな…」

「それで治療魔法で治そうとしたんだが、肉体の損傷が激しくてまだ治っていないんだ。多分あと2カ月位で治るんじゃないかな？」

ス「母さん、生きてたんだ…」

ゼ「ちなみに私の部隊を襲ったのは最高評議会直属の部隊だ」

ギ「」

メ「あの戦闘機人プラントは評議会が運営してたからね～」

ス「」

「今さらっと爆弾発言したけど他言無用な。
あとゼストさんとメガーヌさん、それにクイントさんが生きていることも内緒で」

ス、ギ「は、はい」

「じゃあ、また今度会いましょう」

メ「ルーテシアも会いたがっていたわよ～」

「了解です。お茶会でもしましょうかね」

帰り道

ス「ひどいよ、ウィルさん！」

「ああ、すまなかったな。すっかり忘れていたよ」

ギ「でも母さんが生きていたなんて…良かった…」

「あ、ゲンヤさんにはもう言ってあるからね」

ス「でもウィルさんの魔法でもそんなに時間がかかるなんてどんだけひどかったんですか？」

「え～と、確かおなかから下全部吹っ飛んでた気が…」

ギ「ひい！それ以上は言わないでください！」

ス「き、気持ち悪い…」

「す、すまん…」

で、６課に戻ってきたわけだが。

「なんかさっきよりひどくなっているのは気のせいだろうか」

さっきは白い煙だったのが、今では真っ黒に。

中に入ろうとすると、

ア「ウィル！今は駄目だ！」

ツ「入っちゃだめです～！」

リイン姉妹がとうせんぼするし。

「あ～じゃあちょっと飲みに行ってくるわ」

「レジー！飲みに行こうぜ！」

レジ「いいな！」

ジェ「おやウィルじゃないか」

「ジェイル！飲もうぜ！」

レジ「酒とつまみは持ってきたぞ！」

翌日の朝

「あ、頭いてえ…」

俺はふらふらになりながら6課に戻った。
レジーもまた死にそうな顔をしながら地上本部に戻って行った。

「風呂入って寝よ…」

そして俺は夢の中へダイブした。

な「できたの！」

フェ「これでオッケーだね」

は「よ～しウィル君に渡すで！」

テ「フフフフ…」

ス「てぃ、ティア？大丈夫？」

ギ「作っておいてよかった」

シグ「はぁ…」

ヴィ「どうしてこうなった…」

シャ「できた～♪」

昼過ぎ

「おなか減った…ひもじいよぅ」

俺は飯を食いに食堂に。すると。

みんな「ウィル（君）（さん）！！」

「うおっ！なんだ？」

は「今日はバレンタインデーや！」

「そうだな」

な「だからみんなでチョコ作ったの！」

「なるほど、だから昨日あんなに黒煙が上がっていたのか」

フェ「あ～それは多分…」

シャ「シグナムとヴィータのせいね」

よく見るとシグナムとヴィータはチョコをもっていない。

「…何があった？」

ヴィ「チョコ砕くのがめんどいからアイゼン使ったらまな板ごと潰れた」

シグ「チョコ溶かすのにレヴァンティン使ったら焦げたり蒸発した」

「……無念」

な「というわけではい！あげる！」

フェ「私も！」

は「きっとうまいで！」

シャ「はい！」

ス「ウィルさん、これも！」

ギ「どうぞ！」

「おお、ありがとうみんな！ってティアナ？お前はないの？」

ティアナはチョコをもっておらず、頭にリボンをしていた。

ス「ティア？なにしてんの？」

テ「ウィルさん…チョコじゃなくて私をあげます！！」

そう言いながら抱きついてきた！

みんな「な、なんだって～！！」

「てぃ、ティアナ！色々と落ち着け！」

テ「うふふふ…」

「だー！ここで脱ごうとするんじゃねえ！」

テ「じゃあ部屋に行きましょう！」

「そういう問題じゃねえ！お前は痴女か！」

テ「いいじゃないですか！」

「よくない！ってひい！俺は逃げる！」

〈マァキシマムスピード〉

テ「え？」

な「ティアナ？3秒以内に謝らないと、頭、ぶち抜くわよ？」

フェ「ふぁ～い、1！」

な、ス「ディバインバスター！！」

フェ「雷光一閃！！」

は「ラグナロク！！」

シグ「紫電一閃！！」

ヴィ「ラケーテンハンマー！！」

ドガーンッ！！！！

テ「に、2と、3は…ガクッ」

は「知らんな、そんな数字」

シグ「女はな1だけ覚えとけば生きていけるんだ」

キャ「え、エリオ君…」ガクガク

エ「だ、大丈夫！僕がキャロを守るから」

ザフィ「女の嫉妬とは（ｒｙ」

ティアナへの制裁（？）のせいで６課の隊舎が半壊したのは気のせいです。

特別編：バレンタイン（後書き）

バレンタイン…つかれた

シグナムとのデートはもう少し待って下さい。

では

特別編：シグナムと（前書き）

前回のバレンタインは、原作で言うＪＳ事件の後にあったと考えてください！

特別編：シグナムと

ガガガガガガガ…

キュイーン…

さて、前回６課の隊舎が半壊して、現在修復中ですが、

な「なんでウィル君の部屋は傷一つないの！？」

そう、俺の部屋は無傷である。

こんなこともあろうかと！！

俺の部屋には小型のシールドジェネレーターが置いてあるのだ！

これなら某白い悪魔の全力全壊スターライトブレイカーを食らっても

問題ないのである。

フェ「私たちの部屋はボロボロなのに…」

は「服があらかた吹っ飛んでしもうた！」

女性は大変ですね～、って、ん？

ふと食堂のほうに目を向けると

シグ「……」

シグナムが何やら難しそうな顔をしながら何かとにらめっこしていた。

あのシグナムが悩んでいるだと？珍しいな。

俺はそう思い、声をかけた。

「ハローシグナム。朝から何とにらめっこしてんだ？」

シグ「うぃ、ウィル！？こ、これはだな、その…」

若干顔を赤くしているのはなんでだろ。

「おや、それって…」

よく見るとシグナムが持っているのは、女性向けのファッション雑誌だった。

シグ「じ、実はな…主はやてが…」

～回想シーン～

は「シグナム！これやるわ！」

「はい？これは雑誌…？」

は「シグナムもこういう服でおしゃれしたらええんと思うんよ」

「お、おしゃれ！？」

ヴィ「いーんじゃねえか？いつも地味な服だし」

「ぐさっ」

シャ「こういう服を着ているシグナムも見てみたいわ～」

「シャマルまで！」

ザフィ「主があそこまで言っているのだからいいではないか」

「…わかりました」

ヴィ「そういえばザフィーラも服ないんだよな？」

ザフィ「私はいつもこの姿（狼）だからな…」

～回想おしまい～

シグ「…というわけなんだ」

「なるほどね～、それでシグナムはどれにしようか悩んでいたと」

シグ「ああ…」

「雑誌とにらめっこするよりも、実際に足を運んでチェックしたほうがいいと
思うんだが、一緒に行かないか？」

シグ「いいのか！？」

「男の意見も聞いたほうが参考になるんじゃないか？」

シグ「…ありがとう。ではお願いする」

「じゃあ１０分後に玄関で」

≪前回もさりげなくスバルさんとギンガさんにフラグを立てて…≫

〈まったく、フラグの乱立は危険だぞ、主よ〉

「それじゃあれっつらごー」

シグ「ご、ごー…」

はい、着きました洋服屋。

シグ「こ、こんな服もあるのか…」

「まあ、色々あるから悩むよね～」

シグ「うぃ、ウィル。選んでくれ」

「は？俺が？」

シグ「わ、私はおしゃれと言われてもよくわからないんだ。頼む」

「え～うん、了解」

「もうすぐ夏だし、こういう薄手のワンピースなんてどうよ」

「なるほど、涼しげだな」

「いや、シグナムならこういうのもいいかも！」

「こ、これは！」

タンクトップ＋ホットパンツ。
ブラックラグーンのレヴィみたいなやつ。

「いいねいいねぇ、素晴らしいねえ！」

「ウィル！これは恥ずかしいぞ！／／／」

「う～ん、それじゃあ…あっ！」

「どうした？なんかいい案でも？」

「ああ！ただここには売ってないから、とりあえずここで幾つか買ってから移動だな」

結局。
シグナムはカーディガンにTシャツにワンピースを購入した。
俺が例の2つを買って、こっそりシグナムの袋に入れたのは内緒である。

「じゃあ、次の店に行こうかね」
シグ「どこにあるんだ?」
「よし、じゃあ行くぞ?」
シグ「え?」

俺はシグナムの手を握って転移した。

「ほい到着」

シグ「ここは…」

「おなじみ日本です。んでこの店だな。すいませーん！」

店員「はい、なんでしょうか？」

「この女性にあう浴衣を探しているんですが」

店員「かしこまりました。ではこちらに」

シグ「ウィル、いいのか？」

「気にするなって。いいからほらほら」

３０分もしないうちに。

シグ「うぃ、ウィル。どうだ？」

「……」

シグナムは、淡い紫の百合が美しい、落ち着いた上品な浴衣を着ており、
涼しげな青いグラデーションの小袋帯をしていた。

「…綺麗だ」

シグ「……／／／」

「サイズとか大丈夫か？」

シグ「ああ、問題ない」

「じゃあこれ下さい、はいカード」

店員「ありがとうございます」

シグナムは浴衣一式を手に入れた！

「いや～いっぱい買い物できてよかったよかった」

シグ「そうだな。ウィル、今日は色々と助かったよ」

「なに、シグナムの浴衣姿を見れたから満足だよ」

シグ「…ばか」

「そう言えば、浴衣を着ている時に気になったんだが」

シグ「ん？」

「それ、つけてくれているんだな」

シグ「これか？」

俺が指さしたのはシグナムの首にかかっているネックレス。
それは俺が昔プレゼントしたものだった。

「大切にしてくれてうれしいよ」

シグ「当たり前だ。好きな人からもらったんだから」

…

……

……

……

……

……

……

……

……

「え？」

シグ「あ！いや、その、つまり…」

超真っ赤っかになっとる！

「え～とシグナムさん？」

シグ「……うぅ」

は、恥ずかしがっているシグナムだと！こんなにかわいいものを今までに見たことがあるだろうか。いやない！（反語）

「シグナム、その、今の言葉は聞かなかったことにする。だから、日を改めて言ってくれないか？」

シグ「…待っていてくれるのか？」

「いつまでも俺は待っているよ、シグナム」

シグ「ありがとう、ウィル」

6課に戻って。

シグ「こ、これは…」

は「大胆やん～これはいいやないか」

こっそり入れといたホットパンツ＋タンクトップ。

シグ「主！揉まないで下さい！！」

は「やっぱこういうのは胸のある人が着ないとな～」

シャ「私でも似合うかしら？」

ヴィ「…どーせあたしには胸ないもん」

特別編：シグナムと（後書き）

そういえば、アリサとすずかもハーレムに入れたほうがいいんですかね？
入れるか入れないかアンケートを取りたいと思います。

ハーレムに
1、入れる。
2、入れない。

明日の朝7時までにお願いします。

では

特別編：アリサとすずかと（前書き）

仲間はずれはよくない、という意見が多かったので
アリサとすずかもデートします。

特別編：アリサとすずかと

ア「すずか！あれ持ってる？」

す「ちゃんと持ってきたよ！」

ア「じゃあ行くわよ！」

す「うん！」

ア、す「ウィル（君）の部屋に！」

「それで状況は？」

「ミッドチルダの２つの月の防衛システムの構築は完了しました。
あとは敵がやってくるのを待つだけですね」

「大変結構だ。敵はしばらく来ないだろうがな」

「艦長～戦争したい～」

「気持ちはわかるがもう少し待て。じきに大戦争をやらせてやるよ」

「わ～い！あ、そうそう。１つ耳より情報が。
ルーガー大将率いる部隊が最近犯罪者の大量検挙に成功したとか」

「あの包○ＥＤ野郎が？」

「ええ。捕まえた奴全員を第２管理世界の収容所にぶち込んでるんだって」

「ふうん…あいつ、何をたくらんでいる？」

「今のところ不明ですね」

「そか。まあいいや、それじゃまた」

…ドドドドドド！！

なんか工事の音とは違う音が近づいてきた。
何事かと扉を開けようとすると。

ドーンッ！

「セイシェル！！」

急に扉が開き、俺は誰かにタックルされ後ろに吹っ飛んだ。

「ゲホッ…誰だよ、ってアリサ？それにすずかも」

ア「ウィル！暇よね！？」

す「一緒に遊びに行こう！？」

「いや、ちょっと待ｔ」

ア「１０分後に玄関ね！」

す「待ってるからね～」

「まじかよ…」

「んで？どこに行くんだ？」

す「私達今日地球に戻るからそのついでに遊びたいなって…」

ア「拒否権はないんだからね！」

「仰せのままに」

地球に戻った俺達3人は、まず実家に挨拶に行った。
久しぶりに帰ってきたので士朗さんも桃子さんも喜んでいた。

士朗「おや、今日はデートかい？」

「で、デート？」

桃子「あら、違うの？」

「いや、向こうから一緒に遊びたいって言ってきたから遊びに来たんですけど」

士、桃、ア、す「……」

「あれ、なんでみんな黙るの？」

桃子「アリサちゃん、すずかちゃん、頑張ってね？」

ア「もちろんです！」

す「こんなことじゃくじけません！」

「何が？」

士朗「ウィル…お前はもう少し女心というものを知ったほうがいいぞ？」

「？」

「さて、最初に来たのはデパートか」

ア「うぃ、ウィル？そろそろ夏じゃない？」

「ああ、そうだな」

す「だから、その、水着を選んで欲しいなって…」

「…了解」

「すずかはこういうビキニはどうよ？」

「わあ、かわいい…」

「アリサは…これでいいや」

「ちょ！これ紐じゃないの！」

「ん～、じゃあこれ！」

「ってV字水着かい！」

「すずかはスタイルいいし、ワンピースもいいかも」

「そ、そうかな？」

「ビキニは目線が上下にわかれるけど、ワンピースは体のラインが出るから、
細い人しか似合わないって言うしな」

「じゃ、じゃあこれにしようかな」

「で、アリサは、これでどうよ？」

「パレオか…」

「おしゃれなのはもちろんだが、下半身をカバーするのにも役に立つし」

「わ、私おなか出てないもん！」

「はいはい、アリサもナイスバディだよな～」

「ふう買い物おしまい～」

ア「ちょっと疲れたわね」

す「そうだね」

「じゃあ、俺飲み物買ってくるから、ここで待っててくれ。何にする？」

ス「緑茶！」

す「じゃあ、紅茶で」

「ほいほい」

ア「はあ、ウィルの奴、これがデートって気が付いていないみたいね」

す「だね～。でも、今日はきちんと言うんでしょ？」

ア「…うん」

す「そうすれば気が付いてくれるんじゃないかな？」

ア「そうなることを祈るわ…」

キキーッ！

突然二人の後ろで車が急停車する。
中から黒ずくめの男が出てくる。

男Ａ「こいつらだ、つれてけ」

ア「ちょっと何するのよ！」

男Ｂ「だまれ！早く乗れ！」

す「や、やめて！」

男Ｃ「誰か来る前に行くぞ！」

アリサとすずかは車に無理やり乗せられてしまった。

ウィリアムは紅茶と緑茶とコーラを抱えて戻る途中に、男たちの車とすれ違ったが、中にいるアリサとすずかには気がつかなかった。

「あれ、二人ともいない。おや、買い物袋が落ちてる」

ポクポクポク、チーン！

「エディ、念の為に二人の現在地を割り出してくれ」

「了解…現在高速で移動中。おそらく自動車と思われます」

「…この辺の防犯カメラの映像をまわしてくれ」

そこには連れ去られる二人が。

「…この車はどこに向かっている？」

「郊外ですね…おそらく廃工場群に向かっているのではないかと」

「よし、それじゃあお姫様達を助けますかね！行くぞ、インフィー、若本！」

≪了解！≫

〈ぶ（ｒｙ〉

俺は光学迷彩を使いながらファイターモードで追跡を開始した。

ア「こんなことしてただで済むと思ってんの！？」

その頃アリサとすずかは廃工場の一角に縛られていた。

男A「バニングス家のご令嬢となれば、たんまり金を出すだろうよ」

男B「そうすれば俺たちは大金持ち！」

男C「そのまま海外逃亡すればめでたしめでたし！」

ア「すずかは関係ないでしょ！解放してよ！」

A「それは出来ない相談だな。彼女は俺たちを見ているからな。
残念ながら死んでもらおう」

す「い、いや！」

B「殺すにはもったいないくらい美人だな。どれ、一発やっとくか？」

C「それはいい考えだな、ひっひっひ」

す「こ、来ないで！」

B「な～に、あっという間に終わるから心配するなって」

と、その時。

「こちらD！誰か応答せよ！」

A「どうしたD？状況を」

D「EとFがやられた！いきなり倒れたんだ！」

B「なに？」

D「死んではいないが、完全に気絶しているぞ」

C「どういうことだ？」

D「それがわかれば苦労は、ぐえっ！！」

A「おい！D！どうした！？」

ブツッ…

B「ど、どうするよA？」

A「…少し早いが場所を変えよう。ここはまずい」

B「そうだな、行くぞC！…C！？」

だが既にCは無力化されていた。

A「いつの間に…」

「あっという間に、だよ。こののろまどもが」

A「！誰だ！」

周りを見るが誰もいない。だが声は聞こえる。

「いやっほ～！」

B「げふぅ！！」

そしてBが見えない何かに吹き飛ばされ、誘拐グループはAだけになってしまった。

A「ちっ！」

そしてAはアリサの頭に9？のベレッタを突きつけた。

ア「きゃああ！」

A「こいつの頭が吹っ飛ばされたくなかったら、おとなしく出てこい！」

「だが断る」

A「なっ！？」

Aは銃を撃とうとしたが、引き金を引いても撃てなかった。
なぜかというと、ウィリアムがベレッタのスライドを握りつぶしたから。
Aには、いきなり銃が潰れる光景しか見えなかった。

「俺の大切な人を傷つけようとしたんだ…覚悟はできてるな？」

A「ひいい！」

とりあえず縄で縛って、アリサとすずかを解放する。

「二人とも無事か？」

ア「ウィル！来てくれると思った！」

す「怖かった…」

「すまんな、遅れてしまって。悪いが、俺はこいつと少しばかりＯＨＡＮＡＳＨＩをしないといけないから、ちょっと外で待っててくれないか？」

ア、す「うん、わかった」

ア「ウィル、かっこよかった…」

す「私たちのこと、大切な人だって…きゃー」

と。

A「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！

！！」

Aの断末魔が。

す「…何したんだろう？」

ア「考えたくもないわ」

「いやー待たせてすまんかった。じゃあ行こうか」

工場の中ではAが股を押さえながら気絶していた。
そばには大量のガムテープが落ちていた…

「なんか今日は色々なことがあったねえ」

夕方、海鳴臨海公園のベンチで3人はくつろいでいた。

ア「ウィルが変な水着を選んだり」

す「誘拐されそうになったり」

「ま、たまにはいいんじゃないか？」」

ア、す「たまに誘拐とかいや！」

「ですよねー」

す「あのね、ウィル君」

「ん？」

ア「ちょ、すずか！」

す「アリサちゃんもほら」

ア「ううー」

「どうした、二人とも」

す「あのね、私達、昔からウィル君が好きだった。
成績も良くて、スポーツもできて、だけどそれを自慢しないで
私達と仲良くしてくれた。だから…」

ア「ウィルは私達にとって漫画のヒーローみたいな存在だった。
今日だって私たちを助けてくれたし…その…大切な人って言っ
てくれたし」

「昔っから俺にとってお前らは大切な人だよ。それは今でも変わら
ないさ」

ア「ほ、ほんとに？」

「嘘なんかついても意味ないだろ？」

す「…ありがと」

「ただ、その、きちんとした返事はもう少し待ってくれないか？」

ア「どうして？」

「いや、それがミッドで今色々と問題があってだな…」

す「返事、聞きたかったな…」

ア「ウィル～」

「…すまんな」

す「じゃこれで許してあげる♪」

ちゅっ

ア「あああああ！！」

「すずか…」

す「うふふ…」

ア「わ、私だって！」

「ちょ！」

ちゅっ

ア「こ、これでおあいこね！」

「アリサ…」

す「待っているからね、ウィル君」

「ああ、わかってる」

６課にて

な「ウィル君？アリサちゃんとすずかちゃんとデートしたんだって？」

「ナ、ナゼゴゾンジナンデスカ？」

フェ「二人からメールが来てね…」

は「ずいぶんと楽しそうやったなあ？」

「あ、あはははは…」

「「「ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？」」」

「みぎゃあああああああああああ！！！！」

特別編：アリサとすずかと（後書き）

アリサとすずかおしまい。

次はどうしよう。カリムとのフラグが全く立ってないんだよね。

そこも考えて書こうかな

では

特別編：カリムとの接触？

「ミッドにも屋台ってあるんだな。いや～うまかった」

どうも、最近告白ばっか受けているウィリアムです。
そろそろ俺も誰にするかを決めなければいかんな。
ま、とりあえずおなかいっぱいになったし帰るとするか～って。

遠くのほうから音がするな…ゴロンゴロンって。

「いやな予感しかしない！れっつらごー！」

「騎士カリム！早くこちらに！」

「まったくなんでこんなことに！？」

カリム・グラシアとシャッハ・ヌエラは全速力で逃げていた。
そのあとをドロイディカがごろごろ転がりながら追いかける。
今日は久しぶりの休みだから町に出て買い物しに来たのに！

「シャッハ、あれ何とかならない？」

「無理です！何らかのシールドがあってこちらの攻撃は通用しません！」

「非常にまずいわね…って！」

気がつくと二人は囲まれていた。

「最悪ね…どうしましょう」

するとドロイドの一体が。

「カリム・グラシア。我々に同行せよ。さもなくば殺す」

と言ってきた。

「断る！」

「ならば…死ね」

ジャキンッ！

ドロイド達が武器を構えて撃とうとした。

だが…

「お二人ともちょっと失礼？」

カ「え？きゃあ！」

ヌ「ちょ！」

ウィリアムが真上から降りてきて二人の腰を掴んで上空に退避した。

次の瞬間、放ったマイクロミサイルがドロイド達に命中し破壊した。

「ふい～危なかった～。ご無事ですか？」

カ「え、ええ。助かりました」

ヌ「あなたもロボット！？」

「ああ、これはバリアジャケットですよ」

俺は近くの空き地に二人を降ろしてバリアジャケットを解除した。

カ「（…イケメンですね／／／）」

ヌ「（かっこいい）」

「自己紹介が遅れましたね。私は時空管理局古代遺物管理部機動６課所属の
嘱託魔導師、ウィリアム・Ｔ・ロンバートと申します」

カ「私は聖王教会・教会騎士団所属のカリム・グラシアです」

ヌ「騎士カリムの秘書のシャッハ・ヌエラです」

「ん？もしかしてはやての知り合いの？」

カ「はやてを御存じなのですか？」

「あいつとは１０年来の付き合いですからね。
しかし、ドロイディカまで出てくるとはまずいな～」

ヌ「ドロイディカ？」

「さっきのごろごろですよ。そうだ、愛称は『ごろごろ』にしよう。そのほうがみんな呼びやすい」

カ「ご、ごろごろ…ってなぜロンバートさんはあのドロイドのことを？」

「あーウィリアムでいいですよ。
何日か前にドロイド製造工場の１つを吹き飛ばしたところ、こいつの詳細データが残っていたので」

カ「なるほど。ウィリアムさん、今回はありがとうございました」

「いえいえ、同然のことをしたまでですよ。
ではそろそろ行きますね。また会う日までさようなら～」

ヌ「いい人でしたね、騎士カリム。…？」

返事がないのでカリムを見ると。

カ「……かっこいい／／／」

ヌ「（こりゃ惚れたな）」

その後、カリムがはやてにウィルの話をしたところ、

は「ウィル君はこうやってフラグを立てているんやな～、フフフフ…」

となり、それを聞いていたヴォルケンズと一緒にウィルにＯＨＡＮＡＳＨＩを

したのはまた別の話である。

特別編：カリムとの接触？（後書き）

これでいいのかな。
やっぱ文才ないですね～

でもデートはこれでおしまい！
本編に戻ります。

では

第３０話：機動６課のある休日（前半）

「じゃあ訓練やろうかね」

ＦＷ「はい！」

隊長陣「私たちも？」

「もちろん」

ヴィ「で、なにすんだよ」

「ま、とりあえずこれを見てくれ」

すると目の前に、Ｂ１バトル・ドロイド、Ｂ２スーパー・バトル・ドロイド、
Ｔ－６００型ターミネーター、そしてＷシリーズ・ドロイディカが現れた。

シグ「こいつらは！」

「そ。いままで出てきたドロイドだ。Ｂ１とＢ２に関してはみんなも知っているな。
このＷシリーズ・ドロイディカは、高機動型でしかもシールド付きだから
かなり面倒くさいぞ。この前聖王教会の人間もこいつらに攻撃されてるし。
んでＴ－６００型ターミネーターだが、多分何らかの質量兵器を持って突っ込んでくると思うので、こいつも注意しろよ？

それで、これからこいつらとは嫌というほど戦うと思う。それでいちいち
Ｔ－６００型ターミネーターだ！とかＷシリーズ・ドロイディカだ！って言うの、
めんどくさいだろ？なのでレジーと相談してこいつらにあだ名をつけることになった」

ス「あだ名？」

な「どんな？」

「まずＢ１バトル・ドロイドは『ガリ』、Ｂ２スーパー・バトル・ドロイドは『マッチョ』、
Ｗシリーズ・ドロイディカは『ごろごろ』、そしてＴ－６００型ターミネーターは『骨』だ！」

みんな「……」

「あれ、どしたのみんな」

フェ「ごろごろって…」

は「骨ってそんままやんか！」

「わかりやすいほうがいいだろ？どっかの青い髪の子みたいなアホでもわかる！」

ス「ちょ！ウィルさんひどい～」

キャ「なんでごろごろなんですか？」

「ああ、それはこいつらがこうやって動くからだ」

俺が手を振ると、Wシリーズ・ドロイディカは変形してごろごろし始めた。

エ「ほんとにごろごろしてる…」

「ここまでで何か質問ある人？」

みんな「」ナシ

「じゃあ次な」

俺が指をパチンすると、後ろに対人用レーザー砲塔が現れる。

「これはブラスターとほぼ同速度のレーザーを発射するものだ。
今から全員にこれで訓練してもらう。内容はいたって簡単。
1分間こいつらの攻撃を回避して、それから砲塔を破壊するというものだ。
ただし、1分間の間は攻撃魔法は一切使用不可能だからそのつもりで」

テ「攻撃しちゃいけないんですか？」

「この訓練の目的はブラスターの攻撃をいかに避けるか、だからな。
あと、これを首にかけてね」

な「なにこれ？」

USBメモリーにひもをつけたようなものをみんなに配る。

「あの砲塔から発射されたレーザーがお前らに当たると、それが音を出す。
そしたらゲームオーバーってわけ。試しにやってみるか」

ティ「速度はどうします？ご主人様？」

「5でやってみるか」

ティ「は～い、スタート！」

ピュンピュンピュン！

「はえええええええ！！！！」

1分後

「はあ…はあ…疲れた…」

俺は仰向けになって休んでいた。

ティ「さすがご主人様！かすりもしませんでしたよ」

「開発者が…当たるわけには…いかんだろう、ふう」
俺はゆっくり起き上がりみんなのほうを向いた。

「じゃ、次お前らな」

みんな「無理無理無理無理無理！！」

は「ウィル君が超疲れるくらいの攻撃をどうやって避けるんや！」

シグ「これは…きついな」

「大丈夫だって。あのレーザーの速度は変えることができるからさ」

フェ「あれで最速だっけ？」

「そ。全部で5段階に速度調節ができる。ちなみにガリとマッチョの攻撃速度は3で、
ごろごろは4と考えてくれ」

ス「ウィルさん、骨は？」

「あれはどんな武器でも持てるから5で訓練したほうがいいかもしれないな。
まあ最初は1からやったほうがいいぞ」

FW「はい！」

「あ、隊長陣は最初から3な」

な「にゃ！ひどいの！」

ヴィ「あんなの避けれるかどうかわかんねえのに…」

「避けれるかどうかじゃなくて避けるんだよ！ティーナ！」

ティ「じゃあここからは私が訓練を担当します！」

ＦＷ「ひい！！」

ティ「よーし、てめえら！ちゃちゃっとやるぞ！だが！クソまじめに努力するこたぁない！
　神様に任せりゃケツに奇跡を突っ込んでくれる！　わかったか！」

みんな「は、はい！」

ティ「ふざけるな！大声だせ！タマ落としたか！」

みんな「Ｓｉｒ，ｙｅｓ　ｓｉｒ！」

エ「（まだ付いてる…）」

ティ「はい、おしまい！みんな、御苦労さま！」

みんな「は、はい…」

「じゃあ、今日の早朝訓練はこんぐらいでいいかな？それとも模擬戦でもやるか？」

な「もういいの！おしまいにして！」

フェ「つ、疲れた…」

シグ「模擬戦は、また今度に、しよう…」

ヴィ「シグナムが模擬戦をしない…だと…？」

は「死ぬ…」

「これだけやればいいかな、なのは？」

な「そ、そうだね…ＯＫだよ…」

「はいはい。実は今日の訓練が第２段階クリアの見極めテストだったんだけど、
お前ら合格！」

ス、テ「はやっ」

ティ「さっきのクリアできたんだからもう充分だな！」

ＦＷ「やったー！」

フェ「デバイスリミッターも一段解除するから、あとでシャーリーの所に
行ってきてね」

ヴィ「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すっからな？」

ＦＷ「はい！」

そこでキャロが何かに気付いた。

キャ「え？明日？」

ヴィ「ああ、訓練再開は明日からだ」

な「今日は私たちも隊舎で待機する予定だし」

フェ「みんな、入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

ヴィ「ま、そんなわけで」

「お前ら今日一日休みだ！」

ＦＷ「わあああああ…」

な「町にでも出かけて遊んでくるといいよ！」

ＦＷ「は～い！」

俺とティーナは隊長達とシャマル、ザフィーラと朝飯を食べている。
その横でニュースが流れている。

キャスター
「続いて、政治経済です。昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において、
来年度の予算会議が行われました。３度目となる再申請の税政問題に基づいて、
各世界の注目が集まっています。当日は、首都防衛隊の代表レジアス・ゲイズ中将に
よる管理局の防衛思想に関しての表明も行われました」

「おっ、レジーだ」

レジー演説中…

「その通りだ！レジーはいいこと言うな！」

ティ「ですね～」

「でも、今地上本部は要塞みたいなもんだし、全ての部隊でティン・マン装甲服を
採用しているから、充分な気もするけどね」

要塞にしたのは俺だけどね。ドロイド軍が攻めてくることを想定して、
ハリネズミみたいな状態だし。

は「それで思い出した！」

ア「どうしました、主？」

突然はやてが大声を出した。

は「ウィル君！あの装甲服を開発したんやって？」

フェ「うそ！？」

シグ「あれをウィルが？」

シグナムはミッドチルダ首都航空隊第１４部隊副隊長なので、ティン・マンを
使用したことがある。機動６課内では開発者を除くと唯一の人物だろう。

シグ「確かにあの装甲服は、着用していれば魔力は上がるし、機動性も向上し、
　生存率も高くなる。おまけにＡＭＦとシールドまで付いているから
　高町クラスの敵とも渡り合えるだろう」

な「ふぇ!?なんで私基準なの?」

「あれを作った時に、壊れる限界をなのはのＳＬＢの３乗に設定したからだよ」

ティ「つまり、３人のなのはちゃんが全力全壊のスターライトブレイカーを
　撃たないとティン・マンには勝てません!」

シャ「そんなに耐久力があるの?」

ヴィ「さすがだな」

ザフィ「犯罪者は涙目だな」

「いや、だってどんなに訓練しても死んじまったら意味ないだろ?
だからこの装甲服は着用者が確実に死なないように出来ている」

な「なるほどねえ」

フェ「なんでこれを作ろうと思ったの？」

「それは、ティアナの兄貴に関係するんだな」

ヴィ「ティアナの？」

シャ「お兄さん？」

「ティーダ・ランスター一等空尉。おっと、今は二等空佐だったな。首都航空隊のどっかの隊長で、執務官資格も取ったとか言ってたな。

ティーダは6年前にある犯罪者を追いかけてたんだが、危なく死にそうになったんだ。

間一髪で俺が助けて逮捕したんだが、その時のティーダの上司がクソッタレでな。

死んででも捕まえろとか言いやがって、まったくあの役立たずの蛆虫野郎め。

まあ、それは置いといて。それで俺はこんな上司の下で優秀な魔導師が

死ぬのはまったくもって許せないと思ったんだ。それでティン・マンを作ったのさ」

シグ「そんなことがあったのか…」

ティ「ちなみにそのクソッタレな上司ははるか遠くの次元世界に転勤になったそうな」

は「え」

「それはもう涙を流しながら喜んでいたな。そんなにうれしかったのかな？」

みんな「（じー）」

「ん？俺は何もしていないぞ？ちょっとレジーと酒を飲みつつ話をしただけだ」

は「犯人はおまえやあああ！」

そんなことを話しながら飯を食いながらウィリアムは考え事をしていた。

（今日何かなかったっけ？えーとあ！！！）

「飯食ってる場合じゃねえ！」

な「にゃ！？どうしたのウィル君？」

「出かけてくる！」

俺は食堂を飛び出しながらジェイルに連絡を入れる。

「ジェイル！確か今日だったよな？聖王の器が輸送されるのは！」

ジェ「ああ、確かそうだったね」

「今から俺が言う座標にガジェットを送ってくれ！ドロイドを攻撃するんだ！
ただし、人間への攻撃はするなよ？」

ジェ「わかった！」

その頃、一人の少女が下水道内でゆっくりと歩いていた。
足にはレリックのケースが鎖で繋がっていた。

「この辺なんだが…」

俺はその少女を探しに下水道にいた。結構広いので見つけにくい。

こんなこともあろうかと！
俺はポケットに手を突っ込みあるものを取り出した。それは、

レリック探知機～！

こいつを使えばレリックといっしょにいるヴィヴィオを見つけるこ

とができる。
さて、スイッチオン！

ピコーンピコーン！

「え？近いな、この角を右に曲がると…いた！」

そこにはぼろぼろの服を着たヴィヴィオがいた。

「大丈夫かい？」

「…誰？」

「俺はウィリアム。君は？」

「…ヴィヴィオ」

「そうか、ヴィヴィオか。いい名前だ。俺と一緒に暖かいところに行こう？」

「…うん」

俺はヴィヴィオを抱えて下水道を出ようとしたが、考え直してちょっと仕掛けをしてから6課に戻った。

「ただいま！」

は「ああ、ウィル君って！」

フェ「ウィル？その子誰？」

シグ「…隠し子か？」

「ちゃうわ！街中で保護したんだよ！これをぶら下げてな！」

な「レリック！」

そして隊舎に警報が鳴り響く。

グリ「八神部隊長！サードアベニューの地下下水道にドロイドが出現しました！

現在戦闘中です！」

は「誰と戦っているんや？」

グリ「それが…」

フェ「どうしたの？」

グリ「ガジェットと戦っているんです」

みんな「は？」

グリ「ガジェットは、ドロイドが地上に出ることを阻止している模様です」

ヴィ「どういうことだ？」

「つまり、ドロイドを作ったのはスカリエッティではなく、敵対関係にある
他の誰かということになるな」

グリ「あ！ガジェットの５０％が壊滅しました！このままでは地上に出ます！」

「ヴァイス！ヘリを出せ！なのは、ＦＷに連絡して迎撃させろ！」

ヴァ「了解！」

な「わかったの！」

「機動６課、出撃だ！」

みんな「はい！」

は「それうちのセリフや！」

ツ「はやてちゃん、みんなもう行っちゃいましたよ？」

は「んがあああああああ！！！」

ア「主！落ち着いて下さい！」

第３０話：機動６課のある休日（前半）（後書き）

久しぶりに長々と書いた気がする。

次回は下水道での戦闘…まあすぐ終わるけど。

では

第３１話：機動６課のある休日（後半）

下水道では激しい攻防戦が繰り広げられていた。
ガジェットがブラスターを避けながらレーザーを撃つ。
だが数で勝るドロイド達は敵の攻撃を回避せずに突っ込んでくる。
ジェイル特製のガジェットもだんだん破壊されて、あと少しで壊滅してしまう。

その光景を見ていたウィリアムは、にやにやしながらスイッチを押す。
そのスイッチはヴィヴィオを助けた時に置いてきたある”仕掛け”のものである。

ドロイド達は最後のガジェットをつぶして地上に出ようとしたが、次の瞬間、少し離れた場所にいたドロイド達がまとめて吹き飛ばされた。
それと同時に、下水道内部で複数の爆発音が鳴り響き、ドロイド達はあっという間にその数を減らすことになった。

ウィリアムがこっそり仕掛けておいた、ステルスクレイモア地雷である。
起爆するまで絶対に見つからないので、ドロイド達は容赦なく吹き

飛ばされた。

ドロイド達にとって誠に残念なことに、それだけでは終わらなかった。

突然、下水道の天井からあるものが生えてきた。

それは7．62mm　NATO弾を使用するM134ミニガンに各種センサーを取り付けたもの。

要するに自動機銃だった。もちろん、実弾ではなく魔力弾を使用し、AMFとシールドによって守られている。

それらが射撃を開始して、主に骨やごろごろを倒していった。

FWにはまだきつい相手だと思ったからである。

こうしてFWメンバーが到着するころには、敵戦力の8割は壊滅していた。

～下水道の外～

「よし！敵戦力は残り少ないから一気に片付けるぞ！」

ＦＷ「はい！」

「隊長陣はＦＷメンバーから絶対に離れるな！まずいと思ったら逃げろ！いいな？」

隊長陣「わかった（の）！」

「あ、俺とティーナは単独行動するからよろしく」

～スターズ分隊～

な「スバル！ティアナと援護するからヴィータちゃんと突っ込んで！」

ス「はい！」

ヴィ「行くぞ～！」

なのはとティアナはそれぞれ魔力弾でドロイドを攻撃する。
が、ドロイドはＡＭＦとシールドでそれを防いでいる。

テ「やっぱ難しいな～」

な「ん～、むかつくの！ディバイン…」

「なのは！んなもんそんな狭いとこで撃つんじゃねえ！下水道ごとつぶす気か！」

な「あ、そうだったの…えへへ」

テ「とりあえず撃ちますか」

な「そうだね」

ス「うりゃあああああああ！」

ヴィ「でりゃあああああああああ！！」

スバルとヴィータはドロイドの懐に潜り込んで攻撃していた。
ヴィータがアイゼンを振り回すと敵は吹っ飛び、
援護射撃によって弱体化していたシールドは、スバルのパンチで
破壊され、ドロイド達はあっという間にその数を減らしていった。

ヴィ「こいつら、格闘はできないようだな」

ス「そうですね。近づいてもブラスター撃ってくるだけでしたし」

～ライトニング分隊～

一言で言うと、圧勝であった。
フェイトもシグナムもエリオも、近距離における戦闘が専門なので、
キャロにブーストしてもらって、３人はブラスターを回避しつつ、
あっという間に敵ドロイドを殲滅した。

フェ「これでおしまいかな？」

シグ「こいつら実に弱いな。所詮はロボットだな」

エ「ですね～」

その時、キャロのデバイス「ケリュケイオン」が警告を発した。

キャ「みなさん！もう一体接近中です！」

3人は身構える。すると前方に何かが見えた。
それはだんだん近づいてくる。

そして１０mほど離れたところで動きを止めた。
それはターミネーターだった。

そして骨は、腰につけていた細く短い棒のようなものを手に取った。
すると、甲高い音とともに棒から赤い光が伸びた。

シグ「あれは…剣か？」

フェ「おそらくね…」

ターミネーターは、ライトニングに向けて”ライトセーバー”を振りかざして突っ込んでいった。

～6課の指令室～

は「なんや、あの棒は？」

ア「あの刀身は超高温の熱エネルギーで出来ているようです」

ツ「そんなもので切られたら死んじゃいますよ～」

グリ「そうですね。あれには非殺傷設定など存在しないでしょう」

困ったことに、スターズ分隊のほうにもライトセーバーをもった骨が現れていた。

そんな時にウィリアムから通信が。

「ガルム1よりロングアーチへ。骨が赤いサーベル振り回してるってホントか？」

シャーリー「はい！スターズ、ライトニング両分隊の前に一体ずついます」

「やべ！スターズは撤退！ライトニングと合流させろ！なるべく急がせろ！
それでガルム2にスターズの方を倒させろ！俺はライトニングを援護する！」

は「了解！」

～スターズ分隊～

ウィリアムの撤退命令に従いスターズ分隊は後退していた。

テ「なのはさん！駄目です、全部切られてます！」

な「やっぱ駄目か～」

なのはとティアナは射撃を続けていたが、全て無効化されていた。
スバルとヴィータはやることがなかった。
スバルの場合、殴りに行ったら真っ二つになるし、
ヴィータの場合もアイゼンがスライスされてしまうからである。

ヴィ「あの剣は反則だろ！なんでも切れるとかうざい！」

と、前方にティーナが現れた。

ティ「みんな！早く行って！ここは私が！」

そういってティーナもライトセーバーを起動する。ウィリアムが
渡したもので、刃の色は緑色である。

な「なんでティーナちゃんがそれを…」

ティ「細かい話は後で！さあ行った行った！！」

スターズがトンズラした後、ティーナは笑いながら骨に襲いかかった。

ティ「さあ、実力を見せてもらおうか！！」

～ライトニング分隊とウィリアム～

ウィリアムが到着するまでは防戦一方だったが、その後はウィリアム無双だった。
青色のライトセーバーを振り回し、また出てきたドロイドを倒しつつ、
骨と戦っていた。

シグ「ウィルは剣術もいけるのか…今度模擬戦で…」

エ「かっこいい…」

キャ「さすがウィルさん…」

そんななか、フェイトはあることを考えていた。
さっき、ウィルがドロイドに手を向けたところ、驚いたことにドロイド達が後ろに吹っ飛んだのだ。魔力は感じなかったし何も見えなかった。

フェ「さっきのあれはなんだったんだろう?」

「こいつ、なかなか強い！」

一方骨と戦っているウィリアムは疲れていた。というのも、何気に骨が強くてめんどくさくなってきたのだ。

「もうおわりにするか…」

そうつぶやき、まず骨をフォースで壁にたたきつける。その間に両手足を切断。最後に首を切り落としてゲームセット。

「お～しまいっと」

フェ「すごいね、ウィル！」

俺はフェイト達のほうを振り返ったが、

みんなの後ろにドロイドが5体いた。おまけにそれに気が付いていない。

「全員伏せろ！！！」

俺がライトセーバーを振りかぶるのを見て、フェイトはエリオを、シグナムはキャロを掴んで伏せた。

俺はライトセーバーを水平に投げてフォースで操った。
くるくる回りながらライトセーバーは5体のドロイド全てをちょん切った。
そしてフォースでライトセーバーを回収した。

「まだ終わっていないんだ。気を抜くな」

フェ「ごめん、気がつかなかった」

シグ「すまん、ウィル」

エ、キャ「ごめんなさい」

「ま、ティーナ担当の訓練でしごかれるだろうな、うん」

みんな「」ガタガタ

その後、スターズ分隊と合流し、敵を掃討。ティーナも敵を殲滅したので、
任務完了となった。

６課に帰るとヴィヴィオがいなかった。ツヴァイによると、検査のために聖王教会の
病院に連れて行かれたそうだ。ここは原作通りですね。
さて、腹も減ったし飯でもたｂ

な「ウィル君！」

フェ「あの剣！」

は「説明してや！」

こうなりますよね～。

「はあ、飯食ってからでいい？おなか減って死にそうなんだけど」

は「じゃあその後に会議室で集合や」

夕食後、ウィルは会議室でライトセーバーについて説明した。
なんでも切れるとか、ブラスターも跳ね返せるとか。

敵が使っていたライトセーバーを持ちかえって分析したところ、
俺とティーナが使っていたのよりも性能が落ちていることが判明した。
動力源である多面体の宝石アデガン・クリスタル（アイラン・クリスタル）を
取り出したらなんと崩れてしまった。人工のアデガン・クリスタルを
使っていたようだが、ここまで脆いということは、起動時間・耐久力も
おそらくかなり落ちているだろう。

「とまあ、こんなところかね。他になんか質問ある？」

フェ「ウィル、これはどうやってやったの？」

と、フェイトはフォースを使っている映像を流す。

「それも説明せねばならんのか…」

仕方ないのでフォースについても説明する。
生命体から無機質まであらゆるものを包んで満たしているエネルギーであり、
主な能力は、未来を予知する力、他人の心を読み取り、操る力、触れずに物を動かす力、
視覚に頼らず周囲を感知する力、自分の考えを相手に送る力、筋力の増加等があり、
その他にも、
血中の毒の浄化、癒し、人探し、自分の知らない言葉を使う、
相手の意識を遮断する（眠らせる）、心臓を止める技、
相手に強力なめまいと吐き気をもよおさせる技、
動物・昆虫とのコミュニケーション、
電子回路を修理もしくは誤動作させることもできる。

ス「便利ですね～」

テ「色々なことに使えるんだ」

ザフィ「すごいな…」

キャ「使いたいな…」

「ああ、もちろん攻撃にも使えるぞ？」

シグ「どうやってだ？」

「う～ん、これはあまり使いたくないんだけどまあいいか。

シグナム、これ持って」

と言って差し出したのは小型のシールド発生機。

シグ「これは…」

「ちょっとの間シールドを張る機械だよ。それじゃあ行くぞ！」

バリバリバリバリッ！！！

俺は指先からフォースを青白い電撃にしてシグナムに放った。
シールドに当たって中和されたが、その威力はすさまじかった。

フェ「なにそれ！？」

ヴィ「電撃か？」

「これはフォース・ライトニング。フォースを圧縮して一気に当てる技だ。
ちなみにこれは非殺傷設定とかはない。純粋に敵を倒すだけの技だ」

は「…ウィル君、それは使ったらあかんよ？」

な「使ったら、ＯＨＡＮＡＳＨＩなの」

「…わかった。なるべく使わない」

シャ「あのウィル君。フォースって誰にでも使えるの？」

「いや、それは無理だ。これは俺のいわばレアスキルみたいなもんだからな。
　ティーナが使えるのは、俺のユニゾンデバイスだからだ」

ティ「これは恐ろしい力でもあるから、誰にでも使えたら大変なんだよ？」

な「例えば？」

ティ「こういうこともできるの」

そう言ってティーナはなのはにフォース・グリップを使った。
これは位置さえ分かっていれば相手が遠くに離れていようと直接手を触れずに、
指を曲げる仕草をするだけで、相手の首を絞め上げる技である。

な「かっ…はっ……ぐえっ！」

フェ「なのは！？」

は「ティーナちゃん！やめるんや！」

「何しとんじゃ！」

パンッ！

ティ「にゃ！」

俺はティーナを思いっきりハリセンでたたいた。

「なのは、大丈夫か？」

な「ゴホッ！ゴホッ！…いきなり息ができなくなったの…」

「やろうと思えばこういうこともできるんだよ、フォースっていうのは」

は「やりすぎや！」

ティ「うるさいなー、はやてちゃんにはこうしてやる！」

と言って今度ははやてにフォースを使った。すると。

は「え？あはははは！！！やめてえええええええ！！！」

はやてはいきなり笑いながら床の上でころがっている。

シグ「あ、主！？」

ヴィ「はやて！どうした！？」

は「にゃはははははははははは！！！！！」

「ティーナ、お前もしかして…」

ティ「そ！フォースではやてちゃんのわき、足裏をくすぐっているの！

名付けて、フォース・くすぐり！」

「下らねえ…そろそろやめとけ」

そしてティーナの魔の手から逃れたはやて。

ア「大丈夫ですか、主？」

は「もうかんにんや～」

そんなこんなで会議（？）はおしまいになった。

明日はヴィヴィオとのイベントが…

「あ、そうそう。今日の戦闘の結果、訓練内容をさらに厳しくすることになったから」

みんな「え」

ティ「明日が楽しみだね？ふふふふふ…」

ス「ギン姉、私明日死ぬかも…」

テ「お兄ちゃん…」

フェ「姉さん、お母さん…」

な「ユーノ君へ。これを読んでいる時には私は死んでいるでしょう

…」

たまたま通りかかったヴァイス
「姐さん、なんでみんな遺書書いてるんすか？」

シグ「聞くな、ヴァイス。色々あったのだ、色々な…」

ヴァ「？」

第３１話：機動６課のある休日（後半）（後書き）

頭痛い。
そろそろ本腰入れないとまずい今日この頃。

明日は更新出来るかな？

では

第３２話：ヴィヴィオとウィリアムとみんな↑こんな感じのタイトルの絵本があ

ドドドドド…

カンカンカン…

局員「修理班！作業開始だ！」

修理班「はい！」

は「どうして…どうしてこうなったんや…」

機動６課部隊長の八神はやては目の前の光景を信じられないといった目で見ていた。

ア「これは…」

ツ「派手にやりましたね～」

隣ではリイン姉妹もいる。

その近くで。

「さてティーナ？説明してもらおうか？」

な「ティーナちゃん、やりすぎなの…」

フェ「……（茫然としている）」

ヴォルケンズ「じー…」

ＦＷ「あーあーやっちゃったー」

ティ「ううううううう…」

ティーナが正座していた。

いったい何が起きたのか？話は３０分前にさかのぼる。

～３０分前～

ティ「はい！では早朝訓練を始めるぞ！」

みんな「はい！」

ティ「よーし、いい返事だ！よっぽどこの訓練が好きなんだな！」

みんな「ないない」

ティ「昨日言ったとおりに、普段よりハードにすっからね？」

みんな「いやあああああ！！！」

訓練中！！

ティ「はい！じゃあラスト一本行くぞ！」

ＦＷ「」↑死屍累々

シグ「まだ…やるのか…」

ヴィ「こういう…訓練は…年に…一回に…してくれ…」

ティ「ルールは簡単！5分以内に私のバリアジャケットに傷を入れたら勝ち！」

な「ううう、ウィル君がいれば…」

フェ「今日は他に用事かあるって言ってたね」

ス「ウィルさんはいないけど、頑張りましょう！」

みんな「うん！」

そして戦闘が開始した。
だが、隊長陣＋ＦＷ全員の力をもってしても、ティーナに一撃を入れることができない。
そんなこんなで４分が過ぎた。

ティ「じゃあそろそろ私も攻撃するよ？」

と言って、マイクロミサイルの弾幕がなのは達に襲いかかった。
だが、日ごろの訓練のおかげでなんなく回避し、

な、ス「ディバインバスター！！」

フェ「雷光一閃！！」

シグ「紫電一閃！！」

などの技を全員でたたき込んだ。

が。

ティ「まだだ！！まだ終わってなぁい！！」

な「うそ！？」

ヴィ「冗談だろ！？」

ティーナは傷一つなく立っていた。そして、

ティ「食らえ～！！」

ミサイルを１０発発射した。

スバルは、そのうちの一発を殴って軌道をずらした。
ヴィータはハンマーでたたき潰した。
シグナムはレヴァンティンで斬り捨てた。
なのはとティアナは射撃魔法で破壊した。
エリオとフェイトはそれぞれのデバイスで切り刻んだ。
キャロはフリードに攻撃させて軌道をそらせることに成功した。

そこまでやってからみんなが気付いた。

Q：残りの2発はどこにいった？

A：みんなの頭の上？

ちゅどーん！！

ティ「はい、おしまい！私の勝ちね♪」

みんな「ま、まいりました…」

ティ「じゃあ、隊舎で朝ごはんでも…」

とその時。

ズドーン！！！×２

シュミレーターの周りの海で２つの大爆発が起こった。

キャ「きゃあああああああ！！！」

エ「なななんだ？」

ス「今の何！？」

シグ「敵襲か！？」

ティ「あ」

な「どうしたの？ティーナちゃん？」

ティ「いや、その、さっきスバルとキャロがはじいたミサイルが水中で爆発したらしく…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

そこまで言った時、シュミレーターが傾き始めた。

みんな「え？」

ティ「至近距離で2発の反応弾を食らったシュミレーターの基礎構造が崩壊して
もうすぐ全体が沈む可能性が…てへっ♪」

な「みんな！隊舎に逃げて！」

ＦＷ「うわあああああ！！！」

その時、用事を終えて帰っていたウィリアムやはやて、他の6課の隊員も
爆発音に驚いて駆けつけていた。

は「ウィル君！今の爆発はなんや！？」

「わからん！敵の攻撃かもしれん！」

は「グリフィス君！警報鳴らして！」

グリ「はい！」

う～う～う～…

ツ「あ、なのはさん達です！」

ア「見たところ怪我はなさそうだな」

「なのは！みんな無事か！？」

な「あ、ウィル君！大丈夫だよ」

「一体何が起きた？あの爆発は何だ？敵の攻撃か？」

な「それが…」

ずぶずぶずぶ…

なのはが説明をしようとした時、シュミレーターは真っ二つになって沈んでしまった。

「え～…ないわ～」

は「な…な…な…」

はやては隣で愕然としてるし。

「なのは？」

な「実は…かくかくしかじかだったの」

「そうか…グリフィス、警戒解除。敵の攻撃じゃない」

グリ「は、はい。わかりました」

「それと、修理班呼んでくれ」

そして冒頭に戻る。

「やりすぎだ！」

ティ「ひい！すいましぇん…」

「まあ、起きてしまったのはしょうがない」

な「ウィル君、もういいんじゃない？」

フェ「反省しているようだし」

「いーや、駄目だ！こいつは理解していない！」

ティ「ううう…」

「壊してもいいけど沈めるなってあれほど言ったのにまったく…。
引き上げるのめんどくさいんだぞ？」

ス「ん？ウィルさん、今なんて…」

「え？引き上げるのがめんど…」

シグ「その前だ！」

「壊してもいいけど沈めるなってことか？」

ヴィ「なんだよ、壊してもいいって！？」

「ああ、６課の設立日にはやてと話してな」

未だに茫然としているはやてを指さしながら俺は言う。

「修理代金俺が払うなら多少は壊してもいいって許可をもらったんだ」

みんな「」

「だけど、シュミレーターをそのまま沈めるとは思っていなかった。
表面がえぐれるとか、端っこがちょん切れるとか、そういう壊れ

方を
想定していたもんだからよ。あーあ、金が飛ぶ～財布が軽くなる～」

ツ「ちなみにシュミレーターの代金はこれぐらいです！」

ツヴァイはみんなにモニターを見せる。

フェ「えええええええええ！！！？？？」

な「こんなに高かったの！？」

シグ「なんという…」

ヴィ「アイス幾つ買えるかな？」

エ「こんなにかかるんだ…」

「まあ、修理代は前払いしてあるから問題ないんだがな」

ス「もう払ってあるんですか！？ウィルさんお金持ち～」

テ「すごい…」

「でも、沈めちゃったからな～、ほんとはあと2回のはずがあと1回になったか…」

キャ「何があと1回なんですか？」

「訓練場を壊せる回数」

みんな「」

「はやてには3回分の修理費を渡しておいたんだが、やれやれ。
さてティーナ。部屋に戻ってＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？」

ティ「」ガタガタ

「じゃあ、シグナムになのは！あとでな～」

ずるずる

俺はティーナを引きずって部屋に戻った。

～食堂～

は「ウィル君からお金渡されてなかったら、うちの首飛んでたで」

な「にゃはは…」

フェ「はやて、いつ修理終わるの？」

ア「突貫工事で7日だそうだ」

ヴィ「その間は訓練が充分にできないな」

シグ「しかたあるまい。使えないものはしょうがない」

フェ「そうですね」

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！」

は「ぶーっ！！」

ツ「うえ！熱い熱いです～！！」

はやてが吹いたお茶がツヴァイの顔にかかってしまった。

ス「今の誰の声？」

テ「なんか聞き覚えのあるような気が…」

エ「あ～、僕わかりました」

キャ「私も…」

その時食堂にウィリアムが入ってきた。満面の笑みを浮かべている。

「おーし、飯だ！おばちゃん！A定食特盛りで！」

「はいお待ち！」

「うまそ～」

は「ウィル君！」

「おお、はやてにみんなか」

フェ「ウィル、さっきの悲鳴はなんだったの？」

「なに、気にすることじゃないさ」

シャ「でもすごい悲鳴だったわよ？」

「問題ないって。ただちょっと、ＯＨＡＮＡＳＨＩをしただけだよ」

みんな「あ～」

ザフィ「…何をしたんだ、ウィル？」

「ん～エリオ、ちょっとこっち来い」

俺はザフィーラとエリオにこっそり教えた。

ザフィ「ウィル、お前が友人でよかったよ」

エ「ウィルさん、えげつないですね」

「訓練場ぶっ壊したんだ。それくらい当然だ」

女性陣「？」

後日、なのは達はティーナに、何をされたのか聞こうとしたが、ティーナは、

ティ「ごめんなさいご主人様ごめんなさいご主人様ごめんなさいご主人様…」

と、話にならなかったそうな。

朝食後、俺となのは、シグナムはヴィヴィオがいる病院に向かっていた。
その途中でシャッハから、ヴィヴィオがとんずらしたとの報告があり、
今俺は病院の庭でヴィヴィオを探している。
すると、前方の茂みからヴィヴィオが飛び出してきた。

「お、ヴィヴィオじゃないか」

「あ…」

「覚えていないか？下水道であったよね？」

「うぃ、うぃるあむ？」

「ウィリアムだよ。どうしたのかな？」

「ままいないの…」

「そりゃ大変だ。どうだろう、一緒に探さないか？」

「…うん」

「よーし、それじゃあ肩車をしてあげよう」

「わーい♪」

な、シグ「ウィル（君）！」

するとなのはとシグナムがこっちに来た。

その時、ヴィヴィオがとんでもないことを！

「ウィルパパ、この人だれ…」

な、シグ「パパ？」

「ヴィヴィオ？俺がパパ？」

「うん！」

な「ウィル君、どういうことかな？」

シグ「話を聞かせてもらおうか？」

「パパ、怖いよ～」

「お前らヴィヴィオが怖がってるだろ？落ち着けって」

な、シグ「ちっ」

「舌打ちしない。ヴィヴィオ？この人たちはね、パパのお友達だよ？」

「お友達？」

な「私は高町なのはっていうんだ。よろしくね、ヴィヴィオ？」

「なのは…ママ？」

な「そうだよ！って私がママでウィル君がパパなら…うふふふ／／／」

シグ「な！ずるいぞ高町！」

「こっちがシグナムだよ？」

「シグナムママ？」

シグ「そ、そうだぞ。これで私も…／／／」

「まあいいや、６課に帰るぞ？」

～6課～

「ただいま～」

フェ「お帰り、ってその子連れてきたんだ？」

「おう」

「ウィルパパ。ここどこ？」

その瞬間、みんなの動きが止まった。

フェ「パパ？」

は「ウィル君、やっぱりその子はウィル君の子やったんな…？」

ヴィ「誰の子供だ？」

シャ「教えてくれないかな、ウィル君？」

そこに、

ス「ウィルさん、子供いたんですか！？」

テ「一体誰と子供作ったんですか！？」

スバルとティアナも参戦。

「落ち着けお前ら！この子はヴィヴィオ。俺の子供じゃないんだが、俺の姿を見たときからパパって呼ばれてるだけだ！」

な「フェイトちゃん、早とちりは良くないよ？」

シグ「お前達、少しは落ち着け」

「なのはママ、シグナムママ。このひとたちだれ？」

ヴィ「おい！シグナム！どういうことだ！」

は「なんでシグナムとなのはちゃんがママって呼ばれてるんや！」

な「いや～ヴィヴィオにそう呼ばれちゃって…」

シグ「悪くないと思ったのでな」

シャ「シグナム、抜け駆けはずるいわよ？」

ス「なのはさんずるいです！」

テ「私もママがいい…」

フェ「なのは、そういうのは良くないよ？」

な「ふぇ、フェイトちゃん？目が怖いよ？」

「あーもう！こうすればいいだろ！
ヴィヴィオ～、ママがいっぱいいるぞ～。よかったな～」

「わーい！ままがいっぱいだー♪」

みんな「えへへ／／／」

「はあ、ザフィーラ、あの子の護衛をやってもらってもいいかな？」

ザフィ「もちろんだ」

「ありがとよ」

こうして、機動６課にヴィヴィオが仲間入りした。

第３２話：ヴィヴィオとウィリアムとみんな↑こんな感じのタイトルの絵本があったら

ティーナの悲鳴の原因は…まあわかるでしょう。

次回はカリムやクロノとお話します。

では

第３３話：予言なの（前書き）

２／２３　Ｊｏｋｅｒ２号様よりご指摘があったので一部編集しました。

第３３話：予言なの

ヴィヴィオ「パパ！ママ！いっちゃいや～！」

どうも、ヴィヴィオに泣きつかれているウィリアムです。
これから教会本部で会合があるのでなのは達と一緒に行かなきゃいけないんだけど、
その途端、ヴィヴィオが号泣。まあ、気持ちがわからんでもないがな。

「ヴィヴィオ～、パパとママはこれからちょっとお仕事しなきゃいけないんだ。
夕方までには戻るから、それまでお留守番してくれないかな？」

ヴィヴィオ「でも～」

「じゃあこうしよう。スバルママとティアナママが一緒に遊んでくれるぞ？」

ス、テ「え」

ヴィヴィオ「ほんと！？わーい！」

「ということでスバル、ティアナ、よろしく」

ス「ちょ！ウィルさん、私たちにも仕事が…」

「今度ギンガと一緒に食い放題行こうぜ？もちろん俺のおごりでな」

ス「ヴィヴィオ～、スバルママと遊ぼうね～♪」

テ「ってスバル！？」

買収成功なり。

やってきました教会本部。ここはなんというか自然がいっぱいでいいね。

案内された部屋に行くと、カリムとクロノがいた。

は「失礼します、八神はやて二等陸佐であります」

な「高町なのは一等空尉であります」

フェ「フェイト・テスタロッサ執務官であります」

「嘱託魔導師、ウィリアム・T・ロンバートだ。カリムとはこの前会ったっけ」

カ「ウィルさん…お会いできてうれしいです／／／」

な、フェ、は「なんでなかよしなの？」

「この前カリムとシャッハがごろごろに追いかけまわされていたから助けた」

な「そうやってフラグを立てているんだね…」

フェ「少し自重しようよ、ウィル…」

ク「ゴホン、久しぶりだな、フェイト執務官」

フェ「あ、クロノ提督もお久しぶりです」

カ「ふふ、二人共そう堅くならないで？私達は個人的にも友人だからいつも通りで平気ですよ」

ク「と、騎士カリムも仰せだ。普段と同じで」

は「そうやで」

な「じゃあ、クロノ君久しぶり」

フェ「クロノ、元気だった？」

ク「ああ、二人とも元気そうだな」

「と言いながらもフェイト萌え～と思っているＫＹであった、まる」

ク「変なナレーション入れるな！ていうか僕はもうＫＹじゃない！」

「なーに言ってやがる。あの病院ではひどかったくせに」

ク「お、思い出させないでくれ…」ガタガタ

どうやらあれはトラウマになっているみたいだな。

少し話がそれたが、本題に入る。

は「さて、この前の動きについてのまとめと、改めて機動六課の裏表について…。

　それから今後の話や」

「それって俺が聞いてもいいのか？」

ク「構わない。ウィルにも手伝ってほしいから是非聞いてくれ。
さて、六課設立の表向きの理由はロストロギア、レリックの対策と独立性の
高い少数部隊の実験例。知ってる通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、
そして僕の母親で上官のリンディ・ハラオウン総務統括官だ。
それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、
協力を約束してくれている」

カ「そしてその理由は、私の能力と関係があります」

カリムは席を立ち、紐に結ばれ束になっていた紙を取り出す。そして、
その紐を解くと、紙は光出し、カリムを囲むように浮く。

カ「私の能力、プロフェーティン・シュリフテン。これは最短で半年、最長で
数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成をすることが出来ます。
二つの月の魔力がうまく揃わないと、発動することが出来ませんから、
ページの作成は年に一度しか出来ません」

「古代ベルカ語で、か？」

カ「はい。ですから、解釈ミスを含めれば、的中率や実用性は割とよく当たる
占い程度です。あまり便利ではありませんが…」

ク「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの預言にはよ

く目を通す。
　信じるかは別として、有職者の予想情報の一つとしてな」
は「実は昔、地上本部はこの予言が大嫌いだったのに、最近は積極的になっとるんや」
「それか。レジーとちょっと酒飲みながら話をしてな。
そしたら信用するようになったんだっけかな」
ク「レジーって…まあ、そんな騎士カリムの預言能力により、数年前から少しずつ、
　ある事件に発展しそうな詩文が書き出されている」
カ「これが予言の内容です」

「古い結晶と無限の欲望が交わる時、二人の守護神に出会う。
無限の欲望は己の道を正し、日の光の元に出る。
だが、無限の欲望は死せる王の下、聖地よりかの翼を蘇らす。
物言わぬ兵が踊り、なかつ大地の法の塔は囲まれる。
二人の守護神は立ち上がり、物言わぬ兵とかの翼と対峙する。
それを先駆けに数多の海を守る法の船々は砕け落ちる」

な「守護神って、もしかしてレジアス・ゲイズ中将のこと？」

フェ「それに地上の法の塔って、地上本部のこと？」

ク「二人の言うとおりだろう。だが、もう1人の守護神とはいったい…」

は「古い結晶はレリックやね。後はちょっとわからんな」

「だな（無限の欲望はジェイルだろ？守護神の1人はレジー。
死せる王はヴィヴィオで、かの翼はゆりかご。
だけど物言わぬ兵って誰だ？う～ん、あそういうことか）」

その後、皆で預言について話し合い、帰る時間になる。

「はやて、すまないが俺はクロノとカリムに話すことがあるから、
先に行っててくれないか？」

は「なんや、内緒話かい。わかった、んじゃ先行ってるで」

はやて達が執務室を出たあとに俺は結界を張る。

ク「で、話とは何だ？結界まで張って」

カ「そんなに重要なことなんですか？」

「そうだ。さっきの予言だがほぼ解読したぜい」

ク「ほんとにか!?」

カ「えええええ!?」

「マジだって。とりあえず二人には話さないとな」

と言って俺は管理局の裏データを見せながら、ジェイルとの関係について語った。

ク「ジェイル・スカリエッティがアルハザード時代の人間のクローンとは…

それにプロジェクトFや戦闘機人計画も最高評議会の仕業か…

許せんな」

カ「ひどいものですね…ここまでして彼らは何がしたいんでしょう」

「クロノ、今すぐ戻って報告、なんてするなよ?」

ク「なんでだ!証拠はそろってるじゃないか?」

「評議会だよ。あいつらなら平気でエイミィや子供を狙ってくるぞ?だから今は待て。これらの記録は全部終わったら公開する。だが問題は予言のこの部分だ。

『無限の欲望は己の道を正し、日の光の元に出る。

だが、無限の欲望は死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る』

実はレジーと相談して、ジェイルとナンバーズは時期を見て6課で保護する手筈になっている。それなのに予言によるとまたゆりか

ごに戻る
　みたいなことが書いてある。わけがわからん」
ク「確かにそうだな。スカリエッティが二人いるわけじゃあるまいし」
「だよな。後この部分、物言わぬ兵ってところ。今俺たちはガジェットではなく
　別の敵と戦っているだろ？」
ク「ドロイドか！」
「正解。つまりドロイドの軍団が地上本部に包囲攻撃を行うという意味だな。
　いやー地上本部を要塞化しといて正解だった」
ク「要塞！？いつの間に？」
「あっという間に。これがデータだ」
俺はクロノとカリムに地上本部のデータを見せる。

防衛システム
大型シールドジェネレーター：２基
ＳＧＥ－３０ゴールキーパー艦艇用近接防御火器システム（ＣＩＷＳ）：１２基
Ｍ－５自動機銃：２０基
ティン・マン装甲服を着用した保安大隊

などなど。

ク、カ「」

「な？まさに難攻不落の要塞だ！」

ク「これなら問題ないな」

カ「ですね」

「じゃあ俺は６課に戻るよ」

カ「ウィルさん、その、お気をつけてくださいね？」

「ありがとう、カリム（にこっ）」

カ「」

必殺！ウィルの笑顔！

きゅうしょにあたった！こうかはばつぐんだ！

カリムは１５０００のダメージをうけた。

カリムはめろめろになった！

ク「カリム？」

「あれ？」

カ「」

ク「立ったまま気絶してるぞ！」

「まじかい」

カリムをシャッハに渡して俺は６課に戻った。

第３３話：予言なの（後書き）

さらっと大事なことを書きました。

次回は…考えてません！適当です。

では

第３４話：訓練と言う名の戦争！！

な「は～い、整列！」

ＦＷ「はい！」

どうも、ウィリアムです。突貫工事で直ったシュミレーター。やっと訓練ができるな。

な「さて、今日の朝連の前に１つ連絡事項です。陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が
今日からしばらく６課に出向になります」

ギ「はい！１０８部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

ＦＷ「よろしくお願いします！」

「ようギンガ。元気そうだな？」

ギ「ウィルさんもお元気そうですね？」

「俺はいつも元気さ」

シグ「なんだ、知り合いだったのか？」

「まあね」

フェ「それからもう１人。１０年前からうちの隊長陣のデバイスを

見てくださっている
本局技術部の精密技術官」

マリ「マリエル・アテンザです」

シグ「地上でのご用事があるとのことで、しばらく6課に滞在していただくことになった」

シャーリー「デバイス整備を見てくれたりもするそうですので」

マリ「気軽に声をかけてね♪」

FW「はい！」

ヴ「よーし、紹介も済んだところで、今日も朝連いっとくか！」

FW「はい！」

そこに鬼教官ティーナが登場。

ティ「いい返事だな！それじゃあ行くぞ！！」

FW「ひいいいいい！！！」

な「あ、スバルはいいよ？」

ス「やったあああああ！！」

「その代わりにギンガと模擬戦な？」

ギ「はい！」

ス「え」

「他のＦＷはティーナの訓練の後に各自別メニューでよろしく！」

ＦＷ「はい！」

ス「うりゃあああああああ！！！」

ギ「はあああああああああ！！！」

→模擬戦中

な「はい、そこまでー」

キャ「あー…」

エ「スバルさん、惜しい」

ヴィ「でもかなり良くなったな」

シグ「そうだな」

「ギンガもいるし、なのは、あれやれば？」

な「いいね～、それじゃあみんな集合！」

ＦＷ＋ギ「はい！」

な「ギンガも入れてチーム戦しようか。
　ＦＷチーム５人対前線隊長４人チーム！」

ギ「え？」

思わずギンガは目を丸くする。

ス「いや、あのねギン姉。これ時々やるの」

エ「隊長たち、かなり本気でつぶしに来ますので…」

テ「まずは地形や幻術を駆使してなんとか逃げ回って」

キャ「どんな手を使っても決まった攻撃を入れることができれば、
　撃墜になります」

フリード「きゅく～」

「ちなみに負けたら…ふっふっふ」

ギ「ま、負けたら？」

ティ「私の特別訓練への強制参加権をプレゼント？」

ス「これがあるから隊長たちも本気でくるんだ…」

ギ「そんなに厳しい訓練なの？」

テ「ええ、思い出したくないくらい…」

「てなわけで始めようか。主審は俺が務める」

ティ「副審は私ね？それじゃあ…スタート！」

ぶお～ぶお～↑ウィルが吹いているホラ貝の音。

みんな「なんでホラ貝！？」

なんだかんだでチーム戦中！

な「はい！じゃあ今日はここまで！」

ヴィ「全員防護服解除～」

ＦＷ「は…い」

結局ＦＷチームが負けてしまい、特別訓練に参加する羽目に。

ギ「あれは訓練じゃない…」ぶつぶつ

ス「ギン姉！気を確かに！」

訓練内容のあまりの凄まじさにギンガはちょっと壊れてる。

は「またか…」

ついでにシュミレーターもまた、壊れたｗ

今度は沈んでないんだからね！ちょっと（いやかなり）えぐれただけなんだよ！

ヴィヴィオ「ママ～、パパ～」

「お、ヴィヴィオか」

な「ヴィヴィオ！」

向こうからヴィヴィオがとてとて走ってくる。

フェ「危ないよ～転ばないでね？」

ヴィヴィオ「うん！あっ」どさっ

はい、見事に転んでくれました。

ＦＷ「あー」

フェ「あっ、たいｈ」

な「大丈夫。地面柔らかいし、きれいに転んだから怪我してないよ」

フェ「それはそうだけど…」

フェイトは若干過保護だからな～。

な「ヴィヴィオ？大丈夫？」

ヴィヴィオ「うえっ、うえっ」

うわ、今にも泣きそうな顔してる。

な「怪我してないよね？頑張って自分で立ってみようか？」

ヴィヴィオ「ままぁ～」

な「うん。なのはママはここにいるから、おいで？」

ヴィヴィオ「うっ、うっ」

「ヴィヴィオ。ウィルパパもここにいるぞ？さあ、おいで？」

ヴィヴィオ「…う」

するとあら不思議。自力で立ち上がって歩いてきました。

ティ「ヴィヴィオが立った！」

みんな「？」

「いや、そのネタを知っているのは俺とお前しかいないぞ」

ティ「ですよねー」

とてとて

な「いい子だね、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「ママ～」

「よーし、泣かなかったヴィヴィオには飴をあげよう！」

ヴィヴィオ「わーい♪」

フェ「朝ご飯の前にお菓子をあげないの」ぽかっ

「あいてっ」

マリ「シャーリー、あの子は？」

その様子を遠くから見ていたマリエルが聞いてみる。

シャーリー「あんな感じですよ」

マリ「ああ、二人の子供か～、ってえええええええ！！！
　なのはさんとあのロンバートさんの子供！？」

な「にゃ！？」

「ちゃうわ！えーと、この子はわけありで６課で預かっているだけで、
　血はつながっていないんだよ」

マリ「なるほど。いや～びっくりしちゃいましたよ～」

な「ウィル君と私の子供…うふふふ／／／」

「ど、どうしたなのは？」

な「なんでもないの」

～食堂～

「ときにスバル、ギンガ、エリオ」

ス、ギ、エ「はい？」

「なんでお前ら飯をそんなクソでかいどんぶりで食ってるんだ？」

ス、ギ、エ「これくらい普通ですよ」

「いや、それはおかしい」

ヴィヴィオ「うふふ～？」

オムライスを食べて満足げなヴィヴィオ。

テ「しかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替え早いわね」

ギ「スバルも小さい時、あんな感じだったわよね」

ス「そ、そうかな？」

隣のテーブルでは。

シャ「ツヴァイちゃんも、ね」

ツ「ふえ～？ツヴァイははじめからわりと大人でした～」

ア「ぱちこくな、妹よ」

シグ「うそをつけ」

ヴィ「体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねえか」

ツ「ううう、はやてちゃん！違いますよね？」

は「へへ、どうやったかな～？」

「おや？ヴィヴィオ、俺の目がおかしくなったのかな？お皿にピーマンが残っている気がするんだが」

な「ヴィヴィオ？だめだよピーマン残しちゃ？」

ヴィヴィオ「うー、にがいのきらーい」

フェ「えーおいしいよ？」

な「しっかり食べないとおっきくなれないんだから」

ヴィヴィオ「ぐぬぬ」

「ピーマンを食べると、ママ達みたいに美人になれるぞ？」

ヴィヴィオ「ほんとに？」

「もちろん！さあ、食べよう？」

ヴィヴィオ「じゃあ、食べる」

「よーし、いい子だ。なでなでしたげる」

ヴィヴィオ「えへへ～♪」

ス「いいなーなでなで…」

ヴィ「ちょっとピーマン買ってくる」

シグ「うらやまし…いや、なんでもない」

その後、マリエル技官はスバルとギンガを連れて病院に行った。
体のメンテナンスやらチェックやらだろうな。

他のみんなは仕事。だけど！

民間人協力者の俺はやることがなーい！

暇だ…レジーは公開意見陳述会の準備で忙しいだろうし、ジェイルは引越しの準備で忙しいだろうし

こういう時は2度寝しよっと。

昼飯の時間になって起きて、昼飯をおいしくいただいた。
スバルとギンガも意外と早く帰ってきた。

「さて、午後の訓練やるか！」

みんな「はい！」

と、その時。

ビーッ！ビーッ！ビーッ！

「なに！？」

俺はあわててポケットから通信機器を取り出した。これは主にレジーやジェイルと
話すときに使っているものだ。

な「ウィル君？」

フェ「どうしたの、そんなにあわてて？」

俺は周りのことを完全に無視していた。
そんなことに気を配っている余裕はないからだ。

この着メロは、まさか！

俺が画面を見て愕然とした。

画面には、

「Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ：Ｊｅｉｌ」

と、赤文字で表示されていた。

第３４話：訓練と言う名の戦争！！（後書き）

はい、おしまい。
アニメだと１５話あたりの話ですかね。

次回はスカさん大ピンチ？です。
では。

第３５話：緊急事態

ウィリアムが画面を見て愕然とする少し前。

～ジェイルの隠れ家～

クア「ディエチちゃ～ん、それはこの箱に入れてちょうだい」

ディエチ「わかった」

ディード「オットー、それはその箱じゃないわよ？」

オットー「そっか、ごめん」

ノ「こらウェンディ！お菓子食ってないで働け！」がんっ

ウェ「ぐえっ！痛いッス…」

ト「ドクター、こっちは完了しました」

ジェ「ありがとう、トーレ。それじゃあウーノの手伝いをしてくれ」

セイン「あれ？セッテはどこに行った？」

チンク「さっきまで姉と一緒だったのだが…」

ルー「ここにいるよ？」

セッテ「ｚｚｚ…」

メガーヌ「あらまあ♪」

アギト「ぐっすり寝てやがんな」

チ「寝てんじゃない！」ぽかっ

セッテ「いてっ！う～眠い…」

まあ、引っ越しと言っても荷物をまとめて、ウィルが設置した転送装置に放り込んで
新しい隠れ家に送るだけだから、楽っちゃあ楽だよね。

ジェ「さて、そろそろお昼にしようか？」

みんな「は～い」

ウェ「おお！今日はそばッスか！」

昔、ウィリアムがナンバーズの食事を見て、

「ジェイル！もっとましな食事をさせろ！ていうか料理をしろ！

なんだよこのクッキー!?カロリーメ◯トじゃあるまいし!」

とキレたので、ジェイルは料理を覚えた!

みんな「いただきまーす」

ゼスト「うむ、いつもながらおいしいな」ずるずる

アギト「旦那の言うとおりだ!うまい!」ずるずる

ジェ「そう言ってもらえるとうれしいね」ずるずる

ウ「ウィルさん曰く、引っ越しの時には必ずそばを食べるそうですよ」ずるずる

チ「ウィルの故郷の風習なのかな?」ずるずる

ウェ「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこ!」

ノ「あーあ、だからわさび入れすぎるなって言ったのに」ずるずる

ディエチ「そう言えば最近ウィルさんに会ってませんね」ずるずる

クア「なんでも6課が忙しいみたいよ~」ずるずる

セイン「確かウィル兄が6課の訓練担当だっけ?」ずるずる

セッテ「民間人協力者なのにか?」ずるずる

ト「ウィルも大変だな」ずるずる

ディード「ウィルさん、早く会いたいです…」ずるずる

オットー「同感」ずるずる

みんな「ごちそうさまでした」

ジェ「さて、もう送るものはなさそうだね」

ウ「そうですね、ドクター」

ジェ「みんな忘れ物ないかい？」

ゼスト「こっちは大丈夫だ」

と言ってゼストさんはクイントさんの入ったポットの横に立った。

ウェ「じゃあもう問題ないッスね！」

とウェンディが言った瞬間。

ビービービー！！

ト「これは、侵入者！？」

ジェ「クアットロ、映像を出してくれ」

クア「はーい、ドクター」

そしてモニターに映っていたのは。

みんな「ドロイド！？」

ガリにマッチョ、ゴロゴロに骨が攻めてきたのであった。

ウ「ただちにガジェットを出撃させます！」

ジェ「在庫全てを投入するんだ！」

ゼスト「それでももたんな。ジェイル、これを見ろ」

映っているのはライトセーバーを振り回している骨軍団。

メガーヌ「これはきついわね」

ジェ「とにかく時間稼ぎをするんだ！」

ジェイルは懐から通信機器を取り出して、前から設定してあった緊急事態用の番号に電話をかけた。

～6課の訓練場～

「ジェイル！何があった！」

ス「ジェイルって」

テ「もしかして」

フェ「スカリエッティ！？」

ジェ「ウィル！緊急事態だ！ドロイドが攻めてきた！このままだと押し負ける！
　今娘達とゼストが前線で戦っているが…」

「マジかよ！なんであいつらそこがわかったんだ！？」

ジェ「見当もつかないよ！それに…ちょっと待って」

しばらくして

ジェ「ディードが撃たれた！左腕をやられてしまった！」

「くそ！ちょっと早いが仕方ない！ジェイル！ここに転移して来い

！座標を教える！」

ジェ「わかった！」

「あと、俺が設置した転送ポートをぶっ壊しといて！」

ジェ「了解！」

「くそったれ、まずいことになったな」

な「ウィル君、どういうこと？」

フェ「さっきのジェイルってまさか…」

「今のはジェイル・スカリエッティだよ？」

は「なんやて！？」

「はやて、どこからわいてきた！？」

は「細かいことは後回しや！なんでウィル君がスカリエッティと電話してんねん！」

「だって友達だし」

は「」

シグ「ウィル、納得のいく説明をしてもらおうか…」

「あとでな、ってそろそろか」

突然、訓練場の中心に魔法陣が現れ、中からジェイル達がぞろぞろ。

「ジェイル！無事か？」

ジェ「ウィル！なんとかね。ディード以外は無事だ」

ジェイルはぐったりしているディードを抱えていた。

「大丈夫なのか、ディードは？」

ト「撃たれたショックで気絶している。が命に別状はない」

「そうか…ん？」

振り返ると、６課のみんなが茫然としている。

そりゃそうだろう。あのジェイル・スカリエッティと仲良く話をしているんだからな。

ス「あれ、お母さん？」

ギ「え？」

ゼストさんが抱えているポットに入っているクイントさんにスバルとギンガが気がついた。

ゼスト「ああ、君達の母親だ。心配するな、きちんと生きているぞ」

ス「お母さん！」

ギ「よかった…」

二人はポットにしがみついて泣いている。

フェ「スカリエッティ！あなたを逮捕します！」

「フェイトよ、お前もクロノと同じくＫＹの称号をもらいたいのか？」

フェ「え、それはいやだ。だけど、こいつは犯罪者で…」

「はあ、八神はやて部隊長！」

は「なんやいきなり？」

「レオーネ・フィルス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊栄誉

元帥、
　ミゼット・クローベル本局統幕議長、レジアス・ゲイズ中将の命令により、
　ジェイル・スカリエッティ、ナンバーズ及びその協力者達を機動６課で保護せよ。これが命令書だ」

みんな「えええええええ!!!!!」

は「そんなんうそや!」

ツ「でもこの命令書は正しいものですよ?」

は「うがあああああ!!!」

ア「落ち着いて下さい、主!」

「まあ、あとで全部説明するからさ、とりあえずシャマルにマリエル技官。
　ディードの手当てを頼む。スバルとギンガはナンバーズと遊んでてくれ。
　ルールーとアギトはヴィヴィオと遊んでてな?それじゃあ俺はゼストさん、メガーヌさんを連れて地上本部に行ってくる」

な「つっこみどころ満載すぎるの…」

フェ「同じく…」

ヴィ「何がどうなってやがるんだ?」

「あ、あとジェイル！ドゥーエに任務遂行命令を」

ジェ「もう送ったよ」

「さすが、それじゃ」

～地上本部、レジーの部屋～

「いやっほー！」どがっ！↑ドアをけり開けた音。

レジ「ウィル！ドアを蹴るなとあれほど…」

ゼスト「久しいな、レジアス」

レジ「」

オーリス「あなたは…ゼストさん？」

メガーヌ「私もいるわよ？」

オーリス「」

ゼスト「さてレジアス。俺が聞きたいのは8年前のことだ。
俺の部隊の抹殺命令を出したのはお前か？」

レジ「……」

ゼスト「答えろ！」

レジ「……すまなかった！」ずさー

オーリス「お、お父さん！？」

レジーは突然椅子から立ち上がりゼストの目の前で土下座した。

レジ「脅されていたんだ…最高評議会に…オーリスを、娘を殺すと！」

オーリス「聞いてないしなにそれ」

「ゼストさん、レジーもまた被害者なんだよ」

ゼスト「レジアス…」

レジ「許してくれなどとは言わん！恨んでくれても一向に構わん！
わしはそれだけのことをしたんだ」

「じゃあ、みんなでその元凶に会いに行くとしますか。ドゥーエ！」

するとレジーの近くにいた女性職員がドゥーエになった。

ド「ウィルさん、妹達がお世話になってます」

「いえいえ、こちらこそ。それで首尾は？」

ド「ばっちぐーです」

「よし、それじゃあ案内してくれ」

メガーヌ「ウィル君、どこに行くの？」

「もちろん最高評議会のところです」

ゼスト「もしかしてこの地上本部内にいるのか！？」

「灯台下暗しってやつですね」

「Ｌａｄｉｅｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍａｎ'ｓ！こちらが最高評議会のみさなんです！」

レジ「これが…」

オーリス「評議会？」

みんなの目の前には脳味噌ポットが3つ。いくつかのコードが既に切られている。
ドゥーエの任務は、ポットにつながっている通信ケーブルなどをちょん切って、
外部に連絡できないようにすることだったのだ。

「きさまら、何者だ」

「お前は殺したはずだ。なぜ生きている、ゼスト・グランガイツ」

「理解不能だ」

ゼスト「…貴様らが俺の部隊の抹殺を企てたのか」

「そう、やつらだ」

オーリス「でもなんで？」

「…それは6課で説明しますよ」

「貴様はイレギュラー」

「お前さえいなければ我々の計画は成功していた」

「お前は排除されなければならない」

「うるせえな」

〈マァキシマムストレングス〉

俺はＸＭ１０９ペイロード、２５ｘ５９Ｂｍｍ　ＮＡＴＯ弾を使用する大口径対物ライフルを出現させて、それを片手で撃った。

ズドンッ！！

３つあったポットは２つになってしまった。

「そのしゃべり方、マジでむかつくんだよ。お前らの出番はもうない。
だからさっさと死んじまえ」

そして俺はゼストさんに言った。

「後は任せますよ。どうぞ復讐を」

ゼスト「……」

「誰も知らないところでポットを破壊しただけですから犯罪にはなりませんよ」

ゼスト「そうか、感謝する」

そして「ゼストさん怒りの復讐」によって最高評議会はこの世からいなくなった。

「じゃあ6課に帰ろうか」

なのは達びっくりするだろうな～、いやもうびっくりしてるか。

そのころ、襲撃を受けたジェイルの隠れ家にはドロイドの他に1人の人間がいた。
その人物は満面の笑みを浮かべていた。

ドロイド「報告します。重要な機材、書類等は全てもちだされた模様です。
データも消されています」

???「構わんよ。全て覚えているさ、クックック…」

そしてその人物は天井をむかって叫んだ。

？？？「ゆりがごをとったどおおおおおおお！！！！」

第３５話：緊急事態（後書き）

危うし、ジェイルでした。

このまま話をとんとん拍子で進めるか、サイドストーリー的なものも書いたほうがいいのか、考え中です。

では

第３６話：暴露の回（前書き）

そういえば、ゆりかごってどんぐらいの大きさなんでしょうかね？
知っている方がいたら教えてほしいです。

第３６話：暴露の回

～６課～

会議室には色々な人々が集合していた。
まず６課のみんな。それにレジーとジェイルにゼストさん達。
クロノとリンディさんにユーノにゲンヤさんとカリム。
おまけに３提督ときた。

俺が６課に帰ってきてから、みんなに管理局が裏でやっていた違法研究、
横領、評議会の正体、ジェイルやヴィヴィオのことなども話した。
すでにこのことを知っているクロノとレジー以外はびっくりしていた。

な「これが…管理局の真実なの？」

フェ「プロジェクトＦを最初にやったのが管理局だなんて！」

は「正義の機関？これが？やってることは悪の組織やないか！」

ア「おまけに、夜天の書を改悪したのも管理局だと！？
　自分達の知名度を上げるためだけに闇の書にしたのか！？」

シグ「本当に腐っているな…」

ヴィ「自分たちで夜天の書を改造したくせに、あたし達を犯罪者扱

いしたのかよ！？」

シャ「…私の料理よりひどい」

ザフィ「言葉にできんな…」

ツ「ひどすぎるです…命は物じゃないのに…」

ス「…戦闘機人の研究を始めたのも管理局なんだ…ふーん…」

ギ「確かに納得のいく答えですね…研究にはお金がいる。そして一番お金を
もっているのは管理局ですからね」

ゲ「クイントのいた部隊を抹殺しようとしたのも管理局とはね…
ほんとどうしようもないな」

ユ「僕の輸送船を撃沈したのも管理局だなんて…」

カ「聖王陛下でもゆりかごに乗って大暴れする位ひどいですね」

「とまあ、こんなもんかね。これらの情報は時期を見て公開するよ。
今の上層部はこんなに腐っているから、全部お取り換えしようと思う」

みんな「異議なし」

次に新しい敵の話になった。

ジェ「とにかく聖王のゆりかごはドロイド軍の手に落ちてしまった。
　他にあそこには何もないしね」

レジ「調べたらあの山脈一帯に強力な結界とジャミングがかかっている。
　ウィルしか突破できないだろう」

「結界はたいした問題じゃない。あんなの一発で破壊できるしな。
問題はヴィヴィオだ。連中の次の狙いは間違いなくあの子だ。
ヴィヴィオがいないとゆりがごは動かないからな」

な「つまり、ヴィヴィオがいなかったらゆりかごは動かない？」

「それ以外に起動方法はないはずだが、どうだ？」

ユ「ウィル、実はその件で話が…」

「ん？」

ユ「無限書庫内のデータを片っ端から調べたら、ゆりかごのことが少しわかってね。
　それによると、聖王がいない時でもゆりかごを起動する方法があるんだ」

みんな「な、なんだってー！！」

ジェ「そんな方法あるのか！？」

ユ「うん。その方法なんだけど、マスターキーを使うんだって」

フェ「マスターキーって…」

ユ「聖王本人がいなくてもその鍵を使えばゆりかごは起動する。
戦闘行動はかなり制限されるけど、軌道上に上がれば
主砲が撃てる状態になる」

「車のキーじゃねえんだから勘弁してくれ…それでその鍵は今どこに？」

ユ「それはわからなかったよ」

ジェ「今ゆりかごを奪取したということは、既に奴らは鍵をもっているんじゃなイカ？」

ク「その考えに賛成だ。ということはいつゆりかごが復活してもおかしくないということか…」

レジ「いずれにせよ後手に回って得なことなど何一つないな。
奴らが謀を成す前に即時撃滅を図る、これが最善だ！」

リ「そうですけど、地面の下に埋まっている戦艦を破壊するのは
かなり難しいのでは…」

レジー「ぐぬぬ」

「ゆりかごについては俺に任せてくれ。地面から出てきたらこっちの勝ちだ」

みんな「？」

「レジー、ジェイル。賭けしないか？」

ジェ「どんな賭けだい？」

「ゆりかごが地面から浮上してから何秒で墜落するか」

レジー「ウィル、時間を間違えてないか？何分の間違いじゃ…」

「俺は３０秒！レジーは？」

レジ「…４５秒！」

ジェ「じゃあ６０秒で」

「負けたらおごれよ？」

ク「それじゃあゆりかごはウィルに任せるよ。
　それとは別に、もうすぐ公開意見陳述会がある。預言を考えればこれが狙われる可能性が高い。その日は６課のみんなも警備があるしな」

な「ヴィヴィオが狙われるのに警備…」

フェ「でも、地上本部も大事だし…どうしよう」

は「ああもう！スカリエッティが仲間になったと思ったら今度は別の敵かい！」

レジ「地上本部なら心配いらん！あそこは鉄壁の要塞だからな！」

「イオン砲塔も設置してあるから問題ないぞ」

ジェ「君たちが味方でよかったよ」

レジ「念のために6課の隊長陣のリミッターは全て解除しておく。いざという時にまともに戦えないのでは話にならんからな」

は「感謝します！」

ラ「レジー、それにウィル。地上を守ってくれよ！」

ミゼ「あなた達を信頼してますからね？」

レ「ドロイドなんかに負けるんじゃないぞ？」

レジ「了解しました！」

「あいあい」

カ「あら?みなさん、ちょっといいですか?」

は「なんや、カリム?」

カ「予言の一部が変わりました」

「えーこんな時にかよ。で、内容は?」

カ「予言の中から『死せる王の下』という項目が消えてしまいました」

ス「死せる王ってヴィヴィオのことじゃないの?」

ギ「それがなくなったってことは…」

ジェ「ゆりかごを動かすのにヴィヴィオはいらないということだ」

「それじゃあれか。敵はガソリン満タンで運転席に座っていて、シートベルトしめて、鍵穴にキーを差し込んで、いつエンジンかけようかな、って考えてる状態か?」

ク「ウィルの言うとおりだろうな」

レジ「やはり即時撃滅を…」

ミゼ「レジー坊や、落ち着きなさい」

「ま、とりあえず明後日の公開意見陳述会のあとだな」

は「そやね」

こうして6課とゆかいな仲間達は、明後日に備えることになった…

第３６話：暴露の回（後書き）

なんか短いですね

次回は地上本部攻防戦ですかね

では

主人公のスペックとか（前書き）

そういうの全然書いていなかった気がするので。

主人公のスペックとか

主人公の設定

名前：ウィリアム・T・ロンバート

年齢：なのは達と同じ

身長：１８５？

体重：９０？

体格：ややマッチョ

生年月日：４月３０日（前世と同じ）

性格：普段はおおらか。でもキレると手に負えなくなる

好きなこと：食事、睡眠、友人と遊ぶこと

嫌いなこと：食事と睡眠を邪魔されること

趣味：読書、料理、チェス

容姿：黒髪で、目の色は赤で、かなりイケメン

魔力光の色：好きに変えられる。普段は無色

術式：ミッドとベルカの完全混合ハイブリッド。近、中、遠距離攻撃が可能

魔力ランク：ＥＸ

魔力変換資質：なんでも

能力（レアスキルに該当）
あらゆる魔法・能力が使用可能、完全瞬間記憶能力、主人公が今までやってきたゲームに
登場した銃や武器を、頭の中で考えただけでアームドデバイス化（非人格型）して
召喚する能力、スター・ウォーズのフォース、などなど。

デバイスの設定

１つ目

名前：インフィニティー（インフィー）

タイプ：インテリジェントデバイス

性格：ＡＩは女性人格、普段は真面目で主人公に従順だが、たまにふざけることも。

バリアジャケット：マクロスＦのＶＦ－２５Ｓ（オズマ機）にアー

マードパックをつけたような感じ

２つ目

名前：アイザック（若本）

タイプ：インテリジェントデバイス

性格：ＡＩは男性人格、というか若本

バリアジャケット：ＣｒｙｓｉｓのＮＡＮＯスーツそのまま

ユニゾンデバイスの設定

名前：ティーナ

タイプ：ユニゾンデバイス

身長：１５０？

体重：ティ「死にたいのか？あ？」

容姿：燃えるような赤い髪、目の色は金色、ナイスバディな美人

性格：元気はつらつな性格だが、怒ったりテンションが上がると別

人になる

魔力光の色：好きに変えられる。普段は無色

術式：ミッドとベルカの完全混合ハイブリッド。近、中、遠距離攻撃が可能

魔力ランク：ＥＸ

魔力変換資質：なんでも

ちなみに、ユニゾンすると何故か主人公が女体化する。

主人公のスペックとか（後書き）

こんな感じですかね。
では

番外編5：若くなった！？

明日は公開意見陳述会。なのでみんな気合を入れて訓練に取り組んでいた。
そんな中、はやてとシャマルは医務室でなにやら怪しげな薬を作っていた。

は「どやシャマル？うまくいったか？」

シャ「ばっちぐーです、はやてちゃん！これで完成しました！」

は「ふふふ、あははははは！！よーし、さっそく行くで！ってあ！」

つるっ

はやては足を滑らせ、手に持っていたビーカーを前に放ってしまった。
そして運の悪いことに、

「おーいシャマルー、飯だぞ！？」

ばしゃっ！

ウィリアムが医務室に入ってきて、そのビーカーの中身を全身に浴びてしまった。

「な、なんだこれ！っておい！」

しゅるしゅるしゅる…

は「えええええ！！！」

シャ「」

どこぞの青狸ロボの道具よろしく体が小さくなってしまい、
ようやくおさまった時にはなんと9歳の体になってしまっていた。

シャ「ウィル君かわいい、ハァハァ」

は「ウィル君～抱っこさせてーな！」

それを見たはやてとシャマルは襲いかかってきたが、

〈マァキシマムストレングス〉

「いい加減にしろおおおおおおおお！！！！」

～その頃の食堂～

ス、エ、ギ「…（ガツガツモグモグ）」

フェ「あれ、ウィルはどこ？」

ヴィ「シャマルを呼びに医務室に行ったぞ」

な「それにしても遅いね」

シグ「主も遅いな…ちょっと呼びに行って…」

ズドンッ！！！

ス「ぶーっ！！」

テ「スバル！汚いでしょ！」

キャ「なんですか今の爆発は！？」

ヴァ「なのはさん！医務室で爆発です！」

みんな「えええええええええ！！！」

みんなが駆けつけると、

は「」

シャ「」

気絶しているはやてとシャマルがいて、

「…（むす～っ）」

超不機嫌な顔をした

ヴィ「…ウィルか？」

「…残念ながらな」

幼いころのウィルが座っていた。

な「なんで小さいの？」

「そこに転がっている狸に聞いてくれ」

フェ「狸って…」

ス「本当にウィルさんなんですか?かわい「ドンッ!」…え?」

俺は即座にMEUピストルを出して撃った。

「スバル~、俺は今ものすごく不機嫌なんだ。頼むからかわいいなんて
言わないでくれよ?くれぐれも頼むぞ?フフフ…」

ス「は、はい…すいましぇんでした…」

頭の横にいきなり魔力弾を撃ち込まれたスバルは腰を抜かしていた。

シグ「とりあえず主を起こすか」

フェ「で、どうしてはやてはあんな薬を作ったの?」

は「だって…」

シャ「うううう…」

今はやてとシャマルは会議室で正座している。その周りを他のメン

バーが囲んでいる。

「動機はあとでいい。俺が望むのはその薬の解毒剤だ」

シャ「それなら問題ないわ。効果は夜には切れるから」

「そうか、ならいい」

な「で、なんで作ったのかな？」

は「だって…見たかったんや！」

ヴィ「何を？」

は「なのはちゃんやフェイトちゃんがちっちゃくなった姿に決まってるやろ！」

みんな「」

は「あのツルペタのツインテールに太もも！あの頃の二人はとっても良かった！

だからうちはあの姿をもう一度見たかったんや！！」

はやてはとんでもないことを堂々と皆の前で言った。

それが仇となった。

ジャキンッ！

な「ふーん、そんな風に私とフェイトちゃんを見ていたんだ…」ゴゴゴゴ…

フェ「いくらなんでもそれは許せないな…」ゴゴゴゴ…

「で、俺はそのくだらないことに巻き込まれたと、そういうことか…」ゴゴゴゴ…

な、フェ、ウィル「ふふふふふ…」

俺となのはとフェイトは笑っているけど、3人の目が笑っていないことに
気がついたはやてとシャマルはガタガタ震え始めた。

は「あ、いや、その、シグナム！助けて！」

シャ「ヴィータちゃん！お願い！」

だが。

シグ「よし、みんな表で待っていようか？」

ヴィ「そうだな。おいみんな行くぞ！」

ＦＷ「はい！」

は、シャ「そんな～～」

ア「主、幸運を…」

ツ「お葬式には参加するですよ～♪」

は「ツヴァイ！なんてこと言うんや！」

「さぁて、お二人とも？」

は、シャ「ビクッ！」

な、フェ、ウィル「ＯＨＡＮＡＳＨＩの時間だよ？」

は、シャ「ぎにゃあああああああああああああああああああ！！！！！！」

「ふう、こんなもんだろ」

な「そうだね」

フェ「でも、やりすぎじゃないかな？」

「いいんだって、構うもんか」

ばしゃっ！しゅるしゅるしゅる、ポン！

な「ぶっ！」

フェ「ふふ、こ、これは…」

「くっくっく、ここまでうまくいくとは…ふふっ、まあいい。逃げようぜ」

は「う～ん、いたた、ひどい目にあってもうた」

はやてはその後しばらくしてから起きた。

は「もうあんなことはやめにしよ、そうしよう」

そう言って部隊長室に戻ったのだが、その途中で、

ヴァ「おや、部隊長、ってぷっ！」

は「どしたの、ヴァイス君？」

ヴァ「いや、なんでも、くくっ、ないです」

は「そか」

ヴァイスに笑われ、他の一般局員もなんか笑いをこらえているような感じをしていた。

は「なんなんやろ?」

だが、はやては大して気にしないで仕事を続けた。

しかしその後も、

は「ナカジマ三佐、どないしたんですか?」

ゲンヤ「ふふふっ、なんでもねえよ、あははは!」

は「もう、なんで笑ってるんですか!」

レジ「あーはっはっは!八神部隊長、私を、笑い殺す気か、はははは!」

カ「はやて、ふふふっ、それはないわ」

ク「ぷっ！はやて、ふふふ…」

色々な人に笑われて散々なはやてであった。

その日の夕食。

は「もうなんでみんなうちのこと笑うんやろ？どう思う、ヴィータ？」

ヴィ「え？な、なんでだろな？不思議だな」

ヴィータははやての方を見ないで答えた。

は「？」

はやてはふと周りを見ると、みんな笑いをこらえているように見え

る。

は「なんでや、なんでみんなうちを笑うんや…わけがわからん…」

はやては泣きそうになってしまった。

フェ「ほら、だからやりすぎだって言ったのに」

「いや、これは正当な復讐だから問題ない」

は「ふぇ？」

顔を上げると、ウィリアムとなのはとフェイトがいた。

な「はやてちゃん、なんでみんなが今日笑っていたと思う？」

は「そんなの、わかるわけないやんか！」

フェ「じゃあこれ」つ手鏡

は「え？なんで鏡なんか…」

は「なんやこれはあああああああああああ！！！！」

「何って狸の耳としっぽだけど？」

そう、俺が気絶しているはやてにかけた薬は、その名も「狸薬」。
これをかけられると、狸の耳としっぽが生えるのだ。
そうとは知らずに仕事をしていたもんだからみんなに笑われていたのであった。

は「な…」

「それにしても、ふふふ、似合ってるな?あははは!」

ア「主には申し訳ないが、これは…ふふっ」

ツ「はやてちゃんが狸になったです~」

ヴィヴィオ「はやてママ、狸さんになってるの」

「ま、これにこりて二度と変な薬は作るなよ?次はもっとひどいことになるかもな」

は「も、もっとひどいってなんや?」

「ん~、全身狸になる薬とか…」

は「ごめんなさいもう二度としませんすいませんでした」

「おう、わかればいいんだ。さあ飯食おうぜ」

～深夜～

「さて寝るか」

な「そうだね」

フェ「もうこんな時間なんだ」

は「じゃあ寝よか」

「ちょっとまて。なんでお前らがいる？」

フェ「細かいことは気にしないの」

「お前ら、俺が小さいから一緒に寝たくなったんじゃないだろうな？」

は「そ、そんなことあらへん！」

な「私はいつでも一緒に寝たいのに…」

「はぁ、今回だぞだぞ？」

は「やったー！じゃあうちはウィル君の左側な！」

な「じゃあ私は右側なの！」

フェ「あれ、私は？」

は、な「さあ？」

フェ「……じゃあこうする」

「ふぇ、フェイト！？」

は、な「あー！」

フェイトはあの大胆なネグリジェでなんと！ウィルのおなかの上にうつぶせに乗ってきた！

「フェイト！それは色々とまずい！」

フェ「何がまずいのかな？」

「何ってその…」

ぽよんぽよん

俺仰向け。フェイトうつぶせ。つまり俺のお腹らへんににフェイトの豊満な女性の象徴が…

な「フェイトちゃんずるい！こうするの！」

ぎゅ～

なのはは俺の腕に自分の胸を押しつけた。

は「ならうちも！」

はやても同じことをし始めた。

ウィリアム脳内戦線

「司令！三方向から攻撃されています！かなり強力です！」

「ここで我ら理性部隊が耐えなければ、負けてしまう！
各員全力でこの拠点を死守せよ！」

「はっ！」

現実

なのはとはやてはあっという間に寝てしまった。その一方。

「寝れないな」

フェ「寝れないね」

俺とフェイトは寝れなかった。フェイトは頭を俺の胸の上に置いて

いる。

フェ「ウィル、ドキドキしてるね」

「そりゃ当り前だろ」

フェ「どうして？」

「美人３人と一緒に寝れるんだからな」

フェ「美人…／／／」

そんなことを話していると。

むくむくむく

フェ「あれ？」

「おっ！」

ウィリアムの体は元の大きさに戻った。

「やっと元に戻ったぜ」

フェ「良かったね…ウィルの体、温かいな…ぐー」

「あ、寝たか。俺も寝るとするか」

翌日の朝

は「なのはちゃん、起きてーな」

な「う～ん、どうしたのはやてちゃん」

は「…これ見てどう思う？」

な「え…？」

昨日フェイトはウィリアムの胸に頭を載せて寝ていたはずだった。
だが今はどうだろう。ウィルの位置は変わっていないが、
フェイトの頭は、

は「こ、これって／／／」

ウィリアムの紳士のソーセージの横にあった。

「う～ん、なんだよ朝からうるせえな」

フェ「あれ、これって／／／」

フェイトとなのは、はやては顔を赤くする。

「なんでお前ら顔が赤いんだ？」

ふと自分の股を見て気がつく。男から誰でもある朝の生理現象、朝立ちである。

「あ、いや、これはその、生理現象だから仕方ないんだぞ！」

は「はあ、とりあえずフェイトちゃんはそろそろ見つめるのやめとき」

フェ「…（じー）」

俺のそそり立つオベリスクをフェイトはじっと見つめていた。

「フェイトさん？」

フェ「え？ああ、その、男の人って、すごいんだね／／／」

「忘れてくれ…」

は「それよりヴィヴィオを起こさないと」

な「そうだね」

今日は公開意見陳述会。さあ、気合を入れていこう。

番外編5：若くなった!?（後書き）

次こそ地上本部攻防戦を書きます！
では

第３７話：地上本部攻防戦（前半）

ついにこの日がやってきました、公開意見陳述会。
どうも、ウィリアムです。今日の地上本部は超厳戒態勢なのでドロイドがやってきても問題ないでしょう、多分。
ヴィヴィオとジェイル、ナンバーズにゼストさん達は６課で待機してもらっています。
一応６課の隊舎にもシールドは張ってあるから問題ないと思う。

「あ、すまんがなのは達先に行っててくれないか？」

な「どしたの、ウィル君？」

「トイレだよ」

「ふう、すっきりさっぱり」

さて、会場に行くか、って。

「アリサにすずか？」

ス「ウィル！」

す「元気～？」

「なんで二人がここに？」

ス「それがさ～、なんか教導官やってみないかって言われちゃってさ」

す「私はデバイスの研究・開発室にスカウトされてね」

「あ、そうだったんだ。俺は今日の公開意見陳述会の警備だよ」

ア「そっか、ウィルも頑張ってね？」

「おうよ！」

～元ジェイルの隠れ家～

？？？「では出撃だ！」

がしゃんがしゃんがしゃん…

さて、公開意見陳述会が始まってから2時間が経過したが、現時点では異常はない。
でも敵が来るとしたらそろそろだろうな。少なくとも俺が敵ならそうする。

なんてことを思っていたら。

ダラララララ！！

突然鳴り響く銃声。今の音はゴールキーパーのものだろう。

は「ウィル君！」

「来たぞ！敵襲だ！」

ビーッビーッビーッ！！

レジ「全保安大隊はただちに出撃！敵を殲滅せよ！機動６課の諸君は
　要人保護に少し残して、後は全員前線に出ろ！」

みんな「了解！」

レジ「ウィル、前線の指揮を執れ。それと地上本部防衛システムの
　全権限をお前に託す。頼んだぞ！」

「合点承知！」

「全保安大隊に告げる。こちら機動６課所属嘱託魔導師、ウィリアム・Ｔ・ロンバートだ。
　レジアス・ゲイズ中将の命令により、只今より私が前線の指揮を執る。
　全員、ＡＭＦ及びシールド起動。作戦要綱に従い配置につけ！」

「了解！」

ティ「ご主人様、全方位から敵が来ます！」

「建物にシールドは？」

ティ「もう張ってあります！」

「結構だ。あとは敵がどう動くかだな」

局員Ａ「前方よりミサイル多数、いえ無数に襲来！」

局員Ｂ「なんて数だ…」

空を埋め尽くすほどの量のミサイルが飛んできた。

「全ゴールキーパー、撃ち方始め！」

キュイーン、ダララララララ！！

ドカンッ！

ゴールキーパーが弾幕を張る。回避する間もなくミサイルは燃える鉄クズになる。
運よく弾幕を回避しても、シールドに当たって破壊される。

A「すごい、ほぼ全て落としている…」

B「まじで要塞だな!?て、敵ドロイド軍、突撃してきます!」

ミサイル攻撃の間にドロイドがいっぱい突撃してきた。

「全自動機銃、撃ち方始め!」

バラララララララ!!!

地上本部各所に設置した自動機銃が唸り声を上げて魔力弾をまき散らし始めた。
多くのドロイド達はその強力な攻撃に耐えることができずに破壊されていく。
というか敵は攻撃する暇もなく破壊されていく。

A「俺達いなくてもいいんじゃね？」

B「俺もそう思った」

「それはないぞ」

A「え？」

「あの自動機銃の欠点はな、砲身冷却してる時は攻撃できないんだ。その間はお前らが攻撃しないといけないんだ」

B「なるほど」

ティ「ご主人様！ガジェット反応！飛行タイプ！数は…嘘でしょ！？５，０００！？」

「まじでか」

俺はジェイルに通信を入れる。

「おい！ガジェットの設計図は全部破棄したんだよな？」

ジェ「え？ああ、もちろんだよ。襲撃される前にね」

「じゃあ、今地上本部に来るガジェットはどこのどいつが作ったんだ？」

ジェ「それはわからないな」

「う～ん、とりあえずティーナ！上にあがってガジェット潰してこい。
あらゆる兵器の使用を許可する」

ティ「ほんとにほんと？」

「もち」

ティ「おっけ～。じゃあ行ってくるよ！」

～元ジェイルの隠れ家～

？？？「う～ん、やっぱり勝てないね～」

彼はモニターで自分のドロイドが破壊されていく様を眺めていた。

？？？「よし、じゃあこうしよう。フフフフ…」

～地上本部～

A「なあ、さっきの女の子、大丈夫なのかな？」

B「５，０００のガジェットに１人で何ができるんだ？」

すると、遠くの空でどでかい火球がいくつも出現した。

「おお、派手にやってるな、ティーナの奴。ガジェットもいなくなったし」

A「え」

B「もう殲滅？」

「そこ！ボケっとしてないで攻撃しろ！敵はまだまだいるぞ！」

A、B「了解！」

な「にゃあああああああ！！！」

ヴィ「おりゃあああああああ！！！」

ス、ギ「でりゃあああああああ！！！」

テ「なんでこんなにいるのよおおお！！！」

ウィルから少し離れた場所ではスターズ分隊が奮戦していた。
ティーナによる日頃の訓練（という名の拷問）の成果が今発揮されている。
ブラスターなんてかすりもしないで攻撃をしている。

ヴィ「ったくもー！いい加減に帰れよ！」

な「全然敵の流れが切れないね…」

ずっと攻撃しているが、敵のドロイド軍は相変わらず攻めてくる。

ス「町の中にドロイド製造工場があるわけじゃないし…」

ギ「単純な物量攻め、ですかね？」

「おそらく廃棄都市群のどこかに製造工場があるんだろう。
そこから転移してきたに違いない」

テ「ってウィルさん！？」

いつからいたのか、ウィリアムが横に立っていた。

「悪い知らせがある。自動機銃がそろそろ壊れるかもしれん」

ヴィ「まじかよ！？」

「こんなに長い間撃ち続けるとは思ってなかったんだ。砲身が熱で歪み始めている。
今全部の自動機銃に修理魔法をかけたけど、もってあと１５分の射撃しかできない」

ス「１５分…」

テ「あの、大きい方はどうなんですか？」

「ゴールキーパーは問題なく射撃を続けているよ」

その時。

レジ「ウィル。敵の大将から6課のメンバーに通信が入ってるんだが、みてくれ」

「やっとおでましか、ったく一体どこのどいつだ？」

モニターが展開されて、俺はその人を見た。

な「え？」

ヴィ「は？」

ス、ギ「えええ！？」

テ「ちょ！？」

シグ「馬鹿な！？」

フェ「嘘！？」

エ「はい？」

キャ「うそん」

６課でも。

ゼスト「なぜ…？」

メガーヌ「あらら？」

アギト「えええええ！！？？」

ルー「ありえない！？」

ナンバーズ「えええええ！！？？」

ジェ「なんで…？」

そこに映っていたのは、他でもない、ジェイル・スカリエッティだった。

ジェイル？

「やあ、機動６課の諸君！驚いているだろうね。ああ、もちろん今６課に
保護されているジェイル・スカリエッティではないから安心したまえ」

「じゃあ、お前は一体…」

ジェイル？

「そうだな、区別をするために、私のことはフェイク・スカリエッティとでも
呼んでくれたまえ」

ジェ「フェイク？ということは…」

フェイク
「そう。私は君と同じクローンだ。ただ、作られた目的は若干違うがね」

クア「目的？」

フェイク
「そうだ。最高評議会は君たちが裏切ることを知っていた。だからもう1人
ジェイル・スカリエッティを作って、裏切り者を抹殺するようにしたのさ」

「なるほどな。だからガジェットやドロイドを作れたわけか」

フェイク
「その通りだ。そして今回私は地上本部にドロイドを差し向けたが、現状を見る限り
残念ながら私は負けているようだね」

レジ「ここは要塞だからな！」

フェイク
「でも私にも一応感情は備わっているんだ。負けていると少しはむかつくのでね。
従って私も勝とうと思う」

は「どうやって勝つつもりなんや！」

フェイク
「ああ、そこで勝つつもりはないよ。もしかしたら勝てるかもしれないがね」

フェイクが何かを操作すると、新しいモニターが現れた。
そこに映っていたのは、研究室らしき部屋とドロイド。そして

「なっ！？」

フェ「お母さん！姉さん！」

ドロイドに拘束されているプレシアとアリシアの姿だった。

フェイク
「さて、ウィリアム君。ジェイル・スカリエッティの身柄をこちらに引き渡せ。
さもなくば、君の大切な人の家族が死ぬことになるぞ？ははははは！！」

フェ「そんな…」

ヴィ「卑怯だぞ！！」

フェイク
「戦いに卑怯もクソもあるものか！勝てばいいんだよ、勝てば！」

「そこだけは同意見だな」

な「ウィル君！」

フェイク
「君とは少し気が合うかもしれんな。さて、あと3分以内に決めてもらおうか？
私はその間カップヌードルを作ることにするよ」

「フェイト」

フェ「ウィル…どうするの？」

「心配するな、何とかするさ。それよりも…」

みんな「？」

「俺もカップヌードル食べたくなった。どうしてくれるんだあの野郎！」

みんな「」ずさーっ

第３７話：地上本部攻防戦（前半）（後書き）

やはり戦闘シーンを書くのは苦手ですね、はい。

次は後半です

では

第３８話：地上本部攻防戦（後半）

さて、前回プレシアとアリシアが人質になってしまいました。

フェイク
「さあロンバート君、３分たったぞ。答えを聞かせてもらおうか？」
ずるずる

「まあ、落ち着け。俺も今カップ食べてるんだ」ずるずる

フェイク
「そ、それは！」

「そう、赤いきつねだ！！」

みんな「」ずさーっ

フェイク
「第９７管理外世界にのみ販売されている伝説のカップヌードル…
だと…」

「こっちではそう呼ばれているのか。故郷ではポピュラーな代物だ
ぞ？」ずるずる

フェイク
「その大きな油揚げにおいしそうなスープ！」

「あ、やべっ、マジうまいわ、いやほんとに」ずずーっ

フェイク
「羨ましい限りだ」ずずーっ

2分後

「あーうまかった」

フェイク
「さて食べ終わったことだし、返事を聞こうか？」

「あー、その前に受け取ってほしいものがあるんだけどいいかな？」

フェイク
「おや、プレゼントかい？」

「おうよ」

〈マァキシマムストレングス〉

「モデル、絶対等速（イコールスピード）、レベル６」

俺はＸＭ１０９ペイロードを出現させたうえで、能力を発動した。
絶対等速（イコールスピード）とは、とある科学の超電磁砲に出てくる能力の一つで、
投げた物体が、
『能力を解除するか投げた物が壊れるまで、前に何があろうと同じ速度で進み続ける』
能力である。アニメでは、郵便局のシャッターが吹っ飛ぶくらいの威力だったが、
俺の場合はレベル６なので、本来の効果はそのままに範囲を無制限、さらに
能力をかけるタイミングを任意で選べ、硬度に関係なく自身が能力をかけたものを
半永久的に破壊されず前に進ませ続けるという能力になった。

「鉛玉のプレゼントだ♪」

ズドンッ！！！

「おいおい、どうやってそこからここまで撃つ気なんだい？
そもそも山の中に銃弾を撃ち込めるわけが…」

ズシャッ！

そこまで言った時、２５ｘ５９Ｂｍｍ　ＮＡＴＯ弾によってフェイクの右腕が
血飛沫と共に消滅した。

フェ「え？」

な「ふぇ？」

は「な！？」

フェイク
「ぐあああああああああああ！！！」

フェイクはのたうちまわってる。こうかはばつぐんだ！

フェイク
「きさまあああああああ！！何をしたあああああ！！！」

「何をしたって言われてもね、これでお前の右腕を吹っ飛ばしただけだけど？」

フェイク
「くそお！ドロイド！あの二人を殺せえええええ！！」

フェ「やめて！！」

～プレシアの研究所～

ドロイドA「命令だ。二人を殺せ」

ドロイドB「了解」

アリ「お母さん…」

プレ「アリシア…」

二人とも抱き合っていて、もう助からないと思っている。

そしてブラスターから発射されたエネルギー弾が二人の体を

貫通しないで撃ったドロイドBが吹っ飛んだ。

ドロイドA「なに？」

フェ「あれ？」

な「ほよ？」

は「どうなってるんや？」

アリ「なんで？」

プレ「なんか跳ね返ったわね」

「こんなこともあろうかと！昔みんなに渡したネックレスやら指輪には
おまじないというかお守り機能がを付けておいたのだ！はやて以外」

みんな「な、なんだってー！」

は「って！なんでうち以外なんや！」

「はやてのには白夜の書の防衛プログラムが仕込んであるからな。
それだけで十分だろうと思って。他の人は魔導書持ってないし」

は「なるほど」

そんな話をしている間にも、ドロイドAはプレシア親子にブラスターを
撃っていたが、全て反射されて逆に破壊されてしまった。

俺がプレシアとアリシアにあげたネックレスには、とある魔術の禁書目録の
一方通行（アクセラレータ）の能力が組み込まれている。元々のこの能力は、
運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を
任意に操作（変換）する能力である。一部の特殊例を除き核兵器を打ち込まれても
無傷のままでいられるとされ、不意打ちなどでも反射で無効化するため
最強の能力とされる。

でも、組み込まれている能力なので、ベクトルの任意操作はできず、
ただ攻撃を全て反射するだけになっている。

フェイク
「くそ！なんだそのインチキ能力は！？聞いたことがないぞ！」

「そりゃないだろうね」

ティ「ですねー」

もともとこの世界にない超能力なんだからあるわけないだろ。

「さっきの返事をしようか。お断りだね。
お前が地上本部を攻撃しただけでは、俺はそんなに怒らなかっただろう。
だが、お前は一般人を、しかも俺の大切な人の家族を狙いやがった。
これは許しがたい行為だ。だからお前は必ず、この手で、
捕まえて見せる。そして生まれてきたことを後悔させてやる。
俺がそこに行くまでにその右腕治るといいな？」

フェイク
「くっ、いいもんいいもん！今度みんなゆりかごでつぶしてやるんだから！」

そう言い残して通信は切れた。

「お前はガキか。まあいい、フェイト、これで家族の所へ行って来い。」

俺は魔法陣を出現させてフェイトに話しかける。

フェ「うん、ありがとう」

「さーて、敵はあとどれくらいだ？」

ティ「そろそろ帰ってほしいですね～」

「全くだ。全部隊に告げる！現時刻より地上本部の防衛戦から敵残存兵力の掃討戦に移行する。総員、突撃！！」

保安大隊「うおおおおおおおお！！！」

「よし、俺達も行くぞ！」

みんな「はい！」

2時間後

局員A「敵残存兵力の掃討が終わりました！」

「大変結構。こちらの被害は？」

局員B「いくつかの施設は修理が必要ですが、民間人、局員共に死傷者ゼロです！」

「よーし！みんなよくやってくれた！地上は守られたぞ！！」

みんな「いよっしゃあああああああ！！！」

レジ「ウィル！よくやってくれた！」

ラ「さすがウィルだな」

ミゼ「次の問題は、あのフェイク・スカリエッティですね」

レオ「こちらをゆりかごで攻撃すると言っていたが…」

「まあ、とりあえずは問題ないと思われます」

は「さて、みんな6課に帰ろうか？」

みんな「はい！」

俺はその後、プレシアの研究所に向かった。

「プレシアにアリシア、無事でよかったよ」

アリ「ウィル！怖かったんだからね！」

「すまなかったな」なでなで

アリ「えへへ／／／」

プレ「でも敵の攻撃を全て跳ね返す能力だったかしら、すごいわね」

「その能力はみんな付いてますよ」

フェ「じゃあ私のネックレスにも？」

「ああ、フェイトにあげたそのイエローダイヤモンドのネックレスにも
きちんと組み込まれている。ただ、発動には一定の条件が必要でな。
持っている人の命が危うい時か、本人が気が付いていない攻撃が来た時に
発動するようにした。いつも反射じゃまずいしね」

フェ「なるほど」

プレ「また助けられたわね。礼を言うわ、ありがとう」

「なーに、気にすることないって」

フェ「それで、姉さんはいつまでウィルになでてもらっているの！？」

アリ「いいじゃないの。うふふ～」

フェ「わ、私も！」

「はいはい、フェイトもなでなで～」

フェ「にゃ～／／／」

～6課の食堂～

地上本部防衛戦が成功したのでその打ち上げ中。
ゼストさんとメガーヌさんはレジーと一緒に飲むそうな。

「よーし、ジェイル！飲むぞ！！」

ジェ「今日はとことん飲もうか！」

ウ「ドクター、どうぞ」とくとく

ジェ「おっとっと。ありがとうウーノ」

クア「ウィル様～、おつぎしますわ～」とくとく

「お、ありがとうクアットロ」

ウェ「ウィル兄！あたしも飲みたいッス！」

ノ「馬鹿、お前はすぐに酔っぱらうだろう」

チンク「まあいいんじゃないか？姉も少し飲むとするか」

ス「私も飲みまーす！」

テ「ちょスバル、ペース早すぎ！」

ギ「スバル、飲みすぎちゃ駄目よ？」

エ「僕とキャロはジュースだね」

キャ「まだお酒は飲めないもんね」

は「シグナム～胸揉ませて～な～」もみもみ

シグ「そう言いながら揉まないでください！」

ヴィ「はやて、もう酔ってるよ」

シャ「まだお酒は弱いのね」

ザフィ「ｚｚｚ…」↑もう酔って寝ている

～2時間後～

ジェ「めずらしいね、ウィルが酔い潰れるなんて」

は「確かに見たことないな～」

フェ「いい顔で寝てるね」

な「部屋に運んであげよう」

～真夜中～

「あたまいてえ…トイレ…」

どうやら俺は酔って寝てしまったようだ。目を開けると自分の部屋だった。
誰が運んでくれたかしらないが、明日礼を言うとしよう。
とりあえずトイレに行かないと、って。

「動かない…だと？」

右を見る。

なのはとフェイトが寝ている、裸で。

左を見る。

スバルとティアナが寝ている、裸で。

自分の姿を確認する。

お腹の上でヴィータが寝ている、もちろん裸で。

なんだ、この状況は。一体何があった？まったく覚えていない！

とりあえずトイレに行きたいけど動けないな…あ、そうだ！

「モデル、座標移動（ムーブポイント）、レベル５」

膀胱内の小便を下水管に移動させることに成功した。
能力の無駄遣いとか言っちゃだめだよ？

「さて、寝るか」

そして俺は美女に囲まれながらまた寝ることにした…

第３８話：地上本部攻防戦（後半）（後書き）

はい、おしまい。
６課は襲われなかったことにしました。

次回はどうしようか考え中です。
では

第３９話：会議と…

～俺の部屋～

目覚まし時計「チクタクチクタク…」

「ｚｚｚ…」

な「ｚｚｚ…」

フェ「ｚｚｚ…」

ス「ｚｚｚ…」

テ「ｚｚｚ…」

ヴィ「ｚｚｚ…」

目覚まし時計「ジリリリリリッ！！」

バシュッ！！→サイレンサー付きのＭＥＵピストルの発砲音

「黙れこの野郎…ｚｚｚ…」

目覚まし時計「」ちーん

一時間後

シグ「遅いな、みんな」

シャ「確かに少ないわね」

は「ちょっと様子見てくるわ」

は「うぃーるーくーん!!起きてーな!もう朝やで!」どんどん

ギ「八神部隊長、どうしたんですか?」

は「お、ギンガ。ちょうどええ、この扉壊して」

ギ「えええ!なんでですか!?」

は「いくら呼んでも起きないウィル君が悪いんや!」

ギ「そういえばスバル見ました?朝から見てないんですけど?」

は「食堂にはいなかったで?」

ギ「う～ん、じゃあどこに…まさかこの中じゃ！」

は「ギンガ！」

ギ「はあああああああ！！！」

スガーンッ！！！

そして部屋の中にいたのは。

「何だ！？」

な「にゃあああ！！」

フェ「何事！？」

ス「ひえええええ！！」

テ「何なのよ！？」

ヴィ「ぎがうま～…ＺＺＺ…」

は「」

ギ「」

そこに。

シグ「主はやて！今の爆発は！？」

シャ「何があったの、はやてちゃん！？」

部屋の中を見て。

シグ「」

シャ「」

な「はやてちゃん、これはその！」

フェ「シグナム、これには深いわけが…」

ス「ぎぎぎギン姉！？」

テ「なんでヴィータ副隊長まだ寝てるの！？」

ヴィ「ＺＺＺ…」

「あ～、まあ、その、なんだ、おはよう」

は、ギ、シグ、シャ「おはようみんな、そしておやすみ」

「「「「「「ぎゃあああああああああああ！！！！」」」」」」

～地上本部会議室～

レジ「では、会議を始めるとしよう、ってどうしたウィル？」

ジェ「ずいぶんとひどい怪我してるね？」

「はは、き、聞かないでくれ…色々あったんだよ…色々ね…」

この会議は、フェイク・スカリエッティという敵のボスへの対策を考えたりするもので、
参加者は、俺、６課の隊長陣、レジー、ジェイル、ゼストさん、ゲンヤさん、
３提督、クロノ、リンディさん、ユーノ、カリム、シャッハ、本局査察部所属の
査察官でカリム・グラシアの義弟のヴェロッサ・アコースである。

ク「とりあえず地上本部の防衛戦、お疲れ様。ウィルのおかげで誰も怪我をしなくてすんだよ」

ラ「あの要塞は素晴らしいものだな！」

「それがそうでもないんですよ。自動機銃の砲身がかなり傷んでいましたし、
連続射撃後の砲身冷却にかなり時間がかかることが判明したので、午後に
その修理を行います。ゴールキーパーの方は問題ありませんでした。

その名の通り、向かってくる全ての敵を倒していましたので」

ミゼ「他の管理局施設にも設置したいわね」

レ「他に被害はなかったのかね？」

レジ「地上本部近辺の民間施設に若干の被害が出ましたが、それ以外はありません」

ユ「映像で見たけど、すごい戦いだったね」

「完全な物量戦だったな。あんなにドロイドを作っていたとは予想外だった。

それでですね、廃棄都市群にドロイド製造施設があって、そこから転移なり

なんなりして襲ってきたと思っていたんですが、それらしき施設はありませんでした。

なので、ドロイドを作っているのはここ」

俺は元ジェイルの隠れ家の座標を指さした。

「ここで作ってこっちに飛ばしているんだろう」

リ「その隠れ家への奇襲を試みては？」

ジェ「あの辺一帯には強力な結界とジャミングがかけられているから難しいね」

は「それにしても最高評議会の人達はこんな隠し玉を持っていたとは…」

ラ「クローンのクローンってところか。まったくあいつら人の命を何だと
　思っているんだ？」

ゼスト「なんとも思っていないのだろう。そうでなければ人造魔導師や戦闘機人の
　研究などしないさ」

ゲ「クイントを殺そうとしたのも評議会か…くそったれめ！」

「まあまあみなさん、もういない評議会の連中のことはひとまず置いといて、
　今後のことを…」

ク「ちょっと待てウィル。もういないってどういうことだ？」

「あれ、話してなかったっけ？」

な「聞いてないの！」

レジ「ウィル、きちんと話しておかないとだめじゃないか」

ゼスト「ここにいる全員に知る権利があるからな」

「そうだね。え～、最高評議会のみなさんは地上本部防衛戦の前にお亡くなりに
　なりました。な　ぜ　か　不　思　議　な　こ　と　に
　彼らの入っていたポットの生命維持システムが逝かれてしまいましたとさ。

めでたしめでたし」

あの場にいたゼストさん、メガーヌさん、レジー以外のみんなは茫然としている。

リ「あのちょっといいかしら？」

「なんでしょう、リンディさん」

リ「その時の画像とかあるの？」

「これです」

俺がモニターに表示させたのは、３つのポットの中で腐っている脳味噌の
画像であり、俺とゼストさんがぶっ壊した光景ではない。画像編集ソフトで
ちょちょっと改造しただけである。

シャッハ「うわー」

ロッサ「これが、あの評議会だって言うのかい！？」

レジ「正確には評議会”だった”だな」

は「これが評議会の末路か…」

ジェ「ざまぁｗｗｗ」

メガーヌ「そう言えばなんでゼスト隊に抹殺命令が出たのかしら？」

ゼスト「やはりあの戦闘機人プラントに関係が…」

レジ「ゼスト、あのプラントはな、評議会が直々に指揮を執っていたんだ」

ゲ「それで抹殺命令が…ていうかそもそもなんで評議会は戦闘機人の研究を？」

レジ「その質問の答えはこうだ。プロジェクトFや戦闘機人の研究は、
完成したら一般市民の医療現場で使われる予定だったんだ」

フェ「一般市民！？」

レジ「そうだ。例えば、わしが交通事故にあったとしよう。事故で右腕を
切断することになった。当然、その後の生活に支障が出る。
そこで戦闘機人の技術で作った新しい右腕を付けると、
あら不思議、右腕は元通りってわけだ」

は「なるほどな～、その考えはなかった」

レジ「プロジェクトFのクローン技術も同じだ。例えば、赤ん坊が生まれて
すぐに死んでしまった時に、その赤ん坊の遺伝子を元にクローンを
作ればばっちぐーだ」

「レジーの言うとおり、と言いたいところだがそうではない」

な「え？」

レジ「どういうことだ!?評議会の連中はこう言ってたぞ！」

「それは表向きの理由だよ。考えてみろ、最高評議会ってのは旧暦の時代に
バラバラだった世界を平定し、管理局を生み出した人物達だ。かつては
優れた指導者で、一線を退いた後も評議会制を作り見守っていたが、
今ではもはや権力の座にしがみついた上に、目的のためには一切手段を
選ばない次元犯罪者といい勝負だ。おまけに肉体を捨てて、脳味噌姿で
ポットでぷかぷかしてる連中が次に考える事は何だと思う？」

ゼスト「おいおい、まさか」

「そう、自分の肉体だよ。自分の記憶を完全に引き継いだ完璧なク

ローン。
それが欲しかったから研究を進めたんだよ」

ユ「なんて奴らだ！人間のすることじゃない！」

レジ「くそったれだな。奴らが突　然　死してくれてよかったよ」

ラ「話を戻すが、フェイクのクソ野郎をどうするか？」

ジェ「二人も私はいらないだろう。フェイクとやらは殺していいんじゃないか？」

「賛成」

レジ「賛成」

ラ「賛成」

レ「賛成」

ゼスト「ウィル、フェイクは評議会のいわば飼い犬みたいなものか？」

「飼い犬ね、確かにそうかもしれないな。ジェイルが反旗を翻した時のために

自分は作られたって言ってたからな」

ゼスト「なら私も賛成だ。評議会の考えを引き継ぐような奴はいらん」

は「でも、一応彼も人間なんやし…」

な「殺すのはちょっと…」

「心配するな。表向きには事故死にするから」

フェ「事故死？」

「多分、来週あたりにこんなニュースが流れるだろうよ。
『本日、聖王のゆりかごが事故により墜落しました。残骸の中から、事故当時ゆりかごに乗っていたとされる、フェイク・スカリエッティさんが
遺体で発見されました』ってな」

レジ「それでいこう！」

ラ「決定じゃな！」

「あ、それで、ゆりかご落とすのに質量兵器の使用を…」

3提督「許可する！」

レジ「ばんばん使ってくれ！」

ク、リ「え～…」

な、フェ「」

は「いいんかい！」

カ「場合が場合ですからね」

ゲ「ていうかウィルは質量兵器も持っていたのか？」

「地上本部の防衛システムはもともと質量兵器ですよ？
実弾ではなく魔力弾を発射するようにしてますけどね。
中の仕組みは質量兵器と同じです」

ロッサ「仮にあれらに実弾を装填したら？」

「人間が実弾入りのゴールキーパーに撃たれたら、手足しか残らないし、
自動機銃の場合、一瞬でミンチになる」

シャッハ「そ、そんなに危険なんですか！？もし犯罪者が…」

「その心配はない。あれらのメンテナンスは俺にしかできないからね」

レジ「なら問題ないな」

それまでずっと黙っていたシグナムが口を開いた。

シグ「ウィル、一ついいか？」

「ん？」

シグ「地上本部の防衛システムやティン・マン装甲服…
お前がいなければ誰も開発できなかったであろうものを
いとも簡単に作り出し、おまけに質量兵器も保有している…
ウィル、お前はいったい何者なんだ？」

「……答えなきゃだめ？」

な、フェ、は「答えないとＯＳＨＩＯＫＩなの（だよ）（やで）♪」

「はあああ…今話せることと話せないことがあるんだが、
それでもいいか？」

ヴィ「いつか教えてくれるんだろうな？」

「必ず」

シグ「ならそれでいい。話してくれ」

「じゃあ話すけど、俺の話を信用してくれよ？」

そして俺は色々としゃべった。

俺は一度死んだこと。
前世では就職活動中の学生だったこと。
神様に転生させられたこと。
その時に様々な知識をもらったこと。
俺のいた世界では、なのは達はアニメの存在であるということ。
神様にもらった能力で戦艦を作ったこと。

などなど。

まだ話していないこともあるけど、俺の正体を知るには充分すぎる話だった。

「…とまあ、こんなところだ。信じるか信じないかは自分で判断し

ろ。
それで何か質問は？」

な「ウィル君、今の状況はアニメと同じなの？」

「いや、かなり違う。俺が色々と手をまわしたからな」

フェ「例えば？」

「アリシアは生き返らなかったし、プレシアは死んでたし、
アインは消滅してたし、ジェイルは地上本部を襲撃してゆりかごで
ヒーハーしてたし、レジーとゼストさんとクイントさんは死んで
たし、
ティアナの兄貴も死んでたし、それに…」

は「そんなにあるんかい！」

「ま、こんな話をいきなりして信じるというのが無理な話だが…」

な「信じるよ、ウィル君はいつも正しかったからね」

フェ「そうだね。ウィルがいなかったら姉さんも生き返らなかった
し」

は「アインを助けてくれたウィル君を信じないわけないで！」

「…そうか。ありがとう、受け入れてくれて」

レジ「戦艦か～いいな～欲しいな～」

「あれはあげないけど、もうちょっと小さめの戦艦の設計図ならあげるよ？」

ラ「まじで？」

「でもＸＶ級次元航行艦がいっぱいあるだろ？」

ク「今僕の船『クラウディア』と他数隻はオーバーホールを始めたばかりだから
あと１カ月は使えないよ」

「そか」

第３９話：会議と…（後書き）

なのは達に話しちゃいました。
いつまでも秘密にしておくのもなんですしね。
戦艦のことも話しましたが、大量に持っているということは話していません。
「インペ？級を作った」
と言って画像を見せただけですので。

にしてもかなり独自解釈が入りました。

次回は、ついに…！

では

第４０話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（前半）

ミッドチルダ首都クラナガンの周囲にある廃棄都市群。
普段は誰もいないし、仮にいるとしたらホームレスか犯罪者だけだろう。

だが今日は違った。

管理局の命令により、全廃棄都市群に避難命令が発令されている。

「犯罪者が潜伏している可能性があるので、しらみつぶしに探すよ」

という理由で。

そんな時に廃棄都市の中で幾つもの、いや無数の転移魔法陣が現れる。
中からは先日の地上本部襲撃事件よりも多くのドロイドがいた。

～ゆりかごの最深部～

そこにはフェイク・スカリエッティの姿があった。先日、ウィリアムに右腕を
吹っ飛ばされたが、戦闘機人の技術によってなんとか復活していた。

フェイク
「よし、配置は完了したか。それにしてもあのクソッタレが！
絶対に復讐してやる！蘇れ、古代の戦舟よ！！」

彼は躊躇なくマスターキーを穴に差し込み、まわした。

フェイク
「あ、その前に地上に穴開けないと出れねえ」

～機動６課～

グリ「廃棄都市群にドロイド反応！及び例の結界が消えました！」

は「ついにおでましやな」

ジェ「この前よりいるんじゃないか？」

シャーリー「地上本部、教会本部及び本局から通信です。モニターに出します」

そこにはレジー、３提督、カリム、クロノ、リンディさん、ユーノが。

ク「奴らが動き出したって？」

リ「またこんなにドロイドがいるの？」

レジ「前回よりも多いぞ！？」

ミゼ「ゆりかごはどうしているのかしら？」

「多分そろそろ…」

その時、山肌が突然大爆発を起こして中からゆりかごが出てきた。

「あれか…エディ、準備は？」

「いつでも行けますよ、艦長」

フェイク

「さあ、いよいよ復活の時だ！管理局の諸君！これこそが最強の力だ！

旧暦の時代、一度は世界を席巻しそして破壊した、古代ベルカの悪夢の英知！それが！この！聖王の」

「悪いけど今回は俺空気読まねえからな？エディ、撃ち方始め」

「てー！！！」

その時の光景をカリム・グラシアさんは後にこう語った。

「ええ、私も聖王のゆりかごが地面の中から出てくる光景を見ていました。

そしてフェイク・スカリエッティの言葉も聞いていました。私の予言は

このことを言っていたのだとその時になって分かって、もう少し早く

分かっていれば、と歯を食いしばっていたのですが、そんなときに、

突然、上から緑色の光が降ってきて、それらが廃棄都市のあちこちに

降り注いで大爆発を起こしたんです。何事かと思っていたら、ゆりかごにも

命中していて、後ろから火を出しながらゆりかごはあっという間に墜落して

しまいました。私の後ろでシャッハは愕然としているし、ロッサは

『あっという間すぎワロスｗｗｗ』とか言ってますし。いや本当にあっけなかったですね、はい」

～6課～

「エディ、報告を」

「廃棄都市群のドロイド軍は殲滅完了です。ゆりかごは要望通り、後部の駆動炉及びエンジンのみに攻撃し、撃墜しました」

「大変結構。見事な射撃だった」

「いや～それほどでも～」

他のみんな「」

「あーフェイク・スカリエッティ君？聞こえてるかな？」

モニターにはフェイクがゆっくりと立ち上がる姿が。

フェイク

「一体何が…」

「なあ、悪いけどさ、それなんて言う名前だったっけ？さっきお前が言ってた気がするんだが忘れちゃってさ。確か～聖王の…ごみばこだっけ？」

は「ぶっ！」

な「ご、ごみばこｗｗｗ」

フェイク

「ゆりかごだ！貴様、また何かしたのか！」

「何をしたって、お前が廃棄都市群に配置したドロイドを吹っ飛ばして、
ゆりかごにも何発が撃ち込んで撃墜しただけだし」

フェイク「」

「てことで今からお前捕まえに行くから。おとなしく待っててね～。
あともう一つ。右腕治ったんだな。よかったでちゅね～」

フェイク
「てめえええ！！ふざけるのもいい加減にしろおおおおおお！！
おちょくりやがってこのクソッタレが！ドロイド軍、出撃！」

シャーリー
「！またドロイドです！ゆりかごに乗っていたと思われます」

「よし、俺となのはとフェイトで中に入る。他は外でドロイドの掃除をしてくれ」

みんな「了解！」

は「あの、それうちの仕事…」

「ヴァイス！ヘリ出せ！」

ヴァ「準備できてますよ旦那！」

「はやては外で指揮をとってくれ。ティーナははやての補佐を」

ティ「わかったの！」

「それじゃあれっつらごー！」

みんな「おー！」

は「…ぐすん」

～ヘリの中～

「みんな、お守りは持ってるか？」

ス「もちろん！」

な「当たり前なの！」

「一旦返してくれないか？ちょっとプログラムの上書きを」

フェ「分かった」

まずフェイトのイエローダイヤモンドには、超電磁砲（レールガン）の能力をっと。
次にスバルのアクアマリンとギンガのアメジストには…「根性」でいいか。
えーっとシャマルのエメラルドか、医者だし肉体再生（オートリバース）だな。
ティアナのトパーズとなのはのルビーは、射撃型だから原子崩し（メルトダウナー）で。
シグナムのピンクダイヤモンドには、最強の抜刀術でもある唯閃（ゆいせん）にしよう。
ヴィータのガーネットには、窒素装甲（オフェンスアーマー）でいいや。
はやてのは充分だし、これでいいか。

「はい返すよ」

な「ありがとうなの」

シグ「何が変わったんだ？」

「まあ、死にかけるか、気がつかない攻撃が来たら分かるんじゃないかな？」

ス「ウィルさん、適当～」

「あ、スバルとギンガはいつでも使えるぞ？」

ギ「本当ですか！」

「おう、攻撃する時に「すごい」って言葉を前に付ければすごいことになる」

ス「？？？」

「ためしにスバル。外に向かってディバインバスター撃ってみろ」

ス「え？はい、えーっと、すごいディバインバスター！！」

ネックレス＜根性だあああああああああ！！！

スドーン！！

ス「」

フェ「なのはよりすごい…」

は「なんつー威力や…」

ギ「す、すごいですね…」

ヴァ「そろそろ着きますよ～」

「よーし、それじゃあ行こうか？」

みんな「はい！」

「俺からの命令は一つだけだ。死ぬな。以上！」

みんな「はい！」

「あ、そうだ。この戦いが終わったらなのは達に話すことがあるから」

は「だからそれうちの仕事！」

ヴィ「もうみんな行っちゃったぞ？」

は「にゃあああああ！！」

シグ「落ち着いて下さい主！」

フェ「入口がないね」

「だったら作るまでだ。なのは！」

な「ディバインバスター！」

ドーンッ！

「それじゃあ行くか」

中にはＡＭＦが効いていると思ったが、なにもなかった。

「駆動炉ふっ飛ばしたからかな。まあいいや、フェイト。お前は最深部に潜って
マスターキーを封印、それができなかったら破壊してくれ」

フェ「うん！」

「俺となのははあいつを倒す」

な「わかった！」

「待ってろよ！フェイク・スカリエッティ！」

第４０話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（前半）（後書き

はい前半おしまい。

次は後半でっす。

では

第４１話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（前半２）

ウィリアムとなのはとフェイトがゆりかごの中に突入したころ。

ツ「はやてちゃん！東から敵の大群です～」

ア「南からも来ています！」

は「ヴィータとスバル、エリオを東に、シグナムとティアナ、ギンガ、キャロは
南に行くんや！」

ティ「ヴァイス君！聞こえた？」

ヴァ「了解ッス、ティーナ姐さん！」

はやてとリイン姉妹、それにティーナはゆりかご上空でぷかぷか浮きながら
指揮を執っていた。ウィリアムの戦艦の攻撃で、敵はかなり倒したはずなのに、
相変わらず敵がいっぱい来る。

は「敵アジトへの攻撃は？」

ア「聖王教会の騎士2名と地上本部の部隊が突入しました。現在敵ドロイドと
　戦闘中とのことです」

ティ「めんどくさいな～、反応弾で丸ごと吹き飛ばせばいいのに」

ツ「なんでもかんでもふっ飛ばしちゃだめですよ～」

ティ「うるさいな、このちんちくりん」

ツ「きーー！！」

は「こんな時になにしてんねん！」

～ヘリの中～

ヴァ「シグナム姐さん！前方から敵ガジェット接近中です！」

シグ「分かった。行くぞ！」

テ、ギ、キャ「はい！」

まずシグナムとティアナが外に出た。次にギンガとキャロが外に出ようとした。

その時、ガジェットが発射したミサイルが3発、真横から飛んできた。

ヴァイスのインテリジェントデバイス「ストームレイダー」が警告を発した。

ヘリ操縦士としては最高位のA級ライセンスを保有しているヴァイスは、

なんとか2発は避けたが、最後の1発は機体後部に命中し、尾部と後部ハッチを吹き飛ばした。

ギ、キャ「きゃあああああ！！！」

ヴァ「くそ！被弾した！」

尾部が完全に消滅し、トルク（ねじりモーメント）を相殺する推力を失った機体は

激しい水平きりもみに陥った。

ヴァ「二人とも早く脱出しろ！すぐに墜落しちまう！」

キャ「でもヴァイスさんは！？」

ヴァ「俺のことはいいから早く！」

ギ「…わかりました！キャロ、しっかりつかまって！」

ギンガはキャロを抱えてウイングロードを展開してヘリから脱出した。

ヴァ「…これはまずいな」

計器盤はクリスマスツリーよろしく幾つもの警告が赤色で表示されている。

ヴァ「いやはや、なんてこったい」

その直後、ヘリは森に突っ込んで墜落した。

キャ「ライトニング４よりロングアーチへ！ヴァイスさんのヘリが墜落しました！」

は「なんやて！？ヴァイスはどうなった！？」

ギ「わかりません！先に脱出するように言われて、私とキャロが機体から出た
　直後に墜落したので…」

ツ「ヴァイス陸曹！応答して下さい！ヴァイスさん！」

だが、返事はなかった。

は「シャマル！今すぐヘリの墜落現場に！」

シャ「もう向かっているわ！」

４月に納品されたばかりのＪＦ７０４式ヘリは、今や鉄くずになっていた。
だが、そのぼろぼろの機体の中で、わずかに動いている人がいた。
ヴァイス・グランセニックである。

ヴァ「てててて…ストームレイダー、無事か？」

スト「私は平気です。機体から燃料が漏れています。動けますか？」

ヴァ「右足が折れてる…だが動けるだろう」

激しい墜落だったが、ＪＦ７０４式ヘリは横倒しにはならなかった。
運のいいことに、水平の姿勢のまま平落としに落下していた。

ヴァイスは横のドアを苦労して開けて外の様子をうかがった。
ヘリはゆりかごからそう遠くない森に墜落していた。
もうすぐ医療班が来ると思い、ほっとしていたが。

スト「警告！敵ドロイド接近中！」

ヴァ「まじで」

「ヴァイス！状況を！」

その時、はやてから話を聞いたウィリアムがヴァイスに話しかける。

ヴァ「旦那！今、ドロイドが接近中です。俺は右足をやられて動けません」

「お前のデバイス、狙撃銃だっただろ！奴らを吹っ飛ばせ！」

ヴァ「でも俺は…」

彼は昔、立て篭もり犯を狙撃する任務でミスショットし、人質であった妹のラグナの
左目を潰したことがトラウマとなり武装隊を辞めた過去を持っていた。

「…お前の過去は知っているよ。妹さんの目を撃っちまったこともな。
お前はそのことをずっと気にしているらしいが、妹さんは違うと

思うぞ？」

ヴァ「え？」

「おそらく妹さんはお前に立ち直ってほしいと思っているだろうよ。自分と向き合ってほしいとな。だからお前も前を見るんだ」

ヴァ「前を…」

「あー、そうそう。これが終わったら妹さんの目を治してやるからよ」

ヴァ「治るんですか！？」

「約束しよう。だからお前も戦って生き残れ！」

ヴァ「了解！行くぞ、ストームレイダー」

スト「はい！」

～ゆりかご最深部～

フェ「やっと着いた…」

その頃フェイトは最深部に到着していた。目的はマスターキーの無力化である。

フェ「これだ…」

目の前に並ぶコンソールの真ん中に刺さっているマスターキーを発見した。
それを引き抜こうとするが。

フェ「ん～～～！！！！はあ…はあ…抜けない」

超硬くて抜けなかったでござる。

バル「サー、ひねってから抜くのでは？」

フェ「あ…」

自分のデバイスに突っ込まれて恥ずかしい思いをしながら、フェイトは
マスターキーをひねってから引っこ抜いた。

フェ「ライトニング1からロングアーチへ。マスターキーを入手しました。
どうしようか？」

は「ナイスや、フェイトちゃん！それ持って外の援護に行ってくれへんか？」

フェ「わかった。なのはとウィルは？」

は「まだ連絡がないんよ。でもあの二人なら問題ないと思う」

フェ「そうだね。じゃあ外に出るよ」

～ヘリ墜落現場～

ヴァ「クソ！あとどれだけいる？」

スト「敵ドロイド、さらに接近中！」

ヴァイスはコクピットから狙撃をしていたが、敵の数が多すぎて、
いつの間にか
包囲されていた。

ヴァ「今度こそ詰んだかな？」

なんてぼやいていると。

ティ「ヴァイスく～ん、生きてるか～い？」

と言いながらティーナがマイクロミサイルを撃ちながら登場。

ヴァ「ティーナ姐さん、来てくれたんですか？」

ティ「当たり前でしょ！ちょっと待っててね」

ティーナはＢＧＰ－０１β　５５ｍｍビームガンポッドを撃ちまくり、敵を殲滅した。

ティ「よーし、いいよ！」

手を振ると、１機のヘリが飛んできた。操縦しているのはアルト・

クラエッタ二等陸士。
乗っているのはシャマル。

シャ「ヴァイス君、遅れてごめん！さあ、肩を貸して」

ヴァイスとストームレイダーを載せたヘリは病院にすっ飛んで行った。

ティ「はやてちゃん、ヴァイス君の収容完了だよ」

は「おおきに！よかった～」

～東のほう～

ヴィ「でりゃあああああ！！」

ス「はあああああああああ！！」

エ「やあああああああ！！」

こっちでは3人が大暴れしていた。周りにはドロイドの残骸ばっかり。

それでもドロイドは攻撃してくる。

ヴィ「うっとおしいな！」

と言いながらアイゼンでたたき潰し、

ス「ほんと数だけ多いですね！すごいパーンチ！」

とぼやきながら、敵を一度に何十体も吹き飛ばし、

エ「もういい加減にしてほしいですね！」

と文句を言いながら、素早く敵の懐に潜り込んで切り裂く。

こんな作業を繰り返していた。

その時。

ス「ヴィータさん！後ろ！」

ヴィ「なっ！？」

後ろを振り返ると、そこにはライトセーバーで武装した骨が。
アイゼンで叩こうとしたが、ひらりと避けられ、逆にアイゼンが真っ二つに。

ヴィ「アイゼン！しまった！」

目の前でライトセーバーを振りかぶった骨。避けるのは無理だろう。

エ「ヴィータ副隊長！」

ヴィ「お前らは逃げろ！」

だが、３人は他の骨によって囲まれていた。

～南のほう～

キャ「ヴォルテール！お願い！」

シグ「はあああああ！！」

テ「これじゃきりがない！」

ギ「ほんとね！すごいキーック！」

こっちでも４人が奮戦していた。そしてやっぱりこっちにもライトセーバーで武装した骨が。

だが。

グシャッ！！↑ヴォルテールに踏まれて潰れた骨の音。

ドカーンッ！！↑ヴォルテールのビームで吹っ飛ぶ骨の音。

キャ「ははははは！！もっと踏みつぶして！！」

シグ「お、おいキャロ！？」

テ「キャロが壊れてる…」

キャロの大活躍だった。

そこから少し離れた森の中。４体の骨が木の上にいた。
彼らもライトセーバーを持っていたが、それとは別にある武器を構えていた。

スナイパーライフルである。その照準器にはシグナム達の姿が映っていた。

そして引き金が引かれた。

～ゆりかご内部～

「ここか…」

な「やっと着いたの…」

俺となのはは、ここに来るまでに１００以上のドロイドをつぶしてきた。
正直帰りたい。だが、この先にはあのクソ野郎がいるのでそうもいかない。

「行けるか、なのは？」

な「ふっ、当たり前でしょ？」

「いい返事だ。それじゃあ行くぞ！」

な「うん！」

〈マァキシマムストレングス〉

そう言って俺はドアを殴って吹き飛ばした。

部屋の中にあったのは、

なんか豪華なイスと。

俺が殴って吹き飛ばしたドアと。

それだけだった。

な「あれ？」

「あいつどこだし」

第４１話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（前半２）（後書

はい疲れたー。

次はいよいよフェイクとのバトル、かも！

では

第４２話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（後半）

「あれ～あいつどこよ？」

な「いないね」

どうもウィリアムです。扉を吹っ飛ばして中に入ったものの、フェイク・スカリエッティはどこにもいません。

あるのは豪華なイスとぶっ飛んだ扉だけ。

「いないなら仕方ない。帰ろうぜ」

な「えええ！？」

フェイク
「無視すんなやゴラァァァァァ！！」

な「にゃ！？」

そりゃ誰だって驚くだろう。まさか壊れた扉の下敷きになっているなんてね。

「やあフェイク。調子はどうだい？」

フェイク「君のおかげで気分は最悪だよ」

「そうか、そりゃ残念だな」

フェイク「だが、君を殺せば少しはましな気分になると思うんだが、どう思うよ？」

「悪くないな。俺もお前を叩きのめせば、気分が良くなると思っているんだ」

フェイク「そうか、でも君にこの私が倒せるかな？」

その瞬間、フェイクの体から尋常じゃない魔力があふれた。

な「すごい魔力なの…」

「…お前、まさか」

フェイク
「そうだ！今私の体の中にはレリックが４個も入っているのさ！
無論代償もあったがね。魔力に耐えきれず、両手両足が吹き飛んでしまったよ。
だが、ドロイドの技術があればそんなことはどうでもいい。今の私なら
君を倒すことができる！さあ始めよう！」

「いいだろう。獲物はこれでいいかな？」

と言ってライトセーバーを起動する。

「私もそれは大好きなんだ。だが、私は少しせこい戦い方をさせてもらうよ？」

フェイクはポケットからライトセーバーを取り出した。

その数は４本。

な「え？」

するとあら不思議。フェイクの両腕が機械になっていて、その腕が

分裂して
４本になってしまったじゃないか！

「お前はグリーヴァス将軍か！」

フェイク「誰だそれ？まあいい、行くぞ！」

フェイクは４本のライトセーバーを構えて叫んだ。

俺はフリーハンドの人差し指と中指を伸ばして前に突き出し、
ライトセーバーを持つ手は大きく後ろに引くという、弓を引き絞ったような
独特な構えのソーレスの型で構えた。

「かかってこい、このクソッタレが！」

～東の方～

ヴィータとスバル、エリオは骨に囲まれてしまった。おまけに全員ライトセーバーで武装している。そんな中、スバルは普段あまり働かせていない頭で必死に考えていた。

ス「（どうすればいい？状況は最悪だし、ヴィータ副隊長のデバイスも使えない。

う～～～ん…わからないよ！！）」

そんな時、ネックレスから声が。

ネックレス＜そんな時こそ根性だ！！

ス「え？」

ネックレス＜お前の根性はまだ足りん！もっと根性を見せろ！

骨「何を言っている？まあいい、死ね！」

エ「ヴィータ副隊長！！」

骨はライトセーバーでヴィータを殺そうとした。

が。

ス「超すごいパーンチ！！」

スバルは自分の周りにいた骨と、ヴィータの前にいた骨の懐に踏み込み、

顔を掴み、地面に叩き付ける、という一連の動作を音速の2倍の速度で行なった。

ヴィ「え」

エ「はい？」

ス「うらあああああ！！！」

周りにいた骨はびっくりして目標をスバルに変更して攻撃をしたが、
ブラスターが当たっても、ライトセーバーで切っても、

ス「痛いなこの！！！」

と言うだけで、まったくダメージを受けていなかった。

ヴィ「え～…」

エ「まじですかい」

３０秒後、周りの敵は壊滅していた。

ス「やっぱりドロイドには根性がありませんね！」

ヴィ「あ、ああ、そうだな…」

こうして3人は一度後方に退却した。

～南の方～

ある程度距離が離れているので、骨スナイパー達は銃声を聞かれることも
ないだろうと考え、発砲した。

シグナム達には銃声は全く聞こえていなかったが、シグナムとティアナの
ネックレスがすぐに反応した。

シグナムは振り向きながらレヴァンティンを横に薙いで銃弾を全て切った。
その横でティアナは原子崩し（メルトダウナー）を発動して、
遠くにいた骨に向かってぶっ放した。

骨は咄嗟にライトセーバーで防御しようとしたが、自身の体をすっぽりと
覆うくらいでかい粒機波形高速砲に攻撃され、あえなく消滅した。

ギ「シグナムさん、すごいです！」

キャ「ティアナさんも！なんですかその技？」

シグ「いや、このネックレスのおかげかな」

テ「これがなかったらわからなかったから…」

は「お話中すまんけど、新手やで！」

シグ「了解です。行くぞ！」

ギ、テ、キャ「はい！」

～ゆりかごの中～

フェイク「おらあああああああ！！！」

「うりゃあああああああああ！！！」

俺とフェイクはライトセーバーで斬り合っていた。にしてもこいつ、なかなかやる。

「くそ、これじゃきりがないな」

≪マスター、彼はレリックの力で身体能力も強化している様子です≫

「厄介だな…」

フェイク「話している暇があるのかね！！」

奴は４本。俺は１本。これは不公平だ。なので。

「お前の腕を切ってやる！まずは１本！」

キンッ！！

フェイク「なっ！？」

「続いて２本目！」

キンッ！！

フェイク「貴様！！俺の腕を！」

「やっと２刀流になったか。これでいいや」

フェイク「しねえええええ！！」

怒りに燃えるフェイクは正面から突っ込んできた。

「これでも食らえ！」

それに対し俺は片手でフォース・ライトニングを使った。

バリバリバリ！！

だが、フェイクはライトセーバーで防御した。

「チッ、知っていたか」

フェイク「今私の体は機械だらけだからね、それは防御しなければ」

「なら単純なフォースなら問題ないな！」

そう言って俺はフォースでフェイクを後ろに吹っ飛ばした。

「おとなしく椅子に座っていろ！」

フェイク「グハアッ！くそ…」

王座にぶつかってフェイクは痛そうだ。そんな時。

ズズンッ！！

「おっとっと！」

な「きゃあああああ！！」

ゆりかごが大きく傾いた。ふと後ろを見ると、廊下が燃えていた。

フェイク「くそ、もうここまで火の手が来たか…」

そう言い残して、フェイクは王座の後ろにあった隠し通路に逃げ込んだ。

「あ、この野郎！なのは、追いかけるぞ！」

な「うん！」

～ゆりかご上空～

ロッサ「はやて！敵のアジトを制圧した！ドロイド製造施設もシャッハが破壊したよ！」

は「ほんまか！よかった～」

ツ「これで敵はもう来ないですね！」

ア「今ここにいる敵を殲滅して」

は「フェイクを捕まえれば全部おしまいや！行くで！」

～ゆりかご内部～

フェイク「ははは！ここまでおいで～！！」

「あー！！！もう、うっとうしいな！！」

な「なの！！」

フェイクが逃げ込んだ通路には、またドロイドがいっぱい。
それを盾にあいつはさっさと逃げてしまった。

「やってらんないな！来い、ミニガン！」

俺は両手にＭ－１３４ミニガンを装備して弾幕を張った。

な「私も！」

なのはもいつの間にか使えるようになっていた粒機波形高速砲を乱射し始めた。

～ゆりかご上空～

ゆりかごで立て続けに起きた爆発に驚くはやて達。

は「あの爆発はなんや？」

ツ「内部の火災のせいですかね～」

ア「もしくはウィルとなのはが暴れているんだろう」

ティ「さすがご主人様！」

は「ウィル君、頼むからフェイクを生きたまま捕まえてくれ～」

～ゆりかご内部～

「さあ、行き止まりだぜ？ここがゴールってわけだ！」

俺はフェイクを追い詰めた。フェイクの後ろには空が、そして下には燃えている
ゆりかご後部の残骸があった。

フェイク「そのようだな。ではここで決着をつけよう！」

「上等だ！行くぞ！」

第４２話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（後半）（後書き）

次回でけりをつけようかね。

では

第４３話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（後半２）（前書

気が付いたらＰＶが３０万超えてました！
どうもありがとうございます！

第４３話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（後半２）

～ゆりかご上空～

シグ「主はやて！こちらの敵は殲滅しました！」

ヴィ「こっちも終わったぜ！」

は「二人ともごくろうさん！」

ス「ウィルさんは？」

ツ「まだ中で戦っているです～」

ギ「映像見れますか？」

ア「これだ」

外にいた６課のメンバーは全員でウィルの戦いを見ることにした。

～6課の会議室～

ここでもナンバーズとルールー、ヴィヴィオがその戦いの映像を見ていた。

ウェ「さっすがウィル兄！かっこいいッス！」

チンク「やはりウィルは強いな」

ノ「味方でよかったよ」

ヴィヴィオ「ウィルパパかっこいい～」

ルー「そうだね！」

～本局、無限書庫～

ここでもユーノがこっそり戦いを見ていた。隣には幼女体系のアルフがいる。

ユ「ウィルってあんなに強かったんだね」

アルフ「よーし！いけー！あんな奴やっつけろー！」

～ゆりかご～

ブオンッ！

キンッ！

俺とフェイクは無言でライトセーバーで斬り合っていた。
青と赤の光がぶつかり、そのたびに甲高い音を立てる。
二人の周りでは火災がひどくなっていたが、そんなことはお互いに無視して
戦っていた。

フェイク「くそ！なぜだ！なぜ勝てない！」

突然フェイクが攻撃をやめ、そう言ってきた。

「んなこと知るか。自分で考えろ」

フェイク「ではなぜお前は戦う！？誰のために戦っているんだ！？」

「…昔なら自分のために戦う、って答えただろうな。でも今は違う。
俺は愛する人たちのために武器を持つ！お前はなぜ戦う？」

フェイク「…最高評議会だ」

な「え？」

フェイク「お前が殺した最高評議会の復讐だ！」

「あの脳味噌ぷかぷか連中か、ってなんで復讐？」

フェイク

「私は生まれた時から彼らに育てられた。私にとって彼ら3人は家族も同然だった。

自分のことを認めてくれたのも彼らだけだった。それをお前は…」

と言ってフェイクは突っ込んできた。

フェイク「俺は失った家族のために戦う！死ね！！」

「くそっ！」

俺はフェイクの猛攻によって、燃え盛る残骸に押されていった。

フェイク「死ね！死ね！お前はここで殺す！」

な「ウィル君！」

「それなら！」

俺はフォースでフェイクを後ろに飛ばして、自分は天井に空いているどでかい穴に飛び込んだ。そこから下を見下ろしてこう言った。

「これで終わりだ、フェイク！俺の方が有利だ！」

だが。

フェイク「私の力を見くびるな！」

そう言ってフェイクはこちらに向けて大きなジャンプをした。

空中で1回転して俺の後ろに降りて攻撃するつもりだろう。

そうは問屋がおろさなかった。

俺は空中にいるフェイクの左腕、左足、右足を斬り落とした。

これぞジェダイの最終鬼畜奥義「チノ＝リ」である。

決まれば相手の左腕、左足、右足を一気に切り落とすほどの威力を持つ。

フェイク「ぐあああああああああ！！！」

右腕しか残っていないフェイクはそのまま燃え盛る残骸に向けて落ちていったが、

俺はその残っていた右腕を掴んで後ろに放り投げた。

フェイク「くっ…なぜだ…なぜ殺さない？」

「なぜって、お前はもう武器を持っていないだろう？非武装の敵を攻撃する
　悪趣味は持っていないんでね。とりあえずそのレリックだけは回収な」

と言って俺はフェイクの体に手をかざし、４つのレリックを回収した。

な「ウィル君、これで…」

「ああ、あとは帰るだけだな。
ガルム１よりロングアーチへ。任務完了。フェイク・スカリエッティの身柄を
確保した。これより…」

ドーンッ！

な「きゃあああああああ！！」

「今度は何だよ！」

は「ウィル君！なのはちゃん！ゆりかごのあちこちで爆発が起きてる！
早く脱出するんや！」

「了解！」

俺は真上に向かってマイクロミサイルを乱射して大きな穴をあけた。

「なのは、行くぞ？」

な「うん！」

外に出た俺たちははやてと合流した。

は「ウィル君！無事でよかった！」

シグ「お前なら大丈夫だと思っていたぞ」

ヴィ「ウィルなら問題ないだろ！」

テ「ご無事で何よりです！」

ス「最後の戦い、かっこよかったですよ！」

ギ「あの剣の扱い方、すごいですね」

「みんなありがとう。だが、まだ仕事は残っている」

エ「まだ何かあるんですか？」

「あれを消す」

俺はゆりかごを指さした。

キャ「消すってどうやって？」

「まずゆりかごから離れようぜ」

みんなはゆりかごから２？ほど離れた。

「これでも食らえ！」

俺はゆりかごに向けてＭＤＥ（マイクロ・ディメンション・イーター）弾を１発発射した。

ゆりかごに当たった瞬間、発生したフォールドエリア内に飲み込まれて、

あっという間にゆりかごと周囲１キロ圏内は消滅した。

は「えええええ！！」

な「なにその反則技！？」

フェ「勝てる気がしない…」

「まあ、腹減ったし、帰ろうぜ」

みんな「はい！」

こうしてゆりかごをめぐる事件は終わった。

後に「ＦＳ事件」と呼ばれるようになったこの事件。
主犯格のフェイク・スカリエッティは起動拘置所に放り込まれた。
ジェイルとナンバーズは保護観察処分と言うことになり、６課に滞在することに。
一応、ナンバーズは更生プログラムを受けることになった。
ゼストさんとメガーヌさん、ルーテシアは無人の次元世界でのんびり暮らすそうな。

それで俺はと言うと、地上本部の会議室にいる。目の前には本局のお偉いさんが
並んでいる。クロノやリンディさんもいる。そしてその中心にいるのは
ケイン・ルーガー大将だった。なんでも、ＦＳ事件を解決に導いた俺に
直接礼が言いたいんだと。

ケイン「君がロンバート君か。今回はご苦労だった。素晴らしい活躍だった」

「どうもありがとうございます、ルーガー大将」

ケイン「それで正式に管理局に入らないかね？階級は一等陸佐でどうだね？」

「あー、その、１つお願いがあるんですけど？」

ケイン「ふむ、なんだね？」

「実はですね、この情報をマスコミに公開しようと思いまして」

そう言って俺は本局の連中の悪事データを見せつけた。

提督Ａ「なんでこれが！？」

提督Ｂ「おいおいなんでばれているんだ！？」

他の提督たちがあわてている中、ルーガーだけは落ち着いていた。

ケイン「ロンバート君、なぜ君がこれを？」

「フェイク・スカリエッティのアジトから見つけたデータです（嘘）。

犯罪者の持つデータに信憑性などありはしないと思い、一応チェック

したところ、正しいものだと判明しました。なのでこれを公開しようかと」

Ａ「ふざけるな！そんなことをすれば管理局に悪評が…」

「おいおい、お前ら。やろうと思えば俺はいつでもこの情報ばらせるんだぜ？

それに3提督もお前らの処分に賛成している。よってお前らは全員お役御免ってわけ。

でも、俺はいきなり逮捕して牢屋にぶち込むほど鬼畜な人間ではないので、

２日猶予をやる。その間に身の回りの片付けとかしとけ。ああ、

もちろん
　自分の悪事の記録を消そうとしたら、即逮捕な。あと、自首したいっていう
　なら遠慮なくどうぞ。その場合はお前らがやった悪事は公表しないと約束しよう。
　ここまでで何か質問はあるかな？」

悪事やった奴ら「」アゼン

「ということで俺の話はおしまい。じゃね～」

レジ「あっはっはっはっは！！！あいつらの顔見たか？ざまあみろ！！」

「おそらくルーガーは自首しないだろうな。そのためにも少し対策を立てておくか」

～6課～

「ただいま～」

ヴィヴィオ「ウィルパパ～」

「おーヴィヴィオ。いい子にしてたか～？」なでなで

ヴィヴィオ「えへへ～」

は「ウィル君、そう言えば」

な「ゆりかご戦の前に話したいことがあるって言ってたよね？」

フェ「聞かせてほしいな」

「あ、忘れてた。じゃあ、会議室で話すよ」

～会議室～

シグ「話とはなんだ？」

シャ「楽しみね～」

ヴィ「なんでシャマルはそんなにうれしそうなんだ？」

テ「どんな話なんだろう？

集まったのはなのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、

ティアナ、スバル、ギンガだった。

「あと二人ご登場～」

と言って俺が連れてきたのは。

な「アリサちゃん！」

は「すずかちゃんも！」

アリ「なのは！」

す「みんな元気そうだね」

なのは達が先に会議室に行ったあと、俺は通信端末でアリサとすずかを呼んだ。

「それで話なんだが、みんなが知っているように、俺はみんなとデートしたじゃん？
　んでみんな俺に告白してきたじゃん？それの返事を…」

は「誰を選ぶんや！うちにきまってるよな！」

な「はやてちゃんずるい！私だよね！？」

フェ「ウィル、私を選んで？」

す「私を選んで欲しいな」

アリ「なのは！ウィルは渡さないわよ！」

な「ほっぺたつねらないで～」

ヴィ「ずるいそはやて！」

シグ「ウィル、誰を選ぶ？」

シャ「私を選んで～」

テ「ウィルさん！私ですよね！」

ス「ティア、ずるい！私だって！」

ギ「妹でもこればかりは譲れないわ！」

ギャーギャー

「やっぱりこうなった…」

とそこに。

カ「みなさん！私も混ぜてください！」

は「カリム！なんでや！？」

カ「あの日私を助けてくれたウィルさんは、私にとっての騎士なんです！
だからウィルさん！私と一緒に！」

ギャーギャー

「だー！もうややっこしい！お前ら一回黙れ！」

みんな「はい」

そこに。

ラ「はっはっは！なんかすごいことになっておるの」

ミゼ「大変ですね、ウィル君？」

は「ささささ3提督のみなさん！？」

なんと会議室に3提督が乱入。

レ「そのままでいいよ」

ラ「ウィル、どうするんだ？誰を選ぶ？」

「…色々と考えたんですが、どうしても選ぶことができなかったんですよ」

ミゼ「ならみんなと付き合いばいいじゃない？」

みんな「え」

レ「ミッドは一夫多妻制だぞ？知らなかったのか？」

みんな「その手があった！」

「じゃあ、そのみんな。俺と結婚を前提に付き合ってくれるかな？」

みんな「いいとも～！」

ジェ「ウィル、ちょっといいかな？」

「ん？」

ジェ「じつは私の娘たちが君と付き合いたいってうるさいんだが」

みんな「」

「さすがに２０人も奥さんがいると俺死ぬぜ？色々な意味で」

クア「じゃあ、愛人っていうのはどうですか～？」

ウェ「いい考えッス、クア姉！」

トーレ「それでいこう」

ナンバーズ「いえーい！」

「いやちょっと待て。なのは達の許可を取らないと」

な「まあいいんじゃない？」

フェ「私たちは別にかまわないけど」

「いいんかい！」

こうして俺は１２人の奥さんと１１人の愛人がいるというとんでもないことになった。
ウーノはジェイルと付き合うとか何とか。

ピピピッ！

「艦長」

「どうしたエディ？」

「”奴ら”が来ました」

「今どこだ？」

「あと１０分で降下しますね」

「そうか、丁重にお出迎えしてくれ」

「了解」

～本局～

ケイン「状況は？」

部下Ａ「間もなくミッドチルダに降下を開始します」

ケイン「結構だ、そのまま続けてくれ」

部下Ｂ「地上は大騒ぎになるでしょうね？」

ケイン「そうだろうな、フフフ…」

第４３話：あっという間劇場ゆりかご編、聖王の…何だって？（後半２）（後書

ゆりかごおしまいです。
なんかとんとん拍子で終っちゃいましたね。
あっけないというかなんというか。
まあ書いているのは私なんですけど。

ケイン・ルーガー大将はなにをやらかすのか！
こうご期待！
では

第４４話：ようこそミッドチルダへ！そしてさようなら～♪

～ミッドチルダ衛星軌道上～

ゆっくりと移動する５つの船がいた。管理局のマークが入っている。
これらの船は第２管理世界からやってきた囚人輸送船である、表向きは。

囚人Ａ「おい！これはどういうことだ！！」

囚人Ｂ「説明してくれよ！」

その船の中では囚人たちが困惑していた。俺たちは犯罪を犯して管理局に捕まった。ここまではいい。そして今日、ミッドチルダの地上本部に
送還される。これも問題ない。

じゃあなんで俺たちは手錠をかけられず、それどころか質量兵器を持たされているんだ？

そんな疑問が囚人たちの頭に浮かんでいると、前方にモニターが現れて
囚人たちに話し始めた。その人物は輸送船団の指揮官だった。

指揮官「では説明しよう。君達にはある仕事をしてもらいたい。
報酬は無条件で釈放、ってところだ。悪くないだろう？
仕事の内容だが、この船はあと１０分で地上本部に到着する。
着いたら、君達は地上本部を制圧してくれ。内部にいる人間は
皆殺しにしてくれて構わん。君達は人殺しが大好きだろう？
全て終わったらこの座標に集合してくれ。脱出用の船が君達を
待っている。何か質問はあるかね？」

囚人Ａ「あ、あんた、管理局の人間じゃないのか？」

指揮官「そうだが、今の管理局は我々の利益を損なう存在となっている。
だから今の管理局を倒し、我々が新しい管理局を作るのさ」

囚人Ｂ「他に武器はないのか？」

指揮官「後部格納庫に他の質量兵器があるから後で見ておくといい。
それでは幸運を祈るよ」

マイクを置いた指揮官はため息をついて水を飲んだ。
その横で操縦士と副操縦士、通信士が慌ただしく作業をしている。

指揮官「ルーガー大将に連絡。作戦をフェイズ2に移行する！」

通信士「了解しました、ん？指揮官、通信できません。この辺一帯に広域ジャミングがかかっています。近距離通信しか使えません」

指揮官「なに？」

モニターを見ると確かにジャミングがかかっていた。

通信士「地上本部の演習か何かでしょうかね？」

指揮官「その予定はないことはお前も知っているだろう！
やむを得ん、このまま行くぞ。操縦士、降下に入れ」

操縦士「了解！」

だが、彼らは気がつかなかった。レーダーに映らない戦闘機がジャミングを発し、

武器をたんまり積んだ戦闘機が接近中であることを…

「艦長、敵の指揮官は前から４つ目の輸送船にいるようです」

「おっけー、なら４つ目以外に攻撃を仕掛けるぞ。ゴルフ１、プロトン魚雷発射！」

昨日のうちに月面基地上空から移動していたゴラン？宇宙防衛ノヴァガンから
プロトン魚雷が３発発射された。魚雷は瞬く間に速度を上げ、輸送船のレーダーに
引っ掛かることなく、先頭の２隻と一番後ろの輸送船に突き刺さった。

～3隻目の輸送船の艦橋～

突然目の前にいた2隻の輸送船が大爆発を起こして撃沈されるのを見て、
船長は小便を漏らしそうになった。

船長「おい！何が起きた！敵の攻撃か！？」

操縦士「レーダーには反応ありません！敵ではないようです」

副操縦士「中にあった質量兵器が爆発したとか？」

船長「何たることだ…」

通信士「船長！最後尾の輸送船もやられたようです！」

船長「やはり敵の攻撃か！指揮官に連絡！固まっていると危険だから船団を分散するのがいいと伝えろ！」

通信士「了解！」

「艦長。指揮官の乗っている４隻目の輸送船は、３隻目を追い越して、
先に降下しようとしていますね」
「そうはイカの金太郎だ！やっちまえ！」

３隻目の輸送船に１機のゴーストＶ９が急速に接近した。
翼にはヴォイド７・サイズミック・チャージが付いていた。これには大きな円形の
コンテナが組み込まれており、その中にはバラディウムと呼ばれる放射性の液体と、
コラプシウムと呼ばれる揮発性ガスを混合した爆弾が詰め込まれていた。コアは２つの
電磁励起ディスクによって支えられており、本体が宇宙空間に放出

されると、その
電磁ディスクがコアにエネルギーの衝撃波を送り込むことによって、
混合爆弾を
高エネルギー状態へと遷移させる。そして、コアは過給状態のまま
哀れな標的へと
衝突し、小惑星、敵の宇宙船、さらには宇宙ステーションまでも簡
単に切り裂く、
莫大かつ急速な広域衝撃波が生成されるのだ。この衝撃波は偏向シ
ールドでも防ぐことは
できず、拡散する衝撃フィールドから逃れようとする宇宙船さえも、
払いのけ、
周囲の瓦礫に叩きつけてしまう。また、初期の爆発は一時的に宇宙
の真空状態を
作り出し、獲物を爆発の中心へと引き寄せる効果を発揮するのだ。

その恐ろしい兵器をゴーストＶ９は3隻目の輸送船に向けて投下した。
ザイズミック・チャージはくるくる回りながら輸送船にぶつかった。

（　。д。）「ッディィィィィィィィィィィィィィィィィィィン！！！」

という独特の爆発音とともに、青い色の破壊的な爆発の衝撃波が周
囲に広がった。
ゴーストＶ９はさっさと逃げたので被害はなかったが、３隻目の輸

送船は
ミキサーにかけられたかのようにぼろぼろに、近くにいた４隻目の
輸送船も
後ろ半分がちょん切られた。

～４隻目の輸送船の艦橋～

指揮官「なんてこった！隔壁閉鎖！」

後ろからは囚人どもの悲鳴が聞こえるが知ったことではない！
今は自分の命が大事だ！

操縦士「フラップ全開！速度を何とか落とせ！」

副操縦士「大気圏に突入しました！着地地点がかなりずれています
！」

通信士「指揮官、地上本部から通信が入っていますが…」

指揮官「無視しろ！今は着地が最優先だ！」

副操縦士「着地ポイントは、首都クラナガン沖１０？の海上です！」

操縦士「船体を安定させろ！船首から突っ込んだらおしまいだ！」

通信士「指揮官！こちらに救援部隊が来るようです！」

指揮官「そうか…」

操縦士「間もなく海面と接触します！」

指揮官「衝撃に備えろ！」

次の瞬間、半分になった輸送船は海に墜落した。操縦士の腕がよかったので、
墜落時の衝撃はそこまでひどいものではなかった。

指揮官「た、助かったのか？」

操縦士「ええ、我々は生きています」

副操縦士「指揮官、急いで脱出しましょう！浸水が始まっています！」

指揮官「よし、急ごう！」

ずぶずぶずぶ…

４人は小さなボートに乗って沈んでいく輸送船を眺めていた。

指揮官「作戦は失敗だな…」

通信士「それにしてもあの攻撃は一体誰が…」

副操縦士「とりあえずトランスポンダーを付けてと」

操縦士「これではルーガー大将の作戦が台無しだ！」

「どんな作戦だって？」

ティ「私も聞きたいの～」

指揮官たちが上を見ると、そこにはウィリアムとティーナがいた。

「なあ、教えてくれないかな？」

指揮官「お前は一体誰だ！？」

「ウィリアム・T・ロンバート、って言えばわかるかな？」

操縦士「あのゆりかごを落とした英雄！」

「いや～そう言われると照れちゃうな～」

ティ「それで！作戦の内容を教えてもらおうかしら？」

副操縦士「誰がお前らなんかに！」

ティ「あ～らそう？なら死になさい！」

副「ぐっ！…かはっ…ぐえ…」ばたっ

ティーナはフォース・グリップで副操縦士をあっという間に殺した。

操縦士「副～！お前らなんていうことを！」

「それでさ～教えてくれない？」

操縦士「断る！」

「じゃあ死ね」

バリバリバリッ！

操縦士「ぎゃあああああ！！！」ばたっ

俺はフォース・ライトニングで操縦士を殺した。

通信士「分かりました！話すので命だけは！」

指揮官「馬鹿もの！話すな！」

通信士「俺はまだ死にたくない！」

指揮官「クソが！」

ドンッ！

通信士「そ、んな…」ばたっ

指揮官が隠し持っていた拳銃に撃たれて、通信士は死んでしまった。

「あーあ、かわいそうに」

ティ「あんた最悪だね」

指揮官「うるさい！私が生き残ればそれでいいんだ！」

「さて話してもらえるかな？」

チャキ

俺はＦＮ　Ｆｉｖｅ－ｓｅｖｅＮピストルを出して指揮官に向けた。

指揮官「…殺すのか、私を？」

「情報を得るためのやむを得ぬ措置だ…ああもちろん、
『喋らなければ撃つ』などと陳腐は言わんよ」

ティーナ曰く、その時俺は嗜虐に酔いしれた悪魔の笑みを浮かべていたそうな。

「俺は『喋らせて下さい』と言うまで撃つ。まずは両膝、それから手の指を
一本ずつ…さてその後はどうするかね。弾倉にあと8発残ってしまうが」

指揮官「喋らせて下さい」がたがた

「じゃあ聞こうか」

指揮官が喋った内容は、俺が知っていた内容とほとんど同じだった。
この後、ルーガーが何をしでかすかも俺は知っていた。

なので、ティーナに好きにするように言ったら。

指揮官「ぎゃあああああああああああああ！！！！」

ぐるぐる巻きに縛られて動けなくなった指揮官は、ティーナによって殺されました。

「何したの？」

ティ「フッ化水素の水溶液を瓶ごと口に突っ込んだら死んだ」

「……」

フッ化水素とは、水素とフッ素とからなる無機化合物で、分子式がＨＦ　と表される無色の気体または液体。水溶液はフッ化水素酸と呼ばれる。フッ酸とも呼称される毒物であり、ヒトの経口最小致死量＝１．５　ｇ、または２０　ｍｇ／ｋｇ。スプーン一杯の誤飲（９％溶液）で死亡の事例もある。皮膚に接触すると、体内に容易に浸透する。フッ化水素は体内のカルシウムイオンと結合してフッ化カルシウムを生じる反応を起こすので、骨を侵す。濃度の薄いフッ化水素酸が付着すると、数時間後にうずくような痛みに襲われる。生じたフッ化カルシウム結晶の刺激によるものである。また、浴びた量が多いと死に至る。これは血液中のカルシウムイオンがフッ化水素によって急速に消費されるために、血中カルシウム濃度が低下し、しばしば重篤な低カルシウム血症を引き起こすためである。この場合、意識は明晰なまま、心室細動を起こし死亡する。

「ひでえ…」

ティ「まあいいじゃない？さあ帰ろう？」

「そうだな」

俺とティーナはボートに穴をあけて沈めてから帰還した。

その１０分後、地上本部のレスキュー隊が到着したが、誰もいなかった。

～時空管理局本局～

ケイン「船団が全滅…だと…？」

局員Ａ「ミッド軌道上に輸送船の残骸があり、確認できました」

ケイン「原因は！？」

局員Ｂ「生存者がいないため詳しいことはわかりません。現在回収した
　　ブラックボックスを調査中です」

ケイン「わかった、下がれ」

なんてことだ…犯罪者津波作戦が台無しだ！↑彼はネーミングセン

スがない
やはり私が動くしかないのか…私が今までやってきた悪事が公開されるまで
後1日しかない…

ルーガーはメールを作って、今まで悪事を働いてきた提督達に送った。

「明日、決行する」と…

～6課～

「ただいま～」

ティ「ま～」

は「ウィル君、どこに行ってたんや？」

「ちょっと野暮用でね。みんなは？」

ツ「訓練してますよ」

「そか、じゃあ俺も行くか」

は「ウィル君！」

「ん？」

は「もう訓練場壊さないでな？頼むで？」

「まかせとけ！」

ティ「心配いらないの！」

は「そか、ならいいんや」

な「あれ、ウィル君。訓練参加する？」

「いや、今日は見学」

フェ「ウィルもやればいいのに」

「たまにはいいじゃないか」

な「そうそう、ウィル君」

「なんだ？」

な「このネックレスの能力なんだけど、いつでも使えるようになったよ！」

「」

ティ「」

フェ「そういえば私も電気をいつでも出せるようになったかも！」

「…なのは。それ封印しようか？」

な「なんでよ～！？」

「いいか、なのは…ごにょごにょ」

な「…それやりたい！」

「やるな！！」

な「全員集まって～！」

ＦＷ「はい！」

な「ちょっと新技やるからみてて～」

ヴィ「新技だって？」

シグ「嫌な予感しかしないな…」

な「このネックレスのパワーと、私の魔法を合わせた新技！
スターライトメルトブレイカー！！」

従来のＳＬＢよりも高速で、破壊力も上がっている新技は、
シュミレーターの高層ビル群を蒸発させただけではなく、
海に命中して海水があっという間に蒸発し始めた。

みんな「」

な「…やりすぎちゃった♪」

おまけに。

ティ「なのはちゃん、今の技、殺傷設定になってるよ？」

な「え？レイジングハート！？」

レイハ「この技は殺傷設定でのみ使用可能です」

な「」

は「なのはちゃん！その技は禁止！封印や！」

「ていうかみんなのネックレスから能力回収しよう、うん」

フェ「確かにその方がいいね」

ヴィ「下手したら６課の隊舎まで潰れちまうぞ」

なので、みんなのネックレスから能力は排除した。一方通行（アクセラレータ）の反射能力をだけは残しても問題ないだろう。

ス「ウィルさん、その一方通行（アクセラレータ）でしたっけ？
もともとどういう能力なんですか？」

「運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆる　ベクトル（向き）を
任意に操作（変換）する能力だ。一部の特殊例を除き核兵器を打ち込まれても
無傷のままでいられるし、不意打ちなどでも反射で無効化するから最強の
能力と言っても過言ではないね」

ス「？？？」

ギ「分かってない顔だね…例えばどういうことができるんですか？」

「例えば、大気を操るとか」

テ「大気！？」

エ「まじですか！？」

「風を操作すればほら、涼しいだろ？」

キャ「気持ちいい～」

フリ「きゅく～♪」

「あとは空気を圧縮すると」

俺は両手を上にあげて空気を圧縮し始めた。するとアニメみたいにプラズマを形成した。

フェ「それって…プラズマ？」

シグ「なっ！？」

ヴィ「まじかよ！？」

「ま、こんなこともできますよ～ってね。でも身を守るだけなら反射だけで充分だろ？」

な「そうだね」

６課は今日も平和であった。

その日の夜。
ウィリアムの部屋の外。
そこにはウィリアムの将来の奥さんとなる１２人がいた。
な「はやてちゃん、本当にやるの？」
フェ「やめとこうよ」
は「何言ってるんや。うちらは将来ウィル君の奥さんになるんやで！
　これくらいのことをしても問題なしや！」
ア「はやての言うとおりね！」
す「わたしはやめた方がいいと思うけど…」

テ「ウィルさん、今行きます！」

ス「ティア、落ち着いてよ！」

ギ「あんたもね、スバル」

ヴィ「静かにしないとばれるぞ？」

シグ「こういう時こそ、隠密行動を心掛けないと」

シャ「ウィル君の寝顔、はぁはぁ」

カ「（なにこのカオス）」

は「行くで！突入！」

はやてがウィリアムの部屋の扉を開けて、全員でウィルが寝ているベットに
飛び込んだ。

「ん～…」

ウィルはまだ寝ぼけている。

は「夜這いやで！」

な「ウィル君、私たち近い将来結婚するじゃない？」

フェ「だから、その…／／／」

テ「ウィルさん！抱いて下さい！」

シグ「おい、ウィル、聞いているのか？」

ヴィ「な、なんか嫌な予感が…」

「みんなさ、俺がこの世で一番嫌いなことって知っているか？」

みんな「え？」

「食事と睡眠を邪魔されるのが、一番大っきらいなんだよ！！！！！」

みんな「いやあああああああああ！！！！」

ちゅんちゅん

翌日の朝。

「う～んよく寝た！って」

俺はベットから起き上がると、なぜかなのは達がぶっ倒れていた。
そばにいたなのはを叩き起こす。

「おーいなのは、何があったんだ？」

な「ヒッ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「？？？」

他の人に聞いても誰も教えてくれなかった。

なのは達は１つ、大事な教訓を得た。

「ウィル（君）（さん）が寝ている時は邪魔してはいけない」

という教訓を…

第４４話：ようこそミッドチルダへ！そしてさようなら～♪（後書き）

はあ、だるい。

次回はルーガーが！

では

第４５話：運命の日（前半）

～本局のクロノの部屋～

クロノは書類とにらめっこをしていた。その数が多くて若干目が死んでいる。

ク「終わった～！疲れた！もう休みたい！」

そこにロッサが登場。

ロッサ「おいおい、大丈夫かいクロノ？よかったらこの特製ケーキでも」

ク「僕が甘いの苦手だと知ってて言ってるんだよな？」

ロッサ「あ、ばれた？ははは」

ク「で、どうしたんだい？」

ロッサ「うん、今日がウィルが決めた期限だからね。彼らがどう動くかを
チェックしているんだ。今のところ不審なことはしていないらしいが」

ク「おとなしく捕まってほしいものだね」

ロッサ「全くだ」

まあ、そうなるわけもなく。
突然部屋が真っ暗に。

ク「あれ？停電？」

クロノは部屋の外にいる秘書に

ク「この停電の原因は？」

とたずねたが。

秘書「それがわからないんですよ。保安部に連絡しようとしたのですが、
　通じなくて。それにドアも閉じてます」

ロッサ「ドアも？それはおかしいな」

その間にクロノは母親であるリンディさんに通信を試みるが、通じない。

ク「ロッサ、何かおかしい。外に出よう！」

ロッサ「そうしようか」

クロノは部屋の扉を吹き飛ばして廊下に出た。

そこで目にした光景は。

ロッサ「おいおい、ありゃあ…」

ク「うそだろ？」

クロノが指揮していて、今はオーバーホール中のＸＶ級次元航行艦、『クラウディア』が、改ＸＶ級の攻撃によってハチの巣になっている光景だった。

ロッサ「クロノ！あれはルーガー大将の船だぞ！？」

ク「逃げやがったのか！」

その間にも次々と改ＸＶ級次元航行艦が出撃し、転移していく。

その数、なんと４０隻！

４０隻のうち、５隻は残ってこちらにアルカンシェルを向けている。

抵抗しようにも、残っているのはクラウディア”だった”ものと、
同じようにオーバーホール中に破壊された船だけだった。
つまり、使える船はない。

ク「とりあえず中央指令室に行こう」

ロッサ「そうだね」

～中央指令室～

ここでも大混乱が起きていた。局員は大忙しでシステムを復旧させ、保安部はドックに急行し、何が起きたのかを調査している。

リ「クロノ！無事だったのね？」

ク「母さん！どうなっているんだい？」

リンディさんは真ん中あたりで指揮を執っていた。

リ「ルーガー大将とか悪事を働いてこの前ウィル君に脅されていた提督たちが
　反乱を起こしたのよ。彼らは次元航行艦を奪って逃走。それに、第２管理世界の管理局のドックからも脱走艦が２０隻。いつの間に
　そんなに船を作ったのやら」

ロッサ「ミッドチルダに連絡できないのですか？」

リ「通信システムが吹き飛ばされて使い物にならないから無理ね」

ク「あの船団は一体どこに？」

リ「おそらくミッドチルダね。ウィル君を殺すつもりなんじゃない？」

ロッサ「にしてはオーバーキルすぎないか？改ＸＶ級次元航行艦が５５隻もいるのに。

惑星1つ吹き飛ばすのに1分もかからない位の攻撃力を有しているぞ？」

ク「まさかミッドを吹っ飛ばす気じゃ…」

リ「ハラオウン提督。あなたにはミッドに飛んでもらいます。今すぐに」

ク「ええ！でもシステムの復旧には時間が…」

リ「ウィル君からもらった転送システムがあるの。一回しか使えないらしいけどね」

ロッサ「なら私も行かせてください！」

リ「二人とも、頼んだわよ？」

～6課～

「艦長、奴らが動き始めたようです」

「遂に、か。第2艦隊に出撃命令。作戦要綱に従い位置につけ。”あれ”の起動準備も始めとけ」

「了解！」

「長らく待たせたな、エディ。ようやく戦争ができるぞ？」

「この時を待っていましたからね」

「まあ、短い戦争であるが、充分楽しもう」

「ええ」

「そろそろかねえ」

どたどたっ

バーンッ！

は「ウィル君！緊急事態や！」

「ほーら来た」

部屋の外には6課の前線メンバーが勢ぞろいしていた。

「本局でクーデターだろ？目的地はここ。標的は俺。なんか間違ってる？」

シグ「いつの間にその情報を…」

「それはいいとして、クロノとロッサは地上本部だな？」

な「そうだよ！私達も急いで行こう！」

「そうだな、じゃあみんな捕まって～」

フェ「え？ちょ」

俺はその場にいたメンバー全員を地上本部に転送した。

～地上本部指令室～

レジ「全くあのクソッタレが、クーデターなんか起こしてどうするつもりだ？」

ク「おそらく自分の悪事をばらそうとしているウィルを殺そうとしているのではないかと…」

オーリス「それにしては過剰戦力ですね」

レジ「反乱軍の到着予想時刻は？」

オーリス「おそらく２０分後ですね」

そんな時、指令室にいたレジー達の頭の上にウィルたちが現れた。

「いやっほ～」

な「にゃあああああ！！！」

フェ「きゃあああああ！！！」

ドサドサッ！！

レジ「もげっ！」

ク「ぎゅえっ！！」

「いたた…転移座標間違えちゃった」

テ「ウィルさん、しっかりして下さいよ！」

ス「おしりいた～い」

ギ「スバル、大丈夫？」

キャ「フリード、生きてる？」

フリ「」↑キャロの下敷きに

エ「フェイトさん！」

フェ「私は大丈夫、なんか床がぶよぶよしてたから」

は「なんやこの黒いの、ってクロノ君！！」

ヴィ「げ！レジアス中将！！」

シグ「失礼しました！！」

レジ「あー構わんよ。今はそれどころではない！」

ク「ウィル、来てくれたか！」

「全く、ルーガーのふにゃちんＥＤ野郎め。くだらないことをしてくれたもんだ」

シャ「ＥＤって…」

「レジー、今動かせる船はないのか？」

レジ「あることにはあるんだが…老朽化が激しくて廃艦にしようかと思ってんだ。

だから非武装なんだよ。飛ぶことしかできない」

「それじゃ駄目だな」

は「じゃああの反乱軍はどうするんや？」

「もちろんこのままやられはしないさ。ていうか絶対に勝つ。ちょっと場所を変えよう。ここじゃ話ずらい」

会議室に集まったのは、６課の前線メンバー、クロノ、カリムとシャッハにロッサ、３提督、レジーにオーリス、面白そうだから、という理由でジェイルとナンバーズ、総勢３４名。

「いっぱい集まったね～」

ツ「ウィルさん！」

アイン「私たちが」

アギト「数えられて」

ティ「いないようなんだけど！！」

「あ、忘れてた」

気を取り直して。

「まず３提督のみなさんに確認しておきたいことが。奴らが乗っている改ＸＶ級
次元航行艦には大量の質量兵器が搭載されています。それを使って彼らが
攻撃してきた場合、こちらからも質量兵器で応戦してもよろしいですか？」

は「ウィル君！」

な「それは駄目だよ！」

「おいおい、地球の諺にもあるだろ？『目には目を、歯には歯を』ってな」

ミゼ「正当防衛にのみ、質量兵器の使用を許可します」

ラ「市民の避難はどうする？」

レジ「アルカンシェルの威力を考えた場合、どうしても時間が足りません。
市民の避難は不可能です」

レ「ううむ、どうしたものか…」

「要するに、アルカンシェルを無効化すればいいわけですかね？」

カ「まあそういうことですね。でもそんなことができるわけが…」

「ふふふ…（にやり）」

シグナムはその時のことを後にこう語った。

「あの時のウィルの笑みは、なんというか顔は笑っているのだが、目が全然笑っていなかった。ああいう笑い方をされると鳥肌が立つよ」

～ミッドチルダから５００キロメートル離れた宇宙空間～

突然宇宙空間に穴が空いて、中から次々と次元航行艦が現れた。
ルーガー大将は自分の船、『バッファロー』に乗っていた。

通信士「大将、全艦合流しました。ご命令を」

ケイン「地上本部につなげ」

ケイン「地上本部の諸君！私はケイン・ルーガー大将だ！
これを見てまだ抵抗する気があるのならかかってこい！」

そう言ってモニターに映し出されたのは時空管理局本局。

ケイン「この映像は本局を包囲している艦隊からの映像だ！今から本局を
　　アルカンシェルで破壊する！」

フェ「そんな！まだ母さんが中に！」

レジ「なんてやつだ！」

ク「ウィル！何とかならないのか！？」

「まあ、面白い光景が見れるだろうよ」

みんな「？？？」

ケイン「では、攻撃開始！」

そして本局を包囲していた5隻の船は、一斉にアルカンシェルを発射した…

次回に続くよ！

第４５話：運命の日（前半）（後書き）

ルーガー君が反乱をおこしましたとさ。

次回をお楽しみに！

では

第４６話：運命の日（前半２）

～ちょっと時は戻って、本局の無限書庫～

停電が起きた時、無限書庫の司書長であるユーノ・スクライアは本の整理をしていた。
隣ではアルフがお手伝いをしていた。まあ、いつもの光景である。

だが、システムがいかれて停電が起きると、無限書庫では大変なことが起きた。
無限書庫って、中が無重力じゃん？書庫内の重力管理装置が停電で止まってしまった。
その結果何が起きたかと言うと、ぷかぷか浮きながら本の整理をしていた２人と
大量の本は、あっという間に床に落ちてしまった。２人の絶叫付きで。

そして今に至る。

アルフ「ユーノ！どこだい！返事してくれ～！」

なんとか本の山から脱出することに成功したアルフは、ユーノの姿を探すが見付からない。

アルフ「こういう時は保安部に連絡するんだったな！」

そう考え、近くの保安部員に声をかけて手伝ってもらった。

5分後

アルフ「ユーノ！生きてるかい？」

ユ「少なくとも心臓は動いているよ…」

本に埋もれて窒息死する前にユーノを救出することができた。

ユ「なんでいきなり停電したんだろう？」

アルフ「ここのシステムに不具合でも起きたんじゃないか？」

そんなことを話しながら、崩れた本の整理をしていると、目の前の廊下を
クロノとロッサが全力疾走していく姿がちらっと見えた。

ユ「どうやら厄介事らしいね」

アルフ「いやだね～」

その時、リンディさんから通信が。

リ「ユーノ君、そっちは大丈夫かしら？」

ユ「本に埋もれて窒息死する寸前でしたけど大丈夫ですよ」

アルフ「あたしが助けたからな！」

リ「そう、ならよかった。ちょっと聞きたいことがあるのだけれど？」

ユ「なんですか？」

リ「もし、アルカンシェルでここ時空管理局本局を撃った場合、どうなるかしら？」

アルフ「アルカンシェルでここを！？」

ユ「…ここの防衛体制から考えて、一発なら耐えられると考えます。しかし、それ以上のダメージを食らうとおそらく…」

リ「…そう、分かったわ。ありがとう」

ユ「まさか、ね…」

アルフ「あ、あれなんだろう？」

ユ「え？」

アルフは外にいる改ＸＶ級次元航行艦を見つけた。

ユ「あれは…」

アルフ「なんかアルカンシェルこっちに向けてるぞ！？」

ユ「うそ！？」

２人はようやく気がついた。

これはやばい、と。

～6課の指令室～

ヴァイス「あのおっさん何考えてんだ！？」

ヘリパイロットのヴァイスはびっくりしている。

アルト「あのルーガー大将がこんなことをするなんて…」

シャーリー「グリフィス君、本局には…」

グリ「ああ、まだ母さんがいる…」

ルキノ「グリフィス君…」

～陸士１０８部隊長室～

ゲンヤ「あの野郎、自分の悪事がばらされそうになったからって、
何もこんなことをしなくても」

クイント「ああいう奴は昔からいるのね。最高評議会の連中と同じだわ」

復活したクイントさんもそばにいた。

ゲンヤ「今回ばかりはどうしようもないかもしれねえな…」

ケイン「では、攻撃開始！」

本局を包囲していた5隻の船は、一斉にアルカンシェルを発射した。

5発のアルカンシェルはまっすぐ本局に向かっていった。

ケイン「はーっはっはっは！見ろ！これで私たちの力が証明されただろう！」

操縦士「大将、あの」

ケイン「さあどうするかね、地上の諸君！今すぐ降伏したまえ！君達に

抵抗できるだけの戦力はないはずだ！」

通信士「大将、聞いてます？もしも～し？」

ケイン「何だ！今いいところなのに！」

操縦士「本局包囲艦隊からの映像が途絶えたのですが…」

ケイン「」

何が起きたのかよくわかっていないご様子なので口頭で説明しよう。

本局に放たれた5発のアルカンシェルは、何故か途中から威力が極端に弱まり、

命中する寸前に何かに当たり消滅してしまった。

～撃たれた側の反応～

リ「あら?消えた?」

リンディさんは中央指令室でレティ・ロウラン提督と一緒にいた。

レティ「アルカンシェルの威力が低下してたから助かったわね」

リ「いや、普通じゃあり得ないでしょ、それは」

レティ「そうよね、って何これ！？」

～撃った側の反応～

船長「おい！なんで効果がないんだ！？」

砲手「原因不明です！撃った直後に威力低下しました！」

船長「意味がわからん…」

次の瞬間、緑色のレーザーが飛んできて次々と改ＸＶ級は撃ち落とされ、
本局包囲艦隊は全滅したのであった。

「エディ、本局のシステム復旧率は？」

「あいつら仕事遅いですね。まだ４７％です」

「はぁ、もういい。本局の全システムを乗っ取れ。その方が効率がいい」

「あいあい」

俺はモニターの向こうで唖然としているルーガーに話しかける。

「それでケイン君。君は何がしたいのかな？」

ケイン「君付けで呼ぶんじゃない！いいか、お前が持っている私たちの
　個人データをよこせ。さもないとお前ら全員死ぬことになるぞ？
　５０隻のアルカンシェルから逃げることができるかな？」

「あー、撃つなら撃てば？（ん？５０隻だと？もう5隻はどこに行きやがった？）」

ケイン「なんだと！？」

「いやね、お前らが攻撃してくれないとさ、こっちとしても正当防衛射撃が
できないのよ。俺としては今すぐお前ら全員ぶっ殺したいんだが、俺も管理局の民間人協力者だから、管理局のルールに従って行動しなきゃ
ならない。だからさ、撃つならさっさと撃てよ？」

ケイン「貴様…なめてんじゃねえぞ！このガキが！！」

「黙れこの包茎ＥＤ野郎め。あ、いいこと考えた！お前のあだ名を決めてやろう。

ずばり、包茎ン君だ！どうよ、最高じゃねｗｗｗ？」

俺の後ろで。

レジ「ほｗｗｗうｗｗｗけｗｗｗいｗｗｗんｗｗｗくｗｗｗんｗｗｗ」

ク「これはひどいｗｗｗ」

ジェ「ないわｗｗｗ」

ロッサ「ワロスｗｗｗ」

と大爆笑。

その一方。

な「ウィル君、それはないの…」

フェ「下品すぎる…」

は「はｗｗｗらｗｗｗいｗｗｗたｗｗｗいｗｗｗ」

シグ「主、落ち着いて下さい！」

アリサ「下品よ、ウィル！」

「あれ、いつの間に」

す「面白そうだから来てみたの！」

ルーガー大将はというと、ウィルたちに笑われ、艦橋にいた局員からも笑われ、
怒りでプルプル震えていた。

なんであいつは俺が包茎でありＥＤである事を知っているんだ！？

包茎ン君「もう我慢ならん！全艦、アルカンシェル発射準備開始！
目標、首都クラナガン、地上本部！」

砲手「わかりました…ぷっ」

操縦士「チャージ完了まであと３０秒です、ふふっ」

包茎ン君「お前ら笑ってんじゃねえ!!ぶっ殺すぞ!!」

な「どどどどうするの、ういういういういウィル君!!!」

ス「なのはさん、落ち着いてください!」

「エディ、”あれ”起動」

「ほいな」

テ「”あれ”って何ですか?」

ティ「あれはあれだよ!」

ツ「わかんないですよ~」

「わかんないだろうな~」

包茎ン君「お前らなんか大っきらいだ！撃てー！！」

そしてミッドは眩い光に包まれた…

第４６話：運命の日（前半２）（後書き）

改ＸＶ級次元航行艦の武装

改良型アルカンシェル：１基
中口径魔導砲：１２基
小口径　〃　：８基

ここからは質量兵器
フッ化重水素レーザー砲：６基
ミサイル発射装置：４基
Ｍｋ．１５ファランクスＣＩＷＳ：４基

なお反乱軍旗艦『バッファロー』はアルカンシェルを2基搭載している。

こんなもんですかね。

次回もお楽しみに～

では

第４７話：運命の日（後半）

ミッドチルダ首都クラナガン。
その日も普段通りに会社員は働き、主婦は掃除・洗濯をし、子供たちは学校に通い、
全て正常だった。

だが、突如その全てが眩い光に包まれた。

～反乱軍旗艦『バッファロー』～

ケイン・ルーガー大将は、光に包まれたミッドチルダを見て笑っていた。

包茎ン君「ははは！！こんどこそやっつけたぞ！これで…」

砲手「大将！あれを見てください！」

包茎ン君「ん？あれとは…は？」

ルーガーは愕然とした。

ここでアルカンシェルについて説明しておこう。
アルカンシェルとは、管理局の大型艦船に搭載される魔導砲であり、管理局の
艦船武装の中でも屈指の殲滅力を誇り、その使用は特定条件を満たした状況や
対象に対してのみしか許可されない。撃ち出される弾体自体に攻撃力はほとんど
なく、着弾後一定時間の経過によって発生する空間歪曲と反応消滅で対象を殲滅する。
その効果範囲は発動地点を中心に百数十キロに及ぶ。艦船一隻をやすやすと破壊できる
だけの威力がある。

それを５０発も一気に惑星に撃ち込んだ場合、惑星の表面はかなりえぐれて
大惨事になるだろう。

ミッドチルダでなければ。

ルーガーの耳に聞こえるはずがない声が聞こえてきた。
その声は５０発のアルカンシェルを撃ち込んだはずの地上本部からの通信だった。

「おいおい包茎ン君よぉ、写真を撮るのはいいけどフラッシュ使いすぎじゃね？
眩しすぎて目がつぶれるかと思ったよ」

モニターに相変わらず元気なウィリアムとゆかいな仲間たちが映っていた。

「馬鹿な！」包茎ン君は叫んだ。「こんなことはあり得ん！！」

「受け入れろ、包茎野郎。これが現実だ」

地上本部のウィリアムの周りの人たちも驚いている。

レジ「アルカンシェルを食らったのに、損害がゼロ…だと…？」

ク「一体何をどうすればこんなことができるんだ？」

は「本局の時と同じように、途中からアルカンシェルの弾のスピードが落ちた後、
　何かにぶつかって消滅しとるな」

な「ウィル君、からくりを教えてよ！」

「はいはい、それじゃあ種明かしと行きますか」

俺はミッドチルダの全体図を出した。

「実は、機動６課に入る少し前から俺はミッドチルダの色々な場所にこんなものを設置していたんだ」

”こんなもの”の画像を見せると２人反応する人がいた。

レジアス・ゲイズ中将とシグナムである。

レジ「これはウィルが地上本部の地下に設置したシールドジェネレーターじゃないか！」

シグ「これの小さいものをウィルに持たされた記憶があるな」

「２人とも正解。これはシールドジェネレーターだ。これを海の底とか、
　地面の中とかに設置して、さっきそれを一斉に起動した。その結

果」

俺がキーを押すと、ミッドチルダ全体に青みがかかったシールドが張り巡らされた。

「ミッド全域をカバーするシールドが出来上がりましたとさ、めでたしめでたし」

みんな「えええええええええええ!!!」

ヴィ「そんな話聞いてないぞ!!」

「そりゃ話してないし、聞かれもしなかったしな」

ラ「まるで惑星そのものが要塞じゃな…」

「艦長、本局のシステムを掌握しました。こちらにつなぎます」

「ほいほい」

フェ「母さん！大丈夫？」

リ「ええ、こちらは無事よ。それにしても、陰でそんなことをしていたのね」

「いや～それほどでも～」

包茎ン君「アルカンシェルも通用しないのでは勝ち目がない…」

「あー、3提督のみなさん。彼、撃ってきたんで撃ち返しても？」

ミゼ「許可します」

ラ「1隻も逃がすんじゃないぞ！」

レ「徹底的に潰してくれたまえ！」

「仰せのとおりに。全艦、光学迷彩解除！」

すると愕然としている反乱軍艦隊の手前に、１４隻の戦艦が現れた。
第２艦隊を指揮する旗艦、エクリプス級スーパー・スターデストロイヤー１隻。
インペリアル？級スター・デストロイヤー５隻。
砲撃戦に特化したテクター級スター・デストロイヤー５隻。
アルカンシェルに干渉したインペリアル？級マジック・ジャマー１隻。
そして地球軌道上からやってきたマクロス・クウォーターにバトル・フロンティア。

数では負けているが、攻撃力・防御力共に反乱軍のそれをはるかに上回っている。

包茎ン君「なんだ、あの戦艦は！？とてつもなく大きいぞ、って！」

ルーガーは思い出した。犯罪者を駆逐する謎の戦艦のレポートを。
それが今、目の前に立ちはだかっている！

「その戦艦は貴様のものだったのか！？」

～地上本部～

な「大きい～！」

フェ「大きすぎだよ！」

は「なんやあのでかさは！！」

ク「改ＸＶ級次元航行艦が小さく見える…」

みんなも驚いている。はやてにはデス・スターしか見せていないしね～。

「第２艦隊、配置につきました。艦長、ご命令を」

「ありがとうエディ。では始めよう、素晴らしくも短い戦争を」

そして俺はみんなを振り返って、

「じゃあ移動しましょうか？」

ジェ「どこに行くんだい？」

「もちろん最前線に。転移魔法発動、座標、第2艦隊旗艦の艦橋にセット」

～第２艦隊旗艦の艦橋～

俺はみんなを連れてエクリプス級の艦橋にやってきた。

ウェ「すげーッス！これが戦艦ッスか？でかいッスね～！！」

ノ「ウェンディ、少しうるさい！」

トーレ「これではゆりかごがおもちゃだな」

クア「こんな船を一度でいいから操縦したいですわ～」

セイン「ちょっと他の所がどうなっているのか見てこようかな」

チンク「こら潜るんじゃない！」

ディエチ「あの大きな大砲、撃ちたいな…」

ディード「ディエチ姉様？」

レジ「すごい！これは欲しい！というかくれ！」

ジェ「こういう船で旅をしたいものだ」

オーリス「いや、こんな武装ＭＡＸの船で旅行はちょっと…」

ザフィ「ウィル、すこしいいか？」

「ん？」

ザフィ「さっきお前の端末から、第２艦隊という単語が聞こえたのだが、
まさかこの規模の艦隊を幾つも持っているわけじゃないよな？」

「よく気がつきましたね？」

シグ「誰だ！？」

「おいおい、お前らヴォルケンズとはやては一度会っているだろう？」

ア「確か私を治した時の…エディさんでしたね？」

「おー覚えててくれたんだ？エディ、よかったな？」

「はやてさんにヴォルケンリッターのみなさん、それにアインさんはお久しぶりですね？他のみなさんははじめまして、と言った方がいいですかね。
私は艦隊をコントロールしている人工知能、エディです。以後お見知り置きを。
ザフィーラさんのご指摘の通り、我々は第１から第４までの艦隊

を保有しています」

みんな「まじで？」

「それはそうと、艦長。前方からお客さんです」

見ると前から反乱軍の戦艦が攻撃してきた。

「よし始めよう。全テクター級は敵艦に突撃して砲撃戦を開始。全インペ？級は艦載機を発進させろ。マクロス・クウォーターとバトル・フロンティアは主砲による攻撃を。本艦とインペ？級は現在位置で待機。ケーニッヒ・モンスターによる射撃を開始せよ。ゴラン？はプロトン魚雷による攻撃を開始せよ。あ！それと、反乱軍旗艦『バッファロー』には攻撃するな、以上」

「アイアイ・サー」

ス「なんで敵の旗艦には攻撃しないんですか？」

ギ「そうですよ、さっさと敵の頭をつぶせばいいのに」

ティ「そこはあれよ、簡単には死なせないってことね♪」

「レーザーで撃沈したら、あっという間に死んじまってつまんないじゃないか」

みんな（戦争に面白いとかつまんないとかあるんだ～…）

「まあ見てろって。奴らが雑多な小火器で健気にも立ち上がって来たのを

圧倒的な力で木端微塵に砕いてやる。

包茎ン君、聞こえたかな？せいぜい頑張ってくれたまえ」

包茎ン君「この改ＸＶ級次元航行艦を小火器呼ばわりだと！？
いいだろう、かかってこい！」

そして、歴史上初めて、宇宙空間での大艦隊戦が始まった…

第４７話：運命の日（後半）（後書き）

最近ナンバーズが空気になっていたので登場させました。

それはそうと就職活動がめんどくさい…

次回は、決着みたいな？

では

誤字があったので直しました。

ｐｏｏさん、ご指摘どうもありがとうございます。

第４８話：運命の日（後半２）

～ある反乱軍の船～

操縦士「艦長！敵戦艦から何かが射出されています！」

艦長「これは…戦闘機か！？」

インペリアル？級から出撃したＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機を見て驚く。
宇宙空間で戦闘可能な戦闘機なんて聞いたこともない！
それが無数に接近中である。

艦長「あの戦闘機を撃ち落とせ！」

改ＸＶ級次元航行艦に搭載されているレーザー砲が火を噴き、ミサイル発射機から
対空ミサイルが飛び出し、ファランクスは巨大なチェーンソーがうなりをあげたような
轟音を発しながら、４本の砲身を反動で震わせて猛烈に砲撃を始めた。

普通の戦闘機なら、こんな攻撃を食らったらご愁傷様である。
だが、ＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機、通称「ゴーストＶ９」には通用しなかった。

通常ではありえないような機動をしてミサイルとレーザーを避け、
ファランクスの２０ｍｍ砲弾も、アクティブステルスシステムによって
回避された。アクティブステルスとは、レーダー波を分析し、逆に
欺瞞情報を
送り返す電子対抗手段（ＥＣＭ）の一種である。

敵の攻撃を全て避けたゴーストＶ９は、艦長が気がついた時には艦橋の
目の前にいて攻撃態勢に入っていた。

艦長「やめろおおおおおおお！！！」

誠に遺憾なことに、無人戦闘機のＡＩには情けや容赦がない。

２基のマウラーＲＯＶ－２５　２５ｍｍビーム砲が発射され、艦橋にいた
全ての人は細切れになり、艦橋ごと吹き飛んだ。

頭を吹き飛ばされた戦艦は戦闘不能に陥ったが、無人戦闘機隊はマイクロミサイルを
一斉発射し、

「どんな形の船だったっけ？」

と思うくらい粉々に破壊した。

無人戦闘機隊は戦果に満足することなく、次の目標に向かって行った。

～別の反乱軍の船～

艦長「撃て撃て！ありったけの弾を撃ちこめ！」

こちらの反乱軍戦艦の目の前にはテクター級スター・デストロイヤーがいた。
しかし撃ってこない。

反乱軍の艦長は、敵が撃ってこないうちにいっぱい攻撃しておこう、と考え
今に至る。

砲手A「1番レーザー砲、砲身加熱！射撃不能です！」

砲手B「おい！出力が足りん！駆動炉の出力を上げてくれ！」

機関士「これ以上あげたら暴走しちまう！」

艦長「敵にダメージは？」

操縦士「…ありません」

艦長「くそ！なんで攻撃が通用しない！？」

テクター級は艦隊砲撃戦を目的とした純粋な戦艦であるため、他の船より
シールドが強化されている。従って改ＸＶ級の兵装では傷一つ付かない。

そして、テクター級の攻撃が始まった。

反乱軍戦艦の艦橋は、ターボレーザーの攻撃によって超揺れていた。
あちこちから損害報告が入ってくる。

「２番レーザー砲、動きません！退避しぐあああああああああ！！！」

「医務室で火災発生！早く応援をぎゃあああああ！！！」

艦長「何たることだ…」

全ての武器をつぶされて、この戦艦は火をふきながら宇宙空間に漂うこと以外
何もできなくなってしまった。

操縦士「艦長、まだ我々は生きているのですから、そう落ち込まないでください」

艦長「そうだな、幸いなことにエンジンも駆動炉も無事だし」

砲手「弾薬庫も損傷なしです」

さてここで疑問が浮上してくる。
なんで彼らはまだ生きているのだろうか？

本局を包囲していた艦隊の戦闘を振り返ってみよう。
彼らは第４艦隊から発射されたターボレーザーを食らって、あっという間に
破壊された。レーザーが狙ったのは艦橋、駆動炉、エンジン、そして弾薬庫である。

それらを吹き飛ばされた反乱軍戦艦は爆竹みたいにはじけて破壊されていた。

ならばなぜ、今回も同じように破壊しなかったのか？

別にエディの狙いがずれていたわけではない。

理由はいたって簡単。

数日前。

「艦長～。すぐ撃ち落としたらつまんなくね？ていうかあっけなくね？」

「俺もそう思う。だからさ、こうしない？」

「おお！これはいい！さっすが艦長！考えることが違うね！」

「いや～それほどでも～」

ということがあったため、わざと艦橋、駆動炉、エンジン、弾薬庫を撃たないで、
それ以外の場所は破壊したのである。

艦長「とりあえずエンジンが動くなら撤退しよう」

操縦士「そうですね」

彼らが逃げようとしたその時、突然今までとは違う青色のレーザーがテクター級から飛んできた。そのレーザーはターボレーザーの着弾時よりは衝撃が少なかった。

しかし。

機関士「艦長！駆動炉が停止しました！」

操縦士「モニターが！」

艦橋は真っ暗になり、動かなくなってしまった。

艦長「何をされた！？」

テクター級が発射したのは、ボーステル社製ＮＫ－７イオン砲である。

これを撃ち込まれると宇宙船のコンピュータは機能停止してしまう。

今度こそ航行不能になった反乱軍戦艦に、テクター級が接近した。
反乱軍戦艦の艦橋からターボレーザーの砲塔が見えるくらい近くだった。
それらの砲塔が全てこっちを向くのを見て、艦長は絶望した。
それは他の乗組員も同じだった。
至近距離から撃ち込まれたターボレーザーによって、ハチの巣になった
改ＸＶ級は宇宙のゴミと化した。

マクロス・クウォーターは敵艦に向けてエンジン全開で突っ込んでいった。

敵「間抜けな奴め！奴をつぶせ！」

レーザーやらミサイルやらが飛んできたが、それらを全て避けつつ、クウォーターはバトロイドモードに変形した。

敵「何だあれは！？本当に戦艦なのか！？」

敵が驚いている間に、主砲である重粒子反応砲を近くにいた反乱軍戦艦に撃ちこみ、
炎の塊に変えた。そして主砲全体にピンポイントバリアを集中させ、サーベルのようにして敵戦艦を切りつけた。

その結果、敵戦艦はものの見事に真っ二つになり爆発した。

そこから少し離れた場所でバトル・フロンティアが両手で敵戦艦を持ち上げていた。

敵「やめてくれ～～！！！」

敵の悲鳴を無視して、フロンティアはその戦艦を思いっきり投げて、他の戦艦にぶつけて吹き飛ばしていた。

足元から接近し攻撃していた戦艦には、蹴りという攻撃で応酬した。

～エクリプス級艦橋～

「バトル・フロンティアは殴る・蹴るの暴行を繰り返しているね～」

「いいぞ、もっと蹴っちまえ」

俺たちはここで戦闘を眺めていた。

レジ「あの戦闘機！すごい性能だな！あれ1機だけで倒せるんじゃないか？」

ラ「実にすばらしい！気に入ったよ！」

ジェ「ゆりかごはこれに吹き飛ばされたのか…」

その一方。

な「これが、戦争なの？」

フェ「人がいっぱい死んでいく…」

は「こんなのって…」

ヴィ「はやて…」

シグ「主、これが戦争です。すこし変わってはいますけど」

ザフィ「かなり変わっている、の間違いだろう？」

シャ「でも古代ベルカの戦争と変わらないところもあるわ」

ザフィ「人が多く死ぬ、というところか…」

ス「うわぁ…」

ギ「あっけないわね…」

テ「あれって一応管理局最強の戦艦なんじゃ…？」

ティ「管理局では最強でも、ご主人様の戦艦には勝てないわよ」

「だがルーガーの奴、なんだかんだで頭いいからさ、もしかするとこっちに一撃入れるかもよ？」

そんな話をしていると。

「艦長！タンゴ２２のシールドが破られました！」

「原因は？」

「複数のアルカンシェルの一斉砲撃を受けた模様です！あーあー、燃えてるよ」

タンゴ２２、つまり第２艦隊所属テクター級２番艦を見ると、甲板に大穴があいて
結構燃えているのが見えた。敵はそれを見て、さらに攻撃している。

「エディ、どう思う？」

「復旧は無理と判断します」

「くそ、じゃあこうしよう。リアクターを暴走させて自爆させろ。
あと、搭載している全てのサイズミック・チャージの安全装置を解除。
世界一どでかいサイズミック・チャージにしてやる」

「了解」

被弾したタンゴ２２は、燃えながらも攻撃をしながら敵に突っ込んでいく。
その間にＳＦＳ社製Ｉ－ａ２ｂソーラー・イオン化リアクターの安全装置が
全て解除され、フェイルセーフも無効化された。出力がどんどん上昇する。

リアクター臨界点突破まであと３０秒。

～敵～

艦長「敵はまだ動いているぞ！撃て！」

3隻の改ＸＶ級が猛攻撃をしている。目標は火を吹いているテクター級である。

そして、テクター級の艦橋が破壊され、攻撃がやむと大喜びした。

「やった！これで…」

その時、リアクターが臨界点を突破して大爆発を起こした。

近くにいた3隻の戦艦を巻き込むほどすさまじい爆発だった。

その1秒後に搭載していたサイズミック・チャージが一斉に起爆した。

結果、とてつもなく大きな衝撃波が敵味方関係なく襲った。

マクロス・クウォーターとバトル・フロンティアの主砲が真っ二つになり、
多くのゴーストＶ９が墜落したが、他のテクター級はシールドで防いだ。

だが、シールドを持っていない敵の改ＸＶ級は次々と吹き飛ばされていった。
その数１５隻。それまでの戦闘で２３隻を失っていた反乱軍は、残り９隻になってしまった。

それに追い打ちをかけるかのようにやってきたのは、月面基地上空で待機していた
ゴラン?宇宙防衛ノヴァガンから発射されたプロトン魚雷の嵐である。

魚雷は敵艦の装甲をやすやすと貫いて、内部で大爆発を起こした。
幾つかの魚雷はファランクスの射撃によって破壊されたが、それでも７隻の船が木端微塵になった。これで残り2隻である。

この時点でルーガー大将率いる反乱軍の負けは、ほぼ確実となった。

～エクリプス級艦橋～

ウェ「すげーッス！大爆発ッス！」

ノ「だまれ！！」

ディエチ「いいなあ、大砲いいなあ」

クア「ディエチちゃん、大砲フェチだったのね～…」

ク「なんというか…敵がかわいそうだな」

リ「すさまじい攻撃力ね」

フェ「敵の残り少ないね」

「そろそろ、終わりにするとするかぁ」

俺はマイクを持って包茎ン君に話しかける。

「あー、反乱軍に告げる！もうやめにしよう！武器を捨てて投降したまえ！
そうしないともっと恐怖と絶望を味わうことになるぞ？」

包茎ン君「……」

「あれ、聞こえてないのかな？マイク電源はいってる？」

「はいってますよ～」

包茎ン君「ふざけるな！我々はまだ負けていない！行けー！！」

と言いながら僚艦に突撃させる。

だが。

僚艦「降伏しま～す！命だけはお助け～！」

包茎ン君「んな！？」

「はいはいもちろんＯＫですよ～」

反乱軍、残存兵力１隻。

「さてと、現状は最悪だね？そろそろあきらめてくれないかな、包茎ン君」

包茎ン君「ふふふ、ははははは！！」

突然笑いだしたルーガー。

な「なんで笑っているんだろう？」

は「遂に頭がいかれたんとちゃうか？」

ヴィ「５０隻の船が１４隻に負けたんだもんな～」

包茎ン君「お前ら、私は最初、何隻の戦艦を用意したと思う？」

ク「確か本局から４０隻、それに第２管理世界の秘密ドックから２０隻だったと思うが…」

フェ「あれ？それだと数が合わないよ？本局に残ったのが５隻で、ここに来たのが５０隻じゃん」

ザフィ「では、残り５隻はどこに？」

包茎ン君「ようやく気がついたか！答えはここだ！」

ルーガーがモニターに映したのは。

な「えええええええ！！！」

は「あれって！！」

シャ「あああああ！！」

ヴィ「うそだろ！？」

第９７管理外世界「地球」が映っていた。

包茎ン君「お前らの故郷を木端微塵にしてやる！地球艦隊、攻撃開始！」

な「やめて！！」

「了解しました、ただちに」

「おい、あれはなんだ！？」

「なに！？ぐあああああああ！！」

ぶつっ！

例によって緑色の光と共に映像は途切れた。

な「あれ？」

フェ「ウィル、もしかして地球にも…」

「…（ニヤリ）」

俺は無言で笑った。

「エディ、他の艦隊は動かせるか？」

「ええ、問題ありません」

「包茎ン君に我々の力を見せつけようと思うんだが、どう思うよ？」

「力は正義なり、ってやつですね。いいんじゃないですか？」

「では地球軌道上にいる第１艦隊、待機中の第３艦隊、本局の防衛に当たっている
第４艦隊をここまでよんでくれ」

「あいあい、３０秒で到着します」

「えっと、包茎ン君。君のたくらみは見事全て失敗したようだね？」

包茎ン君「馬鹿な…ありえない…お前には神が味方にいるんじゃないか？」

「正しい者には神が必ず味方する。したがって戦いに勝つものは正しいのさ」

「第１、第３、第４艦隊、到着します」

その瞬間、ハイパースペースから他の艦隊が飛び出してきた。

その数３６隻。

包茎ン君「」

ク「これが…ウィルの艦隊か…」

ヴィ「いやいやいやいや多すぎだろ！！」

シグ「あの化物のような戦艦がこんなに大量に…」

ドゥーエ「さすがにこれは多すぎでは？」

トーレ「同感だな」

ディード「さすがウィル様ですね」

オットー「そうだね」

セッテ「一個欲しいな～」

チンク「姉も欲しい…」

包茎ン君「お前は一体何者なんだ?こんな戦艦をお前一人で作れるとは思えない」

「答える義務はないけど、しいて言えば、神様にもらった力かね」

包茎ン君「何が神様だ!クソ食らえ!」

こっちにむかってアルカンシェルを撃ってくるが相変わらず効果はない。

「それがお前の答えか。なら俺もそれ相応の対応をさせてもらうぞ」

俺は反乱軍旗艦『バッファロー』を囲むように、エクリプス級４隻を配置した。

包茎ン君「何を…」

「よし、トラクタービーム発射!」

トラクタービームとは、重力子の束のビームで時空連続体の形を変形させる事に
より作動するもので、時空のさざ波に捕らえられた物体は引き寄せられることになる。

本来、宇宙船をドッグに入れる際、およびドッキングベイに誘導するために使われる。
また、他の宇宙船を曳航する為にも使われる。軍用の場合、敵の宇宙船を捕らえる
のに使われる。非常に高性能なトラクタービームに捕らえられると、宇宙船は
身動きが出来なくなり、敵に乗り込まれたり、身動きできないままレーザーや
プロトン魚雷の標的となってしまう。捕らえられた宇宙船が逃れることはほぼ不可能と
言ってよいであろう。無理に振り切って逃げようとすれば、船体に亀裂が入るか、
エンジンが焼き切れる、あるいはエンジン区画に甚大なダメージを負ってしまう。

エクリプス級に搭載されているトラクタービーム発射装置は、非常に高性能なので
『バッファロー』は身動きが取れなくなってしまった。

包茎ン君「くそ!どうするつもりだ!?」

「なあ、ルーガー。ちょっと考えてくれ。
まず人間の両手足にひもを付けるだろ?そのひもを馬につなぐじ

ゃん？
　ひもは４本、馬は４頭。ここまではいいか？
　それから馬を全力で走らせたらどうなると思う？」

みんな「」

なのはとはやては地球の歴史を学んでいたので、どうなるかわかってしまい
顔が蒼くなっている。

ス「？」

スバルはアホの子なので分かっていないようだが、他の人達も理解していた。

包茎ン君「まさか！？」

「そゆこと。じゃさようなら～」

その瞬間、エクリプス級のエンジンが唸りをあげて動き出した。

貧弱な改ＸＶ級次元航行艦は強力なトラクタービームに４方向から引っ張られて
見事にちぎれて、大爆発した。

反乱軍残存兵力、ゼロ。

こうして、後にミッドチルダ大戦と呼ばれるようになった戦争は幕を閉じた。

第４８話：運命の日（後半２）（後書き）

はい、包茎ン君は宇宙のゴミになりましたとさ。

次回は後始末です。

では

第４９話：お掃除、お掃除、楽しいな♪

「イーハー！！！」

ティ「ひゃはははははは！！」

ディエチ「いやっほー！！！」

な「どうしてこうなったの…」

ウィリアムとティーナとディエチがハイテンションな理由とは。

～１０分前～

「あーあ、終わったー」

「お疲れ様です、艦長」

「何言ってんだ、エディのおかげじゃないか」

フェ「戦争は終わったの？」

は「もう敵もおらへんしな」

シグ「結果的に反乱軍が一方的に蹂躙されただけだったな」

ヴィ「あいつら弱かったな」

ザフィ「ウィルが強すぎただけだ」

みんな「そだね」

「さて、じゃあお掃除するか」

ジェ「掃除？何のだい？」

「ほら、外を見てみろよ」

みんなが外を見てみると、辺り一面改ＸＶ級の残骸やら破片やらがいっぱい漂っていた。

レジ「ゴミだらけだな」

「そ。だからお掃除。ディエチ、ちょっと手伝ってくれい」

ディエチ「え～なんで私なんですか？」

「お前が喜ぶであろう掃除方法だからだよ」

みんな「？？？」

「はいはい、じゃあここに座ってな～」

コンソールの一つにディエチを座らせる。

ディエチ「これは…？」

「それな、タンゴ２１の射撃管制システム」

な「え？」

フェ「まさか掃除方法って」

「要するに、ゴミは全部大砲で吹っ飛ばせ！ってやつだ」

な、フェ「」

ディエチ「ほほほほほんとに撃っていいんですか！？」

目の色が変わっているぞ、ディエチ。

「落ち着け。もちろん撃っていいぞ。さっきから撃ちたそうな顔してたもんな？」

は「どんな顔や！」

ディエチ「やったー！！！ウィルさん大好き！！」

ブチッ！

トーレ「ディエチよ…」

クア「いくら妹でも…」

チンク「抜け駆けはよくないぞ？」

ウェ「トーレ姉達が怖いッス…」

そして冒頭に至る。

「セクター２－１のデブリは排除完了。セクター２－２は？」

ティ「セクター２－２から２－５は終わったよ！」

ディエチ「ヒャッハーッ！！セクター３はおしまいです！」

あれよあれよという間にたくさんあったゴミは、ターボレーザーの攻撃によって
文字通り蒸発していった。

「きちんと片付けとかないと危ないからな」

これらの宇宙空間に漂うゴミ、スペースデブリは極力ないほうがいい。
放っておくと他の宇宙船にぶつかるかもしれないし。

それにこんなに大量にデブリがあるとケスラーシンドロームみたいになる可能性だって否定できないしね。

～２０分後～

「終わったか？」

ティ「終わったよ」

ディエチ「終わっちゃった…」

オットー「なんでそんなにがっかりしてんだよ」

ディエチ「だって～」

な「ウィル君、これからどうするの？」

「えー、とりあえず一度本拠地に戻るとして、エディ！」

「な～に～？」

「第１艦隊を地球軌道上に、第３艦隊は調査任務に戻らせて、第４艦隊を本局に
派遣しとけ。第２艦隊は整備のために帰還する」

「あいあい～」

ス「本拠地ってどこですか？」

「遥か彼方の銀河系、ってところかね」

ギ「それじゃわかりませんよ？」

「いや、本拠地の位置だけは秘密だ。あそこは絶対内緒だもんね」

な「ウィル君、教えてほしいな？」ガチャッ！

「デバイス突き付けられても教えないも～ん」

な「うううう…」

「はやても場所までは知らないもんな？」

は「そうやね。行ったことしかないけど」

シャ「そうだ、デバイスなら覚えているかも！」

ティ「そんなこともあろうかと！デバイスにはダミーの位置情報が入っていたり！」

ジェ「どんだけ秘密にしたいんだよ」

「いいじゃん、人間一つくらい秘密があってもいいじゃないか」

ヴィ「いいから行こうぜ！」

「はいはい。第2艦隊、ハイパースペースにジャンプ！」

「はい到着」

FW「早っ！」

な「何あれ～！？」

フェ「月がある！」

は「あ～やっぱみんな最初は間違えるんやな～」

ク「僕も最初は間違えたよ」

レジ「いつ見ても素晴らしいな！」

シグ「前と変わらないな」

ヴィ「変わってたら困るよ」

シャ「前より大きくなってたらびっくりだったけど」

ザフィ「これ以上はいらないだろう」

「あれは月じゃなくて…（デス・スターの説明中）」

な「えええええええええ！！？？」

フェ「あり得ない！！」

ス「あれが宇宙ステーション！？」

ギ「非常識な大きさですね…」

エ「大きいですね～」

キャ「大きすぎだよ～」

ディード「ウィル様、デス・スターって名前、変えませんか？」

「ええっ！？」

ノ「なんでそんなに驚いているんだ？」

「あのな、デス・スターはデス・スターなんだ！それ以外の名前とかあり得ない！」

セッテ「そもそもなんでデス・スターっていう名前なんですか？」

「あれが本気出したら一日に一個の惑星を破壊できるから」

ナンバーズ「」

ク「それって『ナル・ハッタ』の時みたいにか？」

「おうよ」

ラ「そういうことじゃ。このような大型質量兵器の塊の位置は知られないほうが
　世のため人のためってやつなんじゃよ」

ミゼ「陰からこっそり攻撃するのはありですけど」

レ「戦艦だけでも強すぎるからな。みんな、納得してくれたかな？」

みんな「はーい」

「じゃあミッドに帰ろうかね。エディ、失った艦、戦闘機、装備の補充よろしく」

「ほーい」

～地上本部～

会議室には大量の人間がいた。本局にいた数少ないまともな提督も参加している。

ラ「さて、今回故ケイン・ルーガー大将が引き起こしたクーデター？の結果、
　ミッドチルダには何の被害もなく鎮圧できたのは非常に喜ばしいことである」

ミゼ「本局の保安部に数名負傷者が出ただけで本当によかった」

リ「それで今後のことですが、管理局の上層部がそっくりそのままいなくなって
いるような状況です。おまけに本局は機能停止状態です」

ク「本局のシステムが完全に破壊されてしまいましたからね」

レジ「それならウィルが何とかしたのでは？」

「エディに本局のシステムを乗っ取らせたので、問題ないはずですけど、エディ？」

「ええ、問題ありません。新しいシステムを構築しました。以前のものより
高速かつ高性能！おまけにハッキング対策もばっちりです」

「素晴らしい。いい仕事だ」

ラ「…なあ？」

ミゼ「…そうね」

レ「…異議なし」

何やら3提督がこそこそ話している。

ラ「ウィリアム・T・ロンバート！」

「はい！」

キール元帥が珍しく俺のことをフルネームで呼んだ。こういう時は真面目な
話だと決まっている。今回はどんな話だろうか？

ラ「君を時空管理局局長に任命する！」

ミゼ「異論は認めないわよ？」

レ「頑張ってな！」

「……え？」

な「ふぇ？」

フェ「局長？」

は「そんな役職あったっけ？」

ラ「今作った！」

は「」

「いやいやいやなんで俺？」

ク「ウィル、今まで君が何をして来たのか思い出すといい…」

「えーっと、まずクロノにチョークスリーパーかけてユーノにぶつ

けただろ？
　それに」

ク「そういうことじゃない！」

「ん？他には、闇の書もとい夜天の書、今では白夜の書をなんとかして、
　イリーシアを丸焼きにして、犯罪者にターボレーザー撃ちこんで、
地上本部とミッドを要塞化して、ゆりかご（笑）を吹っ飛ばして、
反乱軍（笑）を蹴散らして、それくらいかね？」

レ「それだけの功績があるんだから昇進は当然じゃないか？」

な「でもウィル君、嘱託魔導師じゃ…」

ラ「こまけぇこたぁいいんだよ！」

「しかし、局長とはね…」

ミゼ「一応、階級としては元帥になるのかしら？」

ラ「それじゃわしとかぶるぞ？」

レ「じゃあ大将だな。みんな、それでいいかの？」

数少ないまともな提督「いいとも～！」

は「いいんかい！」

ラ「というわけで全会一致で可決！決まりじゃ！」

「大将…俺が？…局長？…ないわー…」

カ「いいじゃないですか、ミッドの守護神さん♪」

「なんだって？今なんて言った、カリム？」

カ「え？ミッドの守護神って」

「それだよ！なんだよそれ！？誰が言ってるんだ、んなこと！？」

オーリス「実はですね、反乱軍との戦闘は全て市民が見ていたんですよ」

「は？」

ティ「なんかマスコミに映像と音声が流れてたらしいよ？」

「誰がやった？」

ティ「私は知らないよ？」

な「知らないよ！」

フェ「私じゃない！」

は「うちでもないよ！」

ヴォルケンズ「し～らない」

3提督「知らん」

ク、リ、ユ、アルフ「知らない」

テ、エ、キャ、ギ「知りません！」

ジェ「知らないなあ」

ナンバーズ「存じません」

「じゃあ誰だ…？」

ス「なんで私には聞いてくれないんですか！？」

「それはあれだ、スバルがやっていないってことが分かるからだよ」

ス「なんでわかるんですか？」

「アホの子スバルにはこんな芸当出来るわけがない！」

ス「ひどい～！」

となると、消去法で考えると1人しかいない。

「エディ君～？」

「何のことでしょうか？」ひゅ～ひゅ～

「口笛吹けてないぞ、ていうかお前口ないだろ」

「ギクッ！」

「で、お前が流したの？」

「…はい」

「なんで？」

「あの映像を流せば出来ると思ったんだ！」

な「何が？」

「夢のテレビ視聴率１００％！！！」

「は？」

な「ごめん理解できない」

ジェ「私も理解できない」

ユ「わけがわからないよ」

は「うわーほんまどうでもいいな」

「エディ、お前の頭の中からアニメのデータ抜くぞ？」

「すいませんごめんなさい許して下さい」

「戦艦の整備と補充、きっと明日の朝には終わっているだろうなあ～」

「直ちに！！」

「んでカリムよ、なんで俺がミッドの守護神って言われているんだ？」

カ「アルカンシェルを無効化して、反乱軍をあっという間に蹴散らして、
　ミッドの人々を守ってくれたので、みんながそう言っているんですよ」

「なるほどね～、だから予言に2人の守護神ってあったのか」

ミゼ「というわけでウィル君、管理局をよろしくね？」

「はぁ…」

俺は思わずため息をついてしまった。いつの間にか守護神呼ばわりされてるし、
いきなり昇進しまくって局長とかになってるし。

でも、やりがいはありそうだな。

「わかりました。全身全霊をもってお受けいたします！」

ラ「その言葉が聞きたかった！」

レ「頼んだぞ！」

ここに、新たな時空管理局の歴史が始まったのであった。

～～～

ＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機６８機、上記の自爆に巻き込まれて墜落。
マクロス・クウォーター及びバトル・フロンティア、主砲全壊。

２、戦果
改ＸＶ級次元航行艦５９隻を撃沈、１隻を拿捕。

３、改善点
・インペリアル？級マジック・ジャマーの出力不足。
・テクター級スター・デストロイヤーのシールド強度不足。
・マクロス・クウォーター、バトル・フロンティアのシールド不足。
・ＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機のシールド不足。

作成者：ウィリアム・Ｔ・ロンバート

～～～

～おまけ～

「やっほーヴァイス。治しに来たよ」

ヴァ「旦那！来てくれたんですか！」

「俺が嘘言ったことあるか？で、そちらが…」

ヴァ「俺の妹のラグナです」

ラグナ「ええと、ラグナ・グランセニックです。はじめまして」

「いい子じゃないの。じゃあさっそく」

俺はラグナちゃんの左目に治療魔法をかけた。

「痛いの痛いの、飛んでけ〜！よしこれでいいだろう。
ラグナちゃん、ゆっくり目を開けてごらん？」

ラグナ「んっ…あ！見える！見えるよお兄ちゃん！」

ヴァ「ほんとか？よかった…」

「これでめでたしめでたしだな！」

ヴァ「旦那！ありがとうございます！」

ラグナ「ありがとう〜」

「な〜に、気にするなって」

ラグナは視力が戻った！！

ヴァイスとラグナの仲が元に戻った！！

第４９話：お掃除、お掃除、楽しいな♪（後書き）

ウィリアム大出世です。

ついでにラグナちゃんの目も治しました。

次回は、考え中です！

では

なんてこったい

あーどうも作者でございます。
いつも読んでくれてありがとうございます。

さて実は今日暇だったので、午前中にこの小説の書き溜めをしておこうと思い
一心不乱に書いてました。

で、午後はちょっと出かけていたのですが、何を考えたのかパソコンの電源を
付けっぱなしにしてしまいました。

その結果大地震です、はい。

あわてて家に帰ってパソコンを見ると、なんと横に倒れているではありませんか。

まあ書いておいたデータは全部消えましたよねｏｒｚ

なので今日は更新しません！
パソコンのエラーチェックもしないといけないので。

明日には更新できると思いますのでよろしくお願いします。

今後もこの小説?を呼んでくれればうれしいです、はい。

あと、今回の地震で被災した方、亡くなった方にお悔やみ申し上げます。

第５０話：管理局再建の道なり（前書き）

ＰＶ４００，０００突破！ほんとにありがとうございます！！

第５０話：管理局再建の道なり

どうも、いつの間にか時空管理局局長になってしまったウィリアムです。
局長の朝は早いのです。

朝４時に起床。なぜか一緒に寝ているなのはとフェイトとヴィヴィオを
起こさないように着替える。

朝５時まで外で軽くランニング。朝の空気は気持ちいいなぁ。
んで６時まで筋トレ。

朝６時にベッドにいるなのはとフェイトを叩き起こす。
ヴィヴィオはまだ寝てていいからね～

朝７時に朝食。スバルよ、なんで朝からそんなに食うんだ？

朝８時には地上本部にてお仕事開始。

さて、今日のお仕事は、っと。

１、次元航行部隊の再建について
２、今後の管理局のあり方について

3、ジェイルとナンバーズの処遇

あれ、3はもう決まっていなかったっけ？まあいいや。

まずは1だな。

クロノや他の数少ないまともな提督が持っていた戦艦は、ルーガーがクーデターを起こした時に全てハチの巣にされたから廃棄工場行きだろ？んで地上本部に置いてあるのは、スクラップ工場行きが決定していた「アースラ」だけだし、結局今すぐ動かせるのは、投降した反乱軍の改ＸＶ級1隻だけなんだよね。

まあしばらくは俺の戦艦で何とかするとして、問題は以前みたいに大量に船を作るべきかという点だな。

俺個人としては、別に広域探索とかやらなくてよくね？って思っている。

次元世界の安全と平和を守る！って言ってるけどさ、管理局は万年人員不足なんだし、そこまで手が回らないだろうよ。

なので、船は以前より少なめに作って、広域探索は俺の戦艦にやらせて、
まずは地上と海の連携を強化するのが先決だな。
そうすればお互いの治安も向上するし、情報のやり取りもスムーズになるんじゃないかな～。

はい次、2ね。
まずロストロギアの取り扱いについて。
以前の場合は、いきなり現れて、

「これ危ないものだから我々が引き取ります、異論は認めない！」
キリッ

って感じで、

「抵抗すると逮捕だぞ！じゃもらっていくわ、ばいば～い♪」

という流れだったはずだ。正直言って強盗である。
こういうやり方されてむかつかない人間はいないと思う。

なのでやり方を変えよう！
まず最初に、

「どうも～私時空管理局と言う組織の人間ですが～」

と挨拶から入り、

「実は私たちはロストロギアというものを集めておりまして、

ちょっとこちらのものを調べさせてもらってもよろしいですかね？」

と許可をもらう。

んで調べた結果、危険性が低かった場合は現地でそのままにしておく。

無理に回収理由はどこにもないしね。

もし危険性が高いものだった場合は、

「これちょっと危ないものなので、我々で買い取らせてもらえませんかね？」

とお金で解決！

まあ、最終的な判断は現地の人に任せるけどね。

次に質量兵器。

この世には様々な管理、管理外世界がある。場所によっては、

「ここの治安悪いし、私魔法使えないから自衛のためには必要なんだ！」

って場合も少なからずあるだろう。

そういう人たちから武器を取り上げるのはよろしくない。

なので、質量兵器の取り扱いに関しては各管理、管理外世界の政府、行政機関に

許可をもらえば持っててもいいことにする。管理局からは特に何も言わない。

ただし、

「お前が持っている質量兵器で誰かを傷つけたら、管理局も質量兵器使って
　追い回すからな？」

ってことにしておく。

あとはあれだ、人員の確保について。
管理局はいつも人員不足で、魔法のセンスがあれば年齢関係なしで入局させてるけどそれはいけないだろう。
なのはの場合、９歳で管理局入りだし。まだ小学生じゃん！

なので、今後は１５歳以下の人は入局禁止にします。
１５歳になって管理局に入りたい奴は、まず訓練施設で魔法とかの基礎をきちんと学んで、それから入局という形にしようかと。

それに、今管理局に在籍している１５歳未満の子供は、いつでも望む時に
やめられるようにしておく。もしかしたら無理やり管理局に入らされた人も
いるかもしれないしね。

最後に３か。

ジェイルとウーノには、新しく作った管理局の技術研究部門に入ってもらうことに。
プレシアさんとすずかも一緒にな。これでＯＫ。

次に、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディはナカジマ家に引き取られて、
陸士１０８部隊に仮配属となった。４人はギンガやゲンヤさんと仲良くやっているようだし、
クイントさんも子供が増えていいかなーと。しばらく１０８部隊で仕事してその後
何をしたいかは各自の判断に任せることにする。

んで、セイン、オットー、ディードはカリムの教会で働くことに。
この前行ったらオットーが執事の服着てて、一瞬男かと思ったのは内緒である。

ドゥーエは俺の秘書になって、トーレ、クアットロ、セッテは俺直属の
部隊として動いてもらっている。あの3人なら立派に活躍してくれるだろう、うん。

「とまあこんなところかね。疲れた～」

気づくともう１２時。お昼である。

ドゥーエ「お疲れ様です、ウィルさん」

「ありがと～、はぁ、飯食いに行くか？」

ドゥーエ「そうですね」

俺とドゥーエは6課に行こうとしたが、その時ドアが開いて、

ティ「ご主人様～私も行くの～！」

アリサ「私だって行くんだから！」

すずか「わ、私も一緒に…」

3人が登場。

「はいはい、じゃあ行くぞ」

俺はみんなと一緒に6課に飛んだ。

～6課食堂～

ス、ギ、エ「がつがつもぐもぐ…」

テ「いつ見てもすごい食べっぷりね…」

キャ「ですよね～」

ヴィ「お前らもう少し落ち着いて食えないのかよ」

シグ「それは言っても無駄なことだと思うぞ？」

ザフィ「同感だな」

シャ「食事はゆっくり食べるものなのにね」

は「そうやな」

ツ「そうですよね、はやてちゃん」

アイン「妹よ、お前は体が小さいから必然的に食うスピードが遅いだけじゃないか」

ツ「むーっ！それは言っちゃいけないことなのです～！」

アギト「うるさいぞ、ばってんちび！」

な「にゃはははは…」

とそこに。

「ようみんな！」

ドゥーエ「お邪魔します」

ティ「ご飯食べに来たの！」

アリサ「やっほー！」

すずか「や、やっほー…」

ヴィヴィオ「ウィルパパだ～」

フェ「アリサにすずか！」

な「みんなようこそなの！」

「おばちゃん！A定食とB定食特盛りで！」

ティ「私も！」

「あいよ！たっぷり食べておくれよ！」

「うまそ～いただきます！」

ティ「ます！」

がつがつもぐもぐ…

ヴィ「なあ、食いすぎじゃないか？」

シグ「あいつらよりは少ないだろう？」

あいつら＝スバル、ギンガ、エリオ

シャ「そ、そうね…」

ザフィ「ウィルは大食いで、あいつらは馬鹿食いと呼ぶべきだな」

は「ていうかそんなに腹へってたんかい。朝はちゃんと食べたんやろ？」

ドゥーエ「そういってましたけど、仕事が忙しくてお腹が減ってしまったそうです」

フェ「どんだけ忙しいの、局長の仕事って？」

ドゥーエ「途中、ウィルさんの目が死んだ魚のような感じになってましたっけ？」

な「それは、お疲れさまだね」

「あーうまかった。お腹も心も満たされた！」

キャ「もう食べたんですか！？」

ティ「ごちそうさま！」

アギト「お前ら早すぎだ！」

「こんぐらい普通だろ」

ヴィヴィオ「はや～い」

「お、ヴィヴィオ、ピーマン食べれるようになったのか！えらいぞ～」

ヴィヴィオ「えへへ～♪」

ス「もぐもぐ、もぐもぐもぐもぐ？」

ギ「スバル、食べ終わってから話しなさい！」

ス「もぐもぐ、ごくん！えっとウィルさん、午後はずっとこっちに？」

「いや、午後は地上本部で会議だ。まったく疲れるよ、いやまじで」

エ「そんなにですか？」

「なんなら一日局長でもやってみるか、エリオ？」

エ「え、遠慮しときます…」

フェ「ウィル、仕事を頑張るのはいいけどほどほどにね？」

な「働きすぎはよくないんだよ？」

「…お前らが言うな」

な、フェ「うっ」

「でも、ありがとな。じゃあそろそろ行くわ。また夜にね～」

午後行われた会議で、俺の考えた案は全員の賛成を得ることができた。
いや～真面目に考えたからよかったよ～。
その後はひたすら書類仕事。なんでこんなにあるんだよ！

気が付いたらもう夜の8時でした。

ドゥーエ「ウィルさん、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかね。麦茶ちょうだい」

ドゥーエ「はいどうぞ」

「あーうまい」

そこに。

クア「失礼しま～す。ただ今戻りました～」

「お、お疲れさん。で、どうだった？」

今日3人に与えた任務は、違法な研究をしているクソどもの摘発だった。
本来ならターボレーザーの刑にするはずだったのだが、奴らのアジトの中に

孤児がいることが判明したため、3人に行ってもらった。

トーレ「リーダーの男は無傷でとらえた。他の連中は質量兵器で攻撃してきたので
交戦規則に則って殺害した」

クア「研究所からデータを抜き取っておきました～」

セッテ「子供たちも無事保護しました。かなり衰弱していたので教会の病院に
入院しています」

「そうか、よくやった。それで奴らは何を？」

セッテ「それが…孤児を使って人体実験を…」

ドゥーエ「まぁ！」

トーレ「私たちが突入したときには既に何人かの子供たちが…」

「…わかった。みんなご苦労だったね。今日はゆっくり休んでくれ」

トーレ「じゃあまたな」

セッテ「失礼しまーす」

クア「では～」

「はぁ…間に合わなかったか…」

ドゥーエ「悪いのはクソみたいな研究者たちです、ウィルさんじゃありませんよ」

「それはわかっている。わかってはいるんだが、それでもな…」

ドゥーエ「ウィルさん…」

「すまんな、今日はこの辺でおしまいにしよう。また明日な」

俺が6課に戻ったのは9時くらいになってしまった。

ティーナと一緒に夕食を食べて部屋に戻ろうとしたのだが、

ドアを開けようとした時、俺は体をこわばらせた。

中に誰かいる！ヴィヴィオか？いや違う！

俺は咄嗟にドアの右側に張り付いた。ティーナは左側に。
そしてＨ＆ａｍｐ；Ｋ　ＨＫ４１６Ｃを出した。銃身の長さが９インチのコンパクトモデルである。
アンダーレールにはＭ２６　ＭＡＳＳ（Ｍｏｄｕｌａｒ　Ａｃｃｅｓｓｏｒｙ　Ｓｈｏｔｇｕｎ　Ｓｙｓｔｅｍ）を付けている。

ティーナにはＡＡ－１２という自動ショットガンを渡してある。

そして俺は創造魔法で作り出したスタングレネードのピンを抜いて、部屋の中に転送した。

５万ワットの明るさが視力を、耳をつんざく轟音が聴力を奪い去った。
中にいる人間はたまったものじゃないだろう。
その瞬間、俺とティーナはドアを開けて中に突入した。

「動くなっ！手をあげ、ろ？」

ティ「動いたら撃つわ、よ？」

は「目が！目が～～～！！」

シグ「何も見えんし聞こえん！」

シャ「はやてちゃん！どこ？」

ヴィ「うわあああああ！！」

ス「きゅ～」

ギ「スバル！」

テ「なにこれ～？」

な「にゃ～～」

フェ「……（気絶中）」

アリサ「う～ん…」

すずか「何も見えないよ～」

カ「なんなんですか～？」

「何このカオス」

ティ「いや、スタン投げれば誰だってこうなるって」

「やっぱり？」

んでんで。

「あのさ、ほんと勘弁してくれよ。勝手に部屋に入るとかマジあり得ないぜ？」

みんな「はい、すいませんでした」

ティ「はやてちゃんも勝手にマスターキーとか使わないの！」

は「ちっうるせーな。反省してまーす」

「…ティーナ、はやてには特別訓練レベル５をやってあげなさい」

ティ「了解！明日が楽しみだね？ふふふっ」

は「」がたがたぶるぶる

「で、なんでこんなことをしたんだ？」

な「ウィル君、この前私たちにプロポーズしてくれたよね？」

「ああ、そうだな」

フェ「でもその後、色々あってウィルと一緒にいる機会が少なくなってたじゃない？」

「ん～、確かにクーデターがあったし、俺は今局長で忙しいし、そうだな」

は「だからウィル君成分が足りんのよ！」

「は？なんだって？」

テ「ウィルさん、もう我慢できません…」

ス「ティア、落ち着いて！」

シグ「ティアナ、抜け駆けは許さんぞ？」

テ「…はい」

ヴィ「ウィルよ、私たちは近い将来結婚するんだから、その、つまり…／／／」

「つまり？」

ギ「私たちと一緒にその、寝てくれませんか～なんて言ってみたりして／／／」

「一緒に寝る…ってまさか！」

は「そういうことや！」

「ちょっとまて～い！」

な「なんで！？もう我慢できないの！」

「そういうことは結婚してからの方がよろしいのではないかと私は思うのですが！」

フェ「私たちはもう準備できているんだよ？」

テ「そうです！だからしましょう！」

「…ティーナさん、ヘルプミー」

ティ「さーて、ヴィヴィオと一緒に寝ようかな～」

シャ「ヴィヴィオちゃんは隣の部屋にいるわよ」

「のおおおお！！」

は「あきらめるんやな、ウィル君」

「はぁ、本当にいいのか？」

な「うん！」

フェ「当たり前だよ」

「…わかった。しかし１２人全員か…」

アリサ「こんな美人軍団とその、出来るんだから感謝しなさいよ／／」

「それはもちろんだよ。じゃあヤるか！」

みんな「はい！」

「さてみんなこいつをみてくれ。どう思う？」

な「す、すごく…」

ヴィ「大きいな…」

あは～ん、うふ～んな場面は飛ばしちゃいます！

～翌朝～

ウィリアムの部屋はすさまじいことになっていた。
魔法で大きくしたベッドには12人の美女がいて、その中心にはウィリアムがいた。彼はまだ元気満々だったが、美女たちはというと。

な「も、もう、だめ～／／／」

フェ「お腹…いっぱい…／／／」

テ「しゅごい…こんなの、初めて…／／／」

ヴィ「」

「ヴィータ？大丈夫か？」

ヴィータが動かないので体をゆすってみると。

ヴィ「ひあっ！んあぁぁ～ん！いぐうううううう！！」ぷしゃ～

「えー…」

こんな感じであった。
もちろん仕事などできるわけもなく、全員休みになった。

賢者モードに入っていたウィリアムは元気に仕事をしていたそうな。

第５０話：管理局再建の道なり（後書き）

はい、おしまい。

なんかものすごく疲れた。

相変わらず余震がすごいですね～。
亡くなられた方もかなり増えているそうで。

次は何にしようか考え中ですので。
では

第５１話：たまにはゆっくりと、その１

あは～ん、うふ～んな出来事から一週間後のこと。

～地上本部局長室～

１人の局員がウィルの前で報告をしている。

局員「…というわけなんです。どうか局長の方から言ってもらえませんか？」

「確かにこれは問題だな…わかった、こちらから言っておこう」

局員「ありがとうございます！こちらから言ってもいつも断られていたので…」

「まあ確かにあいつらなら断るだろうな、うん。他に何かあるか？」

局員「いえ、特にありません」

「わかった、御苦労さま」

局員が部屋から出て言った後、俺はドゥーエを呼ぶ。

ドゥーエ「お呼びですか？」

「今から６課に向かう。付いてきてくれ」

ドゥーエ「了解しました」

「向こうにはもう連絡がいっていると思うけどね。
あとその前に少し寄り道を、っと」

俺たちは車に乗り込み6課に向かった。

～6課～

は「みんな！一大事や！」

な「何が起きたの？」

なのは達が訓練をしている時に、はやてが猛ダッシュで訓練場にやってきた。

は「ウィル君がこっちに来るんや！」

ア「いつもとは違い、公式の用事でな」

ツ「だからきちっとしないといけないです！」

ヴィ「公式の用事って、あたしたち何か悪い事でもしたっけ？」

シグ「いや、新しい任務でもいいに来たのかもしれんぞ？」

は「とにかく訓練は中止してロビーに集合や！」

みんな「は～い」

～ロビー～

テ「ウィルさんの制服姿…はぁはぁ」

ス「…ティア、いくら私でもそれはないわ」

は「そこ、話をしない！」

テ、ス「はーい」

シャーリー「八神隊長、陸士１０８部隊のナカジマ３佐から通信です」

ゲンヤ「おい八神よ、何が起こっている？」

は「何、とはどういうことですか？」

ゲンヤ「実はさっきウィルが来てな、ギンガを連れてそっちに行ったらしいんだ」

クイント「書類をもらったのだけれど、まだ開けちゃいけないって言われてね」

は「ん～なんでやろうな～。ちょっとこっちでもわからんです」

ツ「はやてちゃん！ウィルさんの車ですよ！」

は「あ、ちょうど来たみたいなんでまた後で連絡します」

６課の前に３台の車が止まった。全て黒いＳＵＶで、どれにウィルが乗っているのか、外から見ただけでは分からないようになっている。

その時、真ん中の車の屋根がパカッっという音と共に二つに開いて、中から屈強な男が備え付きのＭ－１３４ミニガンを表に出して、周囲を警戒し始めた。

一番後ろの車からは、ティン・マン装甲服に身を固めた４人の男達が出てきて、

これまた周囲の警戒に当たっている。
そして一番前の車からウィルとドゥーエ、そして。
ス「ギン姉！」
な「あれ？」
は「アリサちゃんにすずかちゃん？」
将来の奥さん3人を連れていた。

ウィルはそのままはやての前までやってきた。
気を取り直したはやてが、
「時空管理局局長ウィリアム・T・ロンバート大将に、敬礼！」
と言って6課全員で敬礼をする。
ウィルも答礼し、
「八神部隊長、突然すまないな。このような訪問はあまり好ましくないのだが、
事態は急を要するのでね。前線メンバー全員を会議室に集めてお

いてくれ」

は「了解しました！」

いつもとは違い、真面目な表情を崩さないウィルの顔を見て、皆これはただ事ではない、と思った。

～6課の会議室～

「さて、全員集まったようだな？ここからはフレンドリーにいこうか」

は「それでウィル君、いったい何があったんや？」

「まあまて、ゲンヤさん、クイントさん、そちらの書類を開けて中を見てください」

ゲンヤ「あいよ、ってこれは」

クイント「なるほどそういうことね…これは一大事だわ」

「でしょう?なのでいいですかね?」

ゲンヤ「ああ、問題ないぞ」

クイント「そっちで好きにしちゃっていいわ」

「どうも～」

ギ「何のことですか?」

蚊帳の外にいるギンガには理解できていないご様子。

ティ「ご主人様から説明するよ」

「何、実に簡単なことだ。機動６課＋ギンガ・ナカジマ陸曹、
アリサ・バニングス特別教導官、月村すずか特別技術顧問は、
本日より２週間お休みです！なお、これは局長命令なので異論は
認めません！」

ティ「ません！」

し～ん

な「…え？」

フェ「休み？」

は「どういうことや？」

「実は今日の朝の話なんだが、いきなり人事部の局員がすっ飛んできてな。
話を聞いたんだが、内容はこうだった。

『あいつらの有給休暇が溜まりすぎている！こっちから言っても休んでくれない！
だから局長の方から圧力掛けて休むように言ってくれ！』

なので俺は人事部のトップの所に行って６課全員強制休暇にして

いいよと
　言ってきた。その間６課の代わりに陸士１０８部隊が動いてくれる」

みんな「なんだって～！」

エ「ほんとに2週間も休みなんですか！？」

「あたぼうよ、べらぼうめ。第二次ミッドチルダ大戦でも起きない限り呼び
　戻されることはまずない」

キャ「やったね、フリード！」

フリ「きゅく～」

ス「わーい休みだー！」

な「ぶー、休みかー」

フェ「突然休みって言われてもね～」

「お前ら働きすぎなんだよ。まあたまには羽を休めることも大事だろ？」

は「そうやね～、ではお言葉に甘えさせてもらうとしますか」

「あともう一つ。その休暇に関する事なんだが、旅行に行かないか？」

みんな「旅行？」

「ティーナ」

ティ「はいはい、私が説明します！ここ、第４３管理外世界「ポッケ」には
とてもいい温泉がいっぱいあるのです。お肌とかすべすべになったり
するかもよ？なのでみんなでここに行きましょう！っていう話なんだけど」

ガタッ！という音と共に女性陣が椅子を後ろに倒しながら立ちあがった。

女性陣「行きます！いえ、行かせてください！！」

エ「み、みなさんすごい反応ですね」

ザフィ「女はそういうことには敏感だからな」

「じゃ、明日の朝１０時に地上本部に集合な」

みんな「はい！」

テ「あの、ウィルさん。どうやって現地まで行くんですか？」

「もちろん船で」

ス「まさか、あの戦艦じゃ…」

「んなわけないだろう。戦艦で温泉に行く馬鹿がどこにいるんだ？」

ギ「ですよね」

「きちんとした非武装の美しい船を用意したから心配するな」

～翌日、地上本部地下ドック～

「じゃじゃ～ん、これが俺たちの乗る船だ！」

みんな「うわぁ～」

みんなの目の前にあるのは、Ｊタイプ外交バージ（ナブー・ロイヤル・クルーザー）
である。このクルーザーには親しみやすいクローム塗装が施してあった。

（実はこの船、乗客定員が１０人なのだが、そこはチートを使って船の大きさを
こっそり変更したので、３０人まで乗れるのだ！）

「どうよ、この美しい船は！」

な「きれい…」

フェ「機体がなめらかだね」

ス「ほんとに武装はないんですか？」

ティ「ないわよ。超強力なシールドジェネレーターがあるだけ！」

「相手を殴る代わりに自分のケツを両手で守っている、と考えてくれ」

ザフィ「わかりやすい表現だな」

アリサ「じゃあ行きましょう！」

「まあまて、もう1人乗る人がいるんだ」

すずか「誰？」

その時。

カ「待って下さ～い！！」

スーツケースを引きずりながらカリム・グラシアが全力疾走してきた。

は「カリム？」

「シャッハと話して手を回してもらったのさ」

カ「はぁ、はぁ、遅れて、すいません、でした、はぁ」

「大丈夫だよ、さてそれじゃあ行きますか！」

みんな「おー！！」

ユニゾンデバイスも含めると総勢２１名のメンバーは、ウィリアムが操縦する
美しい宇宙船でで２週間の旅行に出発した。

メンバー一覧
俺、ティーナ、なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンズ４人、リイン姉妹２人、
アギト、ＦＷ４人、ギンガ、カリム、アリサ、すずか、ヴィヴィオ。

その宇宙船の周りを、光学迷彩で姿を隠しているＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機４機が
こっそり護衛しているのは内緒である。

第５１話：たまにはゆっくりと、その１（後書き）

なのは達はいつも仕事しすぎなので、たまには旅行に行くべきだと思ったので
書きました。

ポッケという名は、モンハンのポッケ村から。

次回も続きを書きます。
では

第５２話：たまにはゆっくりと、その２

第４３管理外世界「ポッケ」。
ここは温泉とモンスターの世界である。
人々は魔法を必要としない武器を持ち、自分より何倍も大きいモンスターと
戦い、生計を立てているのである。そして戦いの後は温泉で疲れをいやす。
次の戦いのために…

要するにリアルモンハンの世界だな、うん。

ミッドを出発してから2時間後。

「はい、ここが第４３管理外世界の『ポッケ』だよ～」

な「これが…」

フェ「ポッケかぁ」

ポッケの外見は地球より海の割合が少ない感じと思ってくれて構わない。

は「そういえばウィル君、ここって管理外世界なんやし、いきなり宇宙船が
　下りてきたらまずいんとちゃう？」

「ああ、それか。まず俺たちはあそこに降りるんだ」

俺が指さす先にあるのは、ポッケの衛星『アイオス』である。

シグ「データによるとあそこは無人じゃないのか？」

ティ「そうだよ！そこにご主人様が目を付けたんだけどね」

シャ「なんか分かった気がする…」

「実はあそこには管理局のドックがあるんだ」

ス「すごーい！」

ヴィ「ポッケの連中は知らないんだろ？」

「もちろん。さあ着陸するぞ」

アイオスの地表に降下した船は、そのまま大きなクレーターに向かっていった。
するとそのクレーターが横にスライドして、中に大きな着陸用スポットが
現れた。ウィリアムはゆっくりと船をそこに着陸させる。頭上で

クレーターがまた動いて元の状態に戻った。

「よし、次はこれだ」

船を降りたみんなを連れて転送ポートに連れてきた。

ギ「これで惑星に飛ぶんですね？」

ティ「ギンガちゃん正解！スバルちゃんは分かってないと思うから聞かないでおくね！」

ス「ぶー」

キャ「こんな施設いつの間に作ったんですか？」

エ「気にしたら負けだと思うよ、キャロ」

「行くぞー、みんな乗れー」

「あ、言い忘れたけど、ポッケには魔法ないから外で使うなよ？」

ティ「それに寒いから持ってきた上着を着といた方がいいよ」

みんな「はーい」

～ポッケ村入口～

入り口では一匹の猫がうろちょろしていた。しかも二足歩行をしている。

？？？「そろそろかニャ？」

入口の門についている時計で時間を確認しながら猫?は考える。

???「それにしても団体さんのお客様は久しぶりだニャ！
しっかりおもてなしするニャ！」

と、その時。

「ここかな?おーい！」

???「あ、ウィルさん!お久しぶりだニャ！」

ウィリアムの姿を見て猫?は猛ダッシュでやってきた。それを見た他の人は。

ア「なっ!?」

ツ「猫さんが2本足で立っているです～!」

は「うそやろ!?」

アリサ「かわいい!!」

すずか「飼いたいな～」

な「すごいねフェイトちゃん」

フェ「うん…」

シグ「というかウィル、その猫は…」

「ああ、紹介しよう。今回の宿泊先『ホテル・アイルー』の経営者」

カスパー「私の名前はカスパーなのニャ！ようこそポッケ村へ！
さっそく宿に行くニャ！みんな！」ひゅ～

カスパーがしけた口笛を吹くと、たくさんのアイルーがやってきた。
中には台車を引いているのもいる。

カス「お客様の荷物を部屋に運ぶのニャ！」

アイルーズ「了解ニャ！」

アイA「そこの美人さん！お荷物を預かるニャ！」

フェ「ええ！？美人だなんて…／／／」

アイB「大きなピンク色のお姉さん。お荷物をこちらに！」

シグ「…確かに私はピンク色のお姉さんだな」

アイルーズは荷物を持って宿に引き返して行った。

カス「それでは村の案内もしながら宿にいくニャ！」

みんな「はーい」

まず最初にポッケ村について話し始めた。
大古より溶けることのない雪で覆われたフラヒヤ山脈。良質な鉱石や植物が
採れるフィールドとして有名な山脈の懐に、このポッケ村がある。
村の中央でひときわ目を惹くのが、巨大なマカライトの原石である。
これほどのサイズのものは非常に珍しい。

な「すごく大きいね～」

ヴィ「なんだよ、このでかさ…」

この原石は、村の象徴として祭られている。

この村が作られたのは数百年前。巨大マカライトに連なる、豊かな自然によって
かつては非常に栄えた鉱山村であった。
現在のポッケ村は、村の中央を温泉が流れる平和な村である。
鉱脈が絶えて以来、雪山を目指すハンターや湯治客がたまに訪れる程度である。

は「ちょっと待って！ハンターってなんや？」

カス「ハンターとはモンスターを倒して生計を立てている人達のこ

とだニャ！」

テ「その、モンスターってどんぐらい大きいんですか？」

カス「今までで一番大きなモンスターは、老山龍（ラオシャンロン）だニャ！」

ザフィ「ラオシャンロン…？」

カス「一言で表すのなら、動く山だニャ！あいつらが移動するだけで天災級の被害があちこちで起こるんだニャ！」

シャ「天災級の被害…」

な「どうやって倒すんですか、そんなモンスターを？」

カス「奴らの侵攻ルート上に砦を作って、そこで迎撃するんだニャ！」

シグ「砦を作らないと倒せないモンスター、ということか…」

「ちなみにラオシャンロンとかの古龍種のことを、時空管理局では特殊生体ロストロギアと呼んでいるぞ。知らなかったか？」

フェ「特殊生体ロストロギア！？」

は「聞いたことあらへん！」

「そか。今度から執務官の試験にこの問題だそうかな…」

カス「ここはポッケ農場だニャ！色々な植物や木の実、鉱石採集や釣りも
できるんだニャ！」

キャ「お花がいっぱい！」

エ「魚もいっぱいいますね」

その時一隻の小舟がやってきた。大荷物を抱えたアイルーが乗っている。

「お、トレニャーじゃないか！調子はどうだ？」

トレ「おお、ウィルさん！お久しぶりです。いや～なかなかいいものが取れましたよ」

フェ「ウィル？」

「ああ、こちらは様々な場所からトレジャーを持ってきてくれるトレニャーだ！」

トレ「普段はポッケ村でハンターからポイントをもらって、トレジャー
ハンティングをしているニャ！」

ヴィ「かっこいいな！」

トレ「ウィルさんはいつまでポッケ村にいるんだニャ？」

「しばらくいるからその時にまた来るよ」

トレ「わかったニャ！楽しみにしてるニャ！」

ス「あの、あそこにある洞窟は？」

カス「あれは爆弾を使って鉱石を集めるところだニャ！」

ギ「爆弾！？」

カス「やってみるかニャ？」

「久しぶりにやってみるか！はい、大タル爆弾Ｇ」

みんな「でかっ！」

爆弾アイルー「了解だニャ！」

導火線に火がついた大タルを抱えて、アイルーは洞窟の奥に消えていった。

数秒後、爆音と爆風と悲鳴がミックスしたものと一緒にアイルーが洞窟の奥から
吹っ飛んできた。

ス「えええええええ！！！」

ギ「大丈夫なんですか、あれ！？」

爆弾アイルー「だ、だいじょうぶ、だニャ…もんだい、ない、ニャ…」

フェ「いや、どう見てもだめだよね…」

爆弾アイルー「それよりも、とって、きた、ニャ…がくっ」

「おお、あんがとさん。おお、真鎧玉だ！それにエルトライト鉱石も！」

カス「よかったのニャ！」

は「あのさ、洞窟の奥に爆弾を置いてから火をつけた方がいいんとちゃう？」

そんなはやてのつぶやきは誰にも聞こえていなかった。

その後、武具屋とアイテム屋を見て回った。武具屋では店長とシグナムが
剣について熱く語り合っていた。
アイテム屋ではシャマルが回復薬の作り方とかが書いてある調合書を
1巻から5巻までまとめ買いしていた。

すずか「そう言えばなんでウィルはカスパーさんとかと知り合いなの？」

アリサ「そう言われれば確かに…」

「いや、以前この村の近くでウカムルバスっていうでかいモンスターが
大暴れしていてな。あれはひどかった」

カス「ウカムルバスのせいで幾つもの村が襲撃されたんだニャ！
そのせいで壊滅した村もあったんだニャ！」

ツ「壊滅ですか～！？」

ア「想像出来んな…」

「そこで俺と何人かのハンターで倒したのさ」

アギト「どうやってだよ！？」

「どうって、他のハンターと同じように防具を着て、武器を持ってだが？」

カ「さすがウィルさんですね！」

は「魔法は使わなかったんやな？」ひそひそ

「身体強化だけだよ」ひそひそ

カス「ウカムルバスの親戚ともいえるモンスター、アカムトルムというモンスターも強かったニャ！」

な「モンスターって、色々といるんだね…」

フェ「数えたらきりがなさそう…」

カス「ここが私の経営している『ホテル・アイルー』だニャ！」

みんなは村のはずれにある大きな建物の前までやってきた。

テ「うわー！すごーい！」

ア「雰囲気がいいな」

カス「それで部屋割りニャんですが、どうします？」

「えーっと、まずエリオとキャロとザフィーラとヴィヴィオが２０１号室で、

２０２号室の大部屋にははやてとヴォルケンズとリイン姉妹にアギト。

２０３号室はなのはとフェイトとアリサにすずか。２０４号室が

スバルと
　ギンガとティアナにカリム。んで２０５号室が俺とティーナ。これでいいな」

カス「了解なのニャ！」

な「ちょっと待つの！」

フェ「ウィル、一緒の部屋にしようよ、ねえ？」

は「ウィル君？そういう重要なことは勝手に決めたらあかんよ？」

アリサ「ウィル！私と寝なさい！」

すずか「わ、私も！」

「お前ら落ち着け～！！」

エ「やっぱりこうなりましたね」

ザフィ「想定の範囲内だから問題なかろう」

キャ「ですね」

「やっと解放された、はぁ。食事の前に温泉にでも入ろうかな」

ティ「そうしましょう！」

次回に続く…

第５２話：たまにはゆっくりと、その２（後書き）

今回はＭＨＰ２ｎｄＧをベースに書いています。

次回も続きます。

では

第５３話：たまにはゆっくりと、その３

～大浴場、男湯～

「はあああああ…」

エ「あああああああ…」

ザフィ「あああああああ…」

「やっぱ温泉は気持ちいいな～。疲れが消えていく～」

エ「ですね～」

ザフィ「ウィル、感謝するぞ」

「きにするな～」

～お隣、女湯～

ティ「ほかほか～」

な「む～、なんで混浴がないの！？」

フェ「なのは、落ち着いて…」

は「いい湯やな～」

ア「そうですね～主～」

シグ「疲れが取れますね～」

ヴィ「すげー広い！」

ツ「ヴィータちゃん、およいじゃ駄目ですよ！」

アギト「うるさいな～」

シャ「いい湯だわ～」

カ「この滝湯、というのに行ってこようかしら」

アリサ「私も！」

すずか「わたしはこっちでのんびりと～」

テ「きもちいいね～、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「ぽかぽか～♪」

キャ「エリオ君…」

ス「そんなにエリオと入りたかったんだ」

ギ「たまには男同士で風呂に入りたいんじゃないの？」

～男湯～

エ「そう言えばウィルさん」

「ん～？」

エ「ウィルさんはフェイトさん達と結婚するんですよね？」

「ああ、そうだけど？」

エ「ということは、僕とキャロのお父さんになりますよね！」

「そうだねえ」

エリオとキャロはフェイトが保護者だったんだっけ。

そのフェイトと結婚する俺は、あらお父さん。

エ「なので、これからはお父さん、って呼んでもいいですか？」

「もちろんだ、我が息子よ。それに敬語もいらんぞ。家族なんだからな」

エ「わかりまし、いや、わかったよお父さん！」

「いい子だ」

～女湯～

は「おっ！ここの壁に穴があいとる！」

ス「ほんとですか！？」

な「ここにもあるよ」

テ「これはもう男湯を覗くしかない！」

ギ「私にも見せてよ！」

ヴィ「だーっ！お前ら整列して時間決めてみればいいだろ！？」

みんな「はい」

な「じゃあ１人３０秒で交代ね」

覗き中

カ「やはりウィルさんは体が美しいですね～…」

は「そうやね～、あの筋肉、ええなあ」

な「はやてちゃん、交代だよ」

フェ「エリオも成長したな～」

ヴィ「ザフィーラは…変わらねえな」

シグ「お前もな」

ヴィ「おいウシチチ野郎、喧嘩売ってんのか？」

シャ「まあまあヴィータちゃん落ち着いて」

ヴィ「お前にも言われたくねー！！」

以前ウィルがヴォルケンズとはやてとフェイトにあげた栄養剤でバストがでかくなったが、その後フェイトはどんどん大きくなり、今では立派な乳になっている。しかし、ヴィータは相変わらずつるぺたーんなのである。

ヴィ「なんであたしだけ…」

ツ「やっぱりそれ以上成長しないのではないですか～？」

ヴィ「ツうううううヴァイちゃあああああああああん？いっぺん死んでみる？」

ツ「ひいいいいいい！！」

～男湯～

ザフィ「なんか向こうは騒がしいな」

「女は風呂に入る時も静かにできないのか、やれやれ」

エ「僕はそろそろでますね」

「じゃあ俺も出るか。のぼせちまう」

ザフィ「そうだな」

「飯だ！」

ティ「飯だ！」

ス、ギ、エ「飯だ！！」

シグ「お前ら黙れ」

ヴィ「にしても、すごい料理ばっかだな」

フェ「食べきれるかな？」

目の前には山盛りの、しかもおいしそうな料理がずらり。

「じゃあ、はやて、乾杯の音頭を頼む」

は「ええ！うち？えーっと、みんなお仕事お疲れさん。ウィル君のおかげで
２週間も休みがもらえたから、ぱーっと遊びましょう！乾杯！」

みんな「かんぱーい！」

ス「おいしー！！」

ヴィ「ほんとだ、うまい！」

な「どうやったらこんなにおいしい料理が…」

ヴィヴィオ「おいしー♪」

フェ「いっぱい食べてね、ヴィヴィオ」

シャ「この料理の味付け方、なんかウィル君の料理と似ている気が…」

「そりゃそうだ。俺はここで料理を学んだんだからな！」

みんな「な、なんだって～！」

「ですよね、料理長？」

？？？「その通りだニャ！」

そこにはエプロンを着て鉢巻きを巻いているアイルーが。

マックス「私は料理長のマックスだニャ！ウィルさんに料理を教えたのも私だニャ！」

カ「なんでウィルさんは料理を？」

「いやね、前ここに来た時料理を食べて感動しちゃってさ。ぜひ教えて下さいって
　頼み込んで教えてもらったんだ」

マ「ウィルさんは覚えが良くて、あっという間にマスターしたんだニャ！」

アリサ「やっぱウィルはすげー」

すずか「それ今さら？」

楽しいご飯の時間も過ぎ、風呂にも入って、さあ寝るかといったころに
再び問題が発生する。

な「さて、みんな集まったね？」

フェ「じゃあ決めようか？」

みんな「誰がウィル（君）（さん）と一緒に寝るか！」

「あの、俺に拒否権は」

みんな「あるわけないよ？」

「はい」

シグ「なあ、休暇は2週間あるのだから、毎日違う人と寝ればいいんじゃないか？」

ヴィ「その手があったか！」

シャ「是非そうしましょう！」

ス「じゃあ順番はどうします？」

は「ここは部隊長のうちが一番で」

テ「そういうのよくないですよ！」

ギ「ここは公平にじゃんけんにしません？」

カ「それが一番平和的かつ安全ですね」

な「ではじゃんけんにしよう！」

みんな「さーいしょはグー！「パーッ！」え！？」

は「やった！うちがいちばんぐえっ！」どさっ

シグ「…（無言で首に手刀）」

ヴィ「はやて、ずるはいけないよ」

フェ「じゃあ、気を取りなおして」

みんな「じゃんけんポイッ！」

結果

スバル、カリム、なのは、ヴィータ、ティアナ、シャマル、ギンガ、アリサ、
シグナム、すずか、フェイト、はやての順番に。

は「ひどい！」

「お前はずるしたから自動的にびりっけつだ！」

は「うえええええん！」

自業自得というやつですな。

その日の夜、ウィリアムの部屋。

ス「えへへ、この下着でウィルさんをメロメロに…」

「聞こえてるぞ？」

ス「うひゃい！」

「俺はもうスバルにメロメロだよ…」

ス「ウィルさん…その」

「ん？」

ス「あまり、激しくしないでくださいね？前の時は次の日動けなくなっちゃったんですから」

「了解。ほどほどにしとくよ」

あは～ん、うふ～んタイム！

次の日

ギ「昨日はお楽しみだったみたいね、スバル？」

ス「ええ！？な、なんのことかなギン姉？」

ギ「ごまかしても無駄なんだからね！昨日はヤったんでしょ！？」

ス「なななんでばれたの？」

ギ「あんたがガニ股で歩いているからよ！」

ス「えええええ!!こ、これはウィルさんのア、アレが大きいからだよ／／／」

ギ「やっぱりヤったのね！キーッ！」

「朝からはしたない会話するなよ、まったく」

ティ「ですよね～」

第５３話：たまにはゆっくりと、その３（後書き）

就職活動にも響いていますね、あの地震。
原子炉がチェルノブイリってるし、町一つ津波に流されるし。
本当に自然の力って恐ろしいですよね。
復旧にはかなりの時間とお金がかかるでしょう。
いやー、都心に住んでて良かった。

次回も続きます。
では

第５４話：たまにはゆっくりと、その４

「ポッケ」に来てから5日が過ぎた朝。

「ポッケ」の衛星、「アイオス」。
そこにある管理局の秘密ドックから1隻の宇宙船が飛び立った。
なのは達一行が乗ってきたＪタイプ外交バージ（ナブー・ロイヤル・クルーザー）である。

この船はウィリアムから通信を受けたエディィが操縦していた。
その中にはウィリアム？が乗っていた。

そしてハイパースペースに突入していった…

「そうだ、狩りに行こう」

ギ「え？」

5日目の朝、ご飯を食べながら俺はそんなことを言った。

エ「狩りって、モンスターを？」

「もちろんだ。他に何を狩るんだよ？」

カス「おっ！ウィルさんのハンター姿がまた見れるのかニャ！？」

ティ「私もやりたいな！」

マ「おお！あのコンビが復活だニャ！」

な「コンビ？」

カス「ウィルさんとティーナさんは二人でいつもクエストに行ってんだニャ。

その時の二人の戦い方から、『煙と風のコンビ』と呼ばれるように

なったんだニャ！」

シグ「なんでそんなあだ名が？」

マ「シグナムさん、でしたかニャ？あなたは剣を使うそうですが、煙を斬ることはできますかニャ？」

シグ「煙を？いやそれは無理だ」

マ「その通りだニャ。煙に攻撃しても効果はないのニャ。それと同じように
　モンスターがウィルさんに攻撃しても全部避けられちゃうのニャ。
　まるで煙のように！」

フェ「ティーナちゃんは『風』だっけ？」

カス「そうだニャ。ティーナさんは風のように素早い攻撃であっという間に
　モンスターを血祭りに上げるのニャ！だから『風』なのニャ！」

ヴィ「すげーなー…」

「あ、でも俺たちギルドに立ち入り禁止だったんだっけ？」

カス「それならもうとっくに解除されているニャ！」

ティ「なら問題ないの！」

は「あの、なんで立ち入り禁止になったん？」

「農場に採掘ポイントがあったの覚えているか？」

ツ「あの岩の亀裂の所ですね！」

ア「この前ピッケルで岩肌を掘っていたな」

「そうそう、それが原因」

みんな「ん？」

すずか「ごめん、よくわからない」

ティ「火山に行っていい鉱石を探していたんだけど、なかなか出なかったの」

「で、キレて身体強化魔法をフルでかけて、しかもナノスーツの能力も使って
思いっきりピッケルで岩肌を叩いたんだ」

アリサ「それはやりすぎじゃないの！」

「まあまあ。そしたら欲しかった鉱石が出てきたんだよ。あれはうれしかったね」

ティ「それで帰ろうとしたら、さっき思いっきり叩いた所から亀裂が広がって
マグマがドバーッ！っとあふれてきちゃったわけよ！」

みんな「」

「おまけに天井まで崩れ始めてさ、もう大変だったんだから。結局俺たちは
麓まで全力で逃げて船に乗ってトンズラしたわけなんだが」

カス「火山エリアはしばらく人が入れなくなっちゃったのニャ」

マ「で、それをやらかしたウィルさんとティーナさんに立ち入り禁止令が
出たんだニャ」

ス「ひでえ」

キャ「今その火山は？」

マ「もう人が入っても問題ないニャ。亀裂はふさがったし、マグマも固まった
からニャ」

アギト「で、その火山にはどんなモンスターがいるんだ？」

カス「ん～っと、色々いるからギルドに行って確かめるといいニャ」

「じゃ、食い終わったら行くか」

～ポッケ村、集会所～

？？？「あらウィルさん。お久しぶりね」

ウィルたちが集会所に入ると、左手にいた女性が声をかけてきた。

「あんたも元気そうだな」

な「ウィル君、この人は？」

「ああ、この人はギルドマネージャーだ。この集会所を取り仕切っている」

ギルマネ「どうも～。それでウィルさん、今日は？」

「ああ、俺とティーナの立ち入り禁止令が解除されていると聞いてね、
ちょっと狩りに行こうかなと」

ギルマネ「いいわよ。カウンターでクエストを受注してね」

ティ「ありがとうなの！」

ウィルとティーナは迷わずG級クエストの受付に行った。

な「あの、マネージャーさん。なんで受付が3つあるんですか？」

ギルマネ「あれはクエストの難易度と、ハンターランクによって分けられているの。左が下位クエスト、真ん中が上位クエスト、そして今ウィルさんとティーナさんがいる右側がG級クエストよ」

シャ「G級？」

ギルマネ「まあ分かりやすく言えば、手ごわいモンスターしかいないわね」

ザフィ「して、ハンターランクとは？」

ギルマネ「ハンターとしての実力を示す値、と言ったところかしら。これを上げていくとどんどん上のクエストが受けられるの」

カ「ウィルさんのランクは幾つなんですか？」

ギルマネ「ウィルさんとティーナさんは最高ランクの9よ」

ヴィヴィオ「パパすごーい」

「なあ、ちょっといいか？」

は「ん?どしたん?」

「いやな、クエストには4人までしか来れないんだ。だから俺とティーナ以外に
あと二人ついて来れるんだが、どうする?ああ、エリオとキャロ、ヴィヴィオは
危険すぎるから駄目だぞ」

エ、キャ、ヴィヴィオ「ぶー」

ティ「できればシグナムちゃんとヴィータちゃんがいいんだけど」

シグ「なぜ私とヴィータなんだ?」

「お前らの使っている武器がこっちの武器と似ているから、多分ばれない。
それに戦闘慣れしているから大丈夫かなと」

は「シグナム、ヴィータ!行ってきな!」

シグ「主、よろしいので?」

は「ウィル君のご指名なんだから文句は言わん!」

な「私たちは何しようか?」

ティ「それなら…」

～塔、エリア１～

そこにはウィリアムとティーナ、シグナムにヴィータがフル装備でたたずんでいた。目の前には、どでかい銀火竜。

「行くぞ！！」

ティ「了解！！」

ウィリアムは大剣を、ティーナは双剣を構えて突っ込んでいった。シグナムとヴィータは後方で待機している。初めてのモンスター戦だからね。

ウィリアムの装備

防具
カイザーXクラウン
カイザーXメイル
ギザミUアーム
ギザミZフォールド
ギザミZグリーヴ

発動スキル（スロットに色々入れて）
業物
砥石使用高速化
見切り＋1
斬れ味レベル＋1

武器
召雷剣【麒麟帝】

ティーナの装備

防具
キリンXホーン
ナルガXメイル
キリンXアームロング
キリンXフープ
キリンXレガース

発動スキル（スロットに色々入れて）
ランナー

回避性能＋1
精霊の加護
属性攻撃強化
砥石使用高速化

武器
双龍神【黒天白夜】

その上空で1機の小型ヘリが飛んでいて、カメラでウィルたちをとらえていた。
その映像は「ホテル・アイルー」の大広間のテレビに映っていた。

な「あれがモンスター…」

カ「見た目はきれいですけど…」

シャ「ごついですね～」

フェ「あんな大きいモンスターに勝てるの？」

カス「心配いらないニャ！」

すずか「でもね～」

アリサ「ウィルのことが信用できないわけじゃないんだけど、どうやって
　　あんな怪物を倒せるのよ！？」

マ「見ていればわかるニャ」

「まずは閃光玉をぽいっとな」

銀「ギャアアア！！（訳：目が！目が～！！）」

ティ「うおりゃあああ！！」

ティーナは鬼人化状態になり、乱舞での攻撃を開始した。乱舞はその場から
動かないため一点集中攻撃となり、敵の弱点属性を突くと高い火力を発揮できる。

右足を集中攻撃しているティーナの反対側では、ウィリアムが大剣で3段溜め攻撃を左翼にしていた。大きな隙が出来てしまうが1発の威力が
とても大きい溜め攻撃のおかげで、左翼の部位破壊が完了した。

銀「ギャアアア！！（訳：俺の翼が！よくもやりやがったな！）」

閃光玉タイムが終了したので銀レウスはキレた。そしてでかい尻尾を振り回して俺たちを吹き飛ばそうとした。が、俺は大剣でガードし、ティーナは横に飛んで避けた。

フェ「すごい…」

すずか「ほんとに敵の攻撃が当たらないね…」

カス「まだまだだニャ。二人は本気を出していないニャ」

は「あれで本気じゃないっていうんかい！？」

ヴィヴィオ「パパかっこいい～」

エリオ「お父さん、すごい…」

キャ「そうだね」

「シグナム！その辺にシビレ罠を仕掛けろ！」

シグ「分かった」

後ろで待機していたシグナムはシビレ罠を仕掛けた。

ヴィ「ウィル！仕掛けたぞ！」

「よし、こっちにこい、クソレウス！」

銀「ギャアアアア！！（訳：挑発してんじゃねえ、この野郎！）」

ドスドス言いながらシビレ罠に突っ込んできたレウスはびりびりしている。

「ティーナ、本気出せ」

ティ「はあああああ！！！！」

ティーナは全速力で銀レウスに突っ込んでいった。そして銀レウスの右翼を
破壊して、そのまま尻尾もちょん切った。その間、わずか3秒。

ヴィ「え？」

シグ「なに？」

銀「グルル？（訳：あれ？俺のしっぽねえし）」

アギト「いつ切ったんだよ!?」

ツ「早すぎて見えなかったです」

ア「これが『風』ということか」

カス「そういうことだニャ！」

アリサ「まじぱねぇ」

銀「ギャアアアア！！ギャアアアア！！（訳：これはまずい！俺死ぬんじゃね？）」

「お、そろそろかな」

ティ「だね」

銀レウスは足を引きずりながらも戦おうとしている。
そして火の弾を3発、口から発射した。

「あらよっと」

俺はそれらを華麗に避けつつレウスに近づき、大剣で頭を破壊した。

銀「ギャアアアア！！（訳：もうやだ！お家に帰りたい！！）」

銀レウスが逃げたがっている。
逃がしますか？

はい

いいえ↑

「逃げんじゃねえよ！」

俺はまた閃光玉でレウスの視界をふさぎ、その間にティーナがレウスの足元に
シビレ罠を仕掛ける。そしてビリっているレウスに捕獲用麻酔玉を幾つも当てると、
銀レウスは遂に眠った。

銀「グ、グウ…（訳：ままー…）」

「終わった～」

ティ「た～」

シグ「これがモンスターとハンターの戦いか…」

ヴィ「半端ないな」

フェ「ウィルが勝ったの？」

カス「このクエストはモンスターを倒すか、捕獲すればおしまいだニャ」

アリサ「やっぱりウィルは凄いわね」

マ「今日は『煙と風のコンビ』復活を祝って宴会だニャ！」

カス「それはいい考えだニャ！さっそく準備だニャ！」

こうして銀レウスを引きずって帰ってきたウィルとティーナはみんなと一緒に
朝まで宴会をし続けたそうな。

テ「今夜は私と一緒に寝るはずだったのに…ぐすん」

「明日は一緒に寝ような？」

テ「はい！」

第５４話：たまにはゆっくりと、その４（後書き）

銀レウスを捕獲しました。

これを書く前に、久しぶりにＭＨＰ２ｎｄＧをやったらめっちゃ死にましたね。

腕がかなり落ちました。１，０００時間以上プレイしたのに…

次回も続きます。

では

第５５話：たまにはゆっくりと、その５

～地上本部、技術研究部門～

ジェ「ここをこうすれば…フフフ」

プレ「ここもこうしましょう…フフフ」

ジェ、プレ「フフフハハハハハ…」

ウーノ、アリ「何変な笑い方してんの（ですか）！」べしっ

ジェ「いたっ！」

プレ「アリシア、ちょっと痛いわよ」

アリ「真面目に仕事してよ！すずかさんがいなくて忙しいんだから」

ウ「そうですよ、ドクター」

ジェ「わかったよ、ウーノ。早くウィルたち帰ってこないかな」

と、ぼやいていると。

「ジェイル！プレシアとアリシア借りるぞ！」

ウ「ウィルさん？旅行中では？っていうか借りるって？」

「そのままの意味だよ。プレシアとアリシアは今日から3日間休暇です」

プレ「え？」

「なに、ちょっとしたサプライズだよ。てことでジェイル、あとはまかせたぜ！」

アリ「ちょ！引きずらないで～」

ウィリアム？はプレシアとアリシアの手を引っ張って行ってしまった。

ジェ「…これでもっと忙しくなるね」

ウ「残念ながら」

ジェ、ウ「はぁ…」

その後も。

「ティーダ！局長命令だ！3日間休暇だ！それで…ごにょごにょ」

ティーダ「えええええ！！」

「ゲンヤさん、クイントさん、今日から3日間休暇ですので、ごにょごにょ」

ゲンヤ「それはいいな」

クイント「賛成よ！」

本局、無限書庫

「ユーノ！アルフ！お前ら今日から3日間休みだ！それで…ごにょごにょ」

ユ「いいねえ、その話乗った！」

アルフ「あたしも乗った！」

場所は変わって地球、日本、海鳴市、翠屋。

「士朗さん、お久しぶりです。実はですね、ごにょごにょ」

士朗「それはおもしろそうだね」

桃子「たまにはそういうのも悪くないわね！」

ウィリアム？に誘われた何人かの人たちは、初めて見るＪタイプ外交バージ
（ナブー・ロイヤル・クルーザー）に乗り込んで目的地に飛んで行った。

～その頃のポッケ村～

ヴィヴィオ「パパ～、釣れたよ～」

「おっ、小金魚だ！すごいじゃないか」

ヴィヴィオ「やったー！」

俺とティーナ、エリオ、キャロ、ヴィヴィオは農場で釣りをしていた。

エ「お父さん、これはなんていう魚？」

「それはバクレツアロワナだな」

ティ「今よキャロちゃん！撃って！」

キャロとティーナは隣の投網マシーンを使っている。
でかい音と共に網が発射され、魚群に向かって落ちていった。

キャ「重い、です、ね」

ティ「てことは、いっぱい、魚が、いるってことよ」

二人で苦労して引き揚げた網には、大量の魚が掛かっていた。

ティ「おお、古代魚だ！キャロちゃんやるぅ！」

キャ「わーい！ん？」

カエル「ゲコッ！」

喜ぶキャロの頭にカエルが乗っかっていた。

「あ、オオシッポガエルだな」

キャ「かかかかかかか」

エ「キャロ？」

キャ「カエルいやあああああ！！！！」

キャロは頭に乗っかっていたカエルをひっつかむと思いっきり遠くに放り投げた。

カエル「ゲコ～…」きらーん

ヴィヴィオ「ばいばい、カエルさ～ん」

ティ「あーあ…」

「カエルかわいそす」

一方、なのは達は。

な「次はこのお肌がすべすべになる温泉なの！」

フェ「行こう！」

は「行くで！」

アリサ「ちょっと待ちなさいよ～」

すずか「待ってよ～」

この５人は温泉に入りまくり。

シグ「はあああああ！！」

ヴィ「うらあああああ！！」

教官「ほう！あんたら女にしちゃあいい腕じゃないか！気に入ったぜ！」

シグナムとヴィータは何故か訓練場でハンターとしての訓練を受けていて。

シャ「こうかしら？」

ザフィ「」

シャマルは購入した調合書をもとに色々な物を作ってはザフィーラで試していた。

武具屋「で、このボウガンの特徴は…」

テ「なるほど…」

武具屋のアイルー「近距離戦が得意なら、ガードもできる片手剣とかが
お勧めだニャ！」

ス「斬りながらガードもできるんだ」

ギ「それにしても色々な武器があるわね」

ティアナとスバルにギンガは武具屋で武器を眺めていた。

カ「なんでこんなに可愛いのかしら！」

ツ「かわいいです～♪」

アギト「だな！」

ア「一家に一匹欲しいな」

アイルーA「ちょ！潰れちゃうニャ～」

アイルーB「助けてニャ～」

カリムとリイン姉妹にアギトは村にいたアイルーと戯れていた。

まあ、今日もポッケ村はいたって平和であった、うん。

昼食中。

な「お肌がすべすべ～♪」

フェ「すべすべ～♪」

は「体の芯からぽかぽかや～♪」

アリサ「温泉に入りすぎてふやけた～」

すずか「わたしも～」

シグ「その魚はヴィヴィオが釣ったのか。すごいじゃないか」

ヴィヴィオ「ありがとーシグナムママ」

ヴィ「エリオとキャロも大量だったらしいじゃないか」

エ「ええ。でも途中でキャロが…」

キャ「エリオ君？それ以上言ったらＯＨＡＮＡＳＨＩだよ？」

エ「キャロモタイリョウデシタヨ、ハイ」

ヴィ「？」

「それでそっちの訓練はどうだったよ？」

ヴィ「魔法を使わない訓練としては最高だったぞ！」

「そっかあ、それじゃあ戻ったら訓練に組み込んでみようかな」

テ「にしてもあの大きな武器はすごかったわね～」

ス「えーっと老山龍砲・極だっけ？ヘヴィボウガンとか言ってたね」

ギ「あんな大きなボウガンでないと倒せないモンスターもいるってことよね」

ティ「そういえばザフィーラは？」

シャ「…」

「確かシャマルと一緒にいた気が…」

シャ「じ、実はザフィーラったらちょっと気分が悪いとかで部屋で寝ているわ」

「そか、あとで様子見てみよう」

カ「ウィルさん！」

「なんだよ、カリム？」

ツ「是非アイルーを一匹！」

ア「欲しいんだが！」

アギト「頼むよ！」

ティ「そんなにアイルーが気に入ったのか」

カ、ツ、ア、アギト「はい！」

「でもな、この星のルール上、個人でアイルーを買うことは合法なんだが」

カ、ツ、ア、アギト「やった！」

ティ「この星の外には持っていけないの」

カ、ツ、ア、アギト「」がーん

「てことであきらめてくれ」

午後。
訓練を終えたシグナムとヴィータは村長クエストを受けて雪山に行った。
なんでもポポノタンを3つ手に入れることが条件だとか。
午前中に釣りをしていた俺たち5人は温泉につかっていた。

「どうだザフィーラ。少しは気分良くなったか？」

ザフィ「…なんとかな」

ティ「何があったの？シャマルちゃんは気分がよくないっていってたけど」

ザフィ「シャアアアアマアアアアルウウウウウウ！！！！」

ヴィヴィオ「ひい！」

エ「どうしたんですか！？」

ザフィ「あいつに…あいつが…」

キャ「よくわかんないです」

「要するにシャマルが何かやらかしたと」

ザフィ「…なんか本を読みながら調合をしたものを俺に飲ませたんだ。

そしたら急に気分が悪くなって…」

ティ「何色だった？」

ザフィ「緑色だったな」

「それって回復薬じゃないか」

キャ「でも回復してませんよね」

エ「シャマルさん、恐るべし！」

ヴィヴィオ「？」

その時、カスパーがすっ飛んできた。

カス「ウィルさん！大変だニャ！」

「どした？」

カス「雪山にいる古龍観測局局員からの報告でティガレックスが現れたらしいニャ！」

ティ「ティガ？それなら問題ないんじゃないの？」

カス「問題ニャのは、今雪山にシグナムさんとヴィータさんがいるということニャ！」

「げっ！ティーナ行くぞ！」

ティ「わかったの！」

～雪山～

シグ「このポポと言う生き物はどこにいるんだ？」

ヴィ「さみーよ、早く見つけて帰ろうぜ」がたがた

二人は雪山のエリア７にいた。あちこち回ってきたが、なかなか見つからない。

シグ「あとはこのエリア８だけか、行くぞ」

その隣のエリア６。ここに一匹のモンスターがいた。

そのモンスターはお腹が減っていた、かなり。

せっかく砂漠から飯を食べに来たのに、大好物のポポがどこにもいない。

そのせいでそのモンスターはイライラしていた。

そのモンスターは、山頂に行ってもポポがいなかったら諦めて帰ろうと思っていた。

そのモンスターは、肉食恐竜を彷彿とさせるような鋭い牙と足の爪

が特徴的だった。

ヴィ「シグナム、あれじゃねえか？」

シグ「お、そうみたいだな。じゃあさっそく」

山頂付近で3匹のポポを見つけた二人は、ポポを倒してポポノタンを手に入れた。

シグ「これであとはベースキャンプに戻って赤い箱に納めればクエスト完了だな」

ヴィ「そだな。じゃあ…」

その時、ヴィータは何かの気配を感じてシグナムを掴んで横に飛ん

だ。
その1秒後、さっきまで二人がいたところにでかいモンスターがいた。

シグ「なっ！？」

ヴィ「おいおい、冗談だろ？」

二人の前にいたのは、轟竜ティガレックス、通称「ティガ」だった。
そのティガが大きな口を開けてすさまじい咆哮をした瞬間、
二人は後ろに吹っ飛ばされた。

シグ「なんだ、あの咆哮は？あれも攻撃なのか？」

ヴィ「いてて、それよりもどうするよ？かなり怒ってるみたいだぞ？」

よく見るとティガレックスの前足が真っ赤になっており、怒り状態なのが分かる。

ティガレックスは完全にキレていた。
せっかく大好きなポポを見つけたと思っていたら、人間が倒していて、
しかも一番おいしい部分のポポノタンを持っているではないか！
人間様が俺の大好物を横取りしやがって！
お前ら、生きてこの山から下りられると思うなよ！

そんな思いを胸に、ティガレックスは二人に向かって攻撃を始めた。

～雪山ベースキャンプ～

「ティーナ、強走薬グレート！」

ティ「はい！」

「まずい！もう一杯！」

ティ「そのネタはいいよ！」

「まあいい、ダッシュだ！」

続く…

第５５話：たまにはゆっくりと、その５（後書き）

シグナムとヴィータがハンターデビューです。
そしていきなりピンチに。

次回はティガとの戦闘です。
では

第５６話：たまにはゆっくりと、その６

前回、雪山でティガと遭遇してしまったシグナム&ヴィータ。

ヴィ「うらあああああ！！」

シグ「ヴィータ！」

ヴィータはハンマーを振りかざして突っ込んでいった。そして左前脚を
何度も殴ったが。

ヴィ「かてえ！」

初期装備の武器ではそうなるだろうね～。

シグ「はあああああ！！」

シグナムも負けじと太刀をふるうが、やはり効果はないようだ。
それどころか。

シグ「おい！この武器壊れたぞ！？」

ヴィ「はあああ！？」

なんと太刀が折れてしまった。咄嗟に自分の相棒であるレヴァンティンを使おうかと
考えたが、

「くれぐれもクエスト中に魔法とかを使ってくれるなよ？」

というウィルの言葉を思いだしたので自重した。

そうこうしているうちに起こっているティガが地面から3つほど岩を掘りだして
二人に向けて投げた。

シグナムは回避できたが、ヴィータはもろに食らって吹っ飛ぶ。

ヴィ「きゅう～」↑気絶

シグ「おいヴィータ！？」

仲間は気絶し、目の前にはモンスター。そして手元には使えない武器。

シグ「…詰んだｏｒｚ」

～集会所～

ハンターA「おいおい、あの姉ちゃんまずくねえか？」

ハンターB「腕はなかなかのものだが、装備がよくないな」

ハンターA「というか武器壊れてるし」

な「そんな…」

二人の様子を例によって小型ヘリで観察中のみんなである。

は「誰か二人を助けて～な！」

ギルマネ「そろそろウィルさんとティーナちゃんが着くころだと思うけど～」

ハンターB「あの『煙と風のコンビ』が！？」

ハンターA「復活したのか！」

ギ「みなさん、よくご存じなんですね」

ハンターB「当たり前だ！この星で彼らの名前を知らないやつはい

ねえだろうよ！」

フェ「どんだけ有名なんだ…」

～雪山～

二人とも絶体絶命！

と、その時。

「シグナム！ヴィータ！」

ティ「助けに来たわよ！」

シグナムの耳に大好きなあの人の声が聞こえてきた。

シグ「遅いぞ、ウィ…ル…？」

後ろを振り返ったシグナムは目を疑う。

「？どうした？」

シグ「いや、その…なんだ、その格好は？」

～集会所～

ここでもウィルの恰好が映し出されていた。

な「ウィル君、なんて恰好なの…」

ハンターA「ははははははは！！さすがウィルさんだ！」

ハンターB「ふっ、これだからハンターはやめられない！」

シャ「な…」

アリサ「なんでよ！」

ハンターA「あの恰好でティガに勝つに５０賭けるぜ！」

ハンターB「じゃあ俺は１００だ！」

見物していたハンターたちは賭けを始めた。

カ「あの人たちは置いておくとして」

カリムはモニターに映っているウィルを見た。

カ「なんであの人はあんな恰好で雪山にいるんでしょうね？」

すずか「さぁ…本人に聞いてみないことには」

～雪山～

さて、ウィルがどんな格好をしているのか。
少し時間を戻してみよう。

カスパーがすっ飛んできたのは、ウィルが温泉にいた時だった。
そしてウィルは自分の部屋にあるボックスからはみ出していた武器をひっつかんで、強走薬グレートをティーナからもらって山頂まで走ってきた。

つまり現在の彼の装備は。

防具

なし（腰のタオルのみ）

武器

夜天連刃【黒翼】

発動スキル

なし

以上である。

シグ「…で、寒くないのか？」

「強走薬飲んでるから寒さを感じない！」

ティ「感覚が既にイカれてるから問題ないの！」

シグ「いやそれは問題だろ」

ティーナはぐったりしているヴィータを抱えている。

ティ「シグナムちゃん！こっちに！」

シグ「ウィルは？」

「あいつを倒すさ」

俺は双剣を背中から抜くとティガに突っ込んでいった。

ティガもまた、俺の方に突進してくる。

ティガは勝ったと思っていた。
二人のうち1人は気絶しているし、もう1人も武器が壊れている。
さあ、早く倒してポポノタンを食べるんだ！
と思っていたが、そこにもう二人の人間がやってきた。
そのなかにいた男と目があった時に、ティガは思わず後ろに足を下げてしまった。
…なんだ、あの男は？今までのハンターとは違う、そんな気がする。
できれば今のうちに逃げたほうがいい、心の中で正気の声がそう告げていた。
いや、俺はティガレックス！こんなことで逃げるなんて恥だ！
そして男が武器を構えて突っ込んでくるのを見て、ティガも突進した。
これでお前の負けだ！

ティガとウィルの姿か交差する。

そして。

何かが砕ける音と、何かが落ちる音が聞こえた。

ティガは今度こそ勝ったと思っていた。
鋭い牙であの男の首を食いちぎったと思っていた。
が、その瞬間男が消え、牙は空を切っただけだった。

どこに行きやがった？

後ろを振り返ろうとしたが、その時、

その自慢の牙が砕けた。

は？

とティガが自分の牙を確かめようと前足を口に持っていったが、
その時両前足の爪も砕けていることに気が付き、さらに後ろを振り返ると
自分のしっぽまで地面に落ちているではないか。

おいおいおいおい、これはまずい。
冗談じゃない。こんなにひどくやられたことは初めてだ！

ちょっと待ってくれよ。

ティガは心からそう思った。

だが男は待ってはくれなかった。

～集会所～

そこではたくさんの人がウィルの攻撃を見ていた。

ハンターA「すげぇ…」

ハンターB「あの攻撃を避けて、さらに一瞬で全部位破壊もするなんて…」

カス「さすがウィルさんだニャ！」

ス「あっという間だね…」

テ「というかあんな恰好でよく戦えるわね」

～雪山～

「さて、とどめをさすか…」

俺は双剣を逆手に持って構えた。

シグ「なんだ、あの構えは？」

ティ「あ！ご主人様の必殺技！」

ヴィ「なんだって！？」

いつの間にかヴィータが復活していた。

ティガはボロボロになりながらも再びウィルに突進していく。

「いくぞ！これぞ双剣の奥義！」

「双剣キック！！」

ティガ「ギャン！！」

シグ「は？」

「まだだ！双剣アッパーカット！！」

ティガ「グエッ！！」

ヴィ「え？」

「そして！双剣バズーカ！！」

ティガ「ギャアアア！！！」

な「は？」

「これで最後だ！双剣クラアアアアッシュ！！！」

ティガ「ギャアアアア！！！」

ティガレックスは岩肌に叩きつけられて動かなくなった。

「あーあ疲れた」

ティ「さすがご主人様！」

～集会所～

さっきまで活気にあふれていた集会所は、今沈黙に包まれている。
そんななか。

ギ「…あのさ」

ハンターA「言うな、お譲ちゃん」

ギンガが言いたいことをなんとなく把握したハンターAはそう言った。

ツ「でもでも！あれは…」

ハンターB「言っちゃだめだって！」

ツヴァイが何か言いそうにしていたのでハンターBも同じくそう言

った。

アリサ「あれじゃ双剣意味ないじゃない！」

ハンターズ「言っちゃだめだって！」

ハンターA「俺たちもいつもそう思っているけどよ」

ハンターB「なんだかんだあの技は最強だから誰も突っ込まないんだ」

ギルマネ「まあ、初めて見た人は必ずそう言うわよね～」

その後、強走薬の効果が切れて凍え死にそうになったのは内緒である。

～ホテル・アイルー、夜～

「よーし、じゃあみんなついてきてくれ」

と言いながら俺は宴会場の方へ足を運ぶ。

な「今日は宴会なの？」

ティ「んふふ～着いてからのお楽しみなの！」

ス「ごはん♪ごはん♪」

ギ「あんたはご飯のことしか考えていないの？」

エ「ギンガさんもでしょ？」

キャ「エリオ君もね」

「さて、カスパー、いいぞ」

カス「了解だニャ！オープンセサミ！」

カスパーが謎の呪文を唱えると、目の前の扉があき宴会場が現れた。

そしてそこには。

士朗「お、なのは。元気にしてたか？」

桃子「このアイルーかわいい～♪」

美由希「かわいい～♪」

恭也「なのは！久しぶりだな！」

忍「やっぽーすずか！」

な「えええええええ！！！」

すずか「お姉ちゃん！？ドイツにいたんじゃ？」

ティーダ「ティアナ！」

テ「お兄ちゃん！？」

ゲンヤ「スバル、ギンガ、ここはいい所だな」

クイント「久しぶりの温泉、いいわね～」

ス、ギ「お父さんにお母さん！？」

プレ「フェイト、元気そうで何よりだわ」

アリ「温泉サイコー！」

フェ「お母さん!?それに姉さんまで!?」

ユ「やあはやて」

は「ユーノ君までいる!?」

アルフ「私もいるぞ！」

ザフィ「アルフか。久しいな」

は「どういうことや！」

「どうって、サプライズゲストといったところかな。まあ、家族水入らずで
楽しんでちょうだいな」

士朗「ん?そういえば、ウィル君はなんでここに?」

プレ「あら、そうね。ここにいるのは誰?」

サプライズゲストのみなさんの後ろには、

シグ「あれ?」

エ「もう1人お父さんがいる！」

もう1人の俺がいた。

「よう俺。任務ご苦労だったな」

「なに、気にするな俺。それじゃこのへんで」

そう言った瞬間、ウィルは消え、残ったのは人形だけだった。

ヴィ「これって確かスキルニル、だったっけ？」

「そそ、分身を作るマジックアイテムだな」

アリ「その分身が私たちを集めてここまで連れてきたのね？」

ティ「アリシアちゃん正解！」

「さあ、今日は騒ぐぞー！」

みんな「おーっ！」

～3時間後～

まだ起きているのは俺、ザフィーラ、士朗さん、ゲンヤさん、クイントさん、
ティーダ、そしてプレシアさんだけだった。他のみんなは途中で寝たり倒れたりしたので、
俺とザフィーラとで部屋に運んだ。

「いやはや疲れた」

士朗「お疲れ様」

プレ「そう言えばウィル君。エリオ君とキャロちゃんだったかしら？
　フェイトが保護者なんですってね？」

「そうですよ。だからフェイトは二人のお母さんですね」

プレ「その二人があなたのことをお父さんって呼んでいたのだけど？」

「あー」

士朗「ん？それってつまり」

「まあ、そういうことです。っていうか知らなかったんですか？」

ゲンヤ「何をだ？」

クイント「なるほどそういうことね」

さすがに女性はすぐわかるか。

「…2週間前にその、みんなからプロポーズされたので」

ティーダ「みんな？ってことはティアナもか？」

「ああ」

ザフィ「なんというハーレム」

「それは言っちゃだめだ」

俺は姿勢を正して家族ズの方を向き、

「順序は間違っていることは承知の上ですが、私に娘さんを下さい」

そう言って頭を下げた。

士朗「ウィル君、顔をあげてくれ。8年前になのはが入院した時、
君の言葉でなのはは再び今の仕事ができるようになったんだ。
これからもなのはを見守ってくれ」

ゲンヤ「ウィルには色々と世話になったからな。クイントの件もあ

る。

だからスバルとギンガをよろしく頼むぞ」

クイント「そうね。娘たちをよろしくね」

プレ「私もあなたのおかげで道を誤らずに済んだわ。アリシアも助けてくれた。

娘のことはあなたにまかせるわ」

ティーダ「僕もあの時君がいなければ死んでいた身だ。ティアナが怪我をして

落ち込んでいた時も、君がいてくれた。すごく助かっているよ。

これからも俺の大切な妹をよろしく頼むよ」

ザフィ「主はやての足を蝕んでいた闇の書、いや夜天の書の問題もウィルが解決してくれた。管制人格のリインフォースも消えずに済んだしな。お前なら主も、シグナム達も幸せにしてくれるだろう。これからもよろしく頼むぞ」

「…ありがとうございます、みなさん」

その後は誰も何も言わずに、ただ酒を飲みながら時は過ぎていった…

「さあ寝るか」

テ「ウィルさん…」

「ティ、ティアナ？」

テ「昨日は出来なかったので、今日こそ！いただきまーす！！」

「よ、よせっ！うわあああああ！！」

～次の日の朝～

ヴィヴィオ「パパ～。なんでげっそりしてるの～？」

「い、色々、あったんだ、うん」

ヴィヴィオ「？？？」

ス「ティア、元気そうだね？」

テ「うん！」つやつや

第５６話：たまにはゆっくりと、その６（後書き）

相変わらず余震が続いている今日この頃。
私の親戚は茨城に住んでいるのですが至って元気そうでした。
ただずっと停電らしいのですが。
知り合いは親戚のおじさんが亡くなったと聞きました。
今回の地震でいったい何人の犠牲者が出たんでしょうね？
下手すると１万人を軽く超えるとか何とか。
ほんとご冥福をお祈りします。

次回は…考え中です。

では

第57話：たまにはゆっくりと、その7

～砦～

俺とティーナはフル装備で目の前にいるモンスターを眺める。

「やっぱいつ見てもでかいよな」

ティ「なんでこんなにでかいんだろうね」

「まあいい。あいつがエリア移動するまでお前はここから撃っててくれ。
俺は先に次のエリアで仕掛けをする」

ティ「はいはーい」

ベースキャンプに戻ると、そこにはシャマルとティアナがいた。

「シャマル、調合書はちゃんと持ってきたんだよな？」

シャ「きちんと1から5まであるわよ？」

「材料は？」

テ「シャマル先生と一緒に持ってきましたよ」

「素晴らしい。もうティーナが撃ち始めているからシャマル、頼んだぞ」

シャ「はーい♪」

「よし、ティアナ行こうか？」

テ「はい！」

クエスト内容：接近！ラオシャンロン

成功条件：ラオシャンロンから砦を守れ

失敗条件：撃退できずにタイムアップ、もしくは砦の耐久値ゼロ

メンバー：ウィリアム、ティーナ、シャマル、ティアナ

ウィリアムの装備

防具
ウカム一式

武器
双龍剣【大極】

発動スキル
耐震
砥石使用高速化
心眼
斬れ味レベル＋１

ティーナの装備

防具
艶・皇一式

武器

角王弓ゲイルホーン

発動スキル
ダメージ回復速度＋１
高速剥ぎ取り＆採取
貫通弾・貫通矢威力ＵＰ

シャマルの装備

防具
フルフルＺヘルム
ギザミＺメイル
リオソウルＺアーム
フルフルＺフォールド
ミヅハ真【具足】

武器
ネイティブホルン

発動スキル
高級耳栓
笛吹き名人
斬れ味レベル＋１

ティアナの装備

防具
ウカムガンナー一式

武器
ラヴァシュトローム

発動スキル
装填速度＋３
自動マーキング
装填数ＵＰ

～ホテル・アイルー～

士朗「あれがモンスター…」

恭也「勝てる気がしない…」

忍「勝つ気でいたの？」

は「今までの奴よりもっとでかいな～」

プレ「あれが特殊生体ロストロギア、ラオシャンロン…」

アリ「確かにあれが歩くだけで災害になるね」

フェ「あんなのどうやって倒すのかな？」

な「ウィル君が真っ二つにしてくれるんじゃないかな？」

カス「さすがにウィルさんでもそれは無理だニャ」

ツ「そうですよね～。あんな大きいモンスターを真っ二つなんて」

マ「でも、他のモンスターを真っ二つにしたことは何回もあるんだニャ」

ツ「」

ア「…そういうことはこの世界ではよくあることなのか？」

カス、マ「絶対にあり得ないニャ」

みんな「ですよね～」

ティーダ「しかし、ティアナの持っているボウガンがかっこいいなあ」

ス「あれはライトボウガンですね」

アリサ「小さくて持ち運びも楽そうだし、反動も少なそうね」

すずか「でもやっぱり攻撃力はヘヴィボウガンのほうが上ね」

ヴィ「あ、次のエリアに行ったみたいだぞ」

～砦、エリア2～

「ティーナは移動しながら射撃、ティアナはティーナの指示で動いてくれ。
　シャマルは高台から笛吹いて援護してくれ」

シャ「わかったわ～。えーっとまずは…」

高台によじ登ったシャマルはネイティブホルンを振り回しながら、
最初に白→青と吹き、強走効果【小】を発動。その後、白→赤と吹いて
攻撃力強化【小】を発動させた。

「よっしゃあ！これで強走薬いらずだ！行くぜ！」

俺は双剣を構えてラオシャンロンの顔に乱舞を繰り返した。

ティ「ティアナちゃんの方が射程は長いから、後ろから貫通弾で撃って！」

テ「はい！」

ティーナはラオの右側から強撃ビンを装填した弓で、まずは左肩あたりを
攻撃した。その後ろでティアナがボウガンで貫通弾を撃ち始めた。

双剣で乱舞しまくったせいか、すぐに角が折れてラオシャンロンの
頭破壊第1段階が終わった。

笛を吹き終わったシャマルは、調合書とにらめっこしながらティーナが使っている
強撃ビンと、ティアナが撃っている弾の調合をしていた。

「ティアナ！シャマルの所に登って撃て！ティーナ、対巨龍爆弾スタンバイ！」

テ「はい！」

ティ「了解！」

曲がり角に来たので2人を上に登らせて、俺は腹の下で乱舞を繰り返す。
するとラオが大きくのけ反りダウンした。その衝撃で俺は後ろに吹き飛ばされた。

「いっててて…やっぱこれだけは避けれないな」

そして橋の前でラオが後ろ脚だけで立ち上がり、そのでかい口を開き大声で咆哮した。高級耳栓を付けているシャマル以外はみんな耳を押さえる。

ティ「うるせえええええ！！」

テ「きゃあああああ！！」

シャ「私は平気♪」

怒鳴るのをやめたラオは再び４足歩行で動き出す。そして橋を通過しようとした時、
ティーナが背中に飛び乗った。

ティ「それ！」

かなり揺れるが広い背中にティーナは２個の対巨龍爆弾をセットした。

ティ「まだ時間はある！」

そう思ったティーナは背中の剥ぎ取りを開始した。

ティ「老山龍の重殻だ！ついてるなあ、わたｓ」

その瞬間、爆弾が炸裂してティーナは吹っ飛ばされる。いきなり背中で爆弾が爆発した
ラオもまた苦しげな咆哮を上げた。

ティ「きゃあああ～」

地面に落ちたティーナは立ち上がろうとした時にラオの足で蹴られてまた吹っ飛んでいた。

テ「生きてるんですかね？」

「心配するな、死にはしないよ」

～ホテル・アイルー～

アギト「いたそー…」

ゲンヤ「いや、なんであの嬢ちゃん生きてるんだ？」

クイント「強い女は簡単には倒れないものよ」

カ「同感です」

マ「さて、キッチンアイルーズ！集合ニャ！」

な「あれ、エプロンつけたアイルーがいっぱいなの」

料理長のマックスがキッチンで働くアイルーを集めていた。

マ「全員集まったな？ではこれからブリーフィングを始める！
今回の任務はラオシャンロンの解体だニャ。あと２０分以内にウィルさん達がラオシャンロンを倒すはずだから、武器や防具の素材をはぎ取り終わった後に解体を始めるニャ！何か質問は？」

キッチンアイルーズ「ありませんニャ！」

マ「では、以上でブリーフィングを終わる。総員出撃準備！」

キッチンアイルーズ「アイアイ、サー！」

ヴィ「どこの軍隊だよ！？」

シグ「ま、キッチンは戦場らしいし、いいんじゃないか？」

～砦、エリア３～

テ「シャマル先生、弾くださーい！」

シャ「はい！Ｌｖ３の貫通弾よ！」

テ「おらあああああ！！」

ティアナが使っているラヴァシュトロームと言う名のライトボウガン。
ロングバレルを付けてさらに威力が増している。そしてこのボウガンの最大の
特徴は、Ｌｖ３貫通弾を速射することができるのだ。
高火力なライトボウガンから放たれる貫通弾は、少しずつ、だが確実に
ラオシャンロンの体力を削っていった。

ティ「やった！右肩破壊成功！」

テ「こっちも左肩が壊れましたよ！」

ティ「よし！それじゃあ次は背中よ！」

テ「はい！」

「あ～たたたたたたたたた…」

俺は奇声？をあげながらひたすら乱舞を繰り返している。

～砦、エリア４～

シャ「はい！」

ティ「セット！」

「セット！」

テ「セット！」

俺たちはシャマルが持ってきた大タル爆弾Ｇを設置していた。その数８個。

「来たぞ！」

テ「みなさん下がって下さい！」

ティアナは、他のメンバーが下がったことを確認して、ラオの腹が爆弾にかぶった
瞬間に通常弾を放った。優秀な射撃手であるティアナが放った弾は、まっすぐに爆薬の詰まった樽の側面に命中した。

ラオ「ギャアアア！！（訳：腹あちいいいい！！）」

８個の大タルＧを食らったラオはまたダウンする。それを見逃す俺

たちではない。

ティ「今がチャンスよ！ティアナちゃん、持っている弾を全部撃っちゃって！」

テ「はい！それえええ！！」

「おらあああああ！！」

シャ「笛吹き～」

士朗「これがフルボッコ、というやつか」

桃子「あらあらかわいそう」

ユ「容赦ないですね」

プレ「まあ仕方ないんじゃない？」

アルフ「なあなあ！あれの肉っておいしいのかな？なあ？」だらだら

フェ「アルフ、涎出てるって」

～砦、エリア５～

「おーし、ティアナ、バリスタで撃ちまくれ。弾が無くなったら下に降りて
　通常弾で攻撃しろ」

テ「わかりました！」

「シャマルは万が一に備えて上で待機。必要なら撃龍槍を使え。やり方はわかるな？」

シャ「大丈夫よ！」

「ティーナは下に降りて合図とともに攻撃開始だ」

ティ「はーい！」

テ「ウィルさん、来たみたいです！」

自動マーキングを付けているティアナがそう告げる。

「よーし、射撃準備！」

ティアナがバリスタの角度を調節してラオに向ける。狙いはラオの背中だ。

「ステンバーイ…ステンバーイ……全員、攻撃開始！」

テ「食らえ！」

ラオの体に大型のバリスタから放たれた弾が突き刺さる。横からはティーナの
弓矢も飛んでくる。それでもラオは進み続ける。

テ「これで終わりだ！」

ティアナが持ってきた最後のバリスタの弾が突き刺さると、ラオは大きく
のけ反りながら苦しげな咆哮をして、その場に崩れ落ちた。

シャ「…勝ったの？」

ティ「やったあああ！」

「ティーナ！はぎ取れ！」

テ「わ、私も！」

ティ「このための高速剥ぎ取りよ！」

ティ「ラオの天鱗キターーーーー！！！」

テ「うわあ、真っ赤な赤い玉だ！きれい…」

シャ「大きな角ね！」

「よし、これでよしと。後は任せたぞ、アイルー！」

キッチンアイルーズ「はいニャ！」

こうしてラオシャンロン討伐クエストは終了した。

かこーん

「やっぱりクエストの後に入る温泉は格別だな～」

で、飯の時間。

「今日倒したラオシャンロンの料理が出るぞ！」

アルフ「早く！早く！」

ユ「アルフ、少し落ち着きなよ」

キャ「どんな料理にしたんですか？」

「まあ見ればわかるさ。料理長！」

マ「お待たせなのニャ！」

アイルー達が大きなカートに乗せて料理を運んできた。

マ「えっと、これがウィルさん、ティーナさん、スバルさん、ギンガさん、
　それとエリオさんの分だニャ！」

と言って5人の目の前に置かれたのはドでかいどんぶり。

ス、ギ、エ「」

初めて見る3人は言葉を失っている。

マ「これはすり鉢にご飯をたっぷり盛って、その上にニンニクと一緒に炒めた
　ラオシャンロンの肉をたくさん乗っけたんだニャ！名付けて！
『ラオシャン丼』だニャ！」

ス、ギ、エ「すげえええええええ！！！」

「これがあるからハンターはやめられないぜ！」

ティ「ないぜ！」

すずか「あれは多すぎだよ…」

アリサ「見ただけで胃もたれしそう…」

それ以外にも、ラオ肉のステーキ、カツレツ、シチューなど数々の
料理がテーブルに並んだ。

マ「アルフさんには特別にこの超大型ステーキだニャ！」

目の前に置かれたのは本当に超大きなステーキ。それを見たアルフは。

アルフ「……（ポロポロ）」

アリ「な、なんで泣いてるの！？」

アルフ「私は…この日のために生きてきたんだね？神様ありがとう！」

フェ「えー…」

「それではみなさん、いただきます！」

みんな「いただきまーす！」

ス、ギ、エ「おいしいいいいいいい！！」

「うまい！」

ティ「もう最高！」

シャ「こんなにおいしいなんて！」

は「めっちゃうまいやんか！」

ヴィ「ご飯おかわり！」

シグ「早っ！」

キャ「おいしいね、フリード」

フリ「きゅく～♪」

テ「ねえキャロ。フリードって龍よね？」

キャ「そうですけど？」

すずか「そのフリードちゃんに龍のお肉を食べさせると…」

アリサ「つまり共食いってことになるんじゃない？」

フリ「きゅく！？」

キャ「あ」

士朗「今まで世界中を飛び回って色々な肉を食べてきたが、そのどれよりもうまいな」

美由希「ほっぺがおちそう～」

忍「こういうのは滅多に食べれないんだよね～。それを食べれた私たちって幸運ね！」

恭也「ウィルに呼ばれなければ食べれなかったからな。だがなのは は渡さん！」

桃子「はいはい、ちょっとこっちに来てね～」

恭也「え、ちょっと母さん何をぎゃあああああ！！！」

廊下に連れて行かれた恭也さんの悲鳴は誰にも聞こえることなく、楽しい食事の時間は過ぎていった。

シャ「ウィルさん…／／／」

「シャマル…」

あは～ん、うふ～んタイム！

シグ「シャマル…昨日はお楽しみだったようだな？」

シャ「え？え、ええまあね／／／」

シグ「私はまだなのに…」ぶつぶつ

シャ「あ、あのシグナム？」

シグ「うるさい、このがに股！」

シャ「うっ」

ふと振り返るとスバル、カリム、なのは、ヴィータ、ティアナがいた。

ス「やっぱりそうなりますよね」

テ「まあ仕方ないわよ。そ、その大きいんだし／／／」

ヴィ「お前らはまだいいじゃねえか！あたしなんて裂けるかと思ったんだからな／／／
　それに奥に入れすぎだ！」

な「ヴィータちゃん、声小さくしてよ！」

カ「確かに彼のあれのサイズは規格外なので、奥に行きすぎることはありますね／／／」

シグ「頼むから他の所で話してくれ…」

ヴィヴィオ「何のお話してるの～？」

「駄目だよヴィヴィオ。パパと一緒に遊ぼうね～」

ヴィヴィオ「は～い」

第57話：たまにはゆっくりと、その7（後書き）

ラオ戦終了。
ていうかたまにはゆっくりと、っていうタイトルなのにモンスター戦が多い気がする…

なので次回からしばらくモンスター戦はなしにしてほのぼのと書きます！

では

第５８話：たまにはゆっくりと、その８

ラオシャンロンを倒して３日が過ぎた。

保護者ズのみなさんは元の場所に帰っている。３日しか休暇がなかったからね。

俺たちは相変わらずここポッケ村でのんびりとした毎日を送っている。

ヴィヴィオとエリオは毎日釣りをしていたので釣り名人になった。

キャロはカエル事件があったので釣りはしなくなったが、その代わりに

畑で色々な植物を育てるようになった。なんでも今は普通の野菜のほかにも

マンドラゴラにドスビスカス、それに龍殺しの実を育てているんだとか。

…キャロよ、その龍殺しの実をフリードには食べさせるんじゃないぞ、いいな？

ザフィーラとアルフはなぜかアイルーと仲良くなっている。

村にいる時は２人とも犬と狼の恰好をしているんだが、それがアイルー達の

お気に入りになったらしい。今ではアイルーを背中に乗っけたザフィーラと、

アイルーと一緒に散歩しているアルフを見かけるようになった。

問題があるとすれば、アイルー大好きクラブが妬んでいることぐら

いだろう。
アイルー大好きクラブのメンバーは、カリム、リイン姉妹、アギトである。
いつもアイルーを見つけては抱きしめたりくすぐったりして自己満足している
よくわからないクラブである。

そのクラブは現在活動を中止している。というのも、ザフィーラに乗っかっていた
アイルーに抱きつこうとしたところ、アイルーが全力で逃げてしまったので
ショックを受けてしまったらしい。ま、仕方ないよね。

シグナムとヴィータは訓練場の個人演習を毎日こなしている。
ティガレックスに一方的にやられたのが許せないらしい。
ヴィータに至っては一撃で戦闘不能にされてストレスが溜まっていたらしく、
昨日はイャンクックをハンマーでフルボッコにしていた。

シグナムはババコンガを太刀で倒しフルフルに挑んだのだが、

シグ「何だあの気持ち悪いのは？吐き気がする…おえっ」

と言ってリタイア。あのシグナムが戦闘放棄するとはね…
でもおかげでシグナムの弱点を見つけたぜ！今度模擬戦する時にフルフルを召喚してみよう。

ティアナとスバル、ギンガは武具屋のおじさんと仲良くなって、
自分で武器を作っているそうな。ティアナはライトボウガンを、
スバルとギンガは片手剣をやるそうだ。帰る日までに作れればいいが…

シャマルは前回ザフィーラで調合の実験をしていたが、何故か回復薬が
死の薬になってしまったので、毎日調合をしてまともな回復薬ができるように
がんばっているそうだ。

…これは内緒だが、俺が捕まえた銀レウス。こいつにシャマルが作ったとされる
回復薬グレートを飲ませてみた。すると、

銀「ギャアアアアアアア!!…ガクッ」ちーん

死んじゃいました♪
モンスターを一撃で殺すほどの威力の毒…もとい回復薬グレート。
こいつは封印しておこう。これがあるとハンターいらねえじゃん。

なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかの5人は、マックス料理長の
お料理教室に毎日通っている。俺と同じくここの料理に感動して、
自分もこの味を出したい！と思ったんだろうな、うん。

あとでこっそりマックスに聞いたら、超真面目にやっているんだって。

やはり料理ができる女性っていいよね。

それに比べて料理が出来ない男って駄目な感じがする。

昔の偉い人もこう言った、

「料理はできるけどしない男は問題ないが、料理ができない男はクズだ」

と。

～密林、エリア１０～

ヴィヴィオ「わーい！！」

ツ「海です～！」

アギト「よーしばってんちび！競争だ！」

アイン「溺れるなよ？」

エ「キャロ、行こう！」

キャ「うん！」

んで、今日は密林のエリア１０、あの小さな島に来ています。
目的はただ一つ、海で泳ぐ！

な「きれいな所だね～」

フェ「海が輝いて見えるよ」

は「こんな時にしかできないことをするで！」

シグ「といいますと？」

は「ウィル君！オイル塗って～な」

「はい！？」

はやては砂浜に敷いたシートの上でうつぶせになっている。

そして既にビキニの上が取れているじゃないか！

は「早く～」

ヴィ「ずるいぞはやて！」

カ「させません！」

ヴィータとカリムがはやてに砂をかけて埋め始めた。

は「あー！助けて～」

ス「ウィルさんにオイルを塗ってもらえると聞いてやってきました！」

「お前らビーチバレーしてたんじゃないのかよ！？」

テ「八神隊長の声が聞こえたものですから」

ギ「それで、誰から塗ってもらえるんですか？」

ティ「ここはおとなしくじゃんけんだね！」

みんな「じゃーんけーん、ぽい！」

結果。

は「うふふ～♪」

すずか「なんで埋もれていたはやてちゃんが一番なの？」

アリサ「じゃんけんのやり直しを要求するわ！」

「却下」

アリサ「むきーっ！イライラするからなのはのほっぺをつねるの！」

な「にゃあああああ！」

は「アン♪ウィル君ったらそんなところ触らんといて」

「背中触っているだけだろ！？なんで変な声あげんだよ！」

は「気分や！」

「は～いそうですか～」

こうして全員の体にオイルを塗り終わった頃には、俺はすでに日焼けしていた。

「あちー、背中が～」

みんなは子供たちと遊んだり、バレーをしたり、泳いだり楽しそうだ。

テ「あの、ウィルさん。オイル縫ってあげましょうか？」

「いいのか？悪いな」

みんな「させん！！」

「だから！お前らすぐに来るな！」

な「私がやるの！」

フェ「こればかりは私が！」

ギ「私がやります！」

こうしてオイルの奪い合いに発展して、結果。

は「あ」

オイル缶は宙に浮かび、ウィルの頭に逆さまに落ちた。

「……」

嫁たち「げっ」

ヴィヴィオ「パパ～？」

「ダイジョウブダヨヴィヴィオ。キャロタチトアソンデテクレナイカナ？スグニイクカラ」

ヴィヴィオ「わかった～」

「さて」

嫁たち「ギクッ！」

「いやはや、実にダイナミックなオイルの塗り方だったな」

カ「えーっとウィルさん？」

「いやほんとに感謝するよ。あっという間に全身にオイルがぬれたんだから。
だけどな、目と口にオイルが入ったのはいただけないな」

嫁たち「すいませんでした！」

「それじゃあ1つ頼みごとをしようかな…」

ヴィヴィオ「パパだ～」

「よーしじゃあ一緒に遊ぼうか？」

エ「フェイトさんたちは？」

「ん～？なんでもちょっと散策に行くとか言ってぞ？」

キャ「そうですか～」

「まあ、昼までには戻るだろうよ。それまで思いっきり遊ぶぞ！」

一方。

な「見付からないよ～」

ヴィ「こっちにもないぞ！」

すずか「本当にあるのかな？」

ウィルがなのは達１２人に頼んだこととは、特産キノコを１５個取ってくることだった。

特産キノコは人気が高く、それを求めた依頼がギルドにも頻繁に出されている。

アリサ「ん？これじゃない？」

フェ「それが特産キノコ…」

は「よーしこの調子で見つけるで！」

お昼。

俺とティーナ、リイン姉妹とアギトでバーベキューの準備をする。

ポポノタンとか、ティガの肉とか、キャロが育てた野菜とかを持ってきた。
なんで3日で野菜ができるのかって？あのポッケ農場は1回くらいクエストに
行けば、その間にまた使えるようになっているのだ。つまり、野菜の種を植えて
クエストに行って戻ると、野菜ができているのだ。

な「ウィル君！採ってきたよ！」

「そうか、ご苦労さん」

なのは達が特産キノコを持って戻ってきた。

ヴィ「あと、こんな卵を見つけたんだけどこれなんだ？」

ヴィータが持っているのはドでかい卵。

ティ「飛竜の卵だ！」

「おお！よくやったヴィータ！こいつはうまいぞ！」

ヴィ「まじか！やった！」

な「お肉おいしい！」

カ「このキノコもおいしいですよ」

フェ「苦労して採ってきたかいがあったね」

シグ「全くだな」

ティ「これも焼くの～！」

エ「釣ってきましたよ！」

は「でかっ！」

エリオはカジキマグロを釣った。それも2匹。

キャ「食べきれるかな？」

「心配するな。スバルとギンガがいる」

ヴィ「あの卵ギガウマだな！」

シャ「ほんとおいしいわ」

ザフィ「こういう場所でのバーベキューはいいものだな」

は「そうやね～」

午後も子供たちは遊びまくり、大人はビーチマットの上で体を焼き。

夕方になり帰るころには子供たちは疲れて寝ていた。

「遊びまくっていたから仕方ないか」

な「そうだね」

俺たちは子供を担いで船に乗ってポッケ村に戻った。

その日の夜。

シグ「ウィルどうした？」

「いやな、実は今日かなり疲れたんだ…」

シグ「え、じゃあ…」

「ああいや、疲れたからそのシグナムと一緒に寝ないってわけじゃない。
　問題はどっちを飲むかなんだが、もういいや、どっちも飲もう」

そう言って俺は瓶に入っていた赤色の薬、怪力の丸薬と、茶色の薬、忍耐の丸薬を
全部飲みこんだ。

「きたきたきたきたあああああああ！！」

全身に力がみなぎる！もちろん紳士のソーセージもだ。

シグ「い、今までよりもさらにでかい／／／」

しかも忍耐の丸薬も飲んでいるので、我が息子は鋼の如くカチンコチンになっている。

「さあ、激しい夜にしようぜ？」

例の如くあは～ん、うふ～んタイム発動！

次の日。

な「あ、ウィル君おはようなの」

「おっはー」

ヴィ「シグナムは？」

「声かけたんだが起きないからさ、まだ寝かせてるよ。昨日の疲れがまだ
　取れていないんじゃないかな？」

カ「そうですか」

シグ「」

いつもより大きく、固いウィルの息子に奥の奥まで突かれてしまったシグナムは、
ウィルの部屋でまだ気絶していた…

第５８話：たまにはゆっくりと、その８（後書き）

はい、ほのぼの海水浴の日でした。

そろそろミッドに帰ろうかな。

では

第５９話：たまにはゆっくりと、その９（前書き）

ＰＶ５００，０００突破！！自分の中で目標にしていた数値を超えたので
超うれしいです！本当にありがとうございます！

そろそろこのシリーズもネタ切れになっているんですよね…

昔の偉い人は言いました。

「困った時は戦争ネタを使え！」

と…

第５９話：たまにはゆっくりと、その９

第２３管理外世界「アイシクル」。
この世界は地球と非常によく似ている。月みたいな衛星もあるし、住んでいるのは人間だし、地球とほぼ同じ軍事兵器を有した軍隊がいる。
違う点は、まず「アイシクル」には南極と北極があるが、地球と異なり
北極にもきちんとした大陸がある。その世界の国際法によって南極・北極大陸は
非武装地域となっている。従ってそこにいるのは物好きな研究者たちだけである。

次に違う点は、この世界には核兵器もあることはあるのだが、今ではＮ？兵器と呼ばれる兵器が主流である。Ｎ？とはＮｏ　Ｎｕｃｌｅａｒの頭文字をとったもので、
半減期の著しく短い放射性物質で構成された核兵器である。

そんな「アイシクル」ではここ３０年ほど戦争がなく、平和な日々を送っていた。
だが、ある国が全てを変えた。

Ａ国は南極に近い国であり、前々から国際連合の会議で南極の開発を主張してきた。

南極には様々な資源が眠っているとされ、それらを採掘できれば莫大な利益が
手に入る。それらをみなで分かち合おうではないか、と。

しかし、国連はその意見を却下した。理由は簡単。

「もしその開発が原因で惑星全体の生態系のバランスが崩れたらどうするんだ？言い出しっぺのお前責任とれんの？ん？」

と突っ込まれたからである。
A国はそこまで貧乏ではないが裕福な国でもない。だからこそ南極が、
いや南極大陸に眠っている資源が欲しいのだった。そこで彼らは南極を
軍事的に奪還しようじゃないかと考えた。

その国連会議から1年後、A国海軍の揚陸艦2隻が南極に突如現れ、乗っていた
海兵隊2，０００名を上陸させた。そして不幸なことに近くにあったE国の
南極調査員の小さな基地に攻撃を仕掛け、そこにいた研究員１５名を殺害した。研究員が死ぬ間際に発した緊急信号を受信したU国は、最寄りの基地から救援物資を乗せたヘリコプターを発進させ基地に進路をとったが、基地に着く前にA国空軍の戦闘機に威嚇射撃されキンタマが縮む思いをしながらヘリは引き返して行った。

実はA国とE国は、その昔領有権争いが発展して戦争をしていた。

軍事力が全て！というモットーを掲げるE国海軍によってA国海軍は文字通り
殲滅させられ、結果A国は多額の賠償金を支払い、もめていた領土はE国のものと
なった。その時の和平交渉の仲介役を担ったのがU国だった。

さてE国。いきなり攻撃されて民間人が１５名も殺されて怒らないわけがない。
というかブチギレた。直ちにE国海軍第２艦隊が出撃、南極に向かっていった。
イージス原子力装甲空母２隻、イージスミサイル巡洋艦４隻、イージスミサイル
駆逐艦８隻、セラミック船体の最新鋭ステルス原潜４隻、補給艦（戦闘支援艦）
４隻という強力な艦隊である。それとは別に、これ以上南極にA国の増援が
行かないようにするための、南極封鎖作戦も同時に開始された。

また、E国本土中央部にあるミサイルサイロ搭載されている大陸間弾道ミサイル
（ＩＣＢＭ）の発射準備が極秘裏に開始された。弾頭には３００？出力のN？兵器が
１１個搭載されていた。目標はもちろんA国である。

一方E国に軍事力で負けているA国も、一度は壊滅して、その後再び再建した

海軍部隊を展開し、強力なE国海軍を迎え撃つ準備をしている。そして南極への
輸送艦隊を編成して、E国海軍が到着する前に南極まで物資を運び込もうとしていた。

～ホテル・アイルー～

「…以上が今起きていることですね」

ウィルの部屋でエディが説明を終える。部屋には俺とティーナ、はやて、
カリムがいた。

「あのよ、なんで地球とよく似た世界で起きている戦争の話なんかしたんだ？」

は「そやな。基本的に管理局は現地の戦争には干渉しないはずやったよな？」

ティ「はやてちゃんの言う通りよ」

カ「しかし、もし干渉せざるを得ない事情があるとしたら話は別ですね」

「その通りです、カリムさん。実は南極にロストロギアがあることが判明しました」

は「なんやて！？」

ティ「どんなもの？」

「反応から見ておそらく『ブロウアウト』でしょうね」

「げっ」

カ「ウィルさん、ご存じなんですか？」

「…最悪だ」

は「説明してーな」

「ロストロギア『ブロウアウト』。発動すると半径２００？圏内にいる全ての
人間、物質が完膚無きほどに破壊される。終わった後には何も残らない。
全てを破壊した『ブロウアウト』はへつの場所に転移し、再び発動するまで
眠りにつく、ってやつさ」

は「なんつー代物や…」

カ「それで具体的な場所は？」

「…彼らが戦闘をするであろう地域のすぐ近くです」

ティ「最悪じゃない！」

「直ちに片づけないといけないな」

ティ「じゃあ休暇はおしまい？」

「それはない」

は「え」

「休暇はきちんと取る。それからこの問題に取り組む。それでいいじゃん」

カ「いいんですか？」

「両国の軍隊の展開スピードから見て、あと1週間は余裕がありますね」

「休暇はあと2日残ってんだから問題ないな」

は「もうそんなに経ったんやな」

ティ「のんびりしていると時間はあっという間に過ぎて行くもんだよね～」

カ「そうですよね～」

テ「ウィルさん！いますか？」

「いるよ～」

ティアナがボウガンを持って部屋に入ってきた。

テ「ついに自分のボウガンができました！」

「お！すごいじゃないか。ちょっと見せてみ」

ティアナが作ったのは「ジェイドストーム」。ほぼ全ての弾を発射できる上、
ＬＶ２通常弾の速射が可能で汎用性に富んだボウガンである。

ティ「よく出来てるね。頑張ったじゃん！」

「うん。こいつならすぐに実戦に使えるな」

テ「やった！！」

ス「ティア～待ってよ～」

スバルとギンガも武器を持ってあとからやってきた。

ギ「ウィルさん、私たちも武器作りました！」

そう言いながら片手剣を見せる。

ス「私も！」

スバルも片手剣を振り回している。

ティ「スバルちゃん、危ないから振り回さないほうが…」

ス「あ」つるっ

スバルの手から飛び出た片手剣はまっすぐウィルの方へ飛んでいき、両足の間、正確には股間に近い床に突き刺さった。

は「あー…」

カ「ウィルさん、お怪我は？」

「いや、ない、大丈夫。それより…」

ス「げっ」

「スウウウウバルちゃあああああん？」

ス「すいませんでした！」

その場でスバルは土下座したのでウィルは許すことにした。その代わりに…

夜。

みんな「いただきま～す！」

ギ、エ「がつがつもぐもぐ…」

シグ「相変わらずすごい量だ…な？」

アギト「ん？何見てん…だ？」

いつものように大飯食らい3人衆の方を見たシグナムとアギトは絶句した。

ヴィ「どうしたシグナ…ム…」

シャ「2人ともどうした…の」

様子がおかしい2人の視線の先にあるものを見て2人も絶句した。

は「なんや？どうしたん？って！」

な「スバル！？どうしたの！？」

フェ「あのスバルが…」

すずか「いつもあんなに食べてたのに！」

アリサ「ていうか他の人とは食器の大きさも違ったのに」

ツ「スバルちゃん！調子でも悪いんですか？」

ア「無理はするなよ？」

ザフィ「せっかくの休暇なのだから体調は崩さんようにな」

ス「大丈夫ですよ、みなさん、ははは…」

その代わりに、ウィルはスバルの夕食の量を減らしたのだった。
結果、スバルのお盆の上には茶碗１杯のご飯とお椀に入ったみそ汁、
その他のおかずが乗っているだけだった。

ス「…ぐすん」

深夜、ウィルの部屋。

は「ウィル君…スケベしようやぁ…」

「だが断る！」

は「なんでや！」

「冗談だよ、はやて…」

は「ウィル君…／／／」

あは（ｒｙ

翌日。

は「なんでみんながが股になるんか、よーくわかったで…」

な「にゃははは…」

フェ「やっぱりみんなそうなるよね／／／」

アリサ「ウィルの奥さんならだれもが通る道ね」

続く…

第５９話：たまにはゆっくりと、その９（後書き）

次で休暇は終わりにして、ポッケとはおさらばします。

では

第６０話：たまにはゆっくりと、その１０（最後）

さて、戦争が起きかけている第２３管理外世界「アイシクル」。
運よく、いや運悪く今回の事件発生時にA国近くを航行していた
E国海軍の原子力潜水艦２隻が配置についた。これを受けて、E国の
首脳部は声明を発表、南極封鎖作戦を開始すると全世界に宣言した。
内容は以下の通り。

１、南極に近づくA国海軍艦は全部叩き潰すんだからね！

２、関係ない国の船は近付くんじゃないわよ？

３、必要と判断したらN？兵器撃つから覚悟しなさい！

４、第２艦隊が到着したら私たちは帰るからね！

これによりA国首脳部で今後についての会議が行われた。
あのE国の原潜が南極を封鎖している。こっちの潜水艦は向こうと
比べたら
おもちゃみたいなもんだ。とっとと物資を運ばなきゃならないのに
輸送船で行ったら海の藻屑になっちまう。どうしようか。

ちなみにA国軍の内訳はこんなもんである

海軍水上艦隊
巡洋艦７隻、駆逐艦１１隻、フリゲート艦５隻、沿岸警備用水中翼

コルヴェット艦４隻。

潜水艦隊
通常動力型潜水艦３隻、ＡＩＰ（非大気依存推進）潜水艦２隻

海軍航空隊
対艦ミサイル搭載型攻撃機３６機、対潜哨戒機１２機

空軍
なんでもできる多目的戦闘機５０機、給油機６機、空中早期警戒機２機

結局いい考えは浮かばず、今まで通り空軍の輸送機でちまちまと物資を
送ることになった。だがこれもＥ国海軍第２艦隊が来るまでしかできない。
Ａ国にはどうしても早く南極に物資を送る必要があった。

Ｅ国の首脳部では、Ａ国が急いで物資を送ろうとしている理由にまだ気がついていなかった。なので第２艦隊の現地到着予定日時は５日後だった。
またＥ国と同盟関係にあるＵ国海軍第５航空艦隊との合流は３日後に決められた。
Ｅ国ほど強力ではないが、原子力空母１隻、イージスミサイル巡洋艦２隻、
イージスミサイル駆逐艦４隻、原子力潜水艦２隻、補給艦（戦闘支

援艦）2隻の
艦隊が南極へ向かっていた。

～ポッケ～

今日は休暇の最終日なのでミッドに帰らなくてはならない。

カ「もっとアイルーと遊びたかった！」

アギト「ザフィーラとアルフにとられた！」

ザフィ「いや、とった覚えはないのだが…」

ヴィ「魔法なしの戦闘っていうのもなかなか面白かった！」

シグ「いい勉強になったな。ただ私はあれがダメだ…」

な「お肌がすべすべ～」

フェ「つるつる～」

は「ほかほか～」

アリサ「あんたたちうるさい！」

すずか「まあいいじゃない？」

ス「これは家宝にしよう！」

ギ「私も！」

テ「そうね。大切に保管しときましょう」

カス「ウィルさん、次はいつ来るニャ？」

「わからんな。だが必ずまた来るよ」

マ「料理の腕をあげて待っているニャ！」

ティ「それは楽しみなの！」

カス「またなのニャ～！」

みんな「さようなら～」

村の外に出て俺たちは転移魔法で「アイオス」のドックに戻った。

エ「…帰りたくないですね」

キャ「みんないい人たちだったね」

ヴィヴィオ「楽しかった～」

「みんなが楽しめたようでよかったよ」
な「はぁ、帰ったら仕事か～」
「なに、退屈はさせんよ」
フェ「それってどういう…」
「明日説明するからさ、はやてよろしく」
は「りょーかい。みんな明日朝連なしで会議室に8時に集合な」
ヴィ「何かあるのか、はやて？」
「あるロストロギア回収についてだよ」
ティ「とりあえず今日はゆっくり休んで、明日から本格的に動くわよ」
みんな「はーい」

Jタイプ外交バージ（ナブー・ロイヤル・クルーザー）が「アイオス」から
ゆっくりと飛び立ち、その美しい船体を輝かせながらハイパースペースに突入した。

第６０話：たまにはゆっくりと、その１０（最後）（後書き）

なんか短いですね。いつもですけど。
次回からは「ブロウアウト」回収作戦です！

てかそろそろこの小説終わりにして別なの書こうかなとか考えている今日この頃。

では

第６１話：久しぶりに真面目な仕事だぜ！

「さて、全員そろったかな？」

ラ「みんないるぞい」

カ「いますよー」

ユ「いるよ」

は「いるでー」

「じゃ始めよう」

俺と３提督は地上本部に、カリムは協会に、はやて達は６課にいる。

「第２３管理外世界『アイシクル』にとあるロストロギアが眠っていることが判明した。
その名は『ブロウアウト』。スクライア司書長、説明を」

ユ「はい。第一級ロストロギア『ブロウアウト』。過去に５回発動が確認されています。
いずれのケースも半径２００？圏内のあらゆるものを破壊しています。
例外はありません」

レ「発動条件は？」

ユ「残念ながらまだ分かっていません。現在調査中ですので…」

「わかった。調査がまとまり次第報告してくれ。さて今このロストロギアは
『アイシクル』の南極大陸に埋まっている。こういう危険なロストロギアは
普段ならこっそり行ってこっそり穴掘ってこっそり帰ればいいんだけど、
今回はそう行かない」

ミゼ「と言いますと？」

「まず、南極大陸は国際条約により領有権主張が凍結されているため、現地人がいない。
従って、『お金払うからそのロストロギアちょうだい作戦』が使えない。
おまけに現在南極地方で戦争が起こりそうなんですよ。しかもお互いやる気満々」

な「また戦争！？」

フェ「なんで？」

ティ「とある国が突然南極大陸に侵攻したからよ。その時に他国の民間人に犠牲者が
出たから戦争が起こりそうなの」

ラ「厄介じゃの」

「下手したらその戦争が原因で『ブロウアウト』が発動する可能性

もある。
　そこでだ。八神部隊長、機動６課には『アイシクル』に行って『ブロウアウト』を
　回収してきてもらいたい。なお、非常に危険なロストロギアであるため俺と
　ティーナも一緒に行く。何か質問は？」

は「現地までの移動手段は？」

「インペリアル？級スター・デストロイヤー１隻で充分だろう。南極への
　降下時は、別の船を使う」

は「わかりました」

「出撃は本日１３００時。ヘリポートに迎えをやる」

は「了解！」

カ「現地の戦闘に巻き込まれたら？」

「極力そうならないように心掛けるよ」

ドゥーエ「局長、２番にＥ国大統領です」

は「え」

「あーもしもしどうもー元気？」

『こっちは相変わらずだよ！ＨＡＨＡＨＡ！』

「実はさ、今南極で戦争起きかけてるじゃん？面白そうだから観戦しに
行ってもいいかな？」

『別にかまわんが、自分のケツは自分で守ってくれよ？』

「それは心配ない。それにお宅らの戦闘には口を挟まないことも約束しよう」

『交渉成立だな。A国のクズ共にあったら殺しておいてくれ』

「考えておくよ。じゃあね～」

カ「あの、今のは…」

「現地の協力者の一人である、E国大統領だ」

みんな「えええええええ！！」

は「なんで大統領が協力者なんや！」

「いやー居酒屋で知り合って意気投合しちゃってさ、あっはっはっは。
まあとりあえずE国軍にはこれで撃たれなくて済むぞ」

ギ「なんで居酒屋に大統領が…」

ティ「じゃああとで会いましょうね～」

「あ、ドゥーエ！これお土産」つ箱

ドゥーエ「まあ、ありがとうございます」

箱から出てきたのは崩天玉。

ドゥーエ「綺麗…」

その他ナンバーズ１１人にも、色々なモンスターの宝玉やら眼やらをプレゼントした。

いやーみんな喜んでくれて何よりだよ。

１３００時、機動６課ヘリポート。

エ「そろそろですね」

フェ「迎えってヘリコプターかな？」

シグ「テスタロッサも知らんのか」

ヴィ「はやては知ってるのか？」

は「いや、うちも聞いてないんよ」

ス「ね、ねえティア。あれなに？」

テ「あれって…え？」

ツ「あれが迎えですか～？」

ア「なんだ、あれは？」

みんなの目に映ったのは標準仕様のラムダ級Ｔ－４ａシャトル１機と重武装型２機だった。

このシャトルは１枚の固定式上翼と２枚の開閉式下翼をもっており、飛行時には

下翼を展開することによって優雅なＹ字型を現すようになる。一方で、それぞれの

下翼には閉じたときに姿を現す格納式着床脚が装備されており、離陸時または
着陸時には機体前面から伸縮型ランプが伸びるようにもなっている。
この３枚の翼は
単に外観の美しさを保つためだけではなく、大気圏内を飛行する際の安定性の維持にも
大きく役立っているのだ。

ラムダ級シャトルは２０人以上の乗員または８０トン以上の貨物を輸送することができる。
重武装型のラムダ級Ｔ－４ａシャトルには、テイム＆バック社製ＫＸ５レーザー・キャノンが
前方に８基、後方に２基備わっている。

キャ「あれも宇宙船なんですかね？」

ザフィ「多分な」

下翼を閉じてヘリポートに着陸したシャトルからウィルとティーナが降りてきた。
上空では重武装型シャトルが周囲を警戒している。

「よーしみんないるな？それじゃあ乗ってくれ！」

な「なんなのこれ？」

ティ「人員輸送用小型シャトル、ってところかしら」

「もちろん戦闘もできるけどな」

みんなを乗せた後、３機のシャトルは宇宙空間にすっ飛んで行った。
シャトルは軌道上にいたインペリアル?級のハンガーベイに収まり、
インペ?級はハイパースペースに突入した。

その頃の「アイシクル」では。

南極封鎖部隊を担うE国海軍の原子力潜水艦の1隻がソナーである音を聞いた。
最初は雑音かと思ったが、解析してみるとA国海軍の通常動力型潜水艦である

ことが判明した。その後、5隻の船のスクリュー音が確認された。駆逐艦3隻にフリゲート艦2隻である。どうやら目的地は南極らしい。

そこでE国の原潜は、傍受不可能な水中音響リンクを使用して第2艦隊旗艦に連絡。

報告を受け取った第2艦隊旗艦は作戦要綱に従い、それらの船を撃沈するように命令した。

命令を受けた原潜は、8門ある魚雷発射管から有線誘導魚雷を6基発射した。

水上ではのんびりと5隻のA国海軍艦が航行していた。今回の任務は南極海域のパトロールだ。E国が原子力潜水艦で封鎖作戦をしているというが、こっちにも潜水艦がいる。しかも静音性ではこちらの方が有利だ。そう思っていたので、水中の探索はもっぱら潜水艦に任せていた。しかし、A国の潜水艦は確かに静音性では原潜より上だが、ソナー、射撃システムなどのハードウェアで負けていた。

A国海軍潜水艦「ガイトス」

ソナー「方位２１０より魚雷！数は６！うち１発は本艦に接近中！」

艦長「何だと！？」

副長「おそらくＥ国の原潜ですね」

艦長「だろうな。デコイを発射後、面舵一杯」

操舵手「アイアイ」

Ａ国海軍駆逐艦「ラシーア」

ソナー「艦長！水中に魚雷発射音！本艦隊に向けて接近中！」

副長「何！？潜水艦は何をやっている！」

艦長「操舵員！面舵一杯！１８０度回頭！両舷緊急前進！」

当直の操舵員が制御装置を操作し、スロットルとパワー・レバーを全開にした。

機関が甲高い悲鳴を上げ、船体の骨組みがうめいた。

艦長「副長！艦尾からデコイ発射！その後ジグザグ航行！」

副長「アイアイ！」

魚雷は瞬く間に８０ノットまでに加速して、駆逐艦隊に狙いを付けた。
だが、デコイがうるさく目標が見えなくなったり、偽の目標に突っ込んだりして
４基の魚雷が無効化された。しかし残り2基の魚雷は、しっかりと目標に向かって
突き進んでいった。二重反転プロペラが金切り声をあげ、船尾にぶつかった瞬間に
９００?の高性能爆薬が爆発した。

その結果1隻の駆逐艦と1隻のフリゲートの後ろ半分が木端微塵に吹き飛んだ。
ケツを吹き飛ばされた船は、あっという間に暗い、そして冷たい海に沈んでいった。

E国海軍原子力潜水艦「シェリダン」

副長「全艦非常警報。特別兵器の移動完了しました」

艦長「特別兵器の取り扱い権限を与える」

副長「了解。警報解除します。弾頭ロックがバイパスされました。
全奇数番号発射管に特別兵器装填完了しました」

艦長「わかった副長。作戦許可リンク（ＰＡＬ）コードを中継する」

副長「魚雷発射管室異常なし。ＰＡＬコードが容認されました。兵器は使用可能、
安全装置解除」

艦長「全奇数番号発射管、発射手順開始」

副長「準備よし」

艦長「方位を合わせて、発射！」

副長がコンソールを操作すると、魚雷発射管からまた４基の魚雷が発射された。
だが、今度の魚雷は先ほどよりも高速だった。

「ガイトス」

ソナー「本艦に接近中の魚雷はデコイにひっかかりました！」

艦長「よっしゃあ！」

ソナー「艦長！魚雷第２波接近中！なんだこのスピードは！？」

副長「魚雷の速度は？」

ソナー「げ、現在７０、いえ１００ノットでさらに加速中！」

艦長「」

「シェリダン」が発射したのはＭｋ６２マルーと呼ばれる魚雷だった。

この魚雷はスーパーキャビテーション魚雷であり、水中を最高で３００ノットで

進む。この速度は魚雷がスーパーキャビテーションと呼ばれる薄い気泡の中を通る事で、

摩擦を低減して達成される。魚雷が移動するとき周りの水は文字通り蒸発し、

周囲に大量の小さな水蒸気の泡を作り出す。抗力を大幅に減らし、

非常に高い速度を
発揮することが可能となる。この高速性や推進にロケットモーター
を使用する点から
マルーは水中ミサイルとも表現される。しかもこのマルーの弾頭に
は、
1?のN?兵器が詰まっていた。

４０ノットを少し超える程度しか速度を出せないＡ国海軍艦には、
逃げることなどできなかった。

４基のマルーがほぼ同時に爆発した。

キノコ雲が軍艦の墓標となった…

続く！

第６１話：久しぶりに真面目な仕事だぜ！（後書き）

オリジナル兵器のＭｋ６２マルーについて。
「マルー」とはオーストラリアの原住民アボリジニの言葉で「雷」という意味です…確か。

えーっと次回作に関するアンケートを取りたいと思います。
1、ウィリアムがリリなのの世界ではなくゼロ魔の世界に行く話。
　ただし、作者はゼロ魔の原作読んでません。
2、無事に就職したウィリアムがお気に入りのゲームの世界に飛ばされる話。
3、　〃　　が友人数名と共に異世界に飛ばされる話。

もちろん全部チートな話にします。
とりあえずこの中から選んでいただけますでしょうか。
明日の１２時に締め切りますので、お待ちしてます。

あ、もちろん「これはどうよ？」っていう意見もどかどか送ってください。

次回は南極で凍えます。

では

第６２話：ささささ寒いよおおおおお（前書き）

友人曰く。

「アンケートの締め切り早くね？」

だそうなので、３日位のばします、はい。

第６２話：ささささ寒いよおおおおお

さて、前回E国のN？魚雷によってA国の船数隻が蒸発した。
これにA国は超怒って、議会ではE国へ宣戦布告してしまえ！という意見も
出てきた。これに対してA国大統領は待った！をかける。今の軍事力では
E国にコテンパンにされるのは必然だからである。それは歴史が教えてくれる。
E国は建国以来、他国との戦争で１度も負けたことがないからだ。

大統領が演説を終えると議会の大多数が拍手した。大統領の言う通りだ！
今戦争を始めたらA国ごと蒸発しちまう！

E国への宣戦布告を考えている少数の強硬派は黙ってその様子を見ていた。

歴史ではE国は今まで１度も戦争で負けたことがないと記されている。

しかし、ただ1国だけ、E国と戦争で引き分けになったことがある国がある。
現在の同盟国であるU国である。

15年前に起きたEU戦争と呼ばれたこの戦争は、両国の国境沿いにある油田の
所有権をめぐって勃発した。両国の陸空海で戦闘が行われたが、なかでも当時から
最強だったE国陸軍に真正面から突っ込んでいったU国陸軍との激しい戦闘が1番
有名である。両軍とも一歩も引かずに戦い、気がつくと2週間ぶっ続けで戦闘が
行われていた。

その時、両軍の司令部から射撃中止命令が下り、戦場は静かになった。
何事かと最前線の兵士たちが塹壕から立ち上がると、

E軍兵士「おい、あれって…」

U軍兵士「大統領だ！」

何故か両国の大統領がボクシングをしていた。

みんな「でもなんでこんなところでボクシング？」

実は2人とも学生時代はボクシング部に所属しており、両者ともかなりの腕だった。

5分くらい殴りあった結果、お互いにダウンしておしまいになった。
そして、立ち上がり互いに笑いながら話し始めた。

E「いやあ、強いですな！」

U「あなたも相当の腕じゃないですか」

E、U「HAHAHAHA！」

E「それにしても、お互いかなりの犠牲者が出ていますね」

U「その通りですな。もうそろそろやめにしますか」

E「そうしますか」

U「石油は仲良く半分にしましょう」

E「それが1番ですな。なんで戦争になっちゃったんですかね？」

U「それが1番謎ですな」

E、U「HAHAHAHA！」

E「よーし、E国兵士の諸君！家に帰るぞ！」

U「我が民よ！家族の元へ戻ろう！」

兵士たち「なんかよくわからないけどいえーい！」

と、こんな感じでEU戦争は終結。両国は和解し、新たに同盟を結ぶことになった。

A国議会の会議から2日後…

～インペリアル?級スター・デストロイヤー、ブリーフィングルーム～

「…てなわけで両国は仲良しになりましたとさ、めでたしめでたし」

は「なんやそれ！」

今俺は現地の国の歴史についてみんなに教えているところである。

フェ「戦場でボクシングって…」

ティ「あ、それがもとになった映画『戦場のボクサー』が実にいい映画でね！

見た時感動して泣いちゃったよ！」

「あれは素晴らしい映画だったな。世界で最も売れた映画だったよな」

ス「なんかそれものすごく見てみたいんですけど…」

ギ「うん、とても気になるね…」

「この任務が終わったら、すこしE国に入って観光でもするか?」

な「行きたーい！」

ティ「じゃ決まりね」

「艦長、『アイシクル』に到着しました」

「了解。じゃあみんな南極に降りるぞー」

みんな「はーい」

第2ハンガーベイに行くと、GR－75中型輸送船が待機していた。

キャ「これで降りるんですか？」

エ「戦闘艦じゃないですね」

「これはただの輸送船だよ。護衛は重武装型ラムダ級シャトルだ」

シグ「6課のヘリポートで上にいたやつか」

「そそ。A国に攻撃される可能性があるしね」

ハンガーベイからゆっくりと出撃したGR－75中型輸送船は4機のラムダ級を
つれて、光学迷彩をかけて南極へと降りていった。

～南極～

「よし、到着。全員防寒具着たか？」

ヴィ「これ動きづらいぞ！」

ザフィ「動く雪だるまみたいだな」

シャ「ヴィータちゃんかわいい～」

ヴィ「うるせえ！抱きつくんじゃねえ！」

テ「ウィルさん、なんでこんなの着るんですか？バリアジャケット展開しとけば
　いいのでは？」

「確かにそうだが、もし見付かった時のことを考えるとそれはよくない。
　考えてみろ、こんなクソ寒い場所でスバルがへそ丸出しの半そで姿で突っ立ってたら
誰だっておかしいと思うだろ？」

は「そうやな」

ティ「じゃあ開けるわよ」

ティーナがパネルを操作して、扉が開いた。

ひゅ～

「う～ん、やっぱ少し寒いな！」

ティ「さすが南極だね！」

ザフィ「一面真っ白だな…美しい」

その後ろでは。

ＦＷ＋ギ「さみいいいいいいいいい！！！」

な「フェイトちゃんんんんん！！」

フェ「なのはあああああああ！！」

なのはとフェイトは抱き合っているし。

シグ「おいヴィータ！目を覚ませ！」

ヴィ「うわ～いっぱいアイスがある～」

は「ヴィータ、それ幻覚や！」

ザフィ「…これで仕事になるのか？」

「…努力するよ」

「エディ、今何度だ？」

「えーっとマイナス９２度ですね」

ス「寒すぎですよ！！」がたがた

ティ「ちなみに９５，５度になると、むき出しの肌は６秒で凍りつくのよ？」

「マイナス１００度になると、どんなに体を動かしても３４秒で血液が凍るぞ」

みんな「」

とりあえず全員に小型ヒーターを持たせてから格納庫に積んであった機械を
引きずりだす。

な「ところでウィル君、例のロストロギアはどこにあるの？」

「ここだよ」

フェ「え？どこにも見えないけど？」

「だからここだって」

俺は足元を軽く蹴る。

「この下に埋まっているんだよ」

みんな「えええええええ！！」

シグ「つまりこの寒い中皆で地面を掘るのか？」

「んなわけあるかい！みんな死んじまうよ」

ティ「そこで登場するのがこれ！」

ティーナはおろした機械をみんなに見せる。

ティ「じゃじゃん！シールドマシン！」

みんな「しーるどましん？」

「本来これは地下鉄のトンネルとかを掘るのに使うんだ」

な「あ、これ新聞で見たことあるの」

フェ「それでこれをどうするの？」

「まずこれを縦にします」

〈マァキシマムストレングス〉

俺はシールドマシンを両手で持ち上げて縦に置きなおした。

みんな「え」

「んであとはよじ登ってエンジンかければおしまいだ」

エ「なんでこんなに大きな機械を軽々と持ち上げられるのかは聞かないでおこう…」

キャ「お父さんだから、っていう理由でいいんじゃない？」

「それで、ライトニングはここで周辺の警戒に当たってくれ。
一応結界は張ったけど、念のためな」

フェ「わかった」

シグ「心得た」

「スターズとギンガはこいつに乗って地下に潜るぞ」

な「わかったの」

ヴィ「おっけー」

「はやては輸送船で待機しててくれ。なんか連絡きたら教えて」

は「あいあい」

「そんじゃーレッツゴー！」

シールドマシンは氷を食らいながら地面に潜っていった。

シグ「周囲を警戒、といったが…」

フェ「いっぱい雪もあるし、せっかくだし、ね？」

キャ「エリオ君、雪だるま作ろう！」

エ「うん！」

ライトニングは雪で遊んでいた…

その頃、A国ではとんでもないことが起きていた。

例の強硬派がクーデターを起こしたのだ。軍部を完全に掌握し、穏健派を全員
使われていない核シェルターにぶち込んだ。そしてE国とU国に宣戦布告した。
A国の国民は、クーデターが起きたことを知らされていなかったので、
なんで突然宣戦布告?と誰もが思っていた。

強硬派は、軍事力では確実に負けているので、少々せこい手を使った。
A国内にいたE国、U国の民間人を全員刑務所にぶち込んで人質にしたのだ。

「こいつらを返して欲しかったら、おとなしく軍を引け!」

という声明も発表した。

これを受けてE国大統領はU国大統領と会談。人質どうしようかとか
A国の突然の宣戦布告おかしくね?とかを話し合った。

その時、E国情報部がA国でクーデターが起きたこと、A国大統領及び

その側近たちは監禁されていることを報告した。

それを聞いた大統領は、

1、両国のデフコン（Ｄｅｆｅｎｓｅ　Ｒｅａｄｉｎｅｓｓ　Ｃｏｎｄｉｔｉｏｎの略）を5から2に。

2、E国、U国の特殊部隊による民間人救出作戦の開始。

3、A国強硬派は皆殺しＤＡ！

4、できれば穏健派の救出

を指示。U国大統領もそれに同意した。

～E国国防省～

ここでは、民間人の救出作戦を立てていた。

偵察衛星の情報から、刑務所は海に囲まれた孤島にあることが分かった。

捕まっている民間人の数はおよそ３００人。
そこで、作戦立案者が立てた計画はこんな感じ。

１、まず海軍特殊部隊の偵察小隊を潜水艦から出撃させて、島に上陸、刑務所を偵察。

２、次に刑務所を襲撃する本隊を空母から出撃させる。途中でヘリから下りてボートで上陸。

３、皆殺しタイム！

４、空母から飛んできた大型ヘリコプターに民間人と一緒に乗って撤退。

完璧じゃね？ということで作戦は動きだした。

それと並行して、Ｕ国海軍部隊と合流したＥ国海軍部隊はＡ国に向けて
全速力で航行していた。目的はＡ国海軍の殲滅である。

Ａ国海軍も全ての艦艇が海に出て、両国の部隊を迎え撃つ準備をしていた。
両国の部隊がぶつかるのは時間の問題だった。

しかし、E国とU国の情報部は知らなかった。
A国海軍が極秘裏に従来型の核兵器を手に入れたことを…

第６２話：ささささ寒いよおおおお（後書き）

寒いですね～3月なのに。

次回は遂にブロウアウトを発見します。

では

第６３話：Ｑ、まだですか？　Ａ、まだです。

がりがりがりがり

どうも、今南極大陸に穴をあけているウィリアムです。

な「ウィル君！！」

「進めー！」

ヴィ「おいウィル！！」

ティ「イーハー！！」

ス「ウィルさんってば！！」

「聞こえん！！」

ギ「じゃあ止めます！」

ギンガがパネルを叩いてシールドマシンを止めてしまった。

「なんだよ？」

ヴィ「さっきから呼んでたんだぞ！」

「すまん、全く聞こえなかった」

な「ぶー。でね、例のロストロギアはどのくらい地下に埋まっているの？」

ティ「えーっと、約７５０ｍ下だね」

テ「えええええ！？」

ス「ふ、深すぎません？」

な「今何ｍまで進んだの？」

「７８ｍだな」

ギ「ていうか一日でそこまでいけるんですか？」

「んなわけないだろう。何日かかけてゆっくりと掘っていくさ」

な「なるほどね～。それなら私のスターライトブレイカーで一撃じゃない？」

ヴィ「そう言えばそうだよな。なんでそうしないんだ？」

「…威力が強すぎる」

な「え」

ティ「なのはちゃんの砲撃を使うと、南極大陸全体に被害が出る可

能性がある、
　ってエディが言ってたから…」

な「」

ス「えー…」

テ「さすがなのはさん…」

そろそろ出発しようと思い、パネルを操作するが。

「あれ、エンジン掛からねえ」

ヴィ「故障か？」

「さぁ？」

よく見ると警告表示が幾つも出ていた。

「油圧系統の異常、か…あ！そういうことか！」

な「な、なになに？」

「戻るぞ！」

そう言うと俺はバリアジャケット姿になって、シールドマシンのケツを片手で掴む。
そして上に向かって高速で飛び始めた。

な「にゃあああああ！！！」

ス、ギ「うひいいいいい！！」

テ「きゃあああああああ！！」

後ろの方から悲鳴が聞こえるが、この際関係ない！

あっという間に地上に出て、そこで見たものとは。

フェ「シグナム！それ！」

シグ「ぶっ！…テスタロッサ、やったな？食らえ！」

キャ「そーれ！」

エ「負けないよ！」

は「うちも参加するで！」

雪合戦をしているライトニングとはやてだった。

な「みんな…少し頭、冷やそうか？」

フェ「なななななのは？」

「んなことはどうでもいい！エディ、今何度だ？」

「マイナス９７，８度です。あ、どんどん下がっていく」

「全員輸送船内に退避！急げ！」

シグ「何が起きたんだ？」

ティ「これから起こるの！急いで！」

ガシャン！！

格納庫の扉がでかい音と共に閉められた。シールドマシンもきちんと収納した。

な「フェイトちゃん、はやてちゃん、シグナム、なんで遊んでいたのかな？」

フェ「え、あ、いやその…」

シグ「久しぶりに雪を見て、その、気分が高揚したというか」

は「2人が遊んでいるのを見て楽しそうやな～と思って」

な「…ＯＨＡＮＡＳＨＩしよう？」

フェ、は、シグ「」がくがく

「なのは、それは後回しだ。ちょっとみんなに説明しなきゃならんことになった」

隣でシールドマシンを分解していたウィルが立ち上がり、みんなにあるものを見せた。

シャ「黒いひも？」

ウィルが持っているものは、黒いひも状の物体Ｘだった。

は「なんやそれ？」

ザフィ「…わずかに油のにおいがするな」

「ザフィーラ正解。これ油圧系統のオイルが凍ったものだ」

みんな「えええええええ！！！！」

ス「あ、油って凍るんですか！？」

ティ「はいはい、スバルちゃんにはあとでゆっくり説明するからねー」

「んで、エディ、今の外の気温は？」

「わーお、マイナス１０１度です。最低記録を更新しましたね」

「というわけで外に出たら死ぬからね」

ギ「それじゃあ作業ができないじゃないですか？」

フェ「シールドマシンも動かない、外にも出られない…最悪だね」

「もう一つ悪いニュースだ。バリアジャケット姿で外に出ればいいんじゃね、

と思ったんだが、この気温だとデバイスが機能不全を起こす可能性がある」

シグ「つまり、デバイスも動かないと？」

「正解」

は「…もう詰んどるやないか」

キャ「どうするんですか？」

「とりあえずこの油圧系統の修理をして、あとは気温が上がるように神様にお祈りでもするか」

エ「お、お祈りって…」

「あ、そうだ。Ａ軍とＥＵ連合軍の試合でも観戦しようか？」

ティ「それさんせーい」

「じゃあスイッチオン！」

「あ、なのは、俺の話は終わったから好きなだけＯＨＡＮＡＳＨＩしてこい」

な「ありがとうなの。それじゃあ…」

フェ、は、シグ「ひっ！」

な「ＯＨＡＮＡＳＨＩの時間なの」

フェ、は、シグ「ぎゃあああああああああああ！！！」

～南極大陸、A国海兵隊仮設基地～

ここでは2，０００名の精鋭海兵隊員が基地を設営していた。
彼らは屈強な体と、その不屈の精神で任務に挑んでいた。
しかし、その海兵隊員でさえ、今のこの状況はつらいと思っていた。

E国海軍が南極封鎖作戦を実行しているため、物資の海上輸送が

不可能になった。出来るのは輸送機からの投下のみ。だがそれだけでは
足りなかった。南極はその土地から採れるものに頼って生活してゆくことの
できない、唯一ともいえる環境にある。燃料、食料、住居全てを外部から
持ち込むしかない。氷を溶かすにも燃料が必要なことを考えれば、飲料水だって
持ち込まなければならない。

大雑把に計算すると、２，０００名の海兵隊員が南極の厳しい冬を越えるために
必要な物資は約２０，０００トンである。それだけの量の物資を空輸する能力は
Ａ国にはなかった。

しかし、そんなことを心配する必要はなくなった。

アルベルト・ディアス少尉は今日の基地警備担当だった。
いつ周りを見ても白、白、白。なんにもない。
いつまでここにいればいいのだろうか、とディアスは考えた。
ここでは満足に飯を食べることもできない。Ｅ国の研究者たちが残

していた
食料はもう全てなくなってしまった。本国から補給が来る、と聞かされていたが、
実際に来たのはほんの少しの食料だけだった。
こんなクソ寒い場所からさっさと引き上げて、実家でお袋の作るおいしい
料理が食べたい、とディアスは考えていた。

だが次の瞬間、急激に周りが冷えてきたので驚いた。隣を見ると
部下のホルヘ・ロドリゲス軍曹が床をのたうちまわりながら痛みに
苦しんでいた。

「おい軍曹！どうした！？」

だが、軍曹は答えることができなかった。ディアスが周りを見渡すと、他の
兵士たちも同じように苦しんでいた。

これは敵の攻撃かもしれない！そう考えたディアスはそばにある制御装置を
叩いて、基地全体に非常警報を鳴らそうとした。しかし、ウィルのシールドマシンと
同じように、油圧系統が凍りついていたので動かなかった。

やがてディアスにも、全身に針をつきたてられるような痛みが走り、その後
骨が痛み出した。筋肉に包まれた骨がそのままねじられるような、

すさまじい痛み
だった。全身の骨がバラバラに砕けそうだ！思わず息を吸い込んだ
途端、肺に
焼けつくような痛みが走った。まるで炎をそのまま吸い込んだかの
ように。

それでもディアスは歩き続けた。この事態を司令官に伝えなければ！

だがその動きはとても遅いものだった。あまりに寒いので五感がマヒしていた。
凍えているにもかかわらず、とても熱くてたまらなかった。
そして肺の痛みも増してきた。のど元を押さえて息を殺し、再び息を吸いこもうとしたが、
すでに呼吸器官は停止していた。眼球が凍り始め、網膜の隅々にまで張り巡らされた
毛細血管もたちまち氷結した。

一時的ではあるがすさまじい威力のブリザードは、あっという間にA国海兵隊員
2，000名の命を奪っていった。そのことをA国軍司令部が知るのはまだ先のことである。

～南極近海上空～

ここでは1機の超音速爆撃機が成層圏を飛んでいた。その爆撃機の爆弾倉の扉が開き、
中から1発の白いミサイルが投下された。ミサイルは後部から火を吹いてまっすぐ
上に向かって飛んで行った。

その上、宇宙空間に1基の人工衛星がいた。A国の〈ナスカC〉偵察衛星は複数の
太陽電池板を調節して、太陽の光を捕まえようとしていた。この衛星はA国の保有する
数少ない偵察衛星の1つであり、現在の任務は接近してくるE国海軍第2艦隊と
U国海軍第5航空艦隊の写真を撮って、地上のA国軍司令部に送っていた。

だが突然、衛星のセンサーが強いレーダー波に反応し、続いて衛星軌道に向かって
上昇してくるロケットの熱流を探知した。

E国やU国の偵察衛星なら、人工知能が潜在的脅威を検出し、回避

行動や対抗措置を
講じていただろう。しかし誠に遺憾なことに〈ナスカC〉は単純な
人工衛星だった。
もはや決して行われない地上送信に備えて、自らの死の記録をひた
すら記録し続けた。

～爆撃機内部～

副操縦士「ビンゴ！偵察衛星破壊成功です」

機長「間違いないのか？」

操縦桿を握る機長は落ち着いた口調で聞く。

副操縦士「ええ、〈ナスカC〉の中央部に命中し、残りの残骸は大
気圏に突入する
　際に全て蒸発するでしょう」

機長「わかった。オリオン1よりアークエンジェルへ。任務完了。
帰還する」

「アークエンジェルよりオリオン1へ。見事な仕事だった。ただち
に帰還せよ。
　よく冷えたビールがお前たちを待っているぞ」

機長「ははっ、そいつはいいニュースだ！」

～A国軍司令部～

「偵察衛星からの応答がありません。おそらく…」

「くそ！海兵隊とはまだ連絡がつかんのか？」

「通信状態がかなり不安定ですので…」

「もうすぐE国とU国のクソッタレが来るというのに！」

「やむを得ん。あれを使う時が来たな」

「しかしそれでは！」

「他に方法などない！」

「…わかりました」

～E国国防省、地下指揮所～

E国大統領「それで現状は？」

参謀A「A国偵察衛星は全て撃墜しました」

E国大統領「素晴らしい！連中に動きは？」

参謀B「海軍部隊はA国沖で待機したままですが、空軍基地では出撃準備と
　思われる動きが。すでに連中の給油機と早期警戒機が出撃しています」

E国大統領「つまりそろそろ攻撃が来ると？」

参謀A「おそらくそうでしょう。それと救出作戦の方ですが、偵察部隊の報告によりますと、刑務所を警備しているのは32名の兵士だそうです。大統領の許可がいただければ、ただちに空母から本隊を出撃させ、民間人を救出いたします」

E国大統領「許可する。我が国民を救いだすんだ！」

参謀A「了解しました！」

参謀B「大統領、こちらをご覧ください。これは昨日撮影したA国の南極仮設基地です」

E国大統領「ほう、短期間でここまで作ったのか」

参謀B「それで、これがつい10分前に撮影された画像なんですが…」

E国大統領「ん？変わりないじゃないか？」

参謀B「確かに見た目は変わりないのですが、赤外線画像を見てください」

E国大統領「おや、何にも反応がない…ということは！」

参謀Ｂ「ええ、おそらく全滅したものと考えるべきです」

Ｅ国大統領「何が原因だ？いきなり２，０００名の兵士が死ぬことは通常じゃ考えられん」

参謀Ｂ「その通りです。毒ガスの流出事故も疑いましたが、そのような反応は
　見られませんでした。なにより、Ａ国軍の司令部はこのことに気が
　付いていないようです」

Ｅ国大統領「…ちょっと待ってくれ」

プルルル…

「はいもしもし」

Ｅ国大統領「おお、ウィルか。私だ」

「おう、どうしたんだ？」

Ｅ国大統領「今南極にいるんだろ？」

「そうだよ、全く死にそうになったぜ」

Ｅ国大統領「ペンギンでも襲われたのか？ＨＡＨＡＨＡ！」

「今頃ペンギンもカチンコチンだろうよ。こっちは今超寒いんだよ。
今何度か教えてやろうか？マイナス１０１度だぞ！」

E国大統領「マイナス１０１度!?だからか！」

「ん?何が?」

E国大統領「…南極に侵攻したA国海兵隊基地から熱源反応が消えた。

おそらく全滅したんだろう」

「…なるほどね。明日そこに行ってみるよ。この寒さでこっちも仕事ができないし」

E国大統領「それは助かる。写真とかいっぱい撮ってくれ」

「おうよ!じゃな」

E国大統領「…そういうわけで寒さで凍え死んだらしいな」

参謀B「クソワロスｗｗｗ」

参謀A「自然の力とは恐ろしいものですね」

E国大統領「全くだ。とりあえず今は救出作戦を優先してくれ。それと、

A国軍から攻撃があったら私の命令を待たずに反撃してくれて

結構だ。あらゆる兵器の使用を許可する」

参謀A、B「了解！」

～南極～

な「ウィル君、今の電話は？」

「E国大統領」

は「またかい！で、今度はなんやて？」

「ここから北に３０？いったところにあるA国海兵隊基地が、さっきの超低温寒波に
よって壊滅したそうだ。２，０００名の兵士が死亡したものとみられる」

フェ「２，０００人も！？」

キャ「ひどい…」

ティ「いつの時代になっても、人類は自然の力には勝てないわね」

「まったくだな。それで明日はその基地の調査をしてくる。だから採掘作業はティーナが指揮してくれ」

ティ「はーい」

ス「ウィルさん一人で行くんですか？」

「いや、2，000人の死体が見たいなら付いてきてもいいけどさ、いやだろ？」

みんな「いやです」

「じゃ決まりな」

続く…

第６３話：Ｑ、まだですか？　Ａ、まだです。（後書き）

あ、ブロウアウトとご対面まで行かなかった…

次回こそ！

では

第６４話：これが…ブロウアウト？

～A国近海、民間人収容所の島～

今ここに9隻の膨張式ボート（ゾディアック）が浜に到着した。乗っているのは
E国海軍特殊部隊の精鋭たちだった。先に偵察をしていた部隊の1人が浜で
赤外線ビーコンを起動させていたので、攻撃本隊は迷わずにくることができた。
部隊はそれぞれの役割を果たすために島じゅうに散った。

ある小隊は敵通信設備の破壊を命じられていた。しかし、刑務所の無線室には
近づけそうもない。おまけにヘリポートには2機の攻撃ヘリが、桟橋には小型の
哨戒艇が停泊していて、それらの無線装置も無力化しなければならなかった。

最初はこっそり近づいて爆弾仕掛けてポチッとな！作戦をしようと考えたが、
それでは時間がかかりすぎるのと、もしばれて即戦闘が開始された時には
まだ無線機が生きている、という状態なので、手っ取り早くロケットランチャーで
吹き飛ばすという方法になった。哨戒艇には2発、ヘリにはそれぞれ1発、無線室は

他の部隊に任せることにした。配置についた彼らは攻撃開始時刻まで待機する。

別の小隊は刑務所の色々な場所を木端微塵にするために、大量の爆発物を
運んでいた。まず外壁を吹き飛ばすのに、鞄爆弾2個を使う。ちなみに
鞄爆弾1個には18?の高性能爆薬が詰まっている。次に正門を吹き飛ばすのに1個。
そして管理棟兼通信センターの爆破には4個の爆弾を放り込むことになっていた。

攻撃部隊の指揮官は全ての部隊が配置についたことを確認し、通信装置で
第2艦隊の空母に最終確認をとった。空母に乗っている第2艦隊司令官が
許可を出したため、指揮官はゴーサインを出し、自らも武器を持って突撃した。

「了解、攻撃開始」

そう言ってサイレンサー付きのスナイパーライフルの引き金を引い

たのは、刑務所から
少し離れた場所に隠れていたギリースーツを着たスナイパーだった。
その弾丸は、まっすぐに刑務所に４つある監視塔の上で突っ立って
いた警備兵の
頭に吸い込まれていった。その警備兵の頭がスイカみたいに割れる
のを確認している
間に、他の３つの監視塔でも警備兵が倒れた。他のスナイパーが片
付けたのだった。

「やれ！」

無線機の無力化を命じられていた小隊は、攻撃開始の命令と共にロ
ケットランチャーを
構えて、引き金を引いた。高性能爆薬がたっぷりと詰まった砲弾は
甲高い音と共に
目標に吸い込まれていった。

哨戒艇に飛んで行ったロケット弾の１つは、船体中央に命中し無線
室を粉々にした。
もう１発は、後部甲板に乗っていたミサイル発射機に命中し、中に
入っていた
対艦ミサイルが誘爆した。その結果哨戒艇は大爆発を起こして沈没
した。

攻撃ヘリコプターに発射された砲弾は、２つともコクピットに命中し
ヘリを２つの巨大な火の玉にした。その数秒後、ヘリポートに設置
されていた
小型の燃料タンクが爆発し、３０ｍの高さまで火が燃え上がった。

外壁と正門を粉々にした部隊は、そのまま内部に突入し、まっすぐ管理棟に向かった。
何事かと出てきた警備兵は、銃弾の嵐の中次々と倒れていった。そして管理棟の窓から
４個の爆弾を放り込んで全力で逃げた。３秒後、管理棟は大爆発を起こして崩れた。

これで無線装置は完全に破壊し、敵警備兵も殲滅した。
独房にいた民間人は、攻撃してきたのがＥ国の兵士だとわかると歓声をあげた。
外に出るとそこには空母から飛んできた大型輸送ヘリが着陸していた。

「５０人ずつ乗って下さい！大丈夫です、必ずここから脱出できます！」

１機のヘリに大人が５０人乗れるので、全ての民間人を運び出すには６機いる。

１５分後、全ての民間人が脱出して、攻撃隊も帰るか、と思っていたが。

「隊長！！こちらに来て下さい！！」

建物内を捜索していた部下から悲鳴のような通信を聞いた指揮官は、急いで中に戻り

部下を探した。

「何があった！」

「こ、これを…」

部下がある部屋の中を指さしている。その部屋を覗き込むと。

「おいおい、それはないぞ…」

部屋の中にあったのは、今では懐かしい、だが充分な破壊力を持っている従来型の
核兵器だった。

「急いでこの島から脱出だ！」

この攻撃隊はなんでもできる特殊部隊だった。しかしまともな装備もないままの
核兵器解体作業は不可能だった。指揮官はこの現状を空母にいる司令官に伝えると、
迎えに来たティルトローター機に乗り込み、島を後にした。

～A国軍司令部～

「あの、すいません」

「なんだ？」

「島と連絡がつかないのです。無線の状態が良くないのか…」

「どのくらいつながらない？」

「３０分前から呼び掛けているのですが…」

「くそ！やられたか！国防長官！」

「はっ！」

「ただちに起爆させよ！」

「…本当によろしいのですか？」

「構わん！さっさとやれ！」

「…わかりました」

国防長官は首からかけていた鍵をパネルに差し込んでひねって、コードを打ち込み、
起爆ボタンを押した。

その瞬間に島に設置されていた核兵器の起爆装置が作動した。

攻撃部隊指揮官は、空母に帰還途中のティルトローター機に乗って外を眺めていた。
が、突如夜空が消え、後方から眩い光が飛び込んできた。
まさか、と思いながら後ろを見てみると、さっき刑務所があった島は一面火の海になっていた。そしてその島は今後数世紀にわたって放射能が消えない
不毛の場所となった。

～南極大陸、A国海兵隊仮設基地～

「いやはや、ひどいものだな」

その頃、ウィリアムは1人でカメラを構えながら基地内をうろうろしていた。
昨日の寒波の影響で壊滅した基地の様子を見に来たのだが。

立ったまま死んでいる兵士もいれば、おそらく地面で苦しみながらのたうちまわったのであろう兵士の死体もあった。それらの死体はもう雪に埋まりかけていた。

俺はその兵士たちを前にお祈りを捧げた。

「…どうか安らかに眠りたまえ」

簡単なお祈りを済ませた後、俺は近くにあったプレハブ小屋の捜索を開始した。

「ん?まだ温かい?」

ドアを掴んだ時にそう感じた俺は、拳銃を構えながら中に突入した。

???「誰だ…助けに、きてくれたのか…?」

そこにいたのは1人の兵士だった。そばには火が付いていたであろう書類の
燃えカスと、食料の入っていた袋が落ちていた。

「しっかりしろ!大丈夫か?」

俺は武器をしまうとその兵士のそばにいったが。

兵士「くそ…ぼんやりとしか見えない…あんたは…?」

「救出部隊だ。すぐにここから出れるぞ」

兵士「他のみんなは?…指揮官は無事ですか?」

「…残念だが。ここで何が起きた?」

俺は、あの寒波の中どうやってこの兵士が生き延びたのかを知りたかった。

兵士「あの時、俺は指揮官と一緒に歩いていたのですが、突然寒くなったともったら
　周りの兵士たちが苦しみ始めて。それで上から口笛のような音がしたので
　上を見たら、急に目が見えなくなってしまったんです」

「なるほど、それで？」

兵士「私は指揮官にこの建物に押し込まれました。そして火を焚いて待つように
　言って、指揮官は外に出てしまいました。私はぼんやりとしか見えない目で
　ゴミ箱に入っていた書類に火を付けて暖をとっていました」

「…多分君のきいた音は、氷の結晶をたっぷり含んだ気流が発生した時に聞こえる
　音だろう。その直後に君の眼は凍りついた。ここで暖をとっていたから少しずつ
　視力が回復したのだと思う」

兵士「それで、私は助かるのですか？」

「もちろんだとも。だが今はゆっくり休むがいい。君はかなり疲れている」

兵士「わかりました」

「これを飲んでゆっくり眠ればいいさ」

兵士「あ、どうもいただきます」

俺が渡した液体を飲んだ兵士はそのまま眠ってしまった。

「さてこの兵士の名前は…んで実家は…ほいっと」

俺は兵士の名前と実家の住所を割り出して、座標移動（ムーブポイント）を使ってそこに飛ばした。

「お、これは…」

この小屋は他とは違い全部凍っていなかったため、色々なものが見つかった。

例えばノートパソコン。中を見てみると色々な情報が盛りだくさん。

今後の部隊の展開情報とか、攻撃方法とか。

「もーらいっと。ていうかもう帰るか」

気が付くとだいぶ時間がたっていたので、乗ってきた７４－Ｚスピーダー・バイクにまたがりその場を後にしようと思っていたが、突然地平線の彼方から轟音と共にどでかい火球が盛り上がるのが見えた。

「あれはＮ？兵器じゃないな…てことはＡ国の奴ら、核兵器持ってんのか…」

俺は嫌なこと知っちゃったなぁとか考えながら、みんなの所に戻って行った。

がりがりがり！！

フェ「ティーナちゃん！！」

ティ「なんだって！？」

シグ「おいティーナ！！」

ティ「なんだって！？」

キャ「エリオ君！それ止めて！！」

エ「えい！」

ティ「なによ！？」

フェ「これうるさすぎるね…」

シグ「全くだ、それで今何mだ?」

ティ「えーっと、４５７m！」

エ「結構潜りましたね」

アギト「にしても寒いぜ」がちがち

ティ「そろそろ戻りましょうか」

上に戻ると。

ツ「はやてちゃん！助けてください！」

は「あっはっはっはっは！」

ア「ぷっ！妹よ、ナイスだ…」

な「ツヴァイが雪だるまになってるw」

その横では

ス「うおりゃあああ！！」

ギ「てりゃあああああ！！」

テ「２人ともやりすぎよ！！」

ヴィ「ふがっ！」

雪合戦の最中だった。

フェ「やぱり雪合戦したくなるよね」

シグ「そうだな、ん？」

その時ウィルが戻ってきた。

「いやっほ～」

な「あ、おかえりなの」

「ただい～」

シャ「え、『ま』は言わないの？」

「そんな気分です、はい。とりあえず飯だ！」

は「それでウィル君、基地の方はどうだったんや？」

「何もかも凍っていたよ。建物も、兵器も、人も」

フェ「そう…」

「でも1人だけ生存者がいたよ」

な「ほんと！？その人は？」

「めんどくさいから治療してA国のそいつの実家に送っといた」

テ「そうですか」

「で、そっちはどんだけ掘った？」

ティ「午前中に457mまで掘ったの！」

「そうか、なら飯食ったら再開だな」

みんな「はーい」

で、午後。

「よし！止まれ！」

俺はまたスターズのみんなと一緒にがりがりしていた。今の深さは７４８ｍである。

「ここからは機械じゃなくてハンマーとつるはしで掘っていくぞ！」

ヴィ「よっしゃあ！あたしの出番だな！」

「頼むからこんな地下でフルパワーでたたくなよ？」

ヴィ「わかってるって」

かつーん、かつーん。

１０分後。

かつーん、かちん！

ス「あ！ウィルさん！何かありますよ！」

「どれどれ、って」

な「あれ？」

ヴィ「いや、それじゃねえだろ」

ギ「そうですよね」

「えっと、エディ？」

「それがブロウアウトで間違いないと思います」

みんな「これが！？」

だって今俺たちの目の前にあるのは。

どでかい真っ黒卵なんですけど。

「こんなんでどうやったら半径２００?圏内を全てのものを吹っ飛ばせるんだ?」

な「さぁ?」

「とりあえず引き上げるか」

次回に続く!

第６４話：これが…ブロウアウト？（後書き）

ブロウアウトは卵でした。
きっと卵かけご飯にすればおいしいでしょうね。
作者は卵かけご飯は大嫌いですが。

次回はブロウアウトの正体について。
では

第６５話：中には何が入っているのかな？

前回、卵を見つけました。

「ぬおおおおりゃあああああああ！！」

な「頑張ってウィル君！」

「お、もい、んだ、よ！！」

ヴィ「ウィルが重いって言うの初めて聞いたかも」

「なんでストレングスモードにしているのに重く感じるんだこれ？」

「はぁ、つかれたー」ぐてー

フェ「お疲れ様」

シグ「で、これがブロウアウトなのか？」

「多分ねー。とりあえず疲れたし、もう夜だし明日にしようぜ」

は「そうやね」

な「これどうするの？」

ティ「台車持ってきたわよー」

「じゃあこれに乗っけてと！」

だが、ウィルが卵を台車に乗せた途端に台車はペチャンコになってしまった。

シャ「あらまあ」

「…めんどくさい、ここに置いておく」

ヴィ「いいのかよ！？」

ティ「目印をつけておいて、と」

「これでよし、じゃあ中に戻ろう」

その日の作業はこの時点で終了した。

～E国国防省、地下指揮所～

参謀A「大統領！民間人の救出作戦が成功しました！」

E国大統領「素晴らしい！よくやってくれた！」

参謀B「我が軍の兵士にも民間人にも死傷者はいません」

E国大統領「そうか、それであの核爆発は一体何だったんだ？」

参謀A「攻撃部隊指揮官の報告では、タイマー等による時限起爆装置ではなく、
外部からの遠隔起爆装置の可能性が高かったとのことです」

E国大統領「つまりA国のクズ共は最初から我が国民を核の炎で吹き飛ばそうと
していたのか！」

参謀B「残念ながらそういうことでしょうな」

E国大統領「なんてやつらだ！よし、記者会見の準備をしてくれ。
この事実を

全世界に公表する」

参謀Ａ「分かりました。それとこれを」

Ｅ国大統領「ん、これは…」

参謀Ｂ「大統領のおっしゃっていた極秘回線から届いたデータです。おそらく
壊滅したＡ国海兵隊南極仮設基地のものかと」

Ｅ国大統領「おお、そうか。御苦労さま」

報道官「えーそれでは、これより臨時の記者会見を開きます。皆さま、
Ｅ国大統領です」

Ｅ国大統領「どうも。突然集めて申しわないが、これは重大な内容だ。
本日、我が国の海軍特殊部隊の手によって、囚われの身と
なっていた我が国民３００名の救出が成功したことを
ここに発表する！」

記者「おお！！」

E国大統領「だが、A国は残虐非道な連中だった。この映像を見てもらいたい。
これは民間人を救出した隊員のヘルメットについていた小型カメラの映像だ」

『クリア！次の部屋は、ん？これは…なんてこった！』

記者A「おい、あれ核爆弾じゃ！？」

記者B「まじかよ！？」

『隊長！！こちらに来て下さい！！』

『どうした！？』

『こ、これを…』

『おいおい、それはないぞ…急いでこの島から脱出だ！』

E国大統領「とまあ、こんなことがあったのだ。我が軍の兵士が脱出した
後に、島で核兵器が爆発した。そして指揮官の報告によると、
ここが重要なんだが、この核兵器はタイマー等による時限起爆装置
ではなく、外部からの遠隔起爆装置によって爆発した可能性が

非常に高いとのことだ」

記者「な、なんだって～！？」

E国大統領「つまり、A国は最初から我が国民を核で殺すつもりだったのだ！
これは許せることではない！従ってE国は同盟国であるU国と
協力し、A国に対して断固とした措置を取るつもりである！」

報道官「では質問のある方はどうぞ」

記者A「大統領！その断固とした措置の中には軍事行動も含まれるのでしょうか？」

E国大統領「奴らは我が国とU国に対して宣戦布告をしているのだから、
我々は遭遇するA国の航空機・車両・艦船は全て破壊する」

記者B「A国が核兵器を保有していることはご存知でしたか？」

E国大統領「残念ながら寝耳に水だったよ」

記者A「A国が核兵器を使用したので、E国軍もN？兵器を使用するのですか？」

E国大統領「N？兵器ならもう使っているし、これからもバンバン使うよ？」

そんな感じで記者会見は終わった。

その夜遅く、E国大統領はお隣U国大統領と電話で話していた。

E「いやほんと勘弁してほしいよ。核兵器持っているとか聞いていなかったし」

U「そのことでいいニュースがありますよ。奴らがどこから核兵器を調達したのか。
それをうちの情報部が突き止めました」

E「おお、それはありがたい。で、どこなのかね？」

U「あなたの大好きなB連邦ですよ」

E「……」

B連邦とは、6年前に突然E国に宣戦布告・侵攻してきた国家である。
陸軍の兵力はE国より多かったので勝てると思ったのだろう。だが結果は
E国の圧勝に終わった。そしてB連邦から大量の賠償金をもらい、さらに

領土の一部も奪った。
だが、B連邦は一度負けたくらいでは諦めなかったらしく、今でも国境近くに
軍隊を配備しており、時たま撃ちあいになることもある。

E「…感謝するよ。何が欲しい？」

U「新しい原子炉の設計図は駄目かな？」

E「交渉成立だ。それだけの価値のある情報だった。ありがとう」

一度電話を切った大統領は、次にB連邦のトップに電話をした。

B「はい、B連邦大統領でｓ」

E「Bィィィィィさんよォォォォォォ！！何してくれてんですか～？」

B「な、何のことですかな、Eさｎ」

E「とぼけるんじゃねえよ。あんたの国に保管されていた廃棄予定の核兵器
約１５０発をA国に売りさばいたことはわかっているんだ。きちんと証拠も
揃ってるぞ！」

B「ギクッ！そ、それは初耳でｓ」

E「初耳だと?それじゃあ、核兵器売買契約書にお前の署名があるのは
　どういうことか説明してくれるかな?」

B「……」

E「まあ、答えないならいいさ。この書類を全世界のマスコミに送りつけてやる。
　短い間だったが、軍隊を持ててよかったな?」

6年前のEB戦争で壊滅したB連邦軍は、E国の古くなった装備を購入して
軍隊を再建したのだった。

E「さてと、じゃあ俺は今から国防省で会議なんだ。とある連邦への侵攻作戦を
　考えなきゃならんのでな。それじゃあ」

B「すいませんでした!!なんでもするので許して下さい!」

E「言ったな?それじゃあね…」

E国大統領の”ちょっとした頼みごと”をB連邦大統領は従うしかなかった。

翌日

「さて、エディ、この中には何が入っている？」

俺たちは掘った穴から引きあげたどでか真っ黒卵を前にしていた。

「それが、わかりません。X線でスキャンしてのですが中が見えないので」

な「それじゃあどうするの？」

ティ「とりあえず封印、と思ったけど中に何あるのか分からないましないほうがいいね」

「じゃあユーノに聞くか」

俺はそばにあるパネルを叩いてユーノを呼んだ。

ユ「やあウィル、ってなにその卵？」

「これがブロウアウト、らしい。少なくともこの中からブロウアウトの反応が出ている」

お手伝いをしているアルフも、ユーノの横から顔をのぞかせる。

アルフ「それであのブロウアウトなのかい？」

「わからんからユーノに聞いたんだが」

ユ「うーん、さすがにわからないなあ。あ、でも！少しわかったことがあるよ」

「聞かせてくれ」

ユ「うん。まず、ブロウアウトの発動条件。どうやらこのロストロギアは人間の感情、
　正確には負の感情に大きく反応するものらしい」

フェ「負の感情？」

ユ「そ。その感情が徐々にブロウアウトに蓄積されて、限界量を超えると発動し、
　半径２００？圏内の全てを破壊する」

は「ん？じゃあなんで今まで無反応だったのに、今になって反応が出たんや？」

ティ「それは、南極の近くで大量の負の感情を吸収したからじゃない？」

「元々ここはどこの国の土地でもないから、いるのは物好きな研究者たちだけだ。
そんな環境では負の感情なんて集まらない。だが、今になってブロウアウトは
動き出している。つまり原因は…」

ス「あ！戦争ですね！」

その言葉に全員が愕然とした。

ギ「な…」

テ「うそでしょ…」

エ「スバルさん…」

キャ「信じられない…」

ス「え、何が？？」

「スバル、成長したな…俺はうれしいよ、ぐすっ」

ス「なんですか～？」

「さて、スバルがアホの子から卒業しかけたのは置いといて。
今ブロウアウトが発動しかけている原因が戦争なのは確実だろうな」

ユ「そうだね。今過去の発動例を調べてみたら、いずれも戦時中、もしくは
戦争終結後に発動していることがわかった」

「やはりそうか…」

シグ「ではどうするのだ？」

ヴィ「このままだと発動しちゃうんだろ？」

「そうなんだよね。方法は2つある。1つは今すぐこれを無人世界に放り込む。
もう1つは戦争が終わることを祈る」

シャ「そういえば、戦争には口を出さない、って約束だったかしら？」

ティ「そうそう。約束は破っちゃいけないしね」

と、その時。

「艦長、連中動き出しましたよ」

「ほう、始まったか」

エ「何が？」

「まああっちのほうを見てればわかるよ」

～南極近海～

そこにはＡ国海軍全兵力が集結していた。

巡洋艦７隻、駆逐艦８隻、フリゲート艦３隻、沿岸警備用水中翼コルヴェット艦４隻、

通常動力型潜水艦２隻、ＡＩＰ（非大気依存推進）潜水艦２隻、対艦ミサイル搭載型

攻撃機３６機、対潜哨戒機１２機。

そして空軍の多目的戦闘機５０機に給油機６機、空中早期警戒機２機も出撃していた。

この戦争が始まった時、彼らはあの強力なE国海軍とU国海軍には勝てないと
思っていた。量でも負けている、質でも負けているからである。

だが、B連邦から購入した核兵器を搭載したので、勝てるかもしれない！
そう思っていた。

そこから２００?離れた場所にE国・U国海軍部隊が展開していた。
E国のイージス原子力装甲空母2隻の電磁カタパルトから次々とステルス
戦闘機が出撃する。イージスミサイル巡洋艦・駆逐艦部隊が艦隊の前に出て、
主砲である5インチ単装電磁速射砲の角度を調節する。艦隊の下ではセラミック船体の最新鋭ステルス原潜４隻は深度３，０００mの深海を３０ノットで
進んでいた。U国海軍部隊の艦載機、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦も別ルートで
A国海軍部隊に向かって進んでいた。

Ａ国海軍航空隊は高度１０ｍという超低空飛行でＥ国海軍部隊に向かっていた。
彼らの戦闘機には2発の大型対艦ミサイルが搭載されている。３６機のうち、
１８機のミサイルの弾頭は核兵器である。つまり３６発の核兵器搭載対艦ミサイルが
撃てるというわけだ。隊長の本音としては、全機に搭載したかったが、数に限りが
あるので仕方なかった。

敵艦隊との距離が残り１５０?を切ったところで、突然攻撃機の脅威警告盤が
うるさい悲鳴をあげ始めた。隊長はぎくりとした。任務説明の際に、出来る限り敵艦隊に接近してから攻撃せよ、という指示があったが、敵の反応がここまで速いとは考えていなかった。

だが、敵にばれているのならいつ撃ってもいいのではないか？
そう考えた隊長は他の機に無線でミサイルを発射するように命じた。

一気に高度を２００ｍに上げて対地レーダーを作動させる。隊長のターゲットは
Ｅ国海軍のイージス原子力装甲空母だ。そしてミサイルの安全装置を解除して
発射トリガーを引いた。

その途端に機体下部のハードポイントから2発のミサイルが切り離された。

ミサイルは2秒後に後部から火を噴きながら飛んで行った。他の機も一斉にミサイルを発射した。合計で72発の対艦ミサイルは、なんなく音速の
壁を超えて彼方へと飛び去って行った。

あとはミサイルに任せるしかないので基地に帰ろうとした隊長の機体に突然弾痕が走る。
驚いて後ろを見ると、E国のステルス戦闘機がこちらに向けてミサイルを発射するのが
見えた。隊長には赤外線フレアを発射したり、チャフをばらまいたりする時間は残されて
いなかった。

あっという間に海軍航空隊所属攻撃機36機は海の藻屑となった。

一方、72発のミサイルが狙っているE国海軍部隊は、まず最初にお返しと
言わんばかりに、N?兵器搭載型の巡航ミサイルを一斉発射した。
このミサイルは、今回初めて実戦で使われるもので、液体水素を燃料とし、
マッハ8で低空飛行する。ミサイル群は敵艦隊に向けてすっ飛んで行った。

次に接近中のミサイルを迎撃するために、電磁速射砲の射撃が始まった。
それと同時にVLS（Vertical Launching System、垂直発射システム）から
迎撃用ミサイルが次々と発射された。

水中では合計で６隻の潜水艦からＭｋ６２マルー魚雷が発射された。
また、Ａ国海軍
部隊の後方に、南極封鎖作戦を行っていた２隻の原子力潜水艦がこっそり
やってきて次々と魚雷を発射した。

それに対抗してＡ国海軍の４隻の潜水艦からも核魚雷が発射された。

高高度ではＡ国空軍とＥ・Ｕ国海軍航空隊との戦闘が行われていた。
Ａ国空軍機には６発のレーダー誘導ミサイル、２発の赤外線誘導ミサイルが
搭載されている。それに対し、Ｕ国海軍機には胴体下ウェポンベイにレーダー誘導ミサイルが６発、空気取り入れ口側面ウェポンベイには赤外線誘導ミサイルがそれぞれ１発ずつ、さらに主翼のハードポイントには
超長射程の超音速ミサイル２発とＥＣＭ発生装置を搭載している。

そしてＥ国海軍機は機体上面２箇所と下部中央の計３箇所のウェポンベイに
ＶＬＳ方式のランチャーが格納されていた。このランチャーには、最大１２目標に
向けて同時発射可能な長射程の超小型多目的ミサイルがたっぷり詰まっている。

おまけにこのミサイルは全方位に発射可能なので、後ろから攻撃しようと
接近してきたＡ国空軍機は、ミサイルの餌食となり木端微塵になった。

その後、A国空軍機も奮闘したが、数分後には全機撃墜された。
こちらの被害はU国海軍機が2機被弾したが、修理すれば直る程度のものだった。

その時、A国海軍部隊は接近してくるマッハ8のミサイルを撃ち落とそうと躍起になっていた。だがレーダーにはかすかにしか映っていないし、早すぎてミサイルがロックできないので、最後の手段を使おうとした。

核兵器の広域爆発による破壊である。

A国海軍は持っている全ての核兵器搭載ミサイルを前方に向けて発射して、
タイミング良く爆発させれば敵ミサイルを破壊できると考えた。

事実、この超音速の水素燃料巡航ミサイルを撃墜する方法はそれしかない、と
E国の兵器開発センターも考えていた。

そしてボタンを押して核兵器を爆発させて撃墜しようとした。

次の瞬間眩い光がA国海軍部隊を包み込んだ。

〜南極〜

は「うわっ！！」

フェ「眩しい！！」

突如地平線の彼方から閃光が走り、そしてラベンダー色の火球が次

々と空に向かって
盛り上がっていった。

ヴィ「なんだよあれ！？」

は「あれって、核爆発なの？」

「いや、あれはN？兵器の爆発だな」

「艦長、たった今A国海軍は壊滅しました」

「やっぱりな。こうなることは分かっていたよ」

は「あのいっぱいいた軍艦、全部沈んだんかい！」

テ「潜水艦もいませんでしたっけ？」

ティアナがそう言った瞬間にキノコ雲が幾つも上がった。

「A国海軍潜水艦から発射された核魚雷を破壊したようですね」

「これでA国はおしまいだな。いやはや馬鹿な連中だよ、ほんと」

な「何人の人が死んだんだろう…」

ティ「さあ？少なくとも私たちの知ったことではないわ」

「そうだな、ん？」

ふと卵を見るとひびが入っている。

「誰か卵に触ったか？ひびが入っているんだが」

ヴィ「知らないぞ」

キャ「ほんとですね～、フリード、つついたりしてないよね？」

フリ「きゅく～！（訳：してねーよ）」

シグ「おい、ここにもひびが入っているぞ？」

「おっかしいな～、さっき見たときにはなかったのに」

その時、ビシッ！っという大きな音と共にでかいひびが入った。

「おいおいまさか発動しちゃったんじゃないだろうな！？」

な「えええええ！！」

フェ「どうするの！？」

は「ユーノ君！教えてーな！」

ユ「そんなこと言われても！」

そんなこと言っている間にもどんどんひびは大きくなっていく。

そして眩い光と共に卵は割れてしまった。

シャ「きゃあ！！」

ティ「目が！目がああああ！！」

ギ「何が入っているの！？」

しばらくして卵を見るとそこには殻しかなかった。

「ありゃ、中身はどこだ？」

ヴィ「ウィル！上だ！」

ティ「え？」

みんなで上を見ると。

？？？「またこの時が来たか…仕方あるまい…」

それはそれは大きな黒い翼を背中から生やして、黒い髪を腰まで伸ばして
死んだ魚のような黒い目でこちらを見下ろす一人の少女がいた。
ぼろぼろの黒いドレスを身にまとい、右手には古ぼけた本を、
左手には水晶玉を持っていた。

シグ「何者だ！」

？？？「…私はお前らが『ブロウアウト』と呼ぶ存在だ」

「へーそうなんだーすごいなー（棒）」

ブロウ「…もう発動することはないと思っていたが、残念だ。全てを破壊する！」

その途端に少女の体からどす黒いオーラが見え始めた。周辺の地面には亀裂が走り始め、
南極大陸全体が徐々に揺れ始めた。

な「なんて魔力なの…」

「お前ら下がっていろ。俺とティーナでやる」

ス「大丈夫なんですか!?」

ティ「まあ、問題ないでしょ?」

「ティーナ、ユニゾンするぞ」

ティ「…本気なんですね?」

「ああ」

は「そう言えば、ウィル君とティーナちゃんがユニゾンするの初めて見るかもしれへんな」

フェ「確かにそうだね」

ブロウ「私の邪魔をするつもりか?なら私を倒して見せよ!」

ブロウアウトが水晶玉をこちらに向けると、空中に幾つもの氷の矢が現れた。

その数１００。それらが一気にウィルとティーナに向かって飛んで行った。

ウィル、ティ「ユニゾン、イン！」

突然炎が湧きあがり、接近していた氷の矢は全て蒸発してしまった。
そして炎の中から現れたのは、

は「ん？ティーナちゃん…じゃない」

シャ「だけど、ウィル君でもない？」

ティーナと同じく真っ赤な髪の毛だが、ショートカットになっている。
バリアジャケットもウィルと同じＶＦ－２５Ｓだが、色が紫になっている。
身長はウィルと同じくらい、目の色は金色、そしてなにより。

ギ「女の人？」

ウィルはティーナとユニゾンすると、なぜか女体化するのである。

は「しかも胸がでかい！」

な「はやてちゃん、少し黙ろうか？」

ブロウ「…なんだ、その魔力は？ありえない…」

「あり得ない、なんてことはあり得ないんだぜ？」

ユニゾンした俺は腰につけていた日本刀を抜いてブロウアウトに向けた。

「悪いけど、お前を倒してここの破壊を阻止させてもらう！」

ブロウ「ははは！かかってこい！！」

彼女もまた、どこからともなく純白の剣を取り出した。

「行くぞ！！」

ブロウ「どこまで戦えるかな、人間よ？」

今ここに意思を持ったロストロギアとの戦いが始まった…

第６５話：中には何が入っているのかな？（後書き）

卵から生まれたのは少女でした。

次回は、あまり得意ではない戦闘シーンを書くことに。

では

第６６話：そろそろオリジナル魔法とか使うか（前書き）

アンケートの結果。
なんか色々な意見が集まりました。
だけど私１つだけみなさんに言っておくことがあります。

私は無知です！！

従って皆さんの意見の中にあったアニメとかゲームのなかで知っているのが
ほとんどありませんでしたｏｒｚ

唯一知っているのがとある系だけでした。
でも作者はとあるの原作読んでいないのでうまく書けるかどうか自信が全くありません。

なので、前に私が提示した選択肢の中から選んでいただけないでしょうか？
作者のわがままですいません。
期限は今週末までということに。

第６６話：そろそろオリジナル魔法とか使うか

前回、ブロウアウト（少女）との戦闘がはじまりました。

ブロウ「全てひれ伏せ！グラビティ・ブラスト！！」

彼女は周囲の重力をコントロールして、通常の５０倍にした。

ス「ブベッ！」

ツ「動けないです～！」

「ふざけんじゃねえ！ユビキタス・デル・ウィンデ！」

俺はゼロ魔の魔法の１つの、自分の分身を作り出す魔法を唱えた。

分身各々が

思考を持ち、杖まで分身するので魔法まで撃てる便利な魔法である。

ブロウ「な…増えただと？ていうかなぜお前には私の魔法がきかんのだ！？」

「根性だ！！」

彼女の眼には俺が５人いることになっている。

エ「お父さんが増えてる…」

「「「「「さあ、パーティーの始まりだ！」」」」」

そう言ってまず2人が日本刀を振り回しながら突撃する。その後ろで2人がマイクロミサイルで援護射撃。んで俺はちょっと魔法の詠唱に入る。

「「お前の腕、もらったあああああ！！」」

と言って2人がブロウアウトの両腕を日本刀で斬り落とした。

フェ「きゃああ！」

は「…うわぁ」

そしてマイクロミサイルがブロウアウトを集中攻撃し、煙がはれると彼女には
両足がなかった。

「あれ、もうおしまいですかぁ？」

ブロウ「…ふふふ、腕と足を失ったのは久しぶりだな」

そう言った瞬間。

な「えええええええ！！」

ギ「うそでしょ！？」

シャ「ありえない！」

失った腕と足が生えてきて元通りになってしまった。

ブロウ「さて、まだおしまいではないぞ、人間？」

「…良い！非常に良いぞ、ブロウアウト！そうでなくては！そうこなくては！
　なら俺も本気を出そうかね」

俺は分身を全て消して、魔力のチャージを始めた。

ブロウ「！集束砲撃魔法か！させん！」

と言って俺の方に突っ込んできたが。

「悪いな、お前の相手はこっちだ！」

突然ウィルの後方から姿を現したのは、南極に降りるときに護衛として付いてきた
４機の重武装型ラムダ級Ｔ－４ａシャトルだった。それらが搭載している
可動式前方ツイン・テイム＆バック社製ＫＸ５レーザー・キャノンを撃ちながら
ブロウアウトにめがけて突っ込んでいった。

ブロウ「なんだ！この機械の鳥は！？くそ！」

彼女がラムダ級といちゃいちゃしている間に俺はチャージを完了した。

〈エネルギー・クリティカル〉

若本が警告を発した。これはスーツのエネルギーがほぼゼロになったことを示す。

「わかっているよ。さあ行くぞ。これが俺の最高出力の砲撃！」

な「ウィル君が砲撃魔法!?」

ヴィ「やっぱなのはが食いついたか…」

砲撃魔法、と言ったが、なのはとは違いウィルの足元には魔法陣がない。

その代わりにウィルの周囲に8個の魔法陣が円を描くように展開される。

いつものミッド・ベルカ混合魔法陣ではなく、単純なミッド式の魔法陣である。

そして。

「食らえ!ダミー・スーパー・レーザー!!」

周囲に展開していた8個の魔法陣から緑色のビームが飛び出した。

そして

ウィルの頭上で集約されて、1本の巨大なレーザーとなってブロウ

アウトに
向かって飛んで行った。

ブロウ「馬鹿な！こんな魔法を人間が…ぐわあああああ！！」

彼女を包み込んだ極太のレーザーは、４機のラムダ級シャトルを蒸発させ、
そのまま宇宙空間まで突き進み、軌道上で待機していたインペリアル？級
スター・デストロイヤーまで木端微塵にしてしまった。

「艦長！！戦艦までふっ飛ばさないでくださいよ！！」

ザフィ「あの戦艦が沈んだのか！？」

シグ「信じられん…非殺傷設定だろう？」

ヴィ「もう規格外だな…」

な「あの8本のレーザーの1つだけで私のスターライトブレイカーより威力が上だ…
教えてほしいな…」

フェ「なのは、駄目だよ！絶対！」

は「なのはちゃんをこれ以上強化したらあかん！」

な「なんでよー」

ブロウ「うう…」ひゅ～、どさっ！

そんなきちがい砲撃をもろに食らった彼女は、ぼろぼろの羽で空を飛べるわけもなく、
地面とキスするはめになった。

「もういいだろ、ユニゾン・アウト」

ティ「ふう！さいっこうに楽しかったの！」

ブロウ「くっ…」

「んでさ、もうやめてくれないかな？お前も疲れてる、俺も疲れてる。だから

こんなくだらないことはやめにして飯でも食おうぜ」

ブロウ「ふざけるな…私はこの目的のために生み出された…それを否定するな！」

「全てを破壊するのが目的？冗談もほどほどにしとけ。目的なんて変えようと思えばいくらでも変えることができるだろうが」

ブロウ「…お前らと違って私は人間ではないのでな。そんな器用なことはできんのだよ。
だから私は破壊する」

「お前…本当にそんなことがしたいのか？」

ブロウ「…それが私の義務だ」

ティ「じゃあ、なんでそんなに悲しそうな顔をしているのかしら？」

ブロウ「！？」

「本当はこんなことしたくはないんじゃないのか？お前を作ったのが誰かは知らんが、
俺がお前を作るんだったら、感情はすべてなくすね。そんなもの兵器には必要ない」

ザフィ「…確かに兵器そのものに感情などいらんな」

「これは俺の仮説にすぎないんだが、お前を作った奴はいつの日かお前が
自分の行なっていることが間違っているということに気がついて

欲しかったん
じゃないかな?だから本来必要ない感情を残した。どうよ?」

ブロウ「……りまえだ」

「え?」

ブロウ「そんなこと当たり前だ!私がこんなくだらないことを好き好んでやって
いるとでも思っているのか!?ふざけるな!こんなことしたくない!
私は…普通に生きたかった、人間として!だがそれは許されなかった!
DNAの声、私の本能のせいで、それはできなかった!」

彼女は地面を叩き、泣きながら大声でわめき続けた。

ブロウ「だが、いいんだ、もう諦めている。私はもう、人間として普通に暮らすことは
できない」

な「でも…」

ブロウ「私が今までどれだけの命を刈り取ってきたと思う?もう数えるのも億劫だ。
1つの国を消滅させたことだってある。そんな殺人鬼が平和に暮らすなんて
ことは不可能だ…」

「…確かにお前は今まで多くの人を傷つけ、殺てきた。それは消え

ない過去だ。
だからお前は償わなければならない」

ブロウ「…私の死をもってして、か？ならさっさとされ」

「馬鹿言うな。お前は生きなければならない」

ブロウ「…は？」

「お前が殺してきた人々の分まで生きなければならない。それが償いだ」

ブロウ「…私に生きている資格なんｔ」

「資格もくそもあるか。生きる死ぬに資格なんてねえよ」

ブロウ「だが私の体はそれを受け付けないだろう」

ア「ウィル、私を直した時みたいにできないのか？」

「うん、最初はそれも考えた。でもこの子は、ん？おいその本はなんで持ってんの？」

ふと俺はブロウアウトが抱えている本に気がついた。

ブロウ「これか？…なんだろうな、自分でもわからん。ただ、とても大切なもの
だという記憶がある。でも自分では読む気はないな」

「そか、ちょっと失礼」

俺はその本の中身を読み始めた。

「ふっ、そういうことか。感謝するぜ、どこの誰だか知らない設計者さんよ」

は「何が書いてあったんや？」

「ブロウアウトに蓄積された負の感情の除去方法、及び人間として生きていく方法だ」

シャ「それじゃあ！」

「ああ、彼女は人間になれる！」

ブロウ「本当か！？私は…人間になれるのか？」

「そうだとも。だから、もうお前は誰も殺さなくていいんだよ」

ブロウ「…ぐすっ。本当に？」

「ああ」

ティ「なんで泣いてるの？」

ブロウ「…もう誰も殺さなくていもいい、そう言われてうれしくてな…」

「とりあえず負の感情から抜くか」

「えーっと、まずちょっとこっちに」

ブロウ「ああ」

「んで後ろを向いて」

ブロウ「ん」

「両手をあげます」

ブロウ「これでいいのか？」

「ああ。そんで両脇をくすぐります」こちょこちょ

フェ「え？」

ブロウ「あはははははははは！！！」

「んでもう1人が足の裏をくすぐります。ティーナ！」

ティ「分かったの！」こちょこちょ

ブロウ「やめてえええええ！！！あはははははははははは！！」

シグ「おい、あれを見ろ！」

な「あ、何か出てる！」

ブロウアウトの頭の上に何やら黒い靄が出てきた。これが負の感情だろう。

「最後に色々なところをくすぐりましょう、か。ユビキタス・デル・ウィンデ！」

「「「「くすぐりだー！」」」」

さらに４人の分身を作り出し、猫じゃらしを装備させた。

ブロウ「にゃあああああああああああ！！！…がくっ」

遂に笑いすぎたブロウアウトは気絶してしまった。その瞬間に頭の上にたまっていた
黒い靄は、だんだんと薄くなっていき、次第に全て消滅した。

「はいおしまい！」

ティ「いえーい！」

は「色々と突っ込みどころ満載なんやけど、まあいいか」

5分後

「で、次に人間になる方法だが…」

ブロウ「どうするのだ」

「…お前に新しい名前をあげないといけないらしい」

ブロウ「名前だと？」

「ブロウアウトって言う名前じゃちょっとね」

ブロウ「じゃああなたが付けてくれ」

「ネーミングセンスが問われるな…うーん」

ブロウアウトをよく観察する。黒髪ストレート、黒い目、黒い翼…もろ日本人やん、顔以外。なんつーか黒ってなんとなくテンションが下がるイメージだよね。

「…カナリア、っていうのはどうよ？」

ブロウ「カナリアか…いい名前だ。それがいい」

ブロウアウト改めカナリアがそう言った瞬間、彼女の体が光はじめ、

しばらくするとおさまった。

カナ「あれ?あの忌々しい力が使えない!」

な「じゃあ人間になったんじゃ!」

ツ「よかったです~」

「よっしゃあ!これでお前は立派な人間だ!」

カナ「やったあ!!ありがとう父上!!」

「へ?」

な「なななんでウィル君がお父さんなの!?」

カナ「だって名前つけてくれたし」

「う~ん、まあいいんじゃないか?じゃあカナリアは俺の娘だな」

カナ「はい、父上!」

ティ「…もうちょっと柔らかい口調にした方がいいんじゃない?」

カナ「う~ん…じゃあ、パパぁ?」

は「グハァ!!」

突然はやてが鼻血を吹き出しながら倒れた。

シグ「あ、主！大丈夫ですか！？」

ヴィ「駄目だ、気絶してる。おいシャマル！こっち手伝…え？」

シャ「」

ザフィ「立ったまま気絶している…」

カナ「あの二人はどうしたのだ？」

「気にしたら負けだ。放っておけ。じゃあ帰るか」

みんな「はーい」

～A国軍司令部、秘密地下道～

ここは万が一の場合に備えて作られた地下道である。普段は使うことがないので
埃がいっぱいたまっていた。そんな中、埃をまき散らしながら数台の車が走っていた。
中に乗っているのは強硬派のメンバーである。彼らはE国とU国の軍隊に
自国の軍隊がコテンパンにされたので逃げているのだ。

将軍A「全くなんてことだ！核兵器まで使ったというのに！」

将軍B「我が海軍は壊滅、空軍も数多くの戦闘機を失ってしまった」

将軍C「今は我々が生きることだけを考えよう！すぐにB連邦に亡命するぞ！」

議会議長「本当に大丈夫なんだろうね？」

将軍B「B連邦とは、このような場合に備えて契約をしておきましたから」

議長「そうかなら…」

そんなことを話している間に、車列は地下道から郊外の国道に出た。
あとはこの道をひたすら進めばB連邦だ。

誰もが安心した次の瞬間。

目の前を走っていた護衛が乗っている車が爆発した。驚いた運転手があわてて
ハンドルを切ったため、強硬派が乗っていた車は横転してしまった。

将軍B「くそ、いったい何が…おいA！」

だがBの呼びかけにAは答えない。よく見ると首がおかしな方向に曲がっていた。

議長「生きていたか将軍B！」

将軍C「今助けるぞ！」

2人に車の残骸から引きずり出されたBは周りの光景を見て愕然とした。
護衛の乗っていた車は全て破壊されており、生きているのが自分たちだけ
だったからだ。

将軍B「一体誰の仕業だ？」

？？？「我々だよ、将軍」

突如、頭上から声が聞こえたかと思うと、数機のヘリコプターが飛んできて
周囲を囲んだ。攻撃ヘリコプターの機首に付いている３０?チェーンガンが
３人に狙いを付ける。輸送ヘリからロープを使って下りた兵士たちが持っているアサルトライフルをこちらに向ける。３人は完全に包囲されていた。
そんな中、将軍Ｃがあることに気がつく。

将軍Ｃ「おい！あの攻撃ヘリはＵ国陸軍のものじゃないか！」

将軍Ｂ「確かに！それにあの輸送ヘリにはＥ国海軍のマークがある！」

そして輸送ヘリから護衛を伴ってある人物が歩いてきた。
その人物とは。

議長「お、お前は！！」

Ａ国大統領「そうだ。私だよ、議長」

囚われの身となっていたＡ国大統領だった。

将軍Ｂ「なぜお前がここにいる！？」

Ａ国大統領「クーデターのことを知ったＥ国とＵ国の特殊部隊が救出してくれたのだよ。
既に軍司令部も掌握している。もうお前らはどこにも

逃げられん」

議長「だ、だが我々はB連邦と取引を」

A国大統領「核兵器の売買契約だろ？知っているよ。それに関して
E国大統領が
　B連邦大統領と少しばかり…交渉をしてね。君達はB
連邦には
　入国できなくなったよ」

将軍C「なんだって！？」

A国大統領「それに、君達が購入した核兵器の起爆装置を外部から
遮断してもらった。
　だから海軍は壊滅したのだよ」

将軍B「そうか、だからあの巡航ミサイルを撃ち落とそうとした時に
　起爆しなかったんだな？」

A国大統領「その通りだ。さて、おとなしく捕まってくれたまえ」

議長「くそったれがあああああああ！！！」

こうして南極紛争、及びA国クーデター事件は幕を下ろした。
クーデターを指揮した者は全て銃殺刑になり、E国とU国はA国と会議をして
和解した。そして以下の条約を結んだ。

1、A国は二度と南極に近づくな。

2、A国の軍備再建にはE国、U国が共同で行う。

3、A国内にある核兵器はU国管理下の元、解体される。

A国軍損害報告

海軍艦艇：全艦艇喪失

潜水艦：全喪失

海軍航空隊：全戦闘機、全対潜哨戒機喪失

空軍：主力戦闘機部隊、全早期警戒機喪失

死者数：合計１０，１２０名

E国・U国損害報告

海軍艦艇：なし

潜水艦：なし

空母艦載機：E国、なし。U国、２機被弾、修理可能。

死者数：０

第６６話：そろそろオリジナル魔法とか使うか（後書き）

これでブロウアウト編はおしまい。

いやー、やっぱり戦闘シーンってめんどくさい、っていうか書きにくい。

次回はまた日常編ですかね。

では

第67話：帰ってきてひと悶着

～ミッドチルダ、地上本部～

「ただいま～」

レジ「おお、どうだった『ブロウアウト』は？うまく封印できたか？」

「こうなった」

カナ「はじめまして。カナリアです！」ぺこり

レジ「」ずさーっ

オーリス「ウィルさん、その子はいったい…？」

「だからこの子が元ブロウアウトだよ。今はカナリアっていうきちんとした名前の俺の娘だ！」

オーリス「ごめんなさいちょっとよくわからない」

ティ「まあ普通そうよね」

「とりあえず会議室で全部説明するからさ。あ、なのは達は先に帰っていてくれ」

な「わかったの」

～会議室～

「…これこれこういうことが起きまして、その結果こうなりました、はい説明終わり」

ラ「しかし、あのロストロギアがこんな可愛らしい女の子だったとは…」

レ「まあ、これでもう安全なんじゃろ？」

ミゼ「じゃあ問題ないわね？」

カ「カナリアちゃんかわいい～♪」

カナ「うぐ～苦しいですよ～～」

レジ「ウィル、お前何人子供作る気だ？」

「…いつの日かサッカーチームは作れるわな、いやもしかしたらラグビーチーム作れるかも」

オーリス「サッカーは11人、ラグビーは15人…」

ティ「クロノ君もエイミィと頑張れば？」

ク「ぶっ！な、何を言うんだ！／／／」

「もしもしエイミィ？クロノがもっと子供作りたいってさ」

ク「ウィル！エイミィに何言ってんだよ！？」

エイ『そうなの？なら準備しとくねって伝えといて♪』

「あいあい。だってさクロノ」

ク「」

リ「ウィル君、カナリアちゃんのことなんだけど。もうブロウアウトの能力は
使えないのね？」

ティ「そうでしょ、カナリアちゃん？」

カナ「ああ、もう人間の負の感情を吸収する力はないが…」

「が？」

カナ「その代わりと言っては何だが、他人の魔力を吸収できるようだ」

みんな「な、なんだって～！！」

ティ「はい魔力玉！」

カナ「吸収！」

そう言った瞬間、ティーナの手のひらにあった魔力玉は形状を失い、そのまま
カナリアの体に吸い込まれていった。

ク「すごい！」

カ「レアスキル、ですかね？」

カナ「多分ね。あとこの前父上に使った魔法も使えるぞ」

「おいおい、重力操作もかよ？」

カナ「えいっ！」

ク「ぐえっ！！」

リ「クロノ？」

カナリアに重力を弄られたクロノは顔面をテーブルに押しつけている。

「なんでクロノなんだ？」
カナ「なんとなくむかついたので」
ティ「ひでぇ」

その後、きちんと調べた結果、カナリアの魔導師ランクはＳＳＳランクであることが
判明した。まあ重力操作もできて、おまけに他人の魔力まで吸収するんだから
同然だわな。

ジェ「おやウィル、帰っていたのかい」
「おおジェイル。今帰ってきたとこだよ」
ジェ「ならちょうどいいや。すこし相談に乗ってくれないか？」
「いいけど」
ジェイルについていって技術開発部門の会議室に行った。

ウーノ「あらウィルさん。どうも」

「やあウーノさん」

ジェ「それで、こいつを見てくれ」

「ん？これはＸＶ級次元航行艦の設計図か？」

ジェ「そうだ、ミッドチルダ大戦で君がフルボッコにした戦艦の元の姿だね。
　これを今３０隻作ろうと思っているんだが…」

「…どうした？」

ジェ「いや、以前と同じもの作って平気かな～って思ってね」

「う～ん、そうだな～、もしかしたらまだ見ぬ新たな世界で攻撃される可能性も
　あるわけだ。だから防衛手段はきっちりしといたほうがいいよな」

ジェ「しかし君の持っている技術はあまりこの世に出さないほうがいいのも事実…」

ウーノ「もう充分この世に出ていませんか？シールドとかレーザーとか戦艦とか」

「それもそうだな。じゃあこうしよう！改ＸＶ級みたいに魔導兵器と質量兵器
　両方を搭載する。それでシールドジェネレーターも乗っければ、多分

死ぬことはないだろう」

ジェ「それが1番だね」

「じゃああとはよろしく～」

ジェ「あ、そう言えば『アースラ』はどうする?まだ廃棄していないんだけど」

「それならこうしようぜ…ごにょごにょ」

ジェ「賛成!」

～6課隊舎～

「ただ」

ティ「い」

カナ「まー」

ヴィヴィオ「パパ～♪」ととて

「おーヴィヴィオ。いい子にしてたか？」

ヴィヴィオ「うん！あれ、その子誰？」

カナ「父上、なんだこのガキは？」

な「カナリアちゃんは言葉遣いをきちんとしないといけないの」

「この子はヴィヴィオ。お前のお姉さんだぞ、カナリア」

カナ「…姉上？」

ヴィヴィオ「ん～？」

「ヴィヴィオ、この子はカナリア、お前の妹だぞ～」

ヴィヴィオ「わ～い♪よろしくね、カナリア！」

カナ「こ、こちらこそよろしく、姉上」

「よし！みんな飯にしようぜ！」

みんな「は～い！」

第67話：帰ってきてひと悶着（後書き）

まあ平和ですね。

次回はちょっとした騒ぎが！

では

番外編6：あれ、どちらさま？

「よーし、できた！さっそく持っていこう！」

地上本部の執務室で何やら作っていたウィリアム。それらを箱に詰めて出ていった。

目的地はもちろん機動6課である。

ドゥーエ「いってらっしゃいませ～」

～6課、食堂～

ス、ギ、エ「ガツガツモグモグ…」

カナ「な、なんだあの量は…」

シャ「まあ初めて見る人は全員そういう反応するわよね～」

な「あはは…」

フェ「ヴィヴィオ、いっぱい食べて大きくなるんだよ～」

ヴィヴィオ「うん！わかった～」

とそこに。

「飯だあああああ！！」

ティ「飯だあああああ！！」

は「ウィル君。お疲れさん」

「おばちゃん！メニュー表のここからここまで！」

ティ「私も！」

おばちゃん「あいよ！」

テ「メニュー表のここからここまで？」

キャ「えーっとメニュー表はっと」

ウィルが注文した品物

ラーメン

チャーハン
餃子
A定食
B定食
C定食
カレー

テ、キャ「」

ヴィ「そんなに食えるのかよ!?」

シグ「あの2人もたくさん食うからな。いいんじゃないか?」

ザフィ「食費だけでかなり吹っ飛ぶな…」もぐもぐ

おばちゃん「はいおまち!」

「うまそ〜!いただき」

ティ「ました!」

みんな「はえええええええ!!」

「俺の胃袋は宇宙だ！」キリッ

ティ「だ！」キリッ

カナ「うん、あまりかっこよくないぞ、父上」

な「それでウィル君、今日はどうしたの？」

「ああ、実はこれを試食してもらいたいんだ」

俺がそばのテーブルに箱を置く。

ヴィ「なんだこれ？」

「俺が作った飴だよ」

みんな「飴？」

ティ「色々な種類の味があっておいしいわよ！」

ス「じゃあこの青いのもらいます！って！」

フェ「それレリックじゃない！？」

は「なんやて！？」

そう、この飴は見た目がレリックなのだ。

「名付けて、『レリック飴』だ」

シグ「そのままだな」

ス「あ、これはソーダ味だ！おいしい！」

テ「じゃあ私はこのオレンジ色のを…うんオレンジ味ね」

キャ「これはピーチ味です！」

エ「レモン味だ！」

フェ「うん、おいしいね」

は「売ったらええんとちゃう？」

な「これは売れるの！」

「そかそか。いやーよかった！」

シャーリー「ウィルさん！ここにいましたか！」

「ん、どったのシャーリー。そんなに血相変えて」

シャーリー「どうしたもこうしたもありませんよ！この前ウィルさんが研究目的が借りて
いったレリック！さっき見たら溶けてなくなってましたよ！」

「は？」

シャーリー「おまけに保管庫がイチゴ臭くなっちゃって！どういうことなんですか！？」

は「ウィル君？もしかして…」

「…うん、レリックと間違えて飴を返したっぽい」

フェ「じゃあ本物のレリックは？」

ティ「…この中にある！」

は「みんな！食べるのやめてーな！」

だが、時すでに遅く。

ヴィヴィオ「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

ギ「ヴィヴィオ！大丈夫！？」

シャ「どうしたの！？」

ギ「急にせきをしはじめて…」

ヴィヴィオ「飴飲んじゃった…」

な「こらー駄目だよヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「でもあの飴味しなかったー」

「味が…」

ティ「しなかった？」

ザフィ「つまりそれが」

ザフィーラが何か言おうとしたが

ヴィヴィオ「な、なにこれ！体が熱いよ！」

突然ヴィヴィオの体が光りはじめたので聞こえなくなった。

「まずい！」

な「何も見えないの！！」

しばらくして光が収まると。

？？？「何なの～もう！」

「ん？」

？？？「あ、パパだ！この体すごーい！」

なんかナイスバディの女性がバリアジャケットみたいなのを身にまといそこにいた。

「あの、どちら様？」

？？？「むー！私だよ！ヴィヴィオ！」

みんな「えええええええええええええええ！！！」

な「ほんとにヴィヴィオ、なの？」

フェ「私より綺麗…」

は「揉みごたえのありそうな胸やな…じゅるり」

ヴァイス「ウィルさ、って誰ですか、その超絶美人は！？」

「ああ、実は」

ヴァイス「俺の好み！付き合って下さーい！！」

と言いながらヴァイスがヴィヴィオに接近した。もとい突撃した。

ヴィヴィオ「きゃあああ！！あっちいけー！」

と拒絶すると、いきなりヴィヴィオの体から虹色の魔力光があふれて、ヴァイスを
１０ｍほど後ろに吹き飛ばした。

ヴァイス「」

そのまま壁に頭から激突したヴァイスは気絶した。

それを見た他の人々は。

「自業自得だな」

ティ「だね」

は「そうやな」

な「なの」

フェ「だね」

な「それでウィル君、これはいったいどういうことなのかな？」

フェ「分かりやすく説明してほしいんだけど？」

は「それも今すぐに！」

「はい。えーっとまずヴィヴィオが身にまとっているのは『聖王の鎧』。

古代ベルカ王族が遺伝子レベルで所有している防衛能力で、五体を武器化する

という古代ベルカの戦乱の歴史の中で編み上げられた資質で、優れた兵器である

ことと生存することが求められた聖王血統保有者に遺伝子調整を尽くして付与

された防衛機能なんだ。本人の意志とは無関係に発動し、危険や危機からその身を

守るのさ～」

フェ「ということは？」

「もし車と正面衝突しても車の方が大破するし、銃で撃たれても銃弾が砕けるだろう」

は「すごいやんか」

ス「それで、なんであんなに大きくなったんですか？」

今のヴィヴィオは幼女の格好ではなく、１７歳前後の少女の姿になっている。

「今のヴィヴィオはレリックウェポン完成体、虹色の魔力光『カイゼル・ファルベ（Ｋａｉｓｅｒｆａｒｂｅ）』を持つ『聖王ヴィヴィオ』、ってところかね」

テ「聖王って？」

ティ「ヴィヴィオの母体（オリジナル）であるオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。聖王家の王女で、『オリヴィエ聖王女殿下』と呼ばれてて、後の『最後のゆりかごの聖王』であり、武技において最強を誇ったと言われているの」

エ「すごいですね」

キャ「そんな人がヴィヴィオちゃんの…」

ヴィヴィオ「パパー、暇ー」

「あー、ヴィヴィオ、その鎧を何とかしてくれないか？以外と危険だ、それ」

ヴィヴィオ「わかったー！ん～鎧いらない！」

そう言った瞬間、聖王の鎧は消えてなくなり、代わりにさっきまでヴィヴィオが
来ていた洋服姿になった。

「あれ？消えた」

フェ「確か本人の意志とは無関係に発動するんじゃなかったの？」

「そうだと思っていたんだけど」

しかしその洋服は子供のサイズであり、今のヴィヴィオには
きつすぎた。よってビリビリッ！いう大きな音と共に洋服は裂けて
しまった。

ヴィヴィオ「ふぇ？」

突然のことでヴィヴィオは茫然としているし、周りも静まり返っている。

エ「グハァッ！」

しばらくしてエリオが鼻血を出しながら後ろに倒れたので、ようやく。

ヴィヴィオ「きゃあああああああああああ！！！」

悲鳴を上げながら両手で胸を隠してしゃがみこんでしまった。
しかし胸がでかいせいか隠れていない。それをじろじろと見つめる食堂にいた他の男ども。

俺となのは達は、親の責務を果たした。

「お前ら何見とんじゃあああああ！！！」

な「男は出て行くの！！！」

は「部隊長命令やあああ！！」

キャ「エリオ君なんか知らない！！」

ヴィ「でてけえええええ！！！」

男ども「ぎゃあああああああ！！！」

～ただいまお掃除中です。しばらくお待ちください～

ヴィヴィオ「ううう…みられた…」

「大丈夫、みんな粛清しといたから」

男どもだったもの「」

ザフィ「ウィルよ、ヴィヴィオからレリックだけを取り除くことはできんのか？」

ギ「生きてたんですか！？」

ザフィ「狼モードだったから粛清の対象外だった」

「うーん、シャマルどう思う？」

シャ「駄目ね、もう完全にヴィヴィオと一体化しちゃってるわ」

「やっぱりそうか。ヴィヴィオ、元の姿に戻れるか？」

ヴィヴィオ「やってみる。えーっと、子供モード！」

そう言うとまた虹色の光に包まれて、出てきたのは元のヴィヴィオ。

「自分でうまくコントロール出来ているようだし、良いんじゃね？」

な「いいのかな？」

「じゃあこうしよう。いいかヴィヴィオ。普段の時にそれ出しちゃだめだぞ？
それに大人になっても駄目だからな？パパとの約束だぞー」

ヴィヴィオ「わかったー♪」

「これでよし」

カナ「しかし聖王か…懐かしいな」

シグ「知っているのか？」

カナ「会ったことがある」

みんな「はい？」

カナ「オリヴィエ聖王女殿下が一度私を掘りあててな。私はその時卵モードだった
んだが、殿下は私が危険なものであるとわかったらしく、そのまま埋め戻して
くれたのだ」

ティ「良い人だね」

その後の検査で、ヴィヴィオの魔導師ランクがＳＳ＋になっていたことが判明した。
レリックってすごいね、うん。

「で、なぜ私は正座させられているのでしょうか？」

俺は今、自分の部屋で正座させられている。その周りをなのは達が囲んでいる。

な「ウィル君がきちんとしていなかったからこんなことになったんだよ？」

フェ「ひょっとしたら危ないことになっていたかも！」

は「なので、ウィル君には少しＯＳＨＩＯＫＩしないといかんのよ」

「…拒否する！」

〈マァキシマムスピード、クロック起動〉

俺は光学迷彩をかけて、超高速で部屋から脱出しようとした。

が。

ガシッ！

「へ？」

フェ「つ・か・ま・え・た♪」

「だからなんでお前ら光学迷彩かけているのに捕まえられるの！？」

は「女の勘や！」

な「じゃあ、ウィル君」

な、フェ。は「ＯＳＨＩＯＫＩなの（だよ）（やで）！！」

「ふ、不幸だあああああああああああ！！！！」

後日、時空管理局の売店で『レリック飴』が発売され、そこで大ヒットして
ミッド全体でも売られるようになったのはまた別の話。

番外編６：あれ、どちらさま？（後書き）

ヴィヴィオが聖王化しました。
色々と設定を無視していますが、そこには突っ込まないでください。

次回は…考え中です。
では

番外編7：こんなのどうよ？

～6課、部隊長室～

は「あ～仕事めんどくさい～」ぐてー

ア「主、もう少しですから」

ツ「そうですよはやてちゃん！頑張ってください！」

は「うー仕方ないなー」

はやては姿勢を直して書類との戦闘を再開した。

は「にしてもウィル君は何してんやろう？突然ヴァイス君とかアルトとか整備班全員
　連れていくとか言い出して」

ア「新しいヘリコプターでも導入されるのでは？」

ツ「また新品ですか！？」

は「そんな話聞いておらんな～」

今から3日前のこと。突然ウィルが6課にやってきて

「はやて！ヴァイスとアルト、それに整備班全員借りてくぞ！じゃ

な！」

と言い残して帰ってしまった。

は「まあ、じきにわかるやろ、うん」

この時にはやての考えは少し間違っていた。

実際には”じきに思い知らされた”のだったのだから。

～3日前、地上本部、格納庫～

「さて、君達を呼んだのにはある理由がある」

ヴァ「それは？」

「なあヴァイス、ヘリよりも高速で高機動、大人数を運べるしおまけに高火力な乗り物に
乗ってみたくないか？」

ヴァ「乗りたいです！でもそんな都合のいい乗り物なんてあるんですか？」

「それがこれだ！」

ティ「じゃじゃーん！」

ティーナがスイッチを押すと格納庫の扉が開く。その中には。

アルト「な、なんですかあれ！？」

整備班「すげー！！」

ヴァイス「かっこいい…」

リパブリック・アタック・ガンシップと呼ばれることも多い低飛行強襲型兵員輸送艇（ＬＡＡＴ／ｉ）が２機いた。愛称は「ラーティ」である。ＬＡＡＴ／ｉガンシップにも戦場における２つの主要な役割があった。ガンシップの最初の目的は兵士たちを輸送することであり、乗員区画に３０人以上の兵士と、後部ハンガーに４機の軍事用スピーダー・バイクを収容することができるのである。

ガンシップの第２の役割は、偵察、攻撃支援、捜索および回収任務、そして地上部隊やエアスピーダー、さらには宇宙戦闘機に対する低空からの攻撃である。２門の大型駆動式ミサイル発射装置は様々な弾頭を発射させ、発射体を音速にまで加速させることができるが、敵の装甲車両や地上施設を破壊する際には、短距離型自動追尾ミサイルが最もよく使用される。このロケット弾は一旦発射されると内部誘導システムに制御が引き継がれ、指定された標的に向かって自動的に追尾を続ける。他にもガンシップの後方に設けられたベルト供給型ロケット・ランチャーには、特定の任務に要求される特別な兵器荷重が考慮されており、標準爆撃量は一般的だが、

腐食性の反物質シャワー弾頭、放射性炸裂ミサイル、ＥＭＰロケット弾など、
様々な弾頭が装備されている。

一方で、宇宙船やエアスピーダーを標的とする際には、両翼の下に隠された４基の
空対空ロケットが発射される。また、敵兵士やガンシップに接近する他の小さな
高速の標的に対しては、コクピットの顎部に２基、後部に１基ある対歩兵用レーザー
タレットが使用され、さらには、ガンシップの上下にいる敵に複合型ビーム・レーザーの
圧倒的な火力を浴びせることのできるボール・タレットも装備されている。この
バブル型砲塔は兵員キャビンから伸びる接続アームの先端に搭載されており、頑丈な
球体の内部に収容されたクローン・トルーパーによって発射されることになる。
こうした多彩な武器による絶大な破壊力から、ガンシップは兵士たちを展開させる前に、
戦場を一掃するべく出動させられることが多い。

ＬＡＡＴ／ｉガンシップの前面には猫背型をした球形のコクピットがあり、操縦士、副操縦士、
砲手が１列縦隊になって座っている。一方で、兵員キャビンは開放型になっており、
トルーパーたちがブラスター・ライフルで標的を狙撃することによって、ガンシップの
攻撃力を補うことができる。また、ガンシップの強化装甲はかなりの衝撃でも吸収

できるように作られているが、この乗員区画には軍医として機能するＩＭ－６医療ドロイドや
その他のサバイバル装備が搭載されているため、破壊的なダメージを受けた際には
機体からコクピット区画全体を切り離し、脱出ポッドとして利用することも可能である。

今回、この機体を管理局で使うので、全てのレーザー砲を非殺傷設定の
魔力ビーム砲に換装し、さらにミサイルは弾頭を催涙ガスなどに変えるなどしている。

詳細

全長：１７．４　ｍ

全幅：１７　ｍ（翼幅）

全高：６．１　ｍ

ＭＧＬＴ：５０　ＭＧＬＴ

最高速度（大気中）：６２０　ｋｍ／ｈ

武装

？対歩兵レーザー・タレット　３基

？複合型ビーム・レーザー・タレット　４基

？マス＝ドライバー・ミサイル発射装置　２基
？軽空対空ロケット　８基

補助装備
？スピーダー・バイク　４機
？ＩＭ－６医療ドロイド　１体

操縦要員
？パイロット：１名
？副操縦士／砲手：１名
？砲手：２名

乗客定員
？３０名

積載重量：１７？

航続期間：８時間

「とまあこんな感じなんだが、どうよ？」

整備班「整備はしづらいですか？」

ティ「これはもともと戦争時に最前線で使われる機体だから整備は簡単よ。

ただ、ヘリとは違うから一から勉強しないとね」

整備班「了解！」

アルト「あの、なんで赤い機体と青い機体があるんですか？」

ヴァイス達から見て右が赤、左が青である。

「青が普通の時に乗ってもらう機体。で赤は、質量兵器満載の機体だ」

ティ「犯罪者が質量兵器を用いて民間人へ攻撃した場合はこの赤い機体で
出撃してもらうわ。ｏｋ？」

アルト「了解です！」

「じゃあまずはシュミレーターを使っての訓練からだな」

1日目

ヴァ「はえええええええええええええ！！！」

アルト「きゃあああああああああああ！！！」

砲手「「早すぎて撃てねえええええええええええええ！！！」」

ドカーンッ！↑もちろん墜落

「最初から飛ばしすぎだ！」

俺はシュミレーターでパイロットたちを指導。

ティ「で、ここはこうなっているの」

整備班「意外と複雑だ…」

ティーナは整備班を率いて機体をばらしている。

2日目

ヴァ「楽しいいい

3日目

ヴァ「余裕の」

アルト「よっちゃん！」

砲手「「命中率１００％キター！！」」

「おし、じゃあ実際にのってみるか！」

整備班「ティーナさん！出来ました！」

ティ「おお！完璧じゃない！よく出来ました！」

そこにシュミレーターから出てきたウィルたちが来た。

「ティーナ、それ飛べるか？」

ティ「今飛べるようになったの！」

「じゃあ実際に飛ぶぞ！全員乗れ！」

みんな「はい！」

ヴァ「よし、報告しろ」

砲手A「右舷レーザー砲塔異常なし！」

砲手B「左舷レーザー砲塔よし！」

アルト「全兵装異常なし、飛行可能です！」

ヴァ「じゃあ行きますよ、ウィルさん！」

「かっ飛ばせ！」

ヴァイスが機体を浮かせて、ラーティは空に向かって飛んで行った。

整備班「ヘリなんかよりめっちゃ早い！」

「飛行もかなり安定している。いい腕だ」

ティ「整備もうまくいっているし、問題なさそうだね」

その時通信が入った。

通信士「全部隊、緊急！現在銀行強盗犯3名が自動車で逃走中！郊外へ向かって
いる模様！首都航空隊は直ちに追跡せよ！なお、犯人グループは質量兵器で

武装している！慎重に行動せよ！」

ティ「ご主人様、ちょうどいいんじゃない？」

「だな！ヴァイス！」

ヴァ「了解です！」

「こちらロンバートだ。先程の命令を受領した。犯人の追跡はこちらで行う。
奴らの現在位置を教えてくれ」

通信士「きょ、局長！？え、えっと現在高速道路から一般道に降りました。
座標を送信します」

「受信した。それと犯人の確保はこっちでするが、捕まえた後我々は帰るから
犯人の輸送はそっちに任せる。以上」

犯人Ａ「はっはっは！大もうけだ！」

犯人Ｂ「あのはげの支店長、ちびってたぜ？」

犯人Ｃ「これであとは逃げるだけだ！」

犯人グループはよくあるヴァンで逃げていた。普通ならこんな車では速度が遅くて
捕まるのだが、この車には別のスポーツカーのエンジンが乗っており、異常な
スピードで逃走していた。

犯人Ｂ「あとどれくらいだ？」

犯人Ａ「今ここだから、あと１０分ってところだ」

犯人Ｃ「おい、あれなんだ？」

アルト「いました！前方にターゲット！」

「よし、射撃を許可する。撃ちまくれ！って言いたいところなんだけど、あの中には
お金がたっぷりだから、まずは車の後輪を撃ちぬけ」

砲手「「了解！」」

バブル型砲塔から発射された2本の魔力ビーム砲は見事に命中し、タイヤはパンクした。

犯人A「くそ！パンクした！」

犯人B「仕方ない、袋をもって走ろう！」

犯人グループはまだあきらめずに金のはいった袋を掴んで外に出た。

「あいつらまだ逃げる気かよ。しゃあないな、ヴァイス、撃て」

ヴァ「アイアイ！」

ベルト供給型ロケット・ランチャーから2発のミサイルが飛び出た。
そのミサイルの弾頭は、1つは催涙ガス、もう1つは胡椒たっぷり弾頭だった。
それらが犯人グループの頭上で爆発する。

犯人C「なんだこれ、は、は、はくしょん！はーくしょん！」

犯人B「目が見えねえ！！はくしょん！ごほっ！ごほっ！」

犯人A「目もいてえしのどもいてえ！最悪だ！」

「これでもう動けんだろう」

ティ「そうですね」

ティーダ「あれ、ウィルじゃないか？なんだその機体？」

「おうティーダか。これな、おニューの機体なんだ。でさ、あれ頼むわ」

ティーダ「…ずいぶん苦しそうだが、何をしたんだ？」

「なに、頭の上から催涙ガスと胡椒をふりかけただけだ」

ティーダ「ひでえ」

～6課、部隊長室～

は「終わったあああ」

ア「お疲れ様です、主」

ツ「はいお茶です！」

は「ありがとなー、ずずー」

と、その時、建物全体が揺れた。

は「ぶーっ！！」

ツ「またですかあああ熱いいいいい！！！」

いつかのように顔面にお茶をかけられたツヴァイは床をのたうちま

わっている。

は「今のはなんや！？」

グリフィス「こ、こちら指令室！何かが６課隊舎上空を高速で通過した模様！」

ア「何か？」

シャーリー「あれは…なに？」

な「はやてちゃん！なんか変なのが空を飛んでるよ！」

フェ「飛行機、とは違うかな」

は「今そっちに行くで！」

～訓練場～

エ「なんか早かったね」

キャ「そうだね」

ス「でもティア、かっこよかったよね？」

テ「うるさい！」

は「どこにいるんや？」

な「あ、戻ってきた」

フェ「え？」

見ると海の方向から何かがやってきた。それも高速で。

シグ「あれは敵なのか？」

ヴィ「めんどくせえ！撃ち落としてやる。アイゼン！」

ヴィータは目の前に４つの鉄球を飛ばした。

「げっ、ヴィータの奴！避けろ！」

ヴァ「おりゃあああああ！！」

ヴィ「避けられた！？」

シャーリー「八神隊長、局長から通信です。そちらにつなぎます」

「おい、ヴィータ！いきなり攻撃するんじゃねえ！！」

は「ウィル君？まさか今変な乗り物に乗っとらん？」

ティ「そのまさかだよ！ちょっと驚かせようと思っただけなのに！」

「ヘリポートに来い。着陸するから」

はやて達がヘリポートに到着すると、そこにはラーティの姿が。
中からヴァイスやアルト、整備班がぞろぞろ出てくる。

な「ヴァイス君！アルトも！」

は「なるほどな。これに乗る訓練のために連れていったんやな？」

「そうそう。喜べよみんな、管理局で最初にラーティをもらえるんだぞ！」

ス「これラーティって言うんですか？」

ティ「正確には低飛行強襲型兵員輸送艇（ＬＡＡＴ／ｉ）って言うんだけどね」

な「ラーティの方が呼びやすいの」

カナ「父上、かっこいい鉄の鳥じゃないか」

テ「鉄の鳥って…」

カナ「私のいた時代ではこんなものなかったんだ！」

「そりゃそうだろうな」

ヴィヴィオ「乗りたーい」

カナ「私も乗りたいな」

ティ「もう少し大きくなってからね～」

ヴィヴィオ、カナ「ぶー」

ザフィ「それで、こいつはどれだけ役に立つのだ？」

シャ「確かにそれは見てみたいかも」

「さっき銀行強盗捕まえたけど、まあ訓練場でガジェット相手にちょっとやってみるか」

「まずガジェットとドロイドをそれぞれ２００体ほど出して、と」

ティ「それじゃあ多すぎない？」

「いいんじゃね？んで訓練内容は、じゃあカナリアに手伝ってもらおう」

カナ「具体的に何をすればいいのだ？」

「カナリアは何もしなくていい。こういうシチュエーションだ。
敵軍団のど真ん中に取り残された女の子をラーティで救出する。
さすがに1機じゃきついから2機で攻撃する」

な「４００体の敵に2機で挑むの！？」

ティ「まあ、なんとかなるか。カナリアちゃんはおびえる子供役ね」

カナ「まあ、いいだろう」

な「それじゃあ訓練開始！」

カナ「こわいよー誰か助けてー（棒）」

ティ「あ、あんなところに女の子がいるー助けなきゃー（棒）」

「ラピッド1から2へ。突入開始。敵を駆逐せよ」

ヴァ「こちらラピッド2。了解です！行くぞ、アルト！」

アルト「はい！」

機体を横転させて下にいる敵に向かって突っ込む。ガジェットがレーザーを放ち、
ドロイドもブラスターライフルを撃ってくる。2機のラーティはそれらを避けつつ
攻撃する。超低空飛行をしている間に砲手がビーム砲をばらまき、
対空ミサイルが
空を舞う。ベルト供給型ロケット・ランチャーから連続してミサイルが飛び出す。
それらの攻撃を食らったドロイドやガジェットはあっという間に破壊されていく。
しかも急加速や急減速ができるので敵の攻撃がなかなか当たらない。
ヘリコプターでは絶対にできない攻撃方法である。

ス「すごいすごい！！」

テ「圧倒的ね」

フェ「地上の制圧があっという間に終わっちゃう…」

な「これだと空戦魔導師いらないよね？」

は「それ言っちゃあおしまいやで」

ヴィ「あ、もうカナリアの所だぞ」

開始数分で敵戦力の7割を殲滅したラーティはカナリアの横についた。

「さあ、カナリア、乗ってくれ」

カナ「本当に鉄の塊が浮いている…」

その後、敵を全滅させたので、6課のみんなはラーティの良さが分かったようだ。
訓練後、ラーティの後部に6課のマークが描かれた。

赤いラーティは使う日が来ないこと願いつつも、地上本部の格納庫に厳重に
保管されることになった。

ヴァイスはあたらしいのりものをてにいれた！

ヴァイスはあたらしいすきるをみにつけた！

つづく～

番外編7：こんなのどうよ？（後書き）

３月も今日で最後。暇な日々は今日で終わってしまいます。
４月からは先の大地震で遅れている就職活動が再開するので
更新スピードが落ちる可能性がありますが、どうかご了承ください。

次回も適当に。

では

第６８話：親子で戦いたい？

ラーティが６課に来てしばらくしたある日。

シグ「時にカナリアよ」

カナ「なんだ、母上？」

ちなみにカナリアは俺のことを「父上」と、なのは達のことを「母上」と、
ヴィヴィオとキャロのことを「姉上」と、そしてエリオのことを「兄上」と
呼んでいる。もっと柔らかい口調にすればいいのに。

シグ「こう言っては何だが、お前は戦いに慣れているのだろう？」

カナ「…まあ、そうだな」

シグ「じゃあ模擬戦しよう」

ヴィ「子供とやる気かよ…」

ザフィ「お前も見た目はこどｍ」

ヴィ「ザフィイイイイイイイイラアアアアアアアア！！！！」
ジャキンッ！

ザフィ「戦略的撤退！」すたこらさっさ～

ヴィ「待てえええええええ！！」

シャ「そう言えばカナリアちゃんの魔法陣、見たことがないタイプね。
　何式なのかしら？」

カナリアが魔法を使う時に現れる魔法陣は、３角形みたいなベルカ式でも
丸と４角形を組み合わせたようなミッド式でもない。正３角形を２つ逆に重ねた
六芒星（ヘキサグラム）をベースにしたような魔法陣を使っている。

カナ「これはもう私しか使っていないであろう術式だ。『マーゲン式』と言う」

ス「まーげん？それってどういう特徴があるの？」

カナ「…より多くの敵を倒すためだけに開発された術式だ。だからこの術式には
　母上たちの使う魔法とは違い、非殺傷設定だったか？それがついてない」

フェ「非殺傷設定がないの！？」

「あれ、使えないのか？」

カナ「…ああ。なぜなら」

ティ「なぜなら？」

カナ「やり方が分からないからな」

な「」ずさー

フェ「…ウィル、教えてあげなよ」

「そうだな、じゃあ午後やろうか？」

カナ「了解した、父上」

シグ「じゃあカナリアが非殺傷設定のやり方を学んだあとで模擬戦を」

ヴィ「バトルマニアめ…」

ザフィ「」↑粛清された

午後

カナ「覚えたぞ」

「よしよし、カナリアは覚えるのが早くていい子だ」なでなで

カナ「…へへっ」

シグ「では模擬ｓ」

ヴァ「あ、シグナム姐さん、はやてさんが呼んでましたよ？」

シグ「主が？わかった。この勝負、またあとでな」

カナ「…あの母上はいつもああなのか？」

フェ「あんな感じだよ」

「だな。暇になったから、カナリア、ガジェットやドロイド相手に戦ってみるか？」

カナ「いいだろう」

ティ「じゃあ最初はガジェット１００体ね。レディー、ゴー！」

カナ「……」

カナリアが無言で右手を振ると、近づいてきたガジェットがみんな地面に叩きつけられた。
中にはそのまま押しつぶされた奴もいた。そして動きが取れない敵に向かって、
背中から生えている黒い翼から発射した氷の矢を放ち、あっという間に全滅させた。

カナ「こんなものか。あっけないな」

フェ「」

ティ「じゃあ次はガジェットとドロイドをそれぞれ２００体ね」

カナ「了解」

カナリアが今度は左手を振った。すると全ての敵がまともに動けなくなった。
飛行型ガジェットはコントロールを失い、くるくる回りながらビルに突っ込み、
ごろごろも骨も、みんな宙を舞っている。

ヴィ「何をしたんだ？」

「…なるほど。シュミレーター全体を無重力化したな？」

ティ「だからまともに歩けないし、飛べないのね」

そしてカナリアの翼が真っ白に変化し、次の瞬間シュミレーター全体と周囲の海を
カチンコチンに凍らせた。ガジェットたちも例外なく機能を停止した。

ヴィ「」

ＦＷ「」

「ほう…やるじゃないか」

カナ「疲れたー」

ティ「お疲れ様」

カナ「父上、おやつが食べたい」

「よーし、じゃあなんか食うか。あれはいつ溶けるよ？」

俺は凍っている訓練場を指さす。

カナ「今日の夜までには多分とけると思うぞ」

「そうか、ならいいや」

カナ「じゃあおやつをっ！？」どてっ！

そう言いながらこっちに歩いてきたカナリアが滑って転んでしまった。

カナ「痛い…」

「おいおい大丈夫っ！？」ずでん！

あわてて駆け寄った俺も滑ってこける。

その時、バリッ！っという嫌な音が聞こえた。

エ「今変な音が聞こえた気が…」

キャ「私も聞こえた」

「何の音だ?洋服でも破けたかな?」

ティ「特に異常はないですよ?」

「そか、ならいいや。じゃあみんな戻ろうぜ~」

みんな「は~い」

だがそこにいた全員は気がつかなかった。ものすごくまずいことが起きていることに…

は「もう疲れた！部隊長とかきつすぎるやんか！」

ツ「書類が多すぎです～」

ア「確かにこの量はな…」

は「ちょっと気分転換に散歩せえへん？」

ツ「行きますです」

は「外の空気はいいもんやな～」

ア「室内にこもっていると体に悪いですしね」

ツ「あれ、みんないないです」

ア「多分オフィスで仕事でもしているんだろう」

は「そうやね、あれ？」

ア「ん？どうかしましたか、主？」

は「あかんな～うちちょっと疲れてるみたいやわ。あるはずのものが見えなく
　なってもうた」

ツ「あるはずのもの？」

は「なあツヴァイ、訓練場ってどこやったっけ？」

ツ「はやてちゃん、それを忘れちゃだめですよ～。そこにあれ？」

ア「え？」

ツヴァイが指さした場所には海しかなかった。

は「確かここにあったと思ったんやけど、おっかしいな～」

ア「あ、主。あれを…」

は「なんや？」

何かに気がついたアインの声に反応したはやてが見てみると、そこには。

隊舎から訓練場にのびている通路の一部が残っていた。

は「」

ア「妹よ、出来るだけ高く上がって残りを見つけてこい」

ツ「はいです！」

は「え、なにあれ、また壊れたの？もうやだ…」

ア「主、まだ壊れたと決まったわけでは」

は「じゃああの通路はなんや！端っこしか残っとらんやないか！」

ア「確かに」

ツ「はやてちゃん！見つけましたよ！」

は「ほんまか！どこにあるんや！？」

ツ「なんかカチンコチンに凍って沖に向かっていたです」

は、ア「」

つまりはこういうことである。

カナリアが凍らせたあとに2人でこけた衝撃によって、基礎構造にひびが入った。
そしておやつを食べにみんなが食堂に消えた後、そのひびが大きくなり、
やがて通路は壊れてしまい、疑似氷山と化したシュミレーターは沖へと流れて
しまったのである。

この後、タグボートで沖に流れていたシュミレーターを6課まで引っ張ってきて
きちんと修理した。ウィルとカナリアが怒られたのは言うまでもない。

罰として修理費用は全てウィルの自腹となり、カナリアは毎日シグナムと特訓することになった。

「不幸だ…」

カナ「不幸だな…」

それとは別に。

は「訓練場全部凍らすとかやりすぎや！」

な「ウィル君、これで何回壊したことになったのかな？」

は、な「ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？」

「ひえええええええええ！！！！」

カナ「あばばばばばば！！！」

奥さんからたっぷりＯＨＡＮＡＳＨＩされましたとさ。

第６８話：親子で戦いたい？（後書き）

そう言えばカナリアの詳細でも書くか。

名前：カナリア（元ブロウアウト）

年齢：不明

身長：１３２？

体重：本人の意向により書きません

性格：真面目。もうちょっと社交的になってほしい

容姿：腰まで伸びた長い黒髪、目の色は黒。

魔力ランク：ＳＳＳ

魔力光の色：黒

術式：マーゲン式

魔力変換資質：重力、氷

レアスキル：魔力吸収（他人の魔力をスポンジみたいに吸収する）

こんなもんかね。

次回は…どうしようかな。

では

第６９話：今度のお仕事は？

～地上本部、会議室～

は「それで今度はどんなロストロギアを回収するんや？」

ここにはいつものメンバーが集まっていた。

レジ「正確には回収ではなく、討伐と言った方がいいかな」

シグ「討伐？相手は生命体ですか？」

オーリス「こちらの映像をご覧ください。これは第８５管理外世界『フリスビー』の
首都の映像です」

フェ「なのその名前」

ティ「なんでもその星の統合政府のトップがフリスビー大好きだからこの名前に
なったらしいわよ」

は「適当やな…」

モニターに映っているのは、地上本部よりもでかいドラゴンが町の

中で
大暴れしている映像だった。

ヴィ「でけぇ…」

オーリス「これは特殊生体ロストロギア『ディシプル』です」

フェ「ディシプル…」

「確かフランス語で『弟子』とか『後継者』って意味だった気がする」

な「そうなんだ。よく知っているね」

は「いやちょっと待って、こいつが弟子、ってことはお師匠さんもいるんとちゃう？」

オーリス「八神部隊長の言うとおりです。次の画像をご覧下さい」

次に出た画像には、瓦礫だらけの場所のど真ん中にでかい足しか映っていなかった。

ヴィ「これじゃわからないぞ！」

ラ「おいおい、これってさっき映っていた町なのか？」

レジ「そうです。さっきの町はこの怪物よりさらに大きな怪物の足踏みで壊滅しました」

ＦＷ「」↑話についていけない

オーリス「この特殊生体ロストロギアは『ムワリム』と呼ぶことになりました」

「スワヒリ語で『師匠』って意味な」

な「それでこれを討伐するのですか？６課だけで？」

「がんばー」

ティ「ばー」

は「無理ゲーやんか！」

「諦めたら、そこで試合終了だぜ？」

シグ「ウィルの戦艦からの攻撃で倒すことはできないのか？」

「できないね。まず民間人居住地区に近いところにあの化け物どもがいるから
下手すると民間人ごと吹き飛ばしかねない。それに現地の軍隊の攻撃を見て
いたんだが、ほとんど、いや全く効果がないことが分かった。質量兵器じゃ
まるでお話にならない可能性がある、俺の持っている戦艦も含めてな」

ヴィ「あの戦艦でも勝てないのかよ！？」

「まあ、それでもいくつか選択肢はある。1つ目は周辺の民間人を全て避難させた後に
戦艦で猛攻撃をすした後になんとかする。そして2つ目は…これは出来る限り
やりたくないのだが、デス・スターのスーパー・レーザー砲で惑星ごと吹き飛ばす
という作戦だ」

な「それはいくらなんでもやりすぎでは！」

レ「だがすでに現地政府から救援要請がきていてな。自前の兵器じゃあいつらを
倒せないから助けてくれ、という内容だった」

オーリス「今この『ディシプル』と『ムワリム』は壊滅した町で座っているそうです」

「ん～、ユーノ！なんかわかったか？」

ユ「うん、こいつらどちらかというと殴る・蹴るの攻撃がメインだね。もちろん
遠距離攻撃もできるけど。ただ倒し方がよくわからないんだ。ある本には
凍らせろって書いているし、他の本には燃やしちまえってあるし」

「ならカチンコチンに凍らせた後に燃やせばいいんだ、問題ないな。
じゃあメンバーは俺、シグナム、はやて、リイン姉妹、カナリアで充分だな」

な「カナリアちゃんを連れていくの!?危ないよ!」

カナ「心配するな母上。自分の尻は自分で守れる」

フェ「それでも心配だよ…」

ティ「私はお休み?」

「ああ、別の任務があるから心配するな。あとで局長室に来てちょ。スバルもな」

ティ「はーい」

ス「私も!?」

「じゃあ、出発は明日の正午な」

みんな「はーい」

～局長室～

トーレ「ウィル、今回の任務は？」

クア「久しぶりの任務です～」

セッテ「今度はどこの犯罪者をぶっ殺すよ？」

「いや、今回は誰も殺さなくて済む任務のはずだ」

ス「何の話ですかい」

今回俺がトーレ達に頼むことは、マリアージュ事件えをなかったことにする
という内容だ。ルネッサ・マグナスが起こす予定の事件であり、その際古代
ベルカの王の一人である冥王イクスヴェリアが叩き起こされて、全部終わった後に
またおやすみなさいする事件である（かなりアバウト）。

すでに主犯のルネッサ・マグナスとトレディア・グラーゼは、不慮の事故に

より亡くなっている。なんでも交通事故にあったとか。いや～運が悪いよね～、
いやほんとに。

あとはイクスヴェリアの眠っているマリンガーデンの地下遺跡に行って、
マリアージュの核を体内から無限に生成できる能力を無効化して、
今の技術では治療不可能な体をチートで直す。そうすればみんなハッピーめでたしめでたしになる。はず。

「…ということだ。何か質問は？」

ティ「自分でいけよ」

「…ガムテープパンｔ」

ティ「行かせてください！」

「頼んだぞ。トーレ達とスバルも頑張ってな」

トーレ「わかった」

クア「行ってきまーす」

セッテ「イクスヴェリアってかわいいのかな」

ス「なんで私までー！」ずるずる

～6課～

な「カナリアちゃん、いつもシグナムと訓練しているからたまには私と模擬戦しよ?」

カナ「わかった。受けて立とう」

フェ「じゃあ時間は5分ね。始め!」

その瞬間、カナリアは氷の壁を自分となのはとの間に立てて、近くのビルの後ろに逃げ込んだ。

な「はやっ!でも、アクセルシューター!」

複数の誘導弾が氷の壁を破壊し、カナリアを追跡した。だがカナリアは右腕を振ってその全てを吸収した。

カナ「ほう、誘導弾のくせにかなりの魔力だな」

な「やっぱり吸収は反則なの！」

カナ「こちらの番だ」

そう言うと黒い翼を大きく広げ、翼に幾つもの魔法陣が展開される。

そして。

カナ「ソニック・アロー」

氷の矢が超高速で飛び始めた。１つ１つにそれほど威力はないが、その分数が多い。

な「なんでこんなに早いの！？」

カナ「シグナム母上と考えた私のオリジナル魔法だ。ただの射撃魔法を高速化
　して、さらに矢にかかる重力を無効化にしただけなんだが…」

な「充分すぎるの！！ならこっちも！」

なのはは一度カナリアから距離をとって砲撃のチャージをはじめる。

な「ディバイン…」

カナ「ふむ…」

一方カナリアはその場から動かずに何かを考えていた。

フェ「なんでカナリアは逃げないのかな？」

シグ「さすがに高町の砲撃なら避けたほうがいいと思うのだが…」

カナ「フェイト母上、質問が」

フェ「うぇ!?な、なに?」

いきなりカナリアから質問されたので若干驚くフェイト。

カナ「もし訓練場の場外に出た場合は負けになるのか?」

フェ「場外に?そうなるけど、それがなにか?」

カナ「なに、確認しただけだ」

な「バスター!!!」

そしてピンク色の砲撃がカナリアを包み込んだ。

と思ったが。
その砲撃は全てカナリアの前に出現した黒い穴に吸い込まれた。
フェ「何あれ！？」
シグ「というか高町はどこに行った？」
フェ「え？」
よく見ると砲撃を撃ったなのはの姿がどこにもいない。
な（フェイトちゃ～ん！助けて～！）
その時なのはから念話が届く。
フェ「なのは？今どこなの？」
な（砲撃撃ったら何故か後ろに吹き飛ばされちゃったの！）
シグ「カナリア、何をした？」
カナ「なのは母上が砲撃を撃った瞬間に母上にかかっていた重力を無効化した。
　母上は砲撃の反動によって訓練場の外に飛んで行ったわけだ。
それで母上の
　砲撃は」
そう言うとカナリアは先ほどの黒い穴を出現させた。

カナ「このブラックホールに吸い込ませた」

フェ「ブラックホール！？」

シグ「そうか、重力を操れるならブラックホールも作れるのか」

カナ「とりあえず私の勝ちと言うことでよろしいかな？」

フェ「うん、カナリアの勝ち！」

結局、なのはは砲撃の反動で2？ほど飛ばされてしまった。

な「うえーん！負けたー！悔しいー！」

第６９話：今度のお仕事は？（後書き）

そろそろネタが尽きてきました！

学校も始まるしもう嫌になっちゃうね！

次回は怪物戦です。多分

では

第７０話：今回も

「さて、今回もまたグダグダなわけなんだが」

シグ「何か言ったか？」

「いや、なんでもない。ただの独り言だ」

今俺とシグナム、はやて、リイン姉妹、カナリアは第２艦隊旗艦のエクリプス級の
艦橋にいる。既に第２艦隊は第８５管理外世界「フリスビー」の衛星軌道上に到着している。

「艦長、フリスビー統合政府大統領から通信です」

「つなげ」

フリスビー「今回はようこそおいで下さいました。なんとかあの怪物を倒して
くださいお願いします！」

「努力しますよ、大統領。それで現地住民の避難は？」

フリスビー「あなたの言う通り、周囲１００？圏内から民間人、軍人は退避させました」

「了解した。それじゃあ思いっきり大暴れするからしっかり椅子に座っていてください」

は「またウィル君と知り合いの現地のトップ…」

ツ「もしかしてまた居酒屋で出会ったんですか？」

「いや、俺がここに遊びに来た時に公園でコーヒー飲んでたらフリスビーを
頭にぶつけられてな。それで喧嘩して意気投合した」

ア「またそんな感じか…」

カナ「友人を作るにはフリスビーをぶつければいいのか？」

シグ「絶対に違うからな？それはやるなよ？」

は「で、どんな作戦なんや？」

「まずこうする。エディ！」

「撃ち方始め！」

その瞬間、第2艦隊の戦艦から一斉にターボレーザーの射撃が始まった。

ちなみに６０基で一斉砲火することにより、惑星の都市部を瓦礫の山に出来る。
正直これで終わるだろうとウィリアムは思っていた。
だが。
「おい、なんか再生してないか？」
ツ「本当です！」
なんと「ディシプル」と「ムワリム」は、欠損した部分を自己再生したのだ。
「どこぞの魔導書の防衛プログラムじゃねえんだから勘弁してくれ」
そして2体の化物は上を向いて口から真っ赤なビームを撃ってきた。
「高エネルギー反応！攻撃来ます！」
「全艦シールド出力最大！」
エクリプス級に飛んできたビームは、その強固なシールドによって無効化された。
だが1隻のインペリアル？級に向かっていったビームは、シールドを難なく突き破った。
そして甲板上で大爆発が起きて、どでかい穴が空いた。
「おいおいマジかよ…」
「インペリアル？級3番艦被弾！現在消火活動中、しかし兵器管制

システムがやられた
模様。攻撃できません」

「動けるのか？」

「出来ます、ただちに後退させ…」

「いや、いい考えがある。こうしたらどうなる？ごにょごにょ…」

「…面白いですね、艦長。やってみますか！」

カナ「父上、何をするのだ？」

「あの『ディシプル』をよく見ているんだ。エディ！」

「アイアイ！」

モニターには「ディシプル」がこっちを見てまたビームを撃とうとしていた。
しかし、その瞬間「ディシプル」を中心としたとてつもなく大きな爆発が起きた。
爆発によって大きなキノコ雲が上がり、ようやくおさまると、さっきまで
「ディシプル」がいたところに深さ１０キロ半径１５キロのクレーターができていた。
怪物の姿はどこにもいなかった。

シグ「な、なんだ！？」

シグナムは我が目を疑った。さっきまで怪物がいたのに、気が付い

たら
クレーターになっていたのだから。モニターをチェックすると、ロストロギア
反応が１つ消えているのがわかった。つまり「ディシプル」は死んだのだ。

だがどうやって？

艦隊のレーザー砲攻撃かと思ったが、例の緑色の光は見えなかった。ミサイル攻撃、いやそれもない。着弾に時間がかかりすぎる。ではなんだろう。

そんなことを考えていてふと窓の外を見ると、さっき被弾して燃えているはずの
戦艦の姿が見えないことに気がついた。

シグ「ウィル、さっき被弾した戦艦はどこにいったんだ？」

「あそこ」

と、ウィルはクレーターを指さす。

シグ「え？」

は「どういうことや？」

「なに、実に簡単なことだ。矢を撃ち込んだんだよ。ただ、その矢は全長１．６？で、
速度はじつに光の７，９８０万倍だけどな！」

は「」

シグ「光の７，９８０万倍!?」

「そ。インペリアル?級の最大船速は６０ＭＧＬＴ（メガライツ）だ。それで単純計算すると１ＭＧＬＴは４００．０００．０００．０００（４，０００億）？／秒という数値になる。んで、光は３００．０００（３０万）？／秒だから、１ＭＧＬＴは光の約１３３万倍以上の速度になる。後は簡単だろ?６０ＭＧＬＴ×１３３万＝７，９８０万だ」

カナ「で、哀れな『ディシプル』はそんな速度に対応する暇もなくやられたと」

「おまけにリアクターも暴走させてた」

ア「かわいそすぎるな」

ツ「それで、あっちの大きい方はどうするんですか?」

「どうしようか」

弟子を殺された「ムワリム」は大声で怒鳴り、怒っているようだ。

「もう一回ターボレーザー発射」

しかし。

「艦長、はじかれてます」

「え」

ア「1度受けた攻撃は2度と通用しないということか？」

「そう考えるのが妥当かと」

「…本気でこの惑星ごと吹き飛ばしたくなってきた」

ツ「駄目ですよ！」

「じゃあちょっと降りるか」

は「待って！ウィルｋ」

俺は周りの声を無視して地上へと転移した。

その頃。

ティ「見付からないな～」

トーレ「だな」

クア「どこかしら？」

セッテ「疲れたー」

ス「おなか減ったー」

この５人はイクス捜索ミッションを遂行中だが、未だに見付からないでいた。

トーレ「こんなことならセインを連れてくればよかった」

クア「セインちゃんなら壁の中も進めるしね～」

ス「とっとと終わらせよう！ディバイン…」

ティ「こんなところでそんなもん撃つな！」がんっ！

ス「いて！ううう…」

セッテ「だいたいつるはしと懐中電灯だけで探すのが無謀だと思う」

トーレ「同感だな」

ティ「こうなったら現代的な方法でやるしかないわね」

クア「というと？」

ティ「…（ニヤリ）」

笑いながらティーナがポケットから取り出したのは手榴弾。

クア「え」

トーレ「まさか」

ティ「Ｆｉｒｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｈｏｌｅ！！」

→

英語圏において爆破・発破する際に周囲に注意を呼びかけるための言葉。

軍隊でグレネード、Ｃ４爆弾など爆発物を使用するときにも使われる。

意訳すると「爆発するぞ！」である。

ティーナは躊躇なくピンを抜き、安全レバーを弾き飛ばし、近くにあった石壁に

向けて手榴弾を放り投げた。

ス「えええええええ！！！」

トーレ「ぜ、全員物陰に隠れろ！」

クア「ひゃあああ！！」

セッテ「ひいいいい！！」

ティ「これぞ現代的なやり方！」

そう言った瞬間に手榴弾が爆発して5人がいた通路は土煙に包まれた。

「やっぱでけえ」

俺は目の前にいる「ムワリム」と対峙していた。

ムワ「グルルルル…」

「さて、どうやって倒そうか…」

ムワ「グルル、グル、グル、グルルルル」

「ん？」

戦い方を考えていた俺は、ムワリムが翼や手をバタバタさせながら唸っていることに
気がついた。何してんだこいつ？

「艦長、どうやらそいつ、話したいそうですよ」

「話したい、だと？でもどうやって？」

「さぁ？」

しばらく考えた。どうすればこのどでかドラゴンと会話ができるのか。

悩んだ結果、俺のとった行動とは。

ピッ、ピッ、プルルルル、プルルル、ガチャッ

アテネ「はい、久しぶりのアテネだよ～」

「おひさ～。あのさ、今俺の目の前にドラゴンがいるんだけどさ、こいつの
言葉を理解できるようにしてくれね？」

アテネ「ドラゴン？ちょっと写メってくれない？」

「はいはい」

俺は携帯をカメラモードに切り替えて、

「おーい、こっち向け！」

と「ムワリム」に話しかける。すると俺の言葉が理解できたらしく、首を地面の近くに持ってきてくれた。

「おし、はいチーズ」かしゃ

…なんかドラゴンがウインクしている写真が取れてしまったが、まあいい。
これをアテネに送信！

アテネ「お、きたきた。あー、この子か。ならこの本だな。これを読めば
あの子とお話しできるわよ！」

「お、サンキュー。じゃな」

いつの間にか目の前に浮いている本を開き、速読＆瞬間完全記憶能力を発動！

はい覚えた！

覚えた龍語?で「ムワリム」に話しかける。

※以後『』内は龍語です。

『やあ、俺はウィリアムだ。君の名前は?』

『…お前たち人間がムワリムと呼んでいる存在だ』

『そうか、よろしく、ムワリム。それでなんで俺と話したがっていたんだ?』

『お前は私の眷属である息子を一撃で倒した。一体どんな奴なのか自分の目で
確かめたかった。だが…お前は今まで俺が会った人間とは違う気配を感じる。
お前は、何者だ?』

『…さあな。普通の人間とは違うすごい力を持っているぐらいだよ』

『そうか。お前なら大丈夫だろう』

『え、何が？』

すると「ムワリム」は翼をたたみ、頭を垂れた。

『我が命、そなたに預ける。好きなように使え』

『はい！？なんでそうなるの！？』

『我が一族には、眷属を倒された場合、倒した者に忠誠を誓うというしきたりがある。
それに従い、私はあなたに忠誠を誓う』

『……別にいいんだけど、１ついいか？』

『なんだ、主？』

『…その、体の大きさ変えられない？さすがにでかすぎるというか、なんというか』

『承知した』

そう言うと「ムワリム」はあっという間に小さくなり、フリード並の大きさになった。

『これくらいでいいか？』

『充分だな。それじゃあこれからはよろしく頼むぞ、ムワリム』

『相分かった』

「もしもし」

フリスビー「ああ、ウィルさん！どうなりました？」

「街中にでかい穴が開いたけど、成功したよ」

フリスビー「本当ですか！いやよかった！ありがとうございます！」

「なに、これも仕事だ。じゃな」

俺は携帯をしまってから、軌道上の戦艦にムワリムと一緒に転移した。

「っと」

シグ「おい、そのちび龍は」

「ムワリム」

シグ「」

は「…何をしたんや？」

「色々あって俺に仕えてくれるようになった」

は「」

リイン姉妹「まじかい」

カナ「ほう、さすが父上だな」

「じゃ、帰るか」

トーレ「ごほっ、ごほっ！って、あれを見ろ！」

クア「も～う！服が埃だらけ、ってあら？」

ティ「あれは！」

ス「女の子？」

セッテ「てことはつまり」

５人「みーつけた！！」

次回に続く！

第７０話：今回も（後書き）

はい、めちゃくちゃでした。

次回も適当です。というか最後あたりまで適当です。

では

第７１話：もう片方の具合はどうかな？

ティ「で、この子がイクスヴェリアちゃんなのかな？」

クア「データによるとそうですね～」

トーレ「にしてもぐっすり寝ているな」

ス「かわいい～」

セッテ「それで次はどうするんだ？」

前回、ティーナが「現代的な方法」である手榴弾による爆破、という方法で荒っぽく
壁を吹き飛ばしたら、その先にはイクスヴェリアが眠っていました。

ティ「ご主人様に教えてもらったように、まずこれをおでこに貼ると」

リュックから取り出したのは、長方形の白い湿布のようなもの。
それをおでこにぴったりと張り付ける。見た目は熱〇まシートである。

クア「それって湿布ですか～？」

ティ「なんかこれを張ってしばらくすると、マリアージュの無限精

製能力が
　無効化されるんだって」

トーレ「ほんとか！？」

クア「マリアージュって、確か人間の言葉がわかるくせに作戦行動能力は昆虫並の
　なんか変な兵器だったわね～」

セッテ「マリアージュの方はそれで何とかなるとして、体の方はどうするんだ？」

ティ「それはご主人様がなんとかするから、とりあえず連れて行きましょ」

ス「はーい」

～地上本部～

俺たちが「フリスビー」から戻ると、レジアスとクロノ、それにジェイルが
集まって会議していた。

「ただい」

カナ「ま」

レジ「お帰り」

ク「やあウィル、その子がカナリアちゃんか」

カナ「ども」

「やらんぞ」

ク「いらないって！」

「なに、クロノ、お前俺の娘をいらんだと？許せん！成敗！」

ク「何それひどいってぎゃあああああああ！！！」

は「クロノ君…」

「さて、悪は消えたからめでたしめでたし」

ジェ「ん？ウィル、その龍はどうしたんだい？」

レジ「なんかどこかで見たことがあるような龍だな…」

ムワ『主よ、こいつら気が付いていないのか？』

『そうだろうな』

レジ「うぃ、ウィル？今何を言った？」

「ん？何って龍語だけど？」

オーリス「ウィルさんは龍ともコミュニケーションを取れるんですか？」

「まあね～。で、改めて紹介しよう。ムワリムだ！」

ムワ「がおー」

レジ「」

オーリス「」

ジェ「あれ、ムワリムって確か『フリスビー』で大暴れしてた生体ロストロギア
　じゃなかったっけ？」

「そうだけど、なんか眷属を倒したら俺についてくるっていうから

さ」

ジェ「…前々から思っていたけど、君って規格外だよね」

シグ「今さら言うことか？」

は「言うのが遅いで」

と、そこに。

すずか「ウィル！何その龍？かわいい～♪」

突然すずかがやってきてムワリムに抱きついた。

ムワ『ウッ！クルシ…！！』

「おい、苦しがっているから放してやれよ」

すずか「あ、ごめん。でどうしたの、この龍？」

「色々あって俺と一緒にいることになった」

すずか「すごいね」

「ちょうどいいや、アリサの様子も見てこよう」

すずか「私も行く」

は「うちも行くで」

～訓練場～

アリサ「そこー！休んでんじゃない！きちんとしないと承知しないわよー！」

＜す、すいませーん！

「お、やってるな」

すずか「アリサちゃん！」

は「やっほー！」

アリサ「ウィル！？それにみんなも！どうしたの？」

＜きょ、局長だ！

＜なんでここに？

「いや、アリサの様子を見に来たんだよ。なかなか頑張っているじゃないか」

アリサ「あ、ありがと／／／」

＜デレたぞー！

＜キター！！

＜教官萌えー！

アリサ「う、うるさいうるさいうるさい！！蹴り飛ばすわよ！！」

「おい、俺の妻に萌えーとか言った奴ちょっと出てこい。ぶっ殺す！！」

＜ぎゃあああああああああ！！！

＜デレの次はツンかあああああああ！！！

は「…こいつら使えるんかな？」

すずか「…さぁ？」

～6課～

な「お帰りなさい！」

ヴィヴォオ「パパー」

フェ「どうだった？あの怪物は？」

「こうなった」

ムワ「がおー」

な「」

フェ「」

ヴィ「どうしてこうなった」

「だからかくかくしかじか」

シャ「シカクイムーブってことね」

ザフィ「すごいな」

キャ「フリードと同じ大きさだ」

「今はな。本気出すとクラナガンが一撃で踏みつぶされる」

エ「」

キャ「何それ怖い」

ムワ『ロストロギアなめんな』

そこに。

ティ「ただいま」

ス「戻りました！」

な「あ、ティーナちゃんにスバル…ってその子誰？」

ティーナは背中にイクスを背負っている。

「古代ベルカの王の一人である、ガレアの冥王イクスヴェリア陛下だ」

シグ「ガレアの王だと！？」

ヴィ「どこにいたんだよ!?」

ティ「マリンワールドの地下遺跡よ」

ザフィ「確か…マリアージュの指揮・命令能力があるはずだな?」

「そだよ。あ、ティーナ、あれ張ったか?」

ティ「うん、張ったよ」

「なら問題ないな。あとは体のほうか。ティーナ、そこにおろして」

イクスをテーブルに置いて、俺は手をかざして体をチェックする。

「うわーこれはひどい」

な「なにが?」

「言い方は悪いが、これはもうポンコツだ」

フェ「ポンコツ?」

「クアットロ、もしお前らの体のメンテナンスを1，000年間やらなかったらどうなるよ?」

クア「1，000年!?それはもちろんあらゆる所が機能不全を起こしてじきに壊れますよ」

「だよな。今のイクスはそんな状態だ。休み休みで1，000年間

動きっぱなしだったんだ。
こうなっても不思議ではない」

ス「じゃあ直さなきゃ！」

「わかっているよ。そこでこれだ」

俺が懐から取り出したのは。

みんな「オカリナ？」

ゼルダの伝説でおなじみの、時のオカリナである。

「さてと、これでイクスの経年劣化した体を元に戻すぞ」

セッテ「ちょっと待った！体を元に戻したらマリアージュの精製能力も元に戻るんじゃ？」

な「突っ込むところが違うの！」

「大丈夫だ、問題ない」

そして俺は「時の歌」を吹いた。

ピーポーポー…

フェ「良い音色…」

吹き終わると、イクスの体がうっすらと輝き始める。そして光が収まると。

イクス「う～ん、ここは…」

ティ「あ、目が覚めた見たい」

イクス「！誰だ！」

「落ち着け、ガレアの王、イクスヴェリアよ」

イクス「私のことを知っているの？」

「もちろんさ。俺はウィリアムだ。よろしくな。それで体の調子はどうだ？」

イクス「体の？あれ？軽い！」

体の調子が良くなっていることに気がついたイクスは両手を回したりしている。

「よくなっているみたいだな。よかったよかった」

イクス「あなたが私を直してくれたのか？」

「そだよー」

イクス「…感謝する。ありがとう」

「それで、ものは相談なんだが、俺の娘にならないか？」

イクス「え？」

「実はあの子」

ヴィヴィオ「ん？」

俺はヴィヴィオを指さす。

「あの子に見覚えは？」

イクス「…あああああああ！！！あの目はまさか聖王！？」

「そゆこと」

ティ「あの子はご主人様の娘なの。だから仲良くしてあげて？」

「どうだ？俺の家族にならないか？」

イクス「…本当にいいのか？」

「当たり前だ」

イクス「分かった。これからよろしく、父上」

「その呼び方する奴はもういるから他の呼び方をしてくれ」

カナ「なんか呼んだか？」

イクス「じゃあ、お父様！」

「それでいいよ、イクス」

カナ「じゃあイクスは私の妹ということになるのだな？」

ヴィヴィオ「2人目の妹だ！」

「仲良し3人姉妹、ってやつだね」

こうしてイクスは俺の3人目の娘となった。

第７１話：もう片方の具合はどうかな？（後書き）

…また１社落ちた…

そろそろ就職活動やめたいなー

では

第７２話：：：最近タイトル考えるのもだるくなってきた（前書き）

アンケートの結果。

何人かの方が「とある系」をやってほしいとあったので、
それを書こうかと。それとは別にもう一つ別なのも書こうかと。

次回作からは作者の都合によりおそらく毎日更新はできません。
多分２日か３日に１話という形になると思います。

第７２話：：：最近タイトル考えるのもだるくなってきた

～地上本部、ウィルの部屋～

「やっほ～、元気にしてるか、ルールー？」

ルー「元気ですよー！」

メガーヌ「ウィル君は元気？局長とか大変でしょ？」

「まあ、何とかやっていますよ」

ゼスト「そうか。体を壊さんようにな」

「了解です。それで例の”アレ”はどうです？」

ルー「順調だよ！６課解散の日までには完成する予定！」

「そっか、ならいいんだ。じゃあまたねー」

ドゥーエ「元気そうでしたね、３人とも」

「そうだな。ていうかあの２人が結婚するとはね」

なんとゼストさんとメガーヌさんが今度結婚するんだと。意外だわー。

ドゥーエ「ウィルさんはまだ結婚式あげないんですか？」

「まあ、お楽しみは最後にとっておくものだよ」

と、その時。

通信士「局長！大至急指令室までお越しください！」

「まだ厄介事か。行くぞ」

ドゥーエ「はい！」

～地上本部、中央指令室～

「で、何があった？」

レジ「5番街の銀行で強盗事件だ。犯人グループは質量兵器で武装して、
人質も多数いる」

「…要求は何かあるか?」

オーリス「逃走用のヘリを要求しています。1時間以内に要求を呑まない場合は
人質を殺すと脅しています」

「今どこの部隊を動かしている?」

レジ「陸士108部隊が銀行を包囲しているぞ」

「そうか、エディ!」

「銀行のシステムに侵入中、完了。監視カメラの映像出ます」

指令室のでかいモニターに銀行の内部が映し出される。

「金庫室…からっぽか。従業員は客と一緒におとなしく!?」

ドゥーエ「あれは!」

レジ「おい、あの樽はなんだ?」

人質のそばに大きな樽が幾つも置いてあった。

オーリス「おそらく爆弾では?」

「くそ、突入には慎重を要するな」

ドゥーエ「ウィルさん、あの人、なのはさんに似てません？」

「え？んなわけが」

レジ「あ、ほんとだ。それにヴィヴィオちゃんもいるじゃないか」

「はああ！？」

俺がびっくりしていると今度は６課から通信が。

は「ウィル君！なのはちゃんとヴィヴィオが銀行で人質になってるんよ！！」

「なんでわかった！？」

は「なのはちゃんから念話が来たんよ！」

オーリス「犯人グループはそのことを知っているのでしょうか？」

「どうだかな。とりあえず俺は現地に行ってくる。ティーナ、お前も来い」

ティ「はいは～い」

６課にいたティーナは現地に直接行き、俺は地上本部の格納庫に向かって
走って行った。

～銀行から２００ｍ離れた場所にある指揮車～

ゲンヤ「いやはや、白昼堂々と銀行強盗とはね。やってくれるじゃないか」

クイント「質量兵器を使えば問題ないと思ったんでしょ」

ギ「…はい、分かりました。お父さん、レジアス中将から通信」

ゲンヤ「わかった。こちらナカジマ三佐です」

レジ「レジアスだ。犯人グループは爆弾を所持しており、人質の近くに設置している
ことが判明した」

ゲンヤ「なんですって!?」

レジ「今そっちにウィルが向かっている。以後は彼の指示に従ってくれ」

ゲンヤ「了解！」

ギ「爆弾か…」

クイント「めんどくさいわね」

ティ「もっとめんどくさいことになりそうよ」

ギ「ティーナさん！？」

ゲンヤ「びっくりした、それで？」

ティ「あの中になのはちゃんとヴィヴィオちゃんがいるの」

クイント「つまり、人質ってこと？」

ティ「そ、だからとっとと突入するわよってこと」

ゲンヤ「なるほど、作戦は？」

ティ「まず私が近くの建物に登って狙撃すると同時に、ギンガ達が突っ込む」

クイント「ウィル君は？」

ティ「…もっと派手にやるって。というかご主人様の合図で攻撃開始、みたいな」

ギ「ふーん」

「あーあー、こちらガルム1、ゲンヤさん、聞こえてますか？」

ゲンヤ「聞こえてるぞ。作戦はだいたい把握した」

ティ「殺しちゃだめ？」

「…生きていればいい」

ティ「了解！じゃあ配置につくね！」

～銀行内、なのは～

ヴィヴィオ「ママ…」

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

私は銀行強盗に巻き込まれて人質になっている。とはいっても別に縄で縛られるとか、そういうことにはなっていない。

…久しぶりの休日だったのになんでこうなるの！

お、落ち着かなきゃ。えっと、犯人の数は１５人。やろうと思えば全員取り押さえることも出来るけど、他の人の安全を考えるとそれは良くないの。

おまけに私の横には爆弾みたいな樽もあるし、うかつに動いたりすると危険だ。

犯人Ａ「おい、ヘリはまだなのか？」

犯人Ｂ「連絡はないな」

犯人Ｃ「あと１５分で約束の時間だな」

犯人Ｄ「おい、電話だ！」

犯人Ａ「誰だ？」

電話機のスピーカーから聞こえた声は。

「こちら時空管理局局長のウィリアム・T・ロンバート大将だ」

犯人グループ「きょ、局長!?」

人質A「ロンバートって確か…」

人質B「ミッドの守護神!?」

私の最愛の人の声でした。

～銀行から少し離れた場所～

「こちら時空管理局局長のウィリアム・T・ロンバート大将だ」

犯人A「局長自らおでましとは、光栄だね。それで俺たちの要求は認めて
くれるのか？」

「何言っているんだ？んなわけないだろう」

犯人A「なにっ！？」

「言ったはずだ。質量兵器で誰かを傷つけるようなことをしたら、管理局も
質量兵器で攻撃する、とな。だから我々は貴様らを無力化する」

犯人A「殺す、とは言わないのか？」

「殺しちゃだめだろう？お前らには罪を償ってもらわないとな？」

すると犯人は、決してやってはいけないことをしてしまった。

犯人Ａ「だったらこうだ！」

ヴィヴィオ「ママー！！」

な「ヴィヴィオ！！」

近くにいたヴィヴィオを捕まえた犯人Ａは拳銃を頭に突き付けた。

犯人Ａ「このガキを殺されたくなかったらヘリを持って来い！今すぐ！」

「…へぇ、そういうことするんだ、ふ～ん…ティーナ」

その瞬間、６００ｍ離れたビルの屋上にいたティーナが、サイレンサー付きの
Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＳＧ－９０の引き金を絞った。７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾が窓ガラスに小さな穴をあけ、
犯人Ａが持っていた銃と腕を吹き飛ばした。

犯人Ａ「グアッ！」

ヴィヴィオは犯人から逃げてなのはの胸に飛び込んだ。それを見たティーナは
次の弾丸を人質の足元に撃ち込んだ。この弾は若干特殊な弾丸であり、
撃ち込まれた場所から半径５ｍのシールドを張るのである。

その結果、全ての人質に周りにシールドが張られた。爆弾はシールドの中に入って
しまう前に、ティーナの銃弾によって起爆装置が全て破壊された。

犯人Ｂ「なんだこれ!?銃じゃ駄目だ!」

他の犯人が人質に向かって撃ったが、全てシールドに阻まれてしまった。
狙撃がまだ来るかもしれないので、犯人Ａは陰に隠れて外を警戒した。
すると、何故か銀行を包囲していた管理局の連中が、いつの間にかいなかった。

犯人Ａ「おい!外にいた局員がいなくなっているぞ!」

犯人Ｄ「どこに行ったんだ!?」

その時、まだつながっていた電話機から声が聞こえた。

「危ないから逃げるように言ったんだよ、俺がな」

犯人Ｃ「危ない?ってことは攻撃が来るんじゃ!?」

「正解♪」

俺は乗っている赤いラーティを急降下させて、超低空飛行を開始した。
正面に銀行が見える。

「マスターアーム、オン。武装選択、暴動鎮圧用ミサイル。
シーカーオープン、ロックオン！」

ゲンヤ「来たぞ！全員逃げろ！」

ギ「ひえええええ！！」

逃げるゲンヤさん達の頭上を時速６２０？で進みながら、俺は操縦桿の
ボタンを押して2発のミサイルを発射した。

犯人グループ「マジかよおおおお！！」

「おおマジだあああああ！！」

2発のミサイルは正面のガラスを突き破り、人質の上を通過し、奥の壁に
めり込んでから弾頭が爆発した。爆発すると透明な液体が瞬時に広がり

犯人グループをすぶぬれにした。

犯人B「…なんだこれ？」

やがてこの薬品が大気中の酸素と結び付いて化学反応を起こした。
この液体に触れると、すぐに皮膚がチクチクして、そのうちにかゆくなり、
ひりひりする。最初はちょっと気になる程度だが、それがたちまち猛烈になり、
最後には苦痛なまでに激しくなる。例えるなら、日焼けによる火傷の痛みと
蚊に刺された時にかゆみを組み合わせたものである。目もうるみ、痛みは
さほどでもないが、瞼が腫れて閉じ、ぼろぼろ涙が出てくる。また鼻汁も
ひどい。遺伝子操作によってこしらえた神経細胞を刺激する物質が、
皮膚を浸透する化合物によって血管までしみこむ。脳味噌に達すると、
その物質はいくつかの神経中枢に狙いを付ける。腹をねじれるような
強い吐き気がこみ上げ、激しい嘔吐に襲われる。腸や括約筋も
持ち主に制御できなくなり、緩み放題になる。

もう充分だろう、と誰もが思っているが、こうしたことに加えて、
文字通りこの世で最もおぞましい悪臭が広がる。いったい何をどうしたら
こんなに臭くなるんだ？と思うくらいのにおいである。洗剤とお湯で
綺麗に洗い流さないと、この効果から逃れることはできない。

結果、犯人グループは上記の効果によって無力化された。その後、最高レベルの生物化学戦防護服を着用した陸士１０８部隊が銀行内に突入し、犯人を逮捕した。

シールドの中にいた人質は全員無事だったが、目の前で犯人が苦しみながら、ゲロを吐き、クソをまき散らす光景を見てしまい、気分が悪くなった人もいた。

地上本部でも。

レジ「うわーひでぇ…」

オーリス「おえっ」

６課でも。

は「これはひどい」

シグ「なんてものを使っているんだ…」

ヴィヴィオ「パパー！」

「ヴィヴィオ！無事でよかったよ！」

な「私は？」

「もちろんなのはもだよ。本当に無事でよかった」

な「ウィル君のおかげだよ、ありがと！でもあれはひどいの」

「気にするな。じゃあ帰るか」

な「うん！」

俺たちは仲良く手をつないでラーティに乗って６課に帰って行った。

後日、暴動鎮圧用ミサイルは使わないでくれ、という嘆願書が銀行
周辺の家や
企業から山ほど届いて超忙しくなるのは、また別の話。

第７２話：：最近タイトル考えるのもだるくなってきた（後書き）

昨日に引き続きまた１社落ちた…

３月上旬にある会社に履歴書送ったけど、その企業、津波で流されたｏｒｚ

次回は…なんだろね。

では

第７３話：史上最大の姉妹喧嘩？

～ミッドチルダ郊外～

大工「どうです？素晴らしいでしょう？」

ティ「うわ～すごい！」

「…パーフェクトだ」

大工「感謝の極み」

「じゃ、これ残りの代金ね」つ金

大工「はい、確かに！」

ティ「遂にできたんだね、ご主人様！」

「ああ、これが我が家だ！」

俺はみんなに内緒で屋敷を作らせていた。それもでかいやつを。
１３のベッドルーム、６つのバスルームに大きなプール付き。
さらにフィットネス施設、ミニシアター、ヘリポートも付いている。
地下には緊急時用の核シェルターと、シールドジェネレーターに
魔導炉がある。これで万が一の時も安全である。格納庫には、

以前使ったナブー・ロイヤル・クルーザーが待機している。
屋敷の周囲は広大な庭になっていて、家庭菜園用の畑もある。ポッケ村に休暇に
行って以来、キャロが植物に興味を持ったらしく、６課のキャロの部屋には
たくさんの花があり、大事に育てられている。また、庭の一部は訓練施設に
なっており、戦闘狂（バトルマニア）のシグナムやフェイトも満足するだろう。

もちろん、警備体制もしっかりしている。シールド以外にも対空・対人用機関砲が
庭のあちこちに埋めてある。家を囲んでいる壁には、厚さ１ｍ、高さ３ｍの
デュラスチールが埋め込まれている。見た目はレンガの壁だけどね。
普通の兵器じゃ絶対に穴をあけるどころか、かすり傷一つ付けられないだろう。
そして屋敷を守る警備兵。これにはターミネーター３でおなじみのＴ－Ｘを使う
ことにする。Ｔ－Ｘにメイド服を着させて警備させるから、敵は戸惑うだろう。
その隙に内蔵しているプラズマ砲やらなんやらで敵をせん滅する。
あとＡＩを改良したから、映画とは違って話し方も表情もまるで人間と
同じように見える。

「ここに引っ越すのは６課が解散してからかね」

ティ「そうだね」

そこに。

は「ウィル君！至急６課に来てくれへん！？やばいんよ！」

「何がやばいんだ？」

は「ヴィヴィオとカナリアが喧嘩しとる！」

～６課～

ヴィヴィオ「私はお姉ちゃんなんだから私の言うこと聞くの！」

カナ「ふざけないで欲しいね！」

イクス「怖いよー（泣）」

「…何これ」

俺とティーナが６課に戻ると、訓練場でヴィヴィオとカナリアが戦争していて、
訓練場の外でイクスが泣いていた。なんだこのカオス。

な「ウィル君！あの子たちを止めて！」

「お前らなら簡単に止められるだろう？」

フェ「…デバイスがないの」

ティ「え？」

シグ「運が悪いことに、今全員のデバイスの定期点検中でな」

ヴィ「今日の夕方までは使えねえんだよ」

シャ「で、唯一デバイスを使わなくても戦えるザフィーラが止めようとしたんだけど」

ザフィ「」ちーん

ス「ご覧のあり様です」

「さすがにＳＳＳとＳＳ＋ランク持ちには勝てなかったか」

ザフィ「かたじけない…」

は「で、そろそろ訓練場が壊れそうやから、ウィル君、止めてきて？」

「ていうかそもそもなんでこうなったんだ？」

ティ「仲良しなはずなのにね」

キャ「実はヴィヴィオが…」

回想始め！

ヴィヴィオ「うえーん、また負けたー！」

カナ「焦っては勝てんぞ、姉上」

イクス「また2位！富豪だ！」

キャ「カナリアちゃん強いね」

この4人はトランプで大富豪をやっていた。しかし、始まってから
ヴィヴィオが
ずーっと負け続けていた。1位はカナリアである。

ヴィヴィオ「もうこの遊び嫌だ！他の遊びがやりたい！」

キャ「ヴィヴィオ、もうすこしやってみよう？」

イクス「私はなんでもいいよ～」

だがここでカナリアが。

カナ「負けているから他の遊びに逃げるのか？よくない、実によくないな姉上」

ヴィヴィオ「う、うるさい！お姉ちゃんの命令だよ！」

カナ「ふん、だが断る」

ヴィヴィオ「このー！！」

そこでヴィヴィオの堪忍袋の緒が切れたらしく、いきなり聖王の鎧を

身にまとってカナリアに殴りかかった。

イクス「きゃあああああ！！！」

カナ「何をする姉上！」

カナリアはヴィヴィオの拳をかわして、翼を広げ外に逃げた。

ヴィヴィオ「待てー！！」

イクス「待ってよ、お姉ちゃんたち！」

ヴィヴィオ、カナ「イクスは黙ってろ！」

イクス「う、うえええええん！！」

キャ「どーすればいいのー！！誰かー！！」

回想終わり！

キャ「ということがあって…」

「…え、それだけ？」

その向こうで。

＜ソニック・アロー！！

＜きかんわ！！セイクリッドクラスター！！

＜訓練場がああああ！！２人とも堪忍してや～！！

＜グラヴィティ・ブラスト！！

＜インパクトキャノン！！

「あ、また訓練場が死にかかってる」

フェ「それでキャロに呼ばれてみんなで探したら訓練場で暴れてて…」

な「ＡＭＦジェネレーターを起動しようか？」

「…マーゲン式を使っているカナリアにも、聖王の鎧を身に纏っている
ヴィヴィオにもにＡＭＦは通用しないぞ？」

ヴィ「やっぱしそうか」

「まあ、行ってくるか」

俺は2人のそばまで近づいて話しかける。

「おーい、お前ら！何してんだ！早くやめろ！」

ヴィヴィオ「パパ！？」

カナ「父上！」

「お前らさ、いったい何してんの？」

ヴィヴィオ「だってカナリアが！」

「俺言ったよな？普段の時に聖王の鎧を使うなって？約束したよね？」

ヴィヴィオ「うっ…」

「はぁ、パパとの約束はそんなもんだったのか…残念だよ」

カナ「へっざまあみｒ」

「お前もお前だ、カナリア。確かにトランプでのヴィヴィオの発言は間違っている。
んで姉だからと言って他の意見を無視したヴィヴィオが悪い。そこで妹のお前が
きちんと指摘するのは全く問題ない」

カナ「そ、そうか！」

「だが言い方が悪い。もっと優しい口調で言えばいいものを…」

カナ「だが私はこの話し方でずっと生きてきたから…」

「なにより一番悪いのはお前ら2人でイクスを泣かせたことだ」

ヴィヴィオ、カナ「あ」

「一番下の妹を姉2人で何泣かせてんだよ、まったく。イクスはお前らが喧嘩
して欲しくなかったのに。まずお前らイクスに謝れ」

ヴィヴィオ「ご、ごめんねイクス」

カナ「申し訳なかった」

イクス「…いいよ！許してあげる！」

「さて、ヴィヴィオ、お前は明日からヴィータと一緒に訓練な」

ヴィ「いや、ウィル！まだ体が出来てないからそれは無理だ！」

「あ、そっか。じゃあ魔法禁止、ってなると緊急時によくないから、そだな、1カ月おやつ抜きで」

ヴィヴィオ「」

「んでカナリアは、う～ん、シグナム！」

シグ「なんだ？」

「カナリアの訓練内容を超ハードにしてくれ」

シグ「…いいのか？」

「もちろん。ただ、死なない程度にな」

シグ「ふふふっ、わかった。カナリア、明日の朝から4時起きだ！」

カナ「」

「うれしくて声も出ないか」

シグ「それは何よりだ」

は「さて、それじゃあウィル君。この訓練場の修理費、ちょうだい？」

「は？」

な「親の責任だよ！」

「…お前らも親だろうが」

フェ「じゃ、じゃあ父親の責任と言うことで！」

「はぁ、今日は金が飛ぶぜ、はいよ」つ小切手

は「うひひ、まいど！」

「…またダイヤ売るか」

こうして喧嘩は終わり、俺の財布は軽くなった。

第７３話：史上最大の姉妹喧嘩？（後書き）

はい、おわった。疲れたー

俺、この小説書き終わったら企業の面接なんだ…

では

第７４話：…あ、そういえば（前書き）

作者の頼もしい友人いわく、

「Ｖｉｖｉｄ編やらないのか？」

だそうなのですが、やったほうがいいですかね？皆さんの意見お待ちしてます。

第７４話：…あ、そういえば

～深夜、ミッド郊外、ウィルの屋敷～

この辺りは夜になると誰も通らない。その道をこそこそと歩く数人の男たちがいた。
彼らは梯子を使って壁を乗り越え、屋敷の敷地内に侵入した。
おわかりだろうと思うが、彼らは泥棒である。

泥棒Ａ「へ、ちょろいもんだな」

泥棒Ｂ「なあ、本当にここにお宝があるのか？」

泥棒Ｃ「考えてみろ。いきなりこんな大きな屋敷を建てることができるということは
超お金持ちってことじゃないか。そんな奴なら何かしらのお宝が
あると考えるべきだ」

泥棒Ｄ「静かにしろよ。こそこそ行くぞ」

ＡＢＣ「おう！」

この泥棒グループはミッドでは有名な連中である。主に金持ちの屋敷に重装備で
侵入し、中にいる人々を全員眠らせてから、全てを奪っていくのである。

これまでに４５の屋敷が被害にあっている。彼らは、今日も今までと同じ要領で
やればいいと考えていた。

ただ、彼らは知らなかった。壁を乗り越えた時点で侵入に気付かれていることや、
この屋敷の警備体制がすさまじいことを…

～屋敷内、警備室～

「敵、第２エリアに入りました」

「おっけー、じゃあれを使ってみるか」

「了解しました」

Aを先頭にこそこそ歩いていた泥棒達だが、Aが拳を握り頭の高さに上げて

「全員ストップ」

という意味のハンドシグナルを出した。

B「どうしたA？」

C「地雷か？」

Aは地雷探知機を持ちながら先頭を歩いていた。これまでに12個の対人地雷を回避している。

A「何か来るぞ。地面が揺れている」

D「本当だ。屋敷の人間か？」

C「だったらまずいな。睡眠ガスグレネードの準備を」

全員がハーネスのパウチから青色の炭酸飲料の缶ぐらいの大きさの筒を出した。

これは爆発すると周囲に睡眠ガスを放出するものであり、本来なら屋内で使用する。

屋外の場合、風により効果が薄くなってしまうからである。

そして地面の振動と共に、何かの音が聞こえてきた。

D「車の音じゃないぞ？」

B「耕運機でもないな…」

A「あの丘の先から聞こえてくるな。行くぞ」

４人で丘の頂上まで走り、そこで見たものとは。

？？？「敵をはっけーん！撃っちゃいまーす！」

C「おいおいおいおい、それはないぞ！」

A「なんでこんなところに戦車がいるんだよ！」

丘の頂上から泥棒達が見たものとは、Ｔ４－Ｂヘヴィ・タンクだった。

Ｔ４－Ｂヘヴィ・タンクのタレットには2基の巨大なアーム状のレーザー・キャノンが搭載されており、それぞれ同時に発砲される。また、タレットの中央には3門の震盪ミサイル発射管が装備されており、広範囲にわたって甚大なダメージを与えることが可能である。これらの武器は特に歩兵に対して効果的である。

連動式のミディアム・レーザー・キャノン2基が火を噴き、さっきまで泥棒達がいた丘を吹っ飛ばした。

B「ひえええええええ！！！」

Bは混乱して一目散に逃げ出した。

A「おい、そっちには地雷が」

Aの叫びは間に合わず、Bは地雷をふんづけてしまい、爆発音と共に宙に飛んだ。

B「ぎゃあああああ！！」

C「B！」

D「おい、しっかりしろ！」

B「」ちーん

D「よかった、生きてるぞ！」

A「よし、Bを担いでここから出るぞ！」

だが後ろからは戦車がやってくる。

D「これでも食らえ！」

最後尾のDが戦車に向けて手榴弾と閃光弾、それにスモーク・グレネードを
まとめて投げつけた。手榴弾はたいしたことなかったが、閃光弾は戦車の
センサーを麻痺らせ、スモークで視界はゼロになった。

A「ナイスだD！後は逃げる！」

残った3人は仲間を引きずって壁まで戻ろうとしたが、突然サーチライトに

照らされた。

C「うおっ！眩しい！！」

A「今度はなんだ！」

辺り一帯に轟音が響き、上を見ると青い塗装のラーティが2機飛んでいた。
全ての武装がこちらに狙いを定めている。おまけに地面から生えてきた
対空・対人機関砲もこちらを向いている。

A「詰んだ」

C「だな」

D「だね」

そして戦車の中から出てきたのは。

メイド（T－X）「はいはーい、おとなしくしないと撃っちゃいますよ？」

ACD「メイドかよ」

めでたく御用となった泥棒グループであった。

～翌日、６課～

食堂でみんながくつろいでいた。

は「あーあ、もう少しで６課も解散やね～」

フェ「長いようで短い１年だったね」

な「ほんと色々なことがあったの」

シグ「訓練場が壊れたり」

ヴィ「訓練場が流されたり」

シャ「訓練場が沈んだり」

ザフィ「それ以外にもあっただろう」

テ「ウィルさんとデートしたり」

ス「ウィルさんとデートしたり」

ギ「ウィルさんと婚約したり…うふふ」

キャ「ウィルさんが私とエリオ君のお父さんになったり」

エ「フリードとムワリムが仲良しになったり」

フリ「きゅく～」

ムワ「がお～」

そんな中。

エ「あ、そう言えばフェイトさんたちはいつ結婚式をするんですか？」

という発言でウィルの妻となる人々の動きが固まった。

は「忘れてた！！」

な「いつやるんだろ？まだ聞いてないの！」

フェ「もしかしてウィル、忘れているんじゃ…」

シグ「それはないだろう」

ヴィ「ウィルがそういう大事なことを忘れるとは思えないな」

ザフィ「同感だな」

シャ「あら、ウィル君」

そこにウィルとティーナが登場。

「お、いたいた。全員いるな？」

ティ「アリサちゃんとすすかちゃん、それにカリムちゃんとも通信がつながっているわよ」

な「え？」

モニターにはその3人が映っている。

アリサ「一体何の用なの？」

すずか「大事な用件とか言ってたけど」

カ「なんでしょうね」

「さて、実は君達に言い忘れていたことがあったんだ」

は「と、言うと？」

「結婚式についてなんだが…」

みんな「…（わくわく）」

「明後日のお昼だから今のうちにウェディングドレスとか決めておいてくれ。

これカタログな。場所は、ルールーとかメガーヌさんやゼストさん達が

住んでいる無人世界『カルナージ』で、もう教会は建ててあるからそっちは問題ないとして、こっちを出発するのが当日の朝６時な。

ここまでで何か質問ある人は挙手」

みんな「」

「ok、質問はないようだからこれでおしまいな」

は「ちょおおおおおおっとまったあああああああああ！！！」

な「なんでそういう大事なことを2日前に言うの！？」

「いや、言うの忘れてた」

な「フェイトちゃんも何か言ってよ！」

フェ「ウェディングドレス…綺麗だな…ふふふ」

アリサ「うわぁ～かわいい！」

シグ「これは…いいな」

な「」

カタログに夢中でした。

ヴィ「ウィルは何を着るんだ？」

「昼にやるからモーニングコートかな」

シャ「誰を呼ぶの？」

ティ「とりあえず片っ端から声をかけてるの」

すずか「片っ端？」

「高町家、月村家、バニングス家、プレシアにアリシア、レジーとオーリス、
ジェイルにナンバーズ、ナカジマ家、ティーダ、グレアム提督にリーゼ
アリアとロッテ、リンディさんとKY（クロノ）、淫獣（ユーノ）にアルフ、
ロッサにシャッハ、あとは誰だったかな、忘れちゃった」

アリサ「私の両親も！？」

カ「多いですね～」

ティ「多い方がにぎやかでいいじゃない」

「だな」

な「あー、これもいいしこれも捨てがたい！どれにすればいいの～！」

は「ウィル君！選んで！」

テ「ナイスアイデアです！」

「あー、もう！お前らは何着ても美人だから問題ないぞ！」

フェ「そそそうかな／／／」

ヴィ「ありがと／／／」

「だからどんなウェディングドレスでもいいじゃないか。フィーリングで選べ」

な「わかったの」

ヴィヴィオ「結婚式って？」

カナ「婚姻を成立させるため、もしくは確認するための儀式だ」

イクス「つまり正式にウィルさんとなのはさん達が私たちのお父さんと
　お母さんになるんですね！」

エ「そういうことだね」

キャ「わーい！」

第７４話：…あ、そういえば（後書き）

はは、また１社おｔ（ｒｙ

次回は結婚式書くか…

では

第７５話：結婚式！

～2日後、6課、朝～

「よーし、全員乗ったか？」

俺は例の如くラムダ級シャトルで迎えに来た。招待客の迎えは以前使った分身に行かせている。

な「よしと！」

フェ「みんな乗ったよ！」

「じゃ行くか」

軌道上に待機しているインペリアル？級の格納庫に戻ると、レジー達を迎えに行ったシャトルが戻ってきた。

レジ「おはよう、花嫁の諸君！」

オーリス「私よりも先に結婚だなんて…ぐぬぬ」

プレ「娘の晴れ姿が見れるなんて夢みたいね」

アリ「私もいつか結婚するもん！」

ゲンヤ「娘が2人とも嫁に出てしまうのか…」

クイント「メガーヌとゼスト隊長が結婚すると聞いて来ました」

ティーダ「ティアナのウェディングドレス姿が見たいがために来ました」

そこに。

ジェ「やあみんな、元気そうだね」

ウーノ「ご無沙汰してます」

ウェンディ「結婚式ッスか！どんな内容なんッスか？」

ノーヴェ「スバルに先を越されるとは…」

ディエチ「問題ないでしょ、私たちは一応愛人って言う立場なんだから」

チンク「つまり襲ったもの勝ち、ということなのか？」

ドゥーエ「なんで襲うこと前提なのよ」

トーレ「まあ、我々愛人は愛人らしい方法でやらせてもらうとするか」

クア「いつかウィル様と…うふふ」だらだら

ディード「クアットロ姉様、鼻血が」ふきふき

セイン「あれ、オットーなんでドレス着てんの?タキシードじゃないの?ｗ」

オットー「…レイストーム」

セイン「にゃあああ!ごめんなさーい!!」

セッテ「何やってんの!」

「艦長、第1艦隊所属インペリアル?級より報告。招待客全員の搭乗を確認、
移動準備完了」

「了解。それじゃあしゅっぱーつ!」

～4時間後～

「はいとうちゃーく」

目の前には、無人世界「カルナージ」が見える。ここは1年を通して温暖な大自然の恵み
豊かな世界である。そんな良い場所なので、俺たちが乗っている戦艦で乗り付けるわけ
にはいかないので、船は軌道上で待機してもらうことに。

な「あ、同じ形の戦艦がいるの」

「ああ、士朗さんたちや本局組が乗っているやつだな」

地上に降り立つラムダ級シャトルの群れ。ルールーに作ってもらっ

た駐機スポットに
着陸すると、先に降りていた士朗さん達がやってきた。

士朗「やあウィル君。ついにこの日がやってきたね」

桃子「娘のウェディングドレス姿が見れるなんて感激！」

忍「すずかに先を越されたー！」

恭也「なのは…やっぱりなのはをお渡すことはできｎ」

美由希「はいはいちょっとこっちに来てね～」ずるずる

恭也「何するぎゃあああああ！！！」

ユ「結婚かあ…」

アルフ「ユーノは彼女いないんだっけ？」

ユ「え、あ、いや、その…」

リ「ウィル君が結婚ねえ。しかも１２人となんてすごいわね～」

ク「なんか色々な人たちがいる…」

ロッサ「ウィルは顔が広いしね。おまけに今じゃ管理局のトップな

わけだし」

ラ「まあ、うまい酒が飲めるならそれでいいのじゃ！」

レ「以下同文！」

エイミィ「3提督のみなさん！？」

ミゼ「ウィルが持ってきたという、ニホンシュ、というお酒がおいしいらしくてね」

ク「酒飲みに来ただけかよ」

～式場～

ルー「こっちは準備オッケー！」

メガーヌ「お料理の方も問題なし！頼もしい助っ人がいるからね」

ゼスト「あとは主役が来るだけだな、っときたようだ」

「ゼストさんにメガーヌさん、今日は色々とお世話になります」

メガーヌ「気にしないでいいのよ」

ルー「ウィルさん！あのネコかわいい！」

ティ「アイルーね」

マックス「苦しいニャあああ！」

頼もしい助っ人とは、第４３管理外世界「ポッケ」のポッケ村にある老舗旅館
「ホテル・アイルー」の料理長であるマックスとその部下５人（匹）である。

マ「はぁ、それにしてもウィルさんが結婚するとはおめでたいことなのニャ！」

「はは、ありがとよ、マックス」

ティ「そろそろ着替えとかしたら？なのはちゃん達は行っちゃったし」

「そだな」

～控え室～

なのは達はウェディングドレスを着ながら談話中。

ス「念願のウェディングドレスだ…えへへ～」

テ「なんで涎が出てるのよ！」

ギ「きっとスバルにはなんでも食べ物に見えるんじゃないの？」

ス「ギン姉ひどい！」

な「やっと結婚だね…」

フェ「うん、どきどきしてきた…」

は「これもウィル君が人事局と交渉してくれたおかげやな」

シグ「普段ならこのメンバー全員が休むことなど不可能ですからね」

アリサ「女としては結婚式は挙げたいわよね！」

すずか「そうだね～。やっと夢がかなう…」

シャ「やっぱり、少し、胸がきついかしら？」

ヴィ「おいこの野郎黙れ」

カ「まあまあ、ヴィータさんもいつの日か成長しますよ」

ヴィ「うるせー！」

そこにヴィヴィオ達がやってくる。

カナ「うむ、美しいな、母上達」

ヴィヴィオ「ママ達きれーい」

イクス「お似合いですよ、お母様達！」

エ「フェイトさん、綺麗だ…」

キャ「ほんとだね」

フェ「ふふ、ありがと」

ルー「みなさーん、そろそろ時間ですよー」

は「おっしゃあ！みんな、行くで！」

「うう、やっぱ制服とかこういう服は苦手だ…」

レジ「何言ってんだ、似合っているじゃないか！」

ジェ「サイズもぴったりだね」

「なんというか、こう、首が締め付けられる感がある」

プレ「それは仕方ないんじゃない？」

アリ「そろそろ始まりじゃない？」

「だな、ってそういえば神父は誰がやるんだ？」

ラ「わしがやるぞ」

そこには何故か神父姿のラルゴ・キール元帥が。

ティ「えええええ！！」

グレ「キール元帥が、ですか？」

レ「まあ、いいんじゃないか？」

ミゼ「すごい適当ね」

そして式が始まり、なのは達が入ってくる。

「…わーお」

な「それ以外に言うことないの？」

「いや、きれいすぎて言葉が見つからないよ」

フェ「あ、ありがと／／／」

そして式は予定通りに進行する。

ラ「すこやかなときもそうでないときも、この人を愛し、敬い、なぐさめ、
助け、命の限りかたく節操を守りともに生きることを誓いますか？」

「誓います！」

なのは達「誓います！」

ラ「じゃあ誓いのキスを、って多いからとっととしなさい！」

「りょ、了解」

そして全員とキスした後に外に出てフラワーシャワーを浴びる。

アルフ「おめでとー！」

士朗「おめでとう！」

恭也「なのはあああああ！」

桃子「はい黙りましょうね」

恭也「ぐぼえっ！」

んでブーケトス。

「１２回もやるのはめんどいから一気に投げれば？」

は「そうやね」

なのは達「せーのっ！」

アリ「私が取る！」

オーリス「私よ！」

美由希「私も！」

その後、メガーヌさんとゼストさんの結婚式も行われた。神父役は

レジ「わしにやらせてくれ！」

ということでレジーがやっている。

レジ「…では誓いのキスを！」

メガーヌさんがとても幸せそうにゼストさんとキスをする。

ルー「ママ、うれしそう…」

クイント「おめでとう、メガーヌ」

メガーヌ「ありがとう、クイント！」

こんな感じでめでたく結婚式は終わった。

～夜～

「なんでこんな日まで仕事しなきゃいけないんだ？」

俺は教会の隣にあるホテル（これもルールーが作った）の部屋で仕事をしていた。

≪仕事がたまっているのですから仕方ないですね≫

〈まぁ諦めて頑張れ、主よ〉

「くそおおおお！！」

しばらく仕事をしていると。

〈主よ、なのは殿他数名がこの部屋に接近中だぞ〉

「なのは達が？何の用だろう」

≪今日は結婚初夜ですよ、マスター。目的は１つしかないでしょう？≫

「俺といちゃいちゃするのか」

〈ありていに言えば、そうだな。仕事はいいからそっちを楽しむが

いい〉

≪私たちは空気を読んで寝ているんで≫

「あいあい」

は「ウィル君！しよう！」

「いいぞ」

テ「ウィルさーん！」

ス「ティアずるい！」

な「うふふ…」

「あ、その下着」

な「ウィル君に選んでもらったのだよ」

「やっぱ似合っているな」

フェ「今度私のも選んでね」

「さて、せっかくの結婚初夜だしはりきっちゃうぞ」

あは（ｒｙ

～翌日～

ヴィヴィオ「パパ～、なんでママ達変な歩き方なの？」

カナ「聞いてみたが何も教えてくれなかったな」

エリオ「朝からずっとがに股だし」

キャ「なんかあったんですか？」

「…色々あったんだよ、色々な」

若干げっそりしている俺はそう答えるしかなかった。

第７５話：結婚式！（後書き）

結婚式おしまいの巻。

そろそろ６課解散かね。

では

第７６話：ハネムーンはどこがいい？

～結婚式の次の日の昼飯～

ス、ギ、エ「がつがつ…」

ゲンヤ「見てるだけで腹いっぱいになる量だな」

な「にゃはははは…」

アルフ「ガルルル！ガル！ガル！」

フェ「アルフ…もうちょっと静かに食べなよ」

アリ「大好きなお肉だから仕方ないんじゃない？」

は「そや、ウィル君。１つ聞きたいんやけど」

「なんだ？」

は「ハネムーンはどうするんや？」

「ん～、このままどっかに行く予定なんだけどどこがいい？」

ヴィ「決めてないのかよ！」

ティ「って言うのは冗談で」

シグ「で、どこにいくのだ？」

「ん、無難に地球一周にしようかなあと」

みんな（全然無難じゃねえ）

ティ「やろうと思えば銀河系一周もできるわよね」

「で、どこを回るかなんだけど、俺なりに考えてまとめてきたんだ。これを見てくれ」

俺は後ろに置いておいた世界地図を張ったでかい板を壁にかけた。

ス「さすがウィルさん！きちんと考えてくれてたんですね！」

「当たり前だろ？とりあえずアメリカ軍に撃たれるから中東はなし、北米にはスリしかいないし、麻薬にはまっている南米も却下、アフリカには牛とラクダばっかだし、もうすぐ消滅するらしいから南極もベケ、んでお隣
中国やロシアは共産主義だから駄目、ということで俺達が行く場所はスバリ！
ヨーロッパ（旧ソ連領以外）と東南アジア（中国と韓国以外）に決定！」

な「」

は「」

ス「???」↑地球の事情がよくわかっていない

ザフィ「いや待てその結論はおかしい」

シャ「それじゃ地球一周とは言えないわよね」

「やっぱり？」

グレ「イギリスには行った方がよいぞ」

ロッテ「父様の故郷だもんね～」

テ「そうなんですか～」

ギ「行ってみたいです！」

ティ「そうね、イギリスはとてもいい所よ…食事以外」

ス、ギ、エ「え」

食べること大好きな3人がその言葉を聞いて固まった。

ク「グレアム提督、本当なんですか？」

グレ「そうだな。我が大英帝国の料理はとんでもなくまずいぞ」

マ「にゃ、にゃんでまずいんですかニャ？」

アリア「結論から言うと、『まずい』のではなく『美味くない』『

まずくない』、
　これが答えね。かといって『普通』ではない。なぜなら、
イギリス料理には
　もともと味がないから」

シャ「味が？」

は「ない？」

「アリアの言うとおりだ。なんで味がないのか。答えは２つある。
１つは
『味がなくなる料理法』、そして『味付けをしない』だ。まずイ
ギリス料理の
基本は『焼く』と『ゆでる』なんだが、問題は『ゆでる』だ。最
近は変わって
きたようだけど、伝統的に野菜は３０分、１時間位平気で煮るん
だ。
野菜の味は栄養もろとも鍋の煮汁に流れ出し、頂く際には煮汁は
流し台に
うまみと栄養もろとも捨てられているんだ」

マ「な、なんてことを…」

料理長のマックスは真っ青になっている。

ティ「それで『味付けをしない』ってことだけど、わかりやすくい
うと、
『味付けは料理人の仕事ではない』ってことね。料理人の仕
事は
『しっかり火を通すこと』に徹していて、調理はしても調味

はしないの。
　同じような料理に『朝鮮冷麺』っていうのと、タイの『クイッティヤウ』と
　いう料理があってね。どちらも麺だけど、命とも言うべきスープには味がついて
　いなくて、用意された調味料を使って自分で味をつけるの。
つまり、
　美味い、不味いはまさしく自分の『さじ加減』にかかっているってこと。
　料理人の責任ではなく、彼らは『加熱』という仕事にのみ責任を負っているの」

士朗「それはひどいね」

グレ「イギリス料理はこれが徹底している。すべてに『下味』というものが
　ついていないと思ってよい。全ては調理が完了後、各自で味をつけるのだ。
　従って料理の最中に塩・胡椒が使われることはない。よって、味に関しては
　すべて『自分の責任』なのだよ」

「ただ悲しいのはテーブルには塩・胡椒・酢が標準的に置かれているけど、
　調理後、これだけの調味料で複雑な味を自分で出すのは難しいということだ。
　英国人いわく、『変な味をつけられるよりは安心できる』んだと」

ス、ギ、エ「ちょっとイギリスはまた今度の機会に」

は「昔のシャマルの料理と比べたらどっちがまずいんやろ？」

シャ「はやてちゃん！比べないで！」

「…はやて、それはこの世で最も答えを出すのが難しい問題の１つだぞ」

ティ「見た目、という観点から見るとイギリス料理の方がまだマシね」

ク「だが味では？」

「…イギリス料理の場合、食った後に多大な不快感と、

『なんで俺はこんなクソみたいなもんを食っているんだ！？』

っていう強烈な怒りを覚える。一方シャマルの料理の場合、そういった

感情は一切湧いてこない」

シャ「ほんとに！？」

「もちろん。だってそんなこと考える前に死ぬからな」

シャ「」

ザフィ「確かに、あれは死ねるな」↑被害者

ク「同感だ…」↑被害者

シャ「…ぐすん」

「まあ今の腕ならそんなことにはならないから心配ないけど」

アリサ「で？結局ハネムーンはどうするの？」

「だから普通に地球一周するって。ルートとしては東南アジア→太平洋地域→
北米、中米、南米→ヨーロッパ→アフリカ→中東→中央、西、東、南アジア→
中国、でおしまい」

すずか「…どれくらいかかるんだろう？」

ティ「移動には魔法使うから、ざっと2カ月半ってところかしら」

は「ちょ！ハネムーン終わって帰ったらすぐに6課解散やないか！」

レジ「そうなるな。っていうかそんなに長い間6課を空けといて大丈夫なのか？」

「やっぱ難しいか…じゃあ地球一周はあきらめてここにするか」

俺は世界地図のある一点を指さした。

エ「ここは？」

「地球で最大の珊瑚礁グレート・バリア・リーフの無人島にある真

っ白な砂浜。
欧米の旅行誌等で『地球上で最も美しい砂浜』として紹介され、訪れた人は
口を揃えて「ここは天国のようだ…」とつぶやく、その名も『ホワイトヘブンビーチ』。
真っ青な海と空、真っ白なビーチのコントラスト、そして世界遺産の大自然が
まるで絵画のように広がり、まさに絶景！人工物ひとつない無人島や無人エリア
ならではの手付かずの自然が創りだした奇跡のビーチ！オーストラリアが誇る
世にも美しい、世界遺産の絶景ビーチだ！」

な「すごい！」

ヴィ「行きてえ！」

は「そこって確か上陸できるのは限られたゲストだけやなかった？」

「今からちょっと電話して貸し切るから問題ない」

ティ「ここでいい人手をあげて～」

みんな「はーい」

「じゃあここで決定な」

イクス「海で泳げるの？」

カナ「そうだぞ、妹よ」

イクス「わーい！」

「出発は今日の夕方な」

みんな「はやっ！」

ティ「善は急げ！なの」

な「でも水着とかはどうするの？」

ティ「そんなこともあろうかと！色々な水着を持ってきたからこの中から選んで！」

ルー「じゃじゃーん！」

ス「うわー！」

テ「いっぱいね」

カ「これでウィルさんをメロメロにすれば…うふふ」

「かんちょー、貸切とか出来るんですか？」

「ちょっとした魔法をかければちょちょいのちょいだ」

「というと？」

「ビーチに近づくと誰もが家に帰りたくなるような魔法をかけて、結界を張れば
誰にも見られずに一日中遊べる」

「なるほど」

第７６話：ハネムーンはどこがいい？（後書き）

イギリス料理の詳細は
ｈｔｔｐ：／／ｊａ．ｕｎｃｙｃｌｏｐｅｄｉａ．ｉｎｆｏ／ｗｉｋｉ／％Ｅ３％８２％Ａ４％Ｅ３％８２％ＡＥ％Ｅ３％８３％ＡＡ％Ｅ３％８２％Ｂ９％Ｅ６％９６％９９％Ｅ７％９０％８６
からどうぞ。

作者もイギリスでひどい目に会いました。
でもいい国なので、また行きたいです。

次回はオーストラリアでバカンス。
あそこもいい国でしたね。サンゴ礁がきれいでした。
その代わり日焼けＭＡＸで死にそうになりましたけど。

では

第77話：ここは天国ですか？

そこは青と白の世界だった。
真っ青な海と空、そして真っ白なビーチのコントラスト。

そこへ行くには、日本から7時間かけて飛行機でオーストラリアのケアンズに行き、
そこからさらに飛行機に1時間かかる。

「…確かにここは天国だと勘違いしてもおかしくないな」

ティ「…うん」

そんなところ、ホワイトヘブンビーチを（勝手に魔法で）独り占めしているのは、
ウィル達であった。

な「…すごい」

フェ「きれい…」

シグ「美しい…」

エ「砂が真っ白…」

キャ「海もきれい…」

シャ「沖にはサンゴ礁がいっぱいね…」

ス「世界最大のサンゴ礁地帯、グレート・バリア・リーフですからね」

テ「スバル、よく知っているわね？」

ス「私だって少しは知識として持っているんだよ！」

ギ「とか言ってるけど、背中に隠しているパンフレットは何かしら？」

ス「あ…」

は「スバルはやっぱアホの子やったんやね」

アリサ「私の家のプライベートビーチがクソに見えるわ…」

カ「プライベートビーチ！？羨ましい…」

すずか「もう我慢できない！泳ぎましょう！」

ヴィ「ちょっと待った！こういう場所では必ずやることがあるだろ？」

は「写真か？」

ヴィ「はやて、それは違うぞ。こんなにきれいな海と砂浜にいるんだから…」

みんな「いるんだから？」

ヴィ「こういうところで食べるアイスは絶品だ！」

「よーしヴィヴィオ、カナリア、イクス。準備運動しようなー」

3人娘「はーい」

な「荷物、どこか一か所にまとめとこうか？」

フェ「あ、手伝うよ」

ス「準備完了！」

テ「こらスバル、日焼け止め塗ったの？」

ヴィ「無視すんなあああああ！！」

な「ふぇ!?な、何かいるよ!?」

「あ、ウミガメだ」

フェ「あれが?大きいね」

は「水の中だとすいすい泳いどるな」

ティ「地上ではうすのろだけどね」

ヴィ「う~ん、背中に手が届かない!」

シャ「ほらヴィータちゃん、塗ってあげる」

ヴォルケンズは日焼け止めを塗っていた。

シグ「しかし日差しがかなり強いな」

ザフィ「ウィルが言うには、このオーストラリアと言う国は日本とは違って、
紫外線が多いから曇りの日でもすぐに日焼けしてしまうそうだ」

ヴィ「まじかよ？」

ザフィ「子供も大人もこまめに塗ったほうがいいとのことだ」

シャ「お肌が台無しになっちゃうものね」

カ「ウィルさん、この水着どうですか？」

「ん？」

子供たちが浮き輪片手に海で遊んでいるのを眺めていると、カリムがやってきた。
カリムが来ているのは黒のビキニで、何故か麦わら帽子をかぶっている、

「…いいんじゃない？」

カ「本当ですか！？うふふ…」

は「か～り～む～?抜け駆けは許さんで?」

そこにはやてが乱入。

は「ウィル君!うちの水着も見て!」

「ぶっ!」

カ「なっ!?」

はやてがTシャツとショートパンツを脱ぐと、下にきていたと思われる水着があらわになった。その水着とは信じられないことに、なんと青色のV字水着だった。

「な、なんじゃそりゃあ!?」

思わず大声をあげると、周りにいたみんなも集まってくる。

な「どうしたのウィルく、ってはやてちゃん!?」

フェ「なんでそんな、は、派手な水着を!?」

は「ウィル君にメロメロになって欲しかったからや!どやウィル君?」

昔あげた栄養ドリンクもとい豊胸剤のおかげで、はやての胸はとて

も豊満な
ことになっている。その胸がものすごく強調されている…
おまけに後ろを見ると、ほとんど紐じゃねえか！

「あー、その、なんだ、水着もはやてもいいと思うんだが…」

は「だが、なんや？」

「その、言いにくいんだが…はみ出てるぞ、毛が」

は「にゃんやて！？」

噛みながらも確認するはやて。そして。

は「うひゃあああああああ！！？？」

シグ「あ、主はやて！？」

ヴィ「はやて、どうした！？」

奇声をあげながらすっ飛ぶように逃げたはやてをシグナムとヴィータが追っかけて
行った。

ス「恥ずかしかったんだろうね」

テ「それ以外ないわね」

アリサ「はやてったらなにしてんのかしら」

すずか「わ、私もあの水着着てみようかな」

「そろそろ昼だし、飯食いに行くか」

シャ「どこで食べるの？」

ティ「さすがにここじゃ食べられないから近くの島のレストランの予約をとってあるの」

ス「これは…カニ？」

「マッドクラブ、泥蟹だ。とてもうまいぞ？」

ギ「もぐもぐ…おいしい！！」

フェ「このお肉も美味しいね」

ティ「ああ、それはワニのお肉ね」

フェ「」

な「ワニって食べれるの！？」

ティ「今食べてるじゃない」

は「この肉は？」

「それはカンガルーだ」

は「意外といける！」

ヴィヴィオ「お魚美味しい！」

カナ「美味であるな」

イクス「お肉大好き！」

午後はスバル、ギンガ、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ティーナは
ビーチバレーを楽しんだ。俺とザフィーラは子供たちと一緒に砂浜でお城を
作ったりして遊んだ。なのは、フェイト、アリサ、すずかは海で泳いで、
カリムは砂をペットボトルに詰めてお土産にしたり、砂浜に流れ着いたサンゴの
かけらを集めていた。

夕食を食べた後、子供たちはすぐに寝てしまった。まあ遊んで疲れたからだろうね。

な「ウィル君、明日はどうするの？」

「明日の昼過ぎまでここにいて、その後はケアンズでショッピングかな」

フェ「いつまで休めるんだっけ？」

ティ「1週間の休みをもらっているよ」

は「ダイビングしたい！」

すずか「オーストラリアに来たからコアラを抱っこしたいな」

「じゃあ明後日はダイビング、その次の日は動物園に行くか」

みんな「やったー！」

続くよ！

第７７話：ここは天国ですか？（後書き）

また海外旅行に行きたいですね～。

とっとと内定もらって就職活動終わらせたい…

次回もハネムーン！

では

第７８話：お買い物ｉｎケアンズ（前書き）

今回の内容は、作者が５年前にオーストラリアに行った時のことを元に
書いているので、今はもうないお店とか施設もあるかもしれません。

第７８話：お買い物ｉｎケアンズ

翌日。
俺たちはハミルトン島のホテルで、朝の海が見える場所で優雅な朝食をとった。
そしてホワイトヘブンビーチで記念写真を撮ってから、飛行機に乗りケアンズへと向かった。

ケアンズはオーストラリア大陸北東岸、ヨーク岬半島の付け根付近、珊瑚海に面する港湾都市。ファー・ノース・クイーンズランド地方の中心都市である。
グレート・バリア・リーフへの玄関口であり、さまざまなマリンスポーツのツアーの拠点地ともなっているため年中旅行者でにぎわう。気候は熱帯から亜熱帯への移行部にあたり、最寒月でも「海から上がると少し肌寒い程度」でしかもこの時期が弱い乾季にあたり雨が少ないためマリンスポーツに適している。

ちなみにケアンズの唯一の空港であるケアンズ国際空港は、オーストラリアで最も暇な空港として有名である。滑走路が1本しかないし、空港自体も大きくないからである。

な「さっそく買い物だね」

「いや、まだ店が開いてないぞ」

フェ「え、今9時半だよ」

ティ「ここケアンズのお土産屋さんの多くは11時以降にオープンするの」

「それまでは散歩でもしようか」

海岸像の遊歩道をぶらぶらと散歩していると、突然スバルが大声をあげた。

ス「てぃ、ティア！上見て！」

テ「何よ、って！」

ケアンズ国際空港を飛び立った大型ジャンボ旅客機が頭上を通過していった。

旅客機は左旋回をしつつ高度をあげて消えていった。

ギ「迫力ありますね」

ティ「空港が近いからね」

カ「ヘリコプターも飛んでますね」

アリサ「水上飛行機もいる！」

空港のヘリポートからフロート付きのヘリコプターが飛び立ち、沖からは
水上飛行機が飛んできて着水し、マリーナの方へ向っていった。

すずか「やっぱりここはリゾートだね」

マリーナの方へ足を運ぶと、多くの船が停泊していた。大型船から小型船まで様々だ。
その半分以上が双胴船だった。双胴船は2艘の船をつないだ形状であることから、
下部船体を細長くしても広いデッキ（甲板）が作れる。　安定性が高く、水面下の
船体形状を細長く出来ることから巡航速度を高くすることができるため、外洋ヨットの
デザインとして採用されることも多いが、モノハル（Ｍｏｎｏ－ｈｕｌｌ）と呼ばれる単胴型の
通常のヨットに比べると、転覆時に転覆したまま「安定」してしまい、復原性が
確保出来ないことがデメリットである。

は「なんで双胴船が多いんやろ?」

ティ「急いでマリーナから出て遊びに行きたいからじゃないの?」

ザフィ「それはないだろう」

ちなみにザフィーラは人間モードになっている。耳を隠すように帽

子をかぶって。
フリードとムワリムはミッドでお留守番。

「しかし双胴船か…ミッドで使えるかもしれんな」

フェ「もーウィル、こういう時はお仕事なしだよ？」

「ああすまん、ついな」

途中にあった屋台で軽く昼食をとって、レッツショッピング！

な「まずは洋服が見たいの！」

ということでやってきたのはケアンズセントラル。でかいショッピングモールである。

カ「広いですね！」

は「めちゃ涼しい！」

ティ「えーっと洋服屋はこっちね」

「子供服もその店にあるかな？」

フェ「あるんじゃない？」

「そか、じゃあ行くか！」

ヴィヴィオ「わーい！」

カナ「これ、走ると危ないぞ」

イクス「待ってよお姉ちゃん！」

んで、大量に買いました。

な「こんなに良い服がこのお値段だなんてお得なの！」

フェ「ミッドじゃとても買えないよね」

シグ「次は土産だな」

「具体的には何がいい？酒？お菓子？それとも他のもの？」

ヴィ「全部買おうぜ！」

ティ「じゃあまずお酒ね。それならここ！シティワイナリー！」

ここは希少価値のあるヴィンテージものやプレステージワインから、珍しいアイスワインや貴腐ワイン、さらに気軽に飲めるテーブルワインまで
常時２００種類以上のワインが保管されている。さらに店内には大きな
試飲カウンターもある、気になるワインをテイスティングすること

も可能だ。

シグ「これは…すごいな」

ワイン大好きなシグナムは目を輝かせている。

店員A「いらっしゃいませ」

シグ「すまないがこの店のお勧めの赤ワインを試飲したいのだが？」

店員A「さようでございますか。ではこちらにおかけになってお待ちください」

その横で。

「これは？」

店員B「それは当店自慢のスパークリングワインでございます」

「…スパークリングもなかなかいけるな！これもらうわ」

店員B「ありがとうございます」

シャ「アイスワインってどういうワインなのかしら？」

店員C「はい、デザートワインの一種で氷結したブドウから造られ

るワインです。
　ブドウ果実に含まれる水分は凍結しますが、氷晶の成長と共に糖やその他の
溶質が未凍結の部分に追い込まれ、成分が濃縮されます。こうして凍結した
ブドウから搾汁すると濃縮された果汁が得られ、高糖度の環境に適応した
特殊な酵母による長時間の発酵を経てアイスワインができあがります。
　アイスワインは非常に甘いながらも酸味との均整に秀でているのが特徴です」

シャ「そうですか、ちょっと飲んでみたいのですがよろしいですか？」

店員C「もちろんです。すぐにお持ちいたします」

結局、シグナムは気に入ったワインを数ケース購入した。俺もスパークリングワインを1ダース、赤ワインを1ダースほど買い、シャマルは
アイスワインを1ダース買った。

「とりあえず荷物が多すぎるから一度ホテルに戻ってミッドに送っちまおう」

みんな「賛成」

ワインは屋敷のワイナリーに送ってメイド達に整理させる。後のものは
6課に送っておいた。

そして夜。
俺たちはナイトマーケットにやってきた。その名の通り、夕方からマーケット内の多くの店がオープンする。マーケットの入り口近くにある
レストランで夕食をとってから、中を散策した。

「これいいな」

ガラス細工のお店で足を止めて、幾つかを手に取る。

「これナンバーズのみんなのお土産にしよう。すいません」

俺は12個のガラス細工を購入してプレゼント用に包んでもらった。

カナ「これは…ブーメランか？」

カナリアはアボリジニが使っていたブーメランに興味津津だった。

カナ「叩かれたら痛そうだな」

イクス「叩かないでね？」

ヴィヴィオ「駄目だよ？」

カナ「…分かっている」

イクス「今の間は何！？」

な「にゃあああああああ…」

フェ「はふうううううう…」

アリサ「ふぇえええええええ…」

すずか「みゃあああああ…」

は「あふうううううう…」

この５人はマッサージを受けて極楽気分だった。

ヴィ「これかわいい！」

ヴィータはカンガルーやコアラのぬいぐるみが好きになったらしく、

何個か買っていた。

シグ「これはおいしいな」

シャ「そうね」

ザフィ「気に入った！」

この3人は食品販売店でビーフジャーキーを試食していた。

店員「まだまだあるよ！カンガルーにワニ、エミューのジャーキーはどうだい？」

シグ「カンガルーにワニだと！？」

ザフィ「うむ！うまい！これをもらおう」

店員「まいど！幾つですか？」

ザフィ「それぞれ2箱ずつ」

店員「」

シャ「どんだけ気に入ったのよ…」

ザフィ「アルフも喜ぶだろう」

そんなこんなで満足したみんなはホテルに戻ってぐっすり寝た。

続くよ！

第７８話：お買い物ｉｎケアンズ（後書き）

昨日説明会に行って、エントリーシートをもらって、明後日までに郵送とか無理だし。

次回は「遊びｉｎキュランダ」です！

では

第７９話：遊びｉｎキュランダ

翌日
俺たちは朝から車に乗って国道１号線を北上していた。このオーストラリアの
国道１号線は、なんと幹線道路ネットワークに組み込まれていて、
本土を一周する、
州都および海岸の町をすべてともに接続した路線なのだ。

そのせいか、国道１号線の呼び方が地域ごとによって異なる。ケアンズでは
キャプテン・クック・ハイウェイと呼ばれている。

フェ「空港だ」

この道路は空港のすぐそばを通っている。

ヴィヴィオ「飛行機小さいー」

な「いや大きいよ？あれはジャンボジェットだし」

カナ「父上の持ち船に乗っていると、他のが小さく見えるのではないか？」

は「確かに」

「これがバロン川だよ」

な「そんなに大きくないね」

ティ「だからって飛び込んだりしないでね」

シグ「なんでだ？見た感じそこまで深くはなさそうだが…」

「そこにはみんな大好きワニさんが餌求めてうろついているからだ」

は「まじかい！」

イクス「うわー！畑がいっぱいあるよ！」

車は広大なサトウキビ畑の脇を通過する。

「確かオーストラリアって世界第2位の砂糖生産国だった気がする」

ヴィ「にしてもどこまで続いてんだ、この畑…」

んで、俺たちがやってきたのはカラボニカ・レイク駅。ここはスカイレールの駅である。

スカイレールとは、ケアンズにある観光用索道（ロープウェイ）である。

世界遺産指定にもなっている熱帯雨林（クイーンズランドの湿潤熱帯地域）の上を通過し、カラボニカ・レイク―キュランダ間を約35分で結ぶ。

総延長距離は7．5ｋｍ

であり、１９９５年の開通当時は世界最長であった。世界遺産の環境に影響を与えない
配慮として、ロープウェイを支える３６基の鉄塔は完成品をヘリコプターで運んで
設置する方法が取られ、およそ1年を費やして完成した。

テ「ん？これなんだろう？」

カウンターで切符を買って戻ると、ティアナが近くの棚に飾ってあるトロフィーを
眺めていた。

「それはシドニーオリンピックの時のやつだな。聖火ランナーが持っていた
聖火トーチもあるだろ？」

キャ「ほんとだ」

「このゴンドラは6人乗りだからグループ分けするぞ」

グループ1＝な、フェ、は、イクス、ヴィヴィオ、俺

グループ2＝シグ、ヴィ、シャ、キャ、リイン姉妹

グループ3＝テ、ス、エ、ギ、ティ

グループ4＝アリサ、すずか、カナ、ザフィ

「これでよしと」

ヴィヴィオ「高ーい！」

な「きれいな景色！」

フェ「森がいっぱいだね」

「そりゃ熱帯雨林だからな」

キャ「あ、きれいなお花」

シグ「色々な植物があるのだな」

シャ「なんか落ち着くわ～」

ス「ティア！見てあれ！なんかいるよ！」

テ「こんな狭い中で大きな声出すな！」

ギ「あ、モモンガかな？」

ティ「多分そうね」

エ「かっこいいなあ」

カナ「空気もいいし自然でいっぱいの土地…こんな場所に住んでみたいものだ」

ザフィ「同感だな。この町は日本人も多く住んでいると聞く」

アリサ「日本より物価が全体的に安いからじゃない？」

すずか「ウィル君にお願いすれば別荘とか作ってもらえそう…」

そしてキュランダに到着。元々は鉱山の町だった。
スカイレールのキュランダ駅で記念写真を撮った後、俺たちがまず最初に
行った場所は、レインフォレステーション・ネイチャーパーク。キュランダ郊外に
ある熱帯雨林テーマパークである。

「まずはアーミーダック・ツアーだな」

みんな「アーミーダック？」

これはゼネラルモーターズ社によって開発された、アメリカの水陸

両用車だ。
この種の水陸両用車としては、独力でイギリス海峡を横断することが可能な
程の高い耐航性を持ち、ノルマンディー上陸作戦等で活躍した。路上では
最高時速８０?で走行し、水上を最大で時速１０?で航行可能である。

「よーし、みんな乗るぞー」

な「なんかずいぶん座席が余っているね?」

「貸切にした」

フェ「さすがだね!」

は「……」

アリサ「どうしたの、はやて?」

は「うち、さっき見たんや…」

~回想~

その時はやては、カウンターでウィルと係員が話している様子を見

ていた。

「なんとか貸切にできないか？せっかくのハネムーンなんだよ」

係員「そう言われましても規則があるもので…」

するとウィルは右手を軽く前にかざしながら係員に話しかけた。

「君は俺たちのために喜んでアーミーダックを貸し切り状態にしてくれる」

6課のみんなにも1度話したことのある、フォースのマインドトリックである。

他人の心に確信を植え付け、行動をある程度操ることができる。フォースを

集中させながら、ひらりと掌をかざし相手に話しかけると、相手はその言葉の

通りに思考しそれを鵜呑みにする。

するとあら不思議。

係員「私はあなた達のために喜んでアーミーダックを貸し切りにしましょう！」

「そうか、助かったよ」

は（な、何をしたんやろ？いきなり係員の態度が急変したで！）

はやてはフォースのことなんかすっかり忘れていたので、何が起こったのか

さっぱりわからなかった。
～回想おしまい～

は「と言うことなんや」

フェ「…まあ貸切になったんだしいいんじゃない？」

な「そうなの」

イクス「すごい！本当に水の上を走ってる！」

シグ「よくできているな」

ゆっくりとダックは熱帯雨林に囲まれた池を進む。ガイドが森にすむ動物や
植物の解説をしながら、あっという間に４５分間のツアーは終了してしまった。

は「いやー楽しかった！」

「まだまだこれからだぞ？次はコアラを抱えて写真撮るぞ！」

フェ「か、かわいい…そしてもふもふしてる…」

子供のコアラを抱えているフェイトはご機嫌である。

な「むー、フェイトちゃん、早くしてよー」

ヴィ「まだかよ？」

「焦るなって。なんなら他の動物を抱っこしてみるか？」

な「他？」

「おう。すいません」

そう言って係員が持ってきた動物は。

な「にゃあああああ！！わわわワニ！！」

ヴィ「まじかよ！？」

子供のワニだった。

「大丈夫だって、噛みついたりしないように口を縛ってあるだろ？」

ヴィヴィオ「ほんとだー」つんつん

ティ「私ワニがいい！」

エ「僕も！」

ザフィ「あのワニが大きくなると、皮はバックや靴になり、肉は食べられるのか」

シャ「まあ、そうなるわね」

で、次は。

カ「カンガルーですね！」

ここの動物園にいるカンガルーは人懐こいことで有名である。

すずか「なんでカンガルーの子供ってお母さんのおなかの袋の中にいるんだろう？」

アリサ「さあ？自分で動きたくないからじゃない？」

ギ「ニートみたいですね…」

んでんで。

レインフォレステーション・ネイチャーパークを後にした一行は、キュランダの町の散策を開始した。まず一番最初に来たところは。

ヴィ「アイス屋だ！！」

キュランダで最も有名なアイスクリーム屋の、ホームメイドアイスクリーム。

キュランダ駅から歩いて１０分ちょっと。キュランダ散策していると程良く小腹が

空くくらいの場所にあり赤い屋根の屋台が目印である。

ティ「色々な味があるね」

チョコやレモンなど２８種類の味がある。

「俺はラム＆レーズンで！」

ヴィ「あたしは上がパッションフルーツ、下がブラックベリーで！」

「うん、うまい！」

オーストラリアはラム酒も有名なので、そのラムを使ったアイスは格別であった。

ス「パイナップルおいしー！！」

テ「マンゴーもいける！」

キャ「エリオ君、あーん♪」

エ「あ、あーん／／／」

カナ「姉上、頬にアイスがついておるぞ」

ヴィヴィオ「あ、ほんとだ」

イクス「チョコレート大好き！」

ヴィ「……（ポロポロ）」

シグ「ヴぃ、ヴィータ!?なんで泣いている?」

シャ「どうしたの?」

ヴィ「あたしは…今まで偽物のアイスを食べてきたんだな」

ツ「え?」

ヴィ「これこそ真のアイスだ!これ以上においしいアイスなんてこの世に
　あるだろうか?いやない!(反語)」

ア「そ、そうか」

ヴィ「このアイスは後世に伝えられるべきアイスだ」ぺろぺろ

は「そ、そか～」

その後、近くにあったマーケットでアボリジニ的なお土産を幾つか購入して、
キュランダ高原列車に乗り込んだ。列車はケアンズからＭａｃａｌｉｓｔｅｒ山脈を蛇行して
登っていきキュランダに至る３３?を結ぶ観光列車であり、通勤輸送には利用されて
いない。所要時間は１時間４５分である。バロン渓谷国立公園内を通過し、バロン滝

付近では眺望のために一時停車する（駅があり、写真撮影用に長めの停車時間が
取られるので車外に出ることも可能である）。他にも、線路から数mの
距離にあるストニークリーク滝を含むいくつもの小さな滝のそばを通過する。
各車両には3つのＬＣＤモニタが設置され、路線の歴史やバロン滝について
説明されている。２両連結されているゴールドクラス車両では軽食や飲み物が
提供される。

バロンフォールズ駅で一回列車から降り、かの有名なバロン滝を見物する。

カ「これが朝見たあの川の上流なんですか？」

「そだよー」

は「迫力満点な滝やな！」

ヴィ「写真撮ろうぜ！」

その後も列車はがたごととケアンズに向かって進む。

は「あれ？なんかここは見覚えがあるで！」

な「私も！」

１８０度のペアピンカーブがあるホースシューベントに差し掛かると、
なのはとはやてが言った。

シグ「確かに見覚えがあるな…」

シャ「私も！」

「あれだ、『世界の車窓から』っていうテレビ番組のオープニング映像に
　このキュランダ高原列車が使われていたからな」

ヴィ「あ！思い出した！アイス食いながらテレビ見てたんだ！」

ス「ヴィータさんっていつもアイス食べているイメージが…」

こうして1時間４５分の列車の旅は終わり、ケアンズへと戻ってきた。
子供たちが寝た後、大人組はテラスに出て月夜の下でワインを飲んでいた。

フェ「もう明日には帰らないといけないんだね」

ギ「もっと遊びたかったけど、仕方ないですよね」

は「そういえばなんでウィル君は来れたん？うちらは仕事をあらかじめ
　片付けてきたけど、ウィル君の仕事量はうちらよりも多いやろ？」

「ああ、問題ないさ。全部エディがやってくれている…はず」

アリサ「はず？」

「あいつがアニメ見るのに夢中になっていなければ、の話だ」

すずか「エディって確か人工知能なんだよね？それなのにアニメ好きって…」

ヴィ「そんなのに仕事任せて大丈夫なのかよ？」

「心配するなって。あいつは公私混同はしないやつだから、仕事が終わってから
　アニメを見るはずだ。間違ってもアニメ優先で仕事なんかしないだろうさ」

「はああっくしょん！！風邪ひいたかな？さてとアニメの続きっと」

な「それなら大丈夫そうだね」

「それで、どうだった？ハネムーンは楽しめたかな？」

な「もちろん！」

フェ「もう一生忘れられないハネムーンだよ」

は「そうやな」

シグ「感謝するぞ、ウィル」

アリサ「これからもよろしくね！」

「あいよ」

こうしてハネムーンは終わり、翌日全員でミッドに戻りましたとさ。

おまけ？

～地上本部、局長室～

「エディクン？ナンデシゴトオワッテイナイノカナ？カナ？」

「あ、いや、その、色々ありまして…」

「ナニヲシテイタノカナ？」

「…さ、探し物を…アニメの」

「…ゼンデータノショキカ、シヨウカ？」

「すいませんでした！！」

ドゥーエ「こえー…」

第７９話：遊びｉｎキュランダ（後書き）

オーストラリア…いい国です、捕鯨反対とか言っていること以外は。

次回は遂に６課解散です。つまりＳｔｒｉｋｅｒＳ編おしまい！

では

第８０話：６課もこれで最後！

今日は機動６課最後の日…

は「…というわけで機動６課は本日をもって任務を終えて解散となります！」

テ「なんか…割とあっさり終わったわね」

はやての挨拶が終わり、２次会に行こうとするＦＷメンバー。

キャ「ですね」

エ「まあ、この後お別れ２次会もありますもんね」

ス「…うん」

やっぱりスバルはちょっと残念そう。

エ（スバルさん、元気ないね）

キャ（なのはさんとお別れだし、次の配置、ティアさんと進路別れちゃったから…）

「なんてことを考えているんだろうな、スバルは」

ス「え？」

テ「ウィルさん！？」

後ろを振り返ると、そこにはウィルとティーナ、なのはにギンガがいた。

ティ「やっぱりスバルちゃんはいつまでたってもアホの子なのね」

ギ「姉として情けないわ」

ス「ど、どういうことですか～？」

な「とりあえず2次会前にＦＷメンバー、ちょっといいかな？」

外に出ると、隊長陣とウィル、それに3人娘がそろっていた。そして桜の花弁が空で踊っていた。

ＦＷ「うわ～！」

エ「この花確か…」

は「私やなのはちゃんの故郷の花」

フェ「お別れと、始まりの季節に…つきものの花なんだ」

ヴィ「おっし、フォワード一同、整列！」

FW「はい！」

な「さて、まずは4人とも1年間訓練も任務もよく頑張りました」

ヴィ「この1年間、あたしはあんまり褒めたことなかったが…お前ら、

まぁ随分強くなった」

FW「え？」

な「辛い訓練、きつい状況、困難な任務。だけど、一生懸命頑張って、

負けずに全部クリアしてくれた…皆、本当に強くなった。4人とも、

もう立派なストライカーだよ」

その言葉にFWメンバーは思わず目に涙を浮かべる。

ヴィ「あああ！！泣くな馬鹿たれどもが」

「と、言いながらも泣いているヴィータであった」

FW「はい！」

な「さて、せっかくの卒業、せっかくの桜吹雪。湿っぽいのはなしにしよう」

シグ「ああ」

とここでシグナムが自分のデバイスを持ちながら前に出た。

ヴィヴィオ「？」

ヴィ「自分の相棒、つれてきてるだろうな？」

ヴィータもまたデバイスを出す。

FW「え？」

フェ「え、え？」

聞いていなかったフェイトは戸惑いを隠せない。

シグ「なんだ、お前は聞いていなかったのか？」

なのはもレイジングハートを構えて言う。

な「全力全開（全壊）、手加減なし！機動６課で最後の模擬戦！」

FW「…はい！」

フェ「ええ！？全力全開って、聞いてませんよ？」

シグ「まあやらせてやれ。これも思い出だ」

フェ「ううん、もう、ヴィータ、なのは！」

ヴィ「固いこと言うな。せっかくリミッターも取れたんだしよ」

な「心配ないない。みんな強いんだから」

フェ「もう！」

「フェイト、なんだかんだいってお前もやりたいんだろ？」」

フェ「そ、そんなこと」

カナ「嘘をつくのは良くないぞ？」

イクス「フェイトお母様、頑張ってください！」

ヴィヴィオ「私はなのはママを応援するよ！」

「局長命令だ！この辺一帯焼け野原にしてもかまわんから、気が済むまで
派手にやっちまえ！」

は「と、局長の許可も取ったので、やろうか！」

ギ「ウィルさんは参加しないんですか？」

ティ「ご主人様と私が参加すると、戦力的なバランスが崩れるというか、
　誰も勝てないというか」

ギ「なるほど」

は、ギ「それじゃあ、レディー…ゴー！！」

2人が開始の合図をあげ、桜吹雪の中、最後の模擬戦が開始された…

「あ、模擬戦の後に大事なお話あるから。それと勝った人にはご褒美あげるよ」

な「ブラスター3！スターライト…」

ス「いきなりですか！？」

キャ「フリード！ヴォルテール！やっちゃって！」

フェ「でか…」

結局、模擬戦は引き分けになった。

「じゃあご褒美はなしと言うことで。まずは2次会に行こうぜ」

2次会

「今日は無礼講だ！好きなだけ食って飲んで騒いで遊びまくれ！」

みんな「いえーい！」

ス、ギ、エ「がつがつもぐもぐ…おいしい！！」

ヴィ「ぷはー！模擬戦の後に飲むビールは格別だな！」

フェ「ヴィータ、なんかオヤジ臭いよ」

ヴィ「ぐさっ」

ザフィ「というか昼間からビール…羨ましい」

2時間後。

な「料理もお酒もおいしーのー」

「おいおい、なのはの奴もう酔ってるぞ」

いたるところで酔っぱらっている奴が続出。

グリ「私！グリフィス・ロウランは！これより告白をいたします！」

男ども「おおおお！！」

アルト「誰に告白するのかな？」

ルキノ「さあ？でも面白そうじゃない」

グリ「ルキノさん！私はあなたのことが大好きです！結婚を前提に
付き合っていただけないでしょうか！」

男ども「まじで告白しやがったあああああ！！」

ルキノ「…え？私？でもそのあばばばばば」

アルト「落ち着いてルキノ！」

ルキノ「ひっひっふー…えっと、そのグリフィス君、わ、私でよけ
れば…／／／」

みんな「うおおおおおおおおお！！」

ヴァ「カップル爆誕だな！」

は「グリフィス君…やるやないか」

キャ「それでウィルさん、大事な話ってなんですか？」

「ああ、実はみんなには明日引っ越しをしてもらう」

エ「引っ越し?どこにですか?」

「新しい家にだよ」

は「家やて!?」

ティ「そだよー。ご主人様が建てたんだ」

な「きいてないの~」ふらふら

「だって今話したんだもん。と言うことで今日中に部屋の片付けの方よろしく」

みんな「はーい!」

こうして2次会は過ぎて行った…

第８０話：６課もこれで最後！（後書き）

へい、Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編おしまいでっす。
もう就職活動したら負けな気がしてきた…大学じゃなくて専門学校に行けばよかったかも…

次回は屋敷への引っ越しです。
では

第81話：お引っ越しやで！

2次会の翌日。

な「あ～う～あたまがいたいの～」

フェ「なんでこんなことに…」

シグ「くっ、これしきのことでベルカの騎士が負けてはならん！…けど頭痛い」

ヴィ「昨日何してたんだっけ？」

は「なんかとてもおもろいことがあったような…」

「いいから引越しの準備しろよ」

ザフィ「ま、こうなるわな」

キャ「お酒の力って怖いね」

エ「そうだね。あ、それはこっちの箱だね」

フリ『そういえば俺も龍語しゃべればいいんじゃねってふと思った』

ムワ『確かにお前も龍だしな』

フリ『いつも「きゅく～」って言えばなんとかなってたしね』

2頭の龍もきちんとお手伝いをしている。

ス「えっとこっちがこの箱であっちがえっと、あー！わかんなくなっちゃった！」

テ「もうちょっと落ち着いてやりなさいよ！」

カナ「こっちは終わったぞ、姉上」

ヴィヴィオ「おっけー！あ、イクス、それはこっちだよ」

イクス「あ、ほんとだ」

とそこに。

アリサ「手伝いに来たわよ！ってまだこんなにあんの？」

すずか「こっちはあっという間に終わったから手伝いに来たよ」

ギ「てんてこ舞いってやつですね」

ス「ギン姉！ヘルプミー！」

ギ「あー、ここはこう詰めれば他にも入るでしょ」

な「アリサちゃん！ちょっと手伝って欲しいの！」

は「すずかちゃん、助けてーな！」

３人が来たので、３０分後には全員分の荷物をまとめることができた。

すずか「じゃあ外にいるトラックに乗せましょうか」

みんなで荷物を持ちながら外に出ると、４台の黒いＳＵＶと2台のトラックが待っていた。

ＳＵＶの中には、地上本部の警備部隊がいて、ティン・マン装甲服を身につけている。

警備Ａ「じゃあリレー式に荷物をまわして下さい。こちらで積み込みますので」

は「分かりました」

キャ「はい！」

エ「はい！」

ス「えい！」

テ「はい！」

な「なの！」

フェ「なの？」

5分後には全ての荷物が積みこめた。

「じゃよろしくね」

警備A「かしこまりました！」

車列は新しい屋敷に向かって動いて行った。

な「ふう、疲れた～」

フェ「ってウィル！私たちはどうやって家まで行くの！？」

ヴィ「そーだそーだ！」

「もうすぐ俺たちの足が来るよ」

そう言った瞬間、上空に1機の黒いラーティが現れて、みんなの前に着陸した。

ツ「黒色のラーティは初めて見ますです！」

ティ「これは局長バージョンね。普通の機体よりエンジン出力が向上していて、
　おまけに搭載兵器の装弾数も増えているわよ！」

シグ「そうか。で、なんでメイドが操縦しているんだ？」

ラーティから下りてきたのはメイドさん。

シャ「ウィル君ってそういう趣味なのかしら？」

「違うわい！このメイドは屋敷の警備も担当するんだぞ！」

ヴィ「このメイドが警備？冗談だろ？」

ティ「ヴィータちゃん、このメイドは人間じゃないのよ？」

3秒後

みんな「えええええええええええええ！！！？？？」

ギ「どこからどう見ても人間じゃないですか！ってまさか！」

ス「ウィルさん、このメイドさんって戦闘機人なんですか？」

「いや？みんな大好きな骨だよ」

な「骨ってあのフェイク・スカリエッティが作ったあの！？」

フェ「赤いライトセーバーをぶんぶん振り回してたあれ！？」

「イエス。あれはＴ－６００というタイプだったんだが、これはＴ－Ｘと呼ばれる
最新鋭型だ。金属骨格の上に流体多結晶合金（液体金属）が覆ってあるから
自分とほぼ同じ背丈の物（自分の体積とほぼ同じ物体）に擬態できる能力がある。
特に触れて調べた人物になら、どのような姿にでも擬態できるぞ。
例えば」

隣に立ったメイドが俺になるのを見て、全員が驚く。

な「ウィル君が２人いる！？」

カナ「本物と見分けがつかないな」

「そりゃ声までまねできるからな」

ウィルＴ－Ｘ「どうですか？すごいでしょう？」

ザフィ「しかし、警備も担当するということはそれなりに戦闘もで

きるのだろうな？」

メイド「もちろんです。例えば右腕から」

右腕をプラズマ砲に変換して空に向かってぶっ放す。

メイド「プラズマ砲を撃つことができたり、１秒で」

１秒でプラズマ砲から火炎放射機に切り替えて、空に向かって炎を吐きだす。

メイド「火炎放射機にすることも可能です。もし敵が逃げても問題ありません。
時速１２０？で走って追いかけますので。障害物があっても、左腕に
内蔵されている、ダイヤモンドより硬い歯がついているエンジン
カッターでなんでも切り裂くことができます。また私の動力源は、
Ｔ－６００型のような水素電池ではなく、内蔵型プラズマ反応炉で
動いています。そのため、半永久的に行動が可能です。どんな
敵が来てもばっちこいです」

みんな「」

「な、安心だろ？」

みんな「そ、そうですねー」

黒いラーティは砂埃を巻き上げながら６課から飛び立った。

１０分もしないうちにラーティは屋敷の上空に到達した。

ス「すごいすごい！とっても大きいですね！」

ギ「ていうかでかすぎでしょう」

しばらく上空をゆっくりと旋回して、屋敷全体を見回せるようにする。

シグ「しかし広いな、ってあれは訓練施設か？」

フェ「ほんと？」

ティ「６課にあるのと同じ訓練シュミレーターだよ」

シグ「素晴らしいな！これでいつでも模擬戦ができる」

な「にゃははは…」

キャ「あ、畑がある！」

「あれは家庭菜園用の畑だ。これで好きな野菜や花を育てられるぞ」

キャ「やった！」

アリサ「ウィル、あれは何かしら」

すずか「どれ、って」

アリサが指さした先には、ガレージに向かって走っているＴ４－Ｂヘヴィ・タンクだった。

テ「あれはどう見ても」

「芝刈り機だよ」

は「嘘つけい！なんで芝刈り機に砲塔が付いているんや！」

「あれだよ、邪魔な草を吹き飛ばすのに必要なんだ」

ア「それじゃ芝刈り機ではなく芝吹き飛ばし機じゃないか」

ヘリパットに着陸して屋敷に入ると。

メイドズ「お帰りなさいませ、旦那様、奥様」

総勢２０名のメイド軍団がお出迎え。

ス「す、すごい…」

真ん中から1人のメイドが歩いてきて、目の前でお辞儀する。

「私はこの屋敷の管理の全責任を負っております、メイド長の咲夜と申します。
　どうぞよろしくお願い致します」

みんな「よ、よろしくお願いします」

咲夜「そろそろ皆様のお荷物が届く時間でしょう」

と、そこで昨夜が右上の方を見ながら軽くうなずいた。

咲夜「只今皆様のお荷物を積んだ車列が正面ゲートを通過致しました。到着次第、
　皆様のお部屋に運び込み、セット致します」

「りょーかい。じゃあ部屋を決めようか」

カ「そうですね」

は「カリム!?いつからいたんや?ってその恰好はなんや!?」

はやてが驚くのも無理はない。カリムはメイド達と同じメイド服を着ていたのだ。

カ「実は私は昨日のうちに引っ越しを終わらせていたんです。それでみなさんを
　驚かせようと。似合ってます？」

な「すごくいいと思います！」

ス「シスターさんがメイド服…」

エ「…メイドっていいな～」

キャ「エ・リ・オ・君？」

エ「イエ、ナンデモアリマセン」

ス「ティア～、一緒の部屋にしようよ～」

テ「またあんたと同じ部屋なの？」

ギ「もう大人なんだから1人部屋でいいじゃない」

ス「う～ティアの胸を毎朝揉むという日課ができなくなる～」

テ「何してんのよあんたは！／／／」どがっ！

ス「むぎゅう！」

は「うちはアインとツヴァイと一緒の部屋で、シグナムはアギトと一緒、
　ヴィータはシャマルと、ザフィーラは1人部屋でええかな？」

ツ「問題ないです！」

アギト「それでいいぞ！」

ヴィ「だな」

ザフィ「分かりました」

キャ「エリオ君、一緒の部屋にしよう？」

エ「え、また一緒なの…」

6課時代、エリオは女子寮でキャロと同じ部屋に住んでいて、本人いわく散々な
目にあったとか。しかしヴァイスなどの男性職員の意見は

「なんて羨ましい！」

で一致している。

キャ「一緒じゃ嫌なの？」うるうる

エ「うっ…わ、分かったよ。一緒の部屋にしよう！」

キャ「やったあ！」

キャロの上目遣い＋半泣き攻撃にエリオは屈した。

な「咲夜さん、部屋が決まったので荷物お願いします。これ部屋割り表です」

咲夜「かしこまりました、なのは様。作業が済むまでリビングでお待ち下さい。
お茶とお菓子をご用意してありますので」

な「分かりました」

なのは達がリビングにつくと。

テレビ＜デデーン！全員、アウト～

「あっはっはっはっはっは！！やべえおもしれえ！」

ティ「おなかいたいｗｗｗ」

ヴィ「なんだこいつらあはははははは！」

とあるお笑い番組のＤＶＤを見ていた。

フェ「これで引っ越しはおしまいだね」

シグ「そうだな」

「じゃあそろそろ飯にするか！引越しの日はそばを食うのが常識だ！」

メイド「厨房の準備は整っております」

「おっけい！それじゃあやりますか。あ、シャマル手伝って」

シャ「はーい♪」

シグ「高町、そばができるまで模擬ｓ」

な「ふぇ、フェイトちゃんが模擬戦したいって言ってたよ！私お手洗い行ってくる！」

フェ「ちょ、なのは！？」

メイド「廊下の突き当たりの右がお手洗いでございます」

な「ありがとなの！」ぴゅ～ん

みんな（逃げたな）

ス「早かったね～」

シグ「ではテスタロッサ、模擬戦をしよう」

フェ「ううん、恨むよなのは…」

メイド「それではご案内いたします」

テ「よく考えたらこの屋敷の見取り図的なものが欲しいわね」

メイド「それでしたらこちらにございます」

メイドがモニターを展開して屋敷の見取り図が現れた。

ギ「やっぱり広いですね～」

キャ「地下にも部屋があるんですか！？」

メイド「地下施設には緊急時用核シェルター、シールドジェネレーター、魔導炉、
中央警備室などがございます」

カ「か、核シェルター…」

メイド「それに加えて、地下格納庫には１２機のＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機が
垂直型リニアカタパルトに搭載されています。カタパルトは庭に通じており、非常時にはすぐさま出撃し敵を撃退しま

す」

ヴィ「ものすごくやりすぎ感があるけどまあいいや」

ツ「あの、メイドさん達っていつ寝るんですか？」

メイド「私たちは機械なので寝る必要はありません。２４時間３６５日、
皆様方のために働くまででございます」

アリサ「メイドの鑑ね…」

すずか「いやそれはなんか違う気がする」

３０分後。

「そばできたぞー」

シャ「みんな食堂に集まってー」

みんな「はーい！」

「あれ、シグナムとフェイトは？」

ティ「模擬戦するって」

「もう飯だから呼んできてくれ」

メイド「かしこまりました」

シグ「ふう、いい戦いだった」

フェ「そ、そうだね…」ボロッ

「それじゃあ全員そろったところで」

みんな「いただきまーす！」

ス、ギ、エ「ずるずる…おいしい！」

カナ「これがそば…おいしいな」ずるずる

「こうやって箸を使うんだぞ？」

イクス「難しいけど、おいしい！」ずるずる

ヴィヴィオ「パパのお料理おいしい！」ずるずる

シグ「このかき揚げもうまいな」

シャ「それ私が揚げたのよ～」

は「うまい！上出来やでシャマル！」

カ「日本の料理もいいですね～」ずるずる

アリサ「日本を思い出すわ～」ずるずる

すずか「だよね～」ずるずる

アギト「ツヴァイ、これを入れるともっとおいしくなるぞ」つワサビ

ツ「ほんとですか？」

アギト「入れれば入れるほどおいしくなるからな」

ツ「じゃあ一杯入れて、いただきまーす、ぱく。！！！！！」

その途端、ツヴァイが口を押さえながら床をのたうちまわった。

ア「どうしたツヴァイ？」

ツ「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！！！」

ティ「翻訳すると『辛い辛い辛いですううう！！』だって」

シグ「アギト、何をした？」

アギト「ただワサビを勧めただけだよ！」

「食いもんで遊ぶんじゃねえ！」

アギト「すいませんでした」

飯を食い終わって、子供たちは外で遊び、大人たちはリビングでくつろいでいた。

「それで、どうよこの家？気に入ってくれたかな？」

な「すっごくいいの！」

フェ「文句なしだよ」

シグ「訓練施設も素晴らしかった」

は「ほんとありがとう！」

「気にするなって。ていうかそろそろお財布の中身が少なくなったからダイヤ売らなきゃ」

ス「そういえばこの家って幾らぐらいかかったんですか？」

シャ「それは知りたいわね」

「これくらいだよ」

とモニターに金額を表示する。

ス「なっ…」

シグ「」

な「」

は「こ、こんなにしたんか…」

「エディ、あとどれくらいダイヤあるんだっけ?」

「まだまだありますよ～」

「じゃあ半分くらい売っちまえ」

「りょーかい」

ギ「ウィルさん、ダイヤってどこで手に入れたんですか?」

「それはエディに聞いてくれ」

「太陽から約９８０光年離れたＰＳＲ　Ｂ１２５７＋１２というパルス状の可視光線、
電波、Ｘ線を発生する天体の中にあった３つの炭素惑星から引っぺがしてきました」

ス「炭素惑星?」

「地殻はグラファイトで出来ており、十分な高圧環境が存在すれば厚さ数ｋｍの
ダイヤモンドの層が存在する可能性がある惑星のことです」

「要するに地面掘ればダイヤが出てくる」

「でもグラファイトの地殻を時間をかけて掘るのがめんどくさかったので」

みんな「ので？」

「スーパーレーザーの出力を落として、地殻だけを吹き飛ばして残ったダイヤを
引っぺがしました」

みんな「」

「んであとはトラクタービームを使って引きずりながら帰ったというわけ」

は「惑星3個分のダイヤモンド…」

「正確にはちょっと違うけど、まあそんなところか」

「あ、艦長。たった今第3艦隊から報告が。アンドロメダ銀河内で希少鉱物を
大量に含んだ惑星を複数発見したそうです。どうします？」

「ん～、アンドロメダ銀河は地球の宇宙科学者達が見てるからなー。
下手するとばれるし、でも欲しいし、ん～…マーカーだけ設置して
探索を続けさせてくれ」

「はーい」

な「アンドロメダ銀河って、あの？」

「そう、あの」

は「そんなところで何してんのや？」

「あれだ、広域探索も兼ねて色々なところに行ってもらっているんだ」

カ「仕事の一環なんですね？」

「そーいうこと」

ヴィヴィオ「パパー！遊ぼー！」

イクス「お父様！」

「おし！思いっきり遊ぶか！」

こうして引っ越しは終わり、新たな家での生活がスタートしたのであった。

第８１話：お引っ越しやで！（後書き）

引っ越しおしまい。
ほんとなら午前中に更新する予定でしたが、明日までに出さないといけない
エントリーシートがあったことを思い出して、どっちをやろうかと考えた結果、
どちらもやらずにゲームをしていましたｗ

次回は…考えてません適当です。

では

今後について

いつもこの小説を読んでいただきありがとうございます。

作者のカニンガムでございます。

無事にＳｔｒｉｋｅｒＳ編も終わりました。ＰＶもいつの間にか７５０，０００を超えていました。

ここまでやってこれたのは、誰のおかげでもありません。読者の皆様から

寄せられた様々な意見・感想を元にキーボードをかたかた打っている私の力です。

で、今後なんですけど、Ｖｉｖｉｄ編まで何書けばいいんだよ？ということです。

ＳｔｒｉｋｅｒＳから４年くらい後の話だったと思うので。

その空白の４年間を埋めるネタを現在考え中ですが、今まで通り適当＆グダグダになる

かと思います。

「こういうのはどうよ？」

っていうネタがあればどしどし言ってください。それを書くかどうかは

作者次第ですが。

ネタが思いつかない場合、誠に残念ながら次回はこんな感じで始まります。

「あれから4年後…」

とか。

明日までにはネタを考えます！多分。

では～

特別編：ナンバーズ集合！そして…

ある週末のカラオケ店の大きな個室。そこに１１人の女性が座っていた。
そこにいるのは、ウィルの秘書だったり、ウィル直属の部隊員３人だったり、
聖王教会でお世話になっている３人だったり、ナカジマ家に引き取られた４人
だったりする。

ドゥーエ「今日みんなに集まってもらったのは他でもないわ」

この中では一番年上のドゥーエが司会・進行を務める。

ドゥーエ「セイン、ウィルさんと私たちはどういう関係だったかしら？」

セイン「えっと、確か愛人関係だった気が」

ドゥーエ「そう、白い悪魔、もといなのはさん達の許可ももらっていて、
　私たちは晴れて愛人と言う立場にある。しかし…」

チンク「愛人という割には何もしてもらっていないな」

ドゥーエ「それが問題なのよ！」だんっ！

テーブルを強くたたきながらドゥーエは主張する。

ウェンディ「つまりドゥーエ姉もウィルさんといちゃいちゃしたい、ってことッスよね？」

ドゥーエ「当たり前じゃない。でも問題は私よりもこっち」

隣を指さすとそこには。

クアットロ「ウィル様とキスしたいウィル様と愛し合いたいウィル様ウィル様…」

トーレ「おいクアットロ！しっかりしろ！」

ディエチ「これはひどい」

セッテ「だな」

ノーヴェ「ウィル症候群ってところか？」

ディード「クアットロ姉様、何か歌を歌いになっては？」

クアットロ「そ、そうね。何かあるかしら」

オットー「で、どうやってウィルさんといちゃいちゃするか？」

ドゥーエ「そこなのよね～。何か意見ある？」

ノーヴェ「襲う？」

ウェンディ「そしたら次の日になのはさん達に襲撃されてジ・エンドッスよ」

ディエチ「なのはさん達に素直に話して許可をもらうとか」

トーレ「許可がもらえなかったら悲しいな」

クアットロ「これにしましょう」

セッテ「ん？聞いたことのない歌だ」

チンク「えっと、『オリオン座の下で』？」

クアットロ「Ａｈ．．．Ａｈ．．．したいよＳ○Ｘ♪」

トーレ「ぶーーーっ！！！」

ウェンディ「ぐわっ！汚えッスよ、トーレ姉！」

クアットロ「オリオン座の下で～Ｓ○Ｘ♪」

ドゥーエ「クアットロ、なんて歌を歌っているのよ！！」がんっ！

クアットロ「もきゅう！！」

クアットロ「すいませんでした」

ドゥーエ「さて、じゃあ改めてどうしましょうか？」

チンク「回りくどい方法はやめた方がいいのでは？許可がもらえればいいのだろう？」

トーレ「それはそうだがどうやって？」

チンク「こうする」

そう言うとチンクはモニター通信でなのはを呼び出す。

な「はーい！あれチンク？どうしたの？」

チンク「お休みのところすまないがちょっと聞きたいことがあるんだ」

な「何かな？」

チンク「私が今からする質問に「いいよ」と答えてくれると嬉しいな」

な「いいよ、って言えばいいの？」

チンク「そうだ。で、ウィルを襲ってもいいかな？」

な「いいよ！…あれ？」

チンク「ありがとう、では」

な「にゃあああああああ！！ちょっと待っ」ぶつっ

チンク「さて許可はもらったわけだしあとは実行あるのみだな」

トーレ「」

クアットロ「ウィルさんに会えるウィルさんに会えるウィルさんに会えるうふふふ」

～屋敷にて～

な「……」だらだら

ヴィヴィオ「なのはママ、汗がいっぱい」

カナ「風邪でも引いたのか、母上」

イクス「メイドさん呼ぶ？」

な「なななななんでもないの！大丈夫だよ！」

カナ「どう見ても大丈夫ではなさそうだが…」

な「どうしよう…」

～地上本部～

「あ～終わった～疲れた～」

ティ「お疲れ様、ご主人様！」

今日はドゥーエは有給取ってナンバーズで遊びに行くとか言ってたから、ティーナに秘書をやってもらった。おかげでだいぶ仕事がはかどってよかったぜい。

「じゃあ飯でも食って帰ｒ」

局員「局長！本局から至急電です！」

「死ねばいいのに」

ティ「私が見ておきますよ」

「そか、じゃ頼んだ」

いつもなら待っている車に乗って帰るところだが、今日はいい天気の夜なので
歩いて帰ろうと思い、車は用意させなかった。

「ん～涼しい夜だ。昼間の暑さが南極辺りまですっ飛んでるな～、ん？」

ふと前を見ると、電柱にしがみついている女性を見つける。

「何やってんだあの女？って！」

よくみるとそれはクアットロだった。

「何してんだよクアットロ！」

クアットロ「うぃるしゃま～、わらひよっぱらっひゃった～うひひひ～」

「あーもう、ドゥーエ達はどこに行ったんだ？」

とりあえず放っておくわけにもいかず、クアットロを担いで彼女が

住んでいる
女子寮まで連れて行こうとするが。

クアットロ「そこみぎ～」

「っておい！こっちはホテル街だぞ！」

クアットロ「きょうはかえりたくな～い」

「…はぁ」

俺は仕方なく近くのホテルの一室に入ることにした。

「この部屋か」

受付でもらったキーカードを差し込み、扉を開けて中に入る。
そこそこ大きいベッドにクアットロを寝かせようとすると。

クアットロ「捕まえた♪」

「え？」

クアットロに掴まれて俺は彼女と一緒にベッドに倒れる。そして気がつくと
彼女は俺の上で馬乗りの状態になっていた。

「な、何してんの？」

クアットロ「これから～ウィル様を襲っちゃいます！」

「へ？」

俺があっけにとられていると。

ウェンディ「逃げられないッスよ、ウィル兄！」

ノーヴェ「遂にこの日が…」

ディード「や、優しくしてくださいね？／／／」

ディエチ「ふふふ…／／／」

部屋の暗がりから次々とナンバーズが出てきた。

「ってみんな！それにドゥーエもいるんかい！これはどういうことだ？」

ドゥーエ「いやー、いつまでたってもウィルさんといちゃいちゃ出来ないので
こうしました」

「こんなことしたらなのは達がキレるぞ？」

チンク「きちんと許可（？）はもらったぞ」

「何その？マークは！？」

セイン「細かいことはいいんですよ！」

セッテ「さてと、それじゃあ…じゅるり」

ナンバーズ「突撃！！」

「ぬわあああああああああああ！！！」

翌日。

クアットロ「あはは…もっと…もっと…／／／」

トーレ「もう、らめぇ…／／／」

ウェンディ「は、はげしすぎ、ッス／／／」

ディード「ういるしゃま…大好き♪」

「これが世間で言う浮気なのかな？」

俺は１１人の美女に囲まれながらそんなことを考えていた。

その後、家に帰ると当然の如くなのは達に怒られた。

「なんで連絡しなかったの！？」

とか、

「心配してたんだぞ！？」

とか。

まあ、スターライトブレイカーが飛んでこなかっただけましであっ

た。

その日以降、ナンバーズ愛人軍団からのお誘いが急激に増えて、なのは達新妻軍団と争うようになったのはまた別の話。

特別編：ナンバーズ集合！そして…（後書き）

ナンバーズのウィルの呼び方。

ウーノ、ドゥーエ、セイン、セッテ、オットー、ディエチ＝「ウィルさん」
トーレ、チンク、ノーヴェ＝「ウィル」
ウェンディ＝「ウィル兄」
クアットロ、ディード＝「ウィル様」

クアットロが歌っていたのは、みなさんご存知の歌です。

次回は皆様から寄せられたご意見を参考にして書きたいと思います。

では

番外編８：絶対に笑ってはいけない管理局、その１（前書き）

時系列とか完全無視でやります。
月野様、ご意見ありがとうございました！

番外編８：絶対に笑ってはいけない管理局、その１

～昨日、地上本部、ウィルの執務室～

「さて、今日は『絶対に笑ってはいけない管理局』をやってもらうぞ。
メンバーは、なのは、ヴィータ、はやて、スバル、ティアナ、エリオでいいか」

ティ「もし笑ったらジェイル特製の『お尻たた機』で叩いてもらうからね」

「何か質問ある？」

な「なんで私なの！？」

は「そや！」

ス「フォワードメンバーの中でキャロだけいないし」

「他のメンバーはお前らを笑わせようと必死になっているからな？」

エ「…ということはお父さんも？」

「もちろん笑わせようとするさ。でもあまり面白くないと思うから心配するな」

ルール
参加者は２４時間笑ってはいけない。まあガ〇使と同じだよね。
笑ったら、「お尻たた機」で尻を叩かれる。
叩くのは地上本部保安部隊、要するにティン・マン装甲服部隊。

で、当日の朝。

フェ「みんな、頑張ってね！」

は「お手柔らかに頼むで！」

シグ「そこまでひどくはならないと思いますが…」

キャ「エリオ君も頑張ってね！」

エ「うん！」

フェ「えっとそれじゃあ」

シグ「スタート！」

シグナムが笛を吹いて、遂に地獄の１日が幕を開ける。

フェ「まずは地上本部まで行くね」

ス「いつ見ても大きいなあ」

テ「そうよね、って」

そこに1台のオープンカーが。乗っているのは。

は「あれ、ロッサ？」

ヴェロッサ・アコース、本局査察部所属の査察官である。

テ「ミッドで何しているんだろう？でもかっこいいなあ」

ドアを開けて外に出る。ロッサは水色のワイシャツ、青のネクタイ、白の上着、そして。

純白のふんどしであった。

テ「ぶっｗｗ」

は「ぶはっｗｗ」

「はやて、ティアナ、アウトー」↑エディです

は「なんでふんどしやねんｗｗいたいｗｗ」

テ「イメージが崩壊したｗｗｗいてっｗ」

エ「危なかった…」

ス「だね」

な「にしても無表情だったね」

ヴィ「逆に怖いぜ」

ロッサは階段を上がって建物に入ろうとしたが、その時。

局員「なんだこの布？えい！」

ふんどしの一部を持ち上げて引っ張った局員がいた。まあ結果

ロッサ「ぎぇん！！」

ふんどしを装着している状態で、いきなり股の部分を強く引っ張られた場合、

痛くないわけがない。

な「ふふふｗｗ」

ス「あはははははｗｗｗｗ」

テ「…くっｗ」

「なのは、スバル、ティアナ、アウトー」

ス「ぎぇんってｗｗｗちょ痛い！」

な「我慢したのにｗ痛い！」

テ「ちくしょう！」

シグ「あれはレジアス中将の車だな」

ロッサの次に来たのは、レジアス中将の乗った車列だった。
まず先に警備兵が下りて周囲の安全を確認する。それからレジアスとオーリスが
降りてきたのだが。

警備「おはようございます、レジアス中将閣下！」

レジ「うむ」↑セーラー服姿

オーリス「おはよう」↑パジャマ姿

「全員、アウトー」

は「セーラー服ｗｗｗｗｗｗｗないわｗｗｗｗｗいたいｗｗｗ」

ヴィ「目が死ぬｗｗｗ」

な「朝からなんてもの見せるのｗｗｗ」

テ「気持ち悪いｗｗｗ」

ス「あのオーリス三佐がパジャマってｗｗｗ」

エ「ひでええｗｗｗｗ」

シグ「おはようございます、中将」

レジ「おお、おはよう。どうだこの服？いいだろう？」

その場で回転してスカートがふわりとする。

エ「ぐっ…我慢だ！」

フェ「なぜそのような格好を？」

レジ「だって大事なところがスースーしているからに決まっているだろう！
キ〇タマが蒸れずに済む！実にすばらしい！」

エ「無理だｗｗｗ」

「エリオ、アウトー」

ヴィ「下品だ！」

な「女の私たちにはわからないね」

ス「ですね」

テ「ようやく建物内に入れたわね」

は「やっとやね」

な「にゃははははｗｗｗｗ」

「なのは、アウトー」

ス「なのはさん！？」

な「あ、あれはひどいのｗｗｗｗ痛い！」

フェ「みんな、今管理局は犯罪撲滅週間なのは知っているよね？」

シグ「そいつが今一番凶悪な犯罪者だ」

手配書

名前：ユーノ・スクライア

罪状：覗き、パンツ泥棒、盗撮

特徴：フェレットに変身することができ、女性が油断したところで犯行を行う

は「ぶはははははｗｗ」

ヴィ「くそうｗｗｗ」

「はやて、ヴィータ、アウトー」

は「ユーノ君ｗｗｗアウチ！」

ヴィ「あつかいひでえｗｗ」

フェ「みんなも見つけたら捕まえてね？」

テ「は、はあ」

シグ「ではまずは局長に会いに行くぞ」

エ「お父さんに？」

～局長執務室～

シグ「失礼いたします」

「よく来たな、みんな。それで、始まったばかりだけどどうよ？」

な「もうお尻が痛いの！」

は「レジアス中将がひどすぎるで！」

「まあ、お前らにゃら…お前らならきっと問題ないだろう」

ス「…ふふｗ」

「スバル、アウトー」

ス「噛まないでくださいよｗｗｗ　いってえええええ！！」

「まあいい、んで。管理局の局員たるものニックネームの1つくらいなきゃいけねえな。
そこで俺がニックネームを付けてやろう。まずエリオ」

エ「は、はい！」

「好きな食べ物は？」

エ「えっと、食べ物ならなんでも！」

「そうか！俺もそうなんだよ！よし、決まった。お前のニックネームは、

ビリビリだ！いいな？」

エ「（そのまんまじゃん、てか食べ物関係ないし）はい」

「じゃあ次、なのは！」

な「はい！」

「お前にはもう『管理局の白い悪魔』っていう素晴らしい名前があるからいいよな？」

な「変えて欲しいの！！」

「じゃあ『なのなの』だ！」

「ヴィータは『赤のロリ』な」

ス「ぶっ！」

エ「ふふｗｗ」

「スバル、エリオ、アウトー」

ヴィ「ロリ言うな！」

「ティアナは『ツンデレ』！」

な「そのまますぎる…」

は「面白くないで！」

「作者を責めるのはやめとけ」

「はやては『狸』と」

は「やっぱそうなるんかい！わかってたけど」

「さてと、それではこれからも管理局の一員として「あの！」なんだ、スバル？」

ス「あの、ウィルさん、私のあだ名がないんですけど」

テ「ふふふふｗｗｗ」

ヴィ「ふはっｗｗｗ」

「ティアナ、ヴィータ、アウトー」

テ「いった！」

ヴィ「ぎゃん！あうううう…」

「ああ、すまんな、すっかり忘れてたよ。ん～大食い以外で何か特徴はあるか？」

ス「えっとわかんないです」

「じゃあ『アホの子』だな、はい決まり！」

ドゥーエ「局長、会議の時間です」

「わかった、それじゃあみんなも頑張ってね。俺はつまんない会議に行ってくる。
　ほら、進め」ぱしんっ！

ティ「うぐぐ！！」↑ボールギャグ付き

「全員、アウトー」

ヴィ「なんでティーナの上に座ってんだよｗｗｗｗ」

は「扱いひでぇｗｗｗ」

エ「ははははは痛い！」

テ「椅子ｗｗｗ」

ス「もうやだｗｗｗ」

な「口になんか咥えてるしｗｗｗ」

シグ「次は６課に行くぞ」

は「６課？」

フェ「誰も使っていないし、ちょうどいいかなって」

な「なるほどね」

シグ「あ、レジアス中将、お疲れ様です」

レジ「うむ」↑スクール水着（女用）姿

「全員、アウトー」

は「やめてくれえええええいたあああ！」

な「腹が割れてるｗｗｗ腹筋すげえｗｗｗいったいの！」

エ「腹筋割れてるのにスク水とかやめちくれｗｗｗｗ」

テ「目が！目がああああ！お尻も痛い！」

ス「あひゃひゃひゃひゃｗｗｗｗ」

ヴィ「もうレジアス中将ネタはやめろｗｗｗ」

フェ「こんなのでへたってると６課で死んじゃうよ？」

全員「勘弁してくれー！」

番外編８：絶対に笑ってはいけない管理局、その１（後書き）

いやー、自分では面白いと思っても、他人は面白くないと思うことってよくありますよね、例えばこの小説みたいな。

自分の文才の無さがよくわかりました…

次回も続きます、はい

では

番外編9：絶対に笑ってはいけない管理局、その2

6課に向かっている車の中。

な「なんで2人ずつに分けて移動するんだろう？」

なのは、ヴィータは1番目の車に、はやて、エリオは2番目、スバル・ティアナは
3番目の車に乗って移動中である。

フェ「あーあー、みなさん聞こえますか？」

シグ「現在6課に向かって移動中だが、車の中でなら笑ってもかまわないぞ」

エ「本当ですか！？」

は「やった！」

フェ「ただし悲鳴はあげないでくださいね？」

な「悲鳴？」

ス「そんな、悲鳴なんてあげる気がしないね！」

テ「スバル、それフラグ…」

フェ「じゃあ私たちは先に6課で待ってるからね～」

シグ「がんばー」

一番後ろにいたフェイトとシグナムが乗っている車が急加速して他の3台を追い抜き、
あっという間に消えた。

は「はや…」

エ「なんか逃げるように行っちゃいましたね」

と、次の瞬間激しい銃声が道路を埋め尽くし、銃弾が車に当たって甲高い音を
立て始めた。

エ「うわあああああああ！！！」

ヴィ「なんだよ！？」

は「銃撃！？」

警備「攻撃を受けています！しっかりつかまってください！」

3台の車は急加速してその場を離脱しようとしたが、後ろからも車が追いかけてくる。

ス「すごい！アクション映画みたい！」

テ「映画みたいにうまく逃げれるのかしらね！」

は「ちょ！前！交差点やん！スピード落とせ！」

誠に遺憾なことに、３台の車に乗っているのはミッドでも有名なレーシング
ドライバーであった。なので当然落とすわけもなく、ドリフトしながら交差点を右折した。

な「にゃあああああああああああ！！！」

ス「かっこいいいいいいいいいい！！！」

警備「このままではよくないので、それぞれ別ルートで６課に向かいます！」

次の交差点で、１号車は左に、２号車はまっすぐ、３号車は右に曲がった。

１号車

な「もう後ろにいないの！」

ヴィ「まいたか？」

警備「横です！」

横から敵の車両が現れて窓から自動小銃で攻撃してくる。

ヴィ「うわあああああああああ！！！」

な「にゃあああああああああ！！！」

警備「しつこいな！」

な「あ！前！」

なのはにつられてヴィータも前を見ると、なんと違法駐車中の車が道路を
半分ほどふさいでいるではないか。

ヴィ「あれじゃ通れねえ！」

だが。

警備「心配ご無用！」

運転手はそのままアクセル全開で突っ込んでいく。

な「むちゃくちゃなの～！！」

ヴィ「ぶつかるぞ！！」

そんな時にフェイトから通信が。

フェ「言い忘れていたけど、敵に捕まったらお尻を１０回たたかれるからね？」

な「にゃあああああああ！！！」

２号車

警備「畜生！いつまで追ってくるんだ！」

は「まだふりきれんの！？」

警備「今安全なルートを検索中です！」

エ「また撃ってきますよ！」

は「ひえええええええ！！」

こっちは近くの道路で待ち伏せを食らって3台の中で一番被弾率が高かった。

警備「出ました！このルートで行きます！」

そう言って車は現在建設中の橋に向かって行った。

は「待てい！この先の橋はまだ出来てないはずや！」

警備「そうです！こちらからも質問よろしいですか！」

は「なんや？」

警備「お2人とも、泳げますよね？」

エ「まあ、少しは…ってなんでそんなこと聞くんですか！？」

警備「…（ニヤリ）」

は「それはあかん！それだけはあかんで！」

エリオが外を眺めていると、１つの看板が見えてきた。それを読んだエリオは
発狂しかけた。

看板「この先建設中につき、立ち入り禁止！」

３号車

ス「ティア！今度はヘリコプターも来たよ！」

テ「嘘でしょ！？」

３号車は、運転手の腕がよかったので敵車両をまくことに成功した。
ところが今度は
ヘリコプターが追いかけてきた。そのヘリコプター、ＨＨ－６０ペイブ・ホークの
Ｍ－１３４　７．６２ｍｍガトリング銃、通称ミニガンが火を噴き、
３号車は銃弾の嵐に襲われた。

テ「きゃあああああ！！」

ス「うひゃあああああああ！！」

警備「まずい！退避だ！」

運転手はあわてて近くのビルの地下駐車場に逃げ込んだ。

警備「いくらこの車が防弾車でも、あんなので撃たれ続けたらかなわんよ」

ス「どうするの？」

テ「あのヘリコプターが消えるまでここにいないとね」

そうは問屋がおろさなかった。

？？？「動くな！全員車から出ろ！」

地下駐車場のいたるところから黒い戦闘服を着た集団が現れ、自動小銃から

ロケットランチャーまであらゆる兵器を3号車に向けていた。

ス「えええええええ！！」

テ「詰んだわね」

3号車、捕獲。

1号車

警備「おらあああ！！」

道路をふさいでいる車にぶつかる寸前に、運転手がハンドルを操り、段差に乗り上げて
そのまま右側の車輪を浮かせながら、半分ふさがっている道路を走り続けた。
いわゆる片輪走行である。車軸に強い負荷がかかり、失敗すると横転するので
ドリフトより危険で難しい。

ヴィ「すげえええええええ！」

な「敵はもうついてこないの！」

敵車両は当然そんなことができるわけもなく、ふさがっている道路の前で急停車していた。

こうして1号車は無事に6課にたどり着くことができた。

な「あれ？はやてちゃんとエリオだ」

ヴィ「ほんとだ、って！」

車から飛び降りたヴィータははやての所まで猛ダッシュ。

はやてとエリオは毛布にくるまって震えていた。

ヴィ「おい、はやて！なんでびしょ濡れなんだよ！？大丈夫か！？」

は「…あ、ヴィータ。うん、うちは大丈夫やで、えへへへ」がたがた

な「絶対大丈夫じゃないの！」

ヴィ「おいエリオ、何があったんだ？」

エ「じ、実は…」がたがた

～回想～

は「あああああああ！！！橋がないやんか！！！」

エ「やっぱりいいいいいいいい！！！」

警備「心配ご無用！あれを見てください！」

は「あれ？」

エ「あ！貨物船だ！」

近くを航行していた貨物船が、ちょうど橋をくぐろうとしていた。

警備「あの船の甲板に降ります！しっかり捕まって！」

エ「落ちるの間違いじゃうわあああああああ！！！」

は「いやあああああああ！！」

そのまま2号車は黄色いコーンをふっ飛ばし、橋の先っちょから飛び出した。

しばらくはそのまま前に向かって進んだが、重力が自己主張し始め落下した。

そしてうまい具合に貨物船の甲板に、

降りることなく、車はそのまま海に突っ込んでいった。

～回想おしまい～

エ「で、今に至ります」がたがた

な「ひでえ」

ヴィ「そっちじゃなくてよかった」

そこに1機のヘリコプターがやってきて、スバルとティアナが下りてきた。

ス「なのはさん！無事だったんですか？」

な「スバルにティアナ！なんでヘリから？」

テ「それが捕まっちゃいまして」

ヴィ「あー」

フェ「あ、みんな着いたんだ？無事でよかったよ」

みんな「全然無事じゃねえ！」

シグ「命あっての物種と言うじゃないか。それで罰だが」

フェ「えっと、なのはが3回、ヴィータが2回、はやてが3回、エリオも3回、
　スバルは捕まったから13回、ティアナも捕まったから11回ね！」

みんな「ぎゃあああああ」べちん！

シグ「では食堂に行こう。昼食の時間だ」

～食堂～

ス「やっとご飯だって！」

「ごーはん！ごーはん！」

ティ「ごーはん！ごーはん！」

ギ「ごーはん！ごーはん！」

3人がフォークとスプーンを持ってテーブルを叩いていた。

「全員、アウトー」

ス「ギン姉ｗｗｗいてええ！」

な「あれはせこいのｗｗｗあう！！」

は「やっぱりあいつらがいたｗｗｗ」

ヴィ「わかっていたのにｗｗｗいてえ！」

テ「もうお尻の感覚がいって！」

エ「でもあの気持ちはわかるｗｗ」

食堂のおばちゃん「お残しは許しまへんで！」

「いただきます！」

ティ「おいしいの！」

シグ「我々も食べるか」

な「いただきます！」

エ「……」

ス「……」

テ「ん？どしたのスバル？食べないの？」

ス「ティア、これ…食品サンプル…ふふｗｗ」

エ「くっｗｗｗ」

テ「ぶっｗｗｗ」

「スバル、エリオ、ティアナ、アウトー」

テ「いちいち言わなくてもいいのに！いたい！」

ス「だって聞いてきたんじゃん！うう！」

エ「お腹へったｗｗｗいたい！」

「お、ジェイル」

ジェ？「やあウィル。トイレってどこだっけ？」

「そこ曲がって右だ」

ジェ？「そうか。ありがとう」

な「今のジェイルさん？」

ス「なんか違和感が…」

ジェイル？がトイレの方に行って１０秒後。

ジェ「ウィル！今ここを私が通らなかったか！？」

「え？何言ってんだよ、トイレがどこかって俺に聞いたじゃないか」

ジェ「馬鹿野郎！そいつがフェイクだ！」

な「ぷっｗｗｗ」

は「ははははｗｗｗ」

「なのは、はやて、アウトー」

な「ルパンネタｗｗｗ」

は「ちくしょうｗｗｗｗ」

ス「ルパン？ティア、知ってる？」

テ「聞いたことないわね」

エ「僕も知りません」

ヴィ「ああ、地球のアニメだな」

午後。

シグ「まず医務室に行くぞ」

な「医務室？」

言われたままに医務室についていくと、シャマルが待っていた。

シャ「はい、じゃあ今日は医学について勉強しましょう」

は「医学？」

シャ「そうでーす。で、ここに3つの死体を用意しました。これを使って実験をします」

エ「死体！？」

ス「だ、大丈夫なんですか？」

シャ「大丈夫よ、さっき殺したばかりだから新鮮よ♪」

「はやて、ティアナ、アウトー」

は「シャマルがやったんかいｗｗｗｗ」

テ「殺したてとかｗｗｗｗｗ」

シャ「で、まず1つ目は」

死体袋のファスナーを開ける。

シャ「パイロット」

ヴァイス・グランセニックであった。

ス「あはははははｗｗｗｗ」

「スバル、アウトー」

ス「ヴァイスさんｗｗｗｗｗ」

シャ「次がKY」

クロノ・ハラオウンだった。

は「ぶっｗｗｗ」

な「にゃはははｗｗｗ」

ヴィ「ふはっｗｗ」

「はやて、なのは、ヴィータ、アウトー」

は「クロノ君までｗｗｗいたいよ！」

な「もう誰が来ても驚かないのｗｗｗ」

ヴィ「だなｗｗｗ」

シャ「で、最後が今日捕まって死んだ淫獣」

ユーノ・スクライアだった。

な「ユーノ君ｗｗｗ」

「なのは、アウトー」

な「にゃはははははｗｗｗ」

は「危ないとこやった」

ヴィ「セーフ」

シャ「じゃあまずは、このろうそくを垂らしてみましょう」

と言って持ってきたのは、火が付いている赤のＳＭ用ろうそく。

エ「良いんですか！？」

シャ「大丈夫ですよ」

ぽたっ　ぽたっ

ヴァイス「…（ビクンッ！）」

テ「ふふふふふｗｗｗｗ」

エ「あっはっはっはっはっはｗｗｗ」

「ティアナ、エリオ、アウトー」

テ「ぴくぴく動いてるｗｗｗ」

エ「生きてんじゃんｗｗｗｗ」

シャ「じゃあ次はクロノ君ね」

ぽたっ　ぽたっ

ク「…（しーん）」

は「すごい、ピクリとも動かないで」

な「さすがクロノ君だね」

シャ「エイミィとのプレイで慣れているのかしら」

「はやて、なのは、ヴィータ、ティアナ、スバル、アウトー」

は「慣れてるってｗｗｗｗ」

な「エイミィさんＳなのｗｗｗｗ」

ヴィ「Ｍクロノｗｗｗｗ」

テ「さいてーｗｗｗｗ」

ス「プレイｗｗｗｗｗ」

エ「プレイ？」

テ「エリオはまだ知らなくてもいいんだよ」

シャ「じゃあ６本同時にたらしましょうか」

は「まじで！？」

シャ「マジで♪」

ぼたぼたぼた

ク「ううううんんん！！」

「全員、アウトー」

ヴィ「あはははははｗｗｗいたいって！」

は「声がｗｗｗｗ」

エ「あんな声反則ｗｗｗｗ」

シャ「次は淫獣ね」

ぽたっ　ぽたっ

ユ「ぎゃああ！！」

シャ「あ、顔にたらしちゃった」

「全員、アウトー」

ス「ひどいｗｗｗ」

テ「シャマル先生、どＳｗｗｗｗｗ」

な「かわいそうｗｗｗｗ」

は「もうかんにんして～ｗｗｗ」

シャ「次はこのスリッパで叩いてみましょう。もちろんピクリとも動きませんよ」

そう言ってシャマルはクロノの頭に思いっきりスリッパを叩きつけた、それも何度も。

ばちんっ　ばちんっ

ク「…（しーん）」

ヴィ「動かないな」

シャ「ちっ、Mが」

ス「ふふふっｗｗｗ」

な「ははっｗｗ」

「スバル、なのは、アウトー」

ス「したうちｗｗｗｗ」

な「もうやだｗｗｗｗ」

シャ「次、ヴァイス君ね」

ばちんっ

ヴァ「ぐううう！！」

は「う、我慢や」ぷるぷる

エ「あ、危なかった」

シャ「最後に淫獣」

ばちんっ

ユ「おうふ！！」

テ「耐えるのよ、ティアナ…ここが正念場よ！」

「全員セーフ」

シャ「最後にこのパイを顔に投げつけてみましょう」

何のためらいもなく、シャマルはヴァイスの顔にパイを叩きつけた。

べちゃっ

ヴァ「……」

エ「うわぁ…」

は「えげつないわ～」

シャ「次はＫＹね」

べちゃっ

ク「ぶっ！」

ス「なんか動いてますよ？」

シャ「目の錯覚よ。最後に淫獣。１個じゃ物足りなさそうな顔だから、３個パイを
　投げつけましょう」

べちゃっ×３

シャ「で、こうして口と鼻をふさいでと」

ユ「ぐほお！！」

は「だめだｗｗｗｗ」

ヴィ「あっひゃっひゃｗｗｗ」

「全員、アウトー」

ス「ほんとひどすぎるｗｗｗ」

テ「あれじゃ我慢できないわよｗｗｗｗ」

エ「明日まで尻が持たないｗｗｗ」

シャ「とまあこんなところかしらね」

シグ「今日はありがとうございました」

フェ「みんな、何か学んだかな？」

するとエリオが挙手。

シグ「はいエリオ」

エ「その、死にたくないって思いました」

な「にゃははははｗｗｗ」

「なのは、アウトー」

な「確かにｗｗｗいいいいたい！」

フェ「じゃあ夜までのんびりしててね」

次回に続く…

番外編9：絶対に笑ってはいけない管理局、その2（後書き）

シャマルのネタは「絶対に笑ってはいけない警察」から。

次回で終わりにします。

では

番外編１０：絶対に笑ってはいけない管理局、その３

夜。

ス「おなかへったー」ぐてー

エ「ですねー」ぐてー

６人は会議室でぼんやりしていた。

な「いつまで待てばいいんだろう？」

ヴィ「さあな」

は「にしてもさっきのはおもろかったなあ」

テ「ハラオウン提督がドＭだったなんて…ふふっｗｗｗ」

ヴィ「ひひｗｗｗ」

「ティアナ、ヴィータ、アウトー」

ヴィ「言うなよｗｗｗｗあう！」

テ「だってｗｗｗｗにゃん！」

ガラッ

ヴィヴィオ「夕食でーす」

カナ「持ってきたぞ」

イクス「お届けー！」

3人娘がカートを押しながら部屋に入ってきた。

ス、エ「待ってました！」

ヴィヴィオ「これがなのはママの！」

な「ありがと！」

イクス「これはティアナお母様の分！」

テ「ありがとう」

カナ「これははやて母上のだな」

は「やった！」

ヴィヴィオ「でこれはヴィータママのだよ！」

ヴィ「さんきゅー」

イクス「じゃあねー」

ス「あたしのは！？」

エ「僕のも！」

カナ「えっと父上曰く、

『食費半端ねえからお前ら飯抜きな』

だと」

ス、エ「」

カナ「だが我々娘たちはやさしいので、代わりの夕食を持ってきたぞ」

ス「やったあああああ！！」

イクス「はい、エリオの分！」

エ「ありが…と？」

皿の上にはバナナの山。

テ「ふふっｗｗｗ」

「ティアナ、アウトー」

テ「バナナだけとかｗｗｗｗいたい！」

カナ「これがスバル母上のだ」

ス「……ふふふふふｗｗｗｗ」

ヴィ「ぶっｗｗ」

「スバル、ヴィータ、アウトー」

ヴィ「なんで生卵ｗｗｗｗあう！」

ス「卵だけでどうするのよｗｗｗ」

カナ「飲め」

な「にゃはははははｗｗｗｗ」

「なのは、アウトー」

な「カナリアが冷たいｗｗｗｗｗ」

ヴィヴィオ「じゃーねー。あ、エリオ！」

エ「ん？なに？」

ヴィヴィオ「バナナが足りなくなったら、そこの引き出しに入っているからね」

「全員、アウトー」

は「なんでやねんｗｗｗｗ」

ス「もうやだｗｗｗｗ」

エ「あ、ほんとに入ってる」

夕食後。

ガラッ

ツ「みなさん、ついてきて下さい！これから6課の周辺をパトロールしますのです！」

は「パトロール？」

外。

ツ「まずは海岸沿いをパトロールです」

ス「夜の海っていいね」

テ「そうね、ふふふはははwwww」

「ティアナ、アウトー」

ス「どうしたの？」

テ「誰かがサーフィンしてるwwwww」

な「まさか、気のせいじゃ」

レジ「ははは！楽しいじゃないか、サーフィンとやらは！」ざぱーん

「なのは、スバル、ヴィータ、はやて、エリオ、アウトー」

な「こんな夜にサーフィンwwww」

は「てかまだスク水着てるしwwww」

ヴィ「しばらくあの人まともに見れねえｗｗｗ」

ツ「むむっ！怪しい人です！」

エ「ん？釣りですかね？」

誰かが釣り竿らしきものを海に向けている。

は「もうちょっと近づいてみる？」

ス「あれ、お父さんだ！」

テ「え？」

な「ゲンヤ三佐？」

その人はゲンヤ・ナカジマであった。

なのは達が見ている中、ゲンヤは釣り竿を思いっきり上に引き上げた。

すると釣り針には長靴がついていた。

テ「…まあよくあるパターンよね」

は「釣り針に長靴はねえ」

ゲンヤ「つれないな…やり方を変えるか」

ヴィ「やり方？えさでも変えるのか？」

ゲンヤはクーラーボックスの中から細長い筒状の何かを取り出した。

な「なにあれ？」

そしてマッチを擦って火を起こし、筒状の物体からのびている紐っぽいものに
火を付けた。

は「ちょっと待ち。あれって」

ゲンヤは導火線に火を付けたダイナマイトを海に向かって放り投げて両耳を押さえた。

次の瞬間、轟音と共に水が上に向かってはねた。

な「にゃあああああ！！」

そして水面にはダイナマイトの爆発で気絶、もしくは死亡した魚がぷかぷかと
浮かんでいた。

ゲンヤ「おっしゃあ！大漁大漁！ざまあみろ、人間様に勝てると思うなよ！」

「全員、アウトー」

ス「あれはお父さんじゃないｗｗｗｗｗ」

は「キャラがかわっとるｗｗｗｗ」

食堂に戻って。

フェ「じゃあみんなは今日ここで寝てね」

な「えええええええ！！！」

シグ「心配するな、布団を用意した」

テ「ううう、でも仕方ないわね」

エ「あ、キャロ」

キャ「……」

エ「？どしたの？」

キャ「エリオ君の変態！チャックあいてる！」

エ「マジで！？」

キャ「嘘だぴょ～ん」

エ「ふふふふｗｗ」

「エリオ、アウトー」

エ「だまされたｗｗｗｗｗ」

シグ「ではまた明日」

フェ「おやすみー」

な「やっと寝れるの」

は「そうやな～」

ザフィ「あお～ん」

ヴィ「ん？」

ス「犬？」

ザフィ「あお～ん」

テ「あ、ザフィーラさんか」

は「なにやってんのや」

ザフィ「あお～、ごほっ！ごほっ！」

は「ぶっｗｗ」

「はやて、アウトー」

は「せきすんなしｗｗｗｗ」

その時、スピーカーから別の声が。

シグ「わ、私はシグナムだにゃん♪」

テ「ぷっｗｗｗ」

エ「ははははｗｗｗ」

「ティアナ、エリオ、アウトー」

エ「シグナム副隊長ｗｗｗｗ」

テ「何言ってんだｗｗｗｗｗｗ」

シグ「は、早く寝ないと、お仕置きしちゃうゾッ☆じゃあね～♪」

な「…ふふｗ」

「なのは、アウトー」

な「あの声やめてｗｗｗｗ」

シグ「…なんで私がこんなことしなきゃいけないんだ！／／／」

「いいじゃねえかたまには。かわいい声だったぞ？」

シグ「うがー！！！死んでしまいたい！レヴァンティン！」

フェ「ちょ、シグナム！レヴァンティン振り回さないでよ！」

シグ「誰か私を殺せー！！！」

「あ、マイクつけっぱだった」ぶつっ

「全員、アウトー」

な「ひどいｗｗｗｗぎゃん！」

ヴィ「シグナムｗｗｗｗあう！」

は「普通に寝かせてｗｗｗｗ」

１０分後。

テ「（もうなにもなさそうね）」

ス「（静かだ～）」

だが、またスピーカーから声、もとい絶叫が。

ティーダ「ティアナあああああああ！！愛してるぞおおおおおおお！！！」

テ「なに！？」

な「にゃ！？」

ティーダ「ティアナあああああああああ！！愛してるぞおおおおおおお！！！」

エ「…ＺＺＺ」

ヴィ「…ｚｚｚ」

ティーダ「ティアナあああああああああ！！愛してるぞおおおおおおお！！！」

テ「ふふふふふふｗｗｗｗ」

ス「あはははははｗｗｗ」

「ティアナ、スバル、アウトー」

テ「しつこいｗｗｗｗ」

ス「シスコンｗｗｗｗ」

さらに１０分後。

エイミィ「ほらほら、これがいいんでしょ！」ばちんっ！

ク「はい！ご主人さま！もっと叩いて下さい！」

「なのは、スバル、はやて、ティアナ、アウトー」

な「クロノ君ｗｗｗｗｗ」
す「もうやめてｗｗｗｗ」
は「エイミィさんＳやｗｗｗｗ」
テ「エリオが寝てて良かったｗｗｗうう！！」

ちゅんちゅん。
翌朝。

「起きろ、起きろ、起きろおおおお！！」がんがんがんっ！！！
鉄製のゴミ箱を叩きながらウィリアムが食堂に入ってくる。

な「な、なにごと！？」

エ「うわああ！！」

「エリオ！マスかきやめ！パンツ上げ！」

「なのは、はやて、アウトー」

な「朝から下品ｗｗｗｗ」

は「さいてーやｗｗｗｗｗ」

「さて、飯を食べる前に掃除をするぞ！なのは、ヴィータはここ！スバル、
はやては廊下！　エリオとティアナはトイレだ！特にトイレはピッカピカに
磨き上げろよ？聖王や冥王でもクソしたくなるようにな！」

ヴィヴィオ、イクス「呼んだ？」

は「何ちゅう例えや」

男子トイレ

エ「はぁ、疲れた。これくらいでいいかな」ぴっかぴか

エ「あれ、でもよく考えたらヴィヴィオもイクスも女子トイレだから
こっちきれいにしても意味ない…ふふふｗｗｗｗ」

「エリオ、アウトー」

エ「なんでわらっちゃったんだろｗｗｗｗいたいお！」

朝食！

ス、エ「がつがつ…」

な「普通の食事だ」

は「おいしいな」

ヴィ「ぎがうま！」

テ「あ、ニュースだ」

キャスター「昨夜、沿岸部で爆発物を海に向かって投げていた時空管理局の
陸士１０８部隊長、ゲンヤ・ナカジマ容疑者を逮捕しました。
取り調べで彼は『釣りをしていた』と供述していると

のことです」

「全員、アウトー」

ス「お父さん捕まったｗｗｗｗｗ」

テ「ダイナマイト漁なんかするからｗｗｗｗｗ」

～地上本部、局長執務室～

「やあみんな、ご苦労だったね。今日でおしまいだよ」

ティ「お疲れ様！」

エ「あ、椅子じゃない」

な「ぷっｗｗｗ」

「なのは、アウトー」

な「エリオ、言わないでよ！いた！」

「これからもよろしく頼むぞー」

ドゥーエ「局長、会議の時間です」

「また会議だ、いやんなっちゃうね。あ、地上本部の出口を抜ければおしまいだからな」

みんな「はーい」

「じゃ行ってくる」

は「ふふふふふｗｗｗｗ」

ヴィ「あははっはｗｗ」

「全員、アウトー」

テ「なんでふんどしｗｗｗｗ」

ス「せこいｗｗｗｗ」

エ「不意打ちだｗｗｗ」

な「もうひどいｗｗｗｗ」

フェ「みんな、お疲れ！」

シグ「ここを通ればおしまいだぞ」

な「な、長かったの」

エ「色々と疲れましたね」

ヴィ「全くだ！」

ス「じゃあみんなで同時に通りましょう！」

テ「賛成！」

な「じゃあ手をつないで…」

は「ええか？じゃあ」

みんな「せーのっ！」

シグ「シグナムだにゃん♪」

みんな「ぶっｗｗｗｗ」

「全員、アウトー」

は「しぐなむうううううあうう！！」

ヴィ「てめえｗｗｗｗ」

な「やられたｗｗｗｗｗ」

フェ「あ、ジェイルだ」

ジェ「やあみんな」↑ビキニ姿

「全員、アウトー」

ス「気持ち悪ｗｗｗｗ」

テ「あれはだめでしょｗｗｗｗ」

エ「グロ指定ｗｗｗｗｗ」

は「早く出るんや！」

以上でおしまい！

誰が何回たたかれたかは計算するのがめんどいので書きません！

は「うぃーるーくん？次は君の番やで？」

ヴィ「シグナム、おめえもだ！！」

シグ「私がなんであんなセリフを…」

な「今度はフェイトちゃんがやる番だからね？」

「だが断る！」

番外編１０：絶対に笑ってはいけない管理局、その３（後書き）

なんかぐだぐだのまま終わりました。

次回もまたいつも通り適当です

では

第８２話：新たな１歩、そして新たな問題

６課が解散して、メンバーはそれぞれの道を歩むようになった。
なのはは戦技教導官として新人相手に「お話」をする毎日、フェイトは執務官として
次元航行部隊に、はやてとヴォルケンズは特別捜査官に、ティアナはシャーリーと
一緒にフェイトの補佐官に、スバルは特別救助隊へ、エリオとキャロは自然保護隊に、
ヴァイスはアルトと共に地上本部のヘリとラーティのパイロットとして勤務しながら、
返納していた武装局員資格を再取得し、武装局員としても勤務できるようになった。
その為、武装隊の緊急任務の際に指名を受ける事が多いとのこと。
２次会で酔っぱらった拍子に告白したグリフィスは、ルキノと一緒に本局次元航行部隊でよろしくやっている。

ナンバーズのことは前に書いたから省略。

とまあ、こんな感じでのんびりと時間は過ぎていったのだが。

～６課が解散して１ヶ月後、地上本部～

中央指令室では局員が仕事をしつつも談笑をしていた。

局員Ａ「そういえば３日前にまた船が沈んだんだって？」

局員Ｂ「そうそう。貨物船がひっくり返ってぽちゃんだとさ」

局員Ａ「原因はなんだったんだ？」

局員Ｂ「さあね。乗組員は全員無事だったらしいが」

と、その時。

局員Ｃ「クラナガン沖３０？地点からＳＯＳ信号！民間貨物船です！」

局員Ａ「またかよ！？」

局員Ｂ「何を積んでいる？」

局員Ｃ「えっと、げ」

局員Ｂ「嫌な予感しかしないな…」

局員Ｃ「…産業廃棄物がたっぷりです」

ＡＢＣ「最悪すぎる！！」

「落ち着け、諸君」

局員Ａ「きょ、局長！」

「今海上にいる部隊はいるか？」

局員Ｃ「少々お待ちを…あ！特別救助隊が訓練中です！」

「訓練中か…行かせるべきか…」

局員Ｂ「局長、その特別救助隊から通信です」

「つなげ」

ス「ウィルさん！！」

「うるせえ！！ってスバル、なんでそこにいる！？」

ス「訓練中だったんですよ～。それはそうと、なんか船が沈みかかっているので
私が行ってきます！じゃ！」

「待てい！お前まだ訓練中だろうが！担当教官を出せ！」

教官「あ、局長、それがナカジマの奴、あっという間に行っちゃいまして…」

「うがあああああ！！！俺も出る！！」

ス「うひぇ～これはひどいな～」

自前のパワーと根性で船の近くまで泳いで行ったスバルの前で、貨物船は
艦尾から少しずつ沈んでいく。既に救命ボートが幾つも浮かんでいるので、
乗組員は無事に脱出できたようだ。

ス「ていうか船に入れないや」

今さら言っても遅いことを口にしながら、中身があまり（ほとんど）ない頭を
回転させ、どうしたらいいかなと考えていると、ラーティが3機、編隊を
組んで飛んできた。真ん中の黒い機体がスバルのすぐ横まで下りてくる。

「おいスバル！乗れ！」

ス「ウィルさん！」

「ったく何も考えずにすっ飛んできやがって」

ス「ごめんなさい」

そんな会話をしている間に、残りの2機が乗組員を救出している。

「でだ、あれを沈めるわけにはいかん」

ス「なんでですか？」

「あの中には産業廃棄物がたんまり積んであるそうだ。そんな船をこんなところで
沈めたら大変なことになる」

ス「なるほど！」

「おまけにこのままあの船が沈むと、海の底に設置したシールドジェネレーターの
1つにぶつかることが分かった。あれが壊れるとミッドチルダ防衛システムが
意味をなさなくなる」

ス「やばいですよそれ！」

「だから急いで飛んできたんだよ！そこでだ、カナリア！」

ス「え？」

カナ「やっと仕事か、父上。くたびれたぞ」

「んなこと言うなって。終わったらパフェ食わせてやる」

カナ「よし、ちょっと本気出す」

「おい！乗組員は全員救出したのか？」

パイロット「救出完了です！」

「分かった。じゃあカナリア、派手にやれ」

カナ「了解した、父上。あらよっと」

カナリアが指を鳴らすと、沈没中の貨物船を中心にあっという間に海が凍りついた。
半径1？のドでかい流氷が完成したのであった。

ス「」

カナ「こんなものか」

「よくやった、えらいぞ～」なでなで

カナ「えへへへ」

「じゃあ帰るぞ。あれはそのまま沿岸部まで船で引っ張って持ってこい」

ス「あれ、私は？」

「お前はまだ訓練中だろうが。さっきの訓練エリアまで送っていくよ」

～翌日、地上本部会議室～

レジ「このところ連続して貨物船等が沈没するという妙な事件が多発しておる。
　昨日は海ごと凍らせたからなんとか沈まずに済んだ」

オーリス「その後、氷を溶かして船を調べたところ、船体後部、機関室付近に
　大きな穴があいてました」

「機関室内部からの爆発か？」

オーリス「いえ、外部からのものです。おそらく高性能爆薬でしょう」

「魚雷攻撃か、もしくは港で爆弾を付けられたか、そんなところか」

レジ「どうする？」

「とりあえず海上警備の強化、並びに危険物を運搬する貨物船には警備艇を
付けよう」

オーリス「了解しました」

オーリスが書類をまとめて出て言った後。

レジ「で、本当のところ、誰がこんなことをしていると思う?」

「貨物船狩りの犯人ねえ…別に積荷を奪うわけでもないし、乗組員を殺さないように
威力の少ない爆弾を使っているし、わけわからんな」

レジ「犯人の目的が不明ではどうにもならんか」

「そゆこと。だが既に5隻も沈められてるからなんとかしないとな。
今はジェイルが作っている新しい船の完成待ちだ」

レジ「新しい船?」

「海上警備のための新造船だ。かっこいいし強いぞ~」

レジ「お前が作る兵器はほとんど無敵だからなあ」

「そう簡単には沈まないように出来てるよ。確か3日後に完成するんだったかな。

乗組員の育成も完璧だし」

レジ「それは楽しみだ」

～夜、ウィルの家～

ス「たーだーいーまー」

咲夜「お帰りなさいませ、スバル様。お疲れのようですね」

ス「教官に絞られたー」ぐてー

咲夜「夕食の準備はできております」

ス「やった！！」

な「あ、スバルおかえり～」もぐもぐ

カナ「今日は全く活躍してなかったな」

ス「ぐさっ！帰ってきていきなりそんなこと言わないでよ！」

ヴィヴィオ「次は頑張ってね～」

ス「ううう…」

は「しかしなんで船ばっかり沈めるんやろうな？」

ヴィ「船が嫌いなんじゃねえか？」

シグ「だから船を沈めるか？それはないだろう」

シャ「管理局に敵対する組織の犯行とかは？」

ザフィ「そうだとしたら普通は民間の船ではなく、管理局の船を沈めるだろう」

アリサ「それもそうよね」

すずか「まあ今度新しい船ができるし、それで警備すれば何とかなるんじゃないかな」

ヴィ「新しい船？」

すずか「うん。技術本部でジェイルさんとウィルが考案したの。3日後には完成するよ」

な「へぇ～すごいね」

「実はもう進水式は済んでいてね。今は武器を乗っけてるところだ。ま、あくまで警備艇だから武装は最低限だがな。3日後にマスコ

ミに
　発表して、そのまま航海に出る予定だ。俺も乗るんだ」
ギ「ウィルさんが言う『最低限』って、私たちにとっては『オーバースペック』
　じゃないですか？」
みんな「そうそう」
「き、気のせいじゃないか？なあイクス？」
イクス「え、あ、気のせいですね！」
「なにその、え？って」

～同時刻、クラナガン某所～

？？？「ほう、管理局の新しい警備艇か…」

？？？「これ沈めたらインパクトでかいんじゃない？」

？？？「そうだな。管理局は我々を探そうと躍起になっているらしい。なら
　こちらから出向いて行ってやろうではないか」

？？？「いい考えだね！」

彼らの後ろにはでっかい何かが桟橋につないであった。

次回に続く～

第８２話：新たな１歩、そして新たな問題（後書き）

アニメでは、管理局が海をどう警備しているのかが書いてなかった気がするので
こんなのを書いてみました。

次回はおにゅーの船が登場します。

では

第８３話：おにゅ～のお船

～３日後、沿岸部のドック～

マスコミ「えー、本日はミッドチルダ沿岸警備隊の新造船のお披露目とあって
　たくさんの報道陣や民間人の方々が集まっています」

ががやがや

やじ馬Ａ「どんな船なんだろうな？」

やじ馬Ｂ「なんでも管理局の技術本部が考案した船らしいぞ！」

やじ馬Ｃ「ていうか沿岸警備隊自体、管理局の組織の１つだしな」

やじ馬Ａ「おい、あれ！ミッドの守護神じゃないか！？」

マスコミ「今から時空管理局局長、ウィリアム・Ｔ・ロンバート大将が演説を
　行うとのことです」

「はいはいど～も。局長のロンバートです。本日は集まっていただきありがとう
ございます。えー、最近貨物船を中心とした沈没事件が数多く発生していることは

みなさんもよくご存じかと思います。調査の結果、水中からの魚雷攻撃によって
沈没したということがわかりました。つまり民間人を質量兵器で攻撃したと
いうことです」

やじ馬Ａ「まじかよ！？」

やじ馬Ｂ「魚雷で攻撃なんて！」

「そこで我々管理局は沿岸警備隊の強化を考えました。第１に警備の強化。
第２に訓練内容の強化。そして第３に船の強化です。今日みなさんにお見せする
船には質量兵器が搭載されています。このことにはあまり好感が持てない、
という人もいるかと思います。しかし、敵が質量兵器で攻撃した場合、
こちらも質量兵器で攻撃すると、以前私は言いました。今も、そして
これからもこのやり方でやっていきます。そこで今回の貨物船撃沈事件の
犯人に告げます。もし魚雷で民間船をまた攻撃したら、次は容赦なく
吹っ飛ばす。覚悟しとけよ？」

やじ馬Ｃ「お～こえ～」

「しかし、こちらが質量兵器を使用する時は、あくまで質量兵器で攻撃された時

のみです。なのでみなさんに約束いたします。我々は正当防衛時以外では
質量兵器を使用しません！ではそろそろ船のお披露目の時間です。
みなさん、右のドックをご覧ください！」

マスコミ「遂に新造船のお披露目です！」

～屋敷、リビング～

非番のはやてとヴォルケンズがテレビ中継を見ていた。

ヴィ「どんな船なんだろな？」

は「早くて強いんやないか？」

シャ「きっとかっこいいんじゃない？」

シグ「警備艇と言ってたからそこまで派手じゃないだろう」

ザフィ「ま、すぐにわかるな」

「まず1番ドックから出てきたのが、マキナ級高速ミサイル艇です。
これは

対艦ミサイルによる対艦戦、機雷敷設、ソナーを備え対潜水艦戦など多用途に
使用できるように設計されています。３点水中翼システムで油圧ジェット推進
機関を保有、最大速力は６０ノット以上です。乗員は２６名、兵装は５７ｍｍ７０口径
単装速射砲２基、４０ｍｍ魔力ビーム砲２基、１２．７ｍｍ機銃２挺、多目的ミサイル
ＶＬＳ（８セル）１基、エグゾセ対艦ミサイル発射筒４基、９連装対潜ロケット弾
発射機４基、対魚雷ロケット発射機２基、機雷兼爆雷投下軌条１基です」

マスコミ「」

やじ馬「」

～屋敷、リビング～

は「」

シグ「」

シャ「」

ヴィ「」

ザフィ「やはり過剰戦力だな」

カナ「だが良い船体をしているな」

イクス「かっこいい！」

ヴィヴィオ「強そうだね」

「次に2番ドックから出てくるのは、カフカス級巡視船です。ラーティを2機搭載し
広範囲にわたる海域を迅速に対処できるように設計しております。
速力は35ノット、
乗員は71人、武装は40mm単装砲2門、20mm機関砲2門、
30mm魔導砲2門、
533mm魚雷発射管が10基、対魚雷ロケット発射機が2基です」

やじ馬A「さっきより大きいけど武装は全然ないな」

やじ馬B「あのラーティとかいう飛行機がフル武装だからじゃね？」

「で、次に紹介するのは船、じゃなくて潜水艦です」

3番ドックから出てきたのは、黒い船体の潜水艦だった。

「バーバリアン級潜水艦。動力源は小型化した魔導炉で、船殻がセラミックス混合
アルミナ。いわゆる傾斜機能合金製で最大潜航深度はなんと１６，０００ｆｔ
（４，８００ｍ）。水中最大速力５５ノット。無音最高速力２５ノット。乗組員１２０人。
ワイド・アパーチャ・アレイと、左舷には長さが半マイルの細線（シン・ライン）ＴＢ－２９曳航アレイ、右舷には太線（ファット・ライン）ＴＢ－１６Ｄ曳航アレイを装備。
ヒドラジン・ガス発生機による非可逆的な非常ブローが可能。魚雷発射管は８基。
トマホークＳＬＣＭ用ＶＬＳ１２基。もし敵が潜水艦だったらこいつで叩きます」

マスコミ「あの、過剰戦力では？これでは沿岸警備隊じゃなくて海軍に
なっちゃいますよ？」

「昔の偉い人はこう言った。『大は小を兼ねる』と」

マスコミ「えー」

「こまけえこたぁいいんだよ！では出航！！」

～屋敷、リビング～

は「いや、それは違う気がするで！」

シグ「潜水艦には潜水艦で、か…間違ってはいないな」

ヴィ「あれだけもっていけば犯罪者もこてんぱんになるだろうな！」

ザフィ「まあウィルのことだから大丈夫だろう」

～クラナガン沖～

ここでもまた2人の人間がウィルの演説を聞き、新造船の様子を見ていた。

???「……えっ？」

？？？「いやいやいやいやこれはない！」

？？？「ごめん、ちょっと管理局をなめていたわ。てっきりもっと小さな船が
出てくると思っていたから」

？？？「私もだよ。だが退くわけにはいかん！」

？？？「そうね。やるしかないわ」

？？？「野郎ども！行くぞ！」

「おおーっ！」

ティ「うーみーは広いーなー大きいーなー♪」

「ご機嫌だな」

ティ「海って心が落ち着くの！」

「その気持ちはわからんでもないな」

俺とティーナはマキナ級高速ミサイル艇に乗っている。

ス「ウィルさん！」

ティ「え、スバルちゃん？」

「なんでお前がここに？」

ス「敵船乗り込み隊の隊長に抜擢されたんですよ！なんでも６課時代に前線で
　活躍したからとかで」

「ほう、すげえじゃないか！なでなでしてやる」なでなで

ス「うへへ～」

ティ「アホの子なのによく隊長なんかになれたわね」

ス「ううう、それは言わないでくださいよ！」

と、その時。

艦長「局長！ここから南に２０？の地点から救難信号です！」

「まじかよ」

通信士「こちら通信室。救難信号を発信している民間貨物船『マナサス』から

通信が入りました」

艦長「つなげ」

貨物船「こ、こちら『マナサス』！突然左舷後方で爆発があって機関室がやられた！
おまけに舵もイカれたみたいで航行不能状態だ！助けてくれ！」

艦長「こちら沿岸警備隊の『マキナ』艦長だ。今から救援に向かう。浸水状況は？」

貨物船「機関室が完全に浸水した。それ以外は無事だからすぐに沈みはしない」

艦長「了解した。局長？」

「大急ぎでいけ！最大戦速！」

艦長「『カフカス』と『バーバリアン』はどうします？」

「『カフカス』には最大戦速でついてくるように言っておけ。ラーティの発進準備も
させておけ。『バーバリアン』は無音最高速力でついてこさせろ」

艦長「了解！」

「エディ！『マナサス』のデータをありったけ集めとけ！」

「はいよー」

「スバル、乗り込み隊も準備させろ」

ス「了解！」

？？？「管理局は？」

？？？「もうすぐ到着するわ。うまく引っかかってくれたみたい」

？？？「では我々も攻撃準備だ！」

続く

第８３話：おにゅ～のお船（後書き）

もうね、いやんなっちゃうね。
やることが多すぎて頭がパンクしそうです。
あーもう何もしたくない。就職活動とかめんどい。

次回はあーだーこーだします。

では

第８４話：貨物船？いいえ、ケフィアです↑嘘（前書き）

サブタイトル考えるのだるい…

第８４話：貨物船？いいえ、ケフィアです↑嘘

マキナ級高速ミサイル艇は６０ノットというスピードで、貨物船『マナサス』に
向かっていた。

「エディ、『マナサス』の情報は？」

「えー、普通貨物専用のばら積み貨物船です。全幅３２．３１ｍ、全長２９４．１３ｍ、
５８，０００載貨重量トン、５つの船倉に４つのクレーンを搭載。建造されたのは
今から１０年前ですが、６年前にクラナガン港で機関室火災にあって売却
されました。買ったのは『アレキサンダー海運コンソーシアム』で、
買った後に全面的に改装したらしく、再建されたものは全長が３２０ｍに
伸ばして６６，０００トンになっています。クレーンは取っ払って船倉は
７つに増えています」

「ふーん、で、そのアレキサンダー海運については？」

「退役した管理局員が何人かで１０年ほど前に設立した小企業です。本社は
クラナガンから少し離れたところにあります。今現在保有している船は
３隻で、２隻は３０，０００トン級の貨物船で、クラナガン港を

中心に各地へ
定期運行されています」

「な～るほ～どね～」

艦長「局長、『マナサス』を目視しました！」

「よし、周囲に敵影は？」

ＣＩＣ「こちらＣＩＣ。レーダー、ソナー、共に異常ありません」

艦長「了解した。『マナサス』、こちら『マキナ』、応答せよ」

ところが貨物船から返事がなかった。

「あれ？無線壊れてなんかないもんな？」

艦長「そうですね、おかしいな。『マナサス』、聞こえないか？どうぞ」

その時、隣で双眼鏡をのぞいていたティーナが声をあげた。

ティ「…ご主人様、貨物船の艦橋に銃を持った人間が数人」

「はい？てことは既にあの貨物船は占領されたということか？」

艦長「ですが、あの船に接近する船や航空機等はこちらでは確認できません

でしたよ？」

ス「最初から貨物船に乗ってたんじゃないですか？」

「それだ！」

艦長「君、頭いいね！」

ス「えっへん！」

ティ「あのスバルが頭がいいって誉められてるよ…明日は核の雨が降るね」

「ともかくこっちも戦闘準備をしとかないといかんな」

艦長「そうですね。よし！総員戦闘配置！」

当直員「アイアイ・サー。総員戦闘配置。総員戦闘配置。全員、各自の
戦闘配置につけ。これは訓練ではない。くりかえす、これは訓練ではない」

艦長「副長、艦橋は頼んだぞ。私はＣＩＣで指揮を執る」

副長「了解です！」

「艦長、俺とティーナはここにいるからな」

艦長「かしこまりました」

艦内の戦闘情報センター（ＣＩＣ）では、複数のシステム・オペレーターが、
ミサイル艇の兵器を完全な臨戦態勢に置くために、一連の技術用語を復唱し始めた。

「主要砲塔の位置合わせ確認、前方及び後方」

「前方及び後方、昇降及び旋回、異常なし」

「操舵のＣＩＣへの移動を確認せよ。艦橋及び主機関の制御、待機せよ」

艦長「状況は？」

「本艦は総員配置につきました。全ての兵器並びに防御システムの準備を完了し、
オンライン操作になっています。艦長の命令を待ちます」

艦長「貨物船の内部には既に敵が潜入している可能性がある。まず、ゆっくりと
近づいて乗り込み隊の乗った小型ボートを貨物船に向かわせる。
もし敵の攻撃があった場合は反撃する」

「了解です」

ティ「どう思う、ご主人様？」

「ん～敵の目的はなんだろう？この前までは魚雷撃ってすぐにとんずらしていた
のに、今日に限って船を占拠した？なんかひっかかるな…」

「艦長、興味深い資料が」

「なんだ？」

「『アレキサンダー海運』なんですが、数年前に質量兵器保有の疑いで家宅捜索を
受けています。まあ何も出なかったんですがね」

ティ「質量兵器ね…」

ティーナは貨物船を眺めながらつぶやいた。偵察衛星によると、貨物船は
左舷に５度ほど傾いており、右舷をこちらに見せている。

？？？「右舷砲塔隠蔽板開放準備。エレベーター、スタンバイ」

？？？「右舷ミサイル発射機開放準備急げ！」

？？？「ムーン・プール、魚雷発射用意。４発一斉に撃つ。目標は『マキナ』」

？？？「対戦車班、準備よし！」

？？？「では始めよう！魚雷発射！」

～『マキナ』、戦闘情報センター～

ソナー「ん?貨物船の下で何かが落ちたような音が…やばい!
艦長!貨物船より高速スクリュー音!本艦に向かって
接近中!速力７０ノット!魚雷です!」

艦長「なんだと!?対魚雷ロケット発射!」

副長「ＣＩＣの艦長へ、こちら副長!貨物船を見てください!」

艦長「これは…!?」

モニターを見たＣＩＣの人々は口をあんぐり開けた。なぜなら
そこに映っているのはもはや貨物船ではないからだ。

さっきまで煙を吹いて止まっていた貨物船が突然動き始めた。
滑らかに加速し、魚雷攻撃を受けたとは思えない動きだった。
貨物船の右舷の鋼板の一部が2か所、外に向かって開き、中に収納
された。
そこにあったものは、７６ｍｍ６２口径速射砲だった。また別の場
所でも
鋼板が収納され、中から6連装対艦ミサイル発射装置がせり出てき
た。

ばら積み貨物船の場合、甲板にあるマクレガー式ハッチカバーは普通
折れて持ちあがるのだが、『マナサス』の場合、スライド式で左右に
開いた。そして下から上がってきたエレベーターには遠隔操作の無人
攻撃ヘリが乗っていた。

それらとは別に、近接火器チームも配置されていた。上部構造の手
摺には
対戦車ミサイルを担いだ人間が5人、再装填用ミサイルを抱えて待

機している
人間も5人いた。

地球の言葉で言えば、この貨物船はいわゆるQシップというやつだった。

『マキナ』は右に旋回しつつ、喫水線の下に埋め込んである発射機から、
ロケット弾を発射した。ロケットそのものの機動性は非常に高いが、有線誘導ではない。そのロケットが1秒間隔で4発発射された。

その間に主要砲塔が貨物船に狙いを定め、ＶＬＳのハッチが開き、エグゾセ対艦ミサイルの発射準備を始めた。

「おいおい、すげえな、あれ！貨物船が戦艦になっちまったぞ！」

ティ「喜んでいる場合じゃないでしょ！」

「おっとそうだった。副長、『カフカス』に連絡してラーティを出動させろ」

副長「了解です。あ、貨物船から発砲！」

「げ」

次の瞬間、高速で航行中の『マキナ』の周囲に次々と砲弾が撃ち込まれた。

ティ「うひゃあああああああ！！」

「やってくれるじゃないか、あのクソッタレめ！」

副長「撃ち返せ！」

艦長「全艦、撃ち方始め！」

その声と同時に、５７ｍｍ７０口径速射砲が１分間に８５発の発射速度で撃ち始めた。

と同時に、４０ｍｍ魔力ビーム砲が殺傷設定で放たれ、ＶＬＳからは多目的ミサイルが

飛び出し、船体中央にあるエグゾセ対艦ミサイルも発射機から斜め上に向かって

発射された。

？？？「敵の攻撃だ！撃ち返せ！」

『マナサス』からも砲撃に続いて、６連装ミサイル発射機から対艦ミサイルが
次々と発射され、『マキナ』に向かっていった。エレベーターから発進した
攻撃ヘリ7機は非誘導のロケット弾をばらまき、上部構造で待機していた
対戦車ミサイル兵も『マキナ』の艦橋や砲塔に狙いを定めて一斉に発射した。

その様子をヘリコプターで遠くから見ていたマスコミはびっくりしていた。

マスコミ「みなさん、たった今戦闘が始まったようです。貨物船と撃ちあって
いるように見えます」

～屋敷、リビング～

は「あれ？」

ヴィ「なんで貨物船に撃ってんだ？」

ザフィ「貨物船が敵だからだろう」

ツ「激しい戦いです！」

ア「地球で見た映像に似ているな」

シグ「第二次世界大戦の時の資料映像のことか？」

シャ「あの古い映像ね」

ヴィヴィオ「かっこいー！」

カナ「半端ないな」

～『マキナ』、戦闘情報センター～

「対魚雷ロケットが敵魚雷を全て破壊！」

「対艦ミサイル接近中！ＥＣＭ出力最大！」

「急速展張艦外チャフ発射装置（ＲＢＯＣ）、最大パターンで射出！」

『マキナ』の防御レーダーは、周波数帯を1秒間に何度も激しく切り替えて、
敵の対艦ミサイルのレーダー追尾誘導を混乱させようとした。

スキャニング・レーダーは、『マナサス』側の作戦無線とレーダーの周波数帯を突き止め、カスケイド・ジャマーによりホワイト・ノイ

ズの
洪水を流し込んで妨害した。セダクション（そそのかし）・ジャマーは、
『マキナ』の真の位置の周囲に、幾つもの偽のレーダー目標を生じさせ、
さらにそれを、ＲＢＯＣによりばらまかれたチャフやフレアと混ぜ合わせた。

『マナサス』から発射された対艦ミサイルは、こうした対抗措置にある程度
対応した。海面から５ｍそこそこの超低空を遷音速（トランソニック）で
飛びながら、アクティブ・レーダー、パッシブ・レーダー、赤外線センサーの
それぞれのモードに切り替えつつ、データを比較して、妨害を切り抜け、
真のターゲットを探り出そうとした。

だが、それだけの高性能にも関わらず、６発のうち４発は数秒で電子制御に
混乱を生じて進路が定まらなくなり、海に突っ込んだ。しかし残りの２発の
うち１発は、全くの偶然ながら、ＥＣＭのカオス状態の中から『マキナ』の
かすかな真のイメージを捕捉した。もう１発は『マキナ』の艦橋の窓に
反射した太陽光の熱をとらえていた。

艦長「くそ！総員、衝撃に備え！」

もはや２発の対艦ミサイルを撃墜できないと判断した艦長はそう命

令した。
艦橋にいる俺とティーナはそれを無視してどんどん近付いてくるミサイルを
眺めていた。

「はえーな！」

ティ「はえーの！」

「だが早いだけではこの『マキナ』を沈めることなどできん！」

そう言った瞬間、敵の対艦ミサイルは『マキナ』から５００m離れた場所で
爆散した。

副長「えっ？」

艦長「えっ？」

「なーっはっはっは！こんなこともあろうかと！ＡＭＦジェネレーターと
シールドジェネレーターをこっそり設置しておいたのだ！」

副長「」

艦長「」

ソナー「あ、艦長。『バーバリアン』が攻撃を開始したそうです」

艦長「そうか、じゃあ一気にたたみかけるぞ！」

一方、『マナサス』では。

？？？「なんでこっちのミサイル当たらないんだよ！？」

？？？「あたしに聞かないでよ！」

こっちでは、なんで攻撃が当たらないのか不思議に思っていた。

？？？「砲弾も何発も当たっているはずなのに！」

？？？「全て無力化されているのか！」

まあ、気がついた時には全部遅かった。
すさまじい衝撃が『マナサス』を襲う。

？？？「て、敵対艦ミサイル、艦首に1発、船体中央に2発命中！」

？？？「１９番から２２番のフレームで火災発生！ダメコン急げ！」

？？？「敵の航空機により、攻撃ヘリが全機撃ち落とされた！」

？？？「エレベーター被弾！油圧液が漏れて引火するぞ！」

？？？「敵潜水艦より魚雷接近中！速力７５ノット！数は８！回避できない！」

？？？「機関室損傷！速力ゼロになります！」

文字通りのフルボッコ状態だった。そもそもこの船は一撃離脱戦法に則って作られたので、今回のような対艦戦闘には向いていないのである。

？？？「どうしますか、艦長！」

？？？「…やむを得ん、降伏しよう」

？？？「艦長！それじゃああたし達の…」

？？？「わかっている！だがここで皆が死んでも意味がない！」

？？？「…わかったよ」

「こちら『マナサス』艦長のモースだ！降伏する！攻撃をやめてく

れ！」

艦長「こちら『マキナ』。貴艦に狙いを定めているが、攻撃は中止する」

モ「モース艦長より『マキナ』へ。降伏の条件は？」

艦長「ただちに無条件降伏すること。繰り返す、ただちに無条件降伏しろ！」

モ「了解した。指示に従う。だがこの船はもう持たない。総員退艦命令を
　出してもいいだろうか？」

「こちら局長のロンバートだ。その必要はない」

俺は『マキナ』の艦首に立って、フォースを使って沈みゆく貨物船もとい
Qシップを持ちあげた。

モ「なんだこれは！？」

「気にするな、このままドックまで持っていくからな。中に乗っている奴は
　そろそろ来るはずの『カフカス』に乗せるからな」

艦長「やはりミッドの守護神はすごい」

副長「ですね」

～屋敷、リビング～

マスコミ「み、見てください！あんなに大きな貨物船が浮いています！！」

は「ウィル君やね」

ヴィ「ウィルだな」

シグ「ウィル以外にいないだろう」

シャ「ウィル君ね」

ザフィ「だな」

～巡視船『カフカス』～

「君の名前は？」

モ「ハリー・モース。あの船の艦長だ」

ティ「副長さんは？」

マ「…マリア・モース」

「モース？てことはお前ら親子か」

ティ「親子で貨物船狩りとはね」

「で、なんでやったの？」

モ「民間船を沈めれば、管理局が出てくると思ったのでな」

「ほう、それで管理局に対して何をしたかったんだ」

モ「…復讐だ」

ティ「復讐？管理局そのものに？」

マ「違う！お前にだよ、局長！」

「俺？なあティーナ、俺なんかしたっけ？」

ティ「いや、何もしてない…と思う」

マ「するのが遅かったんだよ！」

「何がだよ？」

モ「あんたが管理局の局長になって、質量兵器に関する新たな規則を作るのが

遅かったと言いたいんだ」

ティ「どういう意味？」

モ「私達は第８管理世界出身でね、そこでも特に治安の悪い地域に住んでいたんだ。
私はそこでも貨物船の船長をやっていた。娘のマリアは航海長補佐として
私の船で訓練をしていた。そして妻は現地の警察官としてその地域の
安全を守っていた」

マ「当時はまだ民間人の質量兵器保有は認められていなかった。犯罪者は銃を
持っているのに、こっちは包丁で身を守るしかなかったんだ」

モ「そんなある日、我が家に強盗団が入ってね。武器を持っていない私達は
何もできなかった。そこに妻が帰宅して戦闘になった。すぐに駆けつけた
警察によって犯罪者は全員逮捕されたが、妻は殺されたよ。お腹に中に
いた子供と一緒に」

ティ「っ！！」

マ「その次の日だよ、あんたが局長になって新しい規則を発表したのは！
もっと早ければ、あたしの、あたしのお母さんと弟は死なずに済んだんだ！」

「だから復讐、か」

モ「そんな時に『アレキサンダー海運』からオファーがあってね。復讐を
　手伝ってやる。そう言われたから私たちはその話に乗ったんだ」

「ティーナ、『アレキサンダー海運』潰してこい。誰も殺すなよ？
俺の名前を使っていいから必要な人員、装備を好きに使え。
ただし今日中にやれ、て言うか今すぐ行け」

ティ「了解！！」びゅん！

「さて、それでお前らの処遇なんだが、貨物船5隻の撃沈、沿岸警備隊への
攻撃、質量兵器使用法違反…ストライクスリーってやつだな」

マ「じゃあ極刑かよ？」

「だが幸いなことに民間人は誰も死なずに済んだ。あのQシップに乗っていた
お前らの部下も死者は出ていないだろう？」

モ「そう言えば確かに重軽症者はいるが死者はいないな…」

「そちらの船体をスキャンして、なるべく人がいないところを攻撃したからな」

マ「なんでそんなことを」

「殺したらなんでこんなこととしたのかとか分からずじまいじゃないか」

「あの～艦長？ちょっといい？」

マ「誰！？」

「ああ、俺のパソコンのＡＩのエディ。それでなんだ？」

「その、モースさんの奥さんを殺した強盗団なんだけど…」

「どうした？」

「モースさん、本当にそいつら逮捕されたんですよね？」

モ「え、ああ、警察官がやってきてきちんと手錠して連れて行かれたのを見たぞ」

「ところがどっこい、現地の警察のコンピューターにそんな逮捕記録がない」

「は？」

モ「なんだと！？」

マ「そんな！？」

「それどころか、強盗団とその”警察官”が一緒になってミッド行きの
次元航行船に乗っている映像が、空港の監視カメラの記録に残っ

てる」

「エディ、その後の足取りは？」

「ちょいまち…あ、車に乗ってクラナガンから離れたところに…あー」

「なに、その、あーって」

「モースさん、大変申しにくいのですが、あなたの奥さんを殺した強盗団と
”警察官”を乗せた車は、『アレキサンダー海運』の本社ビルの地下駐車場に
入っていきました」

モ「な、に？」

マ「おいおいおいおい、つまりなんだ、あたしたち親子はお母さんを
殺した犯人に雇われているって言うのか！？」

「残念ながらそういうことかと」

「モースさん、あなたの航海記録を見させてもらいました。実にすばらしい
腕ですね。だからこそ狙われたんじゃないですか？」

モ「…私の腕が欲しいがために妻は殺されたのか…」

マ「ひどすぎる！！」

「全くもって許しがたいな」

俺は壁についている受話器を取って艦橋につないた。

「艦長、すまないがラーティを1機貸してくれ、うん、頼んだぞ」

モ「え？」

「ほら、2人とも行きますよ」

マ「行くってどこに？」

「決まってんじゃん、あなた達から大切な人を奪ったクソ野郎の所にだよ」

～『アレキサンダー海運』本社ビル～

ウィルとモース親子がラーティに乗り込んだのと同じ時間に。

ティ「突撃～！！」

ギ「行くわよみんな！」

局員「うおおおおおお！」

５階建てのビルに総勢１００名の新鋭が突入した。主に陸士１０８部隊で
構成されている。

「「「「徹底抗戦だ！かかってこいや！！」」」」

ティ「全員逮捕だ！大人しくしねえとその貧相なキ○タマ引きちぎるぞ！！」

「「「「降伏します！我が息子だけは！！」」」」

ギ「き、キ○タマ引きちぎるって…こわ」

ティ「これで全員かな？」

「まだだぁ！まだ終わっていない！！」

どこかのゲームで聞いたようなセリフを吐きながら、上の階からマシンガンを
ぶっ放す敵が多数。

ティ「もう、危ないな！やっちゃって！」

無線でティーナが指令を出すと、外にいたラーティ編隊が非殺傷ミサイルを

各階に向けて発射。窓を突き破って飛び込んだミサイルから催涙ガスが
ばらまかれ、数分後には全エリアを制圧した。

「もう終わっちゃってたか」

ギ「あ、ウィルさん！」

ティ「ご主人様！私頑張ったよ！」

「おーしよくやったティーナ。それにギンガもご苦労さん」

ギ「ありがとうございます！」

「で、モースさん、誰だか分りますか？」

モ「いや、覆面をしていたから犯人の顔はわからない…」

マ「でも警察官の顔はわかるよ！」

「ならそいつを探そう」

探し始めて5分。

マ「あいつだ！！」

偽警「げっ！」

モ「貴様…」

「おいお前、命が惜しければ強盗団の顔を教えな？さもないと…」

ティ「ちぎるわよ？」

偽警「あいつとあいつとあいつです！」

ＡＢＣ「ぎくっ」

「いい子だ、さてお２人さん。こいつらどうしたい？殺すって言うのはなしな」

マ「なんで！こいつらあたしのお母さんを…弟を…」

「あんたらは騙されて今回の事件を起こしたんだ。だから刑務所には入らなくて
　済む。でもここで人殺しなんかしたらアウトだ」

モ「…お前ら。俺の妻を殺すように命令したのは誰だ？」

偽警「…社長だ」

モ「そうか…局長さん、頼みがある。こいつらと社長をきちんと裁いてくれ。
　俺たち親子も罪を償う。だから…」

「あー、それなんだが、モースさんにマリアさん、まだ船に乗る気

はあるかい？」

モ「え？」

マ「どういうこと？」

「もし沿岸警備隊に入隊してくれるなら、あなた達のやったことは帳消しに
できるんだが、どうだろう、その経験と知識を役立てたいと思わないか？」

モ「そんなこと、ありなのか？」

ティ「よくあることよ。犯罪者が取引して管理局に入るとかね」

「衣食住全て用意できるし、身分もきちんと保障する。どうかね？」

マ「…こんなあたしでも他の人の役に立てるのならやってみたい！」

モ「そうだな、そうしようか」

「よし！じゃあ地上本部で手続きだ！」

そんなこんなで貨物船連続撃沈事件は幕を閉じた。偽警官と強盗団3人、
それに『アレキサンダー海運』の社長は裁判にかけられ、全員が軌道拘置所での無期懲役になった。

モース親子はその後、カフカス級巡視船2番艦『ピスコフ』の艦長、航海長と
なって、クラナガンの海の平和を守るという大事な仕事についた。

めでたしめでたし。

沈みかかっていた『マナサス』をこっそり回収して、月面基地のドックに
転送して、色々と改造しようというのはまた別の話。

第８４話：貨物船？いいえ、ケフィアです↑嘘（後書き）

自分の中では長く書いた気がする。

次回はなのは達新妻軍団の出番です。

では

第８５話：局長の悩み事

～地上本部、局長執務室～

「お、おはよう…」

ドゥーエ「おはようございま…あの大丈夫ですかウィルさん？」

「大丈夫だ、問題ない…」

ドゥーエ「じゃなんでそんなに隈ができているんですか？」

「いやな、最近寝不足で…」

ドゥーエ「ドクターに言って薬出してもらいましょうか？」

「それはいい。不眠症ってわけじゃない、うん」

ドゥーエ「では夜遅くまで何そしているんです？」

「実はな…」

～回想、1週間前、深夜1時～

「さあて、寝るか」

は「ウィル君！」

カ「ウィルさん！」

「…なに？」

は「その、だめ？／／／」

カ「うふふ…／／／」

「かかってこいや～！」

あは～ん、うふ（ｒｙ

3時間後

は、カ「ｚｚｚ…」

「はぁ…」ゲッソリ

「で、次の日もさ…」

な「ウィル君、昨日はお楽しみでしたね？」

フェ「今日は私たちの番だよ？」

「文句は言わんよ…」

あは～（ｒｙ

次の日も。

シャ「今夜の特製すっぽん料理で元気はつらつよね？」

シグ「なら問題ないな。で、ではウィル、その、してくれるか？／／／」

「ひいいいいいい！！」

あは（ｒｙ

アリサ「ウィル！私もやりたい！」

すずか「アリサちゃん、声大きいよ／／／」

ス「うぃ～るさ～ん！」

ギ「えへへ、今日は私たちの日ですね」

テ「ウィルさん、私、３ｃｍも増えたんですよ？」ぼいん

ヴィ「…どうせあたしは」ぺたーん

「」ちーん

～回想、おしまい！～

「てことがあってさ、寝るのが3時とか4時になっちゃうんだよね、5時起きなのに」

ドゥーエ「そ、そうなんですか…」

「にしてもあいつら何故か最近妙に求めてくるんだよな～。なんでだろ？

どう思うよ、ドゥーエ？」

ドゥーエ「…発情期では？」

「いやいや猫じゃあるめえし」

それまで黙っていたティーナが発言した。

ティ「ご主人様、なぜ男と女はセックスすると思っているの？」

「そりゃ子供を作るため…あ、そういうことか！」

ドゥーエ「やっと気がついてくれましたか」

ティ「こういうことはご主人様は鈍感なの」

「なるほどね、自分の子供か…冗談抜きで野球チームどころかラグビーチームできるな」

ドゥーエ「えっと、今はヴィヴィオちゃんにカナリアちゃん、イクスちゃん、

エリオ君、キャロちゃんだから、5人子供がいて、奥さ

んは12人
いるわけだから、あらまあ」
ティ「ていうかそれはそれで大変じゃないの？」
「確かに全員子供ができたら俺は父親業とこっちとで死ぬな…」
ドゥーエ「それになのはさん達も産休取ると思うので、管理局の戦力が
1年か2年ほど落ちますよ」
「むむむ…」
ティ「今夜みんなに聞いてみたら？」
「そうするか」

～夜、屋敷、リビング～

な「で、ウィル君、話ってなんなの？」
は「全員集めての話なんて、真面目な話なんか？」
「あのな、お前ら子供欲しい？」

フェ「え？」

「いや、なんか最近妙にがっついてるじゃん、夜？だからそうなのかな～って」

アリサ「もうちょっと言い方ってものがあるでしょ！」

すずか「がっついてるって…」

ヴィ「子供は欲しいぞ！」

シャ「そうね、もう私たちも人間になったわけだし」

シグ「ヴィヴィオ達を見ていると、こう自分の遺伝子を受け継いだ子供が
　欲しいと思うようになったな」

テ「私もです！」

「やっぱそうだよね」

は「それが何か問題でも？」

「いや、お前らが子供産むとするだろ？」

ス「はい」

「するとお前ら産休取るじゃん？」

ギ「まあ、そうなりますね」

「1年から2年近く子供の面倒をみるとする」

カ「普通の産休の期間ですね」

「するとあら不思議、管理局の戦力ががた落ち」

な「あ、確かに」

「おまけに今俺達には5人の子供がいるわけで、そこに全員が子供産んだとすると
俺1人だと死んじゃう」

フェ「…局長やめちゃえば？」

ス「さらっとすごいこと言ってますよフェイトさん！」

な「父親が1人で10人以上の子供の面倒を見るのはしんどいよね」

「あ、そうか」

シグ「なんだ、いい考えでも浮かんだか？」

「おうよ！俺が何人かいればいいんだ！」

みんな「は？」

「じゃ～ん、スキルニル！」

ヴィ「あ、いつかの分身人形」

「これを使って1人は仕事、1人は子供たちと遊ぶ。完璧じゃね？」

カ「それはいいですね！」

「じゃあ子供作るか」

みんな「え／／／」

「今日は狼になっちゃうぞー」がおー

みんな「いや～ん／／／」

あ（ｒｙ

翌日

「こ、腰が…こんな時のスキルニル…今日はお前が仕事してくれい」

「了解だ、俺」

な「それ、私も欲しいの…」

第８５話：局長の悩み事（後書き）

短いですけど。

水曜日までにエントリーシート送らなきゃいかんのに、
同じ日の面接対策もしなければならない…

どっちも適当でいいや

次回もぐだります
では

第８６話：改造のち恐怖、時々悲鳴。（前書き）

有名なある無料のゲームをやったら怖かったので書いてみようかと。

第８６話：改造のち恐怖、時々悲鳴。

～屋敷、ウィルの部屋、夜～

まだ寝る時間ではないけど、遅い時間に俺はパソコンをいじっていた。
画面に出ているのは、この前こっそり月面基地に転送した貨物船のふりをしたQシップ『マナサス』である。こいつをもっと魔改造しちまおうとしていた。

「まずこの７６ｍｍ６２口径速射砲が片方に2基ずつだろ。それに６連装対艦ミサイル
発射装置も片方に2基ずつ、船底に空いたムーン・プールからは４発同時に魚雷
撃てるし、小型潜水艇も運用可能だな。んで貨物室に偽装した格納庫には
大量のヘリを収納できるのか。良い船だな。それ以外にもかなりスペースが
空いているからもっと改造するか」

とりあえず格納庫にはヘリの代わりにラーティを搭載して、対艦ミサイル発射機
には、第２３管理外世界「アイシクル」のE国からもらった、液体水素燃料で動く
超音速巡航ミサイルを発射できるように強化した。んで、魚雷は普通の魚雷を

搭載する。弾頭は普通の高性能爆薬。どこにでもある普通の魚雷を使う。
小型潜水艇は元々非武装だったが、念のため魚雷を2本搭載しておいた。

主砲の７６ｍｍ速射砲は、電磁速射砲化して火力を大幅に引き上げようとしたが。

「艦長、それよりもターボレーザー乗っけたら？」

「やりすぎじゃね？」

「何を今さら」

「まあ、そうだな、そうしよう」

エディの助言に従い、電磁速射砲じゃなくてターボレーザーに。
その分電力は食うが、もとから搭載されていた魔導炉を、高出力な物に
交換するので問題なし。当たり前だが、ＡＭＦジェネレーターとシールド
ジェネレーターも付けた。

残っている問題と言えば、対ミサイル・対航空機防御システムをどうするか
だった。見た目は普通の貨物船なので、ゴールキーパーのような艦艇用近接
防御火器システム（ＣＩＷＳ）を乗っけるわけにはいかない。かなり小型であり、
隠すのが容易であり、自給式であり、迅速に展開できる兵器でない

といけない。

「そんな都合のいい兵器があるのかね」

「ありますよ、艦長」

「どんな？」

「これです！」

エディが提示した兵器は、Ｍｋ４９ＲＡＭ　２１連装発射機だった。

「なるほどＲＡＭね。ＣＩＷＳのミサイル版か」

「そういうことです」

ＲＡＭの誘導方式はパッシブ・レーダー誘導と赤外線誘導方式で、ミサイル本体が
回転する事によりシーカーの捜索範囲に目標を捕捉、誘導が行われる。このような
誘導方式を採用していることから、ＲＡＭは射撃指揮レーダーを必要とせず、
より簡素な設備で運用できる。

「でもあれって大人数で装填しなきゃいけなかった気がするんだが」

「自動装填装置を作ったのでこれでおっけーです」

「じゃあそれを2基、いや４基つけよう」

「はいはーい。で、次はどうします？まだまだスペースはありますよ？」

「ん～とりあえずこのくらいでいいんじゃね？」

「じゃこのように改造しときます」

「ほいほい、じゃおやすみ」

エディとの回線を切って、メールチェックをしていたら。

「おや、ジェイルからだ。なになに、面白そうなゲームがあるから送るだと？
やってみようじゃないか。えっと、『青鬼』っていうゲームか」

かたかたかた…

～屋敷、リビング～

シグ「おいヴィータ、そろそろ寝る時間だぞ」

ヴィ「もうちょっとテレビ見たい」

は「明日も仕事やろ？あかんで」

ヴィ「ぶー」

今日はアリサとすずかは非番だったので日本の実家に戻っている。

な「えっと今日ウィル君と一緒に寝るのは誰だっけ？」

ス「あたしとシャマル先生です！」

シャ「そうだったわね」

テ「明日は私だ！うふふ…」

ギ「そう言えば、お父さんがたまにはうちに帰って来いって言ってたし、

スバル、明日は実家に帰らない？」

ス「そうだね！ノーヴェ達にも会いたいし！」

と、その時。

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！」

咲夜「旦那様の悲鳴！？全メイド部隊、戦闘配置！」

な「ウィル君の部屋からだ！」

は「みんな、行くで！」

ツ「はいです！」

ア「何があったんだ？」

アギト「猛ダッシュで行くぞ！」

メイド軍団と新妻軍団がウィルの部屋に着くと、そこにはウィルが椅子から
転げ落ちていて、しかも泡を吹いていた。

ヴィ「ウィル！」

悲鳴で叩き起こされたザフィーラも部屋から飛び出してくる。

ザフィ「何の騒ぎだ…ウィル！しっかりしろ！」

ス「ウィルさん！」

テ「シャマル先生！」

シャ「う～ん、気絶しているだけね」

ギ「よかった…」

咲夜「ベットに寝かせておきますね」

は「でも何があったんやろ？」

ア「？主、これを…」

アインは電源がつけっぱなしのパソコンを指さした。

アギト「青鬼？なんだこれ？」

な「えっとコンティニューとかあるからゲームかな？」

シグ「とりあえずやってみましょう」

テ「私がやります。えっとニューゲームだね」

プレイ中

ス「大きなお屋敷だね」

ギ「ここよりは小さいけどね」

な「ひえ！なんか割れたよ！？」

は「ここから操作できるんやな」

テ「食堂だ。ん？皿が割れてる」

〈皿の破片を手に入れた〉

テ「みんなの所に戻ろ…！？」

シグ「いないぞ！？」

シャ「どこ行ったのかしら？」

ヴィ「とりあえず探してみようぜ」

ス「2階だね、あ何かある」

ギ「絵？いや見取り図？」

は「よくあるＲＰＧゲーみたいに取れへんの？」

テ「取れませんね、この地図もどき」

な「まあいいんじゃない？」

は「なにもあらへん部屋やな」

箪笥＜ガタン！

ス「ひいっ！」

ヴィ「なななんか揺れたぞ！？」

テ「チェックしてみます！」

ギ「あ、たけしだ」

アギト「うわー震えてるぜ」

ツ「これじゃ話せないです」

ア「他に何か部屋にないのか？」

ザフィ「本棚とか椅子とか調べるといいぞ」

テ「あ、椅子が動いた」

〈図書室のカギを手に入れた〉

シャ「図書室ってどこだったかしら？」

な「家探しなの！」

テ「ここっぽいですね、あ、開いた」

ギ「本がいっぱ…」

な「にゃあああああ！！」

ヴィ「なんだよあれ！？」

は「今なんか左上に青くてでかいのがいたで!?」

シグ「あれが青鬼なのか?」

ザフィ「人間よりはるかにでかいな」

ス「と、とりあえず探索しないと」

テ「えっとテーブルには雑誌がいっぱい…あ、動いた」

〈寝室のカギを手に入れた〉

シャ「あら?何か上から…」

テ「なんかきたあああああああ!!」

は「に、逃げるんや!」

ス「追っかけてくるし!!」

シグ「主人公を追いかけるのはピ○ミンだけで十分なのに」

その後も。

シグ「おや、和室じゃないか」

ギ「って箪笥から出てきた！！」

ツ「怖いですううううう！！」

〈地下室のカギを使った〉

ギ「これで地下に行けるね」

＜キャァァァァァ…

ヴィ「誰の悲鳴だ！？」

シャ「さっきの女の子よ！」

テ「あああああ！！女の子食べてる！！」

ス「ひどい！！」

シャ「ピアノの血をこれでふけるわね」つハンカチｗｉｔｈ洗剤

テ「ん？９４１？何の数字だろう？」

な「ううううう後ろ！！」

ヴィ「ひえええええええ！！！」

テ「ふと思ったんですけど」

な「なに？」

テ「皿の破片万能すぎ」

シグ「確かに」

ス「赤い石取れないの？」

ギ「燃やしちゃえば？」

アギト「確か2階に暖炉があったぞ」

ツ「ライターで火を付けるです！」

テ「なるほど、じゃあ暖炉のある部屋にって暖炉から出てきた！」

な「にゃあああああああ！！」

は「ひえええええええええええ！！」

ぷら～ん

は「たけしが！」

な「自殺なの？」

ザフィ「そう見えるな」

テ「えっと金庫に番号を入れて、っと開いた」

〈地下室のカギを手に入れた〉

ギ「じゃあ出ましょうか」

＼ゴトッ！↑たけし落下

ス「お、落ちた…」

テ「ちっ、何も持ってないわね」

シグ「死体をあさるなよ！」

テ「いや、何となく」

ギ「次はどこに行こうかあああでたあああああ！」

は「なんか金髪になっとる！！」

ス「ひえええええええ！！」

な「たけし君なの！！」

ヴィ「この屋敷内で死ぬと青鬼になっちゃうのか！？」

ザフィ「最悪だな」

テ「これで扉が開いた！」

ス「やっとだねってまたあああああ！！！」

な「前にしか進めないの！！」

テ「前からも来た！！！」

ツ「う～ん…」ばたっ

ア「あ、気絶した」

＜パリンッ

は「な、何か割れたで」

シグ「金庫の前が…」

＜にゃ～ん

な「なんだ、猫さんなの」

ヴィ「びっくりさせやがって」

テ「じゃあ金庫に！？」

ギ「なにあれ！？」

ス「ニュータイプか！」

シャ「逃げないと！」

テ「え、なにこいつはやい！」

〈ゲームオーバー〉

な「にゃああ…」ばたんっ

ヴィ「なのは！」

テ「この部屋はなんだろう？」

ザフィ「さっき棒を使って鍵を取った所の反対側のドアか」

ス「ひっ！！」

ギ「なに…これ…？」

は「青鬼が…いっぱいや」

ア「気持ち悪いな…」

シグ「と、とりあえず動いてみろ」

テ「はい…なんか出てきた！！」

シャ「急いで出ないと！」

テ「あれ？開かない！」がちゃがちゃ

ス「ティア早く！！！」

テ「うおおおおおおお！！」がちゃがちゃ

アギト「よし！開いた！」

〈青いピースを手に入れた〉

は「これで最後やなあああああ！！」

ギ「卓郎！？いつの間に…」

ス「でも一緒に脱出できるね！」

テ「これをさっきの場所にはめればいいのね、メニューっと」

シグ「!?」

ザフィ「卓郎が青鬼になってるぞ!?」

は「ほんまや!」

ギ「なんか後ろにいる!!」

テ「きゃあああああああ!!!」

みんな「おわった!!」

ヴィ「もう二度とやんねえぞ!あんなゲーム!!」

は「ほんと怖かったで!」

テ「心臓に悪いわね…」

ス「ウィルさんが気絶するわけだ」

後日、ウィルが青鬼のコスプレをしてジェイルの家に強襲をかけ、
その時ジェイルが小便ちびったのはまた別の話。

第８６話：改造のち恐怖、時々悲鳴。（後書き）

「マナサス」の第１次改造と青鬼のお話でした。
青鬼は怖いですね。夜１人でやってはいけないと思いました。

次回は考え中ですが、そろそろ時を飛ばそうかと思ってます、１年ぐらい。

では

第87話：復活！とある”船”

青鬼事件から1週間後…

～地上本部、技術開発部門～

ジェ「ウィルかい？やっと完成したよ」

「おおそうか！あれの改装も済んでいるんだな？」

ジェ「もちろんさ」

アリ「つかれた～」ぐてー

「アリシアも御苦労さま。じゃあお披露目と行こうかね。ていうかなんでこんなに
完成するのが遅れたんだ？」

ジェ「単純にやるのを忘れてた」

アリ「さっきもウーノさんに怒られてたよ」

「給料減らすぞこら」

次の日、管理局のドック

は「で、なんで集まったんや？」

シグ「重要な用事だと聞いたが…」

シャ「でもここはドックでしょ？どこかに行くのかしら？」

ザフィ「かもしれんな。特別任務とか」

ヴィ「しかしいつ来ても広いなここは」

な「まあ船を修理したり改装したりする所だしね」

シグ「ん？この船はなんだ？シートが邪魔でよく見えんな…」

ザフィ「建造中なのだろう」

ヴィ「あ、あれ！」

は「えっとなんだっけ？」

シグ「投降した反乱軍戦艦ですね」

ザフィ「改ＸＶ級次元航行艦『リバティー』か…武装は全て取っ払っているようだな」

な「新しく作った次元航行部隊のベースになったんだよね？」

フェ「そうだよ。でも質量兵器の扱いに慣れてない乗組員が多くて、
今は広域探索はウィルの戦艦にやってもらっているの」

シャ「つまり、今フェイトちゃんやティアナちゃんは何しているの
？」

フェ「…本局で書類と格闘しています」

ヴィ「え、じゃあ船はドックに放り込んだままなのか？」

フェ「そういうこと」

は「…ニート執務ｋ」

フェ「それ以上言ったらＯＨＡＮＡＳＨＩだからね？ところで、ウ
ィルはどこだろう？」

そこに。

リ「あら、あなたたちも来ていたの？」

ク「ほんとだ」

な「リンディさん！」

は「クロノ君も！なんでここに？」

ク「ウィルが来いって」

「お、みんな来たな」

ティ「やっほー」

リ「ウィル君、元気そうで何よりね」

「リンディさんこそ、相変わらずお若いですね」

リ「やーねぇもう、うふふふ」

ク「それで局長、なぜ私たちを集めたんです？」

「敬語はよしてくれ。一応俺より年上だろ？」

ク「一応って言うな！」

「はいはい、いつまでたっても小さいクロノは放っておいて」

ク「ちっちゃくないよ！」

「今日みんなを呼んだのは他でもない、これを見せるためだ。エディ！」

「ほほほほ～い」

エディの変な声と共に、さっきシグナムが言っていたシートがする

すると落ちた。
そのシートに下にあったものとは。
リ「あらまあ！」
ク「これは！」
な「？」
フェ「あああああ！！」
は「なんやこれ？」
ヴィ「忘れちゃったのかよ、はやて！」
シグ「懐かしいな」
ザフィ「そうだな」
シャ「何度かお世話になったわね」
「そ。管理局に唯一残っているＬ級次元航行艦『アースラ』だ！」
な「思い出したの！！」
は「管理局に入ってから何度かお世話になったっけ」
ク「てっきりスクラップになったのかと思ってたよ！」
「まあそうする予定だったんだけど、ミッドチルダ大戦のおかげで

次元航行部隊が
壊滅しちゃっただろ?そんで新しく部隊を作り直したけど、今までの次元航行艦
とは違って質量兵器とかいっぱい乗っけたから、乗組員が『これわかんなーい』
状態になってて、今は船に乗らないで本局やら地上本部やらで質量兵器講習を
受けているだろ?」

フェ「うん、そうだね」

「そこで本日付で『アースラ』は質量兵器訓練艦として復活することにした」

ザフィ「なるほど、これに乗せて兵器の取り扱いを学ぶのか」

「そゆこと。扱い方はシュミレーターでもできるけど、実際に見て、触れて
訓練したほうが覚えやすいっしょ」

リ「それはそうね」

「で、詳しい訓練内容なんだが、まず隣にいる『リバティー』で船の操縦やら
なんやらを学んでから、『アースラ』に乗って武器の扱い方を習うって感じだね」

ク「それならその2つの訓練を1つの船でやればいいじゃないか」

「うん、最初はそうしようと思っていたんだけどさ、人間2つこと

を同時には
できないだろ?ゆっくりと時間をかけて知識と経験をつんでもらおうと
思って2つの船に分けたんだよ。それともう1つの理由は、仮に前みたいに
クーデターとかが起きた場合に敵が使えないようにしようと思ってな」

な「どういうこと?」

「『リバティー』は大型だが非武装、『アースラ』は武装しているけど小型。
おまけに『アースラ』に搭載されている魔導砲は非殺傷設定のみだし、
質量兵器だってミサイルには弾頭付いてないし、実弾じゃなくて空砲だし、
レーザーだって威力を極限まで落としてある」

リ「そんな船じゃ戦争には使えないわね。輸送艦の代わりにはなるかも
しれないけど」

「もちろん実弾射撃訓練をやる時は実弾を使うぞ。他の兵器もその時に限って制限を解除する」

ティ「ちなみに『アースラ』の武装はこんな感じね。新しく作った改ＸＶ級
次元航行艦はきちんと実弾も撃てるし、弾頭は高性能爆薬やらなんやらだし、レーザーも最高出力、魔導砲も殺傷設定でバンバン撃てるからね?」

『アースラ』の武装

改良型2連装アルカンシェル（非殺傷設定のみ、出力制限あり）：1基

１５５ｍｍ大型魔導砲（非殺傷設定のみ）：４基

１２７ｍｍ中型魔導砲（　〃　）：２基

トリプル・ミディアム・ターボレーザー（出力制限あり）：３基

Ｍｋ１５Ｂｌｏｃｋ１Ｂ艦艇用近接防御火器システム（空砲）：８基

ＲＩＭ－１１６ＲＡＭ用Ｍｋ４９　２１連装発射機（弾頭なし）：４基

プロトン魚雷発射装置（弾頭なし）：２基

リ「すごいわね」

アリ「私も手伝ったんだからね！！」

フェ「姉さん！？」

アリ「やっほー、フェイト！」

は「アリシアちゃん！」

アリ「ウィルとお母さんとすずかさんとジェイルさんとウーノさんと私で
　計画して作ったんだよ！」

「その通り。で明日から訓練なんだけど、その前に一度試し乗りしようぜということで
　リンディさん、一日艦長をお願いします」

リ「いいけど他の乗組員はどうするの？」

「足りない分はエディに任せますよ」

ク「エイミィがいればよかったんだけど今は産休中だかｒ」

エイ「やっほーみんな！久しぶり！」

ク「」

な「エイミィさん！」

リ「エイミィ？体は大丈夫なの？」

エイ「ばっちぐーです！『アースラ』にまた乗れるなんて夢みたい！」

「よし、それじゃあ行こうか！」

みんな「おおーっ！！」

ク「…えっ？」

リ「エイミィ、準備はいい？」

エイ「いつでもいけますよ！」

リ「それでは、『アースラ』発進！」

エイ「了解！」

リンディの命令に従い、エイミィはパネルを操作してエンジン出力を上げていった。

「エイミィ、昔みたいに飛ばさないでくれよ？魔導炉とエンジンを改良したから
　最高速度も上がっているし、加速度も向上しているから」

エイ「はいはーい！それにしてもこの感じ…あーもう懐かしいな～」

ク「全くだね。やはりこの船が一番落ち着くよ」

な「昔より早いの」

フェ「そう言えばウィル」

「ん？」

フェ「確かアルカンシェルって1つの船に1個しか積めないんじゃ？」

リ「そう言えばそうだったわね」

「え、そうだっけ？」

ク「そうだ、忘れていたのか？」

「いや、アルカンシェルが２基だといけないんだろ？この船は１基しか積んでないぞ？」

は「え？でも２連装って…」

ティ「２つのアルカンシェルを１つにまとめて１基にしているから問題なしよ！」

ヴィ「えー…」

「複数のアルカンシェルを１つにまとめてはいけない法律なんかないだろ？」

アリ「実はお母さんやジェイルさんがアルカンシェルを３連装や４連装に
しようとか言ってたの」

シグ「４連装だと！？」

は「やりすぎや！」

アリ「そこにウィルがやってきて話し合いの結果２連装にしたんだよ」

「いや、３連装や４連装だとスペース的に問題があってな。だから今回は

２連装で我慢したってわけ」

シャ「我慢って…」

ティ「でも、固定兵器としては良いんじゃないか、ってことになって、２つある
　月面基地に４連装地対空アルカンシェル砲をそれぞれ４基設置してみたの」

ザフィ「なんと…」

「現在月面に配備しているゴラン?宇宙防衛ノヴァガンではカバーしきれない
　エリアへの攻撃手段というわけだ」

ク「冗談抜きでミッドチルダが要塞化している…」

「おうよ。ミッドは内側からの攻撃以外ならほぼ対処可能だ」

な「内側っていうと…地震とか?」

ティ「そういう自然災害とかミッドにいる犯罪者が大騒ぎするとか」

「まあ、地上はレジーがきちんとしているし、最近は本局の連中とも仲良く
　やっているし」

リ「そういえば地上本部との合同訓練の数が多くなったわね」

ク「いいことですね」

「内輪揉めしてたんじゃ外の守りなんかできないからな。なるべく早いうちに
終わらせたいもんだ」

フェ「そうだね」

その後はのんびりとミッドを一周して、次の日に『リバティー』と一緒に
本局へと向かっていった…

第87話：復活！とある”船”（後書き）

アースラ復活の巻。
あーもう明後日には面接なのに明後日までに別の企業のエントリーシート
書かないといけないし、3日後にはめんどくさい学校もあるしやってらんねえ。

次回は…もしかしたら明日は書けないかも、です。

では

第８８話：アテネェ…

ある日。

プルルルッ　ガチャ

「アテネか、どうした？久しぶｒ」

アテネ「それどころじゃないの！ミスったの！」

「ミスった？何を？」

アテネ「あなたのいる世界に転生者を１人間違えて送っちゃったの！」

「は？」

アテネ「それでそいつ、前世が超変態のニート野郎でさ、なのはちゃん達を嫁にする
　とか言ってたの！」

「よし、殺す」

アテネ「良いよ殺して」

「え、いいの！？」

アテネ「1回そっちで死んでくれないとこっちに戻せないのよ」

「なるほど、でそいつの能力は？」

アテネ「厄介なことに『鋼の錬金術師』のお父様と同じ」

「…つまり体内に何人分の賢者の石があるんだ？」

アテネ「原作よりも増やせって言われたから2，０００万人分」

「お前ほんと死ねよ」

アテネ「ごめんなさい！あとで1つだけなんでも言うこと聞くから！」

「はぁ…で今そいつはどこにいる？」

その時、警報が鳴り響いた。

ドゥーエ「局長、廃棄都市群の中心で小規模次元震を確認！」

アテネ「その子の言う通り、クラナガン郊外の廃棄都市群のど真ん中だよ」

「わかった、こちらで処理する」

「エディ、第2艦隊に出撃命令、マクロス・クウォーターとバトル・

フロンティア、
あとインペリアル?級マジック・ジャマー以外を大至急この座標に向かわせろ」

「了解、艦長。ってこの座標廃棄都市群の真上?」

「元廃棄都市群だ。あそこはゆりかご戦でターボレーザーの嵐でクレーターだらけに
したじゃないか」

「そうでしたね」

～ミッドチルダ第1、第2月面基地～

ここはいつもは静かな場所だった。今月面基地でやっている作業は、第1基地での
『マナサス』の魔改造くらいだった。

しかし今日は違った。

エディからの緊急命令により、基地全体に警報が鳴り響き、第2艦

隊所属艦が
次々とドックから出撃していく。ただし、マクロス・クウォーターとバトル・フロンティア、そしてインペリアル?級マジック・ジャマーは
出動待機である。残りの１１隻の戦艦はミッドに向かっていった。

～元廃棄都市群～

ここは先のゆりかご戦でターボレーザーの洗礼を受けた。その結果、建物の
がれきすら蒸発して、残ったのは無数のでかいクレーターだった。
その後、端の方からクレーターを埋め直して、２年後にはきれいな土地に
なる予定だ。

俺は部隊を率いてアテネに教えてもらった座標に向かっていた。

ギ「ウィルさん、それにしてもなんでこんなに大部隊を動かすんです?」

ゲンヤ「ギンガの言うとおりだな。いくらなんでもこの兵力は異常だ」

お父様退治にあたって、俺は手空きの部隊全てを投入していた。

「奴は俺と同じ転生者なんでね、殺しても死なないんですよ」

ゲンヤ「殺しても」

ギ「死なない！？」

「ったく何回殺せばいいんだろうな…お、あれだ。ここで待機していてくれ。

レジー、俺の合図で総攻撃の準備を」

レジ「任せろ、ウィル」

そこには1人の男が佇んでいた。金髪長髪に腰タオルの男。彼がアテネの
言っていた転生者だろう。

「おい、そこのお前。我々は時空管理局だ。次元震を起こしたから逮捕する」

？？？「何のことだ？」

「だーかーらーお前が立っているその場所で次元震が起きたんだよ」

？？？「そんなこと知ったことか！俺にはやらなきゃならないことがある！」

「…ハーレムでも作る気か？」

？？？「なんでそれを！？」

「アテネに言われてお前を戻すように言われた。悪く思うなよ？」

？？？「なんでアテネを知っているんだ！？まさかお前も転生者か！」

「よくわかったな、その通りだ」

？？？「お、俺はなのは達を嫁にするんだ！お前なんかに邪魔されてたまるか！」

「ちっ、うるせえな。なのははもう俺の妻だ」

？？？「なっ！？」

「フェイトもはやてもヴォルケンズもアリサもすずかもスバルもギンガもティアナも
全員俺の家族であり、妻であり、戦友だ。お前なんかにやらんぞ」

？？？「この野郎！死ね！」

そう言いながら金髪は地面から2本の刀を錬成してこちらに走ってきた。

「だが断る！ティーナ！ディエチ！」

1?後方ではティーナとディエチが伏せていた。ティーナはアエロテクＣＳＩＲ社が開発した２０ｍｍボルトアクション式アンチマテリアルライフル、ＮＴＷ－２０の引き金を絞り、ディエチはＩＳヘヴィバレルを発動させ、ジェイルによって改造され、さらに強化したイノーメスカノンから実弾射撃を行った。

その結果、金髪野郎の上半身が吹き飛び、残った下半身も０．５秒後には吹き飛んでいた。

そこらじゅうに血やら肉やらが飛び散った。

ギ「ひっ！」

「ナイスショットだ、２人とも」

ティ「楽勝ね」

ディエチ「あっけないな、あれ？」

だがあっという間に再生して元の姿に戻ってしまった。

「うーん、やっぱりそうなるか」

金髪「当たり前だ！これくらいで死ぬわけがないだろう！」

「レジー！総攻撃開始だ！」

レジ「全部隊、攻撃開始！」

金髪「え」

金髪をいつのまにか包囲していた地上部隊が一斉に攻撃を開始した。
ティン・マン装甲服を着用しているため、どんな奴でもＡＡＡランクの
砲撃が可能になる。普段はもちろん非殺傷設定だが、今日に限って
局長命令により殺傷設定で攻撃することになっている。

「死んじゃうんじゃないか？」

と心配する局員も数多くいたが、

「心配するな、幾ら殺しても死なないから」

と説得した。

「ギンガ！根性入れてぶっ放せ！」

ギ「超すごいディバインバスター！！」

レジ「第２編隊、突入開始！」

砲撃の嵐が金髪を襲い、上空はラーティから発射されたロケット弾やミサイルで
覆い尽くされた。それでも金髪は何度も再生する。

金髪「くそっ！これじゃあぶげっ！攻撃する暇もがふっ！ないじゃ

ないか！」

地面に手を置き、全方位に向けて地面から錬成した鉄の矢を放ったが、
ティン・マンのシールドによってはじかれた。

ティーナとディエチは狙撃ポイントからの攻撃を続けていた。
ディエチはうれしそうにイノーメスカノンを連射し、ティーナはバリアジャケット姿になって、空中をホバリングしながらＧＡＵ－８アヴェンジャー３０ｍｍガトリング砲を両手で持ちながら射撃をしていた。

ティ「あー楽しい、さいっこう♪ん？あれは…みんな伏せて！！
　白い悪魔の砲撃が来るわ！！」

局員「うわあああああああ！！」

な「悪魔じゃないもん！エクセリオンバスター！！」

戦場と化した元廃棄都市群の空をピンク色の砲撃が横切り、金髪に命中した。

金髪「ぬわあああああああああ！！」

「来たか、なのは！」

ギ「なのはさん！」

な「今日は調子がいいからバンバン撃てるよ！」

「よし、なのははそのまま砲撃を続けてくれ！他の部隊は攻撃しながら
退避ポイントまで後退しろ！」

ゲンヤ「頼むぜ、嬢ちゃん！よしみんな、後退するぞ！」

「なのは、これを」

な「これって！」

「今日だけだぞ？派手にやれ！」

な「やった！行くよ、レイジングハート！」

レイハ「おーらい（あーあ、またあれ使うんだ）」

俺がなのはに渡したのは、いつか封印した原子崩し（メルトダウナー）の
データだった。

な「スターライトメルトブレイカー！！」

金髪「原作よりもつえええええええええ！！」

レジ「ウィル、全部隊が退避ポイントまで後退完了したぞ！」

「了解だ。エディ！」

「え～それでは、廃棄都市群の本日のお天気をお伝えしま～す」

金髪「なんだと？」

ようやくその時になって、金髪は自分の周りいた敵が後退していることに気がついた。

「本日は晴れのちターボレーザー、時々震盪ミサイルとプロトン魚雷の雨が
　降るでしょう」

その瞬間、金髪は緑色の光の中に消えた。

テクター級とインペリアル？級には、ターボレーザーが１隻あたり６０基
搭載されている。エクリプス級には５００基ある。それらが一斉にレーザーを
放った。と同時にインペリアル？級とエクリプス級から出撃したＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機から震盪ミサイルとプロトン魚雷が無数に発射された。震盪ミサイルは、プロトン魚雷とよく似たミサイル兵器の一種だが、
プロトン魚雷ほどの威力がない反面、それをはるかに超える亜光速度で巡航する
ことができる。

１０分後。

ゲンヤ「これは…」

ギ「うわー…」

な「やりすぎなの」

「テヘッ♪」

退避ポイントの外でみんながため息をついた。それもそのはず、半径5？、
深さ2キロのドでかいクレーターができていたのだから。

「で、金髪は？」

な「探しに行かないと」

ティ「あれじゃない？」

ディエチ「そうだね」

「お、あれか」

金髪「くっ…」

あれだけの攻撃を食らってもなお、金髪野郎は自己再生し立ち上がろうと
している。

レジ「まだ動けるというのか！？」

だがそこで金髪の右腕がチリとなって消滅した。

な「えっ！？」

ギ「なんで！？」

金髪「そんな…ここまで…か…」

右腕以外の個所もだんだんと消滅していく。

「残念ながらお前はもう1度死ぬことになるな」

金髪「残念だよ、まったく」

「なに、アテネのミスでここに飛ばされたんだろ？また新しい人生があるさ」

金髪「そうだといいんだけどな」

「ではさらばだ…同志よ」

金髪「同志か…あながち間違っていないな…」

そう言い残して金髪は消えていった。

な「結局、彼は何者だったの？」

「俺と同じ転生者だよ」

ティ「さてと、後片付けしないとね」

「はぁ…」

ギ「このクレーター…どうするんです？」

ゲンヤ「山が1つ入るくらいでかいぞ」

「確かに…ん？ディエチ、あのクレーターの底を見てくれ。何か動いてないか？」

ディエチ「えっと、あれ、水が出ていますよ。いやあれはお湯だ！」

な「お湯？」

「地面から出てくるお湯…つまり」

ティ「温泉よ！」

「エディ！あの辺の土地全部買っとけ！温泉は俺のもの～♪」

半年後に「クラナガン温泉」として一般客も利用できるようになり、様々な効能があることで有名になった。管理局の保養施設も併設してあり、温泉に入って日頃の疲れを解消しようと多くの局員が訪れるようになった。

秘密裏に地下にパイプを通して屋敷の大浴場でも温泉が楽しめるようにしたので、なのは達は大喜びであった。

ヴィヴィオ「すべすべ～♪」

イクス「つるつる～♪」

キャ「わ～い♪」

カナ「…我々はまだ若いから関係ないのでは？」

第８８話：アテネェ…（後書き）

鋼の錬金術師のアニメを一気に見て、つい書いてしまいました。

次回は…ていうか明日は面接じゃん！まだ履歴書書いてねーよ！

面接対策とかしてねえし！詰んだｏｒｚ

なんとか書けるようにします。

では

第８９話：カラオケ行こうぜ！！（２０１１／７／２９　本文削除）

どうも皆さん、カニンガムでございます。

えー、大変申し訳ありませんが、２０１１年7月２９日に発表された
「【重要】歌詞の無断転載に関するお知らせ」を受けまして、
第８９話を全て削除させて頂きます。ほとんど歌詞だらけなので…

他にもこの小説内に歌詞などがあったら消していくつもりですので、
どうかご了承ください。まあほとんどないと思いますけど。

著作権って色々とめんどくさいですね。まあこれくらい厳しくしないと
いけないのも事実ですが。

今後もどうかよろしくお願いします。

第９０話：私も！

またまたある日。

～屋敷、リビング～

イクス「お父様！お願いがあります！」

「ん？どしたの？そんなに改まっちゃって」

イクス「私も魔法が使いたいので教えてください！」

な「あれ、イクスって魔法使えないんだっけ？」

イクス「お姉様たちだけずるい！」

「とりあえず魔力がどれくらいあるかを計らないとな」

咲夜「計測器でございます」

ヴィ「なんでうちにあるんだよ！？」

咲夜「備えあれば憂いなしというやつですよ」

「じゃあさっそく」

「ん～とランク的にはＡＡかな」

な「すごいじゃん！」

イクス「でもお姉様には負けちゃった…」

「昔はマリアージュのコアを無限に作る能力とそれらへの指揮・命令能力が
あったからなぁ。今はもう使えないだろ？」

イクス「使い方が分からないよ」

ティ「マリアージュ出てこいって言えば出てくるんじゃない？」

シャ「そんな簡単にはいかないでしょ」

イクス「マリアージュ出てきて！」

イクスがそう言った瞬間、イクスの目の前に魔法陣が現れる。

シグ「召喚の魔法陣！？」

ザフィ「だがマリアージュのあれこれはウィルが何とかしたはずでは？」

「俺もそう思ってたんだが…」

魔法陣が輝き、そして…

何も出てこなかった。

イクス「あり？」

ス「あれ？」

「なにもいないな」

ティ「こういうことじゃない？マリアージュを作ることはできなくなったけど、
その代わりに他の何かを作って召喚することができるんじゃ！」

ヴィ「他の何かってなんだよ？」

ティ「…さあ？」

「イクス、何か召喚したいものってあるか？」

イクス「ん～お父様に任せる！」

「それが一番困る」

5分ほど悩んだ結果。

「よしイクス、これかぶれ」

イクス「何このヘルメット？」

「学習装置（テスタメント）だ」

みんな「学習装置（テスタメント）？」

「脳に技術や知識をインストールするための装置だ。視覚・聴覚・味覚・
嗅覚・触覚の五感全てに対して電気的に情報を入力する。これでイクスの頭に召喚しても問題なさそうな物のデータを入れてみる。終わったらそのデータの中からイクスが好きにチョイスして召喚してみればいいんじゃね、ということだ」

は「それって、危なくないんやろ？」

「心配するなって。んじゃスイッチオン」

3分後

「はいおしまい。イクス、どんな感じだ？」

イクス「ほんと色々な情報が入ってきた！これなら選べるね」

ティ「試しに何か出してみたら」

イクス「じゃあこれ！」

そう言ってイクスが召喚したのは。

シグ「ひいいいい！！！」ずざざざざ！！

3匹のフルフルでした、サイズは小さいけど。

は「シグナム？」

ヴィ「こいつ、確かフルフルだったっけ？」

シグ「そ、それだけは…イクス、早く消してくれ！頼む！」

イクス「えーでもこれかわいいのにー。でもシグナムお母様の言うことだから」

シグ「…ウィル、なんであいつのデータまで送ったんだ！」

「え、いや、いいかなーって」

シグ「ちょっと模擬戦しようか？」

「すいませんでした」

イクス「じゃあこれはどうかな？」

次にイクスが出したものは。

ティ「…メタルスライム？」

「いや、Ｔ－１０００だな」

ギ「なんか見た感じ金属って感じですね」

「そりゃ全身液体金属だしな。銃弾受けても平気だ」

ス「いいじゃないですか！」

イクス「じゃこれは！ってここじゃ狭いから無理だ」

「じゃ外でやるか」

～庭～

イクス「いっくよ～！」

で、出てきたのが。

「ちょっとまてえええええええ！！！！」

ティ「ご主人様、なんてものを教えたの！！」

エヴァンゲリオンでおなじみ、最強の使徒の「ゼルエル」だった。

ヴィ「でけえよ！！」

イクス「じゃあもうチョイ小さく」

ゼルエルはイクスの命令どおりに小さくなり、ウィルと同じ位の大きさになった。

ザフィ「で、これは何ができるのだ？」

イクス「えーと、ゼルエル！薙ぎ払え！」

ゼルエル「ぎゃーす」ぴかー

頭部から発射された光線は、空に向かって飛んで行った。

イクス「……ん？」

ス「どこにいったの？」

ティ「……何も起きないね」

その時。

「かんちょおおおおお！！」

「どうしたエディ、そんなに大声出しやがって」

「だ、第1月面基地から東に２０？の地点で大爆発を観測！直前にミッドから
謎の光線が飛んできました！現在調査中です！」

「あーエディ、それなら心配いらん。やったのはイクスだ」

な「月に穴開けちゃったの！？」

は「あんな所まで届いたんかい！」

「エディ、どれくらいの穴が開いた？」

「えー、深さ2？、半径3？のクレーターができました」

みんな「」

「…イクス、それ使っちゃ駄目、ぜったい」

イクス「えー！」

「あれだ、命の危険にさらされた場合にのみ使ってよし」

イクス「はーい」

結局、その後も色々と召喚して、デフォルトで何を出すかを決めた。

すばり、

「最高に不機嫌な時のティーナの人格を植え付けたＴ－１０００」

である。

「Ｔ－１０００ならそう簡単に壊せないし、キレてるティーナの人格を
のせているから多分勝てる」

イクス「わーい！」

ティ「ちょ、ちょっと待った！なんで私なの！？」

「だってお前、怒ると人が変わったかのように大暴れするじゃん？
それの有効活用ってやつだよ」

は「でもイクスはきちんとコントロールできるんやろか？」

シグ「それは確かに気になるな」

シャ「イクスちゃん、今の状態でどれくらいのＴ－１０００を出せるの？」

イクス「ん～、１個大隊までなら余裕で出せるしコントロールできるよ」

ス「１個大隊って？」

「約１，０００人だな」

ギ「１，０００人！？」

な「まるで軍隊なの」

ヴィ「でもこれで一方的に負けることはないな」

「それでも油断は禁物だぞ？」

こうしてヴィヴィオ、カナリア、イクスは、まだ１０歳未満なのにレアスキル持ちという肩書きを持ったのである。

後にＳｔ．ヒルデ魔法学院で「最強（最凶）の３姉妹」と呼ばれる
ようになるのは
まだ誰も知らない…

第９０話：私も！（後書き）

やべえ短い。

まあいつものことなんですけどね。

次回はすずかについて。

では

第９１話：すずかの秘密（前書き）

２０１１／７／２９　一部編集

第９１話：すずかの秘密

Ｓｉｄｅ　すずか

どうも、私、月村すずかです。
あ、もう結婚したからすずか・月村・ロンバートになるのかな？
まあいいや。

実は私、ウィル君に言っていないことがあるんです。
それは、私のお姉ちゃんと私は「夜の一族」と呼ばれる吸血鬼なんです！
結婚するまでに言おうと思ってたけど、今日の今日まで言えずにいました。

でも！今度こそ言わなきゃ！ウィル君は自分の秘密を全部話してくれたんだから
私も話さないと気が済まないの。

だから今夜は絶対に言うんだ！ウィル君、待っててね！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「はっくしょい！！」

ドゥーエ「あら、ウィルさん。風邪ですか？」

「なんだろな。きっとどこかで俺のことを話している奴がいたんだろう」

ドゥーエ「そうですか。それはそうと、仕事して下さいね」どんっ！

「…何この書類の山」

ドゥーエ「２ｍくらいありますけど頑張ってくださいね♪」

「……」かちゃっ、ごおおおおおおおっっ！！！

俺は無言で火炎放射機を取り出して書類の山に向かって炎を放った。

ドゥーエ「わあああああ！！何してんですかウィルさん！？」

「全部燃えちまえええええ！！　汚物は消毒だあああ！　ヒーハーッ！！」

ドゥーエ「ウィルさんが壊れちゃった！」

トーレ「何の騒ぎだ、ってなんだこれは！？」

セッテ「しょ、消火器！誰か消火器持ってきて！」

クアットロ「火炎放射機を使っているウィル様…かっこいい」

ドゥーエ「あ、もう駄目だこいつ」

結局、局長執務室は半焼し、ドゥーエにこてんぱんにされた。

「なんでこんな魔法とかが発展している世界なのに紙媒体でやりとりするんだよ？
いいじゃん全部データで」

ドゥーエ「言い訳無用ですよ？」ゴゴゴゴゴ…

「はいすいませんでした」

～夜、屋敷～

「あーもー今日はひどい目にあった」ぐてー

な「ウィル君、今日執務室が燃えたんだって？」

は「なんやて！？」

シグ「何をしたんだ？」

「いやな、まず書類の山があったんだよ」

シャ「それで？」

「なんか俺の中の何かが壊れたらしく、火炎放射機持ち出して全部燃やした」

ヴィ「ぶーーーっ！！」

ツ「ヴィータちゃん汚いです！」

アギト「なんで燃やしたんだよ！？」

「だって、ねぇ？」

ザフィ「いや、ねぇとか言われても…」

すずか「いくらなんでも燃やしちゃだめだよ」

アリサ「確かに書類はめんどくさいわよね」

ス「わかります、それ！」

ギ「あんたは書類の書き方が分からないだけでしょ」

ス「もう書けるよ！」

な「昔は時間かかってたもんね～」

ス「ううう…」

「やっぱ書類なくして全部データ化したほうがいいと思うんだ」

カ「電子化するということですか？」

「そういうこと。その方が仕事の効率も上がるし、紙の無駄遣いも減るしさ。

管理局で使う紙はティッシュペーパーとトイレットペーパーだけでいい！」

な「そうだけど、なんだかんだ言っても紙は使うんだよね」

は「せやな。ちょっとした事をメモしたり」

「まあな。でも局長室にはデータで持ってくるようにさせよう」

ヴィ「それせこいぞ！」

「いいじゃん！」

深夜。

すずか「ウィル君…」

「今日はすずかだったな」

すずか「えへへ、頑張っちゃうよ？」

あは（ｒｙ

「ふう…」

すずか「ウィルく～ん…」

「どした？」

すずかを見ると、いつもとは違う目をしていた。普通の夜の営みの後は、
目がトロンとしているのだが、今のすずかはなんというか、獲物を見つけた獣のような目だった。

「すずか？」

すずか「…いただきま～す」かぷっ

「かぷっ？」

あ…ありのまま　今起こった事を話すぜ！

『俺はすずかとS○Xし終えたと思っていたら、いつのまにか首を噛まれて
　血を吸われていた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが
俺も何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…
催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

すずか「…ごちそうさま♪」

2分くらい血を吸ってすずかは満足げだった。だが

すずか「…あ」

その満足げな顔がどんどん青ざめていくのが月明かりの中でわずかに見えた。

「あの、すずか？」

すずか「ごめんさない！私、気が遠くなっていて、気が付いたら…」

「いいから落ち着け、な？落ち着いてから話してくれ」

そしてすずかは全てを話した。

自分は「夜の一族」と呼ばれる吸血鬼であることを。

「……質問してもいいか？」

すずか「うん…」

「吸血鬼って言うとあれか、コウモリとかに変身できたりするのか？」

すずか「へ？」

「あとニンニクだめとか十字架だめとか」

すずか「いや、そういうのはないよ」

「ん？じゃあ驚異的な身体能力以外には特に何もないのか」

すずか「そうだね」

「なら問題ないな」

すずか「えっ？で、でも私は吸血鬼なんだよ？」

「だからなんだよ?吸血鬼だから拒絶するとかあり得ないよ」

すずか「ウィル君…」

「昔スバルとギンガにも言ったんだが、俺には俺の考え方があるし、すずかにはすずかの考え方がある。そういった意思がある限り、お前は人間だ。ちょっと体の作りが違うだけでな。なぜなら人間は魂の、

心の、意思の生き物だからだ。故に俺はお前を拒絶することなど絶対にしない。

もしそんなことする奴がいたら、そいつら全員たたき潰して犬の餌にしてやる」

すずか「ウィル君!」

そう言うとすずかは俺の胸で静かに泣き始めた。

すずか「ありがとう…ぐすっ…受け入れてくれて…」

「…愛する妻を拒絶するなんてことはしないさ」

すずかが泣き止むまで俺はしっかりと彼女を抱いていた…

第９１話：すずかの秘密（後書き）

し、シリアス？シリアル？
俺はシリアルが好きだな、うん。

次回はヴィヴィオ達のことを書こうかなとか考え中。
では

第９２話：思い出

またまたある日。

～屋敷、リビング～

ヴィ「何してんだウィル？」

風呂から上がったヴィータがタオルを頭からかぶって出てきた。

「ん？ああ、写真の整理をね」

シグ「いつの写真だ？」

「この前だよ」

シャ「あ、これはヴィヴィオちゃん達の入学式の写真ね？」

ザフィ「初々しいな」

な「制服姿が似合っているの」

ス「そうですね～」

ギ「…確か同じ日でしたよね？校舎が一部崩壊したのって…」

「あー…だな」

は「あれは…ひどかったな～」

すずか「入学初日にあそこまでやるとはね…」

アリサ「日本でやったら即逮捕じゃない？」

ヴィヴィオ「私悪くないもん！」

カナ「正当防衛だな」

イクス「お姉様たちは悪くないです！」

と言う3姉妹。

「それはわかっている。だけどあの時はやりすぎだ」

実際には何があったのか？

～4月、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院～

偉い人「…以上で入学式を終了します」

ヴィヴィオ「やっと終わった～」

イクス「あの人お話長すぎー」

カナ「無駄に長かったな」

3姉妹はめでたくＳｔ．ヒルデ魔法学院に入学し、魔法についてきちんと学ぶことになっている。

もっとも、「きちんと」学ぶと言ったが、カナリアは元ロストロギアであり、独自の戦闘魔法を編み出すほど頭がいいので、特に学校で学ぶ必要はなく、ヴィヴィオとイクスの護衛といった役割の方が強い。

イクス「お父様たちはどこだっけ？」

ヴィヴィオ「確か混んでいるから外で待っているって！」

カナ「では行こうか」

と、その時。

???「どけどけっ！」

イクス「きゃあっ！」どかっ

ヴィヴィオ「イクス！」

後ろから走ってきた学生に突き飛ばされ、イクスが転んでしまった。

イクス「だ、大丈夫…」

カナ「そこの学生！女性を転ばせといて謝りもしないのか！」

???「はぁ？俺の走る場所にいるのが悪いに決まっているだろ？」

カナ「お前、頭おかしいんじゃないか？一度医者に脳味噌見てもらえ」

???「なんだと、このガキが！お前ら、やっちまえ！」

学生が怒鳴ると3姉妹はさらに１０人の学生に囲まれた。どうやらこの学校の
不良グループのようだ。彼らのことを知っている学生たちは近づこうとしない。

ざわざわ

「またあの人たちですの？」

「入学式に新入生いじめかよ…」

不良「ったくお前が何も言わなければこんなことにはならなかったんだぞ？え？」

カナ「いつの時代になってもこういう輩はいるものだな。いやはや」

不良「聞けよ！」

カナ「イクス、怪我はないか？」

イクス「うん。ありがと」

不良「だから聞けって言ってんだろ！！」

無視された不良は足元にあった石ころを掴んでイクスに向かって投げつけた。

だが、ヴィヴィオがそれを受け止める。

ヴィヴィオ「あのさ…いい加減にしてよね？」

ゆっくりと近づいてくるヴィヴィオに不良グループは後ずさる。

不良「なんだ、やるっていうのか？かかってこい！」

カナ「姉上、わたしも参加するぞ？」

ヴィヴィオ「おっけー。ちょっと本気出すからね？」

カナ「ちょっと？私は最初から本気で行かせてもらうぞ？」

ヴィヴィオ「じゃあ私もそうするよ」

次の瞬間、ヴィヴィオは虹色の光に包まれ、光の中から出てくると
大人モードに
なっており、それプラス聖王の鎧も出現していた。

カナ「ほう、姉上は大人モードか。じゃあ私も真似してみようかな」

カナリアもまた、背中から出現した黒い翼で自分の体を隠し、５秒
後には
大人モードになり、左手には水晶玉、右手には本ではなく、氷で作
り出した
でかい槍を装備していた。

不良「なっ！？どういうことだ！？さっきまでガキだったじゃねえ
か！」

カナ「ただの変身魔法だよ。さて、お前ら、私のかわいい妹に謝る
気になったか？」

不良「やなこった！」

ヴィヴィオ「じゃあ…少し、頭冷やそうか？」

カナ「かちかちに凍らせてやろう」

不良「」

ヴィヴィオ「はあああああ！！！」

一瞬で不良たちの懐に入ったヴィヴィオは、右手に魔力を集中させて地面に
たたきつけた。その結果、不良たちの足元は爆発し、哀れ不良たちは空に
向かって吹き飛んだ。

不良「ぐわあああああああ！！」

だが、空にはカナリアがいた。

カナ「ふっ」

楽しそうに笑いながら水晶玉を軽く動かすと、不良たちにかかっている重力が
変化して、あっという間に地面とキスする羽目になった。

不良「ぶべっ！！」

さらに追い打ちをかけるかのように、その上から氷の矢と槍が何十本も
不良たちに降り注いだ。

不良「ぎゃあああああああああ！！！！」

～戦闘の少し前、学校正門付近～

は「ヴィヴィオちゃん達遅いな」

シャ「もう友達作って遊んでいるんじゃない？」

シグ「いいことだな」

１０分後

な「遅すぎない？」

ヴィ「だよな」

「確かにちょっと遅いな。よし、手分けして探しに」

俺がその後の言葉を話すことができなかった。なぜなら敷地内で爆発が起き、
校舎の方から悲鳴が聞こえてきたからだった。

ス「なんですか！？」

「わからん！行くぞ！」

みんな「うん！」

現場についてみると、そこには。

不良「うっ、ずびばぜんでじだ」

カナ「気持ちがこもっていない！！もう1回！！」

ヴィヴィオ「さっきのもう1回やってみる？」にこっ

不良「ひいいいいいいい！！」

イクス「お姉様、あのもういいのでは…」

なぜかイクスに向かって土下座している学生が十数人。
その前で仁王立ちしているヴィヴィオとカナリア、しかも大人モード。
その後ろで徐々に崩れつつある校舎。よく見ると氷の矢とか槍とかが刺さっており、地面にも霜ができている。

「あーあー、こんなにぶっ壊しやがって…」

な「ひどい有様なの」

ギ「うわー…」

「ヴィヴィオ、カナリア、イクス、何したんだ?」

ヴィヴィオ「パパ!」

カナ「父上!」

イクス「お父様!」

ざわざわ

「おい、あの人ってミッドの守護神じゃ?」

「てことはあの子たちは彼の子供?」

カナ「実はカクカクシカジカだったのだ」

「なるほど、シカクイムーブだったのか…」

ヴィ「今ので分かるのかよ!?」

「え、わかんないの？」

ヴィヴィオ「ヴィータママ、わからなかったの？」

ヴィ「うぐっ」

「まあいいや、さてそこの不良君」

不良「ははははい！」

「さて、俺の娘達が怒るとこういうことになるということは充分理解して
もらえたと思う。もし君達がこれからも今日みたいにしていくのであれば、
多分娘達はまた怒るだろうね、今日より」

不良「」がくがくぶるぶる

「ま、良い学生生活を！」

その後駆けつけた教師たちに少し怒られた。なんで少しで済んだのかというと、
あの不良グループは前々から問題視されており、親が教会のお偉いさんとかで
手出しができなかったそうな。

ちなみにぶっ壊れた校舎は俺がちょちょいと直した。錬金術ってすげぇ。

んで、先の戦闘を遠くから見ていたコロナ・ティミルが、なぜかヴィヴィオ達に
憧れたらしく、友達になったそうな。

～屋敷、リビング～

「で、コロナとは仲良くなっているのか？」

ヴィヴィオ「うん！親友だよ！」

カナ「そうだな」

イクス「あの子も召喚魔法使うから気が合うの！」

「そうか、それはよかった」

カナ「しかしあの学校の授業は退屈だな」

ヴィヴィオ「えー面白いよ！」

な「カナリアは頭いいもんね」

「暇なら執務官試験の問題でも問いてれば？」

カナ「それはいい考えだ、父上」

数日後、授業を聞かないで他の勉強をしている、と学校から呼び出されたのは内緒である。

第９２話：思い出（後書き）

入学式ネタです。
月神楽様、ご意見ありがとうございました！

ゴールデンウィーク…予定とかないし。
ていうか大学ほとんどないから毎日がゴールデンウィーク…

次回はほんとどうしよう…
では

第９３話：よく考えたら

やっぱりある日。

～地上本部、局長執務室～

「なあインフィーに若本」

≪とても久しぶりですねマスター≫

〈なぁんの用だ、主よ≫

「お前らってさ、なんかこう、レヴァンティンとかグラーフアイゼンみたいな
武器に姿変えられないの？バリアジャケット展開するだけにデバイス
使っている気がするんだが」

≪変えられますよ≫

「マジで！？ていうかもっと早く教えろよ！」

〈聞かれなかったからな〉

「うっ…で、どう変化するんだ？」

≪私は日本刀っぽいのに。カートリッジシステムもついてますよ≫

〈私は直刀だ。他にはない機能が付いているぞ〉

「なるほどね、他には？」

≪マスターが設定すれば槍になったりとか銃みたいになったりとかもできますよ≫

「銃はいいや、いつでも出せるし。じゃあインフィーには槍を追加してと」

〈私はどうする？〉

「二刀流でやってみたいから銃剣２本にする」

「ジェイル！ちょっとそこらの機械借りるぞ！」

ジェ「いいよ」

技術研究部門に行って、あとは例のＢＧＭを。

♪特攻野郎Ａチーム　メインテーマ

キュイ～ンガリガリガリッ！！

≪いたたたたた！！！！≫

「あ、電源切るの忘れてた」

15分後

「よしこれでいいだろう！」

≪…痛かった≫

〈私は平気だ！〉

「じゃあ早速使ってみるか」

俺はデバイスを持って近くの訓練場に足を運んだ。すると。

な「そこ！そうじゃなくてこうするの！」

局員「はい！」

ヴィ「死にたいのか貴様ら！本気出せ！」

局員「イエス、マム！」

なのはとヴィータが新入りの訓練を担当していた。

「おーやってるやってる」

ヴィ「ん？ウィル！」

な「えっ、ウィル君？」

「やっほー」

な「きょ、局長に敬礼！」

「いやそんなのいいようん」

ヴィ「何しに来たんだ？」

「いやな、デバイスを少しいじくったからそのテストにな」

な「じゃあ私と模擬戦する？」

「いいぞ」

ヴィ「よーし、お前ら下がれ！」

局員Ａ「局長と高町一尉の模擬戦か」

局員Ｂ「すごいことになりそうだな」

「じゃあバリアジャケットに傷がついたら終了な」

な「それでいいよ」

「まずは若本を使おう。モード1」

〈了解！〉

そういうと若本はきれいな直刀に変わった。

ヴィ「そういえばウィルがデバイス使って戦うの初めて見るな」

な「確かに。いつも他の魔法使っているしね」

「で若本。他にはない機能ってなんだ？」

〈実はな…ごにょごにょ〉

「…それせこくね？かなり」

〈勝てばいいのだよ、主〉

「まあそうか。でもいきなりそれやるとなのはのやる気がなくなるから最後にしよう」

〈それもそうだな。でもモード2に切り替えるぞ〉

すると2本の銃剣に変化する。

な「あれ、さっきのじゃないの？」

「あれは最後に使う。それじゃあ行くぞ！」

な「うん！」

ヴィ「始め！」

な「行くよ！アクセルシューター！」

２４発の誘導魔力弾がウィルを襲う。だが当たる直前に全て真っ二つになった。

な「あれ？」

「舐めるなよなのはぁ！こんな攻撃が俺に通用するとでも思っているのか！！」

な「くっ、ディバイン…」

「やってみるか。バイヨネットシューター」

〈はぁぁぁいいいい！！！！！！〉

２４本の銃剣（の形をした誘導魔力弾）が高速で飛んでいき、砲撃チャージ中のなのはを襲う。

な「にゃあああああ！バスター！！」

なのはは砲撃を放ち、飛んでくる銃剣を吹き飛ばした。
だが。

「チェックメイトだ、なのは」

な「うぇっ！？」

いつの間にか後ろに立っていたウィルに銃剣を突き付けられていた。

な「いつの間に…」

「お前がディバインバスター撃った時にはすでに後ろにいたよ」

な「気付かなかったの…」

ヴィ「ていうかさ、剣を試したいならシグナム呼べばいいんじゃないか？」

「ん～それもそうか。じゃあ呼ぼう」

な「どうやって」

「えっと局内の放送システムにつないでっと」

その時シグナムははやてと一緒に仕事をしていた。

は「あー疲れたー」ぐてー

ツ「はやてちゃん、頑張ってください！」

シグ「もうすぐ休憩ですから」

『あーあーシグナム・ロンバート二等空尉に告げる！』

ア「なんだ！？」

いきなり部屋の上についているスピーカーからウィルの声が聞こえたので
みんなびっくりしている。

『大至急第２訓練場まで来ること！３０秒以内にな！』

シグ「無茶言うな！！」

『さもないと…あの音声データが流れるかもね…ふふふ』

シグ「行ってきます、主！」

は「…がんばりや～」

ヴィ「ひでえことするな」

「１０秒経過」

な「あ、来たの」

シグ「ウィル！」

「おお来た来た」

シグ「あの音声データってまさか」

「シグナムだｎｙ」

シグ「だあああ！もう言うな！！それで何の用だ？」

「実はデバイス改良したから模擬戦してくれね？」

シグ「そういうことか、いいぞ」

な「うわ、模擬戦って聞いただけで機嫌よくなってる」

ヴィ「戦うことしか頭にないんじゃないか？」

「インフィー、出番だ。モード１」

≪了解です、マスター≫

シグ「ほう、良い剣だな」

「そんじゃあやるか！」

な「スタート！」

シグ「本気で行くぞ！」

「ちょ！こっちは実験みたいなもんなんだから本気出すな！」

シグ「レヴァンティン！カートリッジロード！」

「聞いてねえし！ソニックブレイド！」

刀を振って、刀身から白い刃が飛び出し、高速でシグナムに飛んで行った。

シグ「早い！くっ！」

だがシグナムはその全てを弾き飛ばした。

「さすがだな。じゃこれはどうだ！インフィー、カートリッジロード！」

≪ラジャー！≫

2発のカートリッジが排出された途端、インフィーの刀身が見えなくなった。

な「あれ、見えないよ！」

ヴィ「ほんとだ！」

シグ「見えなくてもそこに刀身はあるはずだ！紫電一閃！！」

シグナムは炎を纏ったレヴァンティンを見えないが存在するインフィーに
向かって振り下ろした。

「ま、確かにそう考えるよな。でも違うんだな」

だが、レヴァンティンはインフィーに触れることなく何もない空間を
切っただけだった。

シグ「なに？」

「チェックメイトだ」

刀身を再び見えるように変化させてシグナムに突き付ける。

シグ「…降参だ」

ヴィ「おいウィル！あれはどういう仕組みだ？」

「刀身を透明にするのは簡単だろ？」

な「まあウィル君のバリアジャケットにも透明になるモードがあるしね」

シグ「しかしさっきはどういうことだ?まるでお前の剣の刀身が消えたようだったぞ」

「消えたようではなくて消えたんだよ。刀身を一時的に消滅させたから
レヴァンティンはすり抜けたのさ」

シグ「すごい技術だな」

ヴィ「じゃ次はあたしとだな!」

「モード2の槍はまた今度にして、若本、モード1」

〈行くぞ!〉

な「レディーゴー!」

ヴィ「おらあああああ!!」

「お前の負けだ、ヴィータ」

ヴィ「は?何言って…」

シグ「ヴィータ、右肩を見ろ」

ヴィ「へ?あああ!!」

見るとヴィータのゴスロリ服の右肩に傷が付いていた。

ヴィ「いつやったんだよ！」

「そりゃなのはゴーって言ってからだ」

な「見えなかったよ？」

シグ「ウィルが刀を構えて、っておいウィル、刀身はどこに行った？」

ヴィ「え？」

みんながウィルを見ると、持っている直刀の刀身がなかった。

ヴィ「また消したのか？」

「何言ってんだ、ヴィータの後ろの壁に刺さってるだろ？」

な「あ、ほんとだ」

「からくりはこうだ。この直刀の柄の中にはカートリッジが入っていてな、
ちょこっと魔力を流すとカートリッジが爆発して、刀身がすっ飛ぶんだ。
これで不意打ち攻撃ができる」

ヴィ「せこいぞ！！」

「まあそうだよな。ちなみにスペツナズ・ナイフを元にしてみた」

ヴィ「ううううう、悔しいいいいい！！」

「まあそう怒るなって、なでなでしたげるから」なでなで

ヴィ「うへへへへ／／／／」

な「ウィル君、ヴィータちゃんだけはずるいの」

シグ「同意見だな」

「じゃお前らにも」なでなで

な「にゃあああああ／／／／」

シグ「えへへへへ／／／／」

続く…

第９３話：よく考えたら（後書き）

ついに５月ですね。
作者は５月病になってしまいました。
やる気が出ません。

次回は…書くのもめんどくさい。
では

第９４話：せっかくの休みだし、その１

～１日前、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院～

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン…

ヴィヴィオ「終わった～！」

イクス「疲れちゃったよう」

コロナ「一緒に帰ろう！」

カナ「そうだな。ところでコロナ、明日から３連休だが予定はあるのか？」

コロナ「ん～特にないかな～」

ヴィヴィオ「じゃあうちに泊まらない？」

コロナ「えっ？でもいいの？」

イクス「お父様は歓迎するってさ！」

カナ「どうする？」

コロナ「ちょっと待って、お母さんに許可もらうから」

2分後

コロナ「いいってさ！」

ヴィヴィオ「じゃあ荷物とかまとめ終わったら連絡して！コロナの家まで
迎えに行くから！」

イクス「楽しみだ～！」

コロナ「わかったよ！」

カナ「ではまた後でな」

3人娘は迎えの車に乗って家に帰って行った。

コロナ「ヴィヴィオ達のお屋敷に行けるんだ…やったぁ！」

～車内～

ヴィヴィオ「あ、咲夜さん？ヴィヴィオです。明日お友達を迎えに行って
もらいたいんですけど」

咲夜「かしこまりました。住所さえ教えていただければすぐにでも」

ヴィヴィオ「向こうから連絡が来たら迎えに行って欲しいです」

咲夜「わかりました。車を準備しておきます。では」

ヴィヴィオ「あとパパにもメールしておこっと」かちかち

カナ「うれしそうだな、姉上」

ヴィヴィオ「もちろん！」

イクス「私も楽しみだよ！」

～地上本部、局長執務室～

「ん？ヴィヴィオからか」

ドゥーエ「何かあったんですか？」

「いや、ヴィヴィオ達の友達が明日から家に泊まりにくるそうだ。お泊まり会ってやつかね」

ドゥーエ「明日から3連休ですものね」

「ま、せっかくの休みなんだし、学校のことは全部忘れて思いっきり遊ばせるさ」

ティ「ご主人様優しいの！」

「ただし宿題と予習・復習が終わってからな！」

ドゥーエ「ひでえ」

次の日、朝１０時。

コロナ「ヴィヴィオ？準備できたよ！」

ヴィヴィオ「わかった～。じゃあ家の前で待っててね」

２分後。

コロナ「う～んいい天気だな～ん？」

ふと上を見ると何かが飛んでいるのが見えた。

コロナ父「確かラーティ…とかいう飛行機じゃなかったか？」

コロナ母「管理局の新しいやつね」

後ろにいたコロナの両親がそんな会話をしていると。

コロナ「あ、あの車かな？」

道路を見ると、黒いＳＵＶ３台がやってきた。その車列はコロナの前で
止まって、中からメイド服の女性が下りてくる。

コロナ（メイドさん！？）

コロナ父・母（リアルに見るの初めてだ！）

メイド「コロナ・ティミル様ですね？」

コロナ「は、はい！」

メイド「お迎えにあがりました。どうぞお乗りください」

コロナ「はい！」

コロナ父「えっとメイドさん？うちの子が迷惑をかけるかもしれないが
よろしくお願いします」

メイド「責任を持ってお預かりいたします」

コロナ母「じゃあねコロナ。楽しんでくるのよ？」

コロナ「はーい！」

～屋敷地下、中央警備室～

メイドＡ「客人の乗っている車列、まもなく正面ゲートに到達します」

メイドＢ「監視カメラ、及び振動センサーで確認。敵性反応ありません」

メイドＣ「上空にいるラーティから報告。車列から半径２，０００ｍ圏内に敵性反応なし」

メイドＡ「正面ゲート開け」

メイドＢ「了解、ゲート開きます」

～車列～

コロナ「うわあああ！とっても広い！」

コロナは、走っている車の窓から敷地の中を見て驚いている。

メイド「コロナ様、まもなく停車いたします」

コロナ「あ、はい！」

ヴィヴィオ「あ、来た！」

イクス「コロナ～！」

カナ「うれしいのはわかるが落ち着け」

車の扉が開いてコロナが飛び出す。

コロナ「やっほー！」

ヴィヴィオ「ようこそ我が家へ！」

な「ヴィヴィオ、その子がコロナちゃん？」

ヴィヴィオ達がリビングに入ると、非番のなのはがのんびりしていた。

コロナ「はじめまして！コロナ・ティミルです！」

な「私は高町なのはだよ。あ、今はなのは・高町・ロンバートだったっけ。
まあゆっくりしていってね」

コロナ「はい！」

咲夜「コロナ様、私はこの屋敷のメイド長の咲夜と申します。お荷物は既に
お部屋に運びました。何か用があれば遠慮なく申して下さい」

コロナ「は、はい」

イクス「じゃあ早速遊ｂ」

咲夜「旦那さまからの伝言で、遊ぶのは宿題と予習・復習が終わってから、だそうです」

イクス「」

カナ「まあ量はそれほどないからとっとと終わらせよう」

コロナ「そうだね！」

４５分後。

４人「終わったああ！！」

カナ「では何をして遊ぶ？」

コロナ「この広いお屋敷でかくれんぼとかどう？」

ヴィヴィオ「あー…」

コロナの提案に3人は何とも言えないような顔をした。

コロナ「え、何か問題でも？」

イクス「前に3人でそれをやったんだけど」

カナ「広すぎて探すのに数時間かかってな」

ヴィヴィオ「鬼だったイクスが疲れて泣いちゃって」

コロナ「そ、そんなに広いんだ…」

イクス「これが見取り図だよ」

コロナ「」

ヴィヴィオ「そろそろお昼だし食堂に行こうよ。午後の予定はご飯食べながら
考えればいいし」

カナ「そうしよう」

～食堂～

な「あ、みんな。もうご飯できてるよ」

コロナ「おいしそう！」

イクス「私達のお母様達はみんなお料理上手なんだよ！」

カナ「では…」

みんな「いただきます！」

コロナ「おいしい！」

カナ「いつもながらおいしいな」

な「ありがと！」

そこに。

ス「ただいま帰りました～」

な「あれスバル？早いね」

ス「午前中で仕事終わっちゃったんですよ」

な「そうなんだ、お疲れ様。はいご飯だよ」

ス「いただきます！がつがつもぐもぐ…」

コロナ「」

ヴィヴィオ「コロナ？」

コロナ「はっ！だ、だいじょぶだよ」

イクス「まあ、あれを見たら誰でも驚くよね」

カナ「確かに」

コロナ「なんなの、あの量は…」

ス「うが？ふがもがふがが？」

カナ「スバル母上、食べながら話さないほうがいいぞ」

ス「もぐもぐゴクン！ふう、ところでその子は誰？」

イクス「学校の友達の」

コロナ「コロナ・ティミルです！」

ス「コロナちゃんね。私はスバル・ナカジマ・ロンバートだよ。よろしくね！」

コロナ「スバルさんもヴィヴィオ達のお母さんなんですか？」

ス「まあそうだね」もぐもぐ

コロナ「ねえイクス、何人お母さんがいるの？」

イクス「１２人だよ！」

コロナ「」

ス「あれ知らなかったのかな？」もぐもぐ

な「らしいね」

ヴィヴィオ「よーし遊ぼう！」

コロナ「いやっほー！」

あっという間に夕方。

イクス「疲れたー」

カナ「まだまだこれくらい」

そこに。

「ただ」

ティ「いま」

イクス「お父様！」

ヴィヴィオ「おかえりなさい！」

な「ウィル君早いね」

「俺の執務室から書類が消えたから仕事が早く終わってな」

ティ「やっぱ電子化したほうが便利だよ」

「で、こちらがコロナちゃんだっけ？」

コロナ「はい！」

「知ってるかもしれないけど、俺はウィリアム・T・ロンバートだ。よろしく」

コロナ「はい！今日はお世話になります！」

「なに、いつでもウェルカムだよ。さてそろそろスバルが餓死するころだから
夕食の準備をするか」

カナ「そうだな」

コロナ「餓死！？そんなおおげさな」

ス「ウィルさん…おなか減った…ひもじいよぅ…」

な「ねっ？」

コロナ「」

そこに咲夜がやってきた。

咲夜「旦那様、はやて奥様からの連絡で、あと1時間程で帰宅するそうです」

「そうか、シグナム達も一緒だろ？」

咲夜「その通りです」

ティ「アリサちゃんとかすずかちゃんは？」

咲夜「すずか奥様は現在会議中とのことで、帰宅は少し遅れそうです。
アリサ奥様はたった今仕事が終わったようなので30分ほどで帰宅します。ギンガ奥様はチンク様他4名と飲み会に行くそうで、
帰宅は23時ころになるそうです。カリム奥様は教会本部での仕事が
たまっているそうで、帰宅は遅くなるかと」

「分かった。フェイトとティアナはしばらく帰れないんだっけ？」

ティ「そうだね。シャーリーと一緒に仕事してるし」

「じゃ飯の支度するか」

コロナ「ねえヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「ん？」

コロナ「ヴィヴィオのお父さんかっこいいね。料理もできるなんて」

イクス「そうかな？」

コロナ「うちのお父さんなんてお料理できないもん」

カナ「前に父上が言っていたな。確か…」

イクス「『料理はできるけどしない男は問題ないが、料理ができない男はクズだ』だよ」

ヴィヴィオ「それだ」

コロナ「へぇ～そんなことを…」

カナ「将来男と付き合う時の基準の１つだな」

３０分後

アリサ「ただいま～」

１時間後

はやて「た」

ツ「だ」

ア「い」

アギト「ま～」

シグ「なんだこれ」

ヴィ「まあいいじゃんか」

シャ「そうね」

ザフィ「だな」

「さて、それでは」

みんな「いただきまーす！」

3人娘「おいしい！」

ス「がつがつもぐもぐ…」

コロナ「やっぱりおいしい！」

シャ「元気が出るわね」

は「うまいご飯があるから仕事も頑張れるんよな～」

シグ「そうですね」

ヴィ「おかわり！」

ザフィ「ヴィータよ、最近妙に食べるようになったな」

ヴィ「成長期なんだよ！」

アギト「ぷっ！それ以上成長するのｋ」

ヴィ「……」

アギト「すいませんごめんなさい」

ツ「無言でデバイス構えるとか怖いです！」

ア「食事のときくらい落ち着け」

ヴィ「ぐぬぬ」

な「アリサちゃん、今日はどうだった？」

アリサ「だいぶ実力が付いてきたって感じかしら。基礎はもう完ぺきだから
あとは模擬戦で力を付ければ…」

ス「もぐぐもぐもがもがもぐもぐ！」

「スバル、何度言わせるんだ。食べながらしゃべるな」

ス「もぐもぐゴクン！すいません…」

は「で、なんて言ったんや？」

ス「えっと教導官って大変ですねって言ったんです」

アリサ「まあ色々と大変ね。でも救助隊の方が大変じゃない？」

ス「確かにそうですね。毎日が訓練ですから」

「じゃなんで今日は早く帰れたんだ？いつもは遅いのに」

ス「なんか訓練隊長が

『俺、午前の訓練が終わったら午後デートに行くんだ…』

って言っててそれで午後は訓練なしに」

「…なんつー死亡フラグ」

ティ「おそらく次の訓練で彼女に振られたから八つ当たりされるんじゃない？」

ス「まさか、それはないでしょう」

夕食後、しばらくして。

「あれ」

な「あらら」

ヴィヴィオ達がいるリビングに行くとみんなソファーで寝ていた。

シャ「遊び疲れかしら」

「そうかもな。よし運ぶか」

寝室まで運んでベットに寝かせる。

ス「みんな楽しそうな顔していますね」

「いいことじゃないか」

こうしてコロナのお泊まり1日目は無事に終了した。

おまけ

隊長「くそおおおおおお!!ふられたあああああああ!!」

他の隊員「やっぱりな」

隊長「お前ら!!俺がいいって言うまで走ってこい!!」

ス「そんな理不尽な!!」

隊長「良いから走れ!!他のメニューも普段の3倍だ!!」

ス「ひえええええええええ！！！」

第９４話：せっかくの休みだし、その１（後書き）

コロナのお泊りです。

なんか最近パソコンの調子が悪い。掃除しようかな。

次回もお泊まり。

では

第９５話：せっかくの休みだし、その２

翌日、朝、６時。

プルルルルッ　ガチャ

メイド「はい、こちらロンバートでございます。どちらさまでしょうか？」

コロナ父「あ、どうも。そちらでお世話になっているコロナ・ティミルの父です。
　実はちょっと相談があるのでロンバートさんに代わっていただけませんか？」

メイド「わかりました。少々お待ち下さい」

コンコン

メイド「失礼します」

メイドが寝室に入ると、そこにはなのはとはやてと一緒にウィルが寝ていた。
休みなのでまだみんな爆睡中である。

メイド「旦那様、お電話です」ゆさゆさ

「うみゃ…誰からだ？」

メイド「コロナ様のお父様からです。相談したいことがあると」

「…わかった」

「お電話変わりました、ロンバートです」

コロナ父「コロナの父です。朝早くにすいません」

「いえいえ、それで相談したいこととは？」

コロナ父「それなんですが、今そちらにうちの娘がお世話になっていると
思うのですが、もしよろしかったら連休明けまでそちらで預かって
もらえないでしょうか？」

「連休明けまで？別にかまいませんけど、どうしてですか？」

コロナ父「実は私と妻が仕事の関係で連休明けまで急きょ出張になってしまいまして」

「そういうことですか。わかりました、責任を持ってお預かりします」

コロナ父「ありがとうございます！出張から帰ったらまた連絡しま

す」

「了解です」

7時ちょっと前。

ティ「みんな、朝だよ！起きろー！」

ティーナはヴィヴィオ達が寝ている部屋で4人を起こしている。

コロナ「あう～、あ、ティーナさんおはようです」

ヴィヴィオ「う～ん、あと7分45秒…」

ティ「なんだその微妙な時間は？」

イクス「うみゅ～もう食べられないよ～」

ティ「古典的な寝言ほざいてんじゃねえよ！起きろ！」

カナ「構わん…吹き飛ばせ…むにゃ」

コロナ「何を？」

ティ「さあ？」

みんな「いただきます！」

はやて「静かな朝やなあ」

ヴィ「スバルとギンガががつがつ飯を食っていないからだろ？」

シャ「スバルちゃん、今日は早朝訓練だっけ？大変よね、救助隊って」

「だな。ところでコロナちゃん」

コロナ「はい？」

「実は今日の朝君のお父さんから電話があってね、連休明けまでうちで泊ってもいいってさ」

コロナ「ほんとですか！？」

イクス「やったあ！」

「そこでだ、今日ははやて達休みだろ？」

はやて「せやね」

シグ「そうですね」

シャ「そう言えばギンガちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんは？」

ザフィ「もう仕事に行ったぞ。昼には戻るとか言ってたな」

な「休みなの」

「だからみんなでどこかに行かないか？」

ヴィヴィオ「遊園地！」

イクス「水族館！」

カナ「動物園」

コロナ「どこでもいいです！」

「…見事に意見が合わないな」

な「にゃははは…」

「エディ、今日の遊園地、水族館、動物園の混雑予想は？」

「えー、一番混むのは水族館ですね。なんでも新種の魚が展示されているとか」

「新種か、食えるの？」

「いやそれは無理だろ」

「じゃあ興味なし。他は？」

「動物園は改修工事のため２０％の施設が閉鎖中なので行ってもつまらないかと」

「じゃあ遊園地だな。ご飯食べ終わってから３０分後には出るぞ」

ヴィヴィオ「わーい！」

～遊園地、８時～

係員「まもなく開園します！」

イクス「やっぱり混んでいるね」

カナ「連休中だからな」

な「地球にあるディ〇ニーランドほど混んではいないけどね」

ヴィヴィオ「ディ〇ニーランド？」

は「遊園地みたいなもんや」

コロナ「そこにも行ってみたいです！」

「夏休みにでも行くか」

は「まずはジェットコースターや！」

「お、新しくなってるな。なになに、ようこそゲロ彗星号へ？なんだこれ？」

ティ「なんでも乗った人全員がゲロ吐くからこんな名前になったんだって」

シグ「もっと普通なジェットコースターはないのか？」

「あ、向こうにあるな」

ヴィヴィオ「きゃあああああああ！！！」

コロナ「ひゃあああああああ！！！」

カナ「ひえええええええええ！！」

イクス「うひょおおおおおお！！」

「うむ、楽しそうだな」

シャ「ほんとね」

ヴィ「お、これ射的か？」

係員「やってみますか？」

な「やりたい！」

カナ「私もやってみよう」

係員「動いている鶏を全部落として下さい。カラスを落とすとポイント2倍です」

5分後。

な「やった！137，000点だ！」

係員「おめでとうございます！100，000点を超えたのでこのぬいぐるみが賞品です」

な「かわいいの～」

カナ「私の点数は530，000だ」

な「」

係員「」

ひゅ～どろどろどろという音がぴったりのお化け屋敷。

コロナ「こここここ怖いよ」

ヴィヴィオ「だだだ大丈夫だよ！みんなで手をつなげば」

カナ「そうだな。ほらイクスよ、行くぞ」

イクス「まままだ心の準備が…」

ヴィヴィオ「って！ママ達は来ないの！？」

シグ「気を付けてな～」

は「うちらは出口で待ってるよ～」

「健闘を祈る！」

４人娘「そんな～！」

ピチョン　ピチョン

ヴィヴィオ「廃墟みたいだね」

カナ「意外とクオリティ高いじゃないか」

コロナ「まだ出てこないよね？」

イクス「お願いだから出てこないで！」

カナ「いいか、お化け屋敷と言うのは突然上から生首とかが降ってきたり」

ごとんっ

イクス「ひっ！何これ…」

生首＜ハーイ

イクス「」

カナ「ああいう窓がいきなりがたがた揺れたり」

窓＜ガタガタッ！

コロナ「ひいいいいいっ！！」

カナ「とにかくお客を驚かせ怖がらせる場所なんだぞ？お願いした

ところで
　出てこないわけがない」

お化け「ぐおおおおおおおおおお！！！！」

ヴィヴィオ「にゃあああああああああ！！！」

カナ「な？」

コロナ「なんでカナリアはそんなに冷静なの？」

カナ「この世に存在しないもので驚かされてもな」

首なしナース「きゅえええええええええ！！！」

コロナ「うわあああああああ！！！」

カナ「お化けとか幽霊なんて存在しないのだから怖がる理由がないだろうに」

血まみれ赤ちゃん「いたいよ…助けてよ…ままぁ…」

イクス「ひいいいいいいいい！！！！」

カナ「いるんなら出てこいってんだ」

ヴィヴィオ「カナリアすｇ」

がいこつ「うひゃひゃひゃひゃひゃ！！」

ヴィヴィオ、イクス、コロナ「わあああああああああ！！」

カナ「ほら出口だぞ」

ヴィヴィオ「ほ、ほんとだ」

ぼろぼろ服の女「こっちよ…」

コロナ「あ、どうも」

「お疲れさん。楽しかったか？」

3人娘「怖かったよ！」

イクス「首が上からゴロンって！」

ヴィヴィオ「窓がガタガタしたの！」

コロナ「首のない看護婦さんが…」

カナ「ま、それだけだったがな」

な「カナリアすごいね」

イクス「最後にいたぼろぼろの服をきた女の人は係員さんだったのかな？

出口はこっちって言ってたし」

「なんだって？」

カナ「いや、出口の近くにぼろぼろ服の女がいてな…」

「…そんなのいたかな？あのすいません」

係員「はい？」

「このお化け屋敷って最近改装とかしました？」

係員「いえ、オープン時からずっとこのままですよ？」

「そうですか…」

イクス「どうしたのお父様？」

「いやな、前にティアナとここに遊びに来た時（特別編：ティアナと）には
そんなお化けいなかったんだが…」

係員「…ひょっとしてお客様が見たのはぼろぼろ服の女ですか？」

カナ「そうだぞ。知っているのか？」

係員は周りに誰もいないことを確認してから静かに話し始めた。

係員「また出たのか…いえ、実はここの建設工事中にホームレスの女性が
入り込んで、建設機械に巻き込まれて亡くなるといった事故があったんですよ。それできちんと供養してから建てたのです

が、
　それ以降、このお化け屋敷でたまにその女性が出てくるように…」
は「つつつつまり、それって…」
ヴィ「本物の幽霊ってことか！？」
係員「おそらく…でも、呪われるとかそういうことは今までないので大丈夫かと」
カナ「」
イクス「カナリアお姉様？」
ヴィヴィオ「…立ったまま気絶してる」

レストラン

＜いらっしゃいませー
＜ぱぱどこー！
＜このシチューを作ったのは誰だ！

みんな「いただきまーす」

「たまにはこういうところで食うのも悪くないな」

な「そうだね」

は「うまいやんか！」

ヴィ「はやて、ケチャップほっぺについてるぞ」

カナ「うむ、うまいじゃないか」

シグ「シャマル、それとってくれ」

シャ「はい」

コロナ「午後もいっぱい遊ぼうね！」

イクス「うん！」

午後、仕事が終わったギンガとアリサとすずかも合流して一緒に遊んだ。

そして夜。

「そろそろパレードの時間だな」

ヴィヴィオ「行こう！」

コロナ「うん！」

パレードでは、様々な衣装を身にまとったダンサー達が踊っていた。

ヴィ「おお、すげー！」

カナ「きれいだな」

イクス「ほんとだね！」

空には花火も上がり周りからも歓声が上がる。

コロナ「今日もとっても楽しかった！ウィリアムさん、ありがとうございます！！」

「そう言ってもらえるとうれしいよ」

こうしてコロナのお泊まり2日目は無事に終了した。

またおまけ

ふられた隊長「最後の楽な日はいつだった！？」

スバル「昨日です！」

ふられた隊長「最初のつらい日はいつだ！？」

スバル「明日です！」

ふられた隊長「よーし！腕立て伏せ１００回！」

スバル「ウィルさん助けてえええええええ！！！」

1970

第９５話：せっかくの休みだし、その２（後書き）

その２終了。
次回はコロナが家に帰ります。

では

第９６話：せっかくの休みだし、その３

次の日、朝食後。

イクス「お父様、今日は何して遊ぶんですか？」

「あー悪いな、今日はちょっと行くとこあるから無理だ」

イクス「ぶー」

ヴィヴィオ「どこにいくのウィルパパ？」

「秘密だよー」

ヴィヴィオ「えーずるーい」

「てなわけで、行ってくるわ」

ギ「いってらっしゃーい」

玄関前に止めておいたスポーツカーに乗ってあっという間に屋敷を離れた。

ス「ふーお腹いっぱい…ところでウィルさんどこに行ったんです？」

は「それがうちらにも話してくれんのよ」

アリサ「ついてくるなって言ってね」

ヴィ「でも気になるんだよな」

シグ「半年に1回はこうして出かける日があるのはわかっているのだが…」

ザフィ「少なくとも女ではないな、半年に1回だから」

シャ「何をしているのかしらね」

カナ「まあいい。コロナ、部屋で遊ぼうではないか。いろいろあるぞ」

コロナ「そうだね。行こう！」

は「ついてくるなと言われるとついて行きたくなるもんやな」

ス「あ、それわかります！」

アリサ「私たちの知らない場所で何をしているのか確かめないと！」

ヴィ「でもいいのかよ？プライベートのことだし怒られるんじゃないか？」

は「その時は、まあなんとかなるやろ！」

ギ「スバル、私は知らないからね！」

シグ「主、やめた方がよろしいのでは…」

ザフィ「やめとけシグナム、もうこうなった主は止められん」

はやてとスバル、それにアリサはワゴン車に乗って追跡を始めた。

まずウィルの車が止まった場所は。

は「スーパー？」

どこにでもある大型スーパーマーケットだった。

アリサ「何買うのかしら？」

ス「お菓子とか！」

は「それはスバルが食べたい物やろ！」

ス「うっ！」

5分ほどでウィルは買い物袋を抱えて出てきた。そしてトランクにしまうと

再び走り始めた。

は「よし、追いかけるで！」

次にウィルが車を止めた場所は。

ス「お花屋さん？」

は「なんか意外やな、ウィル君が花なんて」

ウィルは包んでもらった花を車の助手席に置いてまた走り始めた。

アリサ「何の花かしら？よく見えなかったわ」

は「後でわかることやで！」

そのままウィルの車はクラナガンを出て高速道路に乗って走り続けた。

３０分くらい走ったところで高速を降りて、今度は一般道を３０分ほど走った。

アリサ「どこまでいくのかしら？」

ス「もうずいぶん走りましたね」

は「この辺は随分前に過疎化して何もない地区のはずやけどな」

ス「あ、あれ！」

ようやくウィルの車が止まったのを見て、はやてはワゴン車をウィルに
見えないようにビルの陰に止めた。

は「行くで！」

3人がこそこそついていくと、ウィルは荷物を持って鉄製の扉の鍵を開けて
中に入って行った。きちんと鍵を閉めてからウィルはさらに奥へと進んでいった。

は「あー鍵かけられちゃついていけんな」

アリサ「ちょっと、この廃ビルの屋上からなら見えるんじゃない？」

ス「そうですね！」

は「確か双眼鏡が車にあったはずや！」

壊れかけのビルの屋上にたどり着いた3人は双眼鏡片手にウィルを探した。

ス「あ、いました！」

アリサ「ほんとだ、あれはウィル…」

スバルの指さした方向にいたウィルを見て、アリサは話すのをやめた。
ウィルが右手に持っているのはスーパーで買ったと思われるお菓子。
そして左手に持っている花は。

アリサ「…ねえ2人とも、帰りましょう」

は「え?なんでや?」

ス「そうですよ、ここまで来たのに」

アリサ「ウィルの持っている花を見て。あれが何か分かる?」

ス「う~ん、白い花?」

は「ようわからんな」

アリサ「あれ、白菊よ」

ス「菊?」

は「あ!」

アリサ「はやてはもうわかったわね?あの花はお墓に備えるための花よ」

ス「じゃあウィルさんはお墓参りに来たってことですか?」

アリサ「おそらくね…」

は「でも誰のお墓やろ？」

ス「あ、奥の方に何かありますよ」

は「あれは…石碑？」

アリサ「墓にしちゃ大きいわね」

「ふう、やあみんな。また来たよ」

俺は石碑の前に荷物を置いて、スーパーで買ったお菓子を並べた。

「今日はお菓子を一杯買ってきたぞ。喜んでくれるといいけどな」

石碑の後ろに置いといたバケツとたわしを持ってきて、そばの水道の水で
石碑を洗い始める。

「この半年、本当に色々なことがあったよ。結婚したり、ハネムーンに行ったり…
　でも、君達と約束したことはしっかり守っているよ。だから安心してくれ」

きちんと洗ってから、最後に花束を置く。

「俺には神様から様々な力がある。権力もある。だけど、それでも君達を
　守ることはできなかった。人々は俺のことを守護神とか言ってるけど、
　俺はただの人間だ。それ以上でもそれ以下でもない」

俺は石碑の前で直立不動のまま敬礼をした。

「…また半年後に来るよ、みんな。それまで俺はきちんと約束を守ろう。
　君達のような犠牲者は決して出さない。決してだ…」

そう言って俺は石碑を後にした。石碑の表にはこう書かれていた。

「罪のない１４６名の子供達、ここに眠る」

そして裏には、違法研究所等で行われた人体実験のせいで犠牲となり、

その後判明した子供達の名前が書かれていた。

ウィルの車が家に向かって走っていくのを廃ビルの屋上から3人が見ていた。

ス「…なんか悪いことしちゃった気がする」

アリサ「やめとけばよかったわね」

は「そうやな。うちらも帰ろうか」

3人もまた、ワゴン車に乗って屋敷へと帰って行った。

家に帰るとシグナムが訓練スペースで自主練をしていた。

シグ「おやウィル、帰ったのか？」

「今帰ったばかりだよ」

シグ「どうだ模擬戦でも」

「ちょっと今日はそんな気分じゃないからパス」

シグ「むう…」

部屋に戻り一息ついていると通信が。

トーレ「ウィル、第２４無人世界の違法研究所を殲滅した」

「そうか、よくやった。せっかくの休みなのに悪いな」

クア「ウィル様のためなら何でもしますわ～」

「そ、そうか。それで？」

セッテ「人体実験のために誘拐された民間人１２名を無事に保護しました」

「わかった。教会の病院に搬送してくれ。こっちで手配しておく」

トーレ「わかった。交信終了」

俺は聖王教会のカリムに通信をつないだ。

「おーいカリム。そっちの病院にこれから民間人が１２名運び込まれるから
　手厚く保護してくれ」

カ「あの、もしかして…」

「ああ、違法研究所で囚われの身になっていた人たちだ」

カ「わかりました。急いで手配します」

「よろしく頼む」

その後、リビングに降りてヴィヴィオ達と一緒に人生ゲームをしたり、
トランプをしたり、魔法の練習をしたりと、楽しい時間はあっという間に
過ぎて行った。

そして夕方。

咲夜「コロナ様、お父様からお電話ですよ」

コロナ「お父さんから？」

コロナ父「コロナ、元気か？たった今クラナガンに戻ったところだ。
お母さんもいるぞ。家に帰っておいで」

コロナ「わかったよ～」

イクス「どうしたの？」

コロナ「お父さんが帰ってきなさいだって」

ヴィヴィオ「もう帰っちゃうの？」

「また明日学校で会えるんだからいいじゃん」

カナ「そうだな」

コロナ「じゃあ帰る準備を」

メイド「コロナ様、お荷物をまとめておきました」

コロナ「はやっ！」

「じゃあ俺が送っていくよ」

ギ「わかりました」

ヴィヴィオ「じゃあね、コロナ！」

イクス「また明日ね！」

コロナ「ばいばーい！」

「どうだった？楽しかったかい？」

コロナ「はい！とても楽しかったです！」

「そうか、それはよかった。これからもうちの娘たちと仲良くしてやってくれ」

コロナ「もちろんですよ。親友ですから！」

コロナ「ただいまー！」

コロナ母「お帰りなさい。元気にしてた？」

コロナ父「？あなたは…」

「直接会うのは初めてですね。ウィリアム・T・ロンバートです」

コロナ父「ああ、あの電話の！コロナの父です。娘がどうもお世話になりました」

「いえいえ、大変お行儀のいい娘さんでしたよ」

コロナ母「本当にありがとうございました」

「機会があったらまた遊びに来て下さいね。では失礼します」

コロナ父「随分若い人だったけど、礼儀正しいいい人だったな」

コロナ母「そうね。さすが局長さんね」

コロナ父「え、局長？」

コロナ母「ええ、あの人は時空管理局の局長よ」

コロナ父「な　ん　で　す　と」

コロナ「お父さん知らなかったの？」

こうしてコロナのお泊まり会は無事に終了した。

おまけ

ヴィヴィオ「あああああ！！宿題まだ残ってた！！」

イクス「私もだ！！！」

カナ「なんだ、2日前にやってなかったのか？」

「宿題がまだ終わっていないと聞いてやってきた」

ヴィヴィオ「げっ」

「さて、10分で終わらせないと1週間おやつ抜きだぞ！」

イクス「鬼！悪魔！」かりかり

ヴィヴィオ「うおおおおおおお！！」かりかり

カナ「頑張れ、姉上に妹よ」ずずー

第９６話：せっかくの休みだし、その３（後書き）

ちょいとシリアス？みたいな。

次回は…

では

第９７話：もうタイトルなしでいいですか？

みなさん、こんにちわ。正義の味方のエディです。嘘です。
艦長と行動するようになってもう１０年以上になります。時が過ぎるのは
早いものですね。私も最初の時と比べてだいぶ変わったような気がします。
艦長に教えてもらい、様々なデータを取得しました（アニメとかアニメとか）。

さて、以前艦長にお願いされていたＱシップ『マナサス』の改装工事が
無事に終了しました。これはすごい船になりましたよ！

全長：３２０ｍ
全幅：３２．３１ｍ
載貨重量：６６，０００トン
主な武装
・ミディアム・ターボレーザー４基
・６連装超音速対艦ミサイル発射装置４基
・Ｍｋ４９ＲＡＭ　２１連装発射機４基
・船底ムーンプール内に５３３ｍｍ４連装魚雷発射装置１基
・喫水線下に対魚雷ロケット発射装置２基
偽装格納庫内にラーティ１６機、重武装型ラムダ級シャトル２機を収納可能。
船底ムーンプール内に小型潜水艇２隻を収容・運営が可能。
また、船体全体をデュラスチール合金で覆っている。

動力源は大型魔導炉。スクリューはとっぱらって、代わりに
ポンプジェット・プロパルサー2軸を搭載。

これで海賊なんてこてんぱんにぐちょんぐちょんにしてやれます！

…実は最初、ミディアム・ターボレーザーじゃなくて戦艦に搭載されている
ものを乗っけたんです。ええ、サイズとかの問題も全部解決してうまくいった
と思ったんですが、月面基地内に作ったドックに水入れて浮かせたら…

ターボレーザーが重すぎてひっくり返ってしまいました。
なので仕方なく違うものに変更せざるを得なかったのです。ほんとに残念です。

さて次です。広域探索中の第3艦隊の様子を見てみましょう。
今の所新しい世界は発見していませんね。その代わりに資源が豊富な
無人世界はたくさんありましたけど。許可が下りれば根こそぎ掘りだす
のですが。

資源と言えば、既に我々の本拠地に文字通り腐るほどあるのを忘れていました。

次々と新しい保管庫を作っては資源を入れて、作っては入れてを繰り返して
いたら、デス・スターと造船所の周りが保管庫だらけになってしまい大変な
事になってしまいました。なので、造船所にておにゅーの超大型保管庫を
作ろうと考えていました。サイズはデス・スターよりも大きい円形の箱、
といった感じになるはずでした。

しかし途中で計画はとん挫しました。そんなでかいもん作れねえよ！
と言う理由で。ですが資源の置き場所に困っているのもまた事実。

仕方ないのでとりあえず虚数空間に置いておくことにしました。これ以外に
いい方法が浮かばなかったので。虚数空間内では魔法使えないし
次元航行艦も動きませんが、我々の戦艦は動力源が魔導炉ではないので
特に問題ありません。

私の仕事は他にもたくさんありますが、その中に艦長の資産の管理というのがあります。艦長は色々な銀行に資産を分散しています。
例えばスイスに本拠地を置くＵＢＳ　ＡＧ。ここにも艦長の口座があります。
定期預金にしてあり、中にはこの前大量に売った資源の売上の一部の１４５億５，０００万アメリカドルが入っています。日本円に直す

と…

わーお、約1，2兆円ですねｗ

また、ミッドの銀行にも一応口座があります。ミッドには日本みたいに
たくさんの銀行があって、その中でも信頼性が高い１０の銀行に口座を
開きました。７つは定期、３つは普通預金で、定期の方には合計で８０億ミッドが入っています。１ミッド＝約１００円なので、８，０００億円ですね。はい、どうもごちそうさまでーす。

んで普通預金。月に１度、聖王教会の口座を通じて各所にある孤児院の口座に
送金されています。主に違法研究所で捕まっていて精神的・肉体的に追い詰められた子供たちがいるところです。彼らがきちんと社会復帰できる
までは送金を続けろ、と艦長が言ってました。子供には優しいんですね。

言い忘れていましたが、艦長は管理局局長と言う立場ですが、給料はほとんどもらっていません。なぜかというと、新しく作った船の
費用とか新型質量兵器を導入するための費用等がかさんでしまい、管理局の
予算を超えそうになったため。

というのは表向きの理由。本当の理由は、

「これ以上金が増えても困る。冗談抜きでその辺でばらまきかねない」

からだと。なので年間で1ミッドしか給料はもらっていません。
残りは全部管理局の予算の中に組み込まれています。

残りの問題があるとすればそれは…

最近面白いアニメがないことですね。なんか見る気が湧かないんですよ、ええ。

おや、スイスの銀行から電話ですね。艦長につなぎましょう。

～地上本部、局長執務室～

ドゥーエ「局長、エディさんからお電話です」

「わかった。どうしたエディ？」

「艦長、スイスのＵＢＳ　ＡＧ銀行よりお電話です」

「つないでくれ」

？？？「こんにちわお客様、サミュエル・メンドーザです」

彼、サミュエル・メンドーザは俺の口座を担当している銀行員である。

「ああ、どうもサミュエル。そっちの調子はどうだい？」

サミュ「おかげさまで元気にやっております」

「それはよかった。ところで今日は？」

サミュ「ええ、実はお客様の定期預金口座の１つがあと3日で満期となります。
いかがなされますか？」

「そうか…いや、今ちょっと忙しいんでね。３日後にそっちに行くから直接話そう」

サミュ「かしこまりました。空港はチューリッヒ空港でよろしいですか？」

「うん、そうだな」

サミュ「では当日お迎えに向かいます」

「そうか、よろしく頼むよ。では」

俺は電話を置いて久しぶりに行くスイスの光景を思い浮かべていた。

「スイスか…懐かしいな」

ドゥーエ「そうなんですか？」

「よく覚えてるよ…物価が高くて」

ドゥーエ「」ずるっ

「そうだ、ドゥーエも一緒に行こうぜ」

ドゥーエ「まあ、よろしいのですか？」

「いいってことよ。明後日には日本に行って、それから飛行機で行くか」

ドゥーエ「はい！」

こうしてドゥーエはウィルと2人で旅行する権利をもらえたのだった…

1996

第９７話：もうタイトルなしでいいですか？（後書き）

スイス、あの国はいいですよ。自然が良くて、空気もうまくて、料理はどこにでもあるような味で、物価が高くて、ミネラルウォーターと
間違えて炭酸水買ってそれを一気に口に含んで死にそうになって…
それでも良い国なのです。

次回はそんなスイスに行きます。
では

第９８話：すいすいす～（前書き）

タイトルは気にしないでください…

第９８話：すいすいす～

２日後、俺とドゥーエは日本の成田国際空港にいた。ここからチューリッヒまでは
直行便で約１２時間３０分。魔法使えばあっという間だけど、ドゥーエは初めての
旅行だしのんびり行こうかなと。

ドゥーエ「あ…」

「どした？パスポート忘れたとか？」

もちろんドゥーエのパスポートなんてないから偽装しましたが何か？

ドゥーエ「いえ、そうじゃなくて…」

「じゃあなんだ？」

ドゥーエ「…私って戦闘機人じゃないですか？体内に金属パーツがあるので
あそこにある金属探知器に引っかかっちゃうんじゃ…」

あそこ＝手荷物検査場

「そこはあれだ、なんとかするさ」

そんなことを話していると俺たちの番になった。荷物を隣のかごに放り込んで
堂々と金属探知機を通る。うんともすんとも言わなかった。

次にドゥーエの番。ドキドキしながら通過する…

警備員「はい、問題なし。次の人」

ドゥーエ（なんで!?）

ドゥーエ「ちょっとウィルさん!なんで鳴らなかったんですか?」

「エディがちょいっとね」

金属探知器のコンピュータをエディがハッキングしてなんとかしたのだった。

ドゥーエ「心臓に悪いです…」

「まあいいじゃん。さて空弁も買ったし、レッツスイス!」

ドゥーエ「スイス!」

「はいスイス」

ドゥーエ「ここが…」

チューリッヒはスイス北部にあるスイス最大の都市で、金融・経済・商業・文化の
中心地である。国際サッカー連盟（ＦＩＦＡ）を初めとし、多くの国際機関・国際
団体の本部も存在する。チューリッヒ湖北部のリマート河が流れ出す場所に位置し、
緑豊かなチューリッヒベルクやユトリベルクなどの丘陵に囲まれている。

チューリッヒ国際空港に着いたのは現地時間で１４時だった。飛行機から降りて
税関を通過し、荷物を受け取ると、こっちに近づいてくる人がいた。

「ＵＢＳ　ＡＧの者です。車をご用意いたしました。どうぞこちらに」

「ああ、どうもありがとう」

外で待機していたロールスロイスに乗ってチューリッヒの中心街へ向かう。

ドゥーエ（なにこのＶＩＰ待遇…）

銀行につくと、俺はドゥーエをエレベータに案内して、メンドーザのオフィスがある１２階へ向かった。そこには濃い色調の木製の家具が、
見事にしつらえられていた。そして見事なしつらえは、その部屋の主、
サミュエル・メンドーザにも及んでいた。

サミュ「スイスへようこそ、お客様」

スイス流の如才なさと礼儀を心得たメンドーザは、俺のことを名前で呼ばなかった。
彼の知っている名前は、連れの女性が知らない名前かもしれなかったし、
顧客が自分の国で使っている名前でもないかもしれなかったからだ。
顧客の大多数は、１つの名前しか使わなかったが、何らかの理由でそうでない者もいた。

「またこの美しい国に来ることができてうれしいよ。こちらは俺の秘書だ」

サミュ「おめにかかれて光栄です、チューリッヒでの滞在をお楽しみください」

と彼は言った。俺は彼女の名前を言わなかったし、メンドーザも尋ねなかった。
顧客が従姉妹、姪、仕事の助手、会計士、個人付きトレーナーなど

の若く美しい
女性をともなってくることは、別に特別なことではなかった。メンドーザは、
その女性達の名前も尋ねなかった。ただ、チューリッヒでの滞在をお楽しみ
ください、と言うだけだった。

「飛行機が揺れてね」

俺は嘘をついてドゥーエを壁際のソファーに連れて行った。それから、
窓に近いメンドーザのデスクの前の椅子までやってきた。これであの女性には2人の会話は聞こえない、とメンドーザは思い、この顧客の賢明さを心の中で称賛した。

「昔来た時と変わらないな、この街は。いいことだ。それで満期になった
口座だが、幾ら入っているか確かめたい」

俺はあの大金（約1，2兆円）を5つの口座を分けていた。そのうち2つは、
こちらから何か言わない限りずっと定期預金になっている。そして1つは
普通預金。あとの2つのうち、今回どちらかが満期になったと思われる。

メンドーザが咳払いをし、俺はパスポートを差し出した。それは口座を

開設した時の名前が記されているパスポートだった。オフィスを飾る濃い色調の美しい木製家具は近代的ではなかったが、メンドーザの
デスクの脇のコンピュータは最新型だった。メンドーザは幾つかキーを
押し、口座開設時の書類に記されたサインとパスポートのサインを見比べた。

完全に一致する。これは銀行の手続きの１つで、サミュエル・メンドーザは
そのすべてを崇めていた。それから彼がキーボードを操作すると、満期に
なった口座の残高が画面に表示された。メンドーザはデスクの上のメモの
１枚に慎重にその数字を写し、何も言わずにその紙を俺に渡した。

「４から始まる口座だったか…それにしても…ん～」

思わず唸ってしまうほどの金額だった。元の金額プラス利子でかなり増えていた。さてこれをどうしようか…

「…ナショナル・オーストラリア銀行の口座に３分の１、ダンスク・バンクの
口座に３分の１、残りの３分の１は三菱東京ＵＦＪ銀行の口座に送金してくれ」

サミュ「端数はいかがいたしますか？」

「ここの普通預金口座に入れといてくれ」

サミュ「かしこまりました」

こうして４の口座はすっからかんに。

「あれ、まだ残ってね？」

ならなかった。

サミュ「おや、少々お待ちを」

メンドーザがキーを何回か叩くと。

サミュ「ああ、たった今利子がついたようです」

「なんだ利子か。じゃあそれは現金で降ろすよ」

俺は預金払出書を指さし、メンドーザがそれを渡すと、そこに全額引き落としと書き、アメリカドルで欲しい、とも書いた。

俺は懐からマネークリップを取り出して、利子幾らかな？とか考えていた。

サミュ「先程の利子ですが、８，２３０万９，９４７ドル４８セン

トでございます」

「」

あれ、なんでこんなにあるの？

「…満期になった口座って確か5年契約だったよな？」

サミュ「そうです、なので金利は年2，5％になります」

「ごめんちょっとこんなにいらない」

１４５億5，０００万ドルを5等分にしたから、１つの口座には２９億1，０００万ドル
入っていたはずだ。それの利子が2，５％だから…あ、そうなるか。

結局１５０万ドルを現金で降ろし、残りは普通預金に入れることにした。
現金は、簡素な黒のアタッシュケースに入れられた。高級ナイロン素材で、
一見すると革製に見える。これは銀行のサービスとして顧客に提供していた。
いわば、チューリッヒのちょっとしたお土産だった。銀行名も、その他の
なんのしるしもない贈り物だった。顧客の安全とプライバシーを守らなくては
ならないからだ。

「色々と世話になったな、サミュエル。また今度会おう」

サミュ「これが仕事ですので。いずれまたお会いしましょう」

来た時と同じようにロールスロイスに乗って、チューリッヒ市内のホテルに向かった。

ドゥーエ「それでウィルさん、明日には帰るんですか？」

ホテルの部屋でのんびりしながらドゥーエが聞いてきた。

「とんでもない。明日はスイス旅行だ！ここから電車に乗ってジュネーヴまで行くんだ。どうよ？」

ドゥーエ「いいですね！とても楽しみです！」

「なに、今夜も楽しくやろうぜ？」

ドゥーエ「ウィルさん…／／／」

おまけ：ウィルとドゥーエがあは～んなことをしている時。

は「はっ！」

屋敷でくつろいでいたはやてが突然立ち上がった。

シグ「主？」

ア「どうかしましたか？」

そこに。

な「はやてちゃん！」

アリサ「はやて！」

なのはとアリサもやってきた。

ヴィ「2人ともどうした?」

は「なんか…ウィル君がどこかで女といちゃいちゃしている気がしたんや」

な「私も!」

アリサ「私もよ!」

ザフィ「確かウィルは今出張中のはずだ。そんなことしている暇があるとは思えん」

シャ「そうよね」

ス「1人で出張なんて大変ですね~」ばりばりせんべいをかじりながらスバルが言う。

ティ「え?1人じゃないよ?ドゥーエちゃんが一緒のはずだけど」

みんな「な、なんだってー!」

ギ「ドゥーエさんって愛人の1人じゃ…」

すずか「ウィル君取られちゃった!」

カ「まあ私たち公認の愛人ですからね、あの子たちは…」

ヴィ「文句は言わない…けど」

シグ「…羨ましい」

な「…なの」

第９８話：すいすいす～（後書き）

今回の話は、元海外銀行マンだった父の話を元に書きました。
無駄に外国語ぺらぺらなんですよね。

金利の計算は合っているかどうかわかりません。電卓叩いたので
多分これであっていると思います。間違っていたらすいません。

では

第９９話：すいすいす～２（前書き）

遂に１００万ＰＶ到達しました！本当にありがとうございます！！

第９９話：すいすいす～２

翌日、俺とドゥーエはスイス連邦鉄道のチューリッヒ中央駅を９時に出発する
特急に乗って、スイス第３の都市バーゼルへと向かった。チューリッヒから
東に７５?に位置し、特急を使えば５３分で行ける。ライン河沿いにあり、
スイス最古の大学がつくられた中世の時代から学芸や文化の中心地として
発展してきたバーゼルは、市民によって建てられたヨーロッパ初の美術館を
はじめ、漫画博物館、紙の博物館など個性的なミュージアムが数多くある。
美しい旧市街に代表されるように、歴史的な側面が印象的な町だが、
ヘルツォーク＆ムーロンやマリオ・ボッタなど世界で活躍する近代建築家の
作品や現代美術のギャラリーやプロジェクトが多いのも特徴のひとつである。
ドイツ、フランスと国境を接しており、国際的な都市でもあり、有名な
宝飾時計見本市「バーゼルフェア」などの展示会、メッセや国際会議が多く
開催されている。

ドゥーエ「…ウィルさん、ここって何語を使っているんですか?何を話して
いるのか全然わかんないんですけど」

「ここはドイツ語圏だけどフランス語を使い人も多くいるぞ」

ドゥーエ「で、ウィルさんはどっちも話せると」

「もちのろんだぜ！」

ドゥーエ「なら問題ないですね。それでどこに行くんですか？」

「美術館巡りってのはどうだ？」

ということで最初にやってきたのはバーゼル市立美術館。１６７１年に
開設された世界最古の公共美術館の１つである。自由都市バーゼルで
印刷業などで財を成したアマーバッハ家がコレクションした美術品を
バーゼル市が購入し公開したものが基となっている。アマーバッハ家の
後援を受けたハンス・ホルバインのコレクションをはじめ、西欧絵画の
コレクションが充実している。また、ダダイズムやシュルレアリズムなど、
現代美術も所蔵している。

「ほう、ドービニーの庭のオリジナルか…」

フィンセント・ファン・ゴッホが描いたドービニーの庭。日本にもあるけど
そっちはこれと違って複製らしい。

「でもゴッホ以外知らない画家ばっかだな」

次に行ったのはバイエラー財団美術館。バーゼル郊外のリーヘンにあり、
ギャラリーを経営し敏腕ディーラーとして名を馳せたバイエラー氏が集めた
約２００点のコレクションを所蔵、展示する美術館。ゴッホ、セザンヌ、ピカソ、
ブラック、マティス、ミロ、カンディンスキー、クレー、ピカソ、ロスコ、
バゼリッツなど、後期印象派から現代アートまで、巨匠たちの名作がそろって
いる。また、世界的に活躍する有名建築家レンゾ・ピアノがてがけたミュージアム
建築も必見。外につくられた池とガラスから差し込む光が、美しい空間を演出する
モネとジャコメッティ作品の展示スペースや、モダンアート作品が映える
シンプルな大型スペースなど、名作の数々と見事に調和している。
常設展示のほか、
質の高い企画展もある。

「ここらはよく知っている画家だらけだな」

ドゥーエ「昔の人はこんな絵を描いていたんですね～」

「何考えて書いてたんだか…ん？」

隅の方にとある絵があった。上には注意書きが。

「なになに、この絵を見るとイライラしますのでご注意ください？
なんじゃこりゃ」

ドゥーエ「変な絵ですね…なんて書いてあるんだろう？」

「これはドイツ語だな、えっと上を見ろ？」

2人で絵の上を見る。

ドゥーエ「あ、また文字が」

「ん？右下を見ろ？」

また2人で右下を見る。

ドゥーエ「なんか変な生き物ですね…」

そこには見ている人間をおちょくっているかのように笑っている謎の生物の絵が。
その隣に文字があった。それを読むと。

「…うぜー」

ドゥーエ「え？どうしたんです？」

「これ発想が便所の落書きと同じだ。上見て、下見て、大間抜けってやつだ」

謎の生物の絵の横には、ドイツ語で「ばーか！」と書いてあった。

バーゼルＳＢＢ駅１１時１分発の特急に乗って、今度はスイス連邦の首都、
ベルンに向かった。バーゼルから約１時間で到着する。湾曲するアーレ川に
囲まれた土地をいかして１１９１年にツェーリンゲン公ベルヒトルト５世によって
造られた町がはじまりである。１３世紀から自由都市となりさらに発展して
いった美しい旧市街は、１９８３年にユネスコの世界文化遺産に登録された。
大聖堂や１３世紀の城門につくられた時計塔、彫像が美しい泉（水飲み場）が
点在する町並みを残す一方で、スイス連邦の首都として便利な近代都市の
機能も兼ね備えている。質の高い美術館や博物館も多く、ヨーロッパ最長
ともいわれる石造りのアーケードや地下のケラー（貯蔵庫）など個性的な店が
集まるショッピング天国でもある。広場で定期的に開かれる市場も有名。
また、公園や庭園が多く自然豊かなベルンでは、四季折々に異なる雰囲気を
味わうことができるのも魅力である。

「旧市街を見て回ったら昼食にしようぜ。その後はショッピングだ」

ドゥーエ「ショッピング！楽しみです」

２人で旧市街をゆっくりと歩く。１２世紀末に作られたとされる時計塔や、
高さ１００ｍの鐘楼があるゴシック様式末期の教会などを見て回った。

ドゥーエ「ミッドでは絶対に見れない光景ですね」

「まったくだ」

寓話的な彫刻で飾られた噴水の傍を通って、世界遺産の街を存分に楽しんだ。

昼食を取った後、２人でお土産を購入した。ドゥーエはジェイルとナンバーズの
分を、俺は家族のみんなの分を買った。

「これは…アルフとザフィーラが狂喜するだろう。子供達にはこれでいいか」

ドゥーエ「ウェンディが喜ぶ顔が想像できるわ」

両手にいっぱいのお土産を買って、大満足であった。買い物に夢中だったので、
ローザンヌ行きの電車に乗り遅れてしまった。おやつの時間で有名な１５時
だったので、俺たちは駅構内の喫茶店でくつろぐことに。

「まあ、次の電車が３０分後に来るし、問題ないだろ。それよりも

この大量の荷物どうしようか？」

ドゥーエ「これ全部持ちながら観光はつらいですよね」

「だよな。めんどくさいからミッドに転送しちゃうか」

ドゥーエ「そうですね」

物陰に隠れて、誰も見ていないうちに、俺はお土産などを地上本部の俺の執務室に転送した。

「これでよし」

また電車に1時間ほど乗って今度はローザンヌへ行った。ローマ時代から
栄えた歴史を誇るエレガントな古都であるローザンヌ。国際オリンピック
委員会とオリンピック・ミュージアムがあるため、オリンピックシティとも
呼ばれている。工科大学や音楽学校、ホテル学校、美術学校があり、バレエや劇、
音楽など芸術活動も盛んな文化都市で、個性的な美術館や博物館も数多く点在
している。レマン湖北岸の中央に位置し、ジュネーヴ、ベルン、チューリッヒ
方面を結ぶ幹線上で、交通の便が良いのも魅力である。

ドゥーエ「オリンピックってなんですか？」

「う〜ん、分かりやすく言うと、世界中の国が参加する運動会ってとこかな」

ドゥーエ「へぇ〜、どの国の人もスポーツ好きなんですね」

「確か何回かオリンピック中止になったんだよな、世界大戦のせいで」

ドゥーエ「…他にやることないんですかね」

そして、ローザンヌ駅17時42分発の特急に乗り、30分ほどでジュネーブに
到着した。レマン湖畔の美しい都市である。人口18万の親しみやすい
小規模な町でありながら、国際的に重要な機関が集結していることから、
世界一小さな大都市ともいわれている。ローマ時代の要所、宗教改革の中心地、
時計産業の聖地、国連や赤十字発祥の地など、長い歴史の中で常に重要な
役割を果たしてきた町。文化レベルが高く、個性的な美術館や博物館、
史跡、名所が豊富にそろっている。ショッピング、芸術、歴史、文化、
イベント、グルメなど、あらゆる要素を兼ね備えた観光地といえる。
また、周辺に広がる田園地方やフランスやスイスの人気観光地への
多彩なエクスカーションが楽しめるのも魅力の1つだ。

「ほら見て、あの噴水。すげーだろ?」

ドゥーエ「…きれい」

レマン湖畔にあり、１４０mもの高さまで水を噴き上げるジュネーヴのシンボルを
みてドゥーエは感動している。夕日に照らされてさらに輝いている。

ドゥーエ「ウィルさん、今回は誘っていただいてありがとうございました。
こんな素晴らしい国に行けるなんて思ってもいなかったので…」

「日頃ドゥーエには世話になっているからな。そのお礼みたいなもんだよ」

ドゥーエ「ウィルさん…／／／」

２人はしばらく噴水と夕日を眺めていた。

その後、俺たちはタクシーを拾って、ジュネーヴ・コアントラン国際空港に
向かい日本へ帰ることにした。この空港には日本への直行便がないため、
フランスのシャルル・ド・ゴール国際空港を経由することにした。

「ついたー」

ドゥーエ「長かったですね」

フランス経由で日本に来た結果、乗換とかあったので１５時間ほどかかってしまった。
スイスを１９時の飛行機で飛び立ったのに、今は日本時間で２０時である。

「と、とりあえずその辺のホテルで泊ろうぜ…もう魔法使う気にもなれん」

ドゥーエ「同感です…」

成田国際空港の近くのホテルでベットに倒れ込むようにして２人とも寝てしまった。

翌日、海鳴市、「翠屋」

桃子「いらっしゃいませ、ってウィル君じゃない！」

士朗「どうしたんだ？」

「どうも。ちょっとスイスに行ってきたのでお土産をどうぞ」

桃子さんにはＲａｕｓｃｈ社のハーブの有効成分を使った髪、肌、ボディのケア製品、
虱駆除剤、ハーブを主成分とするサプリメント食品を、士朗さんにはベルンの観光名所の時計塔と同じデザインの腕時計、
Ｚｙｔｇｌｏｇｇｅ（ツィートグロッケ）をあげた。

桃子「まあ、ありがとう♪」

士朗「これはいいデザインだな。ありがとう。ところでそちらの方は？」

「ああ、こちらは俺の秘書です」

ドゥーエ「はじめまして。ドゥーエと申します」

桃子「きれいな秘書さんね。あ、そうだ、ケーキ食べていく？」

「いいんですか？」

士朗「もちろんさ」

俺とドゥーエは旅行のことを話し、士朗さん達はなのはのことを聞いてきた。

士朗「昔みたいになのはが無茶してなければいいんだが」

「もうそれはないですよ」

桃子「なのはなら心配ないでしょ」

士朗「そうだな、もう大人だし」

「じゃあそろそろ帰りますね」

桃子「じゃあこれ持って行って」

とシュークリームを２０個もくれた。

「すいません、ありがとうございます」

そして俺たちはミッドへと帰った。

～屋敷～

「ただいまー」

咲夜「おかえりなさいませ、旦那様」

メイド「お荷物をお持ちいたします」ささっ

「ありがと、リビングまで持ってくれ」

な「あ、おかえりなさい！」

ヴィ「ウィル！」

「ただいまー」

ヴィヴィオ「パパ！」

カナ「出張御苦労さま、父上」

「おーし、みんないい子にしてたか？」

イクス「もちろんだよ！」

ス「うん、そうだったよね」ぼりぼり

かりんとうを食いながらスバルが答える。

ギ「きちんと勉強もしてたし」ぱりぽり

ポテチを食べながらギンガもそう答える。

「わかった。じゃあいい子にしてたみんなにはお土産をあげよう！」

シグ「なにを買ったんだ？」

シャ「楽しみね」

ザフィ「…肉のにおいがする」

「まずザフィーラにこれ」

俺はテーブルの上にＢ？ｎｄｎｅｒｆｌｅｉｓｃｈ（ビュントナーフライシュ）を置いた。

これはグラウビュンデン州特産乾燥牛肉だ。普通は３００ｇほどの塊または

薄切りのパック詰めで売られているが、これは１，０００ｇのものだ。塊から

薄切りをとるには薄切り機または鉋が必要になるほど硬い。

「食う時は気をつけろよ？めっちゃ固いから」

ザフィ「…感謝する」

「で、次に子供達にはこれだ！」

目の前に置いたのはＥｎｇａｄｉｎｅｒ　Ｎｕｓｓｔｏｒｔｅ（エンガディーナーヌストルテ）。
これもグラウビュンデン州の思い切り甘い名産物。Ｅｎｇａｄｉｎは同州の東の地方。
店によって材料も製法も違うが、基本的にはカラメルを絡ませた胡桃のケーキ。
日持ちが良く、少なくとも二週間は常温で保存できる。

ヴィヴィオ「おいしそー！！」

イクス「食べたい！」

カナ「落ち着け、後で食べれるさ」

「そうそう、でなのは達大人にはこれだ」

Ｔｒｕｆｆｅｓ、Ｐｒａｌｉｎｅｓ（トゥリュッフ、プラリネ）。
高級一口甘味である。
チョコレートが主原料のものが多いが、無チョコレートのものもある。果物、
リキュールやシャンパン入りのものが多い。Ｔｒｕｆｆｅｓの方が生原料が多く、
日持ちがしない。したがって値段も高く１gあたり１０円前後で一個１００円ほど。
Ｐｒａｌｉｎｅｓの方は化粧箱入りのメーカー製がスーパーなどで

も買える。
日持ちも普通のチョコレート並である。

ス「うへへへ、おいしそう…」

テ「ちょっとスバルよだれ！」

フェ「食べるのがもったいない気がするね」

休みだったフェイトとティアナもいる。

「後はこれかな」

大きな長方形の箱に入っているのはバーゼルの名物として有名なＢａｓｌｅｒ　Ｌ？ｃｋｅｒｌｉ（バーズラー　レッケルリ）という伝統菓子で、
ドイツのＬｅｂｋｕｃｈｅｎ（レープクーヘン）に似た保存菓子。
原料は
小麦粉、蜂蜜、砂糖漬け果物、ナッツ類などが主なものである。

シグ「ほう、うまそうだな」

アギト「どれもこれもうまそう！」

は「もう我慢出来ん！いただきまｓ」

ティ「はいストップー」がしっ

は「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！」

他にもＫａｍｂｌｙ（カンブリー）というワッフルみたいな茶菓子や、
Ｒｉｃｏｌａ（リコラ）というアルプスハーブ飴を袋から出した。

「あとこれはなのはの実家の『翠屋』のシュークリームだ」

な「なんで持ってるの！？」

「日本に寄った時に顔出したらくれた」

ヴィ「このシュークリームギガウマなんだよな！」

は「うちも大好きや！」

カ「それじゃあみんなでいただきましょうか」

みんな「いただきまーす！」

「あ、フェイト、明日プレシアさんの所行くんだよな？」

フェ「うん、そうだよ？」

「このお土産持って行ってくれないか？」

フェ「うん、わかった」

咲夜「旦那様、このアタッシュケースはいかがいたしましょう？」

「あああああああ！！忘れてた！！」

アリサ「いきなり大声あげないでよ！」

すずか「びっくりした…」

「すまん、あーあーそれどうしよう。ここじゃただの紙くずだ」

ア「何が入っているんだ？」

「お金」

ツ「お金ですか？」

「そう、地球の金が入っている。ここじゃ両替できないし」

ギ「ちなみにいくらほど？」もぐもぐ

「こっちの人はアメリカドルっていってもわかんないもんな」

ス「わかんないですね」もぐもぐ

な「私はわかるよ」

は「でいくらなんや？」

「１５０万ドル」

アリサ「ぶーっ！！」

すずか「アリサちゃん汚いよ！」

フェ「なにそれ！？」

な「なんでそんなにあるの！？」

は「今日の為替レートで計算すると…」

アリサ「約１億２，０００万円じゃない！」

な、フェ、は、ヴィ、シグ、シャ、ザフィ、ア、ツ「」

ス、ギ、カ、テ、アギト、ヴィヴィオ、カナ、イクス「？」

ミッド組は頭にはてなマークが付いているが、地球組は驚いている。

フェ「忘れてた…ウィルって超大金持ちだったんだね」

「まあいろんなとこから取ってきた資源とか売りまくってたらいつの間にかね」

ギ「ちなみにミッドの銀行にはどれくらいあるんですか？」

「確か８０だったかな」

ス「８０ミッドですか！？」

テ「違うわよスバル。きっとウィルさんのことだから８０万ミッド

とかよ」

ス「なるほど！」

ティ「ティアナちゃん惜しいわね。正解は８０億ミッドよ」

ス、テ「」

カ「億…」

ギ「ゼロが幾つ付くんだろう…」

「まあそんなことはどうでもいいとして、これはじゃあ金庫にしまっといて。
次に地球に行く時に持っていくから」

咲夜「かしこまりました」

アリサ「ウィル、そんなにお金があると管理とか大変じゃない？」

「そうなんだよ。利子だけで数千万ドルになるからどんどん増えちまう」

は「幾ら口座に入っているんや！」

「気にしたら負けだ」

おまけ

プレシアの家

フェ「お母さん、ただいま！」

プレ「あらフェイト、今日は仕事休みなの？」

フェ「うん、だから来ちゃった」

アリ「フェイトー！」

アルフ「フェイトー！」

フェ「姉さんもアルフも元気でよかった。そうだ、これウィルから」

プレ「あれおいしそうなお菓子じゃない」

フェ「地球に行った時に買ってきてくれたんだ」

アリ「やったー！」

フェ「あとアルフにはこれをあげるって」

アルフ「おおおお…」

ある日の目の前にはザフィーラに上げたのと同じものが。

アルフ「ありがとうウィル！」

フェ「あ、でも食べる時は気を付けｔ」

アルフ「いただきまーす！」ばきっ

アルフが噛みついた時、何かが折れる音が響いた。

アリ「え、何の音？」

プレ「アルフの方から聞こえなかった？」

アルフ「…歯が」

フェ、アリ、プレ「え？」

アルフ「歯が折れたあああああ！！！いたいよおおおおおおおお！！！！」

アルフ、前歯２本折れる。全治２週間。

フェ「だから気を付けてって言ったのに…」

アルフ「お肉…あたしのお肉…」

アリ「お肉は逃げないよ」

第９９話：すいすいす～２（後書き）

スイスおしまい。

次回作の件ですが、「とある」の構想がなかなかたたなくて困っています。
もう１つの方はだいぶ構想がまとまっているのですが。

まあ何とか頑張ります。

では

番外編１１：１００万ＰＶ記念！くだらない短編集（前書き）

せっかく１００万ＰＶを超えたので、くだらない短編集をお送りいたします。

番外編11：100万PV記念！くだらない短編集

～もし「鋼の錬金術師」で地に引きずり落とされた神がアテネだったら～

どこか白い場所

テレビ＜さむわん！

アテネ「わんわん！」

※これだけで何のアニメを見ているか分かった人は重症です。

普段の仕事を終えた彼女は、自分の部屋でアニメを見ていた。

アテネ「あーぽ○らちゃんかわいい！！」

テレビ＜ちっちゃくないよ！

アテネ「きゃー！」

と、その時。

＜おおおお、神よ！！わが魂に応えよ！！来いっ！！

アテネ「ん？」

変な声がしたので後ろを見ると、いつの間にかあった扉が開き、その向こうには。

アテネ「なななにあのどでかい黒い人（？）は！？」

どうみてもお父様です、ありがとうございます。

お父様は扉から出てきた黒い触手を掴んでひっぱった。

お「そうだ、来いっ！もう貴様に縛られ続ける私ではない！！」

しかし、実際には。

アテネ「いだだだだ！！！やめて髪の毛引っ張らないでえええええ！！！」

お父様には黒い触手のようなものに見えたものは、実はアテネの髪の毛だった。

お「地に引きずり落とし、わが身の一部としてくれよう！！」

アテネ「何言ってんのおおおお！？だから引っ張らないでえええええ！！」

だがアテネの叫びはお父様には届かず、結局落とされました。

エド「なにがあったんだ？」

お「ご苦労だった、人柱諸君」

ヴァン「…っ！野郎、やりやがっ…」

ホーエンハイムはお父様を見て言葉を失った。

お「どうした？びっくりして言葉も出ないか？」

プラ「父上…その、なんでそんな姿に？」

お「ん？」

後ろにいたホムンクルス、プライドの若干驚きが混じった声を聞いて、

お父様は自分の姿を確認しようとした。

お「錬金術マジ便利」

指を鳴らすと目の前に鏡が現れる。そして自分を見てみると。

お「なっ…」

エド「なんつーか…」

アル「うん…」

エド「見た目だけで判断すると、お父様じゃなくてお母様だよな」

ヴァン「あっはっはっはっは！！」

なんとアテネを取り込んだせいで、女になっていたのだった。

お「」

で、なんで女になったのかと考えている間にエド達に倒されました。
そしていつの間にか、生まれた時のようなまっくろくろすけのような姿で、
黒い大きな扉の前にいた。

ホ「何故だ…なぜ私のものにならぬ！？神よ！何が気に入らないのだ！？」

アテネ「1から説明しましょうか？」

ホ「っ！？」

ホムンクルスが後ろを振り返ると、そこにはアテネがいた。

ホ「お前はいったい何者だ！？」

アテネ「だーかーらー私が神！アテネって呼んでね♪」

ホ「なぜ私のものにならないんだ！答えよ！」

アテネ「何故って…」

アテネは肩を震わせながら大声で答えた。

アテネ「アニメを見て楽しんでいる最中に、いきなり髪の毛引っ張られて
勝手に取り込まれて我が身の一部となれだって？冗談もほどほどに
しろよ！頭おかしいんじゃないの？」

ホ「あにめ？」

アテネ「とにかく！あんたのことは全部闇魔ちゃんに任せてあるからよろしく！」

闇魔「はいはーい、闇魔でーす」

そこに現れたのはお尻から悪魔っぽい黒い尻尾を出している小さな女の子だった。

アテネ「闇魔ちゃん、そっちは準備おっけ？」

闇魔「ばっちぐーだよ！」

そんな中、お父様は無言で分析を続けていた。

ホ（あのアテネという女…Dだな！そしてあの闇魔という女は…残念だな、
　Bもないんじゃないか？」

闇魔「今、なんつった？」

ホ「やべ、声に出てた？」

闇魔「もういいや、あとよろしく」

ホ「え？」

後ろの扉が音を立てて開き始め、振り返ると。

悪魔「ああん？」

ホ「」

筋肉ムキムキ素っ裸のマッチョマン♂がおりました。

闇魔「私の胸のことを言ったから、永久に苦しみなさい！」

ホ「そんな、いやだ、何故か判らないけど嫌な予感しかしない！」

悪魔「ホイホイチャーハン！！」

ホ「うわあああああああ！！！！」

ばたんっ！

哀れお父様、もといホムンクルスはマッチョマンに引きずられて扉の中へと
消えて行きました。

アテネ「…いつも思うんだけど、あれって最悪の罰よね」

闇魔「うん、私もそう思う」

扉＜アッー！

アテネ「うわー…」

闇魔「ったくもう、扉から離れてからにしなさいっていつも言っているのに」

こうして世界は平和になりました。ちゃんちゃん

アテネ「ちょっと待った！私の髪の毛どうすんのよ！めちゃくちゃじゃない！」

闇魔「そこはあれよ、神様パワーでちょちょいと」

～ムワリムの1日～

我が名はムワリム。ドラゴンであり、ロストロギアであり、ペットである。
今は主の命令により、この屋敷を警備している。しかし、この姿も気に入った。
本当は超でかいのだが、その姿に戻ると色々と問題があるということだ。

今日は主の妻の1人のピンクポニテと模擬戦をした。なかなか鋭い攻撃であった。
だが、それだけでは倒せないのだ。私の特徴は、一度食らった攻撃は2度と
通用しない。つまり新技でも作らない限り、ピンクポニテは私に勝てないのだ。

そういえばあいつは今頃元気だろうか。我が同胞のドラゴン、フリード。
私が同じ言語で会話することができる友人である。いつこの屋敷の戻って
くるのだろうか。積もる話もあるし、いいつまみもある。だから早く帰って
きてほしいものだ。

ヴィヴィオ「パパ、ムワリムがたそがれてるよ」

「ほんとだ、何考えてんだろな」

カナ「見ていて面白いからムワリム日記でもつけようかな」

イクス「それ私もやりたい！」

～ＴｏｐＧｅａｒ　ｉｎ　ミッドチルダ～

※ナレーションは基本ジェレミーで

ぱちぱちぱち

ジェレミー
「こんにちわ！今日は1通の手紙を紹介します。
『ＴｏｐＧｅａｒ様へ。私は実は魔法使いです。私がいた魔法の世界にもたくさんの
車がありました。ぜひ皆さんもその世界の車を楽しんでください。
Ｇ・Ｇ』
魔法だって？冗談じゃありません。そんなものはこの世になんかないのです。
今まで我々は戦場（イラク）に行ったり、マフィアのお手伝い（アルバニア）を
してきましたが、魔法がある世界になんか絶対に行きません！本当です！」

ここは第1管理世界ミッドチルダ。イギリスから遠路はるばるやってきた我々は
今は使われていない現地政府の建物の前で集合しました。

ジェレミー
「さて、今回我々はなんと魔法が使われている車を見に来ました」

ハモンド
「魔法だなんてハリー・ポッターで間に合っているのにね」

ジェームズ
「きっと映画みたいに空を飛ぶんじゃないか？」

ハモンド
「それって車って言えるの？」

ジェームズ
「こっちでは車っていうかもしれないだろ？」

まず我々は管理局という組織から1台のＳＵＶを借りて街を走り、どのような
車が流通しているかをチェックしました。

ジェレミー
「このＳＵＶは以外といい。ハンドリングも悪くないし速度も出る」

ハモンド
「えっとこの…小型魔導炉エンジン？なんだこれ。ジェームズ、出番だ」

機械オタクのジェームズにパンフレットを押しつけます。

ジェームズ
「…これはかなりエコロジーなエンジンだな」

ジェレミー
「エニグマ（ドイツ軍の暗号）は解けたのか？」

ジェームズ
「地球基準で言うと、この車は5リッター・スーパーチャージドＶ8を乗っけた
　レンジローバーとそっくりだ。だけど二酸化炭素は出ないし、防弾車だ」

ハモンド
「待ってよ、防弾車なのにスピード出るの？」

なのでスピートテストをすることに。場所は管理局の格納庫の前にある
ただっぴろい広場です。

ジェレミー
「行くぞ！」

ジェームズ
「早いな！」

ハモンド
「０－１００ｋｍ／ｈは５，５秒だ！レンジローバースポーツよりも早い！」

ジェレミー
「ＰＯＷＷＷＷＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＲＲＲＲＲＲＲ！！！！！！」

ジェームズ
「これを我がイギリス軍も採用したらいいんじゃないか？」

ジェレミー
「それはだめだ」

ハモンド
「なんでさ？」

ジェレミー
「イギリスで使い終わった後、その中古車をタリバンが買って戦車にするからだ」

ジェームズ
「ルーフに穴をあけて機関銃を付けるんだろう」

さて、3人は管理局のお偉いさんの自宅へ向かいました。そこには車がたくさん。

ジェレミー
「さっきのSUVか、いやこれはすごい！見てみろハモンド！」

ハモンド
「わーお！ガトリング銃付きだ！」

ジェームズ
「護衛用の車だな」

ハモンドはその隣にあった車に興味深々です。

ハモンド
「この黒いスポーツカーはクールだね」

※アニメに出てたフェイトの車。
普段は2人乗りとして運用するが、後部トランクスペースを使用し2シート

増設可能になっている。屋根のないオープンカータイプにもなるのが特徴。
その意味では、車種はクーペカブリオレに分類できるが、屋根の収納は
魔法技術が使われているらしく、一瞬にして消えたりまた現れたりしている。

ジェレミー
「そうだな、かなり速そうだ」

そんな時、ジェームズがある車を見つけました。

ジェームズ
「諸君、これは車か？」

これ＝はやてが乗っていた車。
ジープを思わせる、いかにも軍用四輪駆動車っぽいフォルムの乗用車。
屋根なしだがフレームが存在しており、転倒に備えた完全オフロード仕様となっている。

ハモンド
「あっはっはっは！こんなの乗ってらんないよ！」

ジェレミー
「東京の時みたいにビル・オディーの仮面をかぶるか、アジアン・カー
特集の時のように段ボールで顔を隠して乗らないと恥ずかしいね」

ハモンド

「おいジェレミー！これ！」

ハモンドが見つけたのは。

ジェレミー
「ブガッティ・ヴェイロンスーパースポーツじゃないか！メルセデスもあるぞ！」

ハモンド
「ＢＭＷ　Ｍ３にフェラーリもある！ここで見れるとは思ってなかったよ」

ジェームズ
「バーニング・ガヤルドもあるぞ」

このガレージにあった地球の車は全部で１０種類以上ありました。

ジェレミー
「ここに住んでいるお偉いさんはかなりのお金持ちだな」

その通りでした。彼は管理局の地下にある緊急時用避難通路で車を走らせても
いいと、許可をくれました。おまけに好きな車をしてくれるとも言って
くれたので、各自車を選び、夜の通路を走り回ります。

ジェレミー
「Ｓｔａｒｔ　ｔｈｅ　Ｍｕｓｉｃ！！」

地下トンネルを車のエンジン音が支配します。ハモンドはこの魔法の世界でもポルシェ９１１ターボＳに乗っています。

ハモンド
「（？？？？？？）ハハハハハァ！」

ジェームズが乗るのはアウディ・Ｒ８。４．２リッターＶ８の轟音がビートルの
音をかき消します。

ジェームズ
「この車は走っていて気分が良くなる。ポルシェに乗っていたら今頃ゲロを
吐いているな」

ですが私が乗っている車が一番です。私が選んだ車はアストンマーティン・Ｏｎｅ－７７。

ジェレミー
「この音を聞いてくれ！７．３リッターＶ１２の素晴らしい音だ！この車の値段は
だいたい１００万ポンドだが、この音だけで９９万ポンドの価値がある！
それにテレビを観てやりたくなったらすぐに遊べる！管理局と
地下トンネルとスーパーカーとお偉いさんの協力だけあればいい！」

ジェレミー
「というわけで我々は魔法の国を十分に楽しんできました」

ハモンド
「ですがこれを見たプロデューサーはこう言いました。

『お前らはあほか？』

と」

ジェームズ
「せっかく魔法の国に行ったのに乗ったのは地球の車だったからな」

ジェレミー
「つまり地球の車は魔法の車よりの優れているということです！」

ハモンド
「あの防弾レンジローバーを除いて」

ジェレミー
「その通り。では今晩はこれまでです。また来週お会いしましょう！」

ぱちぱちぱち

それを見ていた人々の反応。

～屋敷～

シグ「普通の人はそんなコネはないだろう」

ザフィ「全くだ」もぐもぐ

彼は乾燥牛肉を薄く切ったものを酒のつまみにしている。

フェ「私の車ほめてくれたよ！やった！」

は「なんでうちの車は駄目なん？かっこいいやんか！」

な「それはないの」

ス「いや、あれはちょっと…ねぇ？」

テ「フェイトさんの車の方が断然クールだよね」

は「ぐすっ…」

「やっぱり車は地球のが一番だな！」

～地球、イギリス～

グレ「さすがＴｏｐＧｅａｒだな！素晴らしいレビューだった！」

アリア「ていうか父様があの手紙出したの？」

ロッテ「あ、Ｇ・Ｇってギル・グレアムのことか」

番外編11：100万PV記念！くだらない短編集（後書き）

はいおしまい。

もうしゅうかつ終わらせたい。

次回は書けるのかな？では

第１００話：もうこんなに書いたのか…

～とある無人世界、違法研究所～

ブーッブーッブーッ！！

？「敵襲！」

？「なんだと！？」

？「管理局だ！応戦しろ！！」

？「お前はデータを消去しろ！証拠を隠滅するんだ！」

？「わかった！ってなんだこれは！？パソコンが動かない！」

？「おい！隔壁を閉じろって言っただろ！なんでやってないんだ！？」

？「これを見ろ！システム上では閉じたことになっているんだ！」

？「おいおい、それまずいだろ！」

～研究所から５００ｍほど離れたところで～

俺はトーレ達を引き連れてとある研究所を潰しに来た。

「正面の敵は1、2、3の4人か、ここから狙撃しよう」

トーレ「クアットロ、そっちはどうだ?」

クア「施設へのハッキングは成功しました。連中大慌てですよ～」

「さすがだな、クアットロ。それじゃあ俺も」

俺は背中に背負っていたサイレンサー付きのナイツアーマメントSR－25を構え、
ゆっくりと息を吐いて引き金を絞った。その瞬間7．62mmNATO弾が発射される。
銃弾はまっすぐ飛んでゆき、狙ったとおりの場所、つまり敵の額のど真ん中に
命中した。他の敵が気が付く前に俺は残りの3人の頭にも銃弾をプレゼントした。

「鉛玉のプレゼントだ、ありがたく受け取っておけ」

クア「ウィル様かっこいいですわ～」

「ありがとよ、それじゃあ行くぞ!」

俺はSR－25を置いて、若本をモード2の銃剣にして研究所に向かった。

トーレ「わかった!」

セッテ「りょーかい！」

遅れまいとトーレとセッテも付いてくる。クアットロはその場で待機。

トーレ「広い廊下だな」

セッテ「天井も高いね」

「クアットロ、聞こえるか？研究所内部に潜入した。敵の動きは？」

クア『正面に向かっている敵が多数、あとは研究室に白衣着た連中がいま～す』

トーレ「正面ってことはこっちに来るのか！」

セッテ「ふっ、かかってこいやぁ！！」

「セッテ、なんでそんなに好戦的なんだ？まあいい、迎撃する」

そう言った瞬間、１００ｍほど前にあった扉が開き、中からたくさんの敵がアサルトライフルやらショットガンやら拳銃やらをもって出てきた。

トーレ「質量兵器のオンパレードだな」

？「いたぞ、管理局の連中だ！」

？「殺せ！」

だた、誠に遺憾なことに連中は銃の使い方を知らなかったようだ。
普通、ショットガンに使われる散弾は概ね５０ｍ以内で最大の威力を発揮する。
スラッグ弾を使用した場合でもライフルに比べ弾は遠距離までは飛ばず、
貫通力も低いので、１００ｍ離れた敵に撃っても意味はない。

「『銃＋発砲＝死』という公式は間違ってはいないが、使う銃の性質の事も
勘定に入れないと駄目だな。ともかく質量兵器で攻撃されたわけだし、
覚悟しやがれ！」

俺はデバイスを殺傷設定にして銃剣を振り回しながら敵に突っ込んだ。

トーレ「ＩＳライドインパルス発動！行くぞ、セッテ！」

セッテ「わかった！ＩＳスローターアームズ発動！」

トーレは腿と足首、手首付近からエネルギー翼、インパルスブレードを
発生させて、セッテはブーメランブレードを出現させ、敵に向かっていった。

クア「始まりましたわね～」

待機場所ではクアットロが施設内部の様子を監視カメラの映像で見ていた。

クア「ウィル様かっこいい…はっ！いけないいけない、仕事しなきゃ。

えっと白衣の連中はまだこの部屋にいる…何しているのかしら？」

「はあああああいいいいいい！！！！！」

？「ぎゃあああああ！！！！」

銃剣が敵の首をすっとばす。

トーレ「はあああああ！！」

？「なんだあの女！全然見えないぐあああああああ！！！」

高速移動で後ろに回り込まれた敵が悲鳴を上げながら絶命する。

？「早すぎて狙いｇ」

セッテ「おしゃべりはそれまでだ！」

真後ろから飛んできたブーメランブレードに真っ二つにされる。

「ふう、これでおしまいか」

トーレ「そのようだな」

セッテ「こっちも終わった」

「クアットロ、残りの敵は？」

クア『そこを左に曲がって突き当たりの研究室です～』

「わかった」

俺は研究室の扉をけり開けて堂々と中に入った。

「動くな、管理局だ」

？「そそそっちこそ動くんじゃねえ！こいつらがどうなってもいいのか！」

トーレ「なっ！？」

セッテ「卑怯だぞ！」

白衣を着た研究者5人は拳銃を持って子供の頭に突き付けている。

子供「た、助けて…」がくぶる

白衣A「黙れ、このガキ！」

白衣B「これ以上こっちに来てみろ！こいつらの頭が吹っ飛ぶぞ！」

「……」

トーレ「ウィル？」

セッテ「ウィルさん？」

白衣C「おい！何とか言ったらどうだ！」

「……モデル、執事（バトラー）」

白衣D「は？何を言っｔ」

その瞬間、白衣Dの右腕、つまり拳銃を持っていた腕と首がボトリと地面に落ちた。

白衣E「な！？」

子供「ひいいいい！！」

捕まっていた子供はこっちに走ってきた。

白衣E「てめえ、逃げんじゃn」

近くにいた白衣Eが銃を構えようとしたが、やはり右腕が切断された。

そして残りの白衣達も腕を切られた。

白衣B「ぐあああああああ！！！」

トーレ「ほーら、もう大丈夫だからね？」

普段とは違い、笑顔で子供達に接するトーレ。

「トーレ、セッテ、子供たちを連れて外に」

セッテ「わかった。みんな、行こう？」

子供達「うん！」

白衣A「貴様あああああ！何をした！？」

「何をされたかもわからんのかね？」

その時白衣Aは俺の体の周りに何があるのを見た。

白衣A「それは…糸か？」

「久しぶりに使うと腕が落ちるな、やれやれ」

俺は極細の鋼線を消して、若本を構える。

「貴様ら、何故子供たちをこんな目にあわせる？」

白衣Ｂ「はっ！ガキは人体実験に使いやすいからに決まってんだろ！」

白衣Ｃ「大人と違って少しの暴力で言うこと聞くしな！」

白衣Ａ「ガキなんぞ幾らでも居るからな！ははははは！！」

「もういい黙れ」

俺はどこぞの神父様のように銃剣をクロスさせるようにして構える。

「貴様らは震えながらではなく、藁のように死ぬのだ」

クア「はい、お菓子よ～」

子供たち「ありがとう！」

待機場所では戻ってきたトーレが連れてきた子供にクアットロがお菓子をあげている。

クア「あら？セッテちゃんは？」

トーレ「他に誰かいないか調べている」

セッテ「おまたせー」

その時セッテがまた子供を連れてやってきた。

トーレ「その子たちもか？」

セッテ「そうだ、みんなかなり弱っている」

子供たち「」ぐてー

クア「えっと、これ飲ませて。ウィル様から預かっていたエリクサーとかいう回復薬」

セッテ「分かった」

子供たち「元気１００倍！！」

トーレ「効果抜群だな」

突然、後方の研究所で大爆発が起き、その衝撃波がトーレ達がいるところまで
飛んできた。

子供たち「きゃあああああああ！！」

トーレ「なんだ！？」

セッテ「ウィルさんは？」

クア「ウィル様！」

「ここにいるよ」

トーレ「うひゃい！！」

いつの間にか隣にいたのでトーレが素っ頓狂な声をあげた。

セッテ「無事だったんだね」

「当たり前だ。それじゃあ帰ろうか」

そして子供たちは病院で検査をして、親がいる子供は親の所へと返し、
親がいない子は孤児院で暮らすことに。

後日わかったことだが、その子供たちの中にミッドでも有名な製薬企業の
社長の1人息子がいたことが判明した。なんでも他の世界へ旅行に行って
いた時に誘拐されたとか。そのせいで大ニュースになってしまった。

「管理局、〇〇製薬の息子を救出！」

とか

「再建した本局次元航行部隊のお手柄！」

という見出しの新聞やらニュースやらがしばらく続いた。

トーレ達の所属する俺専属部隊は、管理局の部隊序列には載っていない
非公式部隊である。表向き、彼女たちは俺の護衛ということになっているため、救出は本局の連中がやったことにしておいた。

「あーつかれたー誰か俺をいやしてくれー」

ヴィ「あたしに任せろ！」

ザフィ「その未熟な体で癒せるのｋ」

ヴィ「ふんっ！！」べしゃっ！

ザフィ「」

ス「あああ！！ザフィーラさんがペチャンコに！！」

第１００話：もうこんなに書いたのか…（後書き）

うん、もうそろそろゴールしてもいいよね？

って言うのは冗談で、次回はいい加減に時を飛ばします。

では

第１０１話：あれから…

「ＦＳ事件」とか「ミッドチルダ大戦」が発生してから3年がたちました。

なのはとヴィータとアリサは武装隊の教導官として、訓練場で活躍している。

特にアリサは「ツンデレ教導官」として有名で、ミッドでもその名を知らぬ者はいない。ただ、本人はうれしくないようだが。

フェイトとティアナは執務官として改ＸＶ級次元航行艦に乗って色々な場所で

事件を解決したりしている。マリアージュ事件をなかったことにしたから、

ティアナは若干暇人らしい。

スバルは特別救助隊の防災士長（武装隊では陸曹扱い）になって、分隊長として災害対策・人命救助に励んでいる。あと、ごくたまに出る

海賊船への乗り込み作戦時には、強襲乗り込み隊の隊長として前線で活躍する。

すずかは技術開発本部で日々様々な研究・開発に取り組んでいる。

ジェイルとプレシア、それにアリシアとも仲良くやっている。

そのせいか、たまにとんでもないもんを作り出すことも。

…すずかのやつ、信じられない事にジェイル達と共同で量子クリスタル装甲を

開発しやがった。この装甲は、ターボレーザーはもちろん、デス・

スター・
プロトタイプのスーパーレーザーによる砲撃など、事実上あらゆる攻撃を
無効化することができるとんでもない代物なのだ。

そんなわけで昇進して、すずかは今技術開発本部副部長になっている。
ちなみに部長はジェイルで、プレシアとアリシアは主任研究員である。

カリムは相変わらず聖王教会騎士団でお仕事。孤児院の子供たちによく会いに行って一緒に遊んであげているとか。俺も暇な時に行くようにしているけどね。

エリオとキャロは辺境自然保護隊のスプールス第一キャンプというところで一緒に頑張っているんだって。密漁者とかをフリードで丸焼きにするのが仕事なんだと（嘘）。

はやては海上警備部捜査司令で、アインとツヴァイは司令補としてサポートにまわっている。シグナムとアギトは航空隊に所属している。
シャマルは本局医療部で、「どんな怪我でも治せる医者」として有名に。
以前あげたお守りに組み込んだ肉体再生（オートリバース）の能力を俺が消し忘れていて、
その能力を自分でなく他の人のために使っているとのこと。あの能力って
自分以外にも使えたんだっけ？ザフィーラははやての護衛で、
ムワリムは相変わらず子供たちの警備。

ギンガは陸士１０８隊で日々仕事。チンク達とも仲良くやっている。

ヴィヴィオ達子供たちはすくすくと育っている。今は3年生だ。
3人は無限書庫の司書の資格取って本の虫になっている。
なんでもそこで新しい友達が出来たとか。名前は確か
リオ・ウェズリーちゃんだったかな？彼女、火と雷2つの
魔力変換素質があるんだと。2つもあるなんてすごいよな。

で、俺はというと相変わらず局長をやっている。ようやく地上と本局の
協力体制を整えたので、だいぶ仕事がスムーズになった。レジーが
大将になったから、俺は何故か元帥になってしまった。階級とか
マジでどうでもいいし。まあ、これからもみんな仲良くやっていこう！
って考えている。

そんなある日。

～深夜、クラナガン沖１５０？～

夜の静かな海。そこを2隻の船がのんびりと航海していた。
1隻はマキナ級高速ミサイル艇４番艦「イングヴァルト」である。
もう1隻は、俺がこっそり回収して魔改造した「マナサス」だった。
「イングヴァルト」の乗組員は、「マナサス」のことを民間の貨物船だと思っている。今回彼らに下された任務は「貨物船を護衛しろ」だった。
「マナサス」の船倉、もとい偽装格納庫にはラーティやら重武装型ラムダ級シャトル等があったが、格納庫の真ん中にそこそこでかいコンテナが置いてあった。中には最近見つけたロストロギアが入っている。
これをクラナガンの沿岸警備隊のドックまで運び、そこで待機している
輸送車両が地上本部地下にあるロストロギア保管庫へ持っていく、という
シナリオである。

～「イングヴァルト」艦橋～

副長「艦長、そろそろ交代です」

艦長「おお、もうそんな時間か。特に報告することはないな。静かな夜だ」

副長「水の中も静かですよ。それでは操艦指揮を頼みます」

艦長「こちら艦長だ。これから操艦指揮を執る」

当直員「アイアイ・サー」

艦長「副長、しばらく寝たらどうだ？疲れた顔をしているぞ」

副長「わかりました、それでは…」

だが副長は寝ることを許されなかった。

ソナー「こちらソナー！前方３０？先の水中で大爆発！深度３００ｍ！」

艦長「なんだと！？原因は？」

ソナー「わかりません、いきなりだったもので」

副長「艦長、地上本部から通信です」

レジ「こちらレジアス・ゲイズ大将だ。艦長、君の近くで中規模の次元震を
観測した。だが、君の任務は貨物船の護衛だ。気にしなくてよい」

艦長「しかし…」

レジ「だが放っておくわけではない。既にカフカス級巡視船２番艦

『ピスコフ』から偵察機が発進した。5分で現場に到着予定だ」

艦長「わかりました、交信終了。副長、このまま進もう。大爆発の原因は
いずれわかるさ」

そんなわけで副長は寝ることができた。

～「ピスコフ」所属ラーティ、コールサイン：ヴァルチャー1～

「ヴァルチャー（禿鷹）1よりポッサム（ふくろねずみ）へ。間もなく
到着する。状況に変化はあるか？」

「ポッサムよりヴァルチャー1へ。特に変化はない。現場に到着したら
調査を開始せよ」

「了解した、ポッサ…」

「どうした？応答せよ、ヴァルチャー1」

「こ、こちらヴァルチャー1！現場に到着したんだが、海上に何かが浮いている！
あれは潜水艦だ！」

「なんだと！？」

「どうする?」

「…とりあえず上空を旋回しつつ、全周波数で呼びかけてみろ」

「了解」

操縦士はパネルを操作して、謎の潜水艦に無線で呼びかけた。

「こちらはミッドチルダ沿岸警備隊である。浮上中の潜水艦に告げる、
貴船の船名、目的を述べよ。繰り返す、こちらは…」

数回呼びかけてみたが返事がない。

「ポッサム、幾ら呼びかけても返事がない」

「ん～どうしたものか…」

その時、突然潜水艦が動き始め、あっという間に潜航してしまった。

「あの野郎!ポッサム、潜水艦が潜航した!ソノブイの投下許可を!」

「許可する!奴を追跡しろ!」

だが、投下する前に４発の対空ミサイルが海面に躍り出た。

「ミサイルだ!回避!」

散布装置を自動に設定して、ラーティは海面に向かって急降下した。
その背後にたなびくチャフが飛んでくるミサイルの合間できらきら光り、
フレアが海面を照らす。誘導の狂った対空ミサイルは空中で誤爆するか、
海面に突っ込んで盛大な水柱をあげた。

「クソッタレ！ポッサム、攻撃を受けた！反撃させろ！」

「構わん！あらゆる武装の使用を許可する！」

ラーティはソノブイを投下してから高度をあげて魚雷攻撃を仕掛けようと
考えたが、ソノブイには何の反応もなかった。

次の日。

「…以上が昨夜起こった全てです」

地上本部の会議室で「ピスコフ」艦長のハリー・モース二等海佐が報告を終えた。

レジ「ありがとう艦長、下がってくれ。さて、みんなはどう思う？」

会議に参加しているのは、俺、ティーナ、レジー、クロノ、ジェイル、

それにはやてである。

ジェ「連中が撃った対空ミサイルだが、分析した結果、この世界の兵器では
　ないことが判明した」

ク「つまり、潜水艦を使っている他の世界から来たと？」

レジ「だが、さすがに潜水艦を密輸するのは幾らなんでも無理だろう」

は「それに中規模の次元震…もしかしてどこかから潜水艦ごと飛ばされたんじゃ！」

ジェ「可能性として考えられるが…どうしたウィル？」

「…ん～」

ク「何か知っているのか？」

「いやな、俺、この潜水艦どこかで見たことがあるんだよ」

ティ「私も。地球のではないことは確かなんだけど…」

ジェ「今までウィルが行ったことがある世界にこれがあったと？」

「今まで行った世界…あ！『アイシクル』だ！これＡ国海軍の潜水艦だ！」

は「ほんまか！？」

「間違いない！でもなんでこんなところにいるんだ？とりあえず当事者に
聞いてみよう。ドゥーエ、E国大統領に電話して」

ドゥーエ「はい」

E「やあウィル！久しぶりだな、元気か？」

「おうよ！そっちはどうだ？また戦争してるとか？」

E「まだしてないぞ！」

「する気満々じゃねえか」

E「ばれちゃったか、ＨＡＨＡＨＡ！ところで今日は何の用だい？」

「実はさ、南極紛争時にお宅らが沈めたA国海軍の潜水艦にこいつがいなかったか？」

俺はラーティが撮影した写真のデータを送った。

E「ちょっと待ってくれ、国防長官に聞いてみる」

2分後。

E「ウィル、確認した。こいつはA国海軍潜水艦、艦番号５６５『ケリオン』だ。
　報告では南極沖での艦隊戦で沈んだことになっているが、その後の調査で
　この艦だけ残骸が全く出なかったんだ」

「全く？衣服とか、死体とかもなしか？」

E「そうなんだ。だから不思議だったよ。いくら１？のＮ？兵器を食らったと
　しても、完全に消滅はしないし、それ以前にこっちの魚雷は着発信管ではなく近接信管だったから、魚雷が直撃しない限り船体は残るはずなんだが…」

「実はこいつが今こっちにいるんだ。こちらの偵察機に向かって対空ミサイルぶっ放して逃げやがった。沈めていいか？」

E「そういうことなら構わんよ。『ケリオン』の乗組員はこっちでは
　死んだことになっているからな」

「わかった、それじゃ」

「というわけでだ、こいつを発見したら撃沈して構わん。すでに管理局へ
　攻撃しかけてるんだし」

は「一体どうやってこっちに来たんやろ？」

「カナリアが卵からかえった日にE国、U国の連合艦隊がA国艦隊を一方的に
殲滅しただろ?で、こいつはA国海軍に所属していて、大量のN?兵器を
撃ち込まれたから多分その時にこっちに飛ばされたんじゃないかな?」

レジ「だが、『アイシクル』での南極紛争は2年以上前に起こったことじゃないか。
こいつらは2年ちょい後の現代に、つまり未来に飛ばされたということか?」

「信じがたいがそういうことだろうな」

ク「こいつの武装は?」

俺はE国から送られたデータを見ながら答える。

「えっと、魚雷発射管が6門で、巡航ミサイル発射可能と、げ、こいつ核
積んでるかもしんねえぞ」

は「まじかい!?それめっちゃまずいんとちゃう?」

「まあなんとかするさ。一番の問題はこいつがＡＩＰ（非大気依存推進）潜水艦
だってことだ。データによれば2週間連続で潜航が可能らしい。しかも
原子力潜水艦より静かだから発見も難しいだろうな」

ジェ「あの『バーバリアン』ならなんとかなるんじゃないか？」

「それはそうだが、あれは1隻しかないからな、運用範囲が限られる」

レジ「むむむ…」

その時1人の局員が猛ダッシュで会議室に突入してきた。

局員「局長！民間貨物船が撃沈されました！」

レジ「なんだって！？」

「乗組員は？」

局員「重軽症者多数です。カスカス級巡視船3番艦『フェルメール』が既に現場で
救助活動を行っています」

ク「なんてことだ…」

局員「それと貨物船の乗組員が、船が沈んでいく最中に少し離れた場所に
潜水艦らしきものを見た、と証言しているとのことです」

「…『バーバリアン』はどこにいる？」

ティ「ドックで武器弾薬・食料の補給が終わって哨戒任務に出ると

ころだよ」

「しょうかいしょうかい」

レジ「……」

ク「……」

ジェ「……」

ティ「……」

は「……ウィル君」

「うんごめん。とりあえず『バーバリアン』の出航をただちに中止させろ」

ク「ウィル、そのまま出撃させて『ケリオン』の撃沈命令を出せば…」

「んなこと言われなくてもわかってる。『ケリオン』は必ず仕留める。

そのために『バーバリアン』に特殊兵器を搭載する。ティーナ」

ティ「もうドックに命令は送ったよ」

「大変結構」

は「特殊兵器ってなんや？」

ジェ「N？兵器を弾頭に搭載した魚雷だよ。『アイシクル』のE国からの技術
　提供で開発したんだ。ただし、本家より性能は向上している」

「今『バーバリアン』には通常弾頭の魚雷しか積んでいない。相手が核を
　持っているかもしれないから、こっちも核に相当する兵器を持っていかないとまずいだろ」

ク「そうだな」

副長「艦長、特殊兵器の搭載完了しました」

艦長「よし、出航だ！」

ドックを離れ、外海に出た「バーバリアン」は静かに水中へと消えていった。

3時間後。

局員「局長！今度は哨戒中の『カフカス』に魚雷攻撃です！」

「今まで民間の船を攻撃対象にしてきたのに、方針を変えたか…で、被害は？」

局員「対魚雷ロケットで敵魚雷を無力化、その後『カフカス』とラーティが
魚雷で応戦しましたが、敵潜水艦は囮魚雷（デコイ）を発射し逃走したとのことです」

「そうか、『バーバリアン』に知らせたか？」

局員「いえ…」

ティ「ご主人様！たった今『バーバリアン』から通信が入って、敵潜水艦を
追跡中だって！」

「よくやった！今すぐ沈めろと伝えろ！」

～「バーバリアン」～

副長「艦長、局長からの命令で、必ず撃沈するように、とのことです」

艦長「わかっているよ、そのためにここにいるのだから」

ソナー「艦長、目標から一時的な機械音。多数の発射管の扉が開く音です」

艦長「多数とは？」

ソナー「おそらく6門です」

副長「全部じゃないか」

艦長「ならこちらも攻撃準備をしよう。副長、全発射管の扉を開け」

副長「アイアイ・サー。発射管扉開けます」

ソナー「敵艦、魚雷を発射！数は6、核魚雷です！目標は『バーバリアン』！」

艦長「くそ、先手を打たれたか。1番から6番発射管を最少出力に設定して
向かってくる敵魚雷の方位にスナップショット！それから7

番と
　８番発射管を最大出力に設定して敵艦の最終既知方位に向けて撃て！」

副長「セット、スタンバイ、発射…全発射管は電気的に発射しました！」

ソナー「全ユニットは正常に航行しています！」

艦長「よし、ではノイズメーカーとジャマーを発射して、全発射管にＭｋ６５を
　再装填。操舵手（ヘルムズマン）、全速前進、面舵３０度。潜航士官（ダイヴ）、
深度３，０００ｍまで急速潜航。当直員、弁（バルブ）とポンプ装置を
浅深度から深深度に調節」

副長「ノイズメーカー、ジャマー、アイ。発射完了しました。再装填、アイ。
　魚雷発射管室は再装填を受領通知しています」

操舵手（ヘルムズマン）「方位０００、全速前進、アイ。機関制御室（マヌーヴァリング）は全速前進を
　受領通知しています」

潜航士官（ダイヴ）「深度３，０００ｍまで急速潜航、横舵の角度は３０度下げ、アイ。
　現在の深度は７００ｍです」

当直員「弁（バルブ）とポンプ装置の調節、アイ」

副長「航海長（ナヴィゲーター）、測深しろ」

航海長（ナヴィゲーター）「水深は６，３００ｍです」

副長「まもなく１番から６番のユニットが敵魚雷を迎撃しｍ」

その瞬間すさまじい衝撃が『バーバリアン』を襲った。

艦長「報告！」

ソナー「敵魚雷の迎撃に成功しました！７番と８番のユニットは依然敵艦を
追跡中！」

艦長「副長！損害報告を…」

ソナー「艦長！７番と８番のユニットが爆発しました！」

副長「兵器の効果は！？」

ソナー「なんともいえません！」

艦長「なら攻撃続行だ！全発射管を最大出力で敵艦に向けてスナップショット！」

副長「アイアイ！」

その時、「ケリオン」では。

「バーバリアン」の7番、8番発射管から発射された魚雷は、
「ケリオン」のノイズメーカーに命中して爆発した。魚雷が爆発した時の
衝撃は、艦長の目の前がかすむほど強烈だった。ゴーンというすさまじい
とどろきが船体に響き、同時にソナーのスピーカーからも聞こえて、
不思議な立体音響効果を生みだした。発令所のモニター画面の半数が
破裂し、砕けたガラスがあちこちに飛んだ。何度も激しく揺れる
「ケリオン」の船体に合わせて、乗組員の腕や頭が荒々しく振り回された。
その後、スピーカーの音はまったくしなくなったが、神経を引き裂かれる
ような大音は続いた。「ケリオン」の艦尾が衝撃で高く持ち上げられ、
艦長と副長は前の方へ投げ出された。

操舵手（ヘルムズマン）「潜舵の角度は52度で下がっています！船体の制御ができません！」

「発令所（コン）、こちら機関制御室（マヌーヴァリング）。電気系のトラブルにより機関停止！
推進動力を失いました！！」

操舵手（ヘルムズマン）「潜舵が動きません！バックアップの油圧システムが作動しません！」

電話連絡員Ａ「艦長！魚雷発射管室で浸水です！」

当直員「司令塔（セイル）ソナーからの反応ありません！」

艦長「潜航（ダイヴ）士官！全可動バラストタンクを排水！なんとしてもこれ以上の
　　潜航は阻止しろ！」

副長「現在深度６５０ｍです！圧潰深度まであと３００！今すぐ緊急（エマージェンシー・ブロー）高圧空気注入を！」

艦長「だが、今ここで浮上したら恰好の的になってしまうぞ？」

副長「船体内破まであと６０秒しかないんですよ！？」

艦長「…わかった。潜航（ダイヴ）士官、前部バラストタンクにエマージェンシー・ブロー！」

大量の高圧空気がバラストタンクから水を追い出し、浮力を得ようともがいた。

操舵手（ヘルムズマン）「潜航が止まりません！！」

艦長「くそ、潜航（ダイヴ）士官、後部バラストタンクにもエマージェンシーブロー！」

副長「潜航が止まりました！！」

艦長が深度計を見ると、８６０ｍで止まっていた。そして少しずつ

浮上をし始めた。

艦長「よし、浮上したら艦首ソナーを出力最大で探信（ピン）する。敵の位置を把握して
　　核魚雷を…」

ソナー「艦長！！水中に８本の魚雷！！Ｅ国のＭｋ６２に似ている音ですが、
　　４３０ノットで接近中！目標は本艦です！！」

副長「」

艦長「ちくしょおおおおおおおお！！！」

～「バーバリアン」～

船体の外から再び大きな音が聞こえてきた。

ソナー「全発射管のユニットが爆発しました！『ケリオン』に確実に命中！！」

副長「スピーカーに出せ！」

スピーカーからは２種類の轟音がまじりあって響いた。死に物狂いで緊急高圧空気注入（エマージェンシー・ブロー）した潜水艦のバラストタンクに

高圧空気が吹きこまれる音と、高圧の海水が船体の裂け目から流れ込む音だ。

水圧が勝った。「ケリオン」は浮力を完全に失って沈んでいき、間もなく圧潰深度（クラッシュ・デプス）を超えて船体はぐしゃりとつぶれた。

艦長「我々の勝ちだな」

副長「そのようですね」

ソナー「敵艦、海底に激突。船体が木端微塵になりました」

艦長「わかった、ソナー。位置を記録したら通信ブイをあげろ」

～地上本部～

局員「局長！『バーバリアン』から至急電です！」

「見せてくれ」

X親展、時空管理局地上本部宛てX至急X
X国籍不明の潜水艦と交戦X
X核魚雷の攻撃を受けたので、特殊兵器による反撃を行い、敵潜水艦を撃沈したX

X戦闘データと沈没した場所のデータは添付ファイルにX
X「バーバリアン」艦長、クリストファー・レヴィンソン二等海佐X
ク「なんだって？」
「敵潜水艦は撃沈されたぞ」
レジ「いやっほー！！」
ジェ「造ってよかった『バーバリアン』！！」
「だな！よし、返事は俺が書こう」

～「バーバリアン」～

１０分後、「バーバリアン」は本部から艦長当てのメッセージを受け取った。
艦長はそれを自室でゆっくりと何度も読み直した。

X敵潜水艦の撃沈お見事X
Xよく生き残ったX
X至急帰投せよX
X時空管理局局長、ウィリアム・T・ロンバート元帥X

そして文頭には、彼が永久に無理だと思っていたことが書いてあった。

X親展、「バーバリアン」艦長、クリストファー・レヴィンソン一等海佐殿X

第１０１話：あれから…（後書き）

「バーバリアン」が使用した魚雷の詳細。
Ｍｋ６５マーズ（マーズ＝戦の神）、スーパーキャビテーション魚雷
弾頭：１？のＮ？兵器（エネルギー収量は０．１？～１？まで変動
可能）
速力：８００ｋｍ／ｈ（時速約４３０ノット）

今回は長い気がする！

俺の代わりにしゅうかつしてくれる人いないかな？

次回は考えてません！

では

第１０２話：みんな非番なので

「ケリオン」が海の藻屑になった翌日。

～屋敷、朝７時～

「ｚｚｚ…」

ス「うみゃ…もう食べれないよ～…」

テ「…うぅ、このバカスバル～…」

な「起きて！もう朝だよ！」

は「ほーらーウィル君！」

「…んだよ、もう少し寝させろ…」

フェ「…起きないとＯＨＡＮＡＳＨＩだよ？」

「いやぁ今日はいい天気だな！」

そんなことを言われたら飛び起きるしかないのである。

ス「もげっ！うう、痛い…」

飛び起きたときにスバルがベッドからずり落ちて頭を打った。

テ「う～ん、もう朝か…」

咲夜「皆様、朝食の準備ができました」

「わかった、すぐに行く。じゃあちょっと着替えるからでてくれ」

ス「ティア～私のパンツどこ～？」

テ「知らないわよ！」

～食堂～

みんな「いただきまーす！」

ス、ギ「がつがつもぐもぐ…」

は「やっぱ朝はご飯に味噌汁、それに焼き魚やな！」

な「日本食っていいよね～」

テ「そうですね、私も好きになっちゃいました」

カ「ヘルシーで健康にもいいですし」

フェ「でもあの2人みたいにいっぱい食べたらヘルシーもへったくれもないよね」

あの2人＝スバル、ギンガ

すずか「確かにそうだね」

アリサ「でもあんなにいっぱい食べてもどうして太らないのかしら！」

シグ「太らない体質とかではないか？」

「なあ、スバルにギンガ」

ス、ギ「はい？」

「もしかして戦闘機人ってさ、食べたもの全部エネルギーに変換できるのか？」

ギ「…そういえばそんなことを昔マリエル技官が言っていたような気が」

シャ「ええっ！？つまり、体に脂肪とかが蓄積しないってこと！？」

医者のシャマルはとても驚いている。

ス「そうなんですかね？よくわかんないです」

ヴィ「じゃあいくら食っても絶対に太らないってことかよ！？」

シグ「すごいな…」

ヴィヴィオ「ギンガママすごーい」

みんな「ごちそうさまでした！」

イクス「私お皿集める！」

カナ「では私はデーブルを拭こう」

テ「あれ、ウィルさん。ティーナさんは？」

「ああ、ティーナなら地上本部、じゃなかった。昨日沈んだ潜水艦の残骸の調査で
昨日から海に潜っているはずだ」

は「ちょっと待った！確か沈んだ場所って水深４，９００ｍとかいう深海やなかった！？」

「そうだよ？」

ザフィ「どうやってそこまで潜るんだ？」

「そんなの簡単だよ。ウェットスーツ着て、酸素ボンベ背負って、頭にライト付けて、
あとは海に飛び込むだけだ」

アリサ「そんな深い場所まで潜れないでしょ、普通！」

「そこはあれだ、色々と能力を使ってだよ」

そこに。

ティ「ただいまー！」

ウェットスーツを着たティーナが現れた。

カ「ティーナさん！なんでその格好なんです？」

ティ「着替えるのがめんどくさかった」

すずか「どんだけなの」

「で、何がわかった？」

ティ「魚雷発射管室に未使用の核魚雷が３発、巡航ミサイルが４発残ってたよ。
もっとも水圧と衝撃で粉々に壊れていたけどね」

「核物質はどうした？」

ティ「言われたとおりに鉛のケースに入れて、技術開発本部の隔離エリアに
転送しておいたよ。船体の残りの残骸も別のエリアに転送といた」

「そうか、ご苦労さん」

すずか「ウィル君、その核物質はどうするの？」

「そこなんだよな、どうやって処分しようか…」

な「どこかに埋めちゃえば？」

は「それあかんやろ」

ス「爆弾で粉々にしちゃえば…」

アリサ「それこそダメでしょ！」

すずか「核爆発なんかやったら大量の放射能が拡散しちゃうよ！」

カ「いつまでも保存しておくわけにもいかないですよね」

「…よし、スバルの案でいこう」

ス「うぇっ！？」

フェ「核爆発させるの！？」

な「とうとうウィル君が壊れたの！」

「壊れた言うな！」

ヴィ「やるにしてもどこでやるんだよ！」

シャ「そうよ！人気のない場所で爆発させても風で放射能が広がるわよ？」

「だから元から人がいない場所でやればいいんじゃないか」

シグ「人がいない場所だと？どこだ？」

「俺達の上にある月だよ。誰もいなしうってつけの場所だと思うんだが」

ザフィ「確かにそうだな。あそこにあるのはウィルが建設した基地だけだ」

「じゃあ決まりだな。ジェイルにメールしとこっと。さて、それじゃあ、
　ヴィヴィオ、カナリア、イクス！遊ぶぞ！」

イクス「わーい！」

ヴィヴィオ「魔法の練習もしたい！」

カナ「その前に宿題な」

ヴィヴィオ「そんなこともあろうかと！」

イクス「もう終わらせてあるんだよ！」

カナ「ほう、えらいじゃないか」

「予習・復習も終わったのか？」

イクス「もちろん！」

「おお、えらいぞ～」なでなで

イクス「えへへ～♪」

な「魔法の練習なら私も手伝うよ」

シグ「では私も」

ヴィ「シグナムの場合、練習じゃなくて模擬戦な気がする」

フェ「私もやっておこうかな」

「俺もちょっと練習しないとな～」

ヴィヴィオ「変身！！」しゃきんっ！

イクス「召喚！！」ぴかーっ！

カナ「だいぶスムーズに召喚できるようになったな」

な「よくできましたー」

ヴィヴィオとイクスはカナリアとなのは監修のもと、シュミレーターの外で基礎訓練。

シグ「行くぞテスタロッサ！！」

フェ「いつでもどうぞ！！」

2人はシュミレーターで作った高層ビルの間を移動しながらやっぱり模擬戦。

「まずモデル、執事（バトラー）」

シュミレーターで2人が模擬戦しているので、なのはたちの近くから極細ワイヤーを操って、シグナムとフェイトの近くにいっぱい生えている高層ビル群を一瞬で細切れにした。

シグ「なっ！？」

フェ「なんで！？」

「いい気分だ…とてもいい気分だ…ってこれは少佐のセリフじゃないか。えっと次はあれだ、モデル、光の処刑。でも攻撃されないとこれ使えないな」

フェ「トライデントスマッシャー！！」

シグ「甘い！」ドカーンッ！

フェ「あ！ウィル！」

「え？」

後ろを振り返ると、大量の土砂が俺目がけて降ってきた。
シグナム目がけてフェイトが放った黄色い砲撃が、避けられて
シュミレーターの場外の地面に命中したらしい。

「ちょうどいいや。『優先する。土砂を下位に、空気を上位に』」

するとあら不思議。空中で土砂が止まってしまったではありませんか。

シグ「えっ？」

フェ「うそ？」

「おーうまくいったかな」

な「何したの！？」

「ん？物の優先順位を変えただけだ。空気より土砂が劣るようにしたから
　土砂は空気中での行動を禁じられたのさ」

フェ「なにそれすごい」

シグ「他にも使えるのか？」

「もち。例えばこの紙。なのは、ちょっと持って」

な「うん」

俺はポケットから取り出したメモ帳をなのはに渡す。

「んで、『優先する。弾丸を下位に、紙を上位に』」

そして腰のホルスターからH&K　HK45Tを抜いて、なのはの持っている紙に向けて発砲した。

ドンッ！

フェ「なのは！」

ヴィヴィオ「なのはママ！！」

だが、紙に向かった弾丸は紙を破れず逆に弾丸自体が潰れ、地面にポトリと落ちた。

な「えええええええ！！！」

「とまあこんな感じだよ」

シグ「…信じられん」

「てかちょっとトイレに行k」

な「ウィル君…いきなり銃を撃つとかとても驚いたんだけど」

「あー、そのすまん。だからそのデバイスを…」

な「ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？」

「…『優先する。魔法を下位に、人体を上位に』。ではさらば！」

な「ディバインバスター！！」

だが魔法の優先度が人体よりも下なので、俺に命中した砲撃は全く意味をなさなかった。

な「その能力ズルイの！！」

「チートだし仕方ないよね」

3日後。
以前イクスが召喚したゼルエルが放ったビームが着弾した場所。
第1月面基地から東に20kmの地点にある巨大なクレーターの底に
例の核物質を使って作った核爆弾がポツンと置いてあった。

～第１月面基地、中央司令室～

そこには「ケリオン」事件の時に会議室にいた人間が勢ぞろいしていた。

「艦長、準備完了です」

「よし、それじゃあカウントスタート」

「了解、起爆まで６０秒、５９、５８…」

は「ここはハイテクやな～」

レジ「地上本部の司令室よりもコンパクトだが高性能だな」

ク「でもちゃんと爆発するのか？」

ジェ「私の技術を舐めるなよ？きちんと起爆するさ！」

「あれだ、もし起爆しなかったら調整しなおしてクロノの家で実験を…」

ク「なななんてことを言うんだ！？」

「１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１…」

俺達はクレーターの上空に待機しているＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機から

送られてくる映像を見ていた。モニターに表示されていたカウントがゼロになった瞬間、間延びしたまばゆい閃光が広がった。眩しい閃光が
収まった頃、核爆発の火球が生まれた。火球はギラギラと光り、渦巻き
ながら宇宙空間へとのぼっていく。驚くほど鮮やかな山吹色をした火球は、
膨張しながらあがっていった。想像を絶する生きた火の玉である。

ジェ「ほら見ろ！ちゃんと爆発しただろ？」

ク「流石だな。にしてもすごい威力だ」

レジ「アルカンシェルより弱いが、それでも広域殲滅兵器としては優秀だな」

は「……」

広島と長崎に原子爆弾が落とされたことは歴史の授業で習っていたはやても、
実際に核爆発を見るのは初めてであり、その威力に呆然としている。

「人間が作り出した灼熱の地獄、ってところか」

は「…これが核兵器」

「地球では忌み嫌われているけど、非常にいい兵器なのは確かだ」

は「いい？核兵器が？」

はやては俺の言葉に心底驚いた表情を浮かべる。
は「あんな大量破壊兵器のどこがいいやっ！？」
「はやて、軍隊における最高の効率ってなんだかわかるか？」
は「最高の…効率？」
レジ「簡単な質問だな」
ク「確かに」
は「…わからへん」
「答えはな、1だ」
は「1？」
「そ、1。1発撃って1つ、もしくは複数のターゲットを破壊する。それが
軍隊では最高の効率なんだ。人を殺すときに頭を撃って即死させるのと
同じ理論だ。核兵器っていうのは使い方が難しいけど、1発で大量の敵を
倒すことができる。そういう意味では素晴らしい兵器だ」
は「で、でもっ！環境破壊とかはどうなるんや！？」
「敵地の環境が破壊されて困るのは敵地の人間だけだ。攻撃する側の人間は

敵地の人間のことなんか知ったことではない、違うか？それに、他国への
影響が少しでも少なくなるように威力を調節して使えば問題もない」

ク「使うなら核兵器よりもクリーンなＮ？兵器がいいな」

レジ「そうだな」

「まあ、管理局で核兵器は使わんよ。管理コストが馬鹿にならん。今あるＮ？兵器だけで十分だ。それにあれは陸や空では使わないし」

は「そうなん？」

「あれはＭｋ６５マーズにしか載せていないぞ。Ｎ？兵器よりもなのはの
スターライトブレイカーの方がある意味怖い」

は「あはは、それは確かに…」

な「はっくしょんっ！誰か私のこと噂しているのかな？」

こうして無事に核物質の処理に成功した。

は「あれ、ふと思ったんやけど」

「ん？」

は「あの戦艦に乗っているレーザーとかで核物質を吹き飛ばせないん？」

あの戦艦に乗っているレーザー＝テクター級のターボレーザー

「あ、その手があったか」

は「おいこら」

「で、でもさ、こっちのほうが迫力あっていいだろ?な?」

第１０２話：みんな非番なので（後書き）

いままでエントリーした企業は３０社以上。
そろそろ全滅しますｏｒｚ

次回は、あれを書きます、あれ。
では

第１０３話：猛烈にネタ切れなり（前書き）

前回、「あれ」を書きますって言ったけど、「あれ」ってなんだったっけ？

第１０３話：猛烈にネタ切れなり

～屋敷、朝７時～

みんな「いただきます！！」

ス、ギ「がつがつもぐもぐ…」

アリサ「ねえウィル？今日一緒の車に乗せてくれない？」

「珍しいな。今日は早いのか？」

すずか「私も早いんだ。だからお願い」

「もちおっけーだよ。じゃあ車は別のにするか」

な「そういえばいつの間にか車がいっぱいになってたよね」

フェ「確かにそうだね」

ティ「ご主人様が地球の車を持ってきたからじゃない？」

「だろうな」

シグ「どれもこれも速そうな車ばかりだった気がする」

シャ「でもゆったりとした豪華そうな車もあったわよね？」

ザフィ「オープンカーが好きだな」

ヴィ「あたしもだ！風がブワーッてくるのがいいんだよな！」

は「うちの車だってオープンカーやで！」

テ「まぁ、あれは…そうですね」

ツ「でもあれはダサいです！」

ア「私も同意見です、主」

は「うううう！！！」

「おっと、そろそろ行くか」

アリサ「じゃあみんな、行ってきます」

すずか「行って来まーす！」

ヴィヴィオ「いってらっしゃーい！」

イクス「気をつけてね、お父様にお母様！」

～ガレージ～

「今日はこの車でいこう！」

アリサ「これは…？」

「ホールデン・コモドア。オーストラリアのホールデン社の大型サルーンだ。
６．２リッター、スーパーチャージドＶ８エンジンを乗っけている。
０－１００ｋｍ／ｈは４．６秒、最高速度は２５０ｋｍ／ｈに制限されている」

ティ「かっこいいの！」

すずか「すごいわね」

「驚くのはこれからだ。とりあえず行くぞ！」

俺達は車に乗り込んで屋敷を出発した。まさ朝早い時間なので道路も空いている。

「この音を聞け！」

エンジンを全開にすると、スーパーチャージャーの金切り音が響く。

エンジン＜にゃあああああああああああああん！！

アリサ「何この音！？」

すずか「猫の鳴き声みたい！」

「スーパーチャージャーの音だよ！実に素晴らしい！！」

ティ「目が覚めるの！！」

そしてさらに音が聞きたくなった俺は、ダッシュボードについている「バイモーダル」ボタンを押した。このボタンを押すと、バルブとかを
調節して音量をさらに上げることができる。

「テンション上がってきたあああああああ！！！」

アリサ「早すぎよおおおおお！！」

すずか「ひいいいいいいいいい！！」

普通、俺の屋敷から地上本部まで車で行くと、だいたい２０分から３０分かかる。
だが今日は１２分で到着した。いきなり猫の鳴き声のような音を立てながら
地上本部の地下駐車場に入ってきたので、他の局員がびっくりしている。
で、いつもの駐車スペースにサイドターンしながら車を停める。

「ん～今日は楽しく仕事ができそうだ！ってあれ、２人ともどうした？」

ティ「なんかぐったりしてるね？」

アリサ、すずか「ウィル（君）のせいでしょ！！」

エレベーターを待っていると。

ティーダ「なんかすごい音がしたと思ったらウィルだったか！」

「おうティーダ！」

ティアナの兄ことティーダ・ランスター。彼は順調に出世して、今では
一等空佐になり、首都航空隊1番隊隊長として活躍中である。
ちなみに彼はバイク好きである。

ティーダ「とてつもない音の車だな」

「地球製の車だよ。すごく早いし乗り心地いいぞ？」

ティーダ「…後ろにいるお前の奥さんを見る限り、そうとは思えないな」

アリサ、すずか「」ぐったり

「じきに慣れるさ。それより最近そっちはどうだ？」

ティーダ「クラナガンの犯罪発生率は年々下がっているし、検挙率も高いぞ」

「それはいいことだな。じゃあまた今度飲もうぜ！」

ティーダ「了解、局長殿！」

1階でエレベーターを降りたティーダは、2本指で軽く敬礼して颯爽と去っていった。

アリサ「あ、私2階ね」

すずか「私は4階！」

「ほいほい」

2人と別れた俺とティーナは、最上階の執務室に来た。そこには既にドゥーエが
待っていた。

ドゥーエ「おはようございます、ウィルさん、ティーナさん」

「おはよう」

ティ「おっはー！」

「今日も頑張るとするか。よろしくな、ドゥーエ」

ドゥーエ「こちらこそ！それで、まず先日の『バーバリアン』と『ケリオン』の
戦闘で環境への影響が報告されています」

「え？具体的には？」

ドゥーエ「波が普段より高かったり、風が強かったりだそうです」

「それくらいならどうって事ないな。てっきり放射能とかの報告かと思ったよ」

ドゥーエ「ただ、合計で16発のN?兵器搭載魚雷が起爆したので、陸地では
かなり揺れたそうです」

ティ「それは仕方ないよね」

「ま、今後N?兵器を使用するような事態にならないことを祈ろう」

ドゥーエ「そうですね」

ティ「ご主人様～。無人世界でモンスターがいっぱい暴れているんだって」

「無人世界で暴れているなら放っておけ」

ティ「でもなんか密猟者とかがヒーハーしていて取り締まって欲しいんだって」

「めんどくさいな。スーパーレーザーで星ごと吹きとばせ。そうすりゃ
密猟できないだろ」
ドゥーエ「ちょ！」

「おいおいなんだこれ？」
ドゥーエ「えっと、研究開発費、ご、５，０００万ミッド！？」
ティ「しかもこれ、全部で、じゃなくて１つの研究で、だよ？」
「おいジェイル！この研究費は一体何に使うんだよ！？」
ジェ「いやぁ、実はエディに見せてもらった『宇宙戦艦ヤマト』が面白くてね。
波動エンジンとやらをつくってみようかと」
「却下！！」

「なになに、非常食の期限切れか…」

ドゥーエ「また数年前みたいに食堂で使いますか？」

ティ「あれ美味しくないから嫌だ」

「同感だ。でもそのまま捨てるわけにもいかんし…そうだ」

ドゥーエ「なにかいい案でも？」

「非常食ってあれだろ？温めてすく食べれるとかそういうやつだよな？」

ティ「そうだよ」

「だけどまずいから、全部鍋にぶちまけて温めながら味付けを変えよう！
そうすればうまくなる…かもしれない」

ティ「それいいね！そうしよう！」

局員「局長、今月の『レリック飴』の売上はこんな感じです」

「ん～やっぱ人気あるね、あれ。意外だわ」

局員「子供も大人もみんなが好きだそうで」

ティ「糖分超控えめだけど美味しいからね～」

「結構。じゃあいつものように売上は全部寄付しといてくれ」

局員「わかりました」

「艦長、第３艦隊が第２次広域探索を終えて帰還しました」

「おお、それで報告は？」

「新たな世界が４つありました。２つは完全に無人、１つは地球規模の世界、
もう１つはかなり発展している世界です」

「無人世界は放っておいて、残り２つは我々が介入する必要がなさそうだな？」

「そうですねー、ロストロギア反応もありませんし、魔法文化とかないし」

「じゃあ監視用の人工衛星だけ配備しとけ」

「了解。なお、第４艦隊が既に第３次広域探索を開始しており、第３艦隊も
整備が終わり次第、第４次広域探索に向かいます」

「わかった」

ドゥーエ「昔よりだいぶはかどっていますね」

ティ「人手不足だからね～、今も昔も」

「だからこその無人戦艦軍団だ」

ぐー

ティ「あ…」

ドゥーエ「あらまあ」

「ティーナの腹も鳴ったしそろそろ昼飯だな」

ティ「やった！ごはん！」

ドゥーエ「では行きましょうか」

～その頃の屋敷～

フェ「それでそっちはどう？」

非番のフェイトは、遠くにいるエリオとキャロと通信している。

エ『こっちは平和ですよ。特に何も起こりませんし』

キャ『そうですね、楽しく仕事ができてますよ』

フェ「ならよかった。私もそっちに行きたいな」

エ『ぜひ来て下さい！ここはいい所ですよ！』

キャ『でもこの前、久しぶりに密猟者グループが出たんですよ』

エ『自前の次元航行船まで持ってて、なんか組織的に動いていましたね。

で、それを見たキャロが怒っちゃって…』

フェ「え？怒って何したの？」

キャ『ついヴォルテールで船にビーム攻撃しちゃいまして』

フェ「」

エ『で、でも犯人は五体満足で逮捕しましたよ！』

フェ「そ、そっか。それはよかったね」

若干引いているフェイトであった。

テ「♪」かちゃかちゃ

ティアナもまた非番なので、ガレージで自分のバイクをいじっている。

テ「これで今度ウィルさんとツーリングに…うふふ」

自分の趣味かと思いきや、やっぱりウィル目当てなティアナであった。

ヴィヴィオ「え？今度うちに遊びに来るって？」

コロナ『うん！また行きたいな！リオも行きたいっていってたよ』

イクス「またみんなで遊びたいな！」

ヴィヴィオとイクスはコロナと電話中。

～本局、無限書庫～

カナ「ふむ…興味深い」ぺらぺら

ユ「カナリアちゃん？そろそろ休んだら？」

アルフ「もう朝からずっとだぞ？」

カナ「おや、もうそんな時間か。どれ、昼食にしようかな」

ユ「じゃあ一緒に食堂に行こうよ」

アルフ「お肉！お肉！」

カナリアは無限書庫でひたすら本を読んでいた。１年前に執務官試験を
満点で合格して周囲を驚かせ、それを知ったフェイトはしばらく
落ち込んでいた。自分は２回も落ちたのになんで…というわけである。

ギ「がつがつもぐもぐ…」

陸士１０８隊ではギンガが昼食を楽しんでいた。

ゲンヤ「おいギンガ！近くでひったくり事件が起きたから行って来い！」

ギ「ひょっふぉみゃっふぇよ、おほうはん（訳：ちょっと待ってよ、お父さん）」

ゲンヤ「いいから行って来い！いつまでも食ってんじゃねえ！」

ギ「ううう…まだ食べ終わってないのに！！」だーっ！

クイント「ご飯の恨みは怖いわよ～。犯人、死んだわね」

ゲンヤ「えっ？」

局員「あれが犯人だ！！」

犯人「くそ、だが俺にはバイクｇ」

ギ「超すごいパーンチ」

犯人「ぎゃあああああああああ！！！」

局員「えー」

ギ「あとよろしく！」

局員「は、はぁ…」

ギ「ただいま！がつがつもぐもぐ…」

ゲンヤ「早いなおい！犯人は？」

ギ「ぶっ倒したよ。ふう、ごちそうさま！」

クイント「記録更新ね」

「終わったあ！」

ティ「疲れたの」

ドゥーエ「お疲れ様です」

「あれ、今日はトーレたちは非番だっけ？」

ドゥーエ「そうですよ。今頃家でのんびりしているでしょう」

「ま、日頃何かと大変だしな。じゃあそろそろ帰るか。また明日な、それじゃ」

ティ「じゃあね～」

ドゥーエ「お疲れ様です」

「アリサか？仕事終わったか？」

アリサ『うん！今終わったわよ。すずかも一緒よ』

「じゃあ正面で待っていてくれ。車を回すから」

アリサ『またあれに乗るの？』

「ゆっくり走らせるからさ。それじゃ」

エンジン＜にゃあああああああああああああああん！！

すずか「どこがゆっくりなのおおおお！？」

アリサ「ひえええええええええ！！！」

ティ「いやっほおおおおお！！」

「ただいまー」

咲夜「おかえりなさいませ、って奥様、どうかされたのですか？」

アリサ「いえ、なんでもないわ…」

すずか「ちょ、ちょっと疲れちゃっただけだから…」

そんなこんなで今日も平和です。

第１０３話：猛烈にネタ切れなり（後書き）

もうしゅうかつとかやりたくない。
一生学生がいいな～

次回は未定です、まじで。
ていうか明日は用事があるので書けない可能性が高いです。
では

番外編１２：艦長の日記（前書き）

実はあの人は！！

５／１５　一部編集。

なんか時系列がごっちゃになっていたので。

番外編１２：艦長の日記

２０１５年３月２７日、北極海。

私が率いる原子力潜水艦「ロイヤルティ」はついに北極海までやってきた。目的はただ１つ、このくだらない戦争を終わらせるためだ。

１０年間。もう１０年間も我が祖国とかの国との間で戦争が続いている。

今まで何人の同胞が死んでいったか…私も多くの友人を失った。

だが連中はもう勝つことはないだろう。２日前、かの国の首脳部は我が軍の無条件降伏に同意した。これで戦争が終わる。誰もがそう思っていた―

我が国第２の都市が核攻撃を受けるまでは。

あの美しかった街は文字通り地図上から消滅した。

何もかも、一切合切蒸発してしまった。

その核ミサイルを放ったのは、北極海に潜んでいたかの国の忌々しい弾道ミサイル原子力潜水艦、通称ブーマーだった。彼らはまだ戦争を続けると声明を発表し、逆らうものには核を撃つと世界を脅した。

そこで彼らに一番近い場所を哨戒中だった我が艦に命令が下った。

”あのクソを潰せ”と…

あともう少しだ、もう少しで全てが終わる…

????年?月?日、????
…私は頭がどうかしてしまったのだろうか？

我々は敵潜水艦の真横から6発の魚雷を一斉に発射した。そしてそれらは
全部命中し、敵潜水艦は沈んでいった。これで勝った！と誰もが思った。
しかし、突然ものすごい衝撃と共にまばゆい光があたりを包み込んだ。

気が付くと、我々は病院に収容されていた。確認したところ、全乗組員が
無事だったのでとりあえずほっとした。

だがそこからあとは信じられないことばかりだった。

窓の外を見ると、なんと人が空を飛んでいたのだ。
思わず私は頭を何回か叩いて、それからとなりのベッドに居た副長、
ハロルド・マッキンタイア少佐に聞いてみた。

「副長、私の頭は大丈夫なのだろうか？」

少佐も私と同じく信じられないといった表情を浮かべながら答えた。

「艦長、信じがたいことですがこれは現実のようです」

まったくなんてことだ…

新暦７５年５月２１日、クラナガン総合病院

なんどか説明を受けて、我々「ロイヤルティ」の乗組員は現状を把握した。

まずここはミッドチルダの首都のクラナガンという場所にある病院で、

我々は３日前に海岸で倒れているところを発見されたそうだ。

そしてここの警察のような組織、時空管理局の人間が言うには、

この世界には魔法がある、他にもいくつもの世界がある、我々はそれらの世界の平和を守るための組織だ、だそうだ。

魔法のことは昨日見た空飛ぶ人間で十分わかった。だから私は聞いた。

「私の潜水艦は一体どこにあるんだ?」

と。

答えはすぐに来た。

「あなた方が乗っていたらしき潜水艦は損傷が激しく、二度と潜れないでしょう。
　ドックに保管してありますが、見てみますか？」

私たちは二つ返事で答えた。

新暦７５年５月２２日、ドック

バスに乗ってしばらくすると、巨大なドックに到着した。
その中央に我々の第２の家とも言える存在の「ロイヤルティ」がいた。

…一言で言うならば、「ぼろぼろ」だった。
前部潜舵は根元からもぎ取れており、艦首のソナードームもなくなっていた。
船尾の７枚刃のスクリューも４枚になっていた。そして至る所にひびと亀裂が

入っていた。たしかにこんな有様では二度と戦場に出ることはできない…

他の乗組員も愕然としていた。

知らない場所で唯一信じることができる「我が家」まで失ってしまった。

我々は祖国へ帰れるのだろうか？

新暦７５年５月２５日、病院会議室

今日我々は退院する。だがいく場所などどこにもない。

金もないし、言葉だってぎりぎりで通じる程度だ。

管理局の局員が我々の現状を詳しく教えてくれた。

我々がいわゆる”次元漂流者”であること。

現在、貴方達の世界を探していること。

見つかったら貴方達は元の世界へ帰れるかもしれないこと。

それまでは管理局で保護するので衣食住に関しては心配要らないですよ、

と局員は優しく言ってくれた。最近聞いた話の中では最高のニュースだ。

新暦７５年６月１日、ドック

この世界にきて２週間がたった。乗組員は今でも祖国の海軍規則に則って
規則正しい生活を送っている。なにもしないのはまずいので、許可をもらってトレーニングジムでの運動を毎日行なっている。

私は今日も「ロイヤルティ」の中にいる。発令所に行き、いつも座っていた
指揮コンソールに腰掛ける。やはり此処が一番落ち着く。

そんな時、１人の人間が入ってきた。誰だ？と聞くと、
あなたを探していたんだ、中佐、と彼は答えた―

懐かしい我が祖国の言葉で！

私は思わず椅子から飛び降りて彼に駆け寄った。

「なぜその言葉を話せるんだ！？私の祖国のことを知っているのか！？」

「落ち着いてくれ艦長、いいニュースと悪いニュースがある」

そして彼は話し始めた。
いいニュースとは、我々のいた世界の特定に成功した、という内容だった。
これで祖国に帰れる！！
だが悪いニュースは、私たち乗組員を絶望の底にたたき落とすのに十分だった。

新暦７５年６月２日、宿舎

次の日に私は彼、ウィリアム・Ｔ・ロンバートからの話を乗組員に話した。

あの日、北極海で巨大な核爆発が観測された。原因は我々が撃沈したかの国の弾道ミサイル原子力潜水艦だった。魚雷が命中した衝撃で、搭載していた潜水艦発射弾道ミサイル（ＳＬＢＭ）の起爆装置が誤作動を起こして起動し、水中で６．５メガトンの核爆発を引き起こした。
普通ではありえないことなのだが、それが事実だそうだ。
かの国の潜水艦発射弾道ミサイル（ＳＬＢＭ）の起爆装置は高度計と連動しており、事前に設定された高度で起爆する仕組みになっている。

わが祖国への核攻撃時には、高度３００ｍで起爆するように設定されていた
そうだ。

ともかく、我々は全員戦死したことになっており、

「世界を核の恐怖から救った英雄」

と称され、祖国の首都に慰霊碑まで建てられているそうだ。

つまり、元の世界では死んだことになっており、こっちの世界の身分証もない。

ロンバートと名乗った青年は、貴方達のその腕を見込んで、この世界で
潜水艦に乗らないかと言ってきた。もちろん元の世界に戻りたいのであればそうするが、最終的な判断はあなたたちにまかせる、と。

私は皆に尋ねた。

「また私と共に潜水艦乗りとして働いてくれないか？」

と。

すると皆は大声で笑い始めた。

副長「何を言っているんですか、艦長？私たちの答えは決まっていますよ」

少佐の言葉に皆が元気よく頷く。

「…ありがとう、みんな」

新暦７５年６月６日、地上本部

今日は管理局の地上本部で我々が乗る予定の新しい潜水艦の説明があった。

設計図を見て、詳細を聞いたあと我々が思ったことはただ１つ。

なにこれ、すげぇ…、と。

バーバリアン級潜水艦と呼ばれることになるこの潜水艦の動力源は小型化した
魔導炉だそうだ。原子炉を使っていた我々からすれば信じられない技術である。
そして船殻がセラミックス混合のアルミナ。いわゆる傾斜機能合金製であり、
最大潜航深度はなんと１６，０００ｆｔ（４，８００ｍ）と聞いてびっくりした。
「ロイヤルティ」なら１，０００ｍで圧壊するのに！水中最大速力が５５ノットで

無音最高速力が２５ノット。乗組員は１２０人になっており「ロイヤルティ」と
同じである。ヒドラジン・ガス発生機による非可逆的な非常ブローが可能。
…もう何も驚くまい。武装は魚雷発射管が８基、トマホークＳＬＣＭ用ＶＬＳが１２基。

だがさらに驚かされることに。今からこの潜水艦を造り始めるそうだが、
完成が来年の４月になるとか。普通ならもっと時間がかかるものなのに。
そして１ヶ月で艦に慣れてもらい、来年の５月から沿岸警備隊に配属されるそうだ。

…なぜ潜水艦が沿岸警備隊に配属されるのか聞いてみたが、
気にしてはいけないそうだ。

とにかく、この潜水艦ができるのが楽しみでしょうがない。
それまでは趣味の小説の執筆作業でもやるとしよう。幸い、
「ロイヤルティ」のメインコンピュータはまだ生きていたので、
今までの航海データや、小説のデータが消えずに残っていた。
神様、ありがとうございます！

新暦７５年８月３０日、宿舎

…ついに完成した！３年の歳月をかけて書き上げた傑作小説！
これは絶対に売れるはずだ！

よく考えたら、私たちはもう祖国へは戻れないから、「ロイヤルティ」に
乗っていたときのこと小説にしてしまおう！どうせ祖国の人間は
ここに来れないのだから。我ながらいいアイデアだ。早速書こう。

新暦７５年９月１２日、宿舎

今日は地上本部でえらい騒ぎがあった。機械の兵隊が襲撃してきたのだ。
幸い、本部は要塞化してあったようで被害は皆無だったそうだ。
また、民間人への被害もなかったそうなのでほっとした。
罪の無い人間が犠牲になるのはまったくもって許しがたいことだ。

それともう１つ。私の小説が意外と売れている。潜水艦の小説はここでは
珍しいらしく、多くの人から面白い！という感想が届いた。
実に嬉しい気分だ。

新暦７５年９月１９日、宿舎

１週間前に地上本部を襲撃した奴が今度は空飛ぶ戦艦で攻撃しようとしてきた。

しようとしてきたと書いたのは、戦艦が出てきた瞬間に撃墜されたからである。

かわいそうな犯人である。そのあと捕まって戦艦も吹っ飛ばされたそうな。

新暦７５年９月２２日、宿舎

今度は管理局の上層部が反乱を起こした。なんでも今までの汚職がばれそうになったからそうだ。実にくだらない理由だ。

宿舎のテレビを皆で見ていたのだが。

副長「ちょ！艦長！あの人、確かロンバートさんじゃ！？」

「なんだと！？」

そこには、とてつもなく大きな宇宙戦艦の艦隊を率いて反乱軍を駆逐しているロンバートさんがうつっていた。彼は一体何者なんだ？

結局、敵の大将は船をバラバラにされて死んだそうだ。
おまけにあのロンバートさんが、なんと時空管理局のトップになった。なんでも今まで解決してきたことを踏まえてのことらしい。

建造中の潜水艦の設計図書いたのも彼だったし、やはり才能がある人は
すごいものだとつくづく思った。

小説を書きながら最近私は飴を食べるようになった。「レリック飴」という
この飴は様々な味の種類があり、売上は全部寄付されるという。
これがなかなか美味しい。ちなみに私はレモン味が好きだ。
飽きない味だし、シュガーレスなので太りにくいそうだ。

新暦７６年４月２日、ドック

ついにこの日がやってきた。我々が乗る潜水艦が完成したのだ。
「バーバリアン」と名付けられたこの潜水艦が、新たな「我が家」になるのだ。命名式と就任式が極秘裏に行われた。管理局局長となったロンバート大将が命令書を読み上げる

「本日付けでクリストファー・レヴィンソン二等海佐を『バーバリアン』
艦長に命ずる！ミッドチルダの海の安全を守ってくれることを期待する！」

「謹んでお受けいたします！」

そして。

副長「総員配置につきました、艦長」

「わかった、副長。…ついにこの日が来たな」

副長「待ちに待った日ですからね」

「それでは、微速前進！」

「バーバリアン」はその船体を水に浮かべ、初の航海へと出発した。

新暦７６年４月４日、艦長室

出航してから2日間、我々は新しい「我が家」で訓練に勤しんでいた。
火災訓練、浸水対策、魔導炉の操作。一応乗る前にシュミレーターを活用して勉強はしてきたが、実際に自らの手で作業しなければ、いざという時には役に立たない。これは経験から導き出した私の考えだ。

実弾射撃訓練も行ったが、ここの魚雷は実に高性能だ。威力も十分なくらいある。また深深度への潜航訓練では、１５，０００ｆｔを超えた時点で
発令所のデッキがたわんだ。これは艦の防音装置が機能していないという危険なサインだった。おまけに天井から断熱材とペンキのかけらが
パラパラと降ってきた。これ以上は危険と判断し浮上した。
実戦でここまで潜るのはゴメンだ。

それと、2冊目の小説を売りだしたところ、前作よりもさらに売れている！
実戦データをもとに書いた小説なので、臨場感があって面白いとのことだ。

新暦７６年５月５日、艦長室

今日は沿岸警備隊の新艦船をマスコミに公表する日だった。
となりのドックから出てきた２種類の船を見て、こんな船がいると分かっていれば海で犯罪を犯す奴なんていないだろうと考えた。

だが、その後の哨戒任務で貨物船が攻撃を受けているという通信が入り、
我々「バーバリアン」も無音最高速力で救援に向かった。しかし、敵はなんとその貨物船だった。ソナーが魚雷の音を聞きつけ、発射ポイントを解析した結果、貨物船の底からだった。そして海上では対艦ミサイルと砲弾の撃ち合いになり、局長からの命令で我々も高性能爆薬搭載の魚雷を８発撃ち込んだ。放っておけばすぐに沈んだであろう敵貨物船、もといＱシップは局長が持って帰ったそうだ。

新暦７８年７月６日、艦長室

あれから２年が経ったが、海は平和だった－昨日までは。

ロストロギアを輸送中の貨物船の近くで次元震を観測、カフカス級巡視船2番艦『ピスコフ』が偵察をしたところ、潜水艦を発見、呼びかけに応じずそのまま潜航し、さらに対空ミサイルを放って逃走したとのことだ。おそらく魚雷発射管から発射されたものだろう。

今日我々は哨戒任務に出るはずだったが、出航直前に兵器管理部門の大型トラックと地上本部の警備部隊がドックに到着した。渡された書類を見て、私は局長がとても怒っていることがわかった。

N?兵器を搭載した新型スーパーキャビテーション魚雷、Ｍｋ６５マーズ。

祖国で戦っていたときは核魚雷を撃ちあっていたが、今度はそれ以上の兵器で戦うことになった。兵器の搭載作業を監督している時、ふと祖国での戦争を思い出した。恐ろしい威力を秘めた核兵器。それとほぼ同じN?兵器。再びこのような兵器で戦いに挑むとは…だがこれこそ我々の専門分野である。気を引き締めなければ。

ただ、N?兵器は放射能の影響が少ないので環境被害は無いに等しい。

そう聞かされたのでほっとした。

出撃して3時間後、今度は「カフカス」が魚雷攻撃を受けた。反撃したが逃げられたそうだ。そこにソナーからの興奮した声が。奴を見つけたのだ。ここからは我々の仕事だ。

新暦７８年7月7日、艦長室

交戦規則に則り、敵潜水艦を撃沈した。なんと敵は核魚雷をいきなり撃ってきた。
陸地から遠く離れた場所での戦闘だったので、こちらもＮ?兵器で応戦した。

戦闘後、通信ブイを上げて本部に報告すると、１０分後に局長から返信が来た。
文頭に、

Ｘ親展、「バーバリアン」艦長、クリストファー・レヴィンソン一等海佐殿Ｘ

と書いてあり、祖国では一生無理だと思っていた大佐になることができた。
これからも頑張っていこう!

副長「艦長、そろそろドックにつきますよ」

「おお、そうか。今行く」

私は日記帳を閉じ、かばんにしまって発令所へと向かった…

番外編１２：艦長の日記（後書き）

次元漂流者でした、っていう話。

いやぁ、燃え尽きたぜ…脳みそが。
筆記試験ってほんと疲れるね、うん。

次回は未定！もしかしたらもうＶｉｖｉｄ編に入るかも。
では

第１０４話：ｂｅｆｏｒｅ　ｔｈｅ　ｖｉｖｉｄ　ｓｔｏｒｙ：（前書き）

Ｖｉｖｉｄ編に突入する前に！

感想で
「手抜きやめろ」
とか
「もっと真面目に書け」
と言われました。努力はしますが、作者の性格上
この先も今までの書き方でいくと思います、はい。

第104話：before the vivid story：

新暦79年3月21日、第3管理世界「ヴァイゼン」

ス「トーマ！」

？？？「あ、スゥちゃん！」

スバル・ナカジマ・ロンバートは、今ヴァイゼンにある管理局の施設にいる。
もちろん目的は1つ。

トーマ「どうしたの急に？」

トーマ・アヴェニール、15歳。ここヴァイゼンの出身。
新暦74年にヴァイゼン北西部の「アミア」という街で発生し、住民約230名がほぼ死亡するという「ヴァイゼン遺跡鉱山崩壊事故」の生き残りである。今年、ヴァイゼンで1人訓練していたスバルと出会い助けられ、今はここ、ヴァイゼンの施設で一時的に暮らしている。
ちなみにこの施設を出たらナカジマ家の一員になる予定である。

ス「トーマの顔が見たくてやってきたんだよ～！」

スバルはそう言うと、トーマに抱きついた。

トーマ「すすすスゥちゃん!?」

ス「う～ん会いたかったよ～」ぎゅ～

トーマ「そそその、むむむ胸が当たって…／／／」

ス「おやおや～？トーマも男の子だね～」

トーマ「スゥちゃん！」

ス「あはは！あれ、その腕どうしたの？」

トーマ「ああ、これ？」

右腕の肘の内側に絆創膏が貼ってあるのをトーマは見せる。

トーマ「１週間前の健康診断の時に予防接種とか言われて注射打たれたんだ」

ス「そっか。実はね、今日はスティードにも用があるんだ」

スティード「私にもですか？」

トーマの持っているカメラ型のインテリジェントデバイス、スティード。

撮影・観測に特化した設計になっている。身に付けているときはネックレスのようなシルエットである。自立や飛行も可能で、その際は
紐の部分が両手のような動きをする。この紐の部分を使って物を持つことが可能。先端部分は映像の投影や補助ライト、ストロボを焚く機能も
持つ。更に遠隔地の映像・音声モニタリングを行う「ズーミングスキャナ」機能を持つ。

ス「このデータをインストールしてってウィルさんが」

トーマ「ウィル叔父さんが？」

トーマは、スバルの夫であり、時空管理局の局長でもあるウィリアム・T・ロンバート元帥に会ったことがある。
トーマいわく、「優しい叔父さん」みたいな人だったらしく、それ以来、ウィルのことを「ウィル叔父さん」と呼んでいる。

スバルは小型のデータチップをスティードに渡す。
スティードは紐を両手のように動かしてチップを受け取り、中のデータをインストールした。

トーマ「何が入っているの、スゥちゃん？」

ス「ウィルさんいわく、いつか必ず役に立つ物だってさ」

スティード「確かにそうですね、これは役に立ちます」

トーマ「そっかぁ。ならいいや。ところでティアさんたちは元気？」

ス「うん、とても元気だよ。トーマも元気でよかったよ。
今度はギン姉たちも一緒に来るね」

トーマ「うん、楽しみに待ってるよ！」

～同時刻、ミッドチルダ、地上本部、局長執務室～

ドゥーエ「スバルさんは無事にデータを渡してくれたようですね」

「そうだな。とりあえず今のところはこれしかできないが…」

俺はスバルに渡したチップには、トーマの所在地情報、健康状態などを
逐一俺のデバイス、インフィニティーとアイザックに報告するためのプログラムと、もう1つ、”ある”プログラムが入っていた。後者のプログラムの方が重要であり、スティードには前者のプログラムしか認識できないようにしてある。

「あれは厄介なシロモノだからね～」

ティ「そうだよね、なんとしても阻止しないと」

「まったくだ。それでトーレ、そっちはどんな感じだ？」

トーレ「順調に作戦は進行中だ。回収後は厳重に封印して保管庫に」

クア「本部の特殊部隊が警備しているので安心ですわ～」

セッテ「あそこの警備はここよりもすごいしね」

「そりゃそうさ、あそこの警備が破られるわけにはいかんからな。
それに、”あれ”は我々が回収する。絶対にだ。ともかく、
みんなご苦労様」

地上本部から２０ｋｍ離れた沿岸部にぽつんと１つの建物が立っていた。
真っ白に塗装された正方形の建物の壁には管理局のマークが書いてある。
この壁、見た目はコンクリートだが、実は量子クリスタル装甲である。
そして建物から半径３，０００ｍ以内には立ち入り禁止になっている。
外にある看板にはこう書かれている。

「時空管理局施設につき立ち入り禁止。管理局法に基づき、
侵入者は即座に排除する」

周囲には鉄条網だらけの電流フェンスが張り巡らされており、
外では警備員が乗ったＭ１１２６ストライカーＩＣＶがうろついている。

フェンスの中には数多くの対人地雷に４基のターボレーザー砲塔、８両の自走対空砲、４基のゴールキーパーＣＩＷＳ、地面に埋め込まれた
モーションセンサーに監視カメラ群、極めつけには常時２機の赤ラーティが飛行している。

この地上に入口のない建物は、時空管理局古代遺物保管庫である。入り口は地下１００ｍにあるトンネルだけであり、地上本部と繋がっている。このトンネルも直線ではなく、何度もカーブがあり、敵の進行スピードを遅らせることができる。また、３００ｍごとにかなり分厚い量子クリスタル装甲のゲートと見張所がある。

この施設が稼動したのはつい最近のことであり、各世界の管理局施設から集められた多くの古代遺物、つまりロストロギアがここで一括管理されている。

ここには強力なＡＭＦジェネレーターとシールドジェネレーターが設置されているので、半径３，０００ｍ以内では魔法が使えなくなる。
なので、警備にあたっている人間は全員質量兵器で武装している。地球から募集した元特殊部隊の人間が、警備員の訓練にあたった。その結果、もし侵入者が現れた場合、彼ら警備員は容赦なく侵入者を殺すことができるだろう、質問１つせずに。

そしてこの施設の最下層にある保管庫。ここは最重要機密エリアであり、局長の許可なしには立ち入りができない。今、そこで１人の人間が作業をしていた。彼はロボットアームを操り、ある物を保管庫の中に丁寧にしまった。作業が終わると、彼はコンソールを操作し、保管庫の扉を閉め、内部を真空状態にした。そして後方のエレベーターに乗り込み

コードを入力し、上の階にある休憩室に向かった。
そこには他の同僚がコーヒーを飲んでいた。

A「お疲れさん！」

B「おお、おつかれ」

下から上がってきたAはコーヒーメイカーを操作してコーヒーを作り、Bの近くの椅子に腰掛けた。

A「今日はこれで終わりだったよな？」

B「そうだな。あとはいつも通りの作業だけだ」

A「にしても最近の最下層保管庫には似たようなものがいくつか搬入されているよな？」

B「そう言われればそうだな…なんか数字が入っているやつだろ？」

A「そうそう、詳しくは知らないけど絶対に触るなだと」

B「まぁ俺達の仕事はそれらの管理だから知らなくてもいいんだけどな」

A「全くだ。さて、そろそろ帰る時間だし引き継ぎしに行こうぜ」

B「おう」

この施設は２４時間常に誰かがいることになっており、８時間おきの３当直制になっている。普通は１当直を勤務し、あとの２当直は

勤務外となる。

～夜、屋敷～

「ただいま～」

ティ「たいま～」

ヴィヴィオ「パパ！見て見て！」

家に帰ると、ヴィヴィオ達3人娘が成績表を持ってきた。

イクス「3人とも成績優秀者だよ！」

カナ「成績ランキングでも上位を制圧したぞ」

見ると、3年生の成績ランキングでカナリアが1番、ヴィヴィオが2番、

そしてイクスが3番にランクインしていた。

「すごいじゃないか、みんな！よくやった！」

ギ「もうすごいですよね～」もぐもぐ

まんじゅうを食べながらテレビを見ていたギンガが言う。

な「娘が優秀で嬉しいの！」

カ「みなさんいい子ですからね」

イクス「それで、明日から春休みだからコロナとリオとお泊り会をしたいの！」

カナ「リオはまだ我が家に来たことがなかったからな」

ヴィヴィオ「パパ、いい？」

「おう、いいぞ！」

3人娘「やったー！！」

シャ「みんな～、夕食が出来ましたよ～」

ザフィ「いい匂いだな」

ヴィ「おっしゃあ！もう腹減って死にそうだ！」

シグ「それはスバルとギンガのセリフだろう？」

ギ「あはははは…確かに」

は「それじゃあ」

みんな「いただきまーす！！」

おまけ

どこかの世界のどこかで。

？？？「どうでしたか？」

？？？「なかった」

？？？「こちらもだ」

？？？「どうなってんだ？全然見つからないぞ？」

？？？「管理局の連中が先回りして回収しているんじゃないか？」

？？？「それも考えられますね…」

？？？「どうする？」

？？？「…引き続き捜索を続行してください。それしかできませんから」

？？？「…了解」

第１０４話：ｂｅｆｏｒｅ　ｔｈｅ　ｖｉｖｉｄ　ｓｔｏｒｙ…（後書き）

ちょびっとＦｏｒｃｅにも足を突っ込んでみました。
予定としてはＦｏｒｃｅは原作を完全無視、というか破壊します。
なぜなら、初っ端からシグナムとアギトが戦線離脱したので。
せっかくのおっ○い要素が…

フッケバイン一家はすぐさま亡き者に…ふふふ。

次回はリオが初登場！
では

第１０５話：元気に登場！

次の日、朝１０時。

リオ「よーし、準備完了！それじゃあ電話しよっと」

コロナ『リオ？準備できた？』

リオ「うん、おっけーだよ！」

コロナ『じゃあ家の外で待っててね。ヴィヴィオの家の人が迎えに来てくれるから』

リオ「わかったー！」

リオ母「リオ、歯ブラシ持った？着替えも大丈夫？」

リオ「もう大丈夫だよ！」

リオ父「いいか、くれぐれも迷惑かけちゃだめだぞ？」

リオ「わかってるって！あ、来た！」

例によってまた黒いＳＵＶ３台がやってきた。その車列はリオの前で止まって、中からメイド服の女性とコロナが下りてくる。

リオ「メイドさん！？」

リオ母、父「マジで？」

メイド「リオ・ウェズリー様ですね？お迎えにあがりました。どうぞ」

コロナ「リオ！早く乗りなよ！」

リオ「う、うん！」

リオ母「この子をよろしくお願いします」

メイド「御安心ください。責任を持ってお預かりいたします」

リオ父「じゃあなリオ。楽しんできなさい」

リオ「うん！行って来まーす！」

リオ「コロナはヴィヴィオたちの家に行ったことあるんだよね？」

コロナ「うん！すごく大きな家だよ。もうお屋敷って感じ！」

リオ「すごい！早く着かないかな～」

メイド「あと１０分ほどで到着しますよ」

～屋敷地下、中央警備室～

メイドA「客人の乗っている車列、まもなく正面ゲートに到達します」

メイドB「監視カメラ、及び振動センサーで確認。敵性反応ありません」

メイドC「上空にいるラーティから報告。車列から半径2，000m圏内に敵性反応なし」

メイドA「正面ゲート開け」

メイドB「了解、ゲート開きます」

リオ「…すごい…広い…」

超でかい屋敷を見てリオは言葉に出来ないご様子。

コロナ「あはは、私と同じ反応だ」

ヴィヴィオ「あ、来た！」

イクス「コロナ～！」

カナ「前も言ったけど、うれしいのはわかるから落ち着け」

車の扉が開いてリオとコロナが飛び出す。

コロナ「やっほー！」

リオ「いえーい！」

ヴィヴィオ「ようこそ我が家へ！」

テ「その子たちが今日のお客様？」

イクス「そうだよ！」

テ「はじめまして。私はティアナ・ランスター・ロンバートだよ。
よろしくね、コロナちゃん、リオちゃん」

コロナ「こちらこそよろしくお願いします！」

リオ「お世話になります！」

ヴィヴィオ「それじゃあ早速！」

カナ「宿題と予習・復習だな」

ヴィヴィオ「」

リオ「あー、だからかー、勉強道具持ってきてって言ったの」

イクス「うちでは遊ぶ前にかならず勉強なんだ」

カナ「基本だな。ではやろう！」

1時間半後。

コロナ「終わったー」

イクス「簡単だったね」

ヴィヴィオ「そうだね」

リオ「カナリア、教えてくれてありがと！わかりやすかったよ」

カナ「それはよかった」

フェ「みんなー、ご飯だよー」

「「「「「はーい！」」」」」

リオ「おいしーい！」

コロナ「本当美味しいね」

フェ「ふふっ、ありがとね。リオちゃんにコロナちゃん」

リオ「えっと…」

フェ「ああ、私はフェイト・テスタロッサ・ロンバート。よろしく」

コロナ「よろしくです！」

リオ「あの、フェイトさんもヴィヴィオ達のお母さんなんですか？」

フェ「そうだよ？」

コロナ「ああ、リオは知らないんだっけ。ヴィヴィオ達には１２人のお母さんが
いるんだよ」

リオ「えええええええ！！？？」

イクス「びっくりしたでしょー」

カナ「ん？フェイト母上、ティアナ母上は？」

フェ「ティアナならスバルを起こしに上に行ったはずだよ？」

とそこに。

テ「ほらスバル！しっかりしなさい！」

ス「うぅ～ティア～眠いよ～」ずるずる

ティアナに引きずられながらスバルが登場。

フェ「…スバル？」

ヴィヴィオ「ティアナママ、スバルママはどうしたの？」

テ「ああ、実は昨日スバル帰りが遅くてね。それで今日は非番だから起こさないで
　って言われていたけど、もう昼だからたたき起こしたの」

カナ「ほらスバル母上、ご飯だぞ？」

とカナリアが魔法の言葉を。すると

ス「ご飯！」

と元気よく立ち上がるスバル。

テ「やっと起きたのね」

イクス「ご飯に反応して起きるなんて…」

ヴィヴィオ「さすがだね」

コロナ「あははは…」

リオ「」↑ついていけていない

フェ「はいスバルの分だよ」

ス「ありがとうございます！がつがつもぐもぐ…」

コロナ「相変わらずだね…」

イクス「いつものことだし」

リオ「あれ、なに？」

ヴィヴィオ「見慣れていない人がここに1人」

カナ「リオ、あれはここでは普通のことだぞ」

リオ「いやいやいやいや！なんであんな量を1人で！？」

コロナ「リオ、気にしたら負けだよ？」

テ「そうそう」

フェ「そうだね」

ス「ん～幸せ～♪」

みんな「ごちそうさまでしたー！」

ヴィヴィオ「じゃあ遊ぼう！」

コロナ「なにして遊ぶ？」

リオ「広い家だから隠れ鬼しようよ！」

ヴィヴィオ「それはちょっと…」

イクス「でも５人だし大丈夫じゃない？」

カナ「ではこうしよう。１人１台これを持つんだ」

といってカナリアはどこからともなく機械を取り出した。見た目はゲームボーイである。

リオ「なにこれ？」

カナ「屋敷の地図だ。自分の位置がきちんと分かる。それに鬼が持っている
　機械の場合、隠れている人に近づくとブルブル震える振動機能が
　付いている。これで、絶対に見つけられなくて途中で泣き出すようなことはない」

イクス「お姉様！それ誰のこと！？」

カナ「さあな？」

ヴィヴィオ「まあいいや、それでいこう！」

コロナ「決定！」

カナ「ああ、それと入ってはいけない部屋は赤く表示してあるからな」

ヴィヴィオ「じゃあ…」

みんな「じゃんけん、ぽん！！」

ヴィヴィオ「負けたー！」

カナ「ではヴィヴィオ姉上、１２０秒数えたら追いかけるんだ」

コロナ「かなり長くない？」

イクス「家自体が広いからそれでも足りないくらいだよ」

リオ「じゃあ用意、スタート！」

ヴィヴィオ「いーち、にー、さーん、しー…」

カナ「ここにしよう」

カナリアは1階の端の部屋の窓を開けてから、屋根裏部屋に隠れた。

イクス「う～ん、ここ！」

リビングに逃げ込んだイクスは、カーテンの束の中に隠れた。

コロナ「えーと、ここはどうかな？」

コロナは地図を見ながら隠れる場所を探し、1階の応接間のクローゼットの
中に隠れた。

リオ「うう、急がないと…あ！そうだ！」

リオはテンパリながらも、素晴らしい隠れ場所を見つけた。

ヴィヴィオ「ひゃくにじゅう！よし、探すぞー！」

ちなみにヴィヴィオが今いるのは1階の食堂である。

ヴィヴィオ「まずは1階を探そう」

やってきたのはリビング。フェイトがテレビを観ている。

ヴィヴィオ「フェイトママ、誰か来た？」

フェ「秘密だよ～。それを言ったら隠れ鬼じゃないでしょ？」

ヴィヴィオ「そだね、って」ぶるぶる

その時機械が震え始めた。

ヴィヴィオ「どこだろう？」

ゆっくりとリビングをうろつく。窓に近づくと振動が激しくなった。

ヴィヴィオ「そこだぁ！」

カーテンの束をヴィヴィオはおもいっきり払いのける。

だが、そこには誰もいなかった。

ヴィヴィオ「あり？」

すると反対側にあったもう1つのカーテンの束からイクスが飛び出して逃げた。

イクス「あははは！こっちだよー！」

ヴィヴィオ「待てー！」

2階に逃げたイクスは、曲がり角を猛スピードで曲がった。ヴィヴィオも

それに続く。

ヴィヴィオ「待てー！」

イクス「待てと言われて待つ人はいないよー！」

だが、ヴィヴィオのほうが足が早かったので、あえなくイクスは捕まってしまった。

ヴィヴィオ「つーかまーえた！」

イクス「むー！やられたー！」

ヴィヴィオ「あと3人だ。このまま2階を探そう」

なお、捕まったイクスはリビングでフェイトと一緒にテレビを観ることに。

2階の廊下を歩いているヴィヴィオ。再び機械がブルブル震え始めた。

ヴィヴィオ「むむっ！この近くだ、でも…」

左右にはなのはの部屋にヴィータとシャマルの部屋しかない。ここは立ち入り禁止にしたのでそのまま歩き続けると、もっと振動が激しくなった。

ヴィヴィオ「どこだろう？ここは入れないし、あっそうか！真上か真下にいるんだ！」

そこでヴィヴィオは屋根裏部屋から探すことにした。すると。

カナ「げっ」

ヴィヴィオ「カナリア！見つけたよ！」

全速力で窓際にいるカナリアにタッチしようとしたヴィヴィオだったが。

カナ「甘い！」

なんとカナリアは窓から身を投げたのだ！

ヴィヴィオ「えええええええ！！！？？？」

驚いたヴィヴィオが窓に駆け寄ると、なんと紐が伸びていて下に垂れていた。

その紐を腰に巻きつけたカナリアは、先ほど開けておいた1階の窓に逃げ込んだ。

カナ「さらばだ、明智君！！」

ヴィヴィオ「誰それ！？っていうか待てー！」

屋根裏部屋から1階に向かってヴィヴィオが走っていった後。

カナリアは紐を使って屋敷の壁を上り、再び屋根裏部屋に隠れた。

カナ「これでしばらく姉上も混乱するだろう」

ヴィヴィオ「あれ？いない？もうどこいったのー！？」

むかむかしながらとなりの応接間に入ると振動が。

ヴィヴィオ「ふふふ、カナリア～でてきなさ～い？」

やがてクローゼットの前にやってきた。

ヴィヴィオ「そこだぁ！！！」がちゃ！

だがやっぱりそこにはいなかった。

ヴィヴィオ「あれれ？そうか、上の階だね！」

そう言って応接間を飛び出して行った。

クローゼットの中ではさっきまでいなかったコロナがいた。

コロナ「はぁ、疲れた…」

コロナは両手と両足をクローゼットの壁に押し当て、そのままずりずりと

上に登っていき、天井の近くに潜んでいた。

コロナ「もはやこれ、隠れ鬼のレベルじゃないよね…」

２時間後。
ヴィヴィオはカナリアをやっとのことで捕まえた。ヴィヴィオは１階の窓から
屋根裏部屋から伸びていた紐を思いっきり引っ張って、窓に固定されていた
紐は耐え切れずに切れてしまい、カナリアは逃げようとしたが直後に上がってきたヴィヴィオに捕まってしまった。

そしてコロナも疲れてしまい、再びクローゼットを見に来たヴィヴィオに
捕まった。

ヴィヴィオ「残るはリオなんだけど、どこだろうな？」

もう殆どの部屋を探したのに見つからないので困っている。
するとまた振動が始まった。しかもだんだん強くなっていく。

ヴィヴィオ「（こっちに近づいてきてる！）」

そう考えたヴィヴィオは曲がり角に隠れてリオが来るのを待った。
そして…

ヴィヴィオ「リオみっけ！！…あれ？」

だが、そこにはメイドが１人いただけだった。

メイド「お嬢様?どうかしましたか?」」

ヴィヴィオ「え、いやなんでもないよ!リオはどこだろう?」

メイドはお辞儀をするとヴィヴィオの脇を通って行った。

ヴィヴィオ「もう1度探して、ってあれ!?」

機械を見ると、いつの間にか振動が止まっていた。

ヴィヴィオ「…まさか」

ヴィヴィオはさっきのメイドの後を追いかけていった。

5分後。

カナ「リオ、よく考えたな」

イクス「普通そんなところに隠れないよー」

リオ「えへへ、うまくいくと思ったんだけどな」

なんとリオはメイドのスカートの中に隠れて移動していたのだ。

ヴィヴィオ「まさかあんなところに隠れるなんてね」

コロナ「頭いいね！」

ス「みんなー、おやつだよ！」

そこにスバルがお菓子を持って登場。羊羹やら饅頭やら煎餅やらがいっぱい
詰まったお皿だった。

リオ「美味しそう！」

イクス「いただきまーす！」

そして夜。

「た」

ティ「だ」

アリサ「い」

ギ「まー」

な「なの」

ヴィ「なにやってんだよ」

イクス「おかえりさない、お父様にお母様たち！」

アリサ「みんないい子にしてた？」

カナ「もちろんだぞ」

な「あ、その子がリオちゃんだね？」

リオ「は、はい！リオ・ウェズリーです、お世話になってます！」

ギ「礼儀正しいね」

シャ「まあゆっくりしていってね？」

リオ「はい！」

「よし、飯だ！」

ティ「みんな、行くわよ～！」

ス、ギ「ご飯だ！！」どどどどど…

コロナ「はや…」

リオ「そうだね…」

シグ「あの2人にとってご飯はそれだけ重要なのだよ」

リオ「は、はぁ…」

「では」

みんな「いただきまーす！」

ア「主、やはりご飯を食べる時は大人数で食べたほうが美味しいですね」

は「アインの言うとおりやな。大家族っていいもんや…」

ツ「その通りですね！」

ス、ギ「がつがつもぐもぐ…」

ヴィ「おかわり！」

ザフィ「ん？ヴィータ、前より背が伸びたか？」

ヴィ「そうだ！成長しているんだぞ！」

シャ「確かに身長と胸囲が少しずつ伸びてきているわね」

「ほう、よかったじゃないか」

ヴィ「えへへ～」

シグ「ほう、その調子で頑張れよ？」

ヴィ「おう！」

ヴィヴィオ「じゃあそろそろ寝ようか」

リオ「そうだね」

イクス「おやすみなさい！」

「ああ、おやすみ」

「さて、今日はヴィータだったな」

ヴィ「…まだ大きくなってないけど…」

「…もう一回あの栄養剤飲んでみるか？」

ヴィ「いや、それはいい！あたしは自分の力で成長するんだ！」

「そうか、えらいな」

ヴィ「ウィル…／／／」

あ（ｒｙ

翌日。

「おはー」

な「おはよう」

フェ「あれ、ヴィータは？」

「ダウンしてる。今日非番だしいいだろ」

ヴィ「うぅ…激しすぎ…／／／」がくがく

第１０５話：元気に登場！（後書き）

はい、リオちゃんでした。歯がとんがっている子だった気がします。
次回は…さあて、どうなることやら？

では。

第１０６話：Ｖｉｖｉｄ編がキター！（前書き）

Ｖｉｖｉｄって「スポーツ格闘魔法少女まんが」なので、必然的に子供たちメインのお話になります。
でも、その裏でウィルがあんなことやこんなことをする、といった感じにしたいと思います。

第１０６話：Ｖｉｖｉｄ編がキター！

新暦７９年４月、屋敷玄関にて

Ｓｉｄｅ　ヴィヴィオ

皆さん、こんにちわ！私、ヴィヴィオ・ロンバートです。ミッドチルダ在住の
魔法学院初等科の４年生です。公務員のパパとママ達と大人数で暮らしていて、
とても仲良し大家族です。

な「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー。帰りにちょっと寄り道してくけど」

な「今日はママもちょっと早めに帰って来られるから、晩ご飯は４年生
　進級のお祝いモードにしよっか？」

イクス「わーい！」

カナ「素晴らしいな」

今のは私の妹のカナリアとイクスヴェリア。仲良し３人姉妹なの。
またにケンカするけどね。学校では「ロンバート３姉妹」とか
「最強の３姉妹」とかって呼ばれてていつの間にか有名になっちゃ

った。
そんなに派手なことしてないんだけどな～（↑第９２話参照）。

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院、初等科・中等科棟

コロナ「ごきげんよう、ヴィヴィオ」

リオ「おはよー！」

後ろからやってきたのは親友のコロナとリオ。

コロナ「クラス分けもう見た？」

イクス「見た見た！」

リオ「５人一緒のクラス！」

「「「「いえーい！！」」」」

カナ「嬉しいのはわかるが、もうすこし周りを見たほうがいいんじゃないか？」

「あ…／／／」

リオ「そうだね…／／／」

誰か知らんが偉そうな人
「選択授業で応用魔道学を選択した皆さんは、これから授業も難しくなってくると
思いますが、しっかりと学んでおけば将来きっと役に立ちますからね」

仲良しの友達と結構ハイレベルだけど楽しい授業。それがまたいいんだよね～。

リオ「はー、終わった終わった」

コロナ「寄り道してく？」

「もちろーん！」

リオ「また図書館寄っていこーよ！」

イクス「賛成！借りたい本もあるし！」

「あ、でもその前に教室で記念写真取りたいな。お世話になっている皆さんに
送りたいんだ。皆さんのおかげで、ヴィヴィオは今日も元気ですよ…って」

～地球、海鳴市、「翠屋」～

桃子「あら、ヴィヴィオちゃん達の写真だわ」

士郎「大きくなったなあ」

美由紀「あ～可愛いなぁ～」

～スプールス第1キャンプ～

キャ「エリオくん、これ！」

エ「あ、ヴィヴィオ。それにみんなも。元気そうだね」

キャ「たまには会いたいよね～」

エ「そうだよね。そのためにも今の仕事頑張らなくちゃ！」

キャ「うん！」

～無人世界「カルナージ」～

ルー「パパ、ママ！ヴィヴィオ達の写真だよ！」

メガーヌ「あらまあ、もうこんなに大きくなったのね～」

ゼスト「時が経つのは早いものだな」

ルー「早く会いたいな～」

～図書室～

リオ「そういえばヴィヴィオ達って自分専用のデバイス持ってないんだよね？」

コロナ「それフツーの通信端末でしょ？」

「そーなんだよー。ウチのママとパパがけっこー厳しくって」

～回想～

な「基礎を勉強し終えるまでは自分専用のデバイスとかいりません」

レイハ「それまでは私が代役を」

「デバイス？何それ？おいしいの？」

～回想おしまい～

「だって」

コロナ「そーかー」

イクス「リオはいーなー。自分用のインテリ型で」

リオ「あははー」

ソルフェージュ（以降ソル）「すいません」

カナ「おや？姉上、母上からメールだぞ？」

「あ、ほんとだ」

コロナ「何がご用事とか？」

「あーへいきへいき。早めに帰ってくるとちょっと嬉しいことがあるかもよ…だって」

イクス「嬉しいこと？なんだろね？」

カナ「それは帰ってからのお楽しみ、というやつだろう」

リオ「そっか、じゃあ借りる本決めちゃお！」

「うん！」

～屋敷～

「ただ」

カナ「い」

イクス「まー！」

フェ「おかえりー、みんな」

家に帰った3姉妹を出迎えたのは、エプロン姿のフェイトだった。

「あれ？フェイトママ？」

フェ「うん？」

イクス「バルディッシュも！」

バル「Ｈｅｌｌｏ，Ｌａｄｉｅｓ」

フェ「フェイトママ、艦の整備で明日の午後までお休みなんだ。だから

ヴィヴィオ達のお祝いしようかなって」

「そっか…ありがと、フェイトママ！」

カナ「感謝する、フェイト母上」

フェ「お茶いれるから着替えてくるといいよ」

フェイトママはなのはママやはやてママの大親友。９歳の頃からだって。

私たち姉妹にはなんと１２人もママがいるの！普通じゃ考えられないけどね。

あ、でもパパは１人だよ！管理局で一番偉い人なんだ！

まぁ、ちょっと変わっているけど、みーんな私たちの大切なママ達です。

そんなこんなで夜。

みんな「ごちそうさまー！」

「さて、今夜も魔法の練習しとこっと」

イクス「あ、私も！」

カナ「では行こうか」

な「あー3人ともちょっと待って」

3人娘「？」

な「ヴィヴィオ達ももう4年生だよね」

「そーですが？」

カナ「それがどうかしたのか？」

な「魔法の基礎もだいぶできてきたし、そろそろ自分のデバイスを持っても
いいんじゃないかなって」

「ほ、ほんと！？」

イクス「わーい！！」

フェ「実は今日マリーさんから受け取ってきました」

そう言ってフェイトママは私に箱をくれました。

な「開けてみて」

「うん！」

箱を開けると、そこには。

「…うさぎ？」

アリサ「あら、それがヴィヴィオのデバイス？」

すずか「可愛いうさぎさんだね」

後ろから見ていたアリサママとすずかママがそんな感想をいう。

ス「イクスのはどんなのかな？」

イクス「えっとね～…ブレスレットみたい！」

隣で箱を開けたイクスは、中から赤色のブレスレットを取り出した。

真ん中にクリスタルみたいなのが付いている。

な「イクスのはその赤いクリスタルが本体だよ。ヴィヴィオのうさぎは
　外装というかアクセサリーね」

フェ「中の本体はイクスのと同じようなクリスタルタイプだよ」

「ふ～ん…って！」

自分のデバイスに目を向けると、なんか箱をよじ登って中に浮かんでいるんですけど！

「とっ…ととと飛んだよっ！？動いたよっ！？」

フェ「それはおまけ機能だってマリーさんが」

「そ、そうなんだ…」

カナ「なのは母上、私のデバイスは？」

な「あー、それなんだけど、マリーさんいわく…

マリエル
「マーゲン式って何ですか！？なんか超複雑で頭が沸騰しそうですよこれ！
ちょっと私の力じゃ無理です！すいません！」

な「…って言われちゃってね」

フェ「でもカナリアだけデバイスなしっていうのはかわいそうだから」

「俺が代わりに作ったぞ！」

カナ「父上！」

そこに突然パパが帰ってきた。ウィリアム・T・ロンバート。
時空管理局の局長さんをやっているの。すっごく優しいんだよ！
だけど宿題とかやってないとものすごく怒るんだよね…

イクス「おかえりパパ！」

な「おかえりなの」

「カナリアの魔法はかなり特殊だからさ、ほら」

そう言うと、パパはかばんから箱を出してカナリアに渡した。

「きちんと作ってあげたからな」

ティ「私も手伝ったの！」

そういう女の人は、パパのユニゾンデバイスのティーナさん。赤い髪の
ナイスバディなお姉さんだよ。

カナ「ありがとう、父上、ティーナ殿」

ティ「ほらほら、開けてみなよ」

カナ「では…これは！」

箱を開けると中から出てきたのは水晶が嵌めこまれた指輪だった。

「カナリア、お前、戦闘中に水晶玉持ってただろ？だからそれにした」

ティ「今は指輪だけど、起動すれば剣にもなるし槍にもなるよ」

フェ「なるほど、カナリアは基本的にどの武器も使えるものね」

カナ「素晴らしい…綺麗だ…」

な「色々とリサーチもしてみんなのデータに合わせた最新式ではあるんだけど、
　中身はまだ殆どまっさらな状態なんだ」

フェ「名前もまだないからつけてあげてって」

「えへへ…実は名前も愛称ももう決まっていたりして」

イクス「まだ考えてないや」

カナ「私は決めたぞ」

「ゆっくり決めな。これからずっと使うデバイスなんだから」

イクス「…うん決めた！」

庭に出て早速起動するよ！

「マスター認証、ヴィヴィオ・ロンバート。術式はベルカ主体のミッド混合
　ハイブリット。私のデバイスに個体名称を登録。愛称（マスコットネーム）は『クリス』。
　正式名称『セイクリッド・ハート』」

カナ「マスター認証、カナリア・ロンバート。術式はマーゲン。デバイスの

個体名称を登録。愛称（マスコットネーム）は『レブ』。正式名称は『レヴェントン・ジェット』」

イクス「えっと、マスター認証、イクスヴェリア・ロンバート。術式は
古代ベルカ。デバイスの個体名称を登録。愛称（マスコットネーム）は『スレイン』。
正式名称は『スカーレット・アヴェンタドール』」

「行くよクリス！」

カナ「レブ、出番だ！」

イクス「スレイン、お願い！」

「セイクリッド・ハート！」

カナ「レヴェントン・ジェット！」

イクス「スカーレット・アヴェンタドール！」

「「「セーット・アーップ！！！」」」

へ～んしんっ！

私は例によって大人モードで聖王の鎧姿になり、カナリアも大人モ

ードで
漆黒のドレスを着ている。いつも左手に持っていた水晶玉は出さないで、
代わりに右手に青い刀を持っている。それでイクスはというと、
フェイトママのバリアジャケットのマントの部分を赤くして、
中に着ているのを白くした様な感じのだったよ。あと、赤い短剣を持っている。普段はブレスレットで、起動すると短剣になるんだ～。

イクス「成功！」

カナ「うむ、やはりこれがいい」

「やったぁー！なのはママありがとー！」

な「あーうまくいったね」

レイハ「Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！」

フェ「カナリアはいつもと変わらない気がするんだけど…」

カナ「ああ、私にはこのドレスが気に入っているんでな。だからバリアジャケットは透明にした」

アリサ「すごく似合っているわ」

ス「イクスはなんかフェイトさんに似てるね」

イクス「フェイトお母様を参考にしてみたんだ！かっこよかったし！」

すずか「なるほどねー」

フェ「ふふ、ありがと」

な「ヴィヴィオはそれ聖王の鎧？」

「そだよ！バリアジャケットの代わりだし」

ティ「聖王の鎧かぁ、便利だよね」

「昔あれでヴァイスが吹っ飛ばされてたっけ」

ティ「頭から壁にぶつかってたね」

は「そんなこともあったね～」

フェ「ってはやて！？いつの間に！？」

シグ「今帰ってきたところだ」

ヴィ「おー、きちんとデバイス起動できたんだな」

シャ「みんな可愛い～」

ザフィ「おめでとう」

ムワ『さすが主の子供達だな』

そのまま魔法の練習を始めることに。

イクス「スレイン、召喚！」

フルフル「ぎゃー！」

イクスはあのフルフルとかいう怪獣を出してる。あ、シグナムママが気絶した。

カナ「レブ、カートリッジロード！！」

カナリアはシュミレーターで、ガジェットと骨相手に刀で戦っている。

あの青い刀で切られたものは、全部カチンコチンに凍ってるよ。

それに相手は足元の重力いじられてまともに攻撃できてないし。

やっぱり重力を操ることができるのはすごいよね、っていうか反則だよね。

「私も！」

負けずに私もガジェットに殴る・蹴るの暴行を加える。えっ！？犯罪じゃないよ！？

えと、私もノーヴェに教わったとおりに…

「アクセルスマッシュ！！」

「お～みんな頑張っているな」

な「そうだね」

シグ「」きゅ～

ヴィ「シグナムの奴、なんでフルフル駄目なんだろな？」

は「こんなにかわいいのに」つんつん

フルフル「ぎゃ～」

ザフィ「まぁ、誰にでも1つくらい苦手なものがあってもおかしくないだろう」

ツ「唯一の弱点ですね！」

ア「アルビノ怪獣が弱点とはね…」

「まあ意外だな。っと、もうこんな時間か。おーい！もう寝る時間だぞ！」

カナ「おや、もうそんな時間か」

イクス「楽しくて気がつかなかったよ」

「じゃあそろそろ寝よう！」

そういうことで今日はもう寝ます！明日、コロナとリオに自慢しよっと！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その夜、陸士１０８隊の隊舎からギンガが、ナカジマ家にいる元ナンバーズの
４人に通信をしていた。

ノーヴェ「連続傷害事件？」

ギ「ああ…『事件』ではまだないんだけど」

ノーヴェ「どゆこと？」

ギ「被害者は主に格闘系の実力者。そういう人に街頭試合を申し込んで…」

ノーヴェ「フルボッコってわけ？」

ギ「そう」

ウェンディ
「あたしそーゆーの知ってるッス！喧嘩師！ストリートファイター！」

ディエチ「ウェンディ、うるさい」

ギ「ウェンディ正解。そういう人達の間で話題になっているんだって。
蟻害届けが出てこないから事件扱いではないんだけど、みんなも襲われたりしないよう気をつけてね？」

ディエチ「そう…」

ノーヴェ「気をつける。つーか来たら逆ボッコだ」

チンク「ふむ…これが容疑者の写真か」

ギ「ええ。自称『覇王』イングヴァルト」

ウェンディ「それって…」

ギ「そう。古代ベルカ、聖王戦争時代の王様の名前」

続く……

第１０６話：Ｖｉｖｉｄ編がキター！（後書き）

はぁ…

祝！全滅ｏｒｚ

え、何が全滅かって？いわせんなよ、虚しくなるから…

リクナビで企業探ししよっと…

あと、３姉妹のデバイスの名前について。

カナリアのデバイスの「レヴェントン」っていうのは、

スペイン語で「ブロウアウト」という意味。「ジェット」は英語で「漆黒」。

イクスの「スカーレット」は英語で真紅、「アヴェンタドール」はランボルギーニ・アヴェンタドールＬＰ７００－４から。

いつかこういうかっこいいスポーツカー買いたいな～。

では

第１０７話：レッツ、練習

ヴィヴィオ達の始業式の翌日。

～ミッドチルダ北部、ベルカ自治領、聖王教会本部～

この豊かな地にある聖王教会は管理局と同じく、危険なロストロギアの調査と
保守を使命としている宗教団体である。でも、この前できた保管庫にロストロギアは
全部移したから、ここではなく保管庫で調査をすることに。そのため、保管庫では
管理局の研究員らと教会の連中が仲良く仕事している。いいことだね。
ちなみに宗教自体を指す時は「聖王教」と呼ばれる。

本部はベルカ自治領内にあり、周辺の景観が良い事から観光地としても有名で、
若者の結婚式場としても人気である。カリムが時空管理局にも籍を置いていたり、
聖王教会の依頼を受けて時空管理局が動いていたり、管理局の任務に教会が
協力するなど基本的に管理局とは良好な関係である。管理局の一部には
今だに聖王教会の存在を快く思っていない人間もいる。無神論者なのかね？

次元世界で最大規模の宗教組織で、各方面への影響力も大きい。信徒が多いのは

他宗教に比べ禁忌や制約が少なく、緩い事が影響している。現在は数々の偉業を
成し遂げた「聖王」本人と近しい血族、傍にあった騎士たちが信仰対象となっており、
彼らの遺物は「聖遺物」として畏敬の対象となっている。また、その聖遺物管理も
行っている。独自に「教会騎士団」と呼ばれる戦力を持ち、カリムやシャッハが
所属している。

でもヴィヴィオやイクスが信仰の対象になるのは嫌なので、カリムが教会をなんとか説得させて、２人を信仰の対象にしないようにした。
昔じゃ無理だったけど、俺と結婚した後に昇進して教会騎士団の団長という役職についたので発言力も高まったため、成功したのである。

そんな教会本部にヴィヴィオ達がやってきたのは、その日の午後だった。

Ｓｉｄｅ　ヴィヴィオ

セイン「よく来た、みんな！」

イクス「早く行こうよ、お姉様」

カナ「こらこら、走っちゃ駄目だろう？」

今日はチンクとノーヴェ、ディエチ、ウェンディも一緒に教会に来ました。

何しに来たのかっていうと、ここにある孤児院の子供たちと遊ぶためです！

なんでも悪い人たちに捕まっていたところをパパに助けてもらって、ここにいるんだって。だからたまに遊んであげて、って言われているんだ！

「待ってよー！」

ノーヴェ「急いでも子供たちは逃げないぞ？」

ディエチ「私はオットーたちと会ってくるね」

ウェンディ「あ、私も行くッス！」

チンク「姉はカナリアと一緒にカリム殿に会ってくる。ノーヴェ、彼女たちを
　　見ていてくれ」

ノーヴェ「わかってるよ」

「いーからはやくいこーよー！」

ノーヴェ「だあああ！わかったから袖を引っ張るな！」

早くみんなと遊びたいな！とても楽しみ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ウェンディ「いよーッス！オットー、ディード♪」

ディエチ「久しぶり」

美しい噴水がある庭で、ウェンディとディエチはここで働いているオットーとディードに会いに来た。

ディード「ウェンディ姉様、ディエチ姉様」

オットー「２人ともごぶさた」

用意されていたテーブルにはお菓子やら紅茶やらが置いてあった。

ディード「他の皆さんは？」

ウェンディのために椅子を引きながらディードは尋ねる。

ウェンディ「チンク姉とカナリアは騎士団長カリムとシスターシャッハんとこ。
なんかお話だって」

ディエチ「ヴィヴィオとイクス、ノーヴェは孤児院の子達と遊んでる」

ウェンディ「あの子達、元気ッスか？」

紅茶を注ぎながらオットーが答える。

オットー「みんな健康だし元気だよ」

ディード「陛下やウィル様もよく遊んでくださっていますし」

ヴィヴィオ「やっほー！遊びに来たよー！」

孤児Ａ「あ！ヴィヴィオお姉ちゃんだ！」

孤児Ｂ「本当だ！」

孤児院に着くと、あっという間に囲まれるヴィヴィオ達。よく遊びに来ているので、
子供たちに人気なのである。

イクス「みんなも元気そうでよかったよ。はいこれおみやげ！」

孤児C「お菓子だ！」

孤児D「わーい！」

ヴィヴィオ「食べるのは後だよ。さあ、遊ぼう！」

遠くから子供たちの様子を観ているノーヴェのところにセインが来た。

セイン「みんな楽しそうだね？」

ノーヴェ「そうだな。ウィルもここによく来ているんだって？」

前にも書いたと思うが、この孤児院には違法研究所などで捕まっていた
子供たちもいるのだ。

セイン「そだよ。みんな『ウィル叔父さん』て呼んでるよ」

ノーヴェ「もう叔父さんかよ」

～教会内、カリム・グラシア執務室～

そこにはカリムとシャッハがいた。

カ「それでお話っていうのは…例の傷害事件の事よね？」

チンク「ええ、我ながら心配いらぬ心配かとは思ったのですが」

と若干笑いながらチンクは続ける。そしてモニターに例の襲撃犯の画像を出す。

カナ「ほう、こいつが…」

初めて見るカナリアはじっくりと眺めている。

チンク「件の格闘戦着の実力者を狙う襲撃犯。彼女が自称している『覇王』イングヴァルトと言えば…」

カ「ベルカ戦乱期…諸王時代の王の名ですね」

チンク「はい。時代は異なりますが、局長の娘の1人であるイクスヴェリア
陛下や、ヴィヴィオの母体（オリジナル）である『最後のゆりかごの聖王』
オリヴィエ聖王女殿下とも無縁ではありません」

カ「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

若干顔を曇らせながらカリムが尋ねる。自分の子供のことだからそうなるだろう。

チンク「無くはないかと。聖王家のオリヴィエ聖王女、シュトゥラの覇王
　イングヴァルト、ガレアの冥王イクスヴェリア。いずれも優れた
『王』達でしたから…」

カナ「そうだな。オリヴィエ聖王女殿下は実に聡明なお方だった」

一度掘り出されてあったことがあるカナリアは昔を思い出していた。

チンク「ああ、もちろんかつての王族と今の2人は別人ではあるのですが」

カ「ええ、それを理解しない者もいる、ということですよね」

シャッハ「とはいえ、『覇王イングヴァルト』は物語にも現れる英雄です。単なる
　喧嘩好きが気分で名乗っているだけ、という可能性も大きいですよ」

チンク「ですね」

カナ「だが犯人が捕まるまでは警戒を強化したほうがいいのでは？」

カ「そうね、教会内なら問題ないわ。セインがいるから。でも外では…」

チンク「それはこちらで。私と妹達、それにカナリアがそれとなく」
カナ「ま、問題ないだろう。相手は近接戦闘専門なのだろう？ならば、
　近づいてきたらそいつにかかっている重力をいじればいい」
ヴィヴィオとイクスの護衛でもあるカナリアはそう発言する。
チンク「重くするとか？」
カナ「いや、最近面白いことを考えてな。例えば、相手が右手で
　殴りかかってきた場合、右手に５０倍以上の重力負荷をかける。
　それと同時に右手以外の重力は少しマイナスにする。すると…」
カナリアはモニターにシュミレーション映像を流してみんなに見せた。
そこには右手を地面についたまま、両足を上に向けて身動きがとれない
棒人間の姿が映っていた。
チンク「うわー…」
シャッハ「これは…」
カナ「実に滑稽だろう？」
カ「ずいぶんとひどいこと考えるのね」

若干引いているカリムが我が子にそう答える。するとカナリアは悪い人みたいな笑みを浮かべた。俗に言う「お代官様スマイル」である。

カナ「騎士団長」

一応カリムは仕事中なので、カナリアはきちんとした役職名でカリムを呼んだ。

カナ「これはまだましな方だ。いいか、この状態は右手以外にかかる重力を
　少しマイナスにした場合だが、もっとマイナスGをかけるとどうなると
　思う？」

カ「えっ？」

カナ「まあ見たほうが早いな。こうなる」

モニターには、右腕から上がちぎれて空に向かって飛んでいく映像が流れた。
残っているのはちぎれた右腕だけだった。

シャッハ「ひい！」

カ「えー…」

カナ「これぞ、重力綱引きだ！ただし綱は人間だけどな」

自信満々にカナリアは答える。

チンク「やり過ぎだ！」

みんなを代表してチンクが感想をいう。

カナ「犯罪者に手加減などいらんだろう。それに化物共と異教徒共、それに
　犯罪者共は殺しても構わない。私は父上からそう教わったぞ」

カ「ちょっと今夜ウィルさんとＯＨＡＮＡＳＨＩしないといけませんね…」

シャッハ「こわっ！」

カリムに周りに黒いオーラが出てきたので、後ろに控えていたシャッハはとても怖かった。

～庭～

ディエチ達４人が庭で話していると、孤児院の子供たちと思う存分遊んだ
ヴィヴィオとイクスがやってきた。後ろにはノーヴェとセインもいる。

ヴィヴィオ「みんなごきげんよう～♪」

イクス「やっほー！」

するとオットーとディードはすばやく席を立ち、ヴィヴィオたちの方を向いた。

オットー「ああ、これは陛下」

ディード「陛下、孤児院の子供たちとはもう？」

ヴィヴィオ「うん、ディード。いっぱい遊んだよ！」

イクス「とても楽しかった！」

ノーヴェ「あたしらはもうもどるけどお前らは？」

ウェンディ「あー、あたしも」

そう言ってウェンディは席を立つ。

ディエチ「私はもう少し」

オットー「陛下、よろしければこれを。自信作のビスケットです」

箱には美味しそうなクッキーがたくさん。

ヴィヴィオ「わ♪ありがとオットー♪」

イクス「かわいいー♪」

セイン「んじゃあたしは4人を送ってくるなー」

カナ「5人だぞ」

ノーヴェ「いつの間に!?」

どこからともなくカナリアがセインの横に現れたのでノーヴェはびっくりした。

カナ「カリム母上達に先に帰ると言って部屋を出たら、セイン達を見つけたのでな、
　こっそり付いてきた」

セイン「気がつかなかった…」

外に向かって歩いているとノーヴェがヴィヴィオとイクスに聞いてきた。

ノーヴェ「しかしいいのかヴィヴィオにイクス。双子からの陛下呼ばわりは」

ヴィヴィオ「え?」

ノーヴェ「前は『もーっ陛下って呼ぶの禁止ーっ』とか言ってただろ」

ヴィヴィオ「あー。まあもう慣れちゃったし、あれも2人なりの行為の表現だと思うし」

イクス「私は昔からそう呼ばれていたから別に気にしてないよ」

ノーヴェ「なんかあいつらズレてっからなぁ」

カナ「だがこのクッキーはうまいぞ」ぼりぼり

ヴィヴィオ「あー！！なんでもう食べてるの！？」

イクス「家に帰ってから食べるのにー！」

カナ「そこにクッキーがあったからだ」

そんな4人を見ながらセインはウェンディに話しかける。

セイン「この後はいつものアレか。ん？ウェンディもやるんだっけ？」

ウェンディ「ま、みんなにお付き合いッス」

～ミッドチルダ、中央市街地～

そこにはリオとコロナがヴィヴィオたちを待っていた。

ヴィヴィオ「リオ！コロナ！おまたせー！」

コロナ「こんにちはー」

イクス「リオは2人と初対面だよね？」

リオ「うん」

ノーヴェとウェンディに初めて会うリオは自己紹介する。

リオ「はじめまして！去年の学期末にヴィヴィオさんと友達になりました
　リオ・ウェズリーです！」

ノーヴェ「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」

ウェンディ「その妹のウェンディッス♪」

コロナ「ウェンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生！」

ウェンディ「よ、お師匠様！」

ノーヴェ「コロナ、先生じゃないっつーの！」

と本人は否定しているが。

コロナ「先生だよねー？」

ヴィヴィオ「教えてもらってるもん！」

イクス「そうだよねー」

カナ「師匠だな」

リオ「先生って伺ってます！」

と、５人は答える。

ウェンディ「ほら？」

ノーヴェ「うっせ」

恥ずかしそうにノーヴェは答える。

その後、中央第４区の公民館にあるストライクアーツの練習場に向かった。

着替えながら５人の子どもが会話している。

リオ「でもやっぱ意外～！ヴィヴィオもコロナもイクスも文系のイメージだった
　んだけどなぁ。初めて会ったのも無限書庫だったし」

カナ「あれ、私は？」

リオ「カナリアはなんというか、文武両道が人の形して歩いている感じだし」

ヴィヴィオ「あはは。文系だけどこっちも好きなの」

クリスがふよふよ飛びながらヴィヴィオの着替えを手伝っている。

コロナ「私は全然初心者（エクサイズ）レベルだしね」

イクス「私もそうだよ。戦うときは召喚魔法基本だし」

リオ「ほんとー？」

ノーヴェ「さ、行くぞー」

5人「はーい」

ウェンディ「へー！なかなかいっちょまえッスねぇ」

ノーヴェ「だろ？」

5人の練習を見ながら2人は話している。

ストライクアーツはミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技であり、

広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称でもある。

ヴィヴィオやイクス、リオ、コロナがやっているのはわかるが、なぜカナリアまでやっているのか。理由は単純。体が鈍らないように動かしたいからである。

リオ「でもヴィヴィオ達って勉強も運動も何でもできてすごいよねぇ！」

でもヴィヴィオは首を振りながら答える。

ヴィヴィオ「ぜーんぜん！まだなんにもできないよ」

イクス「自分が何をしたいのか、何が出来るのかもよくわからないんだよね」

カナ「だから今は様々なことにチャレンジしているのだよ」

リオ「そっか」

ヴィヴィオ「リオとコロナと色んなこと一緒にできたら嬉しいな」

リオ「いいね！」

コロナ「一緒にやってこう！」

ノーヴェ「さて、ヴィヴィオ。ぼちぼちやっか！」

ウォーミングアップが終わったので、ノーヴェはヴィヴィオに声をかける。

ヴィヴィオ「うん！さー出番だよクリス！服はトレーニングモードでね。

セイクリッド・ハート！セット・アップ！」

ーーー

！わかったな！？」

マリ「えええええ！！絶対に完成する保証はどこにｍ」

「わかったか、わからんのか！？」

マリ「りょりょりょ了解しました！サー！」

結局、２週間と５０，０００ミッドでシステムは完成した。マリエル技官が過労で
ぶっ倒れて病院に担ぎ込まれたのはまた別の話である。

ーーー

Ｓｉｄｅ　ノーヴェ

練習が終わった頃にはもう辺りはすっかり暗くなっていた。
にしてもチビ達もかなり強くなってきたな。ふ、ほんとに
先生みたいだな、あたし。あ、そうだ。

「おいウェンディ、悪いけどチビたち送ってくれないか？」

ウェンディ「了解ッス。なんかご用事？」

「いや救助隊。装備調整があるんだ。じゃ、またな」

ヴィヴィオ「お疲れさまでしたー！」

で、チビたちを別れてしばらく歩いていると前からコーヒーを飲み
ながら
ウィルが歩いてきた。仕事帰りかな？

「あれ、ウィル？」

「おやノーヴェ。どうしたんだ、こんな時間に？」

「これから救助隊に行かないといけないんだ。装備の調整でね」

「そうか、大変だな。あといつもうちの娘達の面倒見てくれてありがとよ」

「いいんだよ、そんなの」

「そうだ、今度一緒にっ！？」

だけど、突然ウィルの奴、空に向けて拳銃をぶっぱなしやがった！
いつ抜いたんだよ？全然見えなかったぞ！ていうか何を撃ったんだ？

あたしがそんな事考えていると、少し離れた場所に女が落ちてきやがった。
あいつを撃ったのか？

「こいつ、いきなり俺達の方に飛んできやがった。だからつい撃っちまった」

っておい、つい撃っちまったっていいのかよ。あたしはその女の顔をよく見た。どこかで見たことのある顔だな…

「あ、こいつ！」

思い出した！こいつ昨日ギンガが言ってた噂の通り魔だ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

続く……

第１０８話：え、なにそれ

同じくヴィヴィオ達の始業式の翌日。

～地上本部、局長執務室～

そこには俺とティーナ、ドゥーエにトーレ、クアットロ、セッテが集まっていた。

「あの、ドゥーエ、今なんて言った？」

俺は秘書の言葉が一瞬理解できずにもう一度聞き直した。

ドゥーエ「ですから、この違法研究所では人間を吸血鬼にするウイルスを

作っているんですって」

ティ「……」

「……」

皆、疑いと疑問の目をドゥーエに向ける。

ドゥーエ「本当ですってば！」

トーレ「はぁ…だがなんでそんなことを？」

トーレがしごくもっともな意見を言う。

セッテ「確か吸血鬼ってコウモリになったり死ななかったりする生き物でしょ？」

クア「弱点はにんにくと十字架でしたっけ？」

ドゥーエ「なんでも古代の遺跡から発見した技術を元に研究・開発を行って
いるようでして、人体実験を行おうと周辺の町から多くの子供達が
誘拐された形跡があります」

2人を無視してドゥーエは事実を淡々と報告する。

「…そんなことして何をしたいんだか。我々とやりあう気かな。まあそれは
どうでもいいとして、場所が分かっているなら殲滅しに行く。行くぞ」

トーレ「了解！」

いかなる理由でも、子供を敵に回す、あるいは子供を利用する連中は容赦なく叩く。それがウィルの基本方針だった。

～とある管理外世界、違法研究所～

俺たち４人組は研究所前までやってきた。ティーナはお留守番である。

「しかし、これは…」

俺達は研究所を見てため息をついてしまった。それもそのはず。
ここは町から遠く離れた険しい山脈の中にあり、見た目は研究所というより
古い屋敷で、おまけに周りにコウモリまで飛んでいる始末。
これじゃあ、

「ここで吸血鬼の研究をやっています」

という看板を掲げているのと同じである。

トーレ「地下施設にするとか、もう少し隠蔽工作をしたらどうなんだ？」

こんな山奥なら一般人も滅多に来ないので、建物自体を隠す必要性は確かに低い。
しかし、やっていることは違法研究なのだから、少しぐらい隠せよ、と誰もが
思うだろう。

セッテ「ここの人たちは、上からだと丸見えだということに気がつ

かなかったんだね」

この辺を軌道上の偵察衛星から見ると、施設内で使っている機材から発せられている
微弱な電波や、機械や人間の熱信号などがはっきりと写っていた。

???「敵襲!!」

???「管理局か、だが臆するな!俺達は無敵だ!」

「「「「「おおおお!!」」」」」

すると研究所の扉が開いて、中から武装した連中が飛び出してきた。

クア「なんか突っ込んできたんですけど!!」

セッテ「あいつらアホか?」

「まあいい、やるぞ!!」

俺はＨＫ４１６Ｃに取り付けたＭ２０３Ａ１グレネードランチャーの引き金を引いて、
襲ってきた連中に焼夷擲弾をプレゼントした。隣ではセッテがブーメランを
投げつけ、トーレは高速移動しながらインパルスブレードで斬りつけた。
クアットロは基本戦えないので、物陰に隠れて施設の電子的制圧を開始した。

？？？「ぎゃあああああ！！！」

？？？「からだがあああああ！！」

トーレ「ふ、弱いな」

セッテ「って待って！あれ！」

だが体が燃えているにも関わらず、連中は突っ込んできた。セッテやトーレの攻撃を受けて、腕や足を切られた連中も再び立ち上がり攻撃してきた。

「ちっ！あいつら全員吸血鬼化しているのかよ！」

俺はアサルトライフルの銃弾を浴びせるが、普通の弾丸なのでたいして効果がない。

セッテ「駄目だ！いくら攻撃しても効果がない！」

トーレ「こっちもだ！どうするウィル！？」

「やむを得ん！攻撃しつつ後退！」

クア「こうなったら上空からターボレーザーで…あ、でも子供達が…」

「…やってみるか。モデル、不死の王（ノーライフキング）」

トーレ「くそ、押されてるぞ！」

クア「ひえええええ！！！」

セッテ「くそおおおお！！」

気がつけば3人はウィルとはぐれてしまい、しかも囲まれてしまった。

？？？「諦めろ、人間」

？？？「そんな攻撃じゃ死なねえんだよ！！」

？？？「てめえらも実験に使ってやるぜ！！」

トーレ「断る！」

？？？「なら、覚悟しぐほっ！！」

セッテ「え？」

その時、敵の1人が頭に食らった銃弾のせいで吹っ飛んだ。

？？？「なにっ！？」

「ふっふっふ…」

？？？「てめえ！」

クア「ウィル様！」

そこにはさっきはぐれたウィルが立っていた。だがその姿を見てトーレは。

トーレ（なんだ？よくわからないが、いつものウィルじゃない気がする…）

？？？「へっ、きっとまぐれだ！いくぞ！」

？？？「おう！！」

残りの敵が襲いかかってくるが、俺は右手に持っている４５４カスール・カスタム
オートマチックに装填されている、１３ｍｍ爆裂徹甲弾をお見舞いした。

？？？「ぐあああああ！！」

？？？「ば、馬鹿なっ…なぜ俺達が…」

？？？「負けるものか！！」

敵も負けじと撃ち返してくるが、全く効果がない。というか回復している。

まるで吸血鬼のように。

トーレ「なっ！？」

セッテ「なんで！？」

クア「信じられない…」

3人は今までウィルと何度も一緒に戦ってきた。その中で、敵に質量兵器で
攻撃されたことも何度もあった。その時、ウィルはいつも敵が放った銃弾を
全て跳ね返していた。一方通行（アクセラレータ）の能力を使っていたからである。
そのことは3人に話してあったし、3人も理解していた。

だが、今起こっている現象については何も聞かされていなかった。
3人には見ていることが理解できなかった。

撃たれた傷があっという間に回復するなんてどういう原理なのだろう？

セッテ「人間じゃないみたい…」

思わずセッテの口からでた言葉が全てを物語っていた。あんなこと、普通の
人間ではできるわけがないからである。

？？？「嘘だろ！？」

弾の切れた銃を構えながら敵は呆然としている。

「霧にもコウモリにも姿を変えることができない。撃たれた傷の回復すらできない。
　弾が切れたら戦うことすらできない。貴様らそれでも吸血鬼（ノスフェラトゥ）のつもりか？
　恥を知れ！！」

？？？「ひ、ひいいいいい！！」

敵は武器を捨てて、踵を返して逃げ始めた。それを黙ってみている俺ではない。
再び銃を撃ち、全員の頭に銃弾を撃ちこんで殺害した。

トーレ「…ウィル、なんだよな？」

「もちろんそうだ。では先に行こう」

そう言ってウィルは先頭にたってさらに奥へと歩いて行った。
その様子を後ろから3人は観察する。

セッテ「なんかいつもと雰囲気が違うな」

クア「そうね～、ってあら？」

トーレ「どうした、クアットロ？」

クア「敵の血が…」

セッテ「血だって?それがどうかした…ない!?」

トーレ「っ!?」

3人が足元を見ると、さっきまで床に飛び散っていた大量の血がどこにもなかった。

頭を吹き飛ばされた敵もいれば、血しぶきとなって消えた敵もいたはずなのに、

周りには一滴の血も垂れていなかった。

セッテ「乾いた…わけないよね」

トーレ「どういうことだ?我々は敵が血を流すのを見ていたはずだが…」

「何をグズグズしている?早く来い」

クア「は、はい!」

トーレ「ここだな?」

セッテ「行くぞ!」

俺達は一番奥の部屋までやってきた。

トーレ「動くな!管理局だ!」

??「ほう、管理局か」

セッテ「お前がここのボスだな?逮捕する!」

その部屋は広い研究室で、部屋の中央の机に1人の男が座っていた。
その白衣を着た若い男はセッテの言葉を聞くと笑い始めた。

白衣「逮捕する?この私を?はっはっはっはっは!!」

セッテ「な、何がおかしいんだ!?」

白衣「逮捕ねぇ、やれるものならやってみろ!!」

「っ!?セッテ!!」

俺はセッテの首を掴んで後ろに放った。その瞬間、さっきまでセッテがいた所に
銃弾が通り過ぎた。いつの間にか懐から抜いた拳銃でセッテを撃ち殺そうとしたのだ。

セッテ「ひっ!」

「貴様、覚悟しろ!」

俺も銃を構えて引き金を引いた。しかし、敵は銃弾を信じられない速度で
避けつつ、こちらに撃ち返してくる。

「ほう、早いな」

白衣「私をさっきまでの即席（インスタント）共と思ってもらっちゃ困る。この素晴らしき
　ノスフェラトゥ・ウイルスによって私は人間を超越した！誰にもこの私は倒せん！」

「3人は下がっていろ！」

2人が高速移動しながら撃ち合いをしているのを、3人はぼんやりと眺めていた。

トーレ「早過ぎて見えないし…」

高速戦闘が得意のトーレでも、2人の動きは見えなかった。

クア「薬であんなふうになるなんて…」

「3人は子供達を探してこい。急げ！」

セッテ「いてて、わかった！」

白衣「しかし管理局にも吸血鬼がいたとは知らなかったぞ！」

白衣の男は飛んでくる銃弾を避けつつ、確実にウィルの銃弾を撃ち込み続けた。
ウィルはというと、途中から避けることをやめていた。

白衣（なぜこちらの弾を避けようともしないんだ？不死身なのか？いや！
　不死身などこの世に存在しない！ダメージはヤツのほうが大きいはずだ。
　勝てる！私が勝つに決まっている！私こそ無敵の吸血鬼なのだ！）

ウィルが白衣の男の銃弾を避けなかったのは、単に高速移動をするのが
めんどくさくなったからである。そのことを彼は知る由もない。

男が自らの勝利を確信した時、血まみれになったウィルが笑いながら話しかけた。

「ふっふっふっ…楽しい。こんなに楽しいのは久しぶりだ」

白衣「なんだと？」

この時点でウィルの人格は完全にあのお方と同じになっていた。
出来ればやりたくはないのだが、まぁたまにはいいだろうということで。

「貴様を分類（カテゴリー）Ａ以上の吸血鬼（ヴァンパイア）と認識する。拘束制御術式第３号、第２号、第１号、開放。状況Ａ、『クロムウェル』発動による承認認識。眼前敵の

完全沈黙までの間、能力使用限定解除開始。では教育してやろう！本当の
吸血鬼の闘争というものを！！」

その瞬間、世界が変わったような気がした。

白衣「な、なんだ！？」

いきなりウィルの体から真っ黒な犬が2頭飛び出してきた。それらが信じられないほどの高速で白衣の男に襲いかかった。

白衣「ひ、ひいい！！」

さっきまでウィルが立っていたところにはもうウィルはいなかった。両手と頭は落ちていたが。そして足元にはムカデらしき生物が大量に蠢き、白衣の男に向かって進んでいった。

白衣「あ、あああ、あああああああ！！！」

もう男には戦うという考えは微塵もなかった。

逃げなければ！あの恐ろしい”何か”から！急がないと！！

しかし、部屋の入口に逃げようとする男の背後から、またあの黒い犬が
追いかける。そして口の中から銃と腕が現れ、男の左足を撃ちぬい

た。

白衣「ぐあああああ！！く、くそう！！」

それでも諦めずに残っている右足でなんとか逃げようとするが、
直後に右足も吹き飛ばされた。

白衣「がああああああ！！！」

両足を失った男は勢い良く吹き飛ばされ、壁に頭から激突する。
そしてなんとか起き上がった男は恐怖のあまり笑いながら振り返る。
そこには、人間ではない、黒くてよくわからない生き物がいた。

白衣「ふっふっふ、お前は…お前は一体、何者だ！？」

「はぁぁぁぁ…」

”それ”はやがて人の形になり、ちぎれた足を摘んだ。

「どうした？まだ足が2本ちぎれただけだぞ？かかってこい！」

白衣「ひいい！！」

男は恐怖でがたがたと震えている。先程までの自信はもうどこにもなかった。

「使い魔たちを出せっ！体を変化させろ！足を再構築して立ち上がれ！
さあ、夜はこれからだ！」

そう言って”それ”は拾った足を握りつぶした。

「早く(ハリー)！早く(ハリー)！早く(ハリー)！早く(ハリー)！早く(ハリー)！」

胸の真ん中に大きな目を持ち、黒い服を着たウィルは満面の笑みを浮かべながら
白衣の男に催促する。

「お楽しみはこれからだ！早く(ハリー)！早く(ハリー)！」

だが、ここで白衣の男は言ってはいけない言葉を口にした。

白衣「ば、化け物めぇ！！」

「っ！」

沈黙が流れ、しばらくするとウィルの周囲に広がっていた黒い何かがウィルの体へと戻っていった。

「そうか、貴様もそうなのか、小僧。出来損ないのくだらない生き物め」

白衣「ほざくな！管理局のおもちゃめ！あの連中の犬に成り下がった貴様に
吸血鬼としての…」

「やかましい」

白衣「ひい！」

「お前は犬の肉（エサ）だ」

そう言うとウィルの右手にあの犬が現れ、唸り始めた。そして次の瞬間には男に襲いかかり、あっと言う間に男は食べられてしまった。悲鳴をあげる暇もなかった。残ったのは血に濡れた白衣の切れ端と大量の血だけだった。

「所詮こんなものか、小僧。お前はまるで糞のような男だ。犬の糞になってしまえ」

そこらじゅうに飛び散った男の血はウィルの足元に吸い込まれていった。

「さて、そろそろ戻るとするか。ありがとう、伯爵」

「とんでもない、本体。久々に楽しめた」

そう言ってウィルは人格を元に戻した。

セッテ（みみみみみ見なかったことにしよう…）がくがくぶるぶる

子供達を無事に救出して、戻ってきたセッテは部屋の外で震えてい

た。
部屋の中を見てしまった彼女はかなり混乱していた。
セッテ（あの犬は何！？ていうか白衣の人食ってたし！おまけに血も
消えちゃったし！？もうわけわかんない！！」
その時、部屋の中で誰かが倒れる音がした。
セッテ「ん？」
恐る恐る部屋の中を覗くと、そこでウィルが仰向けに倒れていた。
セッテ「ウィル！しっかりしろ！」
駆け寄って抱き抱えると、ものすごく疲れた表情をしたウィルがう
っすらと
目を開けた。
「ああ、セッテか…ちょっと疲れた。寝させて、くれ…ぐー」
セッテ「ええ！？ってもう寝てるし！」
仕方なくセッテはウィルをおんぶして研究所を後にした。
～地上本部～

ドゥーエ「みんな、お疲れ様、ってどうしたの？」

ウィルがセッテにおんぶされながら帰ってきたのでドゥーエが聞く。

セッテ「なんか戦いが終わった後に寝ちゃって…」

ドゥーエ「ふーん。それで研究所は？」

トーレ「ウィルの要請通り、ターボレーザーで吹き飛ばした」

クア「これで全部吹っ飛んだから誰もあの研究を再開できないわ」

ドゥーエ「そう、ならいいわ」

「…あ～良く寝た」

セッテ「あ、起きた」

「む、この髪はセッテだな？ありがと、ここまで運んでくれて」

セッテ「いや、構わないよ」

ウィルの笑顔を至近距離で見ることができたセッテは思わず頬を染める。

それを見ていて面白くないのがトーレとクアットロ。

トーレ「…そろそろ帰ろうかな」

クア「…そうですわね、行くわよセッテちゃん」

セッテ「ちょ、待って、引きずらないでえええ…」ずるずる
2人に襟首を掴まれてセッテは扉の向こうに消えていった。

「おつかれ～。さてと、それじゃあ俺も帰るか」

ドゥーエ「お疲れ様です」

「ふう、たまには歩いて帰るか」

本部を出る頃にはもう夜になっていた。

「ちょっと肌寒いな。とっとと帰るか」

自販機で買ったコーヒーを飲みつつ、しばらく歩いていると、
前から見覚えのある女性が歩いてきた。

ノーヴェ「あれ、ウィル？」

「おやノーヴェ。どうしたんだ、こんな時間に？」

ノーヴェ「これから救助隊に行かないといけないんだ。装備の調整
でね」

「そうか、大変だな。あといつもうちの娘達の面倒見てくれてあり

がとよ」

ノーヴェはヴィヴィオやイクスにストライクアーツを教えている。
立場的には、ヴィヴィオ達の師匠である。本人は否定しているけど。

ノーヴェ「いいんだよ、そんなの」

「そうだ、今度一緒にっ！？」

だがその時、何かの気配を感じて俺は懐からH&K　HK45Tを取り出し、
空に向かって銃弾を放った。銃を抜いて、狙いを定め、引き金を引くまでに
かかった時間は0．5秒以下だった。どこぞのスナイパーよりは遅いが、
それでも充分な速さである。。

ノーヴェ「え、ええ！？」

突然の行為にノーヴェは驚きを隠せない。なぜウィルはいきなり拳銃を
空に向けて撃ったんだ？

その疑問は空から落ちてきた女性のおかげで解決した。

「こいつ、いきなり俺達の方に飛んできやがった。だからつい撃っちまった」

ノーヴェ「あ、こいつ！」

その女性はギンガが言っていた噂の通り魔だった。

次回に続く…

第１０８話：え、なにそれ（後書き）

自分できちんとネタを考えられなくなったらおしまいな気がします。

では

第１０９話：女なのに覇王って変じゃなイカ？（前書き）

はい、ついにあの子です。

第１０９話：女なのに覇王って変じゃなイカ？

～前回のあらすじ～

女が撃たれて落ちてきました、まる。

～あらすじおしまい～

ノーヴェ「なんだよこのあらすじ！てかあらすじにすらなってねえぞ！」

「何いってんだ、ノーヴェ？」

ノーヴェ「あ、いやなんでもない」

俺は落ちてきた、もとい撃ち落とした女に近づき、足でつついてみた。

女「」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。脈を図るときちんと生きている。

ノーヴェ「ウィル…もしかして殺したんじゃ…」

若干顔を青くしながらノーヴェが尋ねる。

「いくらなんでもそんなことはしないよ。俺が撃った弾はこれだよ」

そう言って俺はH&K　HK45Tから銃弾を1発抜いてノーヴェに放った。

彼女は器用に受け取り、銃弾をよく観察した。

ノーヴェ「なるほど、硬質ゴム弾か。これなら死なないな」

非致死性の硬質ゴム弾。さっき女を撃つために銃をホルスターから抜いた

瞬間に、創造魔法を使ってこの弾を作り、同時に弾倉に入っていた実弾と

交換した。チートっていいよね、うん。だが非致死性のゴム弾でも、至近距離では十分な殺傷力があり、目標にヘビー級プロボクサーのパンチ並みの衝撃を与えるうえ、数m以内では皮膚を貫通する威力のものがほとんどのため、当たり所によっては死亡することも十分あり得る。

いやー死ななくてよかったよ、いやまじで。

「急所に、例えば目に撃ちこめば死ぬかもしれんな」

ノーヴェ「げぇ、まじか、でウィルはどこを撃ったんだ?」

「あいつが付けていたいけ好かないバイザー目がけてズドンとね」

そう言われてノーヴェが周りを見ると、バイザーの破片がそこらじゅうに

散らばっていた。しかも、女のおでこにはうっすらと銃弾の跡が残っている。

「どこぞの国のお坊さんみたいだな」

そこで女が目を覚ました。

女「うぅ…いったい…」

若干混乱しているようで、まだぼんやりとしている。

ノーヴェ「おい、この通り魔。あたしたちに何の用だ?」

女「あ、そうだ。思い出した」

そう言った瞬間、彼女は立ち上がり俺達から離れた場所まで後ずさった。

女「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんお見受けします。

あなたに幾つか伺いたいことと、確かめさせて頂きたいことが」

「あ、俺はスルーですか、そうですか」

見事にスルーされた俺は持っていたコーヒーをヤケ飲みする。

女「ああ、いえ、私あなたは知らないので…」

若干困った表情を浮かべながら女は答える。

ノーヴェ「つーか質問すんならまず名を名乗れ」

女「失礼しました。カイザーアーツ正統、ハイディ・Ｅ・Ｓ・イングヴァルト。
　『覇王』を名乗らせて頂いています」

ノーヴェ「やっぱり噂の通り魔か」

女「否定はしません。伺いたいのはあなたの知己にある『王』達のことです。
　聖王オリヴィエの複製体（クローン）と、冥府の炎王イクスヴェリア」

ノーヴェ「っ！」

女「あなたはその両方の所在を知っていｒ『ドンッ！』…え？」

いきなり足元に銃弾を撃ちこまれた女は言葉を失った。

「悪いけど知らねえな、嬢ちゃん。それに、これ以上俺の娘達のことを
侮辱するんじゃねえ。あの子たちは一生懸命に生きている普通の子供だ。
もしうちの娘達に手ぇ出したら、俺はお前を絶対に殺す。例え便所に
隠れていても息の根を止めてやる」

俺は割と本気で殺気を出しながら銃を女に向ける。愛銃のＨ＆ａｍｐ；Ｋ　ＨＫ４５Ｔの弾倉には
先ほどのゴム弾の代わりに４５ＡＣＰのＴＨＶ弾が１０発フル装填されていた。これは
フランスのＳＦＭ社が開発した高速弾薬で、ピストル弾でありなが

ら発射速度は
８００ｍ／ｓにも達する。タイプ?までのボディアーマー（．３５７ＭＡＧデザートイーグル
６インチモデル弾／９×１７／９×１９パラベルム弾を防弾可能）はまったくの無力となり、
危険極まりないため販売は軍、警察関係に限られている。３８スペシャル、９ｍｍ、
３５７マグナム、４５ＡＣＰなどのバリエーションで販売されており、フラットノーズの
先端に突起のある形状をしている。アーマー貫通後は、細い先端から後端にかけて
急激に太くなっているのが特徴の凸型弾頭が人体へ食い込んだ瞬間に負圧がかかり、
体内で運動エネルギーを放出するため貫通力だけでなく強力な殺傷力を持った弾頭で、
ピストル弾であるが破壊力はカービンライフル程度と高い。また、軽量で高速で
あるものの弾頭形状にみられる急激なカーブにより貫通力は低く、人体に命中
しなかった場合に壁などを貫通しにくく、二次被害を最小に押さえる効果が
あるとされている。

ノーヴェ「お、おい、ウィル、ちょっとやり過ぎじゃないか?」

女はゆっくりと足元に視線を下ろした。そこには粉々になったコンクリートの
破片と、大きな弾痕が残っていた。

女「すすすすいませんでした!あ、あなたの娘さんとは知らなか

ったもので…」

後ろに後ずさりながら、女は真っ青になりながらそう答えた。そりゃ足元に銃弾
撃ちこまれて顔色1つ変えない女はそうそういないよな。

「ま、わかればそれでいいんだ」

女「で、ではもう1つ確かめたいことが。あなたの拳と私の拳、いったいどちらが
　強いのかです、ノーヴェ・ナカジマさん」

「なるほどね。ノーヴェ、ご指名だぞ。頑張ってな～」

ノーヴェ「へっ、5分でカタをつけてやる！」

5分後。

女「覇王断空拳！！」

ノーヴェ「」

女「弱さは罪です。弱い拳では…誰のことも守れないから」

例によってノーヴェは吹っ飛ばされ、「覇王」もノーヴェの攻撃を受けて満身創痍
みたいである。

「やはり原作通りに進むか…」

女「なんですって？」

「いやなんでもない、独り言だ」

女「…それでどうする気ですか？」

「ん？」

女はボロボロになりながらも構えを解かずにこちらを見ている。

女「このままあなたが私をタダで帰すとは思えません。あなたの知り合いを
　倒したのですから」

「いんや、なにもしないよ？どうぞお帰りください」

女「え？」

俺の発言に女は拍子抜けした顔をしている。

「だってこれは嬢ちゃんとノーヴェの決闘だろ？なら俺が口を出す権利はねえよ。
それに嬢ちゃんだってかなりきついだろ？今日はもう帰りな」
そう言って俺はホルスターに銃を収めて、ココアシガレットをかじる。
これ好きなんだよね。
女「…全てお見通しですか」
側にある電柱に寄りかかりながら尋ねる。
「バカ言うな、神様じゃあるまいし。まあいい、また今度会おうぜ、『覇王』よ」
女「…では」
そう言って彼女は夜の街に消えて行った。
「やれやれ、若いっていいねえ。ノーヴェ、起きてんだろ？」
後ろに声をかけると、ノーヴェは仰向けになってため息をついた。
ノーヴェ「何言ってんだよ、ウィルだってまだまだ若いだろ？」
「ふ、違えねぇ。それでセンサーは付けたんだろ？」
ノーヴェ「あれを見てたのかよ？」
俺はノーヴェがあの女に蹴りを入れるついでにセンサーを付けてい

たのを見ていた。

「目はいい方なんでね。んじゃ追いかけるとしますか、って動けないよな」

ノーヴェ「ああ、ちょっときついな」

先程の戦闘のせいでまだノーヴェは動けなかった。

「ちょっと待ってろ」

そう言うと俺はポケットから車のキーを取り出して、キーホルダーのボタンを
幾つか押した。すると遠くからあの音が聞こえてきて、その5秒後には
俺達の隣に無人のホールデン・コモドアが現れた。

ノーヴェ「すげぇ…ってなんで無人で動いてんだ?」

「自動車の自動運転システムくらい簡単に作れるさ。ほら、手を貸しな」

地面に横たわるノーヴェを助手席に載せてから、俺は車に乗り込み
ダッシュボードのパネルを操作した。すると「覇王」の現在位置が
地図上に表示された。

「王様見〜つけた。行くぞ」

Ｓｉｄｅ　覇王

彼女の一撃、凄い打撃だった…危なかった。
この体は間違い無く強いのに、私が弱いから…

それにあの男の人…ううん、怖かった…いきなり撃ってくるんだもん。
しかも聖王と冥王の父親だし…手を出したらまた撃たれるのかな…

「武装形態、解除…」

私は誰にも見られていないことを確認してから変身魔法を解いて、
元の姿に戻った。帰って少しだけ休もう。目が覚めたらまた…

だけど、ポケットからコインロッカーの鍵を取り出そうとした時、
体がいうことを効かなくなって倒れてしまった。

だめ…こんなところで倒れたら…

しかも、戦いの疲れが溜まっていたのか、意識を保つことができな

かった。
薄れる意識の中、最後に聞こえたのは猫の鳴き声みたいな音だった…

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

センサーを追跡すると、コインロッカーで例の女は倒れていた。

「ったく、こんなところで寝てたら風邪ひくぞ」

俺は倒れている女を優しく抱き抱えた。

ノーヴェ「こんなガキにあたしはやられたのかよ…」

さっきとはまるで違う姿にノーヴェは絶句する。

「ま、そんなこともあるだろうよ」

俺は女を後部座席に乗せてから、落ちていた鍵を拾ってロッカーを開けた。

「えっと、ここか。ってヴィヴィオたちと同じ学校かよ」

ノーヴェ「なのにウィルのことを知らなかったのか？」

「らしいな。珍しいもんだ」

St．ヒルデ魔法学院では色々と有名なヴィヴィオ達3姉妹。入学式に校舎の一部を半壊させたのも原因だが、頭もいいし運動もできるのでさらに有名になった。
そんな中、初等科や中等科の生徒の間で1つの疑問が浮かび上がった。

こんな優秀な生徒の親は一体誰なのだろう？

答えはすぐに出た。「ミッドの守護神」であり、時空管理局局長のウィリアム・T・ロンバート元帥であった。それを聞いて、他の生徒達は、

「あーなるほどね、あの人の子供ならそりゃ優秀だよな」

という結論に達したそうな。

「ま俺のことを知ってるかどうかは重要じゃない。とりあえず荷物は全部持ってと」

ロッカーに入っていた荷物を全部出して車に積み込む。

「悪いけど今日はお前ん家で預かってくれねえか？」

ノーヴェ「お安い御用さ。お父さんとお母さんに連絡しとく」

本当なら交通量の少ない夜の街をエンジン全開で走りたかったが、そんなことをしたら覇王っ子どころか、町中の人をを叩き起こすことになるので、仕方なくゆっくりと安全運転でナカジマ家まで送り届けた。

車を停めると、ゲンヤさんとクイントさんが出てきた。

ゲンヤ「その子が例の？」

「そうですよ。魔法で大人に変身していたんですよ」

クイント「可愛い子ね～」

ノーヴェ「そうだね、いい寝顔だ」

「そんじゃ、この子よろしくお願いしますね」

ゲンヤ「おう、まかせとけ」

ス「あれ、ウィルさん？」

そこに仕事から帰ってきたスバルとティアナが。そういや今日はこっちに
泊まるとか言ってたな。

テ「どうしたんですか？」

「いろいろあってね。詳しくはノーヴェに聞いてくれ。今日はとても疲れた
からもう帰るわ。また明日な～」

そう言って俺は車を屋敷へと走らせた。

ス「…行っちゃった」

テ「なんか相当疲れてたね。それでノーヴェ、その子どうしたの？」

ス「可愛いね～、はっ！も、もしかしてウィルさんとの間にできた隠し子じゃ…」

ノーヴェ「はぁ！？何言ってんだよスバル！！」

スバルの馬鹿げた発言に、思わず頭をげんこつで殴るノーヴェ。

テ「このバカスバル！こんなに大きな子が隠し子な訳ないでしょ！！」

同じくティアナもスバルをげんこつで殴った。

ス「痛っ！痛い！！ううう…なんとなくで言ったのに～」

ノ、テ「なんとなくで言うな！」

やっぱり何時まで経ってもスバルはバカの子なのであった…

第１０９話：女なのに覇王って変じゃなイカ？（後書き）

はい、あの子でした。

ウィルの使っている銃について。
最初あたりはＭ１９１１Ａ１　ＭＥＵピストルを使っていましたが、より軽く、より弾が入るＨ＆ａｍｐ；Ｋ社のＨＫ４５Ｔにくら替えしました。
４５口径なのは同じです。ストッピングパワーが強いしね。
アメリカは４５口径大好きな国ですが、ヨーロッパだと反動きついとかで嫌われています。

次回は考え中。
では

第１１０話：覇王の正体（前書き）

実は最近、「大帝国」というゲームにはまりました。
面白いんですけど難しいですね。

第１１０話：覇王の正体

～屋敷、朝～

みんな「いただきまーす！」

今日もみんなで朝ご飯を食べる。どんなに忙しくても朝だけは子供達と
ご飯を食べるのが、ウィルやなのは達の決めたことだった。

「そうそう、ヴィヴィオにイクス」

ヴィヴィオ「なに？」

イクス「ん～？」

２人ともバターを塗ったトーストにかじりつきながらこっちを見る。
どうでもいいことだが、俺とカナリアはトーストにジャムを塗る派である。

「今日の放課後にな、すっげぇ面白いことがあるぜ」

ヴィヴィオ「面白いこと？」

イクス「なになに教えて～？」

カナ「それは知ってからのお楽しみ、であろう？父上」

いちごジャムを大量に塗って真っ赤になったトーストを頬張りながら

カナリアが聞いてくる。

「ま、そういうことだ。それとカナリア、お前ジャム塗りすぎ」

な「そーだよ、太っちゃうよ？」

は「でもいちごジャムはおいしいんよな～」

ヴィ「あたしも好きだな」

ツ「私もです！」

シグ「そうか？私は何も付けずに食べるのが好きだ」

ザフィ「私も同感だな」

ア「そうだな、私もだ」

シャ「えー、トーストにはピーナッツバターが一番でしょ？」

アリサ「私も！」

アギト「シャマル、わかっているな！」

みんなそれぞれ好きな食べ方を言っていく。その時、ある人物から爆弾発言が。

すずか「アリサちゃん、それはないよ…トーストに一番合うもの、それは蜂蜜だよ？」

その瞬間、食堂が静まりかえった。

「いや、それはおかしいぞ」

ヴィヴィオ「ありえないよ、すずかママ」

フェ「いやいや、ホットケーキじゃないんだから蜂蜜はないでしょ！」

は「そうやそうや！」

すずか「むー！じゃあフェイトちゃんは何付けるの？」

みんなから次々と反対されたすずかはむっとしながら聞く。

フェ「チーズ」

な「同じく」

ギ「私もです。熱々のうちに乗せるとたまんないですよね～」

ティ「私はガーリックバター塗ってから焼いてガーリックトーストにするな」

カ「それもいいですけど、やっぱり私はマーガリンですね」

統計すると、

ジャム：ウィル、カナリア、はやて、ヴィータ、ツヴァイ
何もなし：シグナム、ザフィーラ、アイン
バターorマーガリン：ヴィヴィオ、イクス、カリム
ピーナッツバター：シャマル、アリサ、アギト
チーズ：なのは、フェイト、ギンガ
ガーリックバター：ティーナ

今ここにいないからわからない：ティアナ、スバル

邪道（蜂蜜）：すずか
という結果になった。

すずか「なんで蜂蜜が邪道なの！？」

「だってドロドロしてて垂れやすいじゃん」

ティ「職場で他の人にも聞いてみたら？」

すずか「ううう…きっとプレシアさんやアリシアちゃんなら…」

フェ「それはないと思うけどね」

～ナカジマ家～

昨日この家に担ぎ込まれた女の子はもぞもぞしながら眠りから覚めた。
すると自分の家じゃないことに気がついて体を起こす。

ノーヴェ「よう、やっと起きたか」

隣にいたノーヴェに声をかけられて、彼女は戸惑いを隠せない。

女「あの、ここは…」

すると部屋の扉をノックしてティアナが入ってきた。

テ「おはよう、ノーヴェ。それから…自称覇王イングヴァルト。本名アインハルト・ストラトス。Ｓｔ．ヒルデ魔法学院中等科１年生。
ごめんね、コインロッカーの荷物出させてもらったの。ちゃんと全部持ってきてあるから」

横を見ると、確かにロッカーに入れていた荷物があった。

ノーヴェ「制服と学生証持ち歩いてっとはすいぶんとぼけた喧嘩屋だな？」

「学校帰りだったんです。それにあんなところで倒れるなんて…」

アインハルトは少しむっとしながら答える。そこに。

ス「あーみんなおはよー。おまたせ♪あさごはんでーす！」

食事を載せたトレーを両手に持ちながらスバルがやってきた。

ノーヴェ「おおベーコンエッグ！」

テ「あと野菜スープもね」

ス「あ…はじめましてだね、アインハルト。スバル・ナカジマ・ロンバートです」

コップを渡しながらアインハルトに話しかける。

ス「事情とか色々あるとおもうんだけど、まずは朝ごはんでも食べながら
お話聞かせてくれたら嬉しいな」

みんな「いただきまーす」

「美味しい…！」

アインハルトはあまりの美味しさに感動していた。

ノーヴェ「へぇ、スバルの料理、気に入ってくれたみたいだな」

ス「えっへん！マックス料理長直伝だからね！」

ウィルの家族は2年に1回ほど第43管理外世界「ポッケ」のポッケ村に
遊びに行き、新妻軍団はそこの「ホテル・アイルー」で料理長を務めている
アイルー、マックスに料理を教えてもらったのだ。なのでみんな料理の腕がいい。

ノーヴェ「あたしも行きたいな、そのポッケ村に」

テ「休暇とって今度一緒に行く？」

ス「それ賛成！」

そんなこんなで朝ごはんを食べながら話す4人。

ノーヴェ「んじゃ一応説明しとくぞ」

とノーヴェが話し始める。

ノーヴェ「ここはこいつ…あたしの姉貴、スバルの実家」

ス「うん」

他のみんなより大食い、もといバカ食いのスバルのトレーにはまだベーコンエッグやらバターロールやらが山のようにのっている。

ノーヴェ「で、その姉貴の親友で本局執務官」

テ「ティアナ・ランスター・ロンバートです」

ノーヴェ「お前を探して保護してくれたのはこの2人、ともう1人いたな。
ま、感謝しろよ」

ス「でもだめだよノーヴェ。いくら同意の上の喧嘩だからってこんなちっちゃい
子にひどいことしちゃ」

ノーヴェ「こっちだって思いっきりやられてまだ全身痛ぇんだぞ。それに」

そこでフォークを置いて話す。

ノーヴェ「ウィルのほうがよっぽどひどいことしてたぞ。いきなり拳銃ぶっ放すし
殺気丸出しでこいつのこと脅してたし」

ス「あー、あはは、ウィルさんらしいというかなんというか…」

テ「拳銃を撃ったって!?どこを?」

ノーヴェ「そいつが付けていたバイザーに1発、足元に1発だ」

アインハルトを顎で指しながらノーヴェは答える。

ス「えええええ!!!」

テ「ちょっとそれはやり過ぎでしょ!」

ノーヴェ「いや、彼女がヴィヴィオたちのことクローンって言い出した瞬間には
もうキレてたね、そりゃもうすごく」

「あの人…すごく怖かったです…」

アインハルトも思い出したのか、ちょびっと震えている。

「あの、お知り合いの方なんですか？」

ス「知り合いって言うか、私とティアの旦那さんだよ」

テ「そうよ」

ノーヴェ「で、あたしは愛人の１人」

「奥さんが２人もいるのに愛人もいるんですか？」

ノーヴェが堂々と愛人宣言したのでアインハルトは驚きを隠せない。

テ「正確には１２人の奥さんと１１人の愛人ね」

ス「そーそー」

ロールパンを一口で食べながらスバルが相づちを打つ。

「…もうついていけません」

愕然としているアインハルトにノーヴェが話しかける。

ノーヴェ「心配するな、それが普通の反応だ」

テ「それで話を戻すけど、格闘家相手の連続襲撃犯があなたって言うのは…本当？」

ティアナはアインハルトに真面目に聞いた。すると彼女は少ししてから

「…はい」

と答えた。

テ「理由、聞いてもいい？」

その先はノーヴェが話した。

ノーヴェ「大昔のベルカの戦争がこいつの中ではまだ終っていないんだと。

んで自分の強さを知りたくて。あとはなんだ、聖王と冥王を

ぶっ飛ばしたいんだったか？」

「最後のは…少し違います」

そう言ってアインハルトは話し始めた。

「古きベルカのどの王よりも覇王のこの身が強くあること。それが証明

出来ればいいだけで」

ノーヴェ「聖王家や冥王家に恨みがあるわけではない？」

「はい」

するとスバルとティアナは笑顔になった。

ス「そう、なら良かった」

「…？」

アインハルトはよくわからないといった顔をした。なのでティアナが補足する。

テ「私とスバルはね、その子達の母親だから」

ス「そうなの」

「…聖王と冥王のお母様でしたか。そういえば昨日の男の人も自分の娘達とか
言ってた気が…」

ノーヴェ「そうだ、ウィルが父親だぞ」

「ウィル…？」

誰だかよくわからないといった評定をするアインハルト。

ス「ああ、ウィリアム・T・ロンバート。聞いた事ないかな？」

「…ロンバート？確か学院でそんな名前の３姉妹が…まさか！？」

テ「そ。ロンバート３姉妹の父親であり、時空管理局の局長でもある」

「ミッドの守護神…コーヒー片手に拳銃撃ってたあの人が…」

ス「コーヒー飲んでたんだ…」

また話がそれたのでティアナが咳払いして戻す。

テ「えっと、近くの署に一緒に行きましょ。被害届は出てないって話だし、
　もう路上で喧嘩とかしないって約束してくれたらすぐに帰れるはずだから」

ノーヴェ「あーティアナ、それなんだけど…」

テ「？」

～湾岸第６警防署～

ス「なんだ、ウィルさんきちんと考えてくれてたんだね」

ノーヴェの説明を受けてスバルとティアナは納得した。

昨日の事件は、ウィルが先制攻撃したので双方に問題がある、とい

うことになった。
警防署にはそのことが昨日の時点で既にウィルから報告を受けていたので、
アインハルトはちょっとばかし注意されるだけにとどまった。

ス「ごめんねティア、せっかくの非番なのに」

テ「それはあんたも一緒でしょ。しかし私達ってベルカの王様とよく知り合うわよねぇ」

ス「ねー。でもあの子…アインハルトも色々抱え込んじゃってるみたいだし、
　このまま放ってはおけないかも」

テ「そうね、でもその前に、あんたの可愛い妹が一肌脱いでくれそうじゃない？」

注意を受けた後、1人ベンチに座っていたアインハルトはうつむきながら考え事をしていた。

（私は何をやっているんだろう…やらなきゃならない事たくさんあるのに…）

ぼんやりと考え事をしていたせいか、後ろからアインハルトのほっぺたに
向かってくる冷たい缶ジュースには気がつかなかった。

「ひゃっ！！」

ノーヴェ「よう、隙だらけだぜ、『覇王様』」

ジュースを飲みながら2人はベンチに座った。

ノーヴェ「もうすぐ解放だと思うけど、学校はどうする？今日は休むか？」

「行けるのなら行きます」

ノーヴェ「真面目で結構。で…あのよ。うちの姉貴やティアナは局員の中でも結構凄い
連中なんだ。古代ベルカ系の詳しい専門家もたくさん知ってる、っていうか
ウィルの奥さんに専門家がいる。お前の言う『戦争』がなんなのか
わかんねーけど…」

そこでノーヴェはアインハルトをしっかり見つめて言った。

ノーヴェ「協力できることがあんならあたし達が手伝ってやる。だから…」

「聖王達には手を出すな、ですか？」

ノーヴェ「違ぇよ、あ、いや違わくはねーけど。手出されても困る。それに

今度こそウィルがマジギレする、うん」

「それは嫌だ…あの人…怖い…」

ウィルの名前を出した途端、再び震え出すアインハルト。

ノーヴェ「しっかりとトラウマになってやがるな…まあいい。それで、

ガチで立ち会ったからなんとなくわかるんだ。お前さ、格闘技（ストライクアーツ）が好きだろう？」

「っ！」

ノーヴェ「あたしもまだ修行中の身だけど指導者（コーチ）の真似事もしてっからよ。

才能や気持ちを見る目だけはあるつもりなんだ…違うか？好きじゃねーか？」

アインハルトはうつむきながら答えた。

「好きとか嫌いとか、そういう気持ちで考えたことがありません。

覇王流（カイザーアーツ）は私の存在理由の全てですから」

ノーヴェ「…聞かせてくんねーかな？覇王流（カイザーアーツ）のこと…お前の国の事。

お前がこだわっている戦争の事」

「…私は…」

～Ｓｔ．ヒルデ魔法学院、初等科校舎図書室～

コロナ「あったあった！これがオススメ。『覇王イングヴァルト伝』と

『雄王列記』、あとは当時の歴史書！」

コロナが分厚い本を抱えてヴィヴィオたちのところへ戻ってきた。

ヴィヴィオ「ありがと、コロナ？」

コロナ「前にルーちゃんにおすすめしてもらったんだ」

カナ「ルーテシアか、しばらく会っていないな」

イクス「また会いに行きたいな～」

リオ「でもどーしたの？急にシュトゥラの昔話なんて」

ヴィヴィオ「うん、ノーヴェからのメールでね、この辺の歴史について一緒に

勉強したいって」

そこでヴィヴィオが笑顔になって言った。

ヴィヴィオ「あ、それから今日の放課後ね！ノーヴェが新しく格闘技やってる子と
知り合ったから一緒に練習してみないかって」

イクス「本当？楽しみだな～」

「覇王」と「聖王」と「冥王」。時代を超えた出会いはどうなるのか…

次回へ続く～

おまけ1。

～地上本部、局長執務室、正午前～

「カリム？いきなりどうしたんだ？」

なんの連絡もなしに突然やってきたカリム。

カ「ウィルさん、カナリアちゃんにいけないことを教えていましたね？」

「い、いけないことだって？なんのことやら…」

とぼけると、カリムはテープレコーダーを取り出して再生ボタンを押した。

カナ『犯罪者に手加減などいらんだろう。それに化物共と異教徒共、それに
　犯罪者共は殺しても構わない。私は父上からそう教わったぞ』

「あー、これか、でもこれくらい別にいいj」

カ「ほんとなら昨日言おうと思ってたんですけどお疲れのご様子でしたから
今日にしたんですよ。私っていい妻でしょう？」

「そ、そうだな。さすが俺の奥さんだ」

カ「ふふふ、それほどでも」

カリムは笑っているけど目が笑っていない。

「じゃあ、この話のことも多めに見てくれるよな」

カ「そうすると思いますか？」

「残念ながらそうは見えないな」

そこになのはとはやてが。

な「ウィル君！昨日アインハルトって子に銃を撃ったんだって！？」

「げっ！なんでなのはがそれ知ってんだ！？」

は「スバルとティアナからメールが来たんや！しかも脅したそうやないか！」

「あれは仕方なk」

な「仕方なく銃を向けて子供を脅す人はこの世にいないの！」

「ここにいる！」

な「ウィル君、いくらなんでもやり過ぎだと思うの…」

は「アイン！ツヴァイ！ダブルユニゾンや！」

２人はデバイスを構え、カリムはどこからともなく釘バットを取り出した。

「あ、あはは～、助けて、ドゥーエさん。俺死んじゃう」

最後の切札の秘書を呼ぶが。

ドゥーエ「ちょっとお手洗いに行ってきますね。１５分は戻らないので」

「のおおおおおお！！！」

最後の切札（ジョーカー）は敵の手に渡ってしまった。

カ「さてウィルさん…」

な、は、カ「楽しい楽しいＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩの時間ですよ（なの）（やで）」

「なあああああああああああ！！！」

その日、地上本部で大きな爆発騒ぎがあり、局長執務室がボロボロになった。
部屋の中にいた局長もまた、ぼろ布のような姿になっていた。

おまけ2。

～地上本部、技術開発本部～

仕事中にすずかがみんなに聞き始めた。

すずか「ジェイルさん！トーストに何付けて食べますか？」

ジェ「トーストに？私はジャムかな」

ウーノ「私もですね」

すずか「ううん、やっぱり…あ、プレシアさんは？」

プレ「何も付けないのが一番よ」

アリ「フェイトはチーズとか意味わかんないこと言ってたけど、私はバター！」

すずか「そっか…あ、あのさ、蜂蜜付けて食べる人って、どう思う？」

するとみんな笑いながら答えた。

ジェ「それはかなりおかしいね」

ウーノ「さすがにそれはないですね」

プレ「ホットケーキと間違えているんじゃない？」

アリ「同感！」

すずか「うぅ…」

すずかの理解者は職場にもいなかったのであった。

第１１０話：覇王の正体（後書き）

かぜを引いてしまいました。おかげでのどが痛いです。
でも医者に行くのが億劫なので、のど飴と気合による
自然治療法で治します。

次回は王達の宴、じゃなくて会合、でもなくて出会い＋戦闘、かな？
では

第１１１話：出会い（前書き）

あの人が登場？

昨日でユニークが１００，０００を超えました！

ありがとうございます！

第１１１話：出会い

～地上本部、局長執務室～

なのは達のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩによってボロボロになった執務室。そこに
秘書のドゥーエとトーレ達が入ってきた。

クア「ウィル様～げっ！」

ドゥーエ「あらまあ、なのはさん達ったら派手にやったわねぇ」

トーレ「な、何があったんだ？」

ドゥーエ「あーあ、そこらじゅう埃だらけじゃないのー」

セッテ「瓦礫だらけの間違いじゃないの？」

その時、瓦礫の下から俺はなんとか這い出すことに成功した。

「お、俺のことも少しは心配してくれ…」

ドゥーエ「あ、ウィルさん生きてたんですね」

クア「あらまあウィル様～、手当しますわ～」

セッテ「それで、この惨状は一体…」

「なのは、お話、以上」

俺は喋るのもめんどくさくなり、単語だけで答えた。

トーレ「なるほど、理解した」

セッテ「どんまい」

「やれやれ死にかけたよ。それで何の用だい？」

トーレたちに聞いてみると、真面目な声で答えた。

クア「また例のものを発見したんですよ～」

トーレ「しかも今度のは博物館で飾られていたぞ」

「おいおいなんであんなもん飾ってんだよ…」

セッテ「地面掘ってたら出てきたらしくてね、そのまま古代の遺物と勘違いされてたよ」

ドゥーエ「古代の遺物、ってのは間違ってませんけど」

トーレ「結局、博物館のオーナーの言い値で買い取った。これ領収書ね」

そういって差し出された紙にはゼロが1、2、3、4、5、6…

ドゥーエ「な、7，５００万ミッドですって!?」

俺の後ろからこっそり見たドゥーエはひっくり返りそうになった。

「安いな、よくやったみんな。もう保管庫にあるのか？」

クア「すでに搬入済みです～」

「よかよか♪」

セッテ「安いって…どこが？」

ドゥーエ「…さあ？」

～同時刻、地下トンネル第１検問所～

ここには警備員が５名、完全武装で警備をしていた。さきほど例の物を載せた
トラックが通過したので、パネルを操作してかなり分厚い量子クリスタル装甲の
ゲートを閉じた。このような検問所が１０ヶ所あるので、並大抵のことがない限り
安全なのである。で、警備員５人は交代が来るまでしばし雑談をすることに。

警備Ａ「よし、今日はもう入ってくる予定はなしだな」

警備Ｂ「そうですね。しかし今日も平和ですね」

警備Ｃ「なんだ、平和だとつまらないみたいな口ぶりだな」

警備Ｂ「いえ、そういうわけでは…」

警備Ｄ「平和が一番いいんだよ」

警備Ｅ「ま、こんな要塞じみたところに侵入しようとするアホはいないと思うがな！」

警備ＡＢＣＤＥ「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

と、その時。

警備Ａ「ん？誰か来るぞ？」

地上本部の方から誰かが歩いて来るのが見えた。

警備Ｄ「交代要員、じゃないわな」

普通なら交代要員は保管庫側から来るのである。つまり。

警備Ｅ「侵入者ですかね？」

警備Ａ「わからん。警備本部、こちら第１検問所。コード４。繰り返す、コード４」

胸についている通信装置に向かって報告する。魔法による通信はできないので、

地球の軍隊で使われている物を使用している。音声は自動的にデジタルで
暗号化され、周波数を高速で変換させる、傍受の可能性の極めて低いレーダーパルスを使っている。これの特徴は、普通の無線と異なり、信号が届きづらい林の中や潅木の茂みでも感度が良好である。そして、
ビル群や窓、廊下、トンネルなどで信号が跳ね返りながらうまく伝達されるのだ。

『こちら警備本部、了解した。全部署に告げる、コード４』

この「コード」というのは、警戒態勢とその意味を表している。
コード４は「未確認の侵入者を確認」、３は「敵性侵入者と交戦中」、
２は「敵性侵入者の殲滅に成功」、そして１は「最下層保管庫の危険物を保有している敵を確認、交戦中」である。

実はこの施設が運用を開始した日に、警備員全員が集められて局長がちょいとばかし演説をぶった。その中で。

『いいか、みんな。もし侵入者がこんな感じに数字が振ってある武器を持っていたら、そいつらはフッケバイン一家の一員だと思え。
すなわち射殺しろ、容赦なくだ。いいか？』

背後のモニターに画像を出して警備員に見せながら説明する。

警備員『サー、イエッサー！』

『こいつらはなかなか死なないらしいからとにかく撃ちまくれよ？
管理局の精鋭たる君達ならきっとこいつらを倒せるだろう。
こんな今時流行らないガンゾードぶら下げているアホなんか
みんなぶっ殺しちまえ！』

警備員『おおおおおお！！！』

ということがあった。

警備Ｂ「そこの男！ってでかっ！う、動くな！両手を肘の上におけ！」

メガホンで侵入者に話しかける。

警備Ｅ「おい、それを言うなら頭の上じゃないか？」

警備Ｃ「どうやっても肘の上には両手は置けんぞ」

警備Ｂ「あ、そうか。こほん、頭の上に両手を置いて跪け！それ以上こっちに
来るんじゃない！」

警備Ａ「ここは管理局の管轄エリアだ！それ以上こっちに来た場合、射殺する！」

だが、大男はそのまま歩いて来る。

警備Ｄ「ったく、どこの酔っぱらいだろうな？」

警備Ｃ「おいおい、ちょっとまて…」

隣でアサルトライフルのスコープを覗いていた警備Ｃが声を上げる。

警備Ａ「どうしたＣ？」

警備Ｃ「あいつの右手！」

警備Ｅ「右手？」

全員でスコープを覗いてみると。

警備Ａ「あああああ！！！」

警備Ｅ「まじかよ！？」

その男はナンバリングが施されている斧を持っていた。

警備Ａ「こ、こちら第１検問所！コード１だ！繰り返す！コード１！」

『なんだと！？それ本当か！？』

警備Ａ「マジだって！交戦する！よし、撃て撃て！！」

そう言って５人の警備員は標準装備のアサルトライフル、Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ社のＨＫ４１６を
構えて侵入者目がけて撃ち始めた。この銃は、通常の５．５６ｍｍ

ＮＡＴＯ弾や
７．６２ｍｍ　ＮＡＴＯ弾仕様ではなく、新弾薬の６．８ｍｍ×４３ＳＰＣ弾のモデルで、
Ｍ２０３グレネードランチャーに替わるＭ３２０グレネードランチャーを
装備している。

Ｓｉｄｅ　？？？

くそ、まずいな…そろそろ限界だ。管理局の連中のせいで最近殺しも出来やしない。このままだと…

だが今日、ここにディバイダーとリアクターが搬入されたことを突き止めた。
あれを奪って、ここにいる奴を全員ぶっ殺せばだいぶましになるだろう。

警備員らしき奴らが警告をしてきたが、そんなもの関係ない。
俺はディバイダー６９５を持ち上げ、敵に向かって突撃した。
リアクトする必要もないだろう。敵は普通の銃を持っているだけだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

警備Ｄ「おい！当たらないぞ！」

警備Ｅ「まるで瞬間移動しているみたいだ！」

敵は確実にこっちに向かってくるのだが、警備員５人は一発も銃弾を当てることができなかった。

警備Ａ「くそ！とにかく弾幕を張れ！ここで俺達が死んでもこのゲートは
　破れないだろう。Ｂ、手榴弾を使え！」

警備Ｂ「わかっｔ」

だがその時敵の大男がＢの背後から斧を振りかぶっているのが見えた。

警備Ａ「Ｂ！後ろ！！」

「遅い！」

だがそんな警告も遅く、敵はＢの頭を

???「Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ．Ｓｈｉｅｌｄ　ａｃｔｉｖａｔｅ」

落とせなかった。Ｂの装備していたティン・マン装甲服の自動防衛システムが
反応してシールドを張り、Ｂの命を守ったのだ。

「何だと！？」

敵はとても驚いている。

警備Ｂ「着ていてよかった装甲服。って俺に構うな！撃て撃て！」

警備Ｃ「くらえ！」

近くにいたＣが銃を構える。他のメンバーと違い、彼だけがグレネードランチャーの
代わりにＭ２６　ＭＡＳＳを装備していた。その引き金を引き、散弾を敵に浴びせた。

「くっ…」

しかし散弾を背中に食らった敵はひるむどころかさらに斧を振り回して

大暴れし始めた。

警備E「なんだよこいつ！薬でもやってんのか！？」

警備A「ていうかおい！背中の傷が回復してるぞ！」

警備B「化け物め…」

その間にも大男は斧をふりまわし、全員のアサルトライフルが破壊されてしまった。
残っている武器はハンドガンと手榴弾だけである。

その時、地上本部の方から増援部隊がやってくるのが見えた。その中に
ウィルもいる。

警備D「あ！局長だ！」

「なに？」

局長という言葉に反応した敵。その一瞬を見逃さなかったAは、
ポーチから吸着爆弾を2個取り出して、ピンを抜いて投げつけた。
それらは見事に敵の背中に張り付いた。

「しまった！」

剥がそうと手を伸ばしたときに爆発し、煙が晴れると何も残っていなかった。

警備A「…こんどこそ死んだかな？」

警備Ｂ「…どうだろうな」

「おい、敵はどこだ！」

警備Ａ「局長！今敵に吸着爆弾投げつけたんですが、居なくなりまして…」

「あいつは短距離瞬間移動（ショートジャンプ）ができるクソッタレだ。まだ生きているかも知れん。
引き続き警戒態勢の維持、それと奴を見つけてぶち殺せ」

その通り、彼はまだ生きていた。ただし、ディバイダーの斧の刃はぼろぼろになり、これでは誰も殺せないだろう。爆発した瞬間に、近くの排気口内部へと瞬間移動し、そのまま地上まで移動を続けた。

「なんてやつらだ…管理局を甘く見ていたな。このことを他の連中に知らせなければ…」

ようやく光が見え、蓋を開けて出た先はなんとフェンスの中の地雷原のど真ん中だった。そのことに気がついていない彼はそのまま歩こうとした。

しかし、何かの気配を察して動きを止める。ディバイダーを構えてその気配の方へ体を向けると、そこには大きな砲塔があり、こちらを狙っていた。

「くそっ！」

あわてて瞬間移動で逃げようとしたが、光の速度より早い緑色のタービ
レーザーの光線が彼の体を包みこみ、この世から消滅させた。
幸い、ターボレーザーは海の方へ放たれたので、周辺への被害はゼロだった。

ここにフッケバイン一家の一員である、ドゥビルは死亡し、ディバイダーも
消滅した。その日の夕刊の片隅にそのことに関する記事が載せられた。

「ざまあみろ。いくら高速再生能力があっても一瞬で蒸発しちまえば死んじまうからな。残りは6人っと。早くこいつら全員ぶっ殺して世の中平和になってほしいね、いやまじで」

あっという間に修理した局長執務室の机で、俺は指名手配書に書いてある
フッケバイン一家の名前と写真一覧からドゥビルの名前と写真に大きな
赤いばってんを付けた。

「さて、これで残りの連中はどう動くかな？えっひぇっひぇっひぇ…」

ドゥーエ「ウィルさん、その笑顔と笑い方やめてください。怖いで

す」

～街中の喫茶店～

地上本部近辺で戦闘があったことなど全然知らないノーヴェ達がそこにいた。

ノーヴェ「ふたりともせっかくの休暇だろ？別にこっちに付き合わなくてもいーのに」

ス「あははー」

テ「アインハルトの事も気になるしね」

ス「そうそう」

ノーヴェ「まーそれはありがたくもあるけど、問題はさ…」

そこでノーヴェは立ち上がり振り向きざまに怒鳴った。

ノーヴェ「なんでお前らまで揃ってんのかってことだ！チンク姉だ

けだぞ呼んだの！」

後ろのテーブルにはチンク、ディエチ、ウェンディ、オットー、ディードの5人がいた。

ウェンディ「え～別にいいじゃないッスか～」

サンドイッチを食いながらウェンディが言う。隣にいるディエチもまた、

ディエチ「時代を超えた聖王と冥王と覇王の出逢いなんてロマンチックだよ」

教会組の2人も。

ディード「陛下のみに危険が及ぶことがあったら困りますし」

オットー「護衛としては当然」

チンク「すまんなノーヴェ。姉も一応止めたのだが」

一番年長のチンクがノーヴェに謝る。

ノーヴェ「うう。まー見学自体は構わねーけど余計なチャチャは入れんなよ？

ヴィヴィオもイクスもアインハルトもお前らと違って色々繊細

なんだからよ」

「「「「はーい！」」」」

チンク以外の４人が元気に返事をした。すると向こうからヴィヴィオ達５人がやってきた。

ヴィヴィオ「ノーヴェ！みんなー！あれれ？スバルママとティアナママまで！」

イクス「お母様～！」

カナ「母上、今日は休みだったのか」

リオ「こんにちはー！」

ノーヴェ「あーやかましくて悪いな」

ヴィヴィオ「ううんぜんぜん！それで紹介してくれる子って？」

イクス「早く会いたいよ！」

カナ「なるほど、父上が言っていた面白いこととはこのことだったのか」

ノーヴェ「さっき連絡あったからもうすぐ来るよ」

隣でオットーがヴィヴィオのために椅子を引いている。ディードはイクスの椅子を。２人ともほんと執事みたい。

ヴィヴィオ「ありがとオットー？それで何歳くらいの子？流派は？」

ノーヴェ「お前の学校の中等科の１年生。流派は…旧ベルカ式の古

流武術だな」

ヴィヴィオ「へー」

イクス「旧ベルカ式ねぇ」

ノーヴェ「あとアレだ、お前と同じ虹彩異色」

ヴィヴィオ「ほんとー！？」

オッドアイは珍しいのでヴィヴィオは喜んでいる。

テ「まあヴィヴィオ座ったら？」

ス「そうそう」

ヴィヴィオ「あ…そうだね」

そこに。

「失礼します。ノーヴェさん、皆さん」

そこにさっそうと姿を現したのはツインテールの美少女、アインハルトだった。

「アインハルト・ストラトス。参りました」

ヴィヴィオ「……」

「すいません遅くなりました」

ノーヴェ「いやいや遅かねーよ。でなアインハルト、こいつらが例の」

ヴィヴィオ「えと、はじめまして！ミッド式のストライクアーツをやってます
ヴィヴィオ・ロンバートです！」

イクス「その妹のイクスヴェリア・ロンバートです！」

（この子が…）

アインハルトは心のなかで2人を観察しながら2人と握手をする。

「ベルカ古流武術、アインハルト・ストラトスです」

（小さな手…脆そうな体。だけどこの紅（ロート）と、翠（グリューン）の鮮やかな瞳は
覇王（わたし）の記憶に焼き付いた間違うはずもない聖王女の証（しるし）。
そして冥王…って昔どんな姿だったっけ？覚えていないや）

ヴィヴィオ「アインハルトさん？」

「ああ、失礼しました」

ヴィヴィオ「あ、いえ！」

ノーヴェ「まあふたりとも格闘技者同士ごちゃごちゃ話すより手合わせでもしたほうが

早いだろ。場所は押さえてあるから早速行こうぜ」

続く…

第１１１話：出会い（後書き）

はい１名様、ご退場で～す。ざまあｗｗｗ
今のうちにとっとと戦力を削っておかないとね～。
てかあんな上半身裸のムキムキ大男が好きな人なんて
どこにもいないよな、うん。まあ「ホ」から始まって
「モ」で終わる人は好きかもしれないけどね。

あと前回なんでアインハルトをスバルの家ではなくナカジマ家に
持っていったのかというと、単にロッカーから近かったからです。

次回は今度こそ戦いだよ。
では

第１１２話：初戦闘（前書き）

ヴィヴィオ「がんばるよー！」

イクス「お姉様、ファイトー！」

カナ「殺すなよー」

アインハルト「殺す！？」

ス「なんでそんな物騒な発言なの！？」

カナ「つい、な」

第１１２話：初戦闘

～区民センター、スポーツコート～

ヴィヴィオ「じゃああのアインハルトさん！よろしくお願いします！」

「はい」

そう答えながら、アインハルトはノーヴェとの会話を思い出していた。

『諸王戦乱の時代、武技のおいて最強を誇った１人の王女がいた。名を
オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。後の「最後のゆりかごの聖王」。
かつて「覇王イングヴァルト」は彼女に勝利することができなかった』

ノーヴェ『それで時代を超えて再戦…か？』

『覇王後は歴史の中で薄れていますが、時折その血が色濃く蘇ることがあります。
碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色。覇王の身体体質と覇王流（カイザーアーツ）。それらと
一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいます。私の記憶にいる「彼」の
悲願なんです。天地に覇をもって和を成せる。そんな「王」であ

ること』

そこまでいうと彼女は目に涙を浮かべた。

『弱かったせいで、強くなかったせいで、彼は彼女を救えなかった…守れなかったから。

そんな数百年分の後悔が…私の中にあるんです』

溢れる涙を拭こうともしないでアインハルトは続ける。

『だけどこの世界にはぶつける相手がもういない。救うべき相手も守るべき国も

世界も…』

そして両手で顔を隠して静かに泣いた。それを見てノーヴェは。

ノーヴェ『いるよ。お前の拳を受け止めてくれる奴がちゃんといる』

そして今アインハルトはヴィヴィオの前にいる。

（本当に？この子が覇王の拳を、覇王の悲願を受け止めてくれる？）

ノーヴェ「んじゃスパリーング4分1ラウンド。射砲撃と拘束（バインド）なしの格闘オンリーな。

レディー、ゴー！」

始まった途端にヴィヴィオが突っ込んでいった。アインハルトはきっちりガードする。

その後もアインハルトは防御に徹した。

テ「ヴぃ、ヴィヴィオって変身前でも結構強い？」

ス「練習頑張ってるからねぇー」

そんな中、アインハルトはヴィヴィオの攻撃を避けつつ冷静に考えていた。

（まっすぐな技、きっとまっすぐな心。だけどこの子は。だからこの子は
私が戦うべき「王」ではないし）

そこでアインハルトはヴィヴィオの懐に入り込んで平手で胸を突いた。

ヴィヴィオはかなり後ろまで吹っ飛んで、オットーとディードが受け止めた。

（私とは違う）

その反面、ヴィヴィオはというと。

（す…すごい！！）

何故か嬉しそうだった。しかしそんなヴィヴィオにアインハルトは背を向ける。

「お手合わせありがとうございました」

おまけになんか声も残念そうな、がっかりそうな声であった。

ヴィヴィオ「あの、あの！すみません私何か失礼を…？」

「いいえ」

ヴィヴィオ「じゃ、じゃああの、私弱すぎました？」

「いえ、趣味と遊びの範囲内でしたら充分すぎるほどに。申し訳ありません、
私の身勝手です」

ヴィヴィオ「あの、すいません！今のスパーが不真面目に感じたのなら謝ります！
今度はもっと真剣にやります！だからもう一度やらせてもらえませんか？
今日じゃなくてもいいです！明日でも…来週でも！」

そんな熱心なヴィヴィオの声を聞いて、アインハルトはちらっとノーヴェを見る。

ノーヴェ「あーそんじゃまあ来週またやっか？今度はスパーじゃなくて
ちゃんとした練習試合でさ」

ウェンディ「ああそりゃいいッスねぇ」

ディエチ「ふたりの試合楽しみだ」

リオ「はい！」

「…わかりました。時間と場所はお任せします」

ヴィヴィオ「ありがとうございます！！」

ノーヴェ（悪いヴィヴィオ、気い悪くしないでやってくれ）

着替えて外に出るとノーヴェがこっそりヴィヴィオに謝ってきた。

ヴィヴィオ（全然！私のほうが「ごめんなさい」だから！）

だがその時。

ス「ティア！ノーヴェ！」

突然スバルが大声を上げた。みんなが前を見ると、トラックが突っ込んでくるのが
見えた。普通は車道を走っているはずのトラック。しかし今は道路から大きく
はずれてノーヴェたちの方へと向かっている。

テ「ノーヴェ！アインハルトを！」

ノーヴェ「がってん！！」

救助隊経験のあるノーヴェは近くで固まっているアインハルトを抱えて
トラックから逃げようとしたが、そこで昨日の戦いの痛みのせいで転んで

しまった。

ノーヴェ「くそ、しまった！！」

「きゃあああ！！」

ス「ノーヴェ！」

イクス「ノーヴェさん！！」

ヴィヴィオ「アインハルトさん！！」

カナ「こうなったらトラックを潰すしか！あ、でも中にはまだ人が…」

もう間に合わない。誰もがそう思ったときに、なんか気の抜けたような
きゅぽんっという音がした。なにかと思った次の瞬間、トラックの車体の下で
爆発が起きた。そのせいでトラックは宙に浮かび、ノーヴェやアインハルト、
ヴィヴィオ達の上を飛んで、区民センターの外壁に激突した。

ス「…へ？」

「な、何が…」

助かったはいいが、なんでこうなったのかがさっぱりなみんな。そこに。

「お～い！みんな大丈夫か！？」

ヴィヴィオ「パパ！」

助けたのはやっぱりウィルだった。

チンク「ウィルじゃないか、なんでここに？」

「いやな、仕事終わったからお前らの様子を見に来たんだが、そしたら暴走トラックが
　見えたもんで、止めようと思ってついこれで撃っちまった」

そういってH&K社のHK416Cに装備してあるM320グレネードランチャーから
空の40mm擲弾を地面に落とした。

ノーヴェ「おいウィル！街中でそんな物騒なもんを撃つなよ！ここは戦場じゃ
　ないんだぞ！昨日も拳銃撃ってたし！」

「まーいいじゃないか。トラックの運転手も生きてるみたいだし、ほら」

外壁に激突して鉄くずになったトラックの運転手はなんとか自力で脱出できたようだ。見た感じかなり酔っ払っている。

ノーヴェ「そーいう問題じゃなーい！」

ス「落ち着いてノーヴェ、どうどう」

そこで俺は地面に座り込んだままこっちを見て震えている少女を発見した。

「あれ、確か昨日の…アインハルトちゃんだったかな。こんばんはー」

「ひい！」

だが近づくとゴキブリのごとく、すばやくノーヴェの後ろに隠れてしまった。

「あーごめんな昨日は。つい顔面に撃っちゃってさ、許して？」

イクス「顔面に！？」

ヴィヴィオ「撃った！？」

「あ、いえ、よく考えればこっちにも非があったわけですし、大丈夫です、はい」

「そっか、ならよかった。知っているかも知れんが一応自己紹介しとく。

俺はウィリアム・T・ロンバート。そこにいるヴィヴィオ達の父親で

スバルとティアナの夫だ。よろしくな」

「あ、アインハルト・ストラトスです。その、よろしくお願いします」

そしてしっかりと握手した。
だが、俺の後ろでヴィヴィオとイクスが仁王立ちしていた。

ヴィヴィオ「パパ、撃ったってどういうこと？」

イクス「そんな事聞いてないよ！」

「え？ああ、昨日ちょっと彼女が俺とノーヴェに向かってきたからつい」

ウェンディ「ウィルさん、さすがに『つい』で撃つのはよくないかと思うッス」

チンク「ほう、ウェンディがまともな事をいったな」

ディエチ「明日は核が降るね」

ヴィヴィオ「むー！パパ！しばらく撃っちゃだめだよ！」

イクス「1週間禁止！わかった？」

「…はい」

コロナ「1週間でいいの！？」

リオ「どんだけなんだ…」

ヴィヴィオ「てことで今持っている武器をカナリアに預けて！」

カナ「ほら父上」

「可愛い娘達の頼みとあっちゃあ仕方ないな。ほれ」

まず手に持っていたH&K　HK416Cを渡して、次に懐からH&K　HK45を出す。
ヒップホルスターに突っ込んであるGLOCK　30も渡し、車のダッシュボードに
入れておいた予備弾倉や手榴弾、M84スタングレネードも出して、その他
トランクに収納してある大量の武器と弾薬を引っ張り出そうとしたところで
全員に止められた。

ノーヴェ「ストーップ！もういい！家に帰ってからやってくれ！」

「いいのか？まだトランクにショットガンと大口径対物ライフルが入ってるんだが…」

ディエチ「まるで歩く武器庫みたい」

チンク「それが走る弾薬庫に乗っているんだからな」

ディード「最悪の組み合わせですわね…」

オットー「これならいつでもどこでも戦争ができるな」

ス「しなくていいから、うん」

その後、スバルは、ノーヴェ、ティアナ、アインハルトと一緒に自分の家で
夕食を食べると言い、チンク達はナカジマ家に戻り、俺と子供達は家に帰った。

屋敷についてまず俺がやったことは、武器を全部地下の武器庫に収めることだった。

ヴィヴィオは部屋に戻ってからベッドでゴロゴロしながら今日のことを考えていた。

（あの人からしたら私はレベル低いのに不真面目でがっかりさせちゃったんだ…
私が弱すぎて。でも私だってストライクアーツは「趣味と遊び」だけじゃないけど）

な「ばんごはんだよ、ヴィヴィオ」

みんな「いただきまーす！」

な「あれ、ヴィヴィオ、なんか元気ないね？どうかした？」

アリサ「箸も進んでないわね」

すずか「ほんとだ」

シグ「調子でも悪いのか？」

ヴィヴィオ「え、そそそんなことないよ！元気元気！ねークリス！」

と、ヴィヴィオは元気な風に装った。

な「そお？」

ヴィヴィオ「うん！」

カナ「…へっ」

は「な、なんやカナリア。その変な笑いは？」

そんなヴィヴィオを見てカナリアがこっそり笑っているのをはやてが指摘する。

カナ「なんでもないぞ、母上。気のせいだ」

は「そ、そうかな？」

ヴィヴィオ「えと、実はね…新しく知り合った人と来週練習試合をするんだ。

そのこと考えててちょっとね」

な「じゃあしっかり食べて練習してうんとがんばらないとね」

ヴィヴィオ「うん！」

（そうだよ、落ち込んでちゃダメ。あの人の、アインハルトさんが求めているものは
　わからないけど、精一杯伝えてみよう。ヴィヴィオ・ロンバートの本気の気持ちを！）

ヴィヴィオは気持ちを新たにして今度の試合に向けて気合を入れた。

イクス「私も戦いたいのに～」

カナ「試合ね、いいんじゃないか？ただし、相手を殺しちゃだめだぞ？」

イクス「そんなことしないもん！」

カナ「月に大穴開けたのはどこの誰だったかな？」

イクス「ぐぬぬ」

「そういやザフィーラは？」

俺はいつもその辺でご飯をたべているザフィーラがいないことに気がついた。

ヴィ「忘れたのかよ、ウィル。今日は道場の日だぞ」

「あー、そうだったな」

ザフィーラは近所の子供相手に道場を開いている。場所はこの家の前の通りを挟んだ反対側にある。

アギト「頑張ってるよなー、みんな」

ツ「そうです！子供達も日々強くなっていますし」

ア「ザフィーラも楽しそうだしな。いいことだ」

「今日はありがとうございました」

ご飯を食べ終わったアインハルトはスバルの家の外で礼儀正しく礼をする。

ノーヴェ「また明日連絡すっから」

ス「なにか困ったことがあったらいつでもあたしたちにね？」

テ「じゃあ車で送って行くから」

ノーヴェ「うん」

ティアナの車に乗ってアインハルトは自宅へと向かった。

ス「ねーノーヴェ、アインハルトのことも心配だけどさ。ヴィヴィオ、今日の事
　ショック受けたりしていないかな？」

ノーヴェ「そりゃまあ多少はしてんだろうけど。さっきメールが来てたよ。
　あたしの修行仲間はやっぱりそんなにヤワじゃねー。今から
　来週目指して特訓してるってよ」

ヴィヴィオの思いは覇王に届くのか…

次回に続く

おまけ。

～とある世界、とある場所にて～

そこには6人の人間がいた。皆うつむいている。1人の女性が話し始めた。

「聞いたとは思いますが、ドゥビルが死亡しました。彼の持っていたディバイダーも
完全に破壊されたそうです」

「くそったれ！管理局の連中め！」

「あいつがやられるとはな…」

そこに。

「ねえ、今ニュースで…」

「ニュース?こっちにまわしてくれ」

キャスター
『えー、本日午後、時空管理局地上本部の施設内に不法侵入者が現れました。
警告を無視したため、地上本部の部隊が攻撃を仕掛け、１０分後に侵入者の
死亡が確認されました。局長のロンバート元帥は報道陣の質問に次のように
答えました』

記者A『侵入者は何をしてたんですか?』

『この前新しくできた古代遺物保管庫へ侵入しようとしていた。こちらの
警告を完全に無視したため、やむなく殺害した』

記者B『それでその侵入者がフッケバイン一家の一員というのは本当ですか?』

『監視カメラの映像を公開しただろう?あれに映っていたのは間違いなく
奴らの一員だ。その証拠にダサい武器担いでたしな』

記者C『だ、ダサい武器、といいますとあの斧ですか?』

『そうだよ、あんなクソダサい武器よく使えるよな?頭がおかしいに違いない。

あんな武器を平気で使う人間は一度医者に脳みそを見てもらったほうがいい』

記者A『そ、そんなに言いますか…』

『もちろんだ。あと残りの6人のメンバーも見つけたらどしどし通報して
くださいねー。それともう1つ。数字が書いてあるガンソードみたいなのを
持っている人がいたらそいつがフッケバイン一家のメンバーだと思って
ください。今時そんな流行らない武器を使っている頭ん中がお花畑の人は
フッケバインの人たちだけですから、はい』

記者B『あと元帥、1つ確認が。彼の容疑は?』

『容疑?えと公務執行妨害に質量兵器取締法違反、管理局法違反、
不法侵入罪、あと公然わいせつ罪だな』

記者B『こ、公然わいせつ罪!?』

『だって上半身裸の大男が襲ってきたんだぜ?みんな気持ち悪くなるだろ?』

記者A『い、いわれてみれば確かに…』

『ここまでの事をまとめると、フッケバイン一家という連中はだな、
全員ダサくて流行らない武器を好んで使う、頭の中がお花畑な、
半分露出狂の集まりってことだ。皆さんも気をつけてくださいね』

記者Ａ『半分露出狂ｗｗｗ』

記者Ｃ『カオスすぎワロタｗｗｗ』

キャスター

『ぷっ！くくくっ、あ、失礼しました。以上でニュースを終わります』

「……」

「なあ、おい」

「言うな。私たちはあいつらに…管理局の連中に完全に舐められている」

「あーもう！あの局長とやらをぶっ殺しに行こうぜ！」

「そうしたいが、簡単にはいかんぞ」

「ここは耐えるしかないでしょう。今は地下に潜って情報を集めなければ」

「それしかできないのかよ！？」

「管理局はあのロンバートという男が局長になってから急速に強くなっています。

質量兵器に関する法律も改正され、奴らも平気で銃を撃ってきま

すし。
それに辺境の管理外世界から無人世界の全てをリアルタイムで監視しています。
だから我々もうかつには動けないのが現状です」
「だが俺達には問題があるだろう。極めて重要な…」
「分かっています。そのことも考えなければ…」
「ううううう、腹が立って仕方ない！ストレス貯まるなあ、もう！！」
「お願いですからここで撃たないでくださいね」
「うぐっ」

第１１２話：初戦闘（後書き）

はあ、疲れた。なんか人生に疲れた。

次回は、再戦に向けて、かな。

では

第１１３話：再戦に向けて

～むか～しむかし、あるところにて～

そこは戦場だった。周囲は瓦礫の山と炎に囲まれている。そこに２人の
尋源が対峙していた。１人は女性で、もう１人は男性だった。ただ、男性は左腕を負傷しているのか、右手でかばっている。

「クラウス、今まで本当にありがとう。だけど私は行きます」

女性が男性に話しかける。クラウスと呼ばれた男性は納得がいかない様子だ。

「待ってください、オリヴィエ！勝負はまだ…！」

「あなたはどうか良き王として国民と共に生きてください。この大地が
もう戦で枯れぬよう…」

そして笑いながらオリヴィエと呼ばれた女性は続ける。

「青空と綺麗な花をいつでも見られるような、そんな国を…」

そして女性は男性に背を向けて歩き出した。

「待ってください！まだです！ゆりかごには僕が！」

だが女性は右腕を上げて去っていった。

「オリヴィエ！！僕は！」

～現代～

「はっ！！」

そこでアインハルト・ストラトスは夢から覚めた。目には涙の跡が残っている。
ベッドから起きて鏡に向かって歩く。彼女の部屋にはトレーニング用のグッズが
大量に置いてある。こんな子供がよく買えたな、おい。

（いつもの夢…一番悲しい覇王（わたし）の記憶…）

そして悲しそうな表情を浮かべたまま、鏡に拳を当てる。

～午前6時8分、区民公園～

公園内の池沿いにあるランニングコースを2人がジョギングをしている。

ノーヴェとヴィヴィオだった。ヴィヴィオの後ろをうさぎ姿のセイクリッド・ハートが、ぷかぷか浮かんでいる。

ノーヴェ「アインハルトのことちゃんと説明しなくて悪かった」

走りながらノーヴェは昨日のことを謝る。

ヴィヴィオ「ううん、ノーヴェにも何か考えがあったんでしょ？」

だがヴィヴィオは気にしていない様子。

しばらく走ってから休憩を取ることに。池を見ながらノーヴェが話しだす。

ノーヴェ「あいつさ、お前やイクスと同じなんだよ。旧ベルカ王家の王族、

『覇王』イングヴァルトの純血統」

ヴィヴィオ「…そうなんだ」

ノーヴェ「あいつも色々迷ってんだ。自分の血統とか、王としての

記憶とか。
でもな、救ってやってくれとかそーゆーんでもねーんだよ。
まして聖王と覇王がどうこうとかじゃなくて」

ヴィヴィオ「わかるよ、大丈夫」

ヴィヴィオは笑みを浮かべたまま話し続ける。

ヴィヴィオ「でも自分の生まれとか、何百年も前の過去のこととか、どんな
気持ちで過ごしてきたのかとか、伝えあうのって難しいから
思い切りぶつかってみるだけ。仲良くなれたら教会の庭にも
案内したいし」

ノーヴェ「ああ、あそこか…いいかもな。悪いな、お前には迷惑かけて
ばっかりで」

ヴィヴィオ「迷惑なんかじゃないよ！友達として信頼してくれるのも、
指導者（コーチ）として教え子（わたし）に期待してくれるのも、どっちもすごく嬉しいもん！だから頑張る！」

一週間後の再戦に向けて、ヴィヴィオは一生懸命練習に励んだ。

～同時刻、屋敷～

イクス「ちょっと！なんで今日起こしてくれなかったの！？」

カナ「起こしたぞ、その後着替えながら寝ていたがな」

イクス「もーお姉様ー！昨日お願いしたじゃん！」

カナ「『必ず起こしてね』だろ？きちんと起こしたじゃないか、1回」

イクス「うがあああああ！！！」

は「朝からうるさいで！」

～とある世界、とある場所にて～

ここにいる6人も、いつの日か必然的に起こるであろう管理局との再戦に向けて
作戦会議を行っていた。

「ここはどうだ？手薄じゃないか？」

「いや、そこにはほら、小さな鉱山があるだろう？ここの警備という名目で
部隊が配置されている」

「ではここはどうでしょう？」

「今いる場所から近いな…あ、でもここに次元通信の支援施設がある。おそらく
ここにも部隊がいるな」

「…じゃあどうするんだ？」

「少なくとも次元転移自体はばれませんからね。この『飛行艇フッケバイン』がある限り」

フッケバインの連中が使っている「飛空挺フッケバイン」。フッケバイン一家の
一員であるステラ・アーバインが操舵手を務める、飛翔戦艇（エスクアッド）と
呼ばれる高速戦闘艦。ステラのディバイダーに相当する艦船型巨大EC兵器で、
リアクトして彼女と艦の機能中枢が「エンゲージワイヤー」で繋がる事により、
限界まで機能を引き出せるようになる。現在の技術レベルでは有り

得ないほどの
高機動力を持ち、保有する相転移機能は転移痕を残すことなく超長距離次元跳躍を
行える。また反応内燃機関「ヴィルヘルム」により、最大１０年程度の無補給飛行を
行う事も出来る。居住ブロックには２００人程度が楽に生活できるスペースがあるが、
そのほとんどは盗難品と備蓄食料の保管庫として利用されている。
ＥＣ兵器で
あるため管理局艦船の魔導武装はその殆どが無力化され、反応消滅砲「アルカンシェル」すらも通用しない。たとえ質量兵器による攻撃で被弾した
としても、リアクトすれば機体破損修復機能が働き、受けたダメージは瞬く間に
修復される。フッケバイン一家が管理局の追撃を逃れ続けている理由には、
この艦の存在も大きく寄与している。

「問題はここから降りて移動する場合だな。確か管理局は人工衛星による
監視網を強化しているんだったな？」

「ええ、そうですが」

「なら話は早い！その衛星撃ち落せばいいじゃん！」

「馬鹿、んなことしたらすぐにバレるだろうが」

「うぐっ」

「考えられるのは、ヒット・アンド・アウェイ戦法のみ、か？」

「素早く攻撃、素早く撤退…いいんじゃないか？」

「賛成だ」

「それだとあまり殺せないし盗めないと思いますけど、まあそれで行きますかね」

「とりあえず腹減った！ごはん食いたい！」

「お前は黙ってろ！」

こんな感じでフッケバインのメンバーはどこを襲撃するかの計画を立て始めた。

～ミッドチルダ、地上本部、局長執務室～

「なんて事考えているんだろうな～あいつら」

俺は椅子に座ってコーヒーを飲みながらつぶやいた。

奴らの情報収集能力は大したものだが、彼らがまだ知らないことがある。
それは奴らの保有する次元航行艦の形をしたＥＣ兵器、「フッケバイン」に
関することだ。

たしかにあれは転移したとき、痕跡を残さないからバレないけど、それは
転移魔法のみの話である。俺は確認できている全ての世界の衛星軌道上に
大型の人工衛星を幾つも配備した。見た目はただの気象衛星だが、その中には
空間受動レーダー装置が組み込まれている。これは空気の動き、空気密度の
不規則な変化を感知することで、電磁的光学的透明化を無効にするものだ。
空気を押しのけて移動する限り知覚できるため、何も無いところに転移魔法に
より突然やってくる「フッケバイン」も丸見えである。だってあんな大きな船体が
空気を押しのけて現れるんだから。これでどこに奴らが現れてもすぐにわかるのだ。

そして管理局の保有する次元航行艦。原作ではＬＳ級艦船が作られたけど、
あんなちっこくて弱々しいのは要らないので、代わりに今使っている
改ＸＶ級次元航行艦を一回り小さくした船をジェイルが造ろうとしている。
魔道兵器も質量兵器も積めるいい船になるそうだものだ。それと、

この新型船は大気圏内での長時間運用を想定しているので、少なくとも
アルカンシェルは載せない事になっている。あんなでかい武器を大気圏内で
撃つことはまず無いからね。その代わりに何を載せるかはまだ決めていない。

我々管理局も奴らとの再戦に向けて色々とやっているのだ。
地下トンネルでの戦闘の結果、まだ足りない、そう判断した。
何がって？防衛のための装置が。まあ戦った相手が瞬間移動できる奴だったから、っていうのも理由だけどね。とりあえず、量子クリスタル
装甲のゲート以外にも、不法侵入者にのみ反応するレイ・シールドの罠を
設置することに。レイ・シールドは放射線やブラスター砲火を吸収し、
通過を阻止するための罠として利用するものである。どうやって侵入者と
局員を判断するかというと、保管庫勤務の局員だけが持っているＩＤカード
から信号が発せられており、それを保管庫内の警備本部にあるコンピュータで
即座に判断するのである。

「これだけやればここは安全だな。残りの問題は常に人員不足の
管理局でどうやってフッケバインの連中から民間人を守るかだな」

例え奴らが現れた場所が分かっても、そこに管理局員がいなければ
間違いなく民間人はお陀仏、あの世行きである。なので必然的に
人員が足りないのである。

こんなこともあろうかと！っていうのは今回無いのでマジでどうしよう。

「艦長～」

「ん、何だエディ」

そんな考え事をしているとエディから通信が。

「第3、第4艦隊が探索から帰ってきました。無人世界しか発見できなかったし」

「そうか、ご苦労さん」

そうだ、エディに相談してみよう。アニメのせいでおかしくなっているけど、
なんだかんだ言って一番頭がいいからな。

「なあエディ、ちょっと相談なんだが…かくかくしかじか」

「なるほど、それならいい考えが」

「おお！聞かせてくれ！」

「局員は少ない、けど守るべき次元世界は多い。でしょ？」

「まあ、端的に言えばそうだな」

「ならその次元世界の数を減らせばいいじゃない」

ドゥーエ「なんですって？」

隣で聞いていたドゥーエは訳がわからないといった顔をしている。

「おい、まさかとは思うが…」

「あいつらが現れた惑星にスーパーレーザーをびびびびっー！っと」

ドゥーエ「」

「よしお前人格データリセットする」

こいつに相談した俺が馬鹿だった。

「すいませんごめんなさい。で、冗談はこれくらいにして、これといったアイデアは
ないですね。諦めてください」

ドゥーエ「諦めてって…」

「今いる局員だけだと、管理世界しかカバーできん。管理外世界は放置せざるを得ない」

「でもそれだとあいつら殺し放題だよ、艦長」

「そうなんだよな～…」

管理外世界には基本的に管理局は介入しない。故に現地の人間に知らせるわけにも

いかない。かといって放っておいたらそこの住人は死んじまうかもしれない。

さあどうする？

「とりあえず『アイシクル』と『ポッケ』、それと『フリスビー』の管理外世界には
　このことを教えよう。何かと世話になっているし、あそこの世界の人達には死んで
　ほしくないし。あと局員も派遣しとくか」

ドゥーエ「ではそのようにしますね」

「よろー」

「で、艦長。他の世界はどうするの？」

「そだなー…昨日の事件でわかったことは、ターボレーザーなら間違いなく
　あいつらを殺せるってことだ。だから全ての世界にターボレーザー載せた
　攻撃人工衛星を、って考えたんだけど、市街地や住宅密集地にあいつらが
　現れたら撃てないじゃん？それにあいつら人をいっぱい殺したいんだから
　当然そういう場所に行くじゃん？だから駄目」

「艦長、市民を避難させた都市におびき寄せて吹っ飛ばすとかはどうよ？」

ドゥーエ「それだと、避難している間に市民が攻撃されるのでは？」

「ですよねー」

だが、エディの作戦を聞いて俺はあることを考えた。

「いや、エディ、それ使えるかも知れんぞ」

ドゥーエ「え？でも…」

「いいか、あいつらに市民が街から避難したってことがわからなければいいんだろ？」

ドゥーエ「…そうですね。街に人がいるってことが分かっていれば殺しに来ますね」

「そう思わせることが出来れば…」

「…できるんですか、艦長？」

「やるんだよ」

結局その日はそのまま解散。俺とエディはどうやれば敵を騙せるか考えた。

～2日後～

いつも通り仕事をしていたら、コンピュータがうるさく警報音を鳴

らした。

「ん？おやおや、連中が動き出したぞ。第７０管理外世界『シェルカーク』の洋上だ」

「で、そこから一番近い街はっと、あ、海沿いの田舎村があるな。人口は
わずか１５０人ほど。警察もいないし、絶好の場所じゃないですか？」

ドゥーエ「それで、どうするんですか？」

「とりあえず俺が現地に行く。エディ、戦艦を１隻、なんでもいいから『シェルカーク』
衛星軌道上に持ってこい。完全ステルスで大至急だ」

エディの返事を聞かずに俺はその村へ転移した。

ドゥーエ「行っちゃった…」

「早いもんだね～、さてと第２艦隊のインペ？級を転送っと」

～第７０管理外世界「シェルカーク」、洋上～

「おお～海だ！」

「飛空艇フッケバイン」から下を眺めているアルナージは海を見て歓声をあげた。

「おいおいアル、泳ぎに来たんじゃねえんだぞ？」

「いーじゃん、ヴェイ兄！」

ヴェイ兄と呼ばれたヴェイロンはため息を突きながら隣にいる青年に話しかける。

「それでここには管理局の目は無いんだな、フォルティス？」

見た感じ穏やかそうな青年のフォルティスはヴェイロンの問いに答える。

「ええ、まだここには管理局印の人工衛星も局員もいませんよ」

彼は自信を持ってそう断言した。しかし、人工衛星網の設立は局長の独断と
自腹で行われたので、管理局のデータベースにそんなことはどこにも載っていない。
だから彼が集めた情報はウィルが適当にばらまいた嘘である。そのことを彼は
知る由もない。

「まあ、奴らがいても消せばいい話だがな」

そう言う女性はサイファー。眼帯が特徴な人である、以上。

「おい、私の説明適当すぎじゃないか？」

「何いってんだ、サイファー？」

「いや、なんでもないぞ、ヴェイロン」

「……」

操舵員のステラ・アーバインは話せないのでジェスチャーでフォルティスに
言いたいことを伝える。

「なになに、早く終わらせてみんなでご飯食べよう？そうだね」

そこに？人の女性が入ってきた。

「お、姉貴」

ヴェイロンが姉貴と呼ぶ人はカレン・フッケバイン。一家のトップである。

「みんな、久しぶりに楽しく行こうね～」

さて、ウィルはこの後起きるであろう虐殺を止めることができるのだろうか？

次回に続く…

第１１３話：再戦に向けて（後書き）

さてとＦｏｒｃｅをなかった事にしますかね～。

次回は、まあおわかりだと思いますが。

では

第１１４話：再見（ツァイツェン）！…間違えた、再戦！（前書き）

「フッケさ～んこちら、手のなる方へ～」

「艦長、頭大丈夫ですか？」

「いや、ちょっとテンション高くてな」

第１１４話：再見（ツァイツェン）！…間違えた、再戦！

第７０管理外世界「シェルカーク」。惑星全体の８５％が海で出来ている世界である。
文明レベルはまだ中世。なので主な移動手段は帆船である。その中でも一番
大きな国であるリューボルグ王国は、日本の本州とほぼ同じ面積を持つ
国家である。周りを海に囲まれた島国なので、他の国よりも造船技術が
優れている。その技術力を周辺諸国に提供し、その料金でウハウハである。よくここまで調べたな～、と思いながら俺はこの世界に合わせた
服を着て、リューボルグ王国の南のはずれに位置する村、エルンにいた。
ここは人口１５０人の小さな漁村である。ちまちまと魚を獲って、
それを馬車に乗せて遠くの市場に売りに行ったり、船で持って
行ったりして生計を立てている。

フッケバインの連中は、ここから２００ｋｍ沖の海上で待機している。
おそらく夜になってから大暴れする算段らしい。その間にここの人々を
避難させて、さらに罠を仕掛けないといけない。さっきお店で
食べた焼き魚定食が非常に美味しかったので、ここの人たちを
何としても守らなければと、俺は心に誓った。

さて、どうやって避難させるか、だが。
これはもう荒っぽい方法でやるしか無いね。いくら話したところで

納得してくれるとは思えないし。なので、村のいたるところに睡眠ガス爆弾を設置して爆発させた。１０分後にはみんなすやすや夢の中。今日は漁にでている漁船もないし。

で、次にすることは全員をこの村から３ｋｍ以上離れたところにある丘の上に
転送した。ここなら戦闘の被害も少なくて済みそうだし。それで、村人から綿棒で採取したＤＮＡを元にクローンを創造する。フッケバインの
連中にはこれを殺してもらう。もちろんただのクローンではない。血液中に特殊な興奮薬を混ぜてある。このクローンをぶっ殺して
血が流れると、血液が酸素と反応して無色無臭の興奮薬が漂うことになる。こうすれば、殺し続けると興奮しまくって正常な判断が出来なくなる、
という寸法である。

クローン共には元になった村人の記憶が残っているので、いつも通りの
生活をすることになる。ていうかもうしている。だから動きが不自然とか
そういうことはない。

それで、肝心の罠だけど…最初は景気よくＮ?兵器で吹っ飛ばそうかと思った
けど、こんな飯の美味しい村を吹き飛ばすのはなんかもったいない。だけどあいつら倒すには一撃でやる必要がある、と考えているので、月面基地で暇なときに作っておいた試作罠１号君を使うことに。
これだと１人しか殺せないけど、まあいいだろ。もう１人には
取っておきの代物を…ふっふっふ。

かー、かー

カラスが鳴き、日が暮れ、村にはランプの灯がついた。その時、招かれざる客が
2人やってきた。ヴェイロンとアルナージである。なぜこの2人なのかというと、
エクリプスウイルスのせいである。そもそもこのウイルスは、感染者に全てを
壊したくなる程の強烈な破壊と殺戮の衝動を齎し、その身体を強制的に作り
変えて兵器と化すものである。ただ、このウイルスに感染した際に死亡
する確率はとても高いが、死なずにウイルスに適合できた者は、
EC因子適合者（エクリプスドライバー）と呼ばれるそうな。

で、このウイルスの欠点は、破壊や殺戮の衝動から自我を保ち、「自己対滅」
から命を守るために、適合者は人を殺し続けなければならないのである。
何らかの方法でその衝動に抵抗して自我を保ったとしても、感染が進むほどに
発狂しかねない程の激しい肉体的苦痛に襲われるようになり、やがて
自己再生能力が暴走して単なる肉塊に変わる、つまり「自己追滅」に

なってしまう。

しかし、管理局がその勢力を急速に拡大させたので、フッケバインの連中は
人殺しが滅多にできなくなってしまった。そのせいで、ヴェイロンとアルナージはかなり限界が近づいているのだ。故に今回はこの２人なのである。

エルン村を挟むように配置についた２人は、さっそくディバイダーを取り出して
虐殺を始めた。

「ハァッハッハッハァ！！楽しいねェ！実に楽しいぜ！」

ヴェイロンはディバイダー９２８から、エネルギー弾を束ねて放つ「フレシェット・シェル」を放ち、近くの民家にいた村人を
家ごと吹き飛ばした。粉々になった家から断末魔の叫びが聞こえる。

「もっとだ！もっと聞かせろ！！」

笑いながらヴェイロンは逃げ惑う村人を殺していった。

その反対側で、リアクトしたアルナージがディバイダー７１８のガトリング砲と
ミサイルランチャーを撃ちまくって村を焼け野原にしていた。

「いやっほー！まだまだ！」

ある村人はガトリングで細切れになり、他の村人はミサイルが直撃して
血しぶきと化した。穏やかな漁村はあっという間に血まみれの地獄へと
変わっていった。

だが2人ともこれあの村人がクローンだということも、血液から興奮薬をが
空気中に散布されていることも知らなかった。すでに2人はかなりの興奮状態にあり、細かいところまで気にしていなかった。ただ、人を殺せればそれでよかったのだ。

5分もしないうちに2人は合流した。いい雰囲気の漁村は跡形もなかった。
そして残っている建物は、村の中心にあった古い教会だけだ。

「さて、残りはあそこだな」

「おっしゃあ！それじゃあパパっとやっちゃいますかね」

そう言ってアルナージはミサイルを撃ち込もうとしたが、ヴェイロンが
反対した。

「いや、それだとあっけねェだろ？正面から堂々と入っていって殺してやる」

「おっけい！」

そしてヴェイロンは扉を蹴り開けて教会の内部を見わたす。ベンチがズラーッと並んでいて奥には祭壇がある。その祭壇の下で１人のシスターが祈りを捧げていた。それを見てヴェイロンは、こんな時に神様にお祈りかよ、と思いながら教会の中に入った。

それがヴェイロンの最期の行動になった。

センサーに反応して、ヴェイロンの足元に埋めてあった試作罠１号君が発動した。
それは戦艦クラスのターボレーザーを極限まで小型化したものだった。
半径２５ｃｍ、高さ１．５ｍの円柱型で、内部にはターボレーザーの主起動装置を
小型化したものが収まっている。センサーによって発動した罠は、まず
小さな第１レーザーがエネルギー・ビームを造り出し、主起動装置の内部で
活性化されたブラスター・ガスの流れと相互作用を起こす。この組み合わせは
強力なエネルギー場を生じさせ、銃身の内側にある電気コイルによって収束
させられる。この一連の過程を経て、ヴェイロンの足元から緑色のターボ
レーザーが空に向かって飛んでいった。結果、ヴェイロンは消滅した。

残っているのは彼が持っていたディバイダー９２８の刃の欠片だけだった。

「…えっ？ヴぇ、ヴェイ兄？」

いきなり目の前で消滅したヴェイロンを見て、アルナージは驚きのあまり
ディバイダーを落としてしまった。するとシスターが立ち上がり服を脱ぎ捨てた。その中から出てきたのは、もちろんウィルである。

「ミス・アルナージ。こうしてお会いするのは初めてかな？俺の名はウィリアム・Ｔ・ロンバートだ。知っているかな？」

ようやく正気に戻ったアルナージは落としたディバイダーを拾ってウィルに
向ける。

「お前は管理局の！ヴェイ兄をどうしたんだ！どこに連れていった！」

「連れていっただって？あいつは死んだんだ。わからないのか？」

「なっ…」

「さっきあいつは俺が作った罠に引っかかって死んだんだよ。まあ一回使ったら
二度と使えないんだけどな」

試作罠1号君のターボレーザー発射装置には冷却装置などが付いていないので、
一度撃つと熱で溶けてしまうのだ。

「そ、そんな…」

「がっかりしているところ悪いんだが、次は君の番だ」

その言葉を聞いてアルナージはガトリング砲とミサイルを撃ち始め、祭壇やベンチが木っ端微塵になった。煙が晴れると、そこには誰もいなかった。

「素早い反応だが、それでも遅いな」

後ろから声が聞こえ、アルナージはぞっとした。

（こいつ、ビル兄みてえに瞬間移動できるのかよ!?）

あわてて振り返ろうとしたが、その前に首に何かを刺された。

「痛っ！何しやがる！」

距離をとってウィルを見ると、その手には注射器があった。

「注射？何を打ったんだ!?」

注射の中身を聞こうとしたアルナージは突然体の中で何かがうごめく、そんな
感覚に襲われた。そして痛みが胸から全身に広がっていった。再びディバイダー

を落として両手で胸を押さえるが一向に収まらない。

「ぐっ…何を…しやがった！」

苦しみながらもウィルに聞く。すると笑いながらウィルが話し始めた。

「なに、君達を普通の人間にするための薬さ。いいか、お前らがエクリプスウイルスに感染していることは知っている。そして俺は多くのディバイダーとリアクターを回収してきた。そこから採取したエクリプスウイルスを元に、俺は抗ウイルス剤を開発した。今君に打ったのはその薬だ」

「馬鹿な！そ、そんなことが…できるわけがない！」

「おいおい、ウイルスがあるなら抗ウイルス剤を作れないわけが無いだろうが。

管理局の技術は日々進化している。君達がここに現れたのも把握していたし、

この村を襲うことも把握していた。だから先手を打たせてもらった。

ここに住んでいた人々は何時間も前に避難している。君達が殺したのは

ただのクローンだったのさ」

「なんだよ、それ…あ、収まった」

種明かしをされて愕然としていたアルナージだが、痛みが消えたことに気がついた。

「お、マジで？おめでとう、君はもう普通の人間だ。もうウイルスの影響は
絶対に受けない。体内に抗体が出来たからリアクターに触ってもエクリプス
ウイルスに感染することもない。つまり…」

そこまで言ってウィルは拳銃でアルナージの右ひじを撃った。

「…ぎゃあああああああ！！！」

もう自己再生能力がないので、．４５ＡＣＰ弾を撃ちこまれた右腕は半ば千切れ
かけていた。あまりの痛さにのたうち回っていると。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

再びウィルが銃弾を放ち、左手、両足に撃ちこまれた。．４５ＡＣＰ弾は
９ｍｍパラベラム弾と違って弾頭の重量が重く弾速が遅いので、物理的貫通力は劣るが、人体に対し重い衝撃を与えるのに向いており殺傷力が高い。つまり対象を貫通すること無く破壊するのにうってつけの
銃弾である。

結果、アルナージの両肘と両膝は千切れかけている。アルナージは、痛すぎて気絶しそうになった。しかし。

「モデル、黄金錬金（アルス・マグナ）。『お前は絶対に気絶しないし、正気を保ち続ける』」

とウィルが言うと、薄れかかっていた意識が覚醒した。

「な、なんで…？」

「この能力はな、頭の中で考えた通りに世界を歪めてしまうってやつなんだ。
で、俺はお前に気絶してほしくないし、正気でいてもらいたいからそう
なったのさ。おわかり？」

「そんな、無敵じゃないか…」

「気にするな、もう長くないんだから。モデル、一方通行（アクセラレータ）。
さてとここで質問です」

そう言ってウィルはアルナージの千切れかけている右肘に指を当てた。

「お前は今血を流している。この『血』の向きを逆流させると人間の体は
どうやってしまうでしょうか？」

「…おい、もうやめてくれ…もういや…助けて…死にたくない…」

するとアルナージは涙を流しながら命乞いをしてきた。

「死にたくない、だと？お前らが今まで殺してきた人達だってみんな
そう思っていただろうさ。散々人を殺してきたのに自分は死にたく
ない

っていうのは都合が良すぎるぜ、嬢ちゃん」

「うっ……」

ウィルの主張に反論できないアルナージ。そして。

「それじゃあさようならだ、ミス・アルナージ。お前さん、なかなか美人だったぜ」

アルナージが最期に聞いたのは、自分の体から血が吹き出す音だった。

～洋上、「飛空艇フッケバイン」～

「遅いですね、２人とも…」

時計を見ながらフォルティスはつぶやく。その横でサイファーは読書している。

「気にするな。久しぶりだから暴れているのだろう」

しかしカレンはそう思っていなかった。

「いや、いくらなんでも遅いから迎えに行きましょ。ステラ、お願いね」

「……（コクッ）」

小さなステラが頷くと、船は進路を変えて陸地に向かった。
だが次の瞬間、船が急に止まってしまい、全員が前に投げ出された。

「おいステラ！しっかりしろ！」

思わずサイファーが怒鳴る。しかしステラは自分ではない、外部から何かの
干渉を受けているみたい、とジェスチャーで伝えた。

「何かの干渉ですか？それは一体…」

すると「フッケバイン」の上空からインペリアル？級スター・デストロイヤーが
雲を割って登場した。トラクタービームのせいで「フッケバイン」は逃げることも
転移することもできない。

「あれはなんだ？」

初めて見る大型戦艦にサイファーは驚きを隠せない。すると「フッケバイン」の
通信回線に無理やりウィルが接続した。まだ協会にいる。

「はーい、皆さんはじめまして。管理局のロンバートと申します」

「あんたがロンバートさんね。なかなかハンサムじゃないの？」

「そういうあなたはミス・カレン・フッケバインですね。あなたも大変お美しい」

「そりゃどうも～。それで何のようかしら？」

「実はですね、あなた方を逮捕しないといけないんですよ」

「逮捕される気などこれっぽっちもありませんよ」

フォスティスはウィルの言葉にそう返す。

「私もだ」

「……」

サイファーとステラもうなずく。

「まあ、こんなわけだから逮捕される気はないわよ、ロンバートさん」

「そうですか、実に残念だ…あなた方を殺さざるを得なくなってしまった」

「ふ、貴様に私達を殺せるのか？」

強気な発言をするサイファー。しかしウィルは笑いながら答える。

「すでに3人も仲間を失っているのにまだそんなことを言えるとはね」

「なんだと!?」

「まさかアルとヴェイロンは…」

「ええ、殺しましたよ。実に楽しかった。いい気分ですよ」

「……」

そんなウィルにステラはジェスチャーで自分の言いたいことを伝えようとする。

「えっとそちらはステラちゃんだっけ?証拠を見せろだって?いいだろう、
ちょっと待ってね」

そう言って画面から消えたウィル。すぐに現れたが。

「はーい、ごたいめ~ん♪」

その手には息絶えたアルナージを持っていた。血流を逆流させたときの衝撃で、
千切れかかっていた両腕と両足は完全に千切れ、おまけに体の至る所が裂けていた。

「……!」

それを見たステラは真っ青になり、フォルティスも愕然としていた。
サイファーも口をあんぐりとあけている。ただ1人、カレンは
表情を変えずに見ていた。

「は～い、君達のお仲間のアルナージちゃんです♪でもちょっと元
気ないな～。
お～いアルナージちゃ～ん、どしたのかな～？しっかりして～」

そう言ってウィルは首をつかんだまアルナージを上下にシェイクし
た。

「なんてことを…」

「貴様！」

「……」

フォルティスはかなり引いていて、サイファーは怒っており、ステ
ラは無言で
泣いている。

「みんな～、もう戦いをやめて～？争いはなんにも生まないよ～？」

ウィルがアルナージの声を真似てそう言うと、力を入れすぎたのか
知らんが、
持っていたアルナージの首が千切れて体が落ちてしまった。

「あらごめん、千切れちゃったみたい」

すると今まで黙っていたカレンが。

「お前さ、いい加減にしろよ…マジで殺すぞ？」

「ほう、出来るもんならやってみな」

ウィルがそう返した瞬間、頭上のインペ？級が砲撃を開始した。
ターボレーザーが「フッケバイン」の中和フォールドを楽々と貫通して、船は大きく揺れた。

「くっ！ステラ、行きましょう！」

「……（コクッ！）」

小さな操舵手は力強く頷くとフォルティスと共に走っていった。

「サイファー、あそこにいるロンバートやらをぶっ殺しに行くわよ？」

「わかった」

残りの２人ははウィルのところへ転移した。

同じ頃にウィルはアルナージのディバイダー７１８を頑丈なケースにしまって
インペ？級の艦橋へ転移した。帰るついでにおまけを置いて。

「飛翔戦艇（エスクアッド）フッケバイン。エンゲージリングオープン。エンゲージ」

ステラは自分のディバイダーである「フッケバイン」とリアクトした。

「リアクト・スタート。機体破損修復開始」

するとターボレーザーの攻撃で大きな穴が開いた場所が塞がり始めた。

「ふう、これでなんとかなりますかね。では私は艦砲の準備を」

そう言ってフォスティスはステラから離れた。

ステラがリアクトした瞬間に、インペ？級の艦橋でウィルはエディの報告を受けていた。

「艦長、リアクト反応を確認！座標固定完了！」

「そこに操舵手がいる。撃て！」

ステラ・アーバインは自分の船を修復しようと頑張っていたが、頭上から
降ってきたレーザーでの洗礼を受けた。その衝撃でフォルティスは大きく
吹き飛ばされた。起き上がってステラの無事を確かめようとしたが、
そこには操舵室はなかった。

主を失った「フッケバイン」はその機能を停止した。もっとも、
トラクタービームのおかげで墜落の危険性はゼロだったが。

「そんな…ステラ…」

彼女が死んだことを受け入れられない、といった感じのフォルティスの
目の前に、大きな細長い筒が落ちてきた。それは何かと思った矢先に、
ヴォイド7・サイズミック・チャージが起爆した。内側から
壊滅的な衝撃波を食らった「フッケバイン」は文字通り粉々になった。もちろんフォルティスも。

一方、ウィルを追ってエルン村の教会にやってきたカレンとサイファー。
しかしそこにはアルナージの死体しかなかった。

「くそ、逃げられたか」

サイファーは腹が立ってその辺をうろついている。

「アル…安らかに」

カレンはアルナージの死体の前で両手を合わせる。そして死体を持ち帰ろう
としたが、死体を持ち上げた瞬間に何かが空中に飛び上がった。

それはありふれた跳躍地雷だった。高さ１．５ｍ程度まで跳ね上がってから
地雷本体が炸裂し、金属球を飛び散らせて広範囲の人間を殺傷するもので、
アメリカ兵によりＢｏｕｎｃｉｎｇ　Ｂｅｔｔｙ（跳ねるベティ）のニックネームで
呼ばれている。

伏せる暇もなく地雷が爆発し、サイファーはもろに食らって吹き飛ばされた。
カレンはそのずば抜けた反射能力で迫り来る金属球をすべて避けた。

「卑劣な罠だね、死体を使うなんて。行くわよサイファー…サイファー？」

返事がないので振り返ると、そこには血まみれで倒れているサイファーがいた。
あわててサイファーに駆け寄ってその体を揺らすが、もう反応はなかった。

「なんで！？ただの地雷じゃないの！？」

もちろんただの地雷ではない。試作罠２号君である。この跳躍地雷

に入っている
金属球には例の抗ウイルス剤がたっぷり塗ってあるのだ。しかもアルナージに
注射したものよりも濃度が濃いものを使っている。なので、それをもろに
食らったサイファーはあっという間に体内のエクリプスウイルスが中和され、
自己再生する前に出血多量で死んだのだった。

カレンはサイファーのディバイダー９４４とリアクター「ケーニッヒ０９」を
回収し、２人を担いで外に出た。遠くの空で何かが大爆発するのが見えたが、
それが「フッケバイン」だとはわからなかった。すると今度はＡＩＦ－９Ｖ無人
戦闘機が村に襲来し、次々と爆弾を投下した。それらは村のいたる所で
爆発して周囲にガスをばらまいた。

「まさか毒ガス？」

当たっているけどはずれである。これは「Ｅ－ＮＴＲＬ爆弾」と呼ばれるもので、
日本語にすると「エクリプス中和爆弾」である。ガス状の抗ウイルス剤を
広範囲にばらまくことができるので、その辺にいる感染者はあっという間に
普通の人間に逆戻り。これだけ素晴らしい兵器が、今なら１発４０，０００ミッド。
５発まとめて購入されると１７５，０００ミッドと大変お得です。

今すぐお電話を！
お申し込みはミッドチルダ、時空管理局技術開発本部まで！

それはともかく、その中和ガスがカレンを襲い、彼女もまた普通の人間に戻った。

「そんな…」

自分が力を失ったことを知ったカレンは、持っていた刀を落として地面に
膝まづいた。その５ｍほど後ろにウィルが立っている。

「カレン・フッケバイン、言い残すことはあるか？」

ウィルはインフィニティーを日本刀モードで起動して構えている。

「言い残すことですって？ふざけんな！まだ私は戦える！」

そう言って彼女は地面から刀を拾ってこちらに向かって走ってきた。

「はあああああああ！！！」

カレンはその一撃に自身の全てをかけた。ウイルスの影響がなくても彼女は充分に優れた刀の使い手なのだ。襲いかかってくる彼女をウィルは迎え撃つ。そして２人は交差して動きを止めた。

「…あんた、本当にやるわね。好きになりそうよ」

「そりゃどうも。だけど俺にはもう家族がいるんでね」

「それは…ざんね…ん…だわ…」

肩から斜めに袈裟懸けに切られたカレンは口から血を流しながらその場に倒れた。

「いい腕だったよ、カレン。君が管理局に入ればよかったんだがな。まあいい。
エディ、いい仕事だった。帰投しろ」

「りょーかい！」

ミッドに帰る前に俺はカレンを死体袋に入れて、彼女が持っていたディバイダーも
回収した。そして村全体の建物を錬金術で元通りにした。

2時間後、村人たちは目覚めて何があったんだっけ？とお互いに聞きあったが、
結局全員何も覚えていなかった。

その日、フッケバイン一家が壊滅したことが全世界に報じられた。
カレン・フッケバイン他数名の遺体は1つの墓にまとめて埋葬された。
その墓石にはこう書かれていた。

「すごくかっこ悪い船に乗って、すごくかっこ悪い武器を使っていた人殺し達、
管理局に無様にやられてここで眠る」

第１１４話：再見（ツァイツェン）！…間違えた、再戦！（後書き）

はい、Ｆｏｒｃｅがなくなりました。「力は正義なり」ですね、まさに。
次回はヴィヴィオとアインハルトの再戦を。

では

番外編１３：なんということでしょう（前書き）

次回はヴィヴィオとアインハルトの再戦を、って書いたけど
なんかあれってすぐ終わってた気がするので、その前に。

番外編１３：なんということでしょう

フッケバイン一家が壊滅した次の日

～第２０管理世界「ヴィラルーシ」～

フェ「そっちに逃げた！追って！」

局員「はい！」

今この世界のとある場所で、フェイト・テスタロッサ・ロンバート執務官率いる
部隊がある犯人を追い回している。理由はいたって簡単。その犯人が、重要な
ロストロギアが入ったを持っているからである。だが彼は箱の中に何が入っている
かを知らない。なら、とっとと箱を放り出して逃げればいいじゃない、と誰もが
そう思うが、彼はこの街ではそこそこ有名な泥棒であり、「狙った物は必ず盗む」
がモットーな奴なので、何がなんでも自分のものにしようと躍起になっている。

だがまあ、普通の人間が魔道士相手に逃げ切れるわけもなく、泥棒は行き止まりに追い詰められた。

フェ「さあ、おとなしくそれを渡しなさい！」

「ふ、ふざけるな！これは俺のもんだ！絶対にやらないぞ！」

彼はフェイトの投降勧告を無視して、持っていた箱を空中に向かって放り投げた。
フェイトが箱をとろうとした瞬間に、懐にしまっておいた拳銃を向ける。

局員「執務官！」

それに気がついた局員が泥棒に砲撃をおみまいする。

「ぐあああああ！！」

彼は非殺傷設定の砲撃を受けて後ろに吹っ飛んだ、がその衝撃で拳銃から銃弾が
発射された。その弾丸はまっすぐフェイトが取ろうとしていた箱の鍵の部分に
命中した。

そのせいで、空中で箱の蓋が開きロストロギアが飛び出し、地面に落ちて
ひびが入ってしまった。

フェ「しまった！」

その瞬間、ロストロギアが暴走してしまい、周囲はまばゆい光に包まれた…

～その日の夜、屋敷、リビング～

「…ということがあったのさ」

俺は概要を説明し終えた。目の前にはなのは達が勢ぞろい。

な「それでフェイトちゃんは!?」

は「無事なんやろ!?」

「まあ落ち着け。フェイトも他の局員もみんな無事だ。安心しろ」

アリサ「よかった…」

ヴィヴィオ「フェイトママ、お怪我ないんだね?」

すずか「運が良かったね」

イクス「びっくりした～…」

みんなほっとしている。まあ当然だな。

カナ「ん?なぜ父上は難しい顔をしておるのだ?」

「いやな、…1つ問題があるんだ」

シグ「問題？なんだそれは？」

ヴィ「んなことはどうでもいいから早くフェイトに会わせろよ！今どこなんだ？」

「何いってんだ？フェイトはここにいるぞ？」

ス「え？どこですか？」

みんなが部屋を見わたすが、そこには俺とティーナ、子供達しか見えない。

ギ「見えないんですけど…まさか透明になっちゃったとかですか？」

「そうじゃないんだが…ここにいるんだ」

そう言って俺は机の上に置いてあった小さな箱の蓋を開けた。すると。

は「こ、これはっ！」

シャ「…えっ？」

カ「かっ…かわいい！！」

？？？「……？」

箱の中から出てきたのは、なんと手乗りサイズのフェイトだった。

今となっては懐かしい、私立聖祥大学付属小学校の制服を来ており、髪はツインテールにしている。

イクス「ふぇ、フェイトお母様！？」

カナ「見事に小さくなったな」

「昨日、フェイトがロストロギアの暴走に巻き込まれた際に、何故かこうなった。
　原因はわからん。今ジェイルとウーノさんに調べてもらっている。
とにかく
　こんな有様じゃ仕事もできないかｒ」

な「かわいいいいい！！」

は「抱っこさせて！！！」

だが俺の説明をさえぎって2人はミニフェイトに飛びかかった。

ミニフェ「っ！！」

しかしミニフェイトはゴキブリもびっくりな速度で俺の腕を登って背中に隠れて
しまった。しかも若干泣いている。

ヴィヴィオ「フェイトママ、すごく怯えているの」

「いい忘れたけど知能が弱体化しているし、記憶もない。今のフェイトは
　すごく臆病で、すごく寂しがり屋なんだ。だから優しく接しない

と仲良く
なれないし、放っておくと泣き出す」

な「じゃあ私が預かるの！」

は「それはうちの仕事や！」

しかし。

ミニフェ「……（つーん）」

いきなり飛び掛ってきたなのはとはやてを見ると、ミニフェイトはそっぽを
向いてしまった。

な「がぁあああああん！！！」

は「そんな…」

2人はがっかりしたのか、床に膝まづいている。

テ「なんでそんなにがっかりしているんですか…」

「フェイトは俺になついているし、いや、なつくって言い方はまずいかな、
まあいい、とにかく俺が責任をもって世話をする。異論は認めない！以上！」

な、は「ぶーぶー」

シグ「それじゃ私は誰と模擬戦をすればいいんだ…？」

ザフィ「やらんでいいだろうに」

「よーしフェイト、お風呂入ろうな？」

ミニフェ「♪」

部屋に戻って俺はミニフェイトと一緒に風呂に入った。ただ、普通にシャワーを浴びたらミニフェイトは流されるし、湯船に浸かればあっという間に沈没する。
なので、ここは昔のアニメの知識を役立てることに。

「どうだ、フェイト？気持ちいいか？」

ミニフェ「？」

俺は食堂から持ってきた茶碗に湯船のお湯を入れて、そこにフェイトを浸からせた。
これなら溺れる心配もないし、フェイトも気持ちよさげだし。
幸い、髪の毛や体は自分で洗えるようなのでそこはまかせることに。
で俺は湯船にゆっくりと使って今日1日の疲れを癒そうとした。

ミニフェ「あわわわわ！」

すると泡まみれのミニフェイトがふらふらしていた。前が見えないみたい。

「なにやってんだよ、ほら」

俺は茶碗のお湯をミニフェイトの頭から少しずつかけて泡を洗い流した。

するとミニフェイトは嬉しそうに俺が入っている湯船に飛び込んできた。

「ちょ！」

ミニフェ「がぼぼぼぼ！！！」

当然泳げるわけないのでこうなる。

「こら～だめだぞ～？」

俺は優しく持ち上げて元の茶碗に戻した。

風呂から出てパジャマに着替えた。ミニフェイトの分もきちんと作っておいた。

「よし、それじゃあ寝るか」

ミニフェ（コクッ♪）

そしてその日はゆっくりと寝ることに。

翌日、ミニフェイトが朝起きるとそこには誰もいなかった。
寂しがり屋のミニフェイトはすぐに大声で泣き出してしまう。

ミニフェ「ウィルーッ！ウィルーッ！」

その声を聞いて俺はトイレから飛び出した。

「あーごめんなー、もう泣くなよ～」

するとミニフェイトは笑顔になって俺の肩に乗ってきた。お気に入りの
特等席らしい。

「そこがいいのか？じゃあ行こう！」

な「あ、おはようなの」

食堂に降りるとなのは達が既にいた。テレビを見ていたアリサが俺の方に
乗っているミニフェイトを見つけた。

アリサ「あ、そこにいるんだ？」

「ああ、お気に入りらしい」

ザフィ「一晩たっても治らなかったか」

シグ「どうすれば元に戻るのだろうな？」

シャ「私も調べてみるわ」

「よろしく頼むよ。じゃあ仕事行ってくる」

＜にゃあああああああああああああああん！！！

～地上本部～

「ついたぞ～」

ミニフェ「はや～」

車を止めてティーナとミニフェイトと3人でエレベーターを待っていると、

後ろからティーダがやってきた。

ティーダ「ようウィル、おはよう」

「お、ティーダか。おはよう」

ティーダ「…おい、その肩に乗っている可愛らしい物体は何だ？」

ミニフェイトに気がついてそう尋ねてきた。

ティ「ちっちゃくなっちゃったフェイトちゃんよ」

ミニフェ「♪」

ティーダ「えー…いいなぁ」

「なんだって!?」

ティーダ「ティアナもちっちゃくなったら可愛いだろうな、っておもってな」

ティ「シスコン乙」

～会議室～

「ではこれより定例会議を始める」

この会議室は管理局のOグループにとってのいつもの舞台であった。Oグループ、すなわちオペレーションズ・グループによる指令方式はイギリス軍が開発したコンセプトで、１９７０年代に同国の陸軍特殊部隊（ＳＡＳ）において十全な結実をみた。各部隊長と副長ならびに上級分隊長から構成されるOグループが召集され、任務立案から戦略・戦術展開をめぐって合議し、ブレーンストーミングをするシステムである。

保守的な多くの将校がOグループ制を認めなかった。司令官の権威を侵し、
委員会による指揮になりかねない危険をはらんでいる、と。しかしながら、
俺は一番偉い人間の地位が自動的に全能を授けると信じるような将校では
なく、このシステムをよしとした。

「まずは各部隊の報告から。レジー？」

レジ「…その前に、その物体Xはなんだ？」

「失礼だな、俺の嫁のフェイトだよ」

オーリス「…なぜにそんなにちいさく？」

「さあ？とにかく報告」

レジ「ああ、わかった。ミッドチルダの犯罪発生率は年々低下しています。
　それと同時に検挙率も９８％を超えています。ここの治安は問題ありません」

オーリス「全ての地上部隊にティン・マン装甲服が支給されたので、負傷率も
　激減しました。ほとんどの局員は現状に満足しているとのことです」

ティーダ「オーリス二佐の仰るとおりです。我々首都航空隊はあの装備のおかげで

何度も命を助けてもらっていますので」

「そうか、素晴らしい。次は次元航行部隊」

リ「はい」

そう言って立ち上がったのはリンディ・ハラオウン提督。彼女は昇進して
今では次元航行部隊のトップである。

リ「広域探索は局長の保有する戦艦部隊が順調に進めているので問題ありません。
多くの乗組員も改ＸＶ級次元航行艦に慣れており、練度も高いので即応体制も
充分です」

「了解。そういえばこの前の訓練事故はどうなった？」

この前の訓練事故とは、実弾射撃訓練を行っていた訓練艦「アースラ」で、
ターボレーザーの出力を訓練生がいじくったせいで、隣を航行していた
訓練艦「リバティー」に最高出力のレーザーを浴びせてしまった。
そのせいで、「リバティー」の機関室に大穴が空いてしまい、
死人が出るところだった。

リ「問題の訓練生は冗談でやったことだと証言しています」

「そのくだらない冗談で人が死ぬところだったんだぞ、まったく。
そいつは

船から下ろせ。本局で他の仕事につかせてくれ」

リ「わかりました。私からは以上です」

「あい。じゃあ技術開発本部」

本局にもいくつか技術部があるから、ミッドにあるのを本部にした。

ジェ「えっとエクリプスウイルスの抗ウイルス剤の件だけど、フッケバインとの
戦闘において充分な効果があった。なのでこれで完成したと断言するよ。
すでに量産体制は整っている」

「じゃあそれを全ての次元世界の人間に予防接種として注射するってのはどうだ？
まだディバイダーやリアクターがあるかもしれないし」

リ「それはいいですね」

レジ「これ以上感染者を出さないためにもやった方がいいと思うぞ」

「わかった。全会一致で可決とします。ドゥーエ、手配を頼む」

ドゥーエ「わかりました」

ジェ「あと君の奥さんが小さくなった原因はまだ分かっていないよ。おそらく
しばらくすれば治るんじゃないかな？」

「そうか、わかった。次、沿岸警備隊」

沿岸警備隊のトップは見るからに海の男、といった感じだった。

海の男「海は極めて穏やかです。核爆発なし、海賊なし。ただ、クラナガンから
　　５０ｋｍ離れたこの位置の海底火山の活動が活発化しているので、
　　現在ＳＳＭ－２１『バーバリアン』が調査任務についています」

ＳＳＭとは、Ｓｕｂ　Ｓｕｒｆａｃｅ　Ｍａｇｉｃａｌの略であり、日本語では攻撃型魔力潜水艦になる。
英語では、ｍａｇｉｃａｌ　ｐｏｗｅｒｅｄ　ａｔｔａｃｋ　ｓｕｂｍａｒｉｎｅである。ちなみに攻撃型原子力潜水艦（ｎｕｃｌｅａｒ　ｐｏｗｅｒｅｄ　ａｔｔａｃｋ　ｓｕｂｍａｒｉｎｅ）はＳＳＮ、すなわちＳｕｂ　Ｓｕｒｆａｃｅ　Ｎｕｃｌｅａｒとなる。

「わかった。あとＳＯＳＵＳの設置状況は？」

ＳＯＳＵＳ（Ｓｏｕｎｄ　Ｓｕｒｖｅｉｌｌａｎｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ）とは、アメリカ海軍及びイギリス海軍が開発して、海底に設置したソナー監視ラインのことである。分かりやすく言うと、全世界規模での水中敷設方式の聴音システム監視網のことだ。ＳＯＳＵＳは陸上基地とソナーを内蔵した海底ケーブル群から構成されており、水中音響的に最適な位置で敷設される。その多くは大陸棚縁辺部と海底山脈の尾根の部分に設

置されている。
この方式によって通常の外航船であれば数百ｋｍでの探知が可能である。

海の男「ミッドチルダ全域をカバーするにはあと４ヶ月必要ですが、
首都近辺のＳＯＳＵＳシステムは既に稼動しています」

「了解した。急いでやろうとしなくてもいいから丁寧に設置してくれ」

海の男「わかりました！それとバーバリアン級潜水艦の２番艦ですが、現在
５６％まで完成しました。あと半年で完成します。乗組員の
育成も、ディーゼル・エレクトリック潜水艦で順調に
行っています」

「よし、いいぞ。その調子で頑張ってくれ。最後に保管庫警備隊長」

隊長「昨日運び込まれたディバイダー及びリアクターは既に最下層保管庫へ
収納済みです。感染者なし、侵入者なし。特に問題はありません」

「了解。それでは次だが…」

この後も会議は続いていったが、ミニフェイトは途中で飽きたらしく、俺が
持ってきたのろいうさぎ人形と床で遊んでいた。

「じゃあ今日の会議はこれで終了とする。お疲れ様。よーしフェイト、お昼ごはん
食べような～」

ミニフェ「わーい！わーい！」

その様子を見ていた他のメンバーは。

レジ「ふむ、可愛いものだな。オーリスも昔は素直で可愛かったなあ」

オーリス「なななな何を言うんですか！」

リ「クロノもあんな頃があったものね～」

ティーダ「でもあんなに小さくはなかったですよね」

レジ、リ「んだんだ」

そして夜になって仕事が終わり、屋敷へと戻った。車のダッシュボードの上で
ミニフェイトはのろいうさぎを抱きながら寝ていた。

ティ「かわいいわね～」

「まったくだ。早くもどってほしいけど、このままでもいい気がする」

「ただいまー」

ヴィ「おいウィル！あたしののろいうさぎの人形どこにやったんだ！？」

「フェイトが抱いているよ。ほれ」

ヴィ「あああああ！！ヨダレが付いてる！」

シグ「洗えばいいだろうに」

ザフィ「いい年なのにまだそんな子供用の人形が好きなｎ」

ヴィ「てりゃあああああ！！」ずどんっ！！

ザフィ「」

ギ「あああ！！ザフィーラさんがまた潰れてる！」

また一緒に風呂に入ってベッドで寝る。すると深夜になってミニフェイトの
体が光りだした。そしてだんだん大きくなって、パジャマがはじけてしまい、
１分もしないうちに元のフェイトに戻った。

フェ「あれ?体が…」

起き上がって自分の体をチェックするフェイト。その隣で俺は、フェイトが元に
戻ったことを知らずに爆睡。

フェ「そ、そういえばウィルの肩、居心地良かったな…えへへ♪」

小さくなっていたときの記憶があったらしく、フェイトはニマニマしながら
ベッドに戻ってウィルに抱きつきながら再び眠った。

次の日。

な「みんなー!フェイトちゃんが元に戻ってる!」

は「ほんまか!」

アリサ「よかったわね」

な「しかも裸でウィル君と抱き合ってるの!」

シグ「レヴァンティン！カートリッジロード！」

ヴィ「いくぞアイゼン！」

レヴァ「やぼーる（またかよ）」

アイゼン「やぼーる（でも拒否できないし）」

その後、ウィルの部屋で大爆発が起きて、２人の悲鳴が屋敷中に響いたそうな…

カナ「朝っぱらからうるさいものだ。なあレブ？」

レブ「同感です」

番外編13：なんということでしょう（後書き）

次こそ！次こそはヴィヴィオとアインハルトを書きます！

では。

第１１５話：こっちも再戦（前書き）

カナ「あ～あ～ミッドの～どこかに～♪あたしを待ってる～人がいな～い♪」

な「いないの！？ていうかなんでカナリアはその歌知っているの？」

カナ「父上の部屋にあってな。えんか、といったか、実にいいな」

フェ「なんかカナリアは日本人っぽくなってきた…」

カナ「きよしー！」

第１１５話：こっちも再戦

ヴィヴィオとアインハルトの最初の試合から1週間後。

～アラル港湾埠頭、廃棄倉庫区画、ＡＭ１３：２０～

試合の１０分前。すでにヴィヴィオ達3姉妹、それにリオとコロナ、おまけに
チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、オットー、ディードも揃っている。

そこに。

「お待たせしました。アインハルト・ストラトス参りました」

スバルとティアナに連れられてアインハルトがやってきた。

ヴィヴィオ「来ていただいてありがとうございます、アインハルトさん！」

礼儀正しく礼をするヴィヴィオ。

ノーヴェ「ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし
　許可もとってあるから安心して全力出していいぞ」

ヴィヴィオ「うん、最初から全力で行きます」

真面目な顔でヴィヴィオは答える。

ヴィヴィオ「セイクリッド・ハート！セット・アップ！」

そして聖王の鎧を展開して大人モードになる。

イクス「かっこいー！」

それをみてアインハルトも。

「武装形態」

すると、なんということでしょう。幼女がぱいおつたゆんたゆんな大人になりました。

カナ「ほう、なかなか胸が大きいではないか」

「…っ！」

そんな事を言われたアインハルトは思わず顔を赤くしながら手で胸を隠した。

ノーヴェ「何言ってんだよ…さて、今回も魔法はナシの格闘オンリー。

5分間1本勝負！」

リオ「アインハルトさんも大人モード！？」

初めて見るリオやコロナはびっくりしている。

ノーヴェ「それじゃあ試合開始！」

アインハルトは構えているヴィヴィオを見ながら冷静に分析をしていた。

（きれいな構え…油断も甘さもない。いい師匠や仲間に囲まれて、この子はきっと
格闘技を楽しんでいる）

自分のトレーニングの事を思い出しながらアインハルトも構える。

（私とはきっと何もかもが違うし、覇王（わたし）の一拳を向けていい相手じゃない）

ヴィヴィオもまたアインハルトの構えを見て考えていた。

（凄い威圧感…一体どれくらいどんな風に鍛えてきたんだろう？勝てるなんて
思わない。だけど、だからこそ、一撃ずつで伝えなきゃ。
「このあいだはごめんなさい」と！）

そしてアインハルトの先制攻撃から試合が始まった。しばらくは互いに打ち合って
いたが、アインハルトの左フックをヴィヴィオはしゃがんで避けた。
そして。

（わたしの全力！わたしの格闘戦技（ストライクアーツ）！）

思い切り力を入れてアインハルトの腹か胸を殴った。そのせいでアインハルトは
後ろに大きく吹き飛ばされた。その後もヴィヴィオは追撃をやめない。

その戦いの中でアインハルトは考えていた。

（この子は…）

ヴィヴィオ「はあああああ！！！」

（この子はどうしてこんなに一生懸命に？師匠が組んだ試合だから？友達が
見ているから？）

（大好きで大切で、守りたい人達がいる。小さな私に強さと勇気を教えてくれた）

ヴィヴィオはなのは達のことを考えていた。

（世界中の誰よりも幸せにしてくれた。強くなるって約束した。
強くなるんだ！どこまでだって！）

作者「そんなこと約束したっけ？」

「お前は黙ってろ、エディ」

「ターボレーザー！」

作者「ぎゃあああああ！！」

ヴィヴィオの渾身の一撃は、しかし、アインハルトに防がれて、逆に

「覇王断空拳！！」

を食らってしまい、後ろの倉庫に激突した。

ノーヴェ「一本！そこまで！」

だがそこでイレギュラーが。ヴィヴィオが突っ込んだ倉庫が崩れてしまった。

ス「えええええ！！！」

リオ「ヴィヴィオ！」

オットー「陛下！」

イクス「お姉様！」

だが、

ヴィヴィオ「あー、死ぬかと思った」

彼女は瓦礫を吹き飛ばして這いずり出てきた。

ディード「陛下、お怪我は？」

ヴィヴィオ「ううん、大丈夫だよ！この鎧があるから！」

ノーヴェ「しかし、なんで崩れたんだ？」

ヴィヴィオ「私が倉庫にぶつかる寸前にね、この鎧の自動防衛が発動しちゃって、

そのせいだと思う」

ディエチ「聖王の鎧ってすごいね」

ウェンディ「あれ着ていたら怪我なしじゃないッスか」

ヴィヴィオ「アインハルトさん！戦ってくれてありがとうございました！」

「ああ、いえ…」

そこでアインハルトは急に体勢を崩してしまい、横にいたティアナの胸に

飛び込む形になった。

テ「あらら」

「す、すみません…あれ!?」

姿勢を直そうとするがうまくいかないのでアインハルトは頭にはてなマークを浮かべる。

テ「ああ、いいのよ。大丈夫」

ノーヴェ「ラストに1発カウンターがカスってたろ?時間差で効いてきたか」

「だ、大丈夫…大丈夫、です」

そうは言っているが、相変わらずふらふらしており、今度はスバルの胸に。

ス「よっと!」

ノーヴェ「いいからじっとしてろよ」

テ「そのまま、ね?」

「…はい」

ヴィヴィオはリオやコロナとさっきの戦闘について話し込んでいる。

その間に

ノーヴェはアインハルトに聞いてみる。

ノーヴェ「断空拳はさっきのが本式か？」

「足元から練り上げた力を拳足から打ち出す技法そのものが『断空』です。
　私はまだ拳での直打と打ち下ろしでしか撃てませんが」

ノーヴェ「なるほどな。で、ヴィヴィオはどうだった？」

すると彼女は申し訳なさそうな顔をしながら答えた。

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼なことを言ってしまいました。訂正します、と」

ノーヴェ「そうしてやってくれ。きっと喜ぶ」

アインハルトはヴィヴィオの方へ歩きながら考えていた。

（彼女は覇王（わたし）が会いたかった聖王女じゃない。だけどわたしは……
　この子とまた戦えたら、と思っている）

ヴィヴィオ「ん？」

「はじめまして、ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

ヴィヴィオ「…はじめまして。ヴィヴィオ・ロンバートです！」

新暦７９年春。ヴィヴィオ・ロンバートとアインハルト・ストラトスはこうして
出逢った。

ディエチ「喉渇いたしみんなで喫茶店にでも行かない？」

ウェンディ「賛成ッス！」

これが彼女たちの鮮烈（ヴィヴィッド）な物語の始まり始まり。

イクス「アインハルトさん！今度私とも戦ってください！」

「ええっ！？」

カナ「何を召喚するつもりなんだ？」

ヴィヴィオ「あ、イクスは召喚士なんです」

「へぇ～…」

イクス「えっとね、ボーちゃんとバルちゃんとルーちゃん！」

ノーヴェ「なんだそれ？」

ス「さあ？」

母親であるスバルにノーヴェは尋ねるが、スバルも知らない様子。

イクス「じゃあここでやってみます！スレイン！召喚！」

スレイン「やぼーる」↑なんでひらがなかっていうと、ドイツ語知

らないから。

するとイクスの周りに3つの魔方陣が出現する。1つは黒、1つは赤、そして1つは白である。その中から出てきた物を見て、全員が悲鳴を上げた。

ヴィヴィオ「わあああああああ！！」

「きゃあああああああ！！！」

チンク「なななななななんだそれはあああああ！！」

オットー「ひいいいいい！！」

ディード「にににに逃げましょう陛下！！」

テ「イクスううううう！！やりすぎよ！！」

ノーヴェ「どこの化物だそれ！！」

イクスが言った愛称を聞いてわかった人もいるかも知れない。ボーちゃんはミラボレアス。バルちゃんはミラバルカン。そしてルーちゃんはミラルーツである。しかもご丁寧なことに原寸大の大きさで召喚した。

リオ「怖いよ、コロナ…」

コロナ「私もだよ、リオ…」

2人は抱き合っている。

ヴィヴィオ「イクス！これは使っちゃ駄目！封印！」

イクス「ぶー、仕方ないなー」

ぶつくさ言いながらも素直に従うイクス。

「さっきの巨大な龍は一体…」

ス「ティア、確かあれって『ポッケ』の…」

テ「ああ！あの特殊生体ロストロギア！」

ノーヴェ「なんだそれ？」

初めて聞く単語にノーヴェは尋ねる。

ス「分かりやすく言うと、生きているロストロギア、みたいな」

テ「ウィルさんのペットのムワリム、覚えてる？」

チンク「ああ、屋敷にいた龍だな。それが？」」

テ「あれも特殊生体ロストロギアよ」

オットー「…つまりウィルさんはロストロギアを飼っている？」

ス「そういうこと」

ウェンディ「もう何も言わないッス」

荷物をまとめて全員で移動しようとしたとき、２つ隣の廃倉庫から
変な音がし始めた。
なんというか花火のシュワーッ！っていう音がたくさん。

ヴィヴィオ「なんだろう？」

ノーヴェ「ん？ああ、あそこは確か…」

説明しようとしたノーヴェだったが、突然倉庫の扉を突き破って何
かが飛び出して
きたので最後まで言うことができなかった。

テ「今度は何！？」

ス「なんじゃあれ？」

リオ「あ、コロナ、あれだよ。ミシン糸が巻いてあるあれ！」

コロナ「ああ、ボビンのこと？確かに似ているね」

それは直径３ｍほどの車輪で挿んだボビン状の構造で、車輪のリム
からなんか炎が
飛び出しながら前に進んでいる。それは桟橋を突っ切った後、海に
落っこちた。

「落ちた…」

ディエチ「なんだったの？」

すると倉庫からスバルとティアナが知っている人物が。

ス「ぐ、グレアム提督！？」

テ「嘘！？」

グレ「やあ、スバルさんにティアナさん。元気そうだね」

何事もなかったかのようにグレアム提督とその使い魔であるリーゼアリアとロッテが
登場する。

ノーヴェ「あの人は時空管理局本局顧問官のギル・グレアム提督だ」

アインハルトやリオ、コロナにノーヴェが説明する。

ヴィヴィオ「グレアムさん、こんにちは！」

グレ「お～ヴィヴィオちゃん。大きくなったね～」

ロッテ「イクスちゃ～ん、お元気～？」

イクス「うん！」

アリア「カナリアも元気そうだな」

カナ「そちらもな」

ス「それでそこで何をしてたんですか？」

挨拶が済んだところでスバルが質問する。

グレ「うむ、実は私の故郷の友人から頼まれてさっきの兵器を作っていたところなんだ」

テ「兵器！？あの車輪が！？」

アリア「あれはれっきとした陸上爆雷よ？正式名称はパンジャンドラム」

ロッテ「敵地に上陸するときにあれを突撃させて、壁とか障害物を積んである爆薬で
　吹っ飛ばすんだよ」

カナ「あんな奇天烈兵器でか？絶対に実戦で使えなかっただろ？」

グレ「いや、実戦投入はされなかった。実験途中で開発を中止したんだ」

アリア「でも父様の友達のイギリス陸軍の将軍さんがあれをもう一度作ってくれないか？
　って頼みに来たの」

ロッテ「それで作ってはみたんだけど…結果はさっき見たとおり」

グレ「魔法の力をもってしてもうまくいかないんだ。なんでだろう…もう一度
　最初から見直そう。じゃあまた。ウィルによろしく言ってお

いてくれ」

ス「はい」

1人と2匹は倉庫に戻っていった。

チンク「…聞いただけだからよくわからんが、絶対に完成する気がしない」

みんな「そうだよねー」

第１１５話：こっちも再戦（後書き）

イギリス軍の珍兵器がまさかの登場。動画を見ておもいつきました。
ちょうどイギリス人もいるし。

次回は考え中。
では

第１１６話：海底探索と…（前書き）

番外編１３でちょこっとでた「バーバリアン」と訓練艦の話。

第１１６話：海底探索と…

クラナガンから５０ｋｍ離れた位置にある海底火山。そこの近くをミッドチルダ
沿岸警備隊所属の、ＳＳＭ－２１「バーバリアン」はゆっくりと進んでいた。
今回の任務は海底火山の調査である。

「深度このまま、微速前進。艦外偵察機射出」

艦長のクリストファー・レヴィンソン一等海佐が命令を下す。

「微速前進、アイ。艦外偵察機射出します」

そう応じるのはハロルド・マッキンタイア二等海佐。艦長とは長い付き合いである。

ステルス性および安全性も考慮して、今の速度はわずか６ノットだった。
射出した探査機に内蔵されている特殊カメラが海の底を綺麗に映し出し、
レヴィンソンとマッキンタイアはそれに見入った。

海底で群れをなしたヒトデが触手をたなびかせていた。巨大なクラゲが
ゆっくりと安定した海底海流でひらひらと流されて行った。他にも説明もできないほど風変わりでみにくい顔をや形をした深海の生物が、
「バーバリアン」の探査機を見とがめ、喧嘩を売りにやってきた。

拡散する光やきらめく星のような光、突き抜けるような幕電光などがあたりを照らし、この世のものとは思われぬ青色や、電気を帯びたような
白色や、鮮明な黄色に染めた。これは俗に言う生物発光である。
この深さ－３，０００ｍ－でも周囲の海は生きていた。

「バーバリアン」は、またも熱水噴出孔帯を通過した。ソナーでゴロゴロという音が
聞こえたので、マッキンタイアが探査機を近づけてみた。するとそこにも生命があった。
原始的な微生物目当てに、色のない白いカニやばかでかい二枚貝や真っ赤で
太いチューブワームがコロニーを作っていた。

最近までこうした場所を訪れることがあるのは、ひとにぎりの科学者だけだった。
レヴィンソンとマッキンタイアが目にしている光景を直に見たことのある人間など、
皆無に等しかった。今この場にいて、自分の目でそれらを目撃した２人は、自分は
ことに特別な人間であるような気がした。

だがここで観光旅行はおしまいになる。ソナーの報告で、前方にて活動中の
海底火山が近付いている。近づきすぎるとまずいので、深度を５００ｍ上げる。

そこで目にしたのは２つの海底火山だった。それもどでかい。
報告と異なり、双子海底火山だった。火山の高さは海底から９００ｍから１ｋｍと

言ったところだろうか。とりあえず火山の名前をそれぞれ「イースト」と
「ウエスト」と名付けることにした。

「艦長、この海は我が艦にとって相性が悪いです。なるべく早く帰還しましょう」

ソナー長のジョージ・ウェルキンソン一等海尉が報告する。

「わかっているよ、ソナー」

マッキンタイアはコンソールを操作して、ソナー員達が扱っている基本的なソナーの
データの一覧を呼び出して、水温、密度、海水に溶けているミネラルの成分を見た。
「バーバリアン」の船体に取り付けられた化学物質探知器により、ソナー長の
言っていることがわかった。火山周辺の海水は、硫黄と塩酸を豊富に含む腐食性の
高いスープになっていた。おまけにマグマ一海底に出現した瞬間に溶岩という
名称に変わる一のせいで水温がかなり高く、「バーバリアン」の冷却システムの
機能が低下した。艦内の温度も上がってきたのでレヴィンソンは汗をかきはじめた。

「まったくなんてところだ。海洋学者（オーシャノグラファー）、調査の方はどうです？」

今日の任務のために乗り込んでいる民間の海洋学者（オーシャノグラファー）がソナーコンソールから

顔を上げる。この分野では珍しく女性で、名前はアリッサ・スチュアート。

「『イースト』の火山周辺の調査はまもなく終わります。まだ断言はできませんが、
じきに噴火する危険性があります。おそらく1時間以内に」

「わかった。ではもう一周してから『ウエスト』に向かう。それでいいですか?」

「充分です、艦長」

15分後に「イースト」の調査が終了し、「バーバリアン」は「ウエスト」へと
向かった。探査機はすでに回収した。海水が熱すぎて動作不良を起こしたからだ。
今「バーバリアン」は海底に出来た大きなくぼみの上を進んでいる。
そのくぼみは、
かつては溶岩の溜まった湖だった。表面が固まった後、割れ目や亀裂などの下から
溶岩が流れだしてしまった。その後、固まった表面が崩れ、底からそびえ立つ
孤立した溶岩柱だけが残された。「バーバリアン」がくぼみの奥側の壁を通った
とき、流れた溶岩が様々な状態で固まって層を織りなした個所の端っこが、
砕けて露出していることにレヴィンソンは気づいた。もっとデータが欲しいという

アリッサの要求に従い、レヴィンソンは操舵手（ヘルムズマン）のアンソニー・ジャクソン二等海尉に
命じて、別の方向からそのくぼみの上をもう一度通過させた。

「バーバリアン」がくぼみの中央部に差し掛かったとき、船体が奇妙に震えた。

「地表下の音が急激に大きくなっています！くぼみの底面に溶岩が新たに噴出すると思われます！」

ソナー長のジョージが大声で叫んだ。

「艦長！ただちに基準点（データム）から離れることを強く進言します！！」

マッキンタイアもまた強く主張した。”命からがら逃げ出す”ことを、潜水艦乗りは
そう言う。間髪入れずにレヴィンソンは操舵手（ヘルムズマン）に命令を下した。

が、遅かった。
マッキンタイアが見ている最中に、くぼみの底にあった幾つかの亀裂から
溶岩があふれ出した。くぼみに溶岩が溜まり始めた。溶岩は鮮紅色だ。船体に、
熱で温められてできた上昇水流が当たった。溶岩は固まっては表面が破れ、
ドロドロの溶岩がまたあふれ出た。「バーバリアン」は跳ね上がり、震動した。
熱せられた海水は浮揚性が小さくなるのだ。

「ヘルム、全速前進！前部バラストタンクブロー！前部潜舵を展開

！ここから逃げるぞ！」

操舵手（ヘルムズマン）「全速前進、アイ！機関制御室（マヌーヴァリング）は全速前進を受領通知しています！」

潜航士官（ダイヴ）「前部バラストタンクブロー、アイ！」

レヴィンソンが矢継ぎ早に命令を下すと、発令所（コン）にいた当直員が素早く実行した。

皆充分に経験を積んでいる古参兵と言っても過言ではない。しかし、それでも

あふれ出る溶岩がくぼみ全体を覆い尽くすほうが早かった。今やバスタブの中の

水が跳ねるように、溶岩の表面にさざなみが立っていた。「バーバリアン」が

下に引きずり込まれていく。

「まだ浮力が足りないのか！後部バラストタンクブロー！」

潜航士官（ダイヴ）「後部バラストタンクブロー、アイ！」

きわどいところだったが、なんとか「バーバリアン」はくぼみの上から脱出することが出来た。水温がいくぶん低い場所に出たため、艦の深度は安定した。

「海洋学者（オーシャノグラファー）。１つ質問が。私たちがさっきのような溶岩風呂に再び出くわす可能性は？」

「艦長、それはもうないでしょう。それより、充分なデータが回収

できたので調査の
完了を宣言します」

「そうか。副長、母港に戻ろうじゃないか」

「そうしましょう、艦長」

そして「バーバリアン」が進路を変更して火山から立ち去ってからわずか１０分後に、
「イースト」、「ウエスト」両海底火山が噴火を起こした。その衝撃は離れた場所にいた「バーバリアン」にも伝わり、コンソールの液晶ディスプレイが粉々に割れ、
天井の蛍光灯も何本も床に落ちて割れた。だが、それ以外に被害はなかった。
数カ月前に撃たれた核魚雷の迎撃をした時よりも激しい爆発であった。

「なかなかスリリングな旅行だったな、副長」

「いやはや、肝が冷えっぱなしでしたよ」

「まだ冷えているならすぐそばにいい熱源があるぞ？」

「またまたご冗談を」

その時、ソナー長が叫んだ。

「艦長、空／海インターフェイスで音響カップリングを捉えました！衝撃波音（ソニックブーム）です！
おそらく戦闘機がこちらに向かってきます！」

「なんだと？敵か？」

「わかりません…たった今戦闘機が本艦の真上で何かを投下しました！」

「爆雷攻撃か？」

マッキンタイアがソナー長の後ろからコンソールを覗き込む。

「いえ、これはトランスデューサーです。今データを解読中です」

飛んできたのはＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機だった。緊急事態用に地上本部に保管されていた
１機であり、それが秘密音響コードで「バーバリアン」にデータを中継する
トランスデューサーを数個投下したのだった。

「解読完了。ヘッダーによれば、艦長の個人コードが必要だそうです」

「わかった。こちらにまわしてくれ」

レヴィンソンは自分のコンソールで暗証コードを入力し、内容を読んだ。

「…なんてことだ」

「艦長？」

珍しく顔を青くしている艦長を見て、マッキンタイアは不審に思った。

「副長、私の部屋で少し話そう。航海長（ナヴィゲーター）、指揮を頼む」

航海長（ナヴィゲーター）「はっ！」

艦長室に入ったレヴィンソンは鍵をかけて椅子に座った。

「まずいことになったぞ、ハロルド」

「一体何が起きたんだ、クリス？」

2人だけの時は砕けた話し方になる。

「訓練艦の『クレスト』が先ほどの海底火山の噴火に巻き込まれたそうだ。

下から飛んできた大きな岩が機関室を直撃して、後部が完全に浸水し

運良く近くにあった海山にうまく着底した。死者はゼロ、負傷者は多数。

訓練生にしては上出来だ」

「クレスト」とはディーゼル・エレクトリック潜水艦で、「バーバリアン」を造っていた

時に、ウィルが片手間に隣のドックで造った訓練艦である。大きさはバーバリアン級と
同じで、武装も同じ。違うのは動力源と深深度への潜航能力がないことだけである。

「なんてこった…それで？」

「着底後に通信ブイを上げて『クレスト」が状況を本部に知らせたのが５分前。
地上本部から戦闘機が慌ただしく飛び立ったのがさっきということだ」

「なるほど。で、我々への命令は？」

「それがな…内部格納庫に収まっている新型の潜水艇があるだろ？あれで
『クレスト』の全乗組員を救出しろとのことだ」

「…そんなこと出来んのか？その、物理的に」

「まあ、この艦にあと１２０人も入るかと聞かれれば入る事は入るんだが、
収容後は浮上して当直員以外は甲板に出てもらうことになるだろうな」

「そうか…まあやるしかないか」

「我々は今でも軍人だからな」

「命令には従います、ってか」

発令所に戻った2人は全乗組員に新たな任務の内容を知らせて、現場に向かうことにした。任務内容を聞いた乗組員は、皆引き締まった表情をしていた。

２０分後、現場の海山に到着した。しかし肝心の潜水艦が見つからない。

「ソナー、この位置であっているのか？」

「はい、通信ブイのデータにはこの座標が記録されていました」

「でもいないな…もしかしたら海流に引きずられて流されたかも知れんな。
探査機を展開しろ」

「アイアイ」

海山の端っこまで行くと、そこに「クレスト」はいた。あともう少しで
海の底に落ちそうだ。

「よし、見つけたか。認識コードを送信してみろ」

答えはすぐに来た。

「応答コードを受信。続いて艦内の状況報告も受信しました」

「なんと言っている？」

「ええと、乗組員は全員無事。衛生下士官がけが人の手当てを実行中。
急を要するけが人はゼロ。ほとんどが骨折や脳震盪などの症状だそうです。
酸素残量は5時間分。後部蓄電池が浸水して使えないため、前部蓄電池のみが
使用可能。それでも残り3時間は電気が使えるそうです」

「なら充分だ。急いで救出を開始しよう」

「了解！」

時間はかかったけど、なんとか全員を救出することが出来た。潜水艇は
１０人乗りだったけど何とかなった。まず２４人のけが人を先に運びだした。
運び終わった後に、潜水艇の輸送室内の座席を全てひっぺがして一度に
２０人乗れるようにした。その結果、合計で2時間で作業は終わった。
「クレスト」はこのまま放置する。もちろん廃艦にするわけではない。
今頃クラナガン港から大型クレーン船が出航しているはずだ。そのクレーンで
「クレスト」を引っ張り上げてドックに運び、破損箇所を修理して再び

使えるようにするのだ。物は大切に使わないとね。

救出後、すぐさま浮上した「バーバリアン」は任務完了の報告を本部へと送信した。
5分もしないうちにラーティが数機飛んできて、負傷者を病院まで運んだ。

浮上航行だとそこまで速度が出ないので、20ノットでのんびりとドックへ
帰還した。するとそこには「クレスト」の乗組員の家族の人達が大勢待っていた。
一応死者はいない、と報告したが自分の目で確かめたいのだろう。

「両舷停止」

アルミの板が渡されて、「クレスト」の乗組員らが降りると、家族の人達は
涙を流しながら抱き合ったりしていた。

「よかったよかった」

「ですな」

レヴィンソンとマッキンタイアは艦のすぐ側のベンチでコーヒーを飲みながら
それを眺めていた。すると1人の乗組員の家族の人がやってきた。

「すみません、もしかしてあなたが私の夫を助けだしてくれたのですか？」

「え？まあそうなるが…」

すると女性は涙を流しながら礼を言った。

「本当にありがとうございました！感謝しています！」

「いや、礼を言われるほどのことでは…それよりも旦那さんの側にいてあげてください」

レヴィンソンは実に謙虚な人物であった。

その後行われていた会議において、全会一致で「バーバリアン」乗組員全員に勲章と褒賞を与えることが決定された。また、本人にも知らされなかったが、レヴィンソン一等海佐の名前が次期准将候補及び次期沿岸警備隊司令官候補一覧の一番上に記載された…

第１１６話：海底探索と…（後書き）

また艦長のお話でした。こつこつと昇進コースにのっていますね。

次回はテストと合宿に足を突っ込むか、もしくは別の話かも。

では

第１１７話：みんな大好きテスト、そして…（前書き）

本編にバックします。

第117話：みんな大好きテスト、そして…

～St．ヒルデ魔法学院、初等科校舎～

とある教室で、４人の子供が教科書とにらめっこをしていた。隣にいる黒い髪を
腰まで伸ばした少女は、１人だけ教科書ではなく管理局の様々な資格を取るための
勉強をしていた。しばらくして４人の中の１人、コロナ・ティミルが教科書を
放り出して机に突っ伏した。

コロナ「あーもう疲れたー」

リオ「ていうか今日も試験とか大変だよー！！」

そう。学生の敵、試験である。今は一学期の前期試験の真っ只中なのだ。

ヴィヴィオ「そうなんだよね～」

３年生の時に成績ランキングで２位をとったヴィヴィオも疲れた顔をしている。

イクス「４年生になると勉強も大変になってきたな～」

コロナ「そうだよね～、ってイクスもヴィヴィオもめっちゃ頭いいじゃん！」

リオ「そうだよ！カナリアなんてもう試験勉強すらしていないじゃん！」

カナ「これくらいのことはたいして難しくないだろう？今はこっちのほうが重要だ」

参考書から顔をあげずにカナリアは返事をした。表紙には「部隊運用術・上級編」とでかでかと書いてある。彼女の机の上には他にも「艦隊運用の全て」とか「目指せ！ラーティのパイロット！」などの参考書が山になっている。

リオ「うわー、何書いてあるのかぜんっぜん理解出来ないよ…」

カナリアの後ろから参考書を覗き込んだリオは頭にはてなマークを浮かべた。

コロナ「カナリア、それはどういう資格のための本なの？」

カナ「大隊指揮官や戦力統御の資格に役立つ本だぞ？」

コロナ「？？？」

イクス「コロナ、わからなくて普通だから気にしなくていいよ」

理解できなくて思考が止まりかかっていたコロナにイクスが助け舟を出す。

リオ「この前も先生に怒られていなかった？」

ヴィヴィオ「カナリア、授業中に他の勉強しちゃ駄目って言われてたじゃん」

カナ「わかっている。もう授業中に他の勉強はしていないぞ？」

コロナ「じゃあなんで怒られたの？」

カナ「それがわからないんだ。ただ私は教科書を広げ、ノートも出して、
その上に頭を置いて寝ていただけなんだが…」

４人「それだ！」

カナ「なぜだ？すでに知っていることを教えてもらっても何の得にもならないから
寝たんだがな」

コロナ「あはは…」

イクス「お姉様の言いたいことはわかるんだけどね…」

ヴィヴィオ「か～な～り～あ～？」

カナ「…以後気をつける」

リオ「とにかく！試験が終われば土日とあわせて４日間の試験休み！」

コロナ「うん！楽しい旅行が待ってるよ！」

ヴィヴィオ「宿泊先も遊び場ももう準備万端だって！」

４人「おおー！」

今回の試験休み中に、この５人はなのは達の引率で異世界旅行にいくことになっている。

リオ「よーし！じゃあ楽しい試験休みを笑顔で迎えるために！」

コロナ「目指せ１００点満点！」

ヴィヴィオ「おー！」

リオ「おー！」

イクス「おー！」

カナ「…おー」

１００点しかとったことがないカナリアも一応返事をする。

～同時刻、屋敷～

そこでは非番のなのはとフェイトが遠く離れたところにいるエリオとキャロと
話をしていた。

フェ「エリオ、キャロ、そっちはどう？」

エ「はい、さっき無事に引き継ぎが終わりました」

キャ「予定通り、週末からお休みです！」

フェ「そう、よかった！」

な「じゃあ予定通りにみんなで行けるね。春の大自然旅行ツアー＆
　ルーテシアもいっしょにみんなでオフトレーニング！」

エ「はい！」

キャ「楽しみです！フリードもムワリムと会いたがっていますし」

フリ「きゅく～」

フェ「ウィルとムワリムも一緒に行くって言ってたね」

な「仕事とか大丈夫なのかな？」

フェ「まあウィルの事だしなんとかするんじゃないかな」

～同時刻、ナカジマ家、リビング～

「みんなで旅行あたしも行きたかったッス～！」

そう言いながらじたばたしているのはウェンディ。リビングにはチンクたちもいて、
お茶とケーキでのんびりしている。

ウェンディ「ノーヴェとスバルだけってズルいッス～！！」

ノーヴェ「あーうるせーな。あたしらだって別に遊びで行くわけじゃねー。
スバルはオフトレだしあたしはチビ達の引率だ」

そう言うが。

ディエチ「とかいって通販で水着とか川遊びセットを買ってるのをおねーちゃんが
知らないとでも？」

そう言いながらディエチは小包を持ち上げる。

チンク「なんだ、そうなのか」

ノーヴェ「っ！！！」

慌ててノーヴェは小包をひったくった。

ノーヴェ「おまえ人のものを勝手にっ！！」

ディエチ「いや、発送データに中身書いてあるし。まあいいじゃない、
ノーヴェはバイトも救助隊の研修も頑張ってるんだし」

チンク「まったくだ」

ノーヴェ「だから遊びじゃねーって」

ちょっと顔を赤くしながらノーヴェは返事をする。その腰にウェンディがまとわり
つきながら「いいな～いいな～ッス～」などと言っている。

チンク「そういえばあの子…アインハルトも一緒か？」

ノーヴェ「そのつもり。これから誘うんだけどね」

ウェンディ「？ぇ～」

ノーヴェ「いいかげんにしろ！」

～Ｓｔ．ヒルデ魔法学院、中等科校舎付近～

そこでアインハルト・ストラトスはノーヴェからの通信を受けていた。

「合宿…ですか？すみません、私は練習がありますので」

ノーヴェ「だからその練習のために行くんだって。あたしや姉貴もいるしヴィヴィオ達
　３姉妹も来る。練習相手には事欠かねー。しかも魔導師

ランクＡＡから
　　オーバーＳ、おまけにＥＸのトレーニング…は役に立たないと思うけど、
　　まあとにかく見られる」

「はい…」

ノーヴェ「ついでに歴史に詳しくてお前の祖国のレアな伝記本とか持ってるお嬢もいる。
　　まぁたった４日だ。騙されたと思ってきてみろって。つまんなかったら
　　走り込むなり１人で練習するなりしててていいんだしさ」

「あの…」

ノーヴェ「いいから来い！絶対いい経験になる！後で詳しいことメールすっから
　　とりあえず今日の試験頑張れな」

「…はい…」

ノーヴェはアインハルトに話す隙を与えなかった。

ディエチ「ノーヴェのああいう強引さってつくづくスバルと姉妹だよねぇ」

２人のやりとりを見ていたディエチがそう言うと、

チンク「ああ…そうだな」

とチンクも同意する。その横でウェンディがまだいじけていた。

ウェンディ「うぅ、あたしも行きたかったッス～、バイトが～」

諦めの悪いウェンディであった。

～同時刻、地上本部、局長執務室～

「次の仕事は！？」

ドゥーエ「ええと、この書類データにサインを…」

「終わった！次！」

ドゥーエ「次は首都航空隊からの申し出ｄ」

「それはレジーにまわせ！次！」

なんとしてもヴィヴィオ達と旅行にいくために俺は大急ぎで仕事をしている。

かといって雑にやっては意味が無い。きちんと丁寧に、かつ素早くこなしている。

ドゥーエ「いつもこんな感じで仕事をしてくれればいいのに…」

ティ「ご主人様、ちょっと休憩しないとまずいって！」

「構わん。まだいっぱい溜まってんだから！次！」

ドゥーエ「次はこれにサインを」

「うおおおおお！！」

だがずーっと手を動かし続けていたのでついに。

「いてえええええええ！！」

ティ「ご主人様！？あああ！両腕が真っ赤っか！」

ドゥーエ「もろ腱鞘炎じゃないですか！すぐに医者を」

「いいからドーピングだ！！もう痛くない！」

ドゥーエ「嘘つかないで下さい！」

「嘘じゃない！だって痛覚を無効化したからな！もう何も怖くない！」

ティ「」

ドゥーエ「」

結局2人に殴られて仕事は中断した。でも医者に掛かっている時間はないので、

能力を使ってあっという間に怪我をなおして仕事を再開した。

飯も食わずに働いた結果、休みが取れることになった。

「ごはん…へった…めしぃ…がくっ」

ティ「わあああ！！ご主人様が今にも餓死しそうなの！」

車ではなく黒のラーティにウィルを投げ込んで、ティーナは屋敷まで
かっ飛ばした。
屋敷に付く前にティーナは連絡を入れる。

な「あれ、ティーナちゃん？どうかしｔ」

ティ「晩ご飯は！？」

な「そんなに慌てなくても大丈夫だよ。もうすぐできｒ」

ティ「ご主人様が餓死しそうだから急いで！もうすぐ着くから！」

な「わ、わかったの！」

屋敷の玄関前に強行着陸したラーティからティーナがウィルを引き
ずりながら
出てきた。そして食堂に放り込む。

ティ「ご主人様！ご飯だよ！」

な「いっぱい作ったよ！」

ヴィヴィオ「うわーウィルパパものすごくげっそりしてる」

カナ「母上達と熱い夜を過ごした翌朝みたいな感じだな」

フェ「ちょっとカナリア何言ってるの！？」

カナリアの不意打ち発言にフェイトは顔を赤くする。

「ごはん…いただきます！！」

みんな「いただきまーす！」

「がつがつもぐもつ…」

俺の食べっぷりに周りは思わず箸を止めた。

ヴィ「うへー、ウィルがスバル化してるぞ」

シグ「一体どれだけ腹が減っていたんだ？」

ティ「朝ごはんしか食べてないの」

シャ「…なんか納得の結果ね」

イクス「お父様きちんと3食食べないととだめだよ？」

「もぐもぐ、ごくん！あああ、生き返った！」

俺はようやく箸を止めて笑顔になった。

ザフィ「復活したか」

「やっぱり旨い飯を食べるとなんでもできる気がするな！」

な「にゃはは、それは言いすぎじゃない？」

「そうか？だけど今度の旅行には俺も行けることになったぞ！仕事終わらせたからな」

イクス「ほんと？やったー！」

カナ「お疲れ様、父上」

「そうだ、咲夜。格納庫にしまいっぱなしのクルーザーを整備しておいてくれ。
今度の旅行で使う予定だから」

咲夜「かしこまりました、旦那様」

ヴィヴィオ「またあれに乗れるの？」

クローム塗装が美しいナブー・ロイヤル・クルーザーが好きなヴィヴィオは笑顔で尋ねた。

ティ「もちろんよ。旅行で戦艦に乗るわけ無いし」

フェ「それはそうだね」

で、そんなこんなで試験期間も無事に終了。屋敷には3姉妹とリオとコロナがいた。

な「試験終了おつかれさま！」

フェ「みんなどうだった？」

すると5人の子供達は笑顔で成績表をみせた。

リオ「花丸評価いただきました！」

ヴィヴィオ「5人揃って！」

コロナ「優等生ですっ！」

イクス「いえーい！」

カナ「当然の結果だな」

な「わーみんなすごいすごーいっ！」

フェ「これならもう堂々とお出かけできるね！」

「よくやったなみんな」

俺達3人は拍手して褒めてあげた。

レイハ「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ.」

ヴィヴィオ「ありがとレイジングハート！」

な「じゃ、リオちゃんとコロナちゃんはいったんおうちに戻って準備しないとね」

リオ、コロナ「はいっ！」

フェ「おうちの方にもご挨拶したいから車出すね」

「よろしくな、フェイト」

ヴィヴィオ「あ、じゃあ準備済ませて私も行く！」

しかしなのはがそれを止める。

な「あーヴィヴィオは待ってて。お客様が来るから」

ヴィヴィオ「おきゃくさま？」

心当たりの無いヴィヴィオは首を傾げる。

カナ「なるほどな…」

誰が来るのかを察したカナリアは１人で納得していた。

その時玄関先に車がやってくるのが見えた。

レイハ「Ｉｔ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｈａｖｅ　ｃｏｍｅ.（いらっしゃったようです）」

そしてメイドに案内されてやってきたのは。

「こんにちは」

ヴィヴィオ「アインハルトさん!?…とノーヴェ！」

イクス「あー！こんにちは！」

ノーヴェが（無理やり）誘ったアインハルトだった。

「異世界での訓練合宿とのことでノーヴェさんにお誘いいただきました。
　同行させていただいてもよろしいでしょうか?」

するとヴィヴィオは電光石火のごとくアインハルトの手を握って上下にぶんぶん振った。

ヴィヴィオ「はいっっ！！もー全力で大歓迎ですっ！！」

イクス「異議なーし！！」

フェ「とりあえず2人とも座って?」

ヴィヴィオ「あ、うん！アインハルトさん、どうぞ！」

「おじゃまします」

後ろにいたノーヴェとフェイトがこっそり話す。

フェ「あの子が同行するって教えなかったの、正解だねノーヴェ」

ノーヴェ「はい。予想以上に」

リオ「こんにちわー！」

な「はじめまして…アインハルトちゃん。ヴィヴィオ達の母です。娘達が
いつもお世話になっています」

「いえ、あのこちらこそ」

一応初対面のなのははきちんと挨拶する。

な「格闘技強いんだよね？すごいねぇ」

「は…はい…」

「なのは、顔が近いぞ」

ヴィヴィオ「ちょ、ママ！アインハルトさん物静かな人だから！」

な「えー？」

フェ「さて、ここから出発するメンバーはみんな揃ったし、まずはリオちゃんと
　コロナちゃんの荷物を取りに行って、それから出発しようか？」

みんな「はーい！」

「あの、どうやって行くんですか？」

アインハルトは周りを見渡しながらそう尋ねた。

な「ああ、説明していなかったね。ウィル君の次元航行船で行くんだ」

「おう！準備は出来ているぞ。荷造りが終わった人は地下一階の転送ポートまで
　運んでくれ。そこから船のあるところまで行く」

な「わかったの」

「個人で次元航行船を持っているなんてすごいですね。さすが局長…」

「局長ってめんどくさいんだぞ？そりゃ地位は高いけどさ。なんならフェイト、
　1日局長とかやってみるか？」

フェ「わたし！？え、遠慮しとくよ…」

な「ところで船ってどこにあるの？」

咲夜「昨日点検と整備が完了しましたので、第1月面基地の2番ドックに収容されています」

「月面基地！？」

なんかアインハルトが超驚いている。

フェ「そっか。だから転送ポートに集合なんだね？」

「そういうことだ」

コロナ「あ、ヴィヴィオ達も準備しないと！」

ヴィヴィオ「あーそうだ！クリス手伝って！」

イクス「スレインもお願い！」

カナ「準備くらい前日にやっておけばいいものを」

そういいながら優雅に紅茶をすするカナリア。

リオ「なんかカナリアって常に先のことを考えて行動しているよね」

コロナ「言えてる…」

カナ「それが当たり前だと思っているからな」

「うむ、いい心がけだ」

リオ「あれ、そういえばスバルさん達は？」

リオが隣にいたノーヴェに聞く。

ノーヴェ「スバルはウィルのシャトルを使って合流する予定だ。今頃仕事終えている
頃じゃねーかな？」

～同時刻、沿岸警備隊隊舎、特別救助隊オフィス～

ス「それでは司令、スバル・ナカジマ・ロンバート防災士長。本日只今より４日間の
訓練休暇に入ります！」

普段とは違い、きちんと制服を着て敬礼をする。

「おう頑張ってこいや。今回の訓練は例の執務官殿も一緒だったか？」

ス「はい！※ランスター執務官と一緒にいろいろ鍛え直してきます」

※本当なら「ロンバート執務官」と呼ぶべきだが、そうするとフェイトとかぶるので、
結婚する前の苗字で呼んでいる。

イクス「ティアナお母様は？」

「まず本局に寄ってティアナを拾ってから『カルナージ』に向かうよ」

～時空管理局本局、次元航行部隊第３オフィス～

そこには執務官の制服を着たティアナがいた。

テ「オフトレとはいえ本格的な戦闘訓練はちょっと久しぶりね。気合入れなきゃ！
　ヴィヴィオ達やアインハルト達にダメなところは見せられないし！」

クロミラ「Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ．」

ティアナのデバイスであるクロスミラージュもそう答える。

テ「でもその前にこのデータ整理を終わらせなきゃ」

クロミラ「Ｌｅｔ'ｓ　ｗｏｒｋ　ｈａｒｄ．（頑張りましょう）」

～無人世界「カルナージ」、アルピーノ家～

そこにはメガーヌとゼストがいた。なのはとウィルと話している。

メガーヌ「じゃそれで人数確定ね？」

な「はい、お世話になります。メガーヌさん、ゼストさん」

ゼスト「むしろ大歓迎だ。ルーテシアも喜んでいるし、待っているぞ」

近くの丘の上にはルーテシアとガリューがいた。

「ふふ、うふふ」

な、なんかいきなり笑い出したぞこいつ。

ルー「ねえガリュー、わたし自分の才能がちょっと怖いかも。なんといっても今回の
おもてなしは過去最高！レイヤー建造物で組んだ訓練場は陸戦魔道士の練習に！
わたしとガリューの手作りアスレチックフィールドはみんなのフィジカル
トレーニングに！我が家の横に建築した宿泊ドッジも内外ともにパワーアップ！
設計わたし！掘ったら出てきた天然温泉も癒しの空間にノリノリで改造！！
完璧！もと6課のみなさんもヴィヴィオ達も！我が家にどーんとおいでませー！！」

屋根の上に移動して笑いながらそう宣言するルーテシア。

メガーヌ「ルーテシア～、スープの味見手伝って～」

ゼスト「そこは危ないぞ」

ルー「はーい、ママ、パパ」

転送ポート前にはみんなが荷物を運んでいる。そんな中、ヴィヴィオはとても
わくわくしていた。

ヴィヴィオ（みんなで一緒のトレーニング&旅行ツアー。クリスとの遠出も初めてだし。
アインハルトさんも一緒だし）

後ろを向いてノーヴェと一緒にいたアインハルトに声をかける。

ヴィヴィオ「アインハルトさん、４日間よろしくお願いしますね」

「はい、軽い手合わせの機会などあればお願いできればと」

ヴィヴィオ「はい！こちらこそぜひっ！」

『ムワリムも楽しそうだな』

ムワ『フリードに会えるからな。久しぶりだし楽しみだ』

イクス「お父様、何語喋ってるの？」

「え、ただの龍語だよ。よし、みんな揃ったな？転送開始！」

これから４日間、素敵なイベントがはじまります！

第117話：みんな大好きテスト、そして…（後書き）

腕がいたいでつ。キーボードの打ち過ぎかも。なんかキーに書いてある文字が薄くなってきた。見えないキーもある…新しいの買わないと。

次回は合宿1日目。多分

では

第１１８話：楽しい合宿？その１（前書き）

楽しい合宿ですよ。

あと、今この小説の更新スピードは毎日ですが、もしかしたらこの先ずれるかもしれません。就職活動がちょいと忙しいので。

第118話：楽しい合宿？その1

～第1月面基地、転送ポート～

「はい到着っと」

な「いつ来ても広いね。ドックってこっちだっけ？」

「そだよー」

俺達合宿メンバーはミッドの屋敷から月面基地まで転送ポートを通ってやってきた。

「…えっ」

1人だけ今の状況についていけてない人がいた。アインハルト・ストラトスである。

「あ、あのロンバートさん？さっき月面基地がどうって…」

「ん？ああ、ここは第1月面基地だ。管理局のな。秘密だぞ？」

「えええええ！！わ、わかりました…」

周りを見ながら信じられないといった顔をしながらも頷く。そこに。

「艦長、スバルさんの乗ったラムダ級シャトルが間もなくドックに到着します」

「わかった、エディ」

リオ「えっ?今の誰!?」

コロナ「見えない人の声がした!」

「…ロンバートさん?まさか透明人間でもいるんですか?」

「ウィルでいいよ。さすがに透明人間は居ないよ。今のはここの基地の管理をしている
人口知能の声だよ。エディ、お客様に自己紹介を」

「はいはい、どうもちびっこの皆さん。私は人工知能『エディ』と申します。
どうぞよろしく」

リオ「よ、よろしくお願いします」

コロナ「すごーい…」

「フェイト、その辺に電動カートないか?」

フェ「カート?あ、あれかな」

「それそれ。それに荷物載せて動かすからさ」

そう言って俺はみんなの荷物をカートに荷台に乗せて動かした。

～2番ドック～

そこには例の美しいナブー・ロイヤル・クルーザーが置かれていた。

「きれいな船ですね…」

アインハルトも思わずつぶやく。

リオ「ぴっかぴかだ！」

コロナ「うへ～いくらするんだろ～」

「そろそろスバルも来る頃だ」

そう言ったすぐ後に、ドックにラムダ級シャトルが3機入ってきた。

そのうちの

2機は護衛である。真ん中のシャトルが翼をたたんで着陸し、ランプから

荷物を引きずりながらスバルが降りてきた。

ス「遅くなってすいませんでした～」

「気にするな、こっちも今着いたばかりだ。さてミッドから出発するのはこれで

全員だな？それじゃあティアナを拾いに行こう」

みんな「はーい！」

ヴィヴィオ「ふかふか～♪」

イクス「ひろ～い♪」

船内に入った一行は座席に座ってくつろいでいる。

「なんか食べたくなったらそこのメイドに声かけてくれ。俺は操縦席にいるからな」

ノーヴェ「わかった」

「さてと、久しぶりに運転するから面白いことを…」

な「しなくていいの！」

フェ「ウィル、それは勘弁して！」

なんてことを言っていたらなのはとフェイトが猛反対し始めた。

「あの、なんでそんなに反対するのですか？」

素直にアインハルトが聞くと、なのはとフェイトは顔を少し青くしながら答えた。

な「前にね、この船で小惑星帯を突っ切ったことがあるの。その時に船が逆さまに
なるし急加速するし急減速するし前後左右にぐるぐる回ったり…」

フェ「それでみんな気持ち悪くなっちゃってね」

な「それはもうカオスだったの」

「そ、そんなことが…」

アインハルトは頭の中でなのは達が話した状況を想像しようとしたがやめておいた。

ヴィヴィオ「ウィルパパ！今日はだめだよ！お客様が乗っているんだから！」

「あいあい、わかったよ～」

そう言いながら俺は操縦席に消えた。後ろのほうでス「ほんとにわかっているんですかね？」

とか言っていたけど無視。

「よしエディ。離陸前チェックリスト確認」

「了解！」

「ランプ閉鎖。エンジン起動、最小出力」

「アイアイ」

俺はヘッドセットを耳にひっかけて、客室のスピーカーに繋いだ。

「えー、本日はロンバート航空をご利用いただきありがとうござい

ます。
　間もなく出発いたしますのでシートベルトの着用をお願いいたします」
な「にゃはは…飛行機の機長さんみたい」
リオ「シートベルトよし！」
カチャッという音を鳴らして金具を固定する。他のみんなもきちんと着用する。
「よし、全員着けたな？では行こう！微速前進っと」
俺はスロットルを操作して船体をゆっくりと浮かべた。
コロナ「わー！浮いてるよ！」
「すごい…」
「着陸脚収納（ランディングギア）。各部チェック」
「収納完了。ＡＳＧ（全システム異状なし）です」
「じゃあ思いっきりかっとばせないからゆっくりと速度を上げていこうっと」
ドックからゆっくりと船が出る。客室の窓からはミッドチルダが大きく映っていた。
イクス「すごーい！」

カナ「いつ見ても美しいな」

しばらくそのまま飛んでいたが、やがて次元航行を開始し本局へと向かった。

～本局、第1ドック～

テ「そろそろかしら？」

荷物をまとめたティアナがそこにいて、缶コーヒーを飲みながら待っていた。

クロミラ「Ｓｈｉｐ　ａｐｐｒｏａｃｈｉｎｇ．Ｉｔ' ｓ　ｈｉｍ，ｍａｓｔｅｒ．（船が接近中、彼です）」

と、クロスミラージュが知らせると同時にドックの中にウィルの乗った船が入ってくる。

テ「さすがウィルさん、いつも時間通りね」

クロミラ「Ｅｘａｃｔｌｙ．（仰るとおりです）」

下ろされたランプを登って客室に入るとみんながいた。

「ようティアナ」

ス「ティア～会いたかったよ～」

テ「いきなり抱きつくな！」

リオ「ティアナさんこんにちは！」

コロナ「こんにちは！」

テ「こんにちは！みんな元気そうね？」

「よし、それじゃあ『カルナージ』に向かうぞ！」

みんな「おーっ！！」

無人世界「カルナージ」はクラナガンからだと４時間かかるが、本局に寄ったので
今回は５時間ほどかかった。標準時差は７時間。１年を通して温暖な大自然の恵み
豊かな世界である。

俺は船をアルピーノ家のすぐ近くにある駐機スポットに着陸させた。
昔ここで
結婚式をあげたときにルールーに作ってもらったんだっけ。

そこから歩いてすぐのところに家があり、ルーテシアとメガーヌさん、それに
ゼストさんが待っていた。

ルー「みんないらっしゃ～い！」

な「こんにちわ～！」

フェ「お世話になりまーす！」

メガーヌ「みんなで来てくれて嬉しいわ～。食事もいっぱい用意したからゆっくりしていってね」

ス「ありがとうございます！」

食事の話を聞いてスバルはとても嬉しそう。

「ゼストさん、ご無沙汰してます」

ゼスト「ウィルも元気そうだな。アギトは元気か？」

「ええ、シグナムと仲良くやっていますよ」

子供達はルーテシアと話している。

コロナ「ルーちゃん！」

ヴィヴィオ「ルールー！久しぶり～！」

イクス「会いたかったよ～！」

ルー「うん、ヴィヴィオ、コロナ、イクス。リオは直接会うのは初めてだね」

リオ「今までモニターだったもんね」

ルー「うん、モニターで見るより可愛い」

そう言ってルーテシアはリオの頭をなでなでした。リオは顔を赤くしながら答える。

リオ「ほ、ほんと～？」

ヴィヴィオ「あ、ルールー！こちらがメールでも話した…」

と、ヴィヴィオがアインハルトを紹介する。

「アインハルト・ストラトスです」

ルー「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィオ達の友達、１４歳」

コロナ「ルーちゃん歴史とか詳しいんですよ」

ルー「えっへん」

カナ「と無い胸を張るルーテシアであった、まる」

ルー「うー！それは言わないでよ！」

カナリアの余計な一言にルーテシアが唸る。

ス「あれ？エリオとキャロはまだでしたか？」

メガーヌ「ああ、ふたりは今ねぇ…」

スバルは周りを見ながらメガーヌさんに尋ねる。するとその2人とフリードがやってきた。

キャ「おつかれさまでーすっ！」

フェ「エリオ！キャロ！」

ス「わーお！エリオまた背伸びてる！」

エ「そ、そうですか？」

キャ「わたしもちょっと伸びましたよ！？1．5ｃｍ！」

隣でキャロも大きな声で主張する。

「うん、キャロもきちんと大きくなっているもんな～」

フェ「アインハルト、紹介するね」

「あ、はい」

フェ「2人とも私達の家族で…」

エ「エリオ・モンディアルです」

キャ「キャロ・ル・ルシエと飛龍のフリードｄ…あれ？」

さっきまで頭の上にいたはずのフリードが忽然と姿を消していた。

「ああ、フリードならあそこだ」

俺が指を差した先にはムワリムとフリードが仲良く話して（？）いた。

普通の人には「がおー」と「きゅく～」っていう鳴き声にしか聞こえないけどね。

「アインハルト・ストラトスです」

キャ「うん、よろしくねアインハルト」

ルー「1人ちびっ子がいるけど3人で同い年なんだ～」

キャ「なんですと!?1．5ｃｍも伸びたのに!!」

若干涙目でキャロが訴える。でも1．5ｃｍじゃあねぇ。

その時後ろから物音がしたのでアインハルトはすぐさま振り返った。

するとそこには

人間サイズの無骨な格好の虫が二本足で立っていて、背中には魚の入ったかごを

背負っていた。

「!?」

敵かと思ったのでアインハルトが即座に構えるが。

ヴィヴィオ「あー!アインハルトさんごめんなさい!大丈夫です!」

コロナ「あの子は…」

2人が必死で止める。

ルー「私の召喚獣で大事な家族。ガリューって言うの」

するとガリューは胸に手を当てて礼をした。言葉を発することはないが、人の声に頷いたり、反応を見せるなど人間の言葉や感情を理解できる程の知能を有するのだ。

「し、失礼しました」

コロナ「わたしも最初はびっくりしました！」

みんなの挨拶が済んだところでメガーヌさんが声をかける。

メガーヌ「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ？子供達はどこに遊びにいく？」

子供達の引率係のノーヴェがそれに答える。

ノーヴェ「やっぱりまずは川遊びかなと。お嬢も来るだろ？」

ルー「うん！」

ノーヴェ「アインハルトもこっち来いな」

「はい」

な「じゃ着替えてアスレチック前に集合にしよう！」

大人「はいっ！」

ノーヴェ「こっちも着替えてロッジ裏に集合！」

子供「はーいっ！」

「さて、それじゃあ俺もやるとするか」

そう言ってから俺は隣で飛んでいるムワリムに声をかける。

『ムワリムもたまには元の姿で空を飛んでみたらどうだ？フリード誘ってさ』

ムワ『それは大歓迎だが、いいのか？』

『…あれだ、地面に足跡とか残らないようにな。この川を下れば海もあるし水浴びもできるぞ』

ムワ『そうか。ありがとう、我が主よ』

そう言ってフリードのところへ飛んでいってちょっと話した後に川下へと飛んでいった。

「うんうん、これでリラックス出来るだろう」

こうして合宿はスタートしたのであった…

おまけ。

～地上本部、局長執務室～

ドゥーエ「今頃ウィルさん達はもう合宿を始めているんでしょうね～」

トーレ「そうだな。しかし休暇なのに訓練とはな…」

クアットロ「なんだか休んだ意味が無い気がしますわ～」

セッテ「そうだよね。のんびりすればいいのに」

４人は執務室で談笑をしていた。局長が不在のため、この４人も暇なのだ。

ティ「いいな～ご主人様～」

不在の局長の椅子にはティーナが座っていた。要するに局長代理である。

ティ「お土産楽しみだな～」

ドゥーエ「でも無人世界でお土産なんて売っているんですかね？」

ドゥーエがそう言うとティーナは絶望した。

ティ「あああ！そうだった！あーあ、なんかやる気なくなっちゃった」

トーレ「ああそうだ、ウィルからの伝言があるぞ」

セッテ「えーっと、『もしティーナがやる気出ない、とかそれに類する発言を
　した場合、全力で仕事をさせること』だって」

ティ「なんで！？ご主人様が全部仕事終わらせたんじゃなかったの！？」

ドゥーエ「ええ、ですが比較的重要性が低く、かつ面倒くさいものはウィルさんが

ティーナさんのために、ってとっておいたんです」

ティ「」

クアットロ「ではでは～、次はこれですよ～」

トーレ「頑張ってな」

ティ「ご主人様のおにいいいいいいい！！！」

第１１８話：楽しい合宿？その１（後書き）

短いけど。

次回は川遊びから午後の模擬戦あたりまで。

では

第１１９話：楽しい合宿？その２

～アルピーノ家近くの川～

ロッジ裏に集合した子供グループは早速川へとやってきた。きれいでそこそこの
広さの川である。皆、思い思いの水着を着ている。

リオ「あたしいっちばーん！！」

ヴィヴィオ「あー、リオずるーいっ！！」

イクス「負けないもんね！」

カナ「ほら、２人とも準備運動をしないと」

そんな中、アインハルトはなぜか恥ずかしそうにノーヴェの隣でもじもじしていた。
なんでだろね。それを見たヴィヴィオは声をかける。

ヴィヴィオ「アインハルトさんも来てくださーいっ！」

ノーヴェ「ほれ、呼んでるぞ」

アインハルトはノーヴェにしか聞こえないような声で話した。

「ノーヴェさん、出来れば私は練習を…」

ノーヴェ「まあ準備運動だと思って遊んでやれよ。それに」

そこでノーヴェはニヤリと笑いながら言った。

ノーヴェ「あのチビ達の水遊びは結構ハードだぜ」

それを聞いてアインハルトは上着を脱いでヴィヴィオ達の方へ歩いていった。

リオ「あ、アインハルトさんどーぞー！」

ルー「気持ちいいよ～♪」

その様子を見ていたノーヴェは隣でぷかぷか浮いていたクリスにも声をかける。

ノーヴェ「ん？いいぞ、お前も一緒に行ってきて」

だが、しゃべれないクリスは自分の言いたいことをジェスチャーでノーヴェに伝えた。

ノーヴェ「なに？『外装（オーバーコート）がぬいぐるみなので濡れると飛べなくなります』？

…大変だな、お前も」

7人の小人、じゃなかった子供達は準備運動を終えて川に入っていた。

コロナ「じゃあ向こう岸までの往復、みんなで競争ー！」

みんな「おーっ！」

そして一斉にスタートしたが、アインハルトは大きく遅れた。

（…あれ？みんな、速い？）

ノーヴェ「お、気づいたか…」

その後もみんなで潜ったりバレーボールをしたりと色々と遊んでいたが、

途中でアインハルトは疲れて岸で休むことに。

（なんというか、皆さん本当に元気いっぱい…というか、その、元気…すぎるような…？）

「やっぱり水の中はあんまり経験ないか」

そこにノーヴェとクリスがやってくる。

「体力には少しは自身があったんですが…」

ノーヴェ「いや、たいしたもんだと思うぜ。あたしも救助隊の訓練で知ったんだけど、

水中で瞬発力出すのはまた違った力の運用がいるんだよな」

自身の経験を交えてノーヴェは話す。

「じゃあヴィヴィオさん達は…？」

ノーヴェ「なんだかんだで週2くらいか?プールで遊びながらトレーニングしてっからな。柔らかくて持久力のある筋肉が自然に出来てんだ。どーだい、ちょっと面白い経験だろ?何か役立つことがありゃさらにいい」

「はい…」

暖かい飲み物を飲みながらアインハルトはその言語に賛成する。

ノーヴェ「んじゃせっかくだから面白いもんを見せてやろう。ヴィヴィオ!カナリア、イクス、リオ、コロナ!ちょっと『水斬り』やってみせてくれよ!」

5人「はーいっ!」

「水斬り…?」

初めて聞く言葉にアインハルトが反応する。

ノーヴェ「ちょっとした遊びさ。おまけで打撃のチェックも出来るんだけどな」

すると5人は水面から半分くらい体を出して状態で構えた。

コロナ「えいっ!!」

リオ「やあっ！！」

イクス「せいっ！！」

カナ「ふんっ！！」

ヴィヴィオ「いきます！！」

水中でパンチを繰りだすと、高い水柱と共に水面がモーゼのおっさんよろしく
2つに割れていった。途中で元に戻ったが。

ルー「アインハルトも格闘技強いんでしょ？試しにやってみる？」

「はい」

ルーテシアにそう言われたので、アインハルトは上着を脱いで川に入った。

（水中じゃ大きな踏み込みは使えない。抵抗の少ない回転の力で、できるだけ柔らかく！）

そしてやってみたが、さっきみたいに水は切れずにただ大きな水柱が出来ただけだった。

リオ「あはは！凄い天然シャワー！」

イクス「気持ちいい～」

ヴィヴィオ「水柱5メートルくらい上がりましたよ！」

だがやった本人は。

「…あれ？」

うまくできなかったので首をかしげている。

ノーヴェ「お前のはちょいと初速が速すぎるんだな」

そう言いながらノーヴェも川に入ってアインハルトに「水斬り」を教える。

ノーヴェ「はじめはゆるっと脱力して途中はゆっくり…インパクトに向けて鋭く加速。

これを素早くパワー入れてやると―」

きれいな水斬りが出来た。

ノーヴェ「こうなる」

ノーヴェの言葉をしっかりと頭に叩き込んだアインハルトは再度挑戦する。

（構えは脱力。途中はゆっくり、インパクトの瞬間にだけ…撃ちぬく！）

するとさっきよりも前に進んだ。

ヴィヴィオ「あ！さっきよりちょっと前に進みました！」

リオ「すごいっ！」

「も…もう少しやってみていいですか？」

コロナ「はいっ！」

イクス「もっといいですよー！」

ヴィヴィオ「どんどんどうぞー！」

その後もみんなで楽しく水遊びをしていた。

カナ「これはいい…」

魔法で作った氷のボートにシートをしいて、カナリアはぷかぷか浮かんでいた。

～アスレチック～

ここでは大人グループがトレーニングを行っていた。

な「アインハルトちゃん、楽しんでくれてるかな？」

ス「ヴィヴィオ達が一緒ですし、きっと大丈夫です」

「そうだな。彼女にとっても良い体験になるに違いない」

な「ノーヴェ師匠もついててくれるしね」

ス「ありがとうございます」

そしてなのはと俺は下の方で休んでいる他のメンバーに声をかけた。

あ「ところでみんなは大丈夫～？休憩時間伸ばそうか～？」

テ「だ…だいじょーぶでーすっ！」

と言ってはいるが、かなりつらそうなティアナ。

フェ「バ…バテてなんか…いないよ…？」

同じくフェイトも結構つらそう。その後ろでキャロが死にかかっている。エリオはさすが男の子なだけあってまだまだ余裕そうだ。

「いやはや、今日はティーナが居なくてほんとよかった」

キャ「ティーナさんはお仕事ですか？」

「ん、まあそんなとこ」

エ「でもなんで居なくてよかったなんて…」

「おいおい６課の頃の訓練を忘れたのか？」

そう言うと、元ＦＷメンバーは顔を青くし、なのはとフェイトも嫌そうな顔をした。

テ「あの地獄はもう嫌です…」

ス「ど、同感…」

キャ「右に同じです…」

エ「お、思い出しちゃった…」

「な？きちんとみんなのトラウマになっているだろ？もし今日ここにティーナがいたら…」

～回想～

ティ『今日はオフトレーニングということだが！私はそんな難しい言葉は知らない！
　よって今日は久しぶりに６課時代の訓練を行う！わかったか！』

みんな『そ、そんな～！』

ティ『ごたごたぬかすな！私が聞きたいのは「はい！」と「わかりました！」という
　返事だけだ！ぐずぐずしてないでとっとと走れ、この蛆虫どもめ！！』

みんな『は、はい！わかりました！』

～回想終わり～

「…ってことになっていただろうな、きっと」

な「うん、いなくてほんとによかった」

ス「うんうん」

メガーヌ「さーお昼ですよー！みんな集合ー♪」

子供達「はーいっ！」

川から帰ってくると、大人たちが昼ごはんの準備をしていた。

な「おかえりー」

ス「みんな遊んできた？」

ルー「もーバッチリ！」

イクス「いっぱい遊んだよ！」

メガーヌ「体冷やさないように暖かいものいっぱい用意したからねー」

ゼスト「たくさん食べるんだぞ」

リオ、コロナ「ありがとうございます！」

だが、メガーヌがヴィヴィオとアインハルトを見ると2人は震えていた。

メガーヌ「あらあらヴィヴィオちゃん、アインハルトちゃん、大丈夫？」

「いえ…あの…」

ヴィヴィオ「だ、だいじょうぶ…です…」

ノーヴェ「ふたりで水斬り練習ずーっとやってたんですよ」

メガーヌ「あらー」

ス「はいおまたせー！」

リオ、コロナ「わー！」

ふたりとも目を輝かせている。

メガーヌ「じゃあ、今日の良き日に感謝を込めて」

みんな「いただきます！！」

＜おぉーいしーいっ！！

＜ほんと…！いいですねこれ！

＜えっへん！自慢のソースです♪

家のすぐ側でガリューがフリードにぶどうを食べさせていた。ムワリムはまだ
海で水浴びをしているらしい。

みんな「ごちそうさまでしたー！」

な「片付け終えてひと休みしたら大人チームは陸戦場ね！」

大人「はい！」

「俺はパス。ちょっと山登ってくる」

フェ「わかった」

お皿を洗いながらアインハルトはヴィヴィオと話をする。

「ヴィヴィオさん達はいつもあんな風にノーヴェさんからご教授を？」

ヴィヴィオ「あ、そんなに『いつも』でもないんですが…私は最初スバルさんに格闘の基礎
だけ教わったんです。それから独学で頑張ってたらノーヴェが声をかけてくれて」

ノーヴェ『何だその動きは？そんなんじゃ体壊すぞ？』

ヴィヴィオ「その時から時間作っては色々教えてくれて。なんだかんだでコロナとリオ、
それにイクスのことも見てくれる事になって。優しいんです、ノーヴェって」

満面の笑顔でそう言うと、アインハルトも賛同する。

「わかります。少し羨ましいです。私はずっと独学でしたから」

アインハルトがそう言うと、ヴィヴィオは一瞬悲しそうな顔をしたがすぐに笑顔になった。

ヴィヴィオ「でもこれからはもうひとりじゃないですよね？」

ふたりの距離が近くて、なんか百合っぽい雰囲気になったが、すぐにふたりは離れた。

ヴィヴィオ「あ…その流派とかはあくまで別にしてですよ！？」

「いえ、あの、大丈夫ですわかります」

（古流武術（カイザーアーツ）と近代格闘技（ストライクアーツ）は同じ道をたどれない）

またアインハルトはそんなことを考えていたが、

（だけど時々こんな風に、少しずつ一緒に歩けたら）

アインハルトが拳を出すと、ヴィヴィオも同じように拳を出して、軽くぶつけた。

家の中ではルーテシアとコロナ、リオ、イクス、カナリアが本棚の前にいた。

コロナ「あ、ルーちゃんもしかしてその本！」

ルー「うん。アインハルトに見せてあげようと思って。歴史に名を刻んだ『覇王』
　イングヴァルト、クラウス・イングヴァルト自身の回顧録」

イクス「へぇ～」

カナ「…ルーテシア、紙とペンを貸してくれないか？ちょっと書きたい物があるんだ」

ルー「うんいいけど、何書くの？」

カナ「なに、アインハルトが喜ぶかもしれないものをな」

次回に続く…

第１１９話：楽しい合宿？その２（後書き）

祝！壊滅！もう何も怖くない！だって全部落ちたもんｏｒｚ

次回は模擬戦を

では。

第１２０話：楽しい合宿？その３（前書き）

つづきですよー

第１２０話：楽しい合宿？その３

～アルピーノ家～

そこでは５人の子どもが椅子に座っていた。

ルー「ベルカの歴史に名を残した武勇の人にして初代の覇王。クラウス・Ｇ・Ｓ・
　イングヴァルト。彼の回顧録。もちろん現物じゃなくて後世の写本だけどね」

イクス「へぇ～」

リオとイクスは興味津々。一方カナリアはさっきから何かを書き続けている。

コロナ「ルーちゃん、アインハルトさんのことは…？」

ルー「ノーヴェからだいたい聞いてるよ。覇王家直系の子孫で初代覇王の記憶を
　伝承してるって」

昼ごはんで使った皿やコップをしまいながらアインハルトとヴィヴィオは話す。

「記憶と言っても覇王の一生分全て、というわけではないんですが、途切れ途切れの

記憶をつなぎ合わせれば彼の生涯を自分の記憶として思い出せます。彼にとっての
思い出はそのまま私の思い出なんです。乱世のベルカは悲しい時代でしたから」

ヴィヴィオの頭の中で、

「覇王の遺伝子＋覇王の記憶＝強いけど苦しんでいるアインハルトさん」

という変な公式が出来上がっていた。

「雲に覆われた薄暗い空と枯れ果てた大地。人々の血が河のように流れても終わらない
戦乱の時代。誰もが苦しんで乱世を終わらせたいと願いながら、だけどそのためには
力を持って戦うしかなかった時代。そんな時代に生きた覇王としての短い生涯の記憶と
たくさんの心残りを…」

そこまで話してアインハルトはヴィヴィオが悲しそうな顔をしていたことに気がついた。

「すみません、せっかくの旅行中に暗い話で」

ヴィヴィオ「いえ、そんな！」

「その、もちろん悲しいことばかりでもなかったんですよ。楽しい記憶、幸せな記憶も
ちゃんと受け継いでいます。例えばオリヴィエ聖王女殿下との日

々とか…」

「オリヴィエ聖王女殿下」という言葉にヴィヴィオが食いついた。

ヴィヴィオ「オリヴィエってクラウス陛下と仲良しだったんですか！？」

「仲良しというのとは少し違うような気もしますが、共に笑い、共に武の道を歩む同士
だったのは確かです」

ルー「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト…聖王家の王女にして後の『最後のゆりかごの聖王』。
クラウスとオリヴィエの関係は歴史研究でも諸説あるんだよね」

コロナ「そもそも生きた時代が違うって説が主だよね」

ルー「うん…でもこの本では二人は姉弟みたいに育ったってなってる」

イクス「う～ん、思い出せないなぁ…」

古代ベルカの王の1人であるイクスは頭を抱えながら思い出そうとしているが、
うまくいってないようだ。

リオ「オリヴィエって確かヴィヴィオの…」

ルー「複製母体（オリジナル）だね。まあ肖像画とか見るかぎりあんまり似てないし、普通に
『ヴィヴィオのご先祖様』でいいと思うけど」

リオ「だよね！」

カナ「そうだな」

紙に何かを書き続けながらもカナリアは相づちをうつ。

コロナ「でもなんで聖王家の王女様とシュトゥラの王子様が仲良しだったんだろうね？」

リオ「そういえば」

ルー「オリヴィエがシュトゥラに留学って体裁だったみたい。シュトゥラと聖王家は
国交があったしね」

ただ、とルーテシアは間を置いて続ける。

ルー「オリヴィエはゆりかご生まれの正統王女とはいえ継承権は低かったみたいだから
要は人質交換だったんじゃないかな？」

リオ「戦国時代の人質ってアレだよね？歴史小説にもよく出てくる…」

コロナ「裏切ったら人質を処刑しちゃいますよって」

2人してブルブル震えている。っていうかなんでクリスも震えてんだよ。

イクス「人質…そんなこともあったかなあ？」

ルー「それそれ。でもふたりにはそんなこと関係なかったみたい」

本を読みながらルーテシアは話す。

ルー「この本の途中はオリヴィエ殿下の事ばっかり」

カナ「そうだな」

ルー「…カナリア、絶対私の話聞いていないでしょ？」

カナ「そうだな」

イクス「お姉様…お腹へった！」

カナ「そうだな」

コロナ「私はかわいい！」

カナ「そうだな」

リオ「カナリアは私にお小遣いをくれる！」

カナ「それはないな」

リオ「ぶー」

片付けを終えたヴィヴィオとアインハルトは外を散歩しながらさっきの話の続きをしていた。

ヴィヴィオ「オリヴィエってどんな人だったんですか？」

「太陽のように明るくて、花のように可憐で、何より魔導と武道が強い方でした。ただ
そんな彼女も乱世の最中に命を落とされました」

ヴィヴィオ「ゆりかごの運命通りに…ですよね？」

ヴィヴィオの言葉にアインハルトは頷く。

「覇王は…クラウスはその運命を止められませんでした。皮肉な話ですが、彼女を
失って彼は強くなりました。全てをなげうって武の道に打ち込み一騎当千の力を
手に入れて…それでも望んだものは手に入らないまま、彼も短い生涯を終えました」

ヴィヴィオ「望んだもの…？」

「本当の強さです」

そこでアインハルトは胸に手を当て、自分の気持ちを伝えた。

「守るべきものを、守れない悲しみをもう繰り返さない強さ。彼が作り上げ磨き続けた
　覇王流は弱くなんか無いと証明すること。それが私が受け継いだ悲願なんです」

ヴィヴィオ「……」

思ったよりも深い話だったのでヴィヴィオはなんとも言えない顔をした。

「…すみません、自分の話ばかりで」

ヴィヴィオ「ああ、いえ、そんな！」

「昔話ですのであまり気にしないでください」

ヴィヴィオ「はい…みんなのところに戻りましょうか？」

「はい」

「ふーん、やっぱり複雑そうな顔をしてるな、ヴィヴィオの奴」

俺はそんな2人の様子を遠くから見ていた。どれぐらい遠くかとい

うと、
アルピーノ家から離れたところにある山々の１つの頂上付近から見ていた。
標高はざっと２，０００ｍくらいかね。

「さてと、俺もやるとするか」

そう言って俺は背負ってきたケースから、パーツを取り出して組み立てた。あっという間にアキュラシーインターナショナル社のアンチマテリアルライフル、ＡＷ５０が出来上がった。
１２．７ｘ９９ｍｍ　ＮＡＴＯ弾を使用するこの対物ライフルのバレルにはマズルブレーキに加え、アンチ・リコイルシステムという、油圧式のリコイル・バッファーシステムを備え、
・５０ＢＭＧながら射撃時の反動は低く抑えられており、非常に高い命中精度を持つ。

今回俺は能力とか魔法を一切使わないで狙撃の練習をする。もしそんな事態になった時に困るしね。そして銃を構えて、山に登る途中に置いてきた様々なターゲット、風船を探した。

「さ～て、どこにあるのかな～？ってな」

風船探しに忙しかった俺は気がつかなかった。後ろから何かがやってくるのを…

ヴィヴィオと一緒に家に戻るアインハルト。

（しまった…私の話でヴィヴィオさんが悲しい顔を…これまでのやりとりで思いやりの
深い子だというのは分かっていたのに…何かこの子が喜ぶような話は…）

ぽく、ぽく、ぽく、ちーん

（何も思いつかない！困った、どうしよう…）

そんな時、アインハルトに救いの手が。

ノーヴェ「お、ヴィヴィオ、アインハルト！」

ヴィヴィオ「あ、ノーヴェ」

ノーヴェ「ぶらぶらしてんなら向こうの訓練見学しに行かねーか？
そろそろスターズが
模擬戦始めるんだってさ」

ヴィヴィオ「アインハルトさん、見に行きませんか？」

「はい」

（ああよかった、笑ってくれた）

そんなことをアインハルトが考えていることなど知らないヴィヴィオは笑いながら
歩いていた。その後ろアインハルトは。

（ありがとうございます、ノーヴェさん）

とノーヴェに礼を言った。

ノーヴェ「？」

ルーテシア達もノーヴェが誘って陸戦場まで歩く。

「え？ヴィヴィオさん達のお母様方も模擬戦に？」

ヴィヴィオ「はい！ガンガンやってますよ！」

「みなさん家庭的でほのぼのとしたお母様達で素敵だと思ってたんですが、
　魔法戦にも参加されているなんて少し驚きました」

その後ろでノーヴェが必死に笑いをこらえている。

ヴィヴィオ「えと、参加というかですね…

陸戦場で模擬戦を行う元スターズ分隊の３人。それを見ながらヴィヴィオは解説する。

ヴィヴィオ「なのはママは航空武装隊の戦技教導官で、スバルママは特別救助隊なんです」

「えー…」

ふと気配を感じて振り向くと、そこにはフェイトとフリードに乗ったキャロとエリオがいた。

「あれはアルザスの飛竜…！？」

コロナ「キャロさん竜召喚士なんです」

リオ「エリオさんは竜騎士！」

イクス「で、フェイトお母様は空戦魔道士で執務官やってます！」

カナ「私達の母上は全員管理局か教会で働いているのでな」

その後もなのは達は訓練を続ける。その様子を見てアインハルトは。

「皆さんずっと動きっぱなしですね」

ノーヴェ「そうだな」

「魔法訓練も凄いけどあんなフィジカルトレーニングまで…局の魔道士の方たちは
皆さんここまで鍛えていらっしゃるんでしょうか？」

ヴィヴィオ「ですね」

ノーヴェ「ま、まあな。スバルは救助隊だしティアナは凶悪犯罪担当の執務官。
他のみんなも頻度の差はあってもみんな命の現場で働いているわけだしな。
力が足りなきゃ救えねーし自分の命だって守らなきゃならねー」

リオ「ノーヴェさんも救助訓練はガッツリやってますもんねー」

そんな中、アインハルトはうずうずし始める。それを見たヴィヴィオが。

（アインハルトさん、見学抜けますか？）

（え、ええと…）

（こういうの見ちゃうと体動かしたくなりますよね。ですからよければ向こうで軽く1本！）

「はい…是非」

ヴィヴィオとアインハルトの2人は練習するために見学から抜けた。

コロナ「ヴィヴィオとアインハルトさんもやる気モードになっちゃったねえ」

リオ「あたしたちも頑張らないとだ！」

イクス「そうだね！」

カナ「あ、これ渡すの忘れてた…まああとでいいか」

カナリアはさっきまで書いていた紙をポケットにしまいこんだ。

イクス「お姉様、それ何なんですか？」

カナ「なに、ちょっとしたものだ」

ルー「実はねコロナ、内緒にしてたけど例のアレもう完成してるんだ」

コロナ「ほんと！？」

ルー「ほんと。あとはコロナが起動調整するだけ」

ノーヴェ「？」

リオ「あれってもしかして…！？」

コロナ「ルーちゃんお手製のわたしのインテリジェントデバイス！」

ルー「コロナ専用のカッコカワイイやつ！」

ノーヴェ「お嬢が組んだのか？すげえな」

リオ「これはあたしらも負けてられないね、ソル！」

ソル「Ａｙｅ，Ｒｉｏ．」

リオ「よーしあたしも明日の練習では新魔法とか披露しちゃうもんね！」

みんな「おおーっ！」

ちょっと離れたところでヴィヴィオとアインハルトはミット打ちをしていた。

ヴィヴィオ「どーです？こういうミット打ち、練習になります？」

「古流の型打ちとはだいぶ勝手が違いますが…良い練習になりそうです」

ヴィヴィオ「（アインハルトさんやっぱりすごいな～）よかったです！ではどんどん
どうぞ！」

「はい…お願いします」

2人は練習に集中していたので、遠くの方からアンチマテリアルライフルのどでかい銃声が
何回も聞こえたのに気がつかなかった。

～アルピーノ家～

そこではメガーヌさん、ゼストさん夫婦がみんなの練習を見ていた。

ゼスト「若い者は気合が入っていていいな」

メガーヌ「みんなほんと元気でいいわね～」

「いやまったく」

そう言うのはシスター服を着たセインだった。

メガーヌ「セインはいいの？みんなと遊んでこなくて？」

セイン「いあやぁあたしは教会から新鮮野菜と卵の差し入れに来ただけだから」

メガーヌ「そんな堅い事言っちゃって遊びたいくせに～」

セイン「そ、それはそーなんだけど！ま、せっかくだから軽く温泉サプライズの1つも
仕掛けてみんなをたのしませてやっかな～とは思ってるけ

ど」

その時また山から音が聞こえてきた。

セイン「ん？何の音だろう？」

ゼスト「山のほうからだな。多分ウィルだな」

メガーヌ「そういえば山に登るっていってたわね」

セイン「山ねぇ。熊とか出たりして」

がおーとセインは熊の真似をするが。

メガーヌ「あー、そのことというの忘れてたわ～」

セイン「え、ほんとにいるんですか？冗談で言ったのに…」

ゼスト「まあウィルなら問題ないだろう。２つもデバイスを持っていることだし」

だがモニターを見ていたメガーヌさんがあることに気づく。

メガーヌ「あら？これってウィル君のデバイスじゃない？」

セイン「えっ？」

３人でモニターを見ると、なのは達が練習している脇で見学しているイクスの首に
アイザックがぶら下がっていて、カナリアの指にはインフィーがつ

いていた。

ゼスト「…いくらEXランクでもデバイスがないとな…」

セイン「あれ？これってやばいんじゃ…」

メガーヌ「あらら～」

ズドンッ！

俺はボルトを引いて空薬莢を排出し、弾倉に入っている最後の弾丸を装填した。

「あとはあそこだけか…」

そして1，２９４m先にある風船に狙いをつけた。

「…ちょいと風が強いな」

湿度と風速によって弾道は変化する。それにこの距離だとコリオリ効果も考慮に入れる必要がある。コリオリとは惑星の自転により起こる慣性の力である。

ゆっくりと息を吸って吐く。そして引き金を

「っ！？」

絞ろうとした瞬間に背後に嫌な気配を感じて、うつ伏せの状態から横に逃げた。
するとさっきまで俺がいたところに大きな毛むくじゃらの脚が。

「おいおい、それは聞いてないぞ…ていうかずいぶんでかいな、おい…」

俺は後ろに下がりながらつぶやいた。目の前には身長５ｍほどの巨大な熊がいた…

第１２０話：楽しい合宿？その３（後書き）

ウィル「なんで俺が使うライフルはいつも何かしらの対物ライフルなの？」

作者「俺が好きだから♪異論は認めない！」

次回は熊と風呂

では

第１２１話：楽しい合宿？その４（前書き）

なんでタイトルに「？」が付いているかがわかるかも。

あと今回から台詞の前に名前入れるのやめました。
私はあまりいいとは思わないんですけど、台本形式はやめたほうがいいという感想をいただいので試験的に。

第１２１話：楽しい合宿？その４

～山の頂上あたり～

どうしてこうなった。

俺はそんなことを考えながら目の前にいる熊を見た。見た感じ、熊は思いっきりいらついているのか、または腹が減っているのか知らんが、とにかく鼻息が荒い。

「…言っとくけど俺は美味しくないぞ？」

念のために熊にそう言ったが伝わるわけもなく、熊は無言で襲いかかってきた。

俺は持っていたアンチマテリアルライフル、ＡＷ５０で熊を撃ったが、腰だめで撃ったため外れてしまった。その銃声に驚いた熊は右腕を振りかぶって突っ込んできた。

腕の先にはとても鋭そうな爪が付いていた。

「くそ！」

なんとかその攻撃は避けることができたが、キャリンッ！といういい音と共に、

持っていたライフルの先端についていたマズルブレーキがポトリと地面に落ちた。

「…うそん」

熊を改めて見ると、爪が金属で出来ていて、さらにさっき撃って外した銃弾がかすった部分から鉄の部品が見えた。つまりそれって…

「え、なに、お前サイボーグか？」

思わず武器を落としてしまった俺に、サイボーグ熊ちゃんは一気に接近して金属爪で俺の右腕を斬りつけた。その衝撃で俺は１０ｍほど後ろへ飛ばされて岩にぶつかった。

「ぐえっ！！」

なんとか立ち上がろうとしたが、熊が俺の腹をサッカーボールみたいに蹴っ飛ばしたのでうまくいかなかった。そのせいで俺は後ろへゴロゴロ転がった。内蔵をかなり痛めたようで、口から血が出る。

「ゴハァッ！！…クソッタレがあああ！！！」

血を吐きながらも残っている左手でヒップホルスターに突っ込んであるＧＬＯＣＫ　３０を抜いて熊に撃ち込んだ。

ダンッ！ダンッ！ダンッ！

顔面に何発もの．４５ＡＣＰ弾を食らったサイボーグ熊ちゃんは

大きくのけぞった。
その隙に俺は出血している右腕をかばいながら荷物のところまで走り、
リュックの横に縛り付けてあったＨ＆ａｍｐ；Ｋ社のＨＫ４１６Ｃを取り出して、
Ｍ３２０グレネードランチャーを真上に向かって放った。すると真っ赤な
照明弾が空を飛んだ。

「気づいてくれよ…」

「…？」

サイボーグ熊ちゃんはそれを見て、再びこちらに襲いかかってきた。

「かかってこいやああ！！」

それに向かって俺は片手でアサルトライフルを構えて、３０発の６．８ｍｍ×４３ＳＰＣ弾を
熊に向かって叩き込んだ。

～陸戦場～

ここでも銃声は聞こえていた。一番最初に気がついたのはノーヴェだった。

「ん？おいみんな、なんか聞こえねえか？」

ルーテシアやイクス達も耳を済ませる。すると断続的な射撃音が聞こえてきた。

「そうだね。爆竹みたいな…」

「いや、銃声だな。おそらく父上だ」

「お父様が？」

イクスは驚いてカナリアを見る。

「確か山で狙撃の練習を行うと言っていたぞ」

「そっか、なら平気だな」

みんなはそれで納得したが、空中に赤い照明弾が放たれ、ついで連続した射撃音が聞こえてくるとカナリアは眉をひそめた。

「見てコロナ！なにか飛んでるよ！」

「ほんとだ、赤く光ってるね、リオ！」

「変だな…狙撃なら連射はしないはずだ。それにあの照明弾。何かあったのかも知れん」

カナリアは顎に手を当てて心配そうな顔をした。だがリオとコロナはそこまで深刻に考えてはいなかった。

「でもイクスやカナリアのお父さんなら強いから大丈夫じゃないの？」

「そうだよ！ＥＸランクじゃん！」

「それはそうだが、デバイスがなければ意味ないだろ？」

そう言ってカナリアは自分の指に付けているインフィニティーをみんなに見せた。

「あたしも持ってるよ！」

隣にいたイクスも首にかかっているアイザックを見せる。

「…なんでお前らがウィルのデバイス持ってんだ？」

至極もっともな質問をノーヴェがする。

「午後は使わないから持っていてくれ、と言われたのでな」

「ねー、アイザック？」

〈その通りだ〉

「「「「「「……」」」」」」

6人の間に沈黙が流れる。

「…ちょっと見に行ったほうがいいのかな？」

ルーテシアが提案する。それにノーヴェが返事をしようとした瞬間、山のほうから
今度は爆発音が聞こえてきた。

「にゃ！？今の何？」

「なんかドカーンッ！て聞こえた気が…」

訓練をしていた6人も爆発音に気がついて動きを止めた。フリードに乗っていた
キャロとエリオが報告する。

「あ、山のほうから煙が出てます！」

「ほんとだ！」

「うそ！？」

みんなで見てみると、確かに山のほうから小さく白煙が上がっていた。そしてまた
爆発音が響き、白煙の数は次第に増えていった。

「ウィルさん、なにしてんだろう？」

「連絡できないの？」

「駄目だ、応答がない」

なのはの問いにノーヴェが首を振りながら答える。そんな中、ティアナは頭の中で
変なことを考えていた。

（もしウィルさんが怪我していたら…もし私がここで助けに行ったら…
きっとウィルさんは私に感謝してなでなでしてくれる、いやそうに違いない！）

「ウィルさん！今行きます！」

「ちょ、ティア！落ち着いて！」

いきなり山に向かって走りだしたティアナをスバルが必死に止める。

「スバル、離して！きっとウィルさんは窮地に立っているんだわ！」

「そうとは限らないじゃん！」

「…誰かさっきの赤い照明弾の意味、わかる？」

冷静に考えていたフェイトはみんなに聞くが、全員首を振った。

「知らないの」

「…ウィルが照明弾を撃ったということは、誰かに何かを知らせるため。つまり
あらかじめその照明弾の意味を知らせないと意味が無い。違う？」

「確かにそうですね」

同じ執務官であるティアナも落ち着いたので同意する。

「じゃああの照明弾は何のために…」

そこまでキャロが言ったとき、突然山とは反対側の方向、すなわち海の方から
すさまじい雄叫びが聞こえてきた。しかも急に辺りが暗くなる。

「なななななに！？」

「わかんないよコロナ！」

2人は怯えて抱き合っている。ノーヴェはそんな子供達を一箇所に集め、
なのは達は海のほうを見た。すると。

「あ、あれは…」

「…やっぱでか」

「あんなにおおきかったっけ！？」

太陽の光を半分隠しながら、本来の姿のムワリムがかなりの高速で飛んできた。

フリードと水遊びをしていたムワリムだったが、昼ごはんを食べにフリードが帰ると、
その辺にいる鯨などを食べながら沖のほうでばしゃばしゃ遊んでいた。そのせいで
大きな津波が起こっていたのは内緒である。しばらくそうしていたが、遠くの山から
赤い照明弾が上がるのが見えた。

その照明弾について、ムワリムはウィルからこう聞いていた。

『いいか、ムワリム。もし赤い照明弾が見えたら俺のところに急いできてくれ。
俺がかなりピンチって意味だ』

『わかった、我が主よ』

『で、黄色の照明弾だったら子供達が危ないって意味な』

『主！今行くぞ！』

そう言い残し、ムワリムは翼を大きく広げて海から飛び立った。

ムワリムの本来の姿を見たことのない人はみんな驚いていた。

「おいおい、あの竜こんなにでかかったのかよ!?」

てっきりフリード位の大きさかと思っていたノーヴェは口をあんぐりとあけている。

「もともと『ムワリム』はロストロギアだからねぇ」

なのはがムワリムのことを知らなかった人達にそう説明する。

「ロストロギアがペット…」

「うむ、実に勇ましいな!」

カナリアは何故か喜んでいる。そんな姉をイクスは疑問の眼差しで見つめている。

「お姉様、なんでそんなに喜んでいるの?」

そして陸戦場の上をこれまた大きな頭が通過したところで、ムワリムは口から極細の赤いビームを放った。そのビームは山へと飛んでいき、小さな爆発が起きた。本気でこのビームを撃つと、インペリアル?級スター・デストロイヤーが吹っ飛ぶ威力になる。

「さっきの照明弾はムワリムを呼ぶためだったんだね」

「でも、ムワリムは何を撃ったんだろ？」

役目を終えたムワリムはまた小さくなって山に向かい、ウィルを連れて陸戦場までやってきた。

『助かったよ、ムワリム。ありがとさん』

『なに、主のためなら』

さっきのビームでサイボーグ熊ちゃんは吹っ飛ばされて爆発した。残骸を調べると中から人間の腕やらが出てきた。つまりあれは熊の格好をした装甲服というわけだ。

いったいどこのクソッタレがこんなことを…

「お父様！？」

「父上！そのケガは！？」

「きゃあああああ！！ウィルさん！！」

俺がムワリムの背中から降りるとみんなが駆け寄ってきた。それもそのはず、

右腕は肉が大きくえぐれて骨も見えている。おまけに服はぼろぼろで血だらけ。

「今すぐ治療するの！」

「心配ない、ゴホッ！…すぐ治す」

そう言った瞬間、肉体再生（オートリバース）で怪我を治す。そして無言でカナリアがインフィーを
差し出してきた。

「ありがと、カナリア」

「ウィルさん、一体何があったんですか？」

「実はなティアナ、熊に襲われたんだ。機械の」

「き、機械の熊！？」

「そうだ、スバル。食べれない熊だぞ。それが強くてさ、不意打ちくらって怪我しちまった。
おまけに装甲張ってあるからアサルトライフルじゃ話にならなくて、いやはやまいったよ」

「一体誰がそんなことを？」

執務官のフェイトが深刻な表情で考える。

「おそらく俺のことが嫌いなどこかのクソッタレだろうな…」

そこで俺は周りを見て2人が居ないことに気づいた。

「おい、ヴィヴィオとアインハルトは？」

「ああ、奥のほうで練習を…」

「いかん！」

ノーヴェがそう答えた瞬間、俺は武器を創造しながら走りだした。

「お、おいウィル！どうしたんだ！？」

「あの熊、ヴィヴィオ達の事も襲うかも知れん！」

「えええええ！！？？」

なぜかというと、山でサイボーグ熊ちゃんと戦っていたときに、あいつが

「お前らみんな殺してやる！！」

と言ったからである。つまり俺だけではなく他の人も狙っているということだ。

俺はヴィヴィオ達のいる所へと走り始めた。すると近くで銃声とヴィヴィオの

甲高い悲鳴が聞こえてきた。

「ヴィヴィオ！今行くぞ！」

その頃、ヴィヴィオとアインハルトは目の前のサイボーグ熊ちゃん2号からの攻撃を必死に防御していた。防御と言ってもヴィヴィオがプロテクションを張っているだけである。アインハルトはサイボーグに殴られて脚を怪我したため、動けないでいる。

（ここで私がアインハルトさんを守らないと！）

サイボーグ熊ちゃん2号はパンチではプロテクションを破れないと判断した。なので右腕に内蔵されているマシンガンを撃ってきた。

「きゃあああああああ！！！」

「ヴィヴィオさん！」

だがヴィヴィオのプロテクションは破られない。後ろにアインハルトがいるからだ。

「クリス！大人モード！」

このままではまずいと判断したヴィヴィオは大人モードになり聖王の鎧を身につけた。
その際にプロテクションが解除されたので、サイボーグは再び撃ち始めた。だがその
銃弾は全てヴィヴィオの鎧にはじかれた。銃弾くらいで聖王がやられるわけがないのだ。

そしてサイボーグの懐に一瞬で潜り込む。

「はあああああ！！一閃必中！！アクセルスマッシュ！！」

サイボーグの顎にアッパーを放ってかなり後ろまで吹き飛ばした。
サイボーグは
そのまま木にぶつかり仰向けに倒れて、ピクリとも動かなくなった。
ボクシング的に
言えば、完璧なノックアウトである。

「…すごい」

「アインハルトさん！大丈夫ですか！？」

「え、ええ。いたっ！」

足の怪我を見てみると赤く腫れていた。骨が折れているかもしれない。

「じゃあおんぶしますね。急いで戻りましょう」

「す、すみません…」

ヴィヴィオは聖王の鎧を解除して、アインハルトを背負い家の方に歩き始めたが、
後ろのほうから音がしたので振り返った。するとサイボーグが立ち上がり、背中から
ロケットランチャーを取り出すのが見えた。

（だめ！時間がない！）

ヴィヴィオにできることは、背中に背負っていたアインハルトにプロテクションを
張って、できるだけ遠くに投げることぐらいだった。その瞬間ロケットランチャーが
放たれた。

「ヴィヴィオさん！！」

「アインハルトさん伏せて！」

聖王の鎧を展開するにはもう遅すぎた。目の前に迫るロケット弾を見て、ヴィヴィオは
目をつぶった。直後、ロケット弾が爆発したが、爆風や破片がヴィヴィオに届くことは
なかった。

「えらいぞ、ヴィヴィオ。よく友達を守ったな」

超ダッシュで走ってきた俺はヴィヴィオの前にＡＴフィールドを張って、飛んできたロケット弾は無力化された。

「ウィルパパ…」

涙目でヴィヴィオは俺を見上げる。

「ゴメンな、遅くなって」

「ううん！必ず来てくれるって信じてたから！」

「そうか、ありがとな。アインハルトちゃん、怪我を見せてくれ」

俺はアインハルトの脚をあっという間に治した。

「あ、脚が…」

「驚くのは後回しだ。早く家に戻れ！」

「は、はい！」

「ウィルパパは！？」

「ん～？パパはちょっと”お掃除”をしてからそっちに行くよ」

ヴィヴィオ達が見えなくなってから、俺はサイボーグ熊ちゃん２

号に目を向けた。
全ての武装を使い果たした熊は逃げようとしている。そうは問屋が卸さない。

「さて、俺だけじゃなく娘とその友達にまで手を出したんだ…覚悟しろ」

そう言って俺は背中に背負っていたオーストリアのステアー社が開発中の
キチガイなブルパップ式アンチマテリアルライフル、ＩＷＳ２０００を片手で構えて
引き金を５回引いた。

全長１８００ｍｍ、重量約１８ｋｇ、口径はなんと１５．２ｍｍ、装弾数は５発。
いつかティーナの奴が使っていたアエロテクＣＳＩＲ社製２０ｍｍボルトアクション式
アンチマテリアルライフル、ＮＴＷ－２０よりは小さいけど、それでも充分でかい。
しかもこのＩＷＳ２０００はボルトアクション式ではなくセミオート式である。

弾薬は１５．２ｍｍＡＰＦＳＤＳ弾（Ａｒｍｏｒ Ｐｉｅｒｃｉｎｇ Ｆｉｎ Ｓｔａｂｉｌｉｚｅｄ Ｄｉｓｃａｒｄｉｎｇ Ｓａｂｏｔ：装弾筒付翼安定徹甲弾）を使用するため、ライフリングがない。ちょうど戦車の主砲
（滑腔砲）をそのままスケールダウンしたような前代未聞の構造である。銃身長は
１．２ｍで、初速は１，４５０ｍ／秒。有効射程は１，５００ｍ以

上と言われ、試作された徹甲弾では
距離１，０００ｍで４０ｍｍ厚の防弾鋼板を撃ち抜くことに成功している。弾薬の装填には
５発入り箱型弾倉を用いる。

まったくオーストリア人は何を考えてこんな物を開発したんだか…

それはともかく、５発の１５．２ｍｍＡＰＦＳＤＳ弾はサイボーグの両手両足、そして下半身を
木っ端微塵に吹き飛ばし、さらに奥の木々にも命中して数本の木が倒れた。あまりに
銃声がうるさかったため、半径１，０００ｍ圏内の動物が地面から飛び上がった。

「さて、まだ生きているよな？」

俺は弾倉を交換して上半身だけ残ったサイボーグに足を運び、装甲をひっぺがした。
そこには男が血を吐きながら苦しんでいた。

「で、お前の雇い主は？なぜこんなことを？話してくれないと、そのなんだ、撃つ」

すると死にかけの男は蚊の鳴くような声で話してくれた。

「…そうか、わかった。じゃあばいびー」

夕方の空に銃声が響いた…

アルピーノ家に戻る途中で俺はティーナに連絡を入れた。

「俺だ。今から言う連中を調べてくれ。俺とヴィヴィオ、それにアインハルトが狙われた」

「…それはそれは。わかったよ、ご主人様」

俺は相手の名前を言ってから電話を切った。家が見えてくると、みんなが待っていた。

「ウィルパパ！」

「お父様！」

「父上、無事だったか！」

3人娘が俺に抱きついてくる。俺はしっかりと抱きしめた。

「もちろんだよ。こんなことで死んでたまるか」
顔を上げてアインハルトにも声をかける。
「アインハルトちゃんも大丈夫だったか？」
「ええ、なんとか…」
「怖い思いさせちゃってゴメンな」
「いえ…」
「…もうこんな時間だし、みんな風呂にでも入ったらどうだ？」
「そうだね！じゃあホテルアルピーノ名物天然温泉大浴場へご案内！」
ルーテシアが先頭にたって案内する。
「あー待ってよルーちゃん！」
「あたしが一番！」
「アインハルトさん！行きましょう！」
「はい！」
「ほらみんな、走らなくても温泉は逃げないよ？」
子供達は我先にとルーテシアのあとについて行った。

（ウィル君…）

温泉に向かう途中でなのは達から念話が届いた。

（子供達が寝たら話す。だから今は何も聞かんでくれ）

「よーしエリオ！久々に一緒に風呂入ろうぜ！」

「はい、お父さん！」

俺はそう返してエリオと一緒に温泉に向かった。

第１２１話：楽しい合宿？その４（後書き）

ウィル「さて、なんで更新が遅れたんだ？」

作者「親戚の家に泊まりに行っていたものでして…」

ウィル「なら仕方ないな。でもいいのか？こんな時期に」

作者「…いいわけないだろ！？就職活動はもう９９％終わっている…」

ウィル「…すまんな」

ＩＷＳ２０００をチョイスした理由はなんか見た目が面白かったからです。

次回は風呂と。

では

第１２２話：楽しい合宿？その５（前書き）

風呂です。

第122話：楽しい合宿？その5

～温泉～

そこは一般旅館の温泉よりも広い温泉だった。これをルーテシアが設計したとは…
恐ろしい子である。

「あ～！すっごくいい湯加減～！」

「ほんとです～？」

ティアナとキャロは湯に浸かりすでに極楽気分である。ルーテシアは子供達を
引き連れて温泉を案内している。

「あっちの岩造りのところが熱～いお湯ね」

「わーい！熱いの好き～♪」

「私も！」

リオとイクスは早足で熱いところへ行った。その後ろでアインハルトがもじもじとしている。

「どうかしたのか、アインハルトさん」

それに気づいたカナリアが尋ねてみるが、アインハルトは目を合わせようとしない。

よく見ると顔がめっちゃ赤い。

「いえ、その、カナリアさんは、あの、なんでタオルで隠していないのですか？」

「隠す？何をだ？」

「だから、その、胸とか下とか…」

そう。カナリアは風呂に入る時、他の人がやるようにタオルで体を隠そうとはしない人なのだ。タオルはカナリアの頭の上にちょこんとのっている。

「なんで隠す必要があるんだ？ここには女しかいないじゃないか？」

「そ、それはそうですけど…恥ずかしくないのですか？」

「全然。同性に見られるのは特に恥ずかしいことではないだろう。まあ腹が出ているとか、たるんでいるとか、そういう場合を除いての話だが」

「「「ギクッ！！！」」」

カナリアの「腹が出ている」「たるんでいる」という発言に思わず反応したのはティアナとキャロとノーヴェ。スバルは全く気にしていないご様子。

「カナリアさんはヴィヴィオさん達とはその、考え方が違うと言うか、なんというか…」

「ふっ、よく言われるよ。ああ、そうだ。風呂を出たら渡したいものがあるから
あがったら庭で待っていてもらえないか？」

「あ、はい。わかりました」

「もー！カナリア、聞いてるの？」

「そうだな」

ルーテシアの言葉にカナリアはとりあえず返事をする。

「絶対に聞いてない…まあいいや、で、向こうの滝湯はぬるめだからのんびりできるよ」

「「滝湯！？」」

ヴィヴィオとコロナはその言葉に反応した。案内されるとそこには立派な滝湯があった。

「新しく作ってみたんだけど、けっこうオシャレじゃない？」

「すごいすごーいっ！」

「あ、ちょっとぬるめで気持ちいい～！」

「ゆっくり楽しんでね～」

「…ん～、私は熱い方へ行こうかな。アインハルトさん、一緒にどうかな？」

「わ、私はここで…」

子供達が思い思いの温泉でリラックスし始めたので、ルーテシアはスバルとノーヴェの所に戻ってきた。

「湯加減どう？」

「もおサイコ～」

「まったく。しかしアレだな…前来た時よりまたパワーアップしてんな」

お湯に入りながらルーテシアが説明する。

「建築デザインとか設備設計って楽しいんだよね。ま、この温泉もロッジの改築もお遊びレベルだけど。これ設計図？」

「「いやいやいや！！」」

モニターにはロッジの３Ｄモデルや平面図などが映しだされていて、それらはとても”お遊びレベル”のとは思えないほどのものだった。

「まあみんなに評判いいのは嬉しいな。みんなが泊まりに来てくれて笑顔になってくれたら
すごく嬉しい」

ガリューもお盆に飲み物の入ったコップを乗せて子供達に配っている。

「んなもんめちゃめちゃ笑顔だっつーの！」

「ほんとほんと♪」

そんな時、キャロが突然飛び上がった。

「ふえっ！？」

「キャロ、どうしたの？」

いきなり目の前の飛び上がったキャロをティアナは不思議がっている。

「何かこう、柔らかいものがもにょっと…」

辺りをキョロキョロしながらキャロは答える。しかしすぐ後にまたキャロの小さな
お尻がもにょっとされ、おまけにティアナにまで”何か”の毒牙は襲いかかった。

「ひゃっ！？」

「！！！」

2人は温泉から文字通り飛び出した。

「いる！何かいるっっ！！」

「なんだかぬるっと！！」

そして体を洗い終わったルーテシアに2人がつめよる。

「ルーちゃん！湯船の中でなにか飼ってたりしないっっ？」

「え～？飼ってないよ？温泉に住むような珍しいペット飼ってるなら真っ先に紹介してるし」

（（たしかにそうだ！！））

そこでティアナはふと考えた。

（でもさっき何も見えなかった…透明…まさか！）

ティアナはモニター通信でウィルを呼び出す。すると包丁を持って料理中のウィルが映った。

「ん？なんだティアナ？」

「ウィルさん…さっきからずっとそこに居ました？」

「何いってんだ？　当たり前だろ？　なあエリオ」

「そうですよ」

「…ティーナさんは今回来ていないんですよね？」

もう1人透明になれる人物の名を挙げるが。

「ああ、俺がすこしばかりの仕事押し付けてきたからな」

「そうですか…」

「なんかあったのか？」

「いえ、なんでも…じゃ」

（じゃあ一体誰が…）

その騒ぎを聞いた滝湯組（ヴィヴィオ、コロナ、アインハルト）は。

「なんか騒がしいね？」

「動物でも出たのかな？」

とのんきに話していた。そこへまた”何か”が。

「はわわっ！」

「きゃあっ！！」

そしてアインハルトにも襲いかかった。すると彼女は、

「〜〜〜！！」

恥ずかしそうに顔を赤らめて反射的にノーヴェに教えてもらった水斬りをやった。

「…あ。水斬りできた」

（あーびっくりした…アレが噂の覇王っ子か）

こういうお馬鹿なことをやるのは1人しかいない。

（しかしセインさんの敵じゃーなかったね）

セインの固有能力である「ディープダイバー」。岩石や金属などの無機物の内部に潜って移動することができる。まさに「能力の無駄遣い」である。

（ふふふ、みんな驚いてるな）

そしてさらにノーヴェたちにも襲いかかる。

「あっ！？」

「ふえっ！？」

「うわっ！！」

（わははは！残るはあとふたーり！カナリアとヴィヴィオの友達の元気っ子！）

そしてセインはまずカナリアを襲い、ついでリオに襲いかかった。

「がおーっっ！！」

その瞬間、更衣室に置いてあったリオのデバイス、ソルフェージュが光った。

「Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ．Ｐｏｗｅｒｅｄ－Ｓｙｓｔｅｍ　Ｓｅｔ　Ｕｐ．」

そしていきなりリオの周りのお湯が吹っ飛んでセインはびっくりした。

「ええっ！？」

驚いている間にセインの腕が誰かに掴まれた。つかんだのは大人モードになったリオであった。しかも顔を真っ赤にして涙ぐんでいる。

「いいっ！？」

「やーーーっ!!絶招炎雷炮!!」

リオはセインを上に放り投げてからその腹に思いっきり蹴りをぶち込んだ。

「にゃあああああああ!!!」

「ふんっ!!」

さらにカナリアがセインにかかっている重力を操作したため、セインの落下スピードが早くなり、結果として温泉に頭から突っ込むハメに。

「なんだセインか」

「だろうと思った」

「リオ!」

「リオ、大丈夫っ!?」

セインはというと。

「おお、これは見たことがある光景だな」

「なんですか?」

カナリアとアインハルトがセインを見ながら話す。

「あれはな、父上の故郷の世界でやっていた有名な映画のワンシーンにそっくりだ。
そう、確か…『犬神家の一族』だったな」

「…あれが、ですか？」

アインハルトの目の先には、水面から両足だけが出ている状態のセインだった。

「どれ、そろそろ引き上げてやるか」

そして頭に大きなタンコブを作ったセインは現在正座中。

「もーダメだよセイン！　こういうイタズラは！　みんなが転んでケガでもしたら
笑い事じゃすまなかったんだし」

「セクハラも犯罪なんだからね」

スバルとティアナが口を開く。

「うっ」

「私が営業妨害で訴えたら捕まるしね」

「うぐっ」

温泉の持ち主であるルーテシアにも言われる。

「まったくこんなのがあたしより年上かと思うと涙が出てくるわ」

「うぐぐっ」

挙句の果てに妹にもダメだしされたセインは。

「う…うう……なんだよ～！　ちょっとみんなを楽しませようと思っただけ
じゃんかよ～！！うわぁ～ん！！」

泣きながら床でじたばたするという子供みたいなことを始めた。

「ケガとかしないようにちゃんと気をつけてたっつーの！　これでも聖王教会の
シスターだぞ～！！　おまえら楽しそうなのにあたしだけ差し入れ渡したら
すぐ帰るとか切なすぎるじゃんかよ～！！」

そこまで言うとセインはスバル達を指さしながら堂々と言った。

「自慢じゃねーが、あたしはお前等ほど精神的に大人じゃーないんだからな！！」

みんなの耳にビシィ！という音が聞こえたような気がした。

（（開き直った…））

（ホントに自慢じゃねーよ…）

「えーと、とりあえすセインはリオちゃんに謝ったほうがいいと思うよ」

「あ、そうだった」

キャロに言われてセインはリオのところへ行ってきちんと謝った。

「その、ゴメンな。ちょっと調子に乗りすぎた」

「あたしこそごめんなさい。思いっきりやっちゃって…」

その様子を見ていたアインハルトはヴィヴィオに耳打ちする。

（ヴィヴィオさん、あの方は…？）

（セインって言います。聖王教会のシスターで修道騎士見習い。たまにおちゃめが
過ぎることもありますが、優しいシスターですよ）

「じゃあセイン、訴えないかわりに交換条件を飲まない？」

と、ルーテシアが提案する。

「今夜と明日の朝のみんなのご飯作ってよ。そしたら今夜一泊してってもらえるよう
シスターシャッハに頼んであげる」

「ホントか！？　そんなのでよければいくらでも！」

「示談成立だね。セインの料理すごく美味しいからみんなそれで我慢してあげて？」

「「「「「「オッケー」」」」」」

「お嬢は甘いなぁ」

とノーヴェは言うけどルーテシアは満足気である。

「労せずして無料の労働者をゲットしてみた」

「んじゃまああたしもお風呂おじゃましてっと」

セインも着ていた水着を脱ぎ捨てて温泉に入る。

「あがったらすぐおいしい晩ごはん作るからなー」

「これでホントに料理うまいからビックリするわよねぇ」

そこでティアナはリオを見る。

「それにしてもリオも『大人モード』できるんだ？」

「ヴィヴィオやアインハルトさんのとはちょっと方式が違うんですが、一応同型の
身体強化魔法です。格闘魔法戦用に自己流で組んでみました！」

「へー！！」

「すごいじゃないか」

イクスもカナリアも驚いている。その後も質問の嵐がリオに振りかかる。

「凄い蹴りだったけどあれはストライクアーツ？」

「うちの実家の方の格闘技なんです。子供の頃から習ってて」

「へー」

「変換資質あるの？炎と電気が両方出てたけど…」

「一応両方…」

「「えー！？」」

「それ凄い！」

「リオさんも凄いですね」

2つも変換資質があることにアインハルトもびっくりしている。

「変換資質は知ってましたが、大人モードは初めて見ました」

コロナがそこでネタバレを。

「リオね、ヴィヴィオとアインハルトさんに触発されて頑張って完成させたんだって。

本当は明日の練習会で見せてびっくりさせる予定だったみたいだけど」

「いや十分びっくりした！」

「練習会…？」

（そうだ、たしか日程表に）

アインハルトはヴィヴィオに見せてもらったしおりを思い出していた。

「「そうです！　練習会！」」

「オフトレツアー2日目恒例行事！　大人も子供もみんな混ざっての陸戦試合（エキシビジョン）！！」

「なに、明日の話ー？」

「そー！」

そこでリオがヴィヴィオ達の話を聞いてやってきた。

「あたしは初体験だからすっごく楽しみ！」

「前回も凄かったんだよ。八神司令達が大活躍で！」

「そんなこともあったな」

カナリアは遠い目で空を見上げる。

「去年は地面がえぐれるとかそういうレベルじゃなかったよね～」

「「え」」

イクスの発言にリオとアインハルトの思考が止まった。

「シグナムママとアギトが陸戦場全部焼け野原にしちゃって」

「はやて母上がユニゾンしてそれをカチンコチンにして」

「最後にヴィータお母様がハンマーで全部粉々に」

「あれは凄かったよね～」

（（どんだけ！？））

3姉妹とコロナの説明を聞いてリオとアインハルトは心底驚いた。

「あの、でも今日見たら陸戦場は直っていましたけど…」

「ああ、父上が全部直したんだ。あっという間にな」

「なんか両手を地面に置いたら赤い光が広がっていって、しばらくしたら全部直ってたの」

「錬金術マジ便利とかいってたな」

「はあ…」

アインハルトの脳内で、「ヴィヴィオさん達のお父様＝超規格外」という

公式が出来上がった。

「話しそれたけど、今回はちょっと人数少ないから１ｏｎ１の機会が増えそうだね！」

「チーム分けどうなるのかな？」

「うーん！　燃えてきた！」

「試合で闘うんですか…？皆さんやヴィヴィオさんのお母様達と」

「はい！　二組に分かれてのチームバトルで相手チームを全滅させるまでの勝負です」

「大人チームは最大出力に制限（ハンデ）が付きますが、それ以外は全力です！」

「純粋に戦技と戦術の勝負ですね」

初めてのアインハルトにみんなできちんと説明する。と、アインハルトは午後の模擬戦の様子を思い出していた。

（あのすごい人達と闘える！　あの人たちに覇王（わたし）の拳は届くのかな？　いや違う！
届かせるんだ！　どんな相手にだって私と彼の覇王流（カイザーアーツ）を！）

「組み合わせはまだわかりませんが、敵チームなっても負けませんよ？」

「あたしもです！」

アインハルトも決意のこもったまなざしを向ける。

「望むところです！」

そんなこんなでみんな温泉を存分に楽しみ、セイン特製のおいしい晩ごはんを食べて、

子供達は明日の試合に備えて早めに寝ることに。

そして大人たちは大きめの部屋に集まって今日のことを話し合った。

「それでウィル君、いったい何があったの？」

なのはがみんなを代表して聞いてきた。

「…口で説明するより見たほうが早いだろう」

俺は右目からコンタクトレンズを外して、それをインフィーに乗せた。すると

モニターに山が映し出された。

「これは…？」

「今日の狙撃訓練の一部始終を録画しておこうと思ってな、ジェイルに作ってもらった
コンタクトレンズ型カメラだ。あとでこの映像を見て復習するんだ」

「あら～ハイテク～ね～」

メガーヌさんも興味津々である。

「で、問題はここからだ」

俺は時間を早めて、熊に襲われる直前まで映像を進めた。

「うえっ！？　ほんとに熊、ってでか！」

映像では俺が吹っ飛ばされ、拳銃を放ち、照明弾を打ち上げていた。

「これがあの赤い照明弾だね」

「そうだ。ここからが大変だったんだよね」

～～～

「かかってこいやああ！！」

熊に向かって俺は片手でアサルトライフルを構えて、３０発の６．８ｍｍ×４３ＳＰＣ弾を叩き込んだ。だが銃弾は全て熊の胸や顔の装甲に跳ね返された。

「どんな装甲積んでんだよ！！」

それには答えず、熊は左腕を突き出した。すると前腕部分からグレネードランチャーが現れて擲弾が飛んでくる。

「ひえええええ！！！」

俺はそれをなんとか避けたが、後ろで爆発した衝撃でアサルトライフルを落としてしまう。あわてて拾おうとしたが、熊がまた撃ってきたため、岩の後ろに隠れるしかなかった。

（だめだ！ここにいてもじきに岩ごと吹っ飛ばされる！）

そう考えた俺は、リュックからこぼれて運よく近くに転がっていたスタングレネードを拾い、ピンを抜いて熊に向かって放り投げて、熊の聴力と視力を短時間奪った。その隙にライフルを回収し、さらにリュックから予備弾倉と４０ｍｍ擲弾を幾つも取り出した。その擲弾を装填して熊の顔面に撃ち込んだが、毛皮もどきが吹き飛んだ

だけだった。

「いいねいいねぇ！　その装備を管理局(うち)でも使いてえよ！！」

だが俺は諦めず、銃で応戦し続けた。

～～～

社長だそうだ」

聞き覚えのある会社名を耳にして、みんなは大層驚いた。

「え？　あの『Ｌ＆Ｈ』ですか？」

ランチェス＆ヘリクソン・インダストリー。通称Ｌ＆Ｈ、またはＬＨＩ社。
クラナガンに本店を置くデバイスメーカーである。管理局創設時からの老舗であり、
今でも多くの局員のデバイスを製造・メンテナンスを行っている。
かの３提督も昔は
ここのデバイスを愛用していたそうな。

「今回襲ってきた２人は社長の護衛…という名の私兵部隊だったそうだ」

「なんで管理局と懇意の仲のデバイスメーカーがこんなことをするんだ？」

ゼストさんがみんなが考えている疑問を俺にぶつけた。

「…今から３年と数カ月前に俺は管理局の局長になった。そしてまずやったことは
なんだったか、エリオ、覚えているか？」

「えっと、確かロストロギアの取扱いの改正と…あ！　質量兵器の扱い！」

「優等生だな、エリオ。その通りだ。俺は質量兵器の保有を許可制にして認めた。
そのせいで一部の人々は魔法に頼らない自衛手段を持つようになった。しかも
局内でもティン・マン装甲服を採用してデバイスなしで戦えるようにしたから、
デバイスメーカーの売上はがくっと下がった。おそらくそれが我慢ならなく
なって俺を殺ろうとしたんじゃないかな」

「それって、結局は自分の利益のためじゃん」

思わずスバルがそうつぶやく。

「まあそういうな。にしてもあの熊はすごかったぞ、いやまじで。これ見てみろよ」

そう言って俺はサイボーグ熊ちゃんの図面を見せた。

「動力源は小型魔道炉、両腕にはダイヤモンド合金の爪、内蔵式マシンガン及び
グレネードランチャー、背中にはロケットランチャーを収納ときた」

「ひえ～すごいな～」

その性能にセインは驚く。

「ティン・マンみたいな代物だろ？」

「よくもまあこんな物を作ったな。ウィルを殺すためだけにさ」

「それだけ憎まれてたってことかね。まあティーナとトーレ達に調査させているから
問題はないだろう」

「なら安心なの」

そして大人たちも寝ることに…

「ウィルさん、最近ご無沙汰じゃないですか？　だから…ねぇ？」

「ちょ、ちょっと待てティアナ！　落ち着け！」

「もう待てません！」

「なあああああああ！！！」

続く…

おまけ。

アインハルトが温泉から出て庭に行くと、そこにはすでにカナリアが待っていた。

「カナリアさん、それで渡したいものとは…？」

「アインハルト、君の覇王の記憶の中にこれがなかったか？」

そう言ってカナリアはたたんだ紙を渡す。それを広げて中身を見るとアインハルトはびっくりした。

「なっ！？」

そこに描かれていたのは、アインハルトの記憶にもある風景だった。右にはクラウス陛下と護衛の兵士たち。左には山になっている土。そして真ん中にはオリヴィエ聖王女殿下がいた。

「たしかにこの記憶はあります！　オリヴィエがあの黒い卵を埋め戻すように言っていましたから…でも、なぜあなたがこの光景を書けるんですか！？」

この光景を知っているのはオリヴィエとクラウス、そして護衛の兵士だけのはずなのだ。

「なぜなら…私がその黒い卵だったからだ」

「えっ？」

カナリアはアインハルトに、自分は元ロストロギアだったことを話

した。

「そんなことが…」

信じられないといった表情をアインハルトは浮かべている。

「オリヴィエ聖王女殿下はクラウス陛下と実に仲が良かったように見えた。

だが恋人には見えなかった」

「ええ、その通りです」

「…実はな、私を見つけたのはクラウス陛下だったんだ。君は知らないかも知れんがな。

強力な魔力を感じた陛下がオリヴィエ聖王女殿下を連れて私のところまでやってきて

掘り起こした。そして私の危険性を察した聖王女殿下は埋め戻すように指示されたんだ」

「…そうだったのですか」

「その後陛下の計らいで、私のいた地域は戦場ではなくなったのだ。もし陛下が私を

見つけてくれなかったら、あの地で私はまたあの悲劇をやらかしただろう。

陛下はもう居ないが、その子孫であるアインハルト、君に礼を言っておく。

ありがとう」

そしてカナリアは両手を前に合わせてきちんと頭を下げた。

「いえ、そんな礼なんて…」

「君はあの覇王の子孫だ。だから陛下と同じような聡明で立派な人間になるだろう」

「あ、ありがとうございます」

「カナリア～？ごはんだぞ～」

「今行く、父上。さあいこうか」

「はい！」

2人は仲の良い姉妹のように手をつないで家に戻っていった…

第１２２話：楽しい合宿？その５（後書き）

もう望みは絶たれた…今は結果待ち！
これですべてが決まる…わけない。
→就職活動

次回は作者が大嫌いな試合のシーンか、例によって番外編か。
では

番外編１４：相手は誰だ？（前書き）

友人に

「あの子放置しっぱなしじゃね？」

と言われたので。

番外編１４：相手は誰だ？

～ウィル達が合宿に行っている時、地上本部、技術開発本部～

ここではいつも通りに管理局のために日々研究・開発が行われている。今日は
本局第４技術部からマリエル・アテンザがやってきて、ジェイル達と共に仕事を
していた。すずかは本局で新しい装備の説明を行っているのでここにはいない。

「う～ん、やっぱりここはいいですね～。うちよりも超ハイテクじゃないですか！」

マリーは一応第４技術部の主任なので、ここにある機材を羨ましそうに見つめていた。
それを見たジェイルとウーノは頬を緩ませた。

「でも、すぐに壊れてしまうんだよね。酷使しずぎて」

「そうですね。もっと耐久性を上げないと駄目ですね。お金ばかり消えていきますから」

管理局には前線部隊以外にも、人事部、保安部、査察部、総務部など数多くの
セクションに分かれているが、一番金を使っているのは前線部隊、ではなくて
実は技術部門なのである。

「アリシア、そこのデータをプリントしてこっちに持ってきて頂戴」

その隣でプレシアはパソコンの画面から顔を上げてアリシアに言った。一昨日の夜から徹夜しているので、プレシアの両目の下には隈が出来ていた。

「うわー、プレシアさんすっごい隈ですよ」

それに気づいたマリーが言うが、プレシアは微笑みながら返す。

「仕方ないことよ。徹夜すれば誰でもこうなるわ。それにあなただって隈できてるじゃない。化粧で隠してもバレバレよ？」

「げっ！　バレちゃいました…」

顔を赤くしてマリーはつぶやく。技術職の人間は徹夜が大好きな人達ばかりなのでこうなっても仕方ないのである。

その時、プレシアは何時までたってもアリシアが来ないことに気づいた。

「アリシア？　どうしたの？」

肝心のアリシアはパソコンのキーボードに手を添えながら、画面をボケーッと見つめていた。母親の声にも返事をしない。

「アリシア？」

2回声をかけると、ようやく反応した。

「ふぇっ！？　あ、お母さん」

「ふぇっ、じゃないわよ。さっきのデータ、プリントしてくれた？」

「あ…今からやるね！」

そう言ってキーをカタカタ打って印刷機のところまで歩いて行った。だが歩く速度もいつもより遅い。それを見ていたプレシアは、

（なんなのかしらね～。今日は女の子の日じゃないし、う～ん…まあいいわ）

そして仕事が終わると、

「お疲れさまでした！　じゃあねお母さん！」

と言い残して、アリシアは脱兎の如く研究室を飛び出して行った。

「…アリシアちゃんって、いつもあんなに元気なんですか？」

マリーが皆にそう聞くが、ジェイル以下3名は首を横に振る。

「いつもはプレシアさんと一緒に仲良く帰るんですけどね」

「そうだね。それにあんなダッシュはしないね」

とジェイルとウーノ。だがプレシアは記憶を思い出そうとしているのか、頭を何回か叩いた。

「…確か先月もこんなことなかったかしら？」

「ああ、そういえばそうだったね。いつだったか…ウーノ、覚えているかい？」

「ええ、先月の１５日ですよ」

「ああ、そうそう、その日よ。あの日もあっという間に消えて、家に帰ってくるのも遅い時間だったし…どこで油売っているのかしらね」

するとマリーの口から思わぬ事実が。

「ん？　先月の１５日？　アリシアちゃんならその日の夜、本局で見ましたけど？」

「「「なんだって（ですって）！？」」」

いきなり３人が大声を出したのでマリーは後ろにのけぞりながらも続ける。

「ほ、ほんとですって！　なんか物凄い笑顔で廊下を全力疾走して

いましたよ？」

「……」

するとプレシアは無言でパソコンのキーボードの上で指を踊らせた。画面には様々な符号やらコードやらが猛烈な勢いでスクロールしていく。見慣れた光景だったので、一応ジェイルはプレシアに聞いてみる。

「な、何をしているんだい、プレシア？」

「決まってるでしょ？　見ての通り、ハッキングよ」

「なんだハッキングか、なら問題ない…わけないだろう！？」

「どこをハッキングしているんですか！？」

ジェイルとウーノのダブルツッコミにもプレシアは動じない。

「私の娘がなんで仕事の後に本局へ行くのかを調べるためよ」

「いやいやいや！そ、そりゃ娘さんのことを心配するのはわかりますけど！

いくらなんでもハッキングは…」

「娘のためなら何でもやる主義なの」

マリーも必死に止めるが彼女は聞く耳を持たない。そして。

「あったわ。アリシア・テスタロッサの転送ポート使用記録」

そこには毎月1回、仕事を終えた後に本局へと向かっているアリシアのデータがあった。

「月に1回、それも仕事の後。もしかして男かい？」

「考えられなくもないですね」

「アリシアちゃんに彼氏が！？　私まだなのに…」

なんか1人落ち込んでいるが、プレシアは無視した。そしておもむろにマグカップを手にとって中のコーヒーを飲み干した。その間一言もしゃべらなかった。3人にはプレシアの体からなんかオーラ的なものが滲みでているように見えた。それもどす黒いやつが。

「ぷ、プレシアさん？」

マリーが恐る恐るプレシアに声をかけると、彼女は低い声で笑い始めた。

「ふっふっふ…私の可愛いアリシアの彼氏、いったいどんな人なのかしらねぇ？

是非一度会ってみたいわぁ。もしその男がチ○カスみたいな男だったら…私が

この手で粛清するしか無いわよねぇ？　フフフフ、ハハハハハハ！！」

（（（ち、ちょうこえええええええ！！））））

マグカップを片手で握りつぶしつつ、もう片方の手で電気をバチバチさせながら
不気味に笑い、そして部屋から出て行ったプレシアを見て、３人はブルブル震えた。

～その頃、本局の廊下～

アリシアは満面の笑みで走っていた。なぜか？　今日は月に１度のデートの日なのだ。
曲がり角を全力疾走で曲がり、扉を開けてたどり着いた先は。

「ユーノ！！」

「アリシア！」

そう、無限書庫である。そしてアリシアのデートの相手とは、み

んなご存知
淫獣ことユーノ・スクライアである。原作ではどこかの女とくっついたらしいけど。
なんでこんな仲なのかというと、いつだったかアリシアがミッドの交差点でトラックに
轢かれそうになった時に、たまたま非番でその辺をうろついていたユーノが結界を
張って助けたんだと。そこから仲良くなって今なご覧の有様。ちなみにアルフは
ユーノが肉で釣って帰らせたし、他の司書達もいないので、書庫の中で2人っきりで
話していた。ユーノは奥手なのでなかなか手を出そうとしないが、アリシアはいつでも
ばっちこいの気持ちである。

「今日はどんな本を紹介してくれるの？」

「うん、実はこれを…」

そしてかれこれ2時間もしただろうか。ユーノはふと、アリシアの顔がすぐ近くにある
ことに気づいた。アリシアもそれに気づいて、2人して顔を赤くする。

「あ、ご、ごめん！　ちょっと近かったね…」

ユーノは離れようとするが、アリシアが腕に抱きついてそれを阻止する。

「謝ること無いよ。だって近くにいて欲しいもん」

「アリシア…」

「ねぇユーノ…キスして？」

アリシアのストレートな要求にユーノの声が裏返った。

「えぇっ！？　で、でもそれは…」

「もう我慢できないの。だって…好きなんだもん…」

その言葉を聞いて、ユーノは覚悟を決めてアリシアをそっと抱き寄せる。

「あっ…」

「…うん、僕も好きだよ、アリシア」

「……やっと言ってくれたね？」

そして2人の唇が近づいていき、あと少しでくっつくといった瞬間。

ズドーンッ！！！

「フハハハハハハ！！！　さあ、私の可愛い娘に手を出そうとしている愚か者は
どこにいるのかしら？　今なら一瞬で消し炭にしてあげるわ！！」

部屋の扉を吹き飛ばしながら邪神プレシアが空気を読まずに登場。
あの後、
すぐに本局へと飛んできたプレシアは、転送ポートの記録をとっている保安部へと
足を運び、当直の局員とちょっとばかりＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをして、アリシアの
居場所を突き止めたのだ。廊下からは非常警報のうるさい音が聞こえてくるが、
さっきのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩのせいでは断じてない。

ちなみにプレシアはとても急いでいたので、自分が今いるここが無限書庫だと
いうことに気がついていない。

「おおおおおお母さん！？」

「ひ、ひいいいいいいいい！！！」

プレシアの顔を見て思わずユーノは後ろへと後ずさった。部屋は暗かったので、
隈のせいでプレシアがさらに怖く見えたのだ。

そしてプレシアはユーの前で仁王立ちになる。

「フフフ、あなたがアリシアの彼氏ね、覚悟なさい…って、あらユーノ君じゃないの」

そこでプレシアはユーノの顔をきちんと識別した。

「おおおお久しぶりです…プ、プレシアさん…」

ちびりそうになりながらもユーノが挨拶すると、プレシアのさっきまでの怒りは
どこかへ吹っ飛び、笑顔になってユーノと握手した。

「なんだ彼氏ってユーノ君だったのね～。なら安心だわ。アリシアをよろしくね？
それじゃあごゆっくり～」

そして邪神は帰っていった。で、部屋に残された2人は。

「…プレシアさんは一体何をしに来たんだ？」

「…さぁ？」

とてもいいムード、とは言えなくなったので、今日のところはお開

きになった。

～次の日、技術開発本部～

「おかあああああさあああああああんん！！！」

「あだだだだだ！！ギブギブギブ！！！」

とてもいいムードで、あともう少しでキスできたはずなのに、それを木っ端微塵にぶち壊されたアリシアは、プレシアにコブラツイストをかけていた。

「…一体何があったの？」

何も知らないすずかはジェイルとウーノに聞くが、

「「色々あったんだよ（ですよ）…」」

としか言わなかった。

「うりゃあああああああ！！！」

その向こうでアリシアはジャーマン・スープレックスを決めて、プレシアをダウンさせていた…

番外編１４：相手は誰だ？（後書き）

アリシアの彼氏はユーノにしました。

次回の更新、遅れるかもしれませんが、合宿２日目の試合を。

では

第１２３話：楽しい合宿？その６（前書き）

２日目に入りますよ。つまり模擬戦。戦闘描写は嫌いです…

第１２３話：楽しい合宿？その６

２日目の朝。「ホテル・アルピーノ」に泊まっているヴィヴィオ達一行も目覚め、
大人は朝ごはんの準備をしている。でもヴィヴィオやイクス、リオ、アインハルトは
まだ夢のなかである。同じベッドに４人で寝ている。

外ではルーテシアが日課の朝の散歩をしていた。

「ん～～、いい朝ねぇ～」

そこへ早起きして魔法の練習をしていたコロナがやってきた。

「ルーちゃんおはよ～」

「おはよーコロナ。ブランゼル調子はどう？」

「うん、さっきも一緒に練習してたんだけど、すごくいい子！賢いしわたしに合わせて
くれるし！」

そう言ってコロナはブランゼルを褒める。待機状態だと、５つの水晶が付いた花の
首飾り型になる。それを聞いたルーテシアは嬉しくなった。自分が作ったデバイスに
満足してもらったからである。

「それはよかった！」

そしてブランゼルに話しかける。

「綺麗な名前をもらったんだからご主人様のために頑張るんだよ？」

「Ｙｅｓ，Ｍｅｉｓｔｅｒ」

そのまま2人は歩きながら話をする。

「あさごはん食べ終わったらさっそく模擬戦だねぇ」

「ねー。青組の3人なんか朝練しながらミーティングだって」

「あははー」

青組の3人とは、なのはとスバル、エリオである。

「ふたりでナイショで練習したコロナの魔法…みんなに見せてびっくりさせちゃおうね！」

「うん！　ルーちゃん！」

「まあ今回は敵チーム同士だからわたし自ら叩き潰しちゃうかもだけど」

「えー！？　つ、潰されないもん！　がんばろうね、ブランゼル！」

「Ｉ　ｄｏ　ｈａｒｄ．（頑張ります！）」

～朝ごはんのあと、陸戦場～

「はい、全員揃ったね？」

そう確認するのはなのは。模擬戦に参加する１５名がそこにいた。

「じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさんから！」

「あ、あたしですか！？」

若干戸惑いつつも、ノーヴェが説明を始める。

「えー…ルールは昨日伝えた通り、赤組と青組が６人ずつ、緑組が３人のチームに別れた
フィールドマッチです。ライフポイントは今回もＤＳＡＡ公式試合用タグで管理します。
あとは皆さん怪我のないよう正々堂々頑張りましょう！」

「「「「「はーいっ！」」」」」

「でもウィル君、本当に緑チーム３人だけでいいの？　１５人いるんだし均等に分けても
いいんじゃ…」

なのはが心配そうに聞いてくる。それもそのはず、俺の所属する

緑チームのメンバーは
俺とイクスとカナリアだけである。しかも色々と制限をかけているので厳しい。
俺はインフィーしか使えないし、カナリアの場合は重力操作を使えず、イクスは同時
召喚&制御できる数が１０体に限られ、召喚するものにも制限がある。

「いいって、これくらいで。そうじゃないと戦力バランスがラリっちまう」

「できればもっと制限かけたいところだけどな」

とノーヴェ。

「だってウィルは論外だし、カナリアも戦闘慣れしてるし、イクスは何を出すか
さっぱりだし…」

「それはあとでのお楽しみだよ、ノーヴェ！」

「全然楽しくねーよっ！」

「はいはい、そろそろ始めようぜ。緑組、派手に行くぞ！」

「じゃあ赤組、元気に行くよ！」

「青組もせーの！」

「「「「「「「「「「「「セーット！　アーップ！！」」」」」」」」」」」」

赤組

ノーヴェ：FA（フロントアタッカー）　LIFE　3000

アインハルト：FA（フロントアタッカー）　LIFE　3000

コロナ：WB（ウイングバック）　LIFE　2500

フェイト：GW（ガードウイング）　LIFE　2800

ティアナ：CG（センターガード）　LIFE　2500

キャロ：FB（フルバック）　LIFE　2200

青組

スバル：FA（フロントアタッカー）　LIFE　3000

ヴィヴィオ：FA（フロントアタッカー）　LIFE　3000

リオ：GW（ガードウイング）　LIFE　2800

エリオ：GW（ガードウイング）　LIFE　2800

なのは：CG（センターガード）　LIFE　2500

ルーテシア：FB（フルバック）　LIFE　2200

緑組

カナリア：FA（フロントアタッカー）　LIFE　3000

ウィリアム：CG（センターガード）　LIFE　2500

イクスヴェリア：ＦＢ（フルバック）　ＬＩＦＥ　２２００

各チームが集まり、試合前の最後の打ち合わせをする。

「序盤は多分同ポジション同士の１ｏｎ１。均衡が崩れるまでは自分のマッチアップ相手に
　集中ね！」

「「「「「おー！」」」」」

赤組のリーダー、ティアナの声に他の５人も力強く返事をする。

その隣ではなのはが。

「赤組は前衛と中盤に突破力の高い子が揃ってる。序盤は守備を固めて向こうの足を
　止めていこう！」

「「「「「「はいっ！」」」」」」

一方緑組は。

「カナリア、始まったらすぐに空に上がれ。俺がちょっとふざけたことをする。その後は
　指示があるまで好きに戦って構わん」

「わかった、父上」

「で、イクス。とても重要なんだが、始まって最初に俺が魔法を使ったらすぐに
俺を召喚してくれ」

「え？　なんで？」

「制限かかった状態で”あの”魔法使うと疲れちゃうんだよね。だから休憩」

「わかりました、お父様！」

するとみんなの前にモニターが現れて、メガーヌさんが試合開始の合図を出す。

「それではみんな、元気に…試合開始～！」

ジャァァァン！！

ガリューが叩いた中華っぽい鐘の音と共に試合が開始した。

「ウイングロードッ！！」

「エアライナーッ！！」

スバルとノーヴェがそこら中に魔法の道を空中に作り出した。それを見て俺は。

「インフィー！　行くぞ！」

《了解です！》

そう言って地面にインフィーをモード2、すなわち槍モードにして突き刺した。

「へっ？」

「なにあれ？」

思わずティアナとなのはは俺を見る。それが間違いだった。

「スフィアクリーパー！！」

すると槍を突き刺した所から周囲に向かって亀裂が走った。そのスピードはとても早く、

俺が叫んでから0．5秒後には、両チームの全員の足元まで迫っていた。そして。

「ザフィーラっぽい雄叫びで行くぞ！　ておあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

足元まで迫った亀裂から魔力弾が高速で垂直に撃ち出されて敵に向かった。だが

なのはやティアナなどの元6課メンバーは、驚きはしたものの体をひねって回避した。

アインハルトも避けたが、リオとコロナ、さらにヴィヴィオは避けれずに直撃した。

「痛いっ！！」

「ぐえっ！！」

「パパそれずるい！！」

試合開始直後の奇襲攻撃。これにはみんなが驚いていたが、俺の攻撃はまだ続いていた。

「弾けろっ！！」

すると直撃弾を回避したメンバーを狙っていたスフィアが上空で一斉に巨大化し、
爆発した。その衝撃波が敵チームを襲う。

「うわあああ！！」

「ひえええええ！！」

「こんなのありかよおおおお！！？？」

赤組
ノーヴェ　ＬＩＦＥ　３０００－１５０＝２８５０
アインハルト　ＬＩＦＥ　３０００－１５０＝２８５０
コロナ　ＬＩＦＥ　２５００－３００＝２２００
フェイト　ＬＩＦＥ　２８００－１５０＝２６５０
ティアナ　ＬＩＦＥ　２５００－１５０＝２３５０

キャロ　ＬＩＦＥ　２２００－１５０＝２０５０

青組

スバル　ＬＩＦＥ　３０００－１５０＝２８５０

ヴィヴィオ　ＬＩＦＥ　３０００－３００＝２７００

リオ　ＬＩＦＥ　２８００－３００＝２５００

エリオ　ＬＩＦＥ　２８００－１５０＝２６５０

なのは　ＬＩＦＥ　２５００－１５０＝２３５０

ルーテシア　ＬＩＦＥ　２２００－１５０＝２０５０

みんなが混乱している間にイクスが俺を召喚する。

「おかえりなさい、お父様！」

「おう、ありがとな。じゃあカナリア！　やっちまえ！！」

「合点承知！！」

カナリアは氷の双剣を構えながら赤チームに突っ込んでいった。

「召喚！」

イクスは周りに魔方陣を描き、そこから２体のＴ－１０００を出す。そしてイクスを守るように両隣に立った。

「これでオッケーだね！」

「そうだな。さて、みんなの戦いを見てみようかね」

「お母様達に負けないよ！」

続く…

第１２３話：楽しい合宿？その６（後書き）

短いですね。

正直、ウィルとカナリアとイクスは試合させない方向だったんですが、
イクスの戦闘シーンが見たい、って友人がうるさかったので…

次回は続きを。
では

第１２４話：楽しい合宿？その７（前書き）

久々の更新です！続きだよ。

いつの間にかＰＶが１５０万突破していました！

ありがとうございます！！

第１２４話：楽しい合宿？その７

～緑チーム～

俺とイクスは戦況を確認していた。さっき使った魔法、「スフィアクリーパー」は
やろうと思えば誰にでもできる。地面の中を魔力球を走らせて、相手の足元まで行ったら
垂直に飛ばせばいい。追加でさっきみたいに爆発させてもいい。ただ、今の俺には厄介な
ことにリミッターが掛かっているので、これを使うとちょっと休憩が必要になる。試合の
前に自分で作ったリミッターのせいで、ランクがＡＡまで落ちているし、若本が使えない
からＮＡＮＯスーツの能力も使えない。

「自分で作っといてなんだけど、これはしんどい」

思わずそうつぶやいてしまう。すると隣のイクスが声を上げる。

「あ、カナリアお姉様が赤チームの近くについたよ！」

「そうか、見てみよう」

普通、こういうチーム戦の場合、自分と同じポジションの人と戦うのが基本である。
フロントアタッカーならフロントアタッカーと、フルバックならフ

ルバックと。
だがカナリアの場合、敵チームのフロントアタッカーが４人とも戦闘を既に開始
していたので、仕方ないということで上空で見守ることにした。

ノーヴェはスバルと殴り合っているし、ヴィヴィオとアインハルトも同じく。
フェイトはエリオと楽しそうに戦っていて、リオとコロナも精一杯戦っている。
なのはとティアナは支援砲撃を行い、キャロとルーテシアは後ろでチーム全体を
支えるお仕事。さて、どこに殴りこみをかけようか？

「どうしたものか…」

そんなことを考えていると、なのはとティアナの砲撃が飛んで来るのが見えた。

「全く考える暇もないな」

そう言いつつ、両手を左右に広げる。するとピンク色とオレンジ色の砲撃は
こっちに飛んで来るうちに威力が落ちてゆき、カナリアの手の中に全て吸収
されてしまった。

「ん～！　カナリア、それはずるいよ！」

「そうよ！　全然当たんないじゃない！」

砲撃をお見舞いした2人は悔しがるが、カナリアは冷たく返す。

「だがこれは使ってはいけない、とは言われていないだろう？」

「そ、それは…」

カナリアが持っているレアスキルは2つある。1つは重力操作。

もう1つは魔力

吸収だ。スポンジみたいにどんどん吸い込んでいくのだ。

「ん？　待てよ…」

そこでカナリアは次々と飛んで来る砲撃を吸い取りながら考え始めた。

（吸収ができるのならその反対、放出もできるのではないだろうか？）

そして地面に向けてスポンジを絞るような感覚で魔力を出してみた。その瞬間

黒い魔力が地面に向かって一直線に放たれた。地面に命中したものの、被害はゼロ。

ただの魔力なので当たり前である。

「ほう、これは面白いな…父上！　疲れは回復したか？」

「いや、まだだ」

「じゃあ受け取れ！　濃厚な魔力だ！」

そう言うとカナリアはイクスの隣にいるウィルに向かって魔力を放った。

「ちょ！　俺に砲撃すん…な？」

だがその魔力はウィルの体に沁み込んでいき、あっという間に回復した。

「すげえ！　サンキュー、カナリア！　さあ暴れるとするか！」

俺はインフィーを持ち上げて両チームが戦っている戦場へ飛んでいった。目的は1人。

「エェェェリオくゥゥゥゥゥゥゥン！！　あぁぁぁ遊びぃぃぃましょぉぉぉう！！！」

「おおおおお父さん！？」

フェイトと戦っていたエリオは超びっくりしている。もちろんフェイトも。

「ウィル！？　センターガードでしょ！？」

「じゃあ変える！！」

俺が指を鳴らすと、モニターに表示されていた選手一覧の俺の部分が変化した。

ウィリアム　CG（センターガード）→全ポジション

「「えええええ！！？？」」

「これでよし！！　エリオ、お前の力を俺にぶつけてみろ！！」

俺は両手を広げてエリオを誘う。一度槍同士で戦ってみたかったんだよなあ。それに
父親として息子がどれくらい成長したのか知りたいし。

「…よし！　行きます！！　ストラーダ、頑張ろう！」

「了解です！」↑ドイツ語分かんないから日本語表記で

するとエリオは俺の誘いに乗ってストラーダを構えて突っ込んできた。

「ちょっと！　むううう、ウィル！　エリオをとらないでよ！！」

エリオをとられたフェイトも何故か俺に向かって飛んで来る。

「２ｏｎ１かよ！　まあいいや、レッツパアアアアアアアアリィイイイイ！！」

何かのゲームの中に出てきたどこかの国の大統領みたいなセリフを吐きながら
戦闘を開始した。

「ふむ、では私も」

父親の様子を見ていたカナリアもまたモニターを展開して、自分のポジションをフロントアタッカーから全ポジションへとこっそり変更した。

「これでよし。ではでは、いざ参る！！」

そう言って、地面へと急降下する。一応飛べるけど、リミッター付きなので飛ばないほうがエコである。そして着陸すると地面に薄い氷を張ってスケートみたいに滑り始めた。
目指す先には2人がいた。コロナとリオである。

「一度ああいう図体がでかい奴と戦ってみたかったんだよなぁ、ふふふ…」

「図体がでかいって言わないでよ！　これでもコンパクトなんだから！」

コロナはそう言うが、彼女お手製のゴーレム「ゴライアス」は誰がどう見ても図体がでかい。

「いや、コロナ…全然コンパクトじゃないよ、それ…」

大人モードになっているリオもつぶやく。そんな彼女にカナリアが悪魔の囁きを。

「リオ、打倒コロナのために手を組まないか？」

「えっ？　う～ん…今だけだよ！」

「ええっ！？」

コロナが驚いている間に、カナリアとリオは一時的なパートナーとなった。

「さあいくぞ！！」

「うん！！」

そしてカナリアは、ウィルに使い方や戦術、そして「必殺技」を教えてもらった
双剣を構えてゴライアスに突っ込んでいった。リオもまた拳を握りしめて突撃する。

「そんな！？　２対１！？　ううううう、負けないよ！！」

数で不利になったコロナだが、それでもやる気満々で２人と向かい合った。

その頃、青組のルーテシアは後ろのほうで戦局を見ていた。

「ん～、いきなり２ｏｎ１になるとはねぇ～…みんな大丈夫かな？」

赤組のキャロも同じことを考えていた。

「カナリアちゃんにお父さん、２人とも強いから…エリオ君にみんな、頑張ってね！」

続く…

第１２４話：楽しい合宿？その７（後書き）

短いっ！！　だが仕方がない！！
就職活動なんてまじでクｓ

次回も続き。いつ更新するかはまだ未定。
では

第１２５話：楽しい合宿？その８（前書き）

つーづきーだーよー

第１２５話：楽しい合宿？その８

戦いの様子を少し離れた場所からセインとメガーヌ、ゼストが見守っていた。

「いやぁ、みんな元気にやっとるねぇ」

「まったくだな」

「ほんとにねぇ」

モニターには現在のみんなの位置情報と対戦相手の情報が表示されている。

「青チームも赤チームもセンターガード同士が足止めしているし、陣形が崩れないねぇ」

「ただ緑チームのせいで混戦になりかけているな」

セインは感心し、ゼストは難しい顔でモニターを見つめる。

「すでに２箇所で２ｏｎ１だしねぇ」

ウィリアムｖｓフェイト＆エリオと、コロナｖｓカナリア＆リオである。

「リミッター付きとはいえ、かなり厳しい戦いになるわね」

メガーヌもゼストに同意する。

「他のバランスもそろそろ崩れ始めるし、ここからが見物ね」

その頃ヴィヴィオはアインハルトと戦闘を繰り広げていた。

「ソニックシューター、ファイヤッ！」

なのは直伝の誘導弾を数発発射すると、アインハルトは防御の姿勢をとった。

（よし！　アインハルトさんが受けに入る！　足を止めてくれれば着弾の隙に
回り込める！）

そんなことを考えながらヴィヴィオは突撃。要するにさっきの誘導弾は囮というわけである。しかし、予定通りに行く作戦なんかあまりないのである。

アインハルトは誘導弾を信じられないことに手で受け止めた。

「いっ！？」

（受け止めた！？　弾殻（バレットシェル）を壊さずにっ！？）

ヴィヴィオも顔をひきつらせる、するとアインハルトは

「覇王流―」

（これってまさか！）

「―旋衝破！」

受け止めた誘導弾をそのままヴィヴィオに向かって投げつけ、突撃の最中だった
ヴィヴィオは防御する間もなくダメージを食らう。

ヴィヴィオ　ＬＩＦＥ　２３００－８００＝１５００

（反射技（リフレクト）！？）

だがアインハルトの攻撃は終わらず、ヴィヴィオを容赦なく地面へ叩きつけた。

ヴィヴィオ　ＬＩＦＥ　１５００－１１００＝４００

それを見ていたセイン達は。

「すっげー何今のっ！？　弾丸反射？」

隣にいたメガーヌも驚いた顔をしたが、すぐに真剣な表情へと変わった。

「反射（リフレクト）でも吸収放射でもないわね。受け止めて投げ返したの」

「そんな事できんの」

「真正古代（エンシェント）ベルカの術者なら理論上はね」

（それにしてもあの年齢であの技術…）

それを考えるとメガーヌは寒気がした。

（一体どれだけ過酷な修練を―？）

結局ヴィヴィオはルーテシアの所まで撤退しライフの回復をすることに。その間

アインハルトはなのはの足止めへと向かった。

少し離れた場所では、コロナがリオとカナリア相手に奮戦していた。本人曰く

「コンパクト」なゴーレム、ゴライアスはその腕で2人を殴りつけた。だが

2人ともひらりひらりと避けていく。

「雷龍！」

リオが雷でできた龍をゴライアスへと放つ。

「氷龍！」

それを見てなんとなく真似をしたくなったカナリアも、氷の龍を出

現させる。

「ゴライアス！」

向かってくる攻撃を見てコロナが指示を出すと、ゴライアスは片腕だけで雷と
氷の龍をはじき飛ばした。その隙にリオとカナリアは後ろに回り込む。あんな
大きな岩の塊はそう早く動けないだろう、と考えたのだ。

だが、その予想は見事に外れた。ゴライアスの腰の部分に亀裂が走ったかと
思いきや、下半身はそのままで上半身がぐるぐる回り始め、リオとカナリアを
吹き飛ばした。こればかりはカナリアも想定できなかったようだ。

ただ、この攻撃は肩にコロナが乗ったまま行われたので。

「こ、このパンチは乗ったままだと危ないかも～？」

「Ｉ　ａｌｓｏ　ｔｈｉｎｋ　ｓｏ．（同感です）」

散々ぐるぐる振り回されたコロナはふらふらしていた。

近くのビルに叩きつけられたリオとカナリアは、コロナのゴーレム操作の腕に驚いていた。

（凄いやコロナ。あんなに速いゴーレム操作は並じゃできない）

リオ　ＬＩＦＥ　２５００－１１００＝１４００

（いやはや、なかなかやるじゃないか。大変面白い攻撃方法だ）

カナリア　ＬＩＦＥ　３０００－１１００＝１９００

まだまだやる気満々の２人を見てコロナも気を引き締める。

「２人とも防御も上手いんだ」

「リオ、私が先行する！」

そう言い捨ててカナリアはゴライアスに突撃する。慌てて構えるが、カナリアは足元に潜り込み、ゴライアスの右足を斜めに切り落とした。すぐに再生するものの、一瞬バランスを崩す。その瞬間をリオは見逃さなかった。

「よいっ…しょおーっ！！」

右腕を掴んでそのまま力任せに背負い投げ。柔道の試合なら見事な一本判定をもらえるだろう。

「ナイスだ、リオ！」

「ありがと、カナリア！」

コロナは空中に避難していたからダメージはなかったが、デバイ

スのブランゼルが
のんきなセリフをかましていた。

「マスターのお友達は力持ちでいらっしゃいますねぇ」

「ブランゼル、そんなのんきな！」

んでんで、俺とエリオとフェイトの戦いはどうなっているかというと。

ウィリアム　ＬＩＦＥ　２５００－８００（フェイトとエリオの攻撃）＝１７００
フェイト　ＬＩＦＥ　２８００－３００（ウィリアムの攻撃）＝２５００
エリオ　ＬＩＦＥ　２８００－２００（ウィリアムの攻撃）＝２６００

となっている。エリオとフェイトがコンビを組んで攻撃してくるので意外とダメージを食らってしまった。

「にしても…」

俺は攻撃を避けつつエリオの動きを観察していた。

以前より確実に速く、強くなっている。下手すると負けるかもし

れない。それは
フェイトも思っているらしく、とっとと俺を倒してエリオを戦いたい、という表情を
浮かべていた。

だけど、まあそう簡単にやられる俺ではない。

「カナリア！　イクス！　しばらく支援攻撃が出来なくなるぞ！」

「「了解！！」」

さっきから俺は、エリオとフェイトを相手にしながらも、マイクロミサイルを他の
相手に向かって撃っていたが、それを中断して目の前の敵に全力を注ぐことにした。

「はあああああ！！！」

いつの間にか高速移動で俺の後ろに回りこんだフェイトがバルディッシュを振りかざして
突っ込んできた。今の俺の状態（リミッター的な意味）では避けることはできない。
さてどうするか？

避けられないなら避けなければいいじゃないか！いわゆる「発想の転換」という

やつである。一瞬で解決策が浮かんだ俺は笑顔で叫ぶ。

「インフィー！　アーマードパック、パージ！！」

《アイサー！》

その瞬間、俺のバリアジャケットについていた増加装甲や小口径ビーム機銃、近接攻撃用マイクロミサイル多連装ポッド、高初速ロケット弾連装ランチャー、速射ビーム旋回砲塔といった多彩な火器が全てパージされた。まあ、やろうと思えばまた装着できるし。ともかく、フェイトの攻撃は空中を舞っていたパージされた部品類に命中した。

「ええっ！？」

確実に命中すると思っていたフェイトはあっけにとられる。その隙に、身軽になった俺はインフィーを振り回しながらフェイトに肉薄し、近くの建物に吹き飛ばした。

「ぐうっ！　ウィル～、愛する妻にこんな仕打ちはひどくない？」

フェイト　ＬＩＦＥ　２５００－７００＝１８００

「何言ってんだ、愛の鞭ってやつだよ。な～はっはっｈ」

「隙あり！」

「いてっ！！」

調子に乗ってフェイトと話していたらエリオに攻撃を食らった。

ウィリアム　ＬＩＦＥ　１７００－３００＝１４００

「エリオ、やるじゃないか。俺も本気出すぞ！」

「望むところです！」

ストラーダとインフィニティーが高速でぶつかり合い、火花が散った。

「んふ～、エリオも強くなったなぁ～…って待って！　置いてかないでよ～！」

エリオの戦いぶりを見て満足気ににやついていたフェイトだったが、戦いの最中
だということを思い出し、あわてて２人を追いかけていった。

第１２５話：楽しい合宿？その８（後書き）

この小説の更新スピードが遅いのと、いつも短いのは私の責任だ。
だが私は謝らない。

もう次回で模擬戦終わらせようかな。
では

第１２６話：楽しい合宿？その９

さて、俺は今エリオをフェイト相手に頑張っているわけだが、そこにイクスから通信が。

「お父様！　ルーちゃんが何か企んでます！」

「そうかっ！　なら青チームが動いたらこっちも作戦開始だ！」

「はいっ！　準備は出来ています！」

そして青チームが動き出す。すでに２ｏｎ１になっている俺とカナリア以外の場所で。

ティアナとコロナをシカトして青チームは２ｏｎ１の状況を作り出した。

「ごめんね、カナリア！　こっちの作戦があるから！」

そう言ってリオはルーテシアと合流してキャロとアインハルトをやっつけに。

「…面白くないな。私もついていこう」

その後を追うカナリア。

「なぁんでなのはまで来るんだよ！？」

俺はひどい目にあっていた。エリオ・なのはコンビがフェイトと俺に猛攻撃をしてきた。

なのはの砲撃で足止めを食らっているときにエリオがスピードを生かした攻撃をしてくる。

実に腹立たしい。隣でもフェイトがソニックフォームになってマジになっている。

あ、破けた。エリオ、ナイス！

（カートリッジも使えないこの状況で出来ることは限られている。ならば！）

俺はエリオに突進する。なのはの砲撃が飛んでくるが、瓦礫などを盾にして

突き進む。エリオも俺に気が付き、同じように突っ込んできた。速度ではエリオに

勝てないので、ここはちょっとした”技術”で勝つことにした。

「うおりゃあああああ！！！」

エリオが俺を斬りつけようとストラーダを振る。先端の魔力刃が俺のバリアジャケットに

当たった瞬間にそれは起きた。なんと俺のバリアジャケットの一部、正確にはストラーダが

当たっている部分が爆発したのだ。

これぱかりは地球の知識、具体的には地球製質量兵器の知識がないとわからないだろう。

仕組みは、イスラエルが初めて実用化した爆発反応装甲を魔法で再

現したものだ。
通常のバリアジャケットの上に、見えない形で薄い魔力の層を展開する。層の中には
圧縮した魔力が詰まっていて、それが魔法攻撃に反応して爆発するということである。

「えええええっ！？」

俺はダメージゼロなのに、爆発に巻き込まれたエリオは８００のダメージを受け、残り
ＬＩＦＥは１８００。そして俺は爆煙の中を突き抜け、インフィーでストラーダを引っ掛けて
空中へ放り投げた。剣道の「巻き上げ」とかいう技みたいに。

「あっ」

「これで終わりだ！」

インフィーを野球のバットのようにふりまわし、哀れエリオはホームランみたいに
飛んでいった。

「うわあああああ…きゅう」

エリオ、ダウン。青チーム、残存兵力５名。

「あーっ！　エリオが！」

実にセクシーな格好になってしまったフェイトが残念そうに叫んで、何故か俺に

突っかかってきた。

「もっと戦いたかったのに！　ウィルのせいだよ！」

「なんでやねん！！」

一方こっちはノーヴェとヴィヴィオとスバル。青組の2人の攻撃を受けてノーヴェはかなりダメージを負っている。

「ヴィヴィオ！　畳み掛けるよ！」

「はいっ！」

「くそー、まだだ！　まだ終わっていなああい！！」

ノーヴェはそんなことを言いながらヴィヴィオに突撃。だが後ろにスバルの気配を感じた彼女は振り向きざまにスバルの顔面めがけて右ストレートを叩き込んだ。

「へっへー！　どうだ、スバル！」

確実に当たったと思い、ニヤリとしたノーヴェだったが。

「え？　なにが？」

「は？」

左からスバルの声が聞こえてきてノーヴェは混乱した。

（ちょ、ちょっと待て。落ち着けあたし。今スバルを殴った。なのになんで左から
スバルの声が聞こえるんだ？）

それを見ていたヴィヴィオもまた混乱していた。

（あれ？　スバルはあっちにいるのに…じゃあノーヴェは誰を殴ったの？）

沈黙を破ったのはスバルだった。

「ののののノーヴェ！」

「へ？」

スバルが指をさして叫んだので目の前に視線を戻すと、そこにはスバルの形をした
銀色の人形の何かがいた。

「ひっ！？」

慌てて腕を戻そうとするが、スバルの顔があっという間に手に変化してノーヴェの手首を

つかんだ。そして頭は別なところに”現れた”。その変化のノーヴェはついていけなかった。

次の瞬間、偽スバルがノーヴェに抱きついて爆発した。

「ふんぎゃあああああ！！」

あとに残ったのは真っ黒焦げのノーヴェだけだった。

「…なに、あれ？」

「…さあ？」

残されたスバル（本物）とヴィヴィオは途方にくれていた。

ノーヴェ、ダウン。赤チーム、残存兵力５名。

「やったあ！　作戦成功！」

遠くでイクスが飛び跳ねながら喜んでいた。そばにいるのは”１体”のＴ－１０００。

さっきノーヴェに自爆攻撃をしたのはスバルに化けたＴ－１０００だったのだ。

「素晴らしいぞ、イクス」

「ありがと！」

カナリアに褒められてイクスはさらに笑顔になったが。

「イクス！　そっちにヴィヴィオとスバルが行ったぞ！」

「そんな～」

確認すると確かに接近中である。

「よーし、なら！」

イクスはさらに1体のＴ－１０００を召喚し、全部のＴ－１０００をイクスそっくりにした。

「これでよし！　行くよ！」

「「了解！」」

声もイクスそっくりになったＴ－１０００ズは接近中の2人の突撃した。

「スバル！　イクスが増えた！」

「えええええ！？　はっ！　まさか、アレ全部偽物！？」

「「「かかってきなさい！」」」

本物も含めて3人のイクスが声を揃えて叫ぶ。そんな中、スバルは筋肉と食べ物
だらけの頭を使って本物のイクスを探していた。

（普通は偽物で壁を作って本物は後ろとかに隠れているよね。ってことは…）

イクス達を見ると、1人だけ後ろのほうで浮かんでいるのが見えた。

「ヴィヴィオ！　本物のイクスが一番後ろだよ！」

「てことは偽物2人を倒してからじゃないといけないってこと！？」

「…いや、なんとか隙を見つけて本物をやっつけよう！」

「うん！」

2人とも結構疲れていたが、2人へと向かっていった。

（きっとスバルお母様はこう考えるはずだと思ってた。だから私はここにいる！）

当のイクスは今スバル達と戦っている。一番後ろのは偽イクスだった。

こうすれば、敵は前衛の2人の隙を見つけて一番後ろをやっつけるはずである。

だから格闘にはあまり自身がないイクスでも勝機はある。

（どちらかが一番後ろの囮に攻撃を仕掛けた時がチャンス！　それまでは耐えないと！）

そしてこちらはカナリア。リオ&ルーテシアがキャロに攻撃しているのを見て、
ついでにキャロを攻撃していた。

「ううう、３ｏｎ１とかひどいよ！　アルケミック・チェーン！！」

地面から鋼鉄の鎖が伸びて3人に伸びていったが。

「うっふふー♪当たらない、当たらない！」

ルーテシアは笑顔でそれを回避してゆく。リオとカナリアも同じように避けていた。
しかし、キャロは避けられたのに笑っている。

「それはそうだよ、当てるためじゃなくて撃墜のための布石だから！」

「ナイスです、キャロさん！！」

そこに復活したゴライアスの肩に乗ったコロナが現れた。

「ゴライアス、パージブラストッ！」

するとゴライアスの右腕が高速で回転し始める。

「ロケット・パーンチ！！」

「「へっ？」」

そんな攻撃を予想もしていなかったリオとルーテシアは目を丸くした。

「「うそーっ！？」」

パンチをモロに食らった2人は撃墜。

「撃墜成功っ！」

「勝利のVっ！」

コロナとキャロは揃って喜んでいた―

「いや、敗北のDだな」

―カナリアの声が聞こえるまで。

もうもうとあがっている煙の中からボロボロのカナリアが姿を現し、ゴライアスが
反応する前にその胸を双剣で斬りつける。

「あれ？」

コロナはゴライアスを見たが、別にどこも斬られていなかった。
しかし、その時
ゴライアスがどんどん崩れていった。

「ええっ！？　ゴライアス！」

肩から飛び降りたコロナが呼びかけるも反応はなく、操作しようとしてもうまく
いかなかった。

「コロナ、お前のゴーレムは端末（クリスタル）を核に魔力を込めて練った物質を望む形に
自在に操る、そうだな？」

いつの間にか後ろにいたカナリアに聞かれて、コロナは素直に返事をする。

「う、うん…」

「ならば。その核を破壊すれば機能しなくなるのではないか？」

「っ！？」

瓦礫になったゴライアスを見ると、その中にカチンカチンに凍って真っ二つになったクリスタルがきらきらと輝いていた。

「そ、外を傷つけずに中のクリスタルだけ斬ったっていうの！？」

「ご名答。とある漫画を読んで試してみたくなったんだ」

「なんだそれ」

「ともかく、コロナは捕縛」

バインドをかけられたコロナはおとなしく座るしかなかった。その向こうでキャロがなのはに撃墜されていた。

そしてなのはとティアナが砲撃の体勢に入ったのを見て、カナリアが警告を発する。

「父上！　イクス！　悪魔砲が来るぞっ！」

「何だと！？　イクス、防御体制！　カナリアも退避！」

カナリアからの警告を受け取った俺はまだフェイトと戦っていた。お互いもう

ボロボロである。

「なら俺もちょいくらやりますかっ！」

「させないよ！」

「ぐえっ！」

だがフェイトに邪魔されてライフが残り１３０に。

「だあああ！！　邪魔するなフェイト！　それとおっぱい見えてるぞ！」

「うえっ！？」

思わず自分の胸をチェックするフェイト。その隙に攻撃して撃墜した。

「う～ずるいよ～！！」

「勝てばいいのだ！」

そう言い捨てて、俺も反応弾（威力控えめ）を１発用意した。時間がないのでこれが限界である。

「「スターライトー！！　ブレイカーッ！！」」

「プラス反応弾だ！！」

なのはとティアナの声に合わせて、俺は陸戦場上空に向けて反応弾を発射。2人の
砲撃がぶつかると予測した地点に飛んでいった。そして砲撃がぶつかった瞬間に、
信管が発動し反応弾も起爆。結果、陸戦場はまばゆい光に包まれた。

「うっひぇえええええ!!!」

離れたところにいたセイン達にも閃光と爆風が襲いかかる。メガーヌやゼストは
耐えたが、セインは後ろに吹っ飛ばされた。

「あいたたた…って!」

ようやく目を開けてみると、そこにはきのこ雲が上がりボロボロになった陸戦場の
成れの果てがあった。

「……これなんて最終戦争?」

「まー集束砲(ブレイカー)同士が激突すればねえー。さて、みんなは…」

メガーヌが確認すると。

コロナ　ＬＩＦＥ　０　バインドで捕縛されていたところを吹き飛ばされる。

「きゅう…」

なのは　ＬＩＦＥ　０　ティアナの砲撃を相殺しきれず撃墜。

「あーん！　や～ら～れ～たぁ～！」

イクス　ＬＩＦＥ　３０　咄嗟にＴ－１０００で防御するも防ぎきれず戦闘不能。

「なのはお母様の悪魔砲…恐るべし…」

ウィリアム　ＬＩＦＥ　０　自分で撃った反応弾の爆発に巻き込まれて自滅。

「…ミスったな」

残っているのはティアナ。なんとかなのはの砲撃とウィルの反応弾を相殺した。

「な…なんとか生き残った…で、残っているのは…あたしと…あと３人？」

モニターで確認していると、誰かが急速に接近してくるのが見えた。

「近づいてくる…！　この速度、スバル！？」

「じゃなくてヴィヴィオですっ！」

ヴィヴィオ　ＬＩＦＥ　１８００

「うそおっ！　なんでほぼ無傷！？」

「えへへ！　見たか特救魂（レスキュー）！」

「すごいね、スバルお母様…」

イクスの隣でダウンしているスバルがヴィヴィオをかばったのだった。

「この…！」

ティアナが撃ち始めるが、ヴィヴィオはそれをすいすいと避けていく。

「ティアナさん　行きますっ！！」

「来なくていいけど！」

「覇王空波断（仮）！」

突如現れたアインハルトがヴィヴィオを吹っ飛ばす。

「あーーー！！」

ヴィヴィオ　ＬＩＦＥ　１８００－７００＝１１００

「ヴィヴィオさん！　ティアナさんはやらせません！」

アインハルト　ＬＩＦＥ　１３５０

ティアナを守るようにアインハルトは立つが。

「ご、ごめんアインハルト。さっきのでもうやられちゃった」

「ええっ？」

ティアナ　ＬＩＦＥ　０

単発のソニックシューターの攻撃を受けてティアナもダウン。そしてヴィヴィオとアインハルトはいつかの廃棄倉庫での戦闘を思い出しながらも拳をぶつけ合った。

結局、2人は互いにダウンしてしまった。決着はまだ先になるだろう。

それを見てメガーヌが試合終了宣言を出す。

「はい、試合終ｒ」

「ちょっと待てメガーヌ。まだ1人いるだろう」

それをゼストが遮った。

「あ、そういえばカナリアが居ないな」

「ほんとね～」

陸戦場でもカナリアが見当たらないことに気がつき始めた。

「ウィル君、カナリアはどこだろう？」

「わからん。おーい、カナリアー！」

「カナリアちゃーん！」

いくら声をかけてもカナリアは出てこない。仕方ないのでモニターに表示されている座標へと足を運ぶ。

「ウィル君、ここだよ」

「…何も無いぞ？」

あるのはビルの瓦礫だけである。それを見て俺となのはは顔を見合わせた。

「まさか…」

「瓦礫の下敷きに？」

「カナリアアアアアア！！！」

「今助けるのおおおお！！！」

2人で掘りまくると、出てきたのは大きな黒い卵だった。

「…うん、これは見たことがあるぞ」

「奇遇だね、私もなの」

すると青い双剣が卵の殻を突き破り、カナリアがほぼ無傷で出てきた。

「ふう、助かった」

「カナリア、どうやってあの攻撃を防いだの？　それにこの卵は？」

「ああ、実はな…」

悪魔砲着弾数秒前。カナリアはコロナから離れてできるだけ遠くに避難しようとしたが
間に合わないと判断した。そこで空中に散布されていた魔力をレアスキル「吸収」を
使ってかき集めて、それを自分の周りに放出。形状を卵型にして中に入る。これで
攻撃を防げるんじゃないか、と考えた。

結果から言うと攻撃は防げた。事実、ダメージはゼロである。ただ、卵の位置を固定
していなかったので衝撃で遠くへ飛ばされ、しかも瓦礫の下敷きになってしまい
動きが取れなくなってしまったのだ。

「…とまあこんなところだ」

カナリアは父親と母親に説明を終えた。

「考えたものだな～」

俺は感心しきっていたが。

「凄いレアスキルだね」

何故かなのはは凄みのある笑みを浮かべていた。

「な、なのは母上！？」

思わずカナリアは後ずさりながら尋ねる。

「…さっき聞こえたんだけど悪魔砲って何？」

「ぎくっ！！」

「私は悪魔じゃないもん！！」

「あー、その、それは…」

「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩなの！！」

「みぎゃあああああああああああ！！！」

ＬＩＦＥがあっても事実上戦闘不能だったカナリアも撃墜判定。

結果全員引き分けと

なった。その後おやつと休憩をはさんでさらに２回模擬戦を行った。

２回目は何故か

俺1人対全員といういじめだったり、3回目は俺は休んで7対7の試合が行われた。
2回目は最後の最後で俺がおとされ、3回目も引き分けに終わった。

続く！

第１２６話：楽しい合宿？その９（後書き）

模擬戦おしまい。

とある漫画とは「あばよ、とっつぁ～ん！！」で有名なアレ。

ていうかそろそろ３巻の内容を書き終わってしまう…

４巻が出るまで何を書こうかな。番外編は幾つか考えています。

では。

番外編１５：ヘリコプター命！！（前書き）

こんなことを言う人は「なのは」の世界には１人しかいませんよね。

番外編１５：ヘリコプター命！！

～ミッドチルダ、クラナガン、「ランチェス＆ヘリクソン・インダストリー」本社～

それはそれは大きなビルだった。３０階建ての豪華なこのビルは全部ＬＨＩ社のもので
あり、どこかの誰かさんが時空管理局局長になるまではウハウハ儲かっていた。が、
今はなんと赤字になっている。デバイスよりも安価で、以前は保有が禁止されていた
質量兵器で自分の身を守る人が増えたからである。

「突撃（チャージ）！！」

「「「「「ｙｐａａａａａａ！！！」」」」」

ティーナの声と共に陸士１０８隊が雄叫びをあげながらそのビルに入っていった。
ラーティから屋上に降下した隊員も突入する。今日はＬＨＩ社の家宅捜索＆シャッチョ
さん逮捕の日である。ウィルからの要請を受けて、ティーナはトーレ達と情報を
集め、その結果ＬＨＩ社の社長の私兵部隊が極秘裏に非合法活動をしていることが
判明した。具体的には、競合他社の研究員暗殺、物資強奪、挙句の果てには

局長とその子供の暗殺未遂。ようやるよあんたら、とティーナは心の中で
呟いた。おまけに脱税もしていた証拠が見つかったため、管理局は強制家宅
捜索を行うことにした。

予想通り私兵部隊の反撃があったものの、全員を拘束し社長も逮捕された。
ウィルからサイボーグ熊ちゃんの性能などを事前に教えてもらっていたので、
初っ端からＥＭＰグレネード弾を撃ちこんで無力化した。長らく続いたこの企業も
これでおしまいだろう。

「…うん、ＬＨＩ社の社長以下１２名を逮捕したよ、ご主人様」

「わかった、ご苦労様」

ティーナはウィルに報告を終えて地上本部に戻ろうとした。

すると作戦に参加していたギンガがティーナの所へとやってきた。

「ティーナさん、さっきみんななんて言ってたんですか？」

「さっき？」

「ほら、突入する時」

「ああ、あれね」

一瞬何のことかわからなかったが、すぐにティーナは理解して答えた。

「あれはね、元々地球のとある国の言葉で『万歳』って意味なんだ」

「万歳、ですか？　でもなんでそんな言葉を突入の時に言うんです？」

「…そのとある国はね、一言で言えば恐ろしい国だったの。逆らうとシ◯リアって
いう僻地に送られて強制労働させられたり…で、そんな国だから兵士も上官の
命令には逆らえない。戦争中には、将校に促されて『強制的に』突撃する時に、
恐怖を打ち払い奮起するために兵士が叫んだのが、さっきの言葉なんだ」

「…ひどいですね……ってじゃあなんでそんなこと私達に言ったんですか！？」

「逆らったら反応弾ケツの穴に押しこんで汚い花火にするぞ、っていう意味を
込めて…」

この時ギンガは本気で転職を考えた。

「そういえば向こうはどうなったかな～」

そんなギンガを無視してティーナはモニター通信を開いた。

～２０分前、本社から３０ｋｍの場所、ＬＨＩ社倉庫～

ここには管理局武装隊が捜索に入ったが、事前情報の通り無人だった。そこで勝手に
中に入って書類とかデータを押収していた。

「アルト～、そっちは終わったか？」

「はい、終わりました、ヴァイス准尉！」

元機動６課のアルト・クラエッタ陸曹とヴァイス・グランセニック准尉である。
今日は武装隊をここまでラーティに乗せてきた。

「あとは、ここか」

ヴァイスが最後の扉を開けると、そこはこじんまりとした格納庫になっており、
天井がスライド式になっていた。これなら上空から見るとただの倉

庫にしか
見えない。そして真ん中には。

「ふおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

「うわぁっ！？」

突然ヴァイスが発狂したような声をあげたのでアルトはひっくり返ってしまった。

「きたきたきたきたあああああ！！！　実物だあああああああ！！！」

「どうしたヴァイス！？」

「敵か！？」

大声を聞いて他の隊員がやってきたがヴァイスは知らんぷりして”それ”を
うっとりとした目で眺め続けていた。

「…アルト、何があったんだ？」

そのうちの１人、アレックスがアルトに尋ねるが。

「わかりません、急に声を上げて…」

ヴァイスが興奮している理由は格納庫に保管されていた１機のヘリコプターだった。

ＵＨ－１Ｄ。ヒューイという愛称でおなじみのこのアメリカ製ヘリコプターは、今までに１０，０００機以上も製造されている汎用ヘリコプターである。ベトナム戦争で活躍し、初飛行から５０年以上経った今でも世界各国で現役である。

で、なんでヴァイスがヒューイを見て興奮しているかというと、以前ウィルがヴァイスにあげた地球の映画の中に「地獄の黙示録」があって、それを見た彼は「やっぱりヘリっていいな！　特にこのヘリがいい！」とヒューイを好きになってしまったのだ。

「おっ！　燃料も満タンだしいつでも飛べるな！　おいアルト、ちょっと手伝え！
　これに乗って帰るぞ！」

「ええっ！？　でもいいんですか？　これ証拠品ですよ？」

「証拠品だから飛ばして持ち帰るんじゃないか。問題ない」

その時アルトの後ろから武装隊の隊長がやってきた。

「構わん。ヴァイス准尉、それを地上本部まで飛ばしてこい。そこの3人も
それに乗っていけ」

「「「「はっ！」」」」

武装隊を収容したラーティは他の人が操縦して先に本部へと帰っていった。

倉庫に残っているのはヴァイスとアルト、それに2人だけ。アルトは副操縦席で
離陸前のチェックをしている。残りの2人は後ろに座っている。

「ヴァイス准尉～、ここわかんないんですけど…ヴァイスさん？」

返事がないので顔を上げると。

「Ｙｏｕ　ｓｐｉｎ　ｍｅ　ｒｉｇｈｔ　ｒｏｕｎｄ，ｂａｂｙ
Ｒｉｇｈｔ　ｒｏｕｎｄ…ローター異常なし！」

Ｄｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅの名曲を口ずさみながら、ローターの端にしがみついてくるくる回っているヴァイスがいた。

「…ヴァイスの奴、大丈夫か？」

アレックスが隣にいるマイクに尋ねる。

「俺に聞くなよ…」

「私のヴァイスさんがあんなにおかしい訳がない」

機内の３人はそれぞれ呟いた。

「おい、もういいんじゃないか？」

「いやまだだ、もう少し待とう。あれだけは破壊しなければならん」

ヴァイス達４人がいる倉庫から少し離れた場所に４人の男が待機していた。彼らはＬＨＩ社の警備部門の人間であり、今日もいつも通りに倉庫の警備を担当していた。

だが本社から緊急メッセージを受け取り、ここまで逃げてきたのだ

った。

「おい、もう飛ばせるんだろ？」

「はい、いつでもいけますよ」

男達の後ろには1機のヘリコプターが駐機していた。これまた地球製のＷ－３Ｗソクウ。

ポーランド陸軍仕様の攻撃型ヘリで機体に2連装２３ｍｍ　ＧＳｚ－２３？機関砲を固定装備し、

４つのパイロンを有する。これは元々倉庫が襲撃を受けた際の反撃用ヘリだった。

だが資金と時間が不足していたため、２３ｍｍ機関砲の弾は調達できなかったので、

武装はＭ２６１　ハイドラ７０ロケット弾ランチャー2基と、赤外線ホーミング式の

空対空ミサイル2基、あとはＭ６０が2丁（非固定式）だけである。

なんでＬＨＩ社の連中が地球製のヘリを2機も持っているのかは…

謎です。

「さあて、レッツゴー！！」

点検が終わってヴァイスは嬉しそうにスライド式の天井を開けて、

ヒューイを

空へ浮かべた。

「アルト、このヘリはすごいだろう？」

「はい、地球のヘリもなかなかですね。ただエンジンが残念ですけど」

こっちのヘリは魔法と科学のハイブリット・エンジンなので、二酸化炭素なんて出ないクリーンなエンジンなのだ。このヒューイは航空燃料を燃やしてケツから汚い排気ガスをばらまいている。しかもとてもうるさい。だがヴァイスはあこがれのヒューイに乗れて幸せそうな顔をしていた。

「それは仕方ないだろ。ではのんびり帰るとしますかね」

「おい、出てきたぞ！　飛行している！」

「確認した。どうやら管理局の連中が操縦しているようだ」

リーダー格の男は双眼鏡を投げ捨ててヘリの副操縦席に乗り込んだ。

「よし、あいつを撃ち落とすぞ！　いけ！」

「はいっ！！」

カモフラージュネットを取り払って、Ｗ－３Ｗソクウはヒューイを追いかけ始めた。

「絶対に撃ち落せ！」

「「はいっ！！」」

後部座席に座っている２人の男が、Ｍ６０を持ち上げてヒューイに狙いをつけた。

「６時方向、ヘリコプター１機、急速接近中。ＩＦＦ（敵味方識別装置）応答なし」

突然ヴァイスのデバイス、ストームレイダーが警告を発した。

「何だって？」

その直後、銃声が鳴り響き、機体に銃弾が当たる音が響き渡った。

「なななんだ！？」

「クソッ！！」

ヴァイスは思いっきり操縦桿を奥に押し込みながら、エンジン全開にした。

ヒューイは素早く反応して急降下を始める。下には川が広がってい

た。

「お前等大丈夫か！？」

他の３人に確認すると皆ケガはなさそうだった。

「はい！」

「ああ！」

「大丈夫だ、問題ない」

「ヴァイスさん！　敵ヘリコプター、私達を追いかけてきます！」

Ｍ６０から放たれる７．６２ｍｍ　ＮＡＴＯ弾がヒューイに飛んでくる。それを避けながらヴァイスは考えていた。

（ったくなんなんだよ、このヘリに恨みでもあるってのか…いや待てよ…）

左右の方向舵ペダルを交互に踏んで、機体をわずかにねじる。

（もしかしたらこのヘリに何か積んであるんじゃないか？）

「おい、機内に何かおかしなものがチェックしてくれ！　連中の狙いはこのヘリに
積まれている何かかも知れん！」

「「あ、ああ、わかった」」

同僚2人が頷いて足元や上を見てみる。アルトは後方のヘリの動きをチェックしていた。

「ん？　こりゃなんだ？」

後ろで変な声が上がったのでちらっと見てみると、マイクが後部座席の下から
緑色の頑丈なケースを引っ張り出しているのが見えた。

「おい、それなんだ？」

「今開けるから…って」

箱を開けるとそこにはノートパソコンが。マイクが電源を入れてデータを確認すると。

「おいおい、これは裏帳簿だぞ」

「マジで？」

その時ティーナから通信が入った。

「ヴァイス君、そっちはどんな感じ？　もう終わった？」

「ティーナ姐さん！　今マズイんですよ！　倉庫内にあった証拠品のヘリで帰還中
なのですが、ＬＨＩ社と思われるヘリに攻撃を受けています！」

「なんですって！？」

「おそらく機内に残されていた裏帳簿のデータをヘリごと破壊するつもりなのでしょう！」

「すぐに援軍を出すわ。今しばらく耐えて頂戴！」

「了解！」

ティーナは通信を切って、すぐに地上本部につないだ。

「こちら局長代理のティーナ。緊急よ。格納庫につないで！」

「おい、とっとと撃ち落せ！」

リーダー格の男が叫ぶ。

「あのパイロット、なかなかやりやがる！　こっちの攻撃が当たらん！」

Ｍ６０を撃っている男が叫び返す。

「くそ、ならロケット弾だ！」

「了解！」

操縦士は操縦桿の赤いボタンを押してハイドラロケット弾を撃ち始めた。

「ロケット弾だ！！」

ヴァイスはすぐさま攻撃に気がついた。だが下には川。右には民家。左には崖。

逃げ場がなかったので避けるしかなかった。ヴァイスはロールとピッチアップを

併用し、らせんを描くような飛行、バレルロールをヘリでやった。

「「うわあああああああ！！！」」

「きゃあああああ！！！」

「こりゃ最高だ！！！」

機内が3人の悲鳴と1人の歓声で包まれた。今4人の頭の上には川があるのだから。

機体をかすめて飛んでくるロケット弾は全て水に吸い込まれて水柱となった。

「はっはっは！！　どんなもんだ！　見たかこのテクニックを！」

敵のヘリ操縦士もびっくり。

「あんな機動よくできるな！」

「確かにすごいな…って感心するな！　撃て！」

再びロケット弾を撃ち始めるが、全て外れて崖を削るだけだった。

「くそ、ロケット弾は弾切れです！」

ヴァイスとアルトの目の前では崖がロケット弾の被害にあっているのが見えた。
後ろから声が聞こえないのでヴァイスは後ろを見る。

「おい、２人とも気分はどうだ！　やっぱ空中戦闘は最高だろ！？」

「「こっちみんな！！　いいから前を見ろ！！」」

そして今度は機首を大きく上に向けて上昇を開始した。

「上がれ上がれ上がれ！！」

その後ろで敵ヘリも上昇を開始したが、武装が重くて速度が上がらない。

「くそ、撃ち終わったハイドラランチャー捨てられないのか？」

「待ってください、今からミサイルを…」

操縦士は狙いを定めてボタンを押し、2基のミサイルが発射レールから離れた。

「赤外線誘導ミサイル接近中！　2基です！」

「分かっている、ストームレイダー」

ヴァイスは慌てずに上のスイッチを2つ切った。

「ヴぁヴぁヴぁヴぁヴぁヴぁヴァイスさんななななにしてんですか！？」

「これが最高の方法だ！！」

それを見たアルトは発狂した。だってそのスイッチは…

エンジンのスイッチじゃん！！

エンジンが停まったヒューイはローターの回転が止まった。だがエンジンを止めただけでは赤外線誘導ミサイルを避けるのは不可能だ。

しかしミサイルの誘導システムのセンサーは突然目標を見失った。何故かというと、ヴァイスは機体を太陽に向けて飛ばしていたのだった。太陽光のせいで旧式の赤外線誘導ミサイルは無力化され、ヒューイの側を通って空中で爆発した。

さて、ミサイルはなんとか避けれたが、エンジンを切っているヘリは当然落ちる。

「「「うひゃあああああああああ！！！」」」

テイルローターを真下に落ちて行くヘリの中で、ヴァイス以外の3人が絶叫した。

その途中でマイクの隣のドアが開いてしまい、マイクは外に放り出されてしまった。

右手で掴んでいるつり革のおかげでなんとか耐えている状態だ。

「#$%&’（）＝！！！！」

何を言っているか3人にはわからなかったが、悲鳴だということはわかった。

「アレックス！　マイクを引き上げろ！！」

「合点承知！！」

アレックスがマイクを掴んで機内に引きずり込んだ。その間にヴァイスはエンジンを再起動して、再び追いかけっこが始まった。

「ドアをしっかりロックしろ！！」

アレックスがそれに従うが、マイクは呆然としている。

「マイク、おいマイク！　しっかりしろ！」

「あ、ああ…」

「残弾ゼロです！」

空のロケットランチャーとミサイル発射レールをパージしながら操縦士が叫ぶ。

「くそっ！　残りはＭ６０しかないじゃないか！　エンジンをよく狙って撃つんだ！
　このまま進むと…」

「わかっています！！」

固定式にしておけばよかったな、と思いながら銃手はＭ６０の引き金を再度引いた。

「ヴァイスさん！　このままだと市街地へ入りますよ！」

「言われなくてもわかってるよアルト！　でも反撃できないんだぞ！？」

　ヴァイスの操縦技術でないと敵の銃撃を回避できないし、アルトはヴァイスのサポート、
マイクは空中に放り出された時にデバイスを落としてしまった。唯一反撃できるのは
アレックスだけだが、後ろに魔法を放ってテイルローターを吹っ飛ばされたくないので
攻撃していない。さて困った。

その時、再びティーナから通信が。

「ヴァイス！　そのままっすぐ進んで！　援軍到着よ！　あとは、っと」

ティーナは全周波数で話し始めた。当然敵のヘリにも聞こえている。

「こちら時空管理局。敵対行動中のヘリコプターに告げる。直ちに武装解除せよ！
繰り返す、直ちに武装を…」
しかしティーナの声を遮るかのようにリーダー格の男が叫んだ。
「うるせえババァ！　ったく管理局には年食った女しかいねえのかよ…」
それを聞いたティーナはこめかみをピクピクさせながらも返事した。
「だだだ誰がババァですって！？」
「てめえ以外に誰がいるんだよ！」
「なんですってえええ！！　私はまだピチピチの２０代なのに！！」
一応ウィルと共に人生を歩んできたので、ウィルと同じ年令ということになっている。
しかし。

「何言ってやがるんだ？　１４歳以上はな、ババァなんだよ！！」

「「「そうだそうだ！！」」」

リーダー格の男がそう叫ぶと、機内の３人も同意した。実はこの男達、かなりのロリコンである。

「……（ぶちっ）」

「「「「あっ」」」」

ティーナの隣にいたギンガと、ヒューイに乗っていた４人の耳に何かがちぎれるような音が聞こえた。そしてティーナは静かに呟いた。

「アルファ……マイク……」

「ん？　何いってんだ？」

敵ヘリの乗員は何のことかわからない。しかし、ヒューイを操縦しているヴァイスには、
その後に何をすればいいのかわかっていた。彼の脳内では、ずっと前にウィルから
もらった映画のワンシーンが再生されていた。

「フォックストロォォォォット！！！」

彼は大声で叫びながら右に急旋回する。ティーナも一緒に叫ぶ。

「「言い換えると…アディオス！　マザーファッ○ー！！」

「なんてこった…」

ヒューイが右に旋回すると、前方から地上本部を出撃したＡＩＦ－９Ｖ無人戦闘機が
飛んできて、ハイマニューバ・ミサイルを４発発射した。それらは空を駆け巡り、
ターゲットであるＷ－３Ｗソクウに見事に命中し、木っ端微塵にした。

「ハッハッハッハ！！！　ざまみやがれ！！！」

「ナイスよヴァイス！」

「いやいや、ティーナ姐さんも粋なことしますね！！」

「いや～それほどでも～。だってロリコンは死ねばいいじゃない？」

「同感ですね！」

「「あっはっはっはっは！！！」」

ティーナとヴァイスは大声で笑っていたが、他のメンバーは（　。д。）ポカーン状態だった。

で、裏帳簿も確保したのでＬＨＩ社は信頼を失い、他社に吸収合併されてしまいました、
めでたしめでたし。ちなみに、証拠品として押収されていたヒューイを後日ヴァイスが
給料を使って購入し、細かいところをアルトと一緒に修理して、休みの日に妹のラグナと
一緒に飛び回るようになったのは別の話。

続く…

番外編１５：ヘリコプター命！！（後書き）

ごめんなさい、ついやっちゃったんだ。だが私は謝らない。
番外編もねたぎれでつ。誰かいいアイデアをください…

今回のネタ元は「特攻野郎Ａチーム」です。まあ見ればわかりますよ。

次回は本編に戻ります。
では

第１２７話：楽しい合宿？その１０（前書き）

更新遅れてすみません！
しかも短くてすいません！

第１２７話：楽しい合宿？その１０

～全試合終了後、ホテルアルピーノ、露天浴場～

よく風呂場で「かぽーん」という効果音を聞くけど、これはいったいなんなのだろうか。
なんでこんな音になるんだろう？　一度詳しく調べてみたいな～、と風呂上りのスバルは
考えていた。その隣でゆったりとしているティアナが、スバルの顔を見て顔を曇らせる。

「スバル、またなんかどうでもいいこと考えていない？」

「ええっ！？　そ、そんなこと考えてないよ。あ、あははー」

図星だったのでスバルは笑ってごまかす。

「はぁ…でも、さすがに３連戦はキツいわねぇー」

「ほんとだね…」

６課時代の訓練を思い出していたティアナだったが、スバルは青い顔をしていた。

「あれ、どしたの？」

「いや、その…６課の時のティーナさんの訓練を思い出しちゃって…」

「あぁ～…」

あの地獄の日々をティアナも思い出してしまったので暗い表情になってしまった。

「でもおかげさまで大分実戦感が戻ったかも」

「よかったよかった」

そこにノーヴェがひょっこりと現れた。浴衣の袖をまくっていてまるで男みたい。

「誰が男だ!?」

「うわっ！　ど、どしたのノーヴェ？」

突然ノーヴェが大声を出したのでスバルはちょっとびっくりした。

「ああ、いや、なんか男っぽいって誰かに言われた気が…まあいいや」

「そ、それでみんなはどうしてた？」

「さすがにみんなぐったりだな。フェイトさんはエリオとキャロと一緒に部屋で
のんびりしてるし、なのはさんもメガーヌさんとキッチンで談笑中」

「ウィルさんは？」

夫の名前が出てこなかったのでティアナが聞いてみる。

「ウィルならさっき外にいたのを見たぞ。誰かと話しているんじゃないか？」

「そう、きっと仕事ね」

「で、チビ達とお嬢は…」

ベッドの上で４人の少女たちが唸っていた。

「ううー…う、腕があがらない…」

「起きられないー…」

原因はもちろん筋肉痛である。１０歳の少女があんな派手な模擬戦を３連続でやるとこうなる。

「……動けません……」

「ほ、ほんとに……」

アインハルトもダウンしている。その光景を見ながらルーテシアは

苦笑い。

「限界超えてはりきりすぎるからだよ」

「ルーちゃん、なんで平気なの～？」

「そこはそれ、年長者なりのペース配分がね」

そして話はインターミドル・チャンピオンシップに移る。

「自分の魔法、自分の格闘戦技がどこまで通じるか確かめるのにはすごくいい場所だよ。
ちなみに今年はわたしも出る！」

ルーテシアそう説明していると、なのはとメガーヌが栄養補給のドリンクを持ってきた。

「あら懐かしい、インターミドルの映像？」

メガーヌが映っていた映像に気付く。

「そー。今アインハルトに出場の勧誘してたの」

「懐かしいわねー。昔を思い出すわー」

「もしかしてメガーヌさんも参加されてたんですか？」

リオをそう聞くと、笑顔でメガーヌは返事をする。

「ええ、学生時代にクイントと一緒にね」

（クイントさんはスバルさんやノーヴェたちのお母さんです！）

（なるほど）

クイントのことを知らないアインハルトに、ヴィヴィオがそっと教える。

「少女らしい青春時代を熱い戦いに燃やしたものよ。都市決勝でクイントとも
戦ったりもしたっけ」

「そうなんですかー！」

「その試合の映像データってありますか？　是非見てみたいです！」

コロナがそう言うと、メガーヌはちょっと困ったような顔をした。

「ええと、見せてもいいんだけどー…あまり参考にならないかもね…」

「どういうことですか？」

ヴィヴィオも聞くが、メガーヌはあのー、とかそのー、とかしか言わない。

「それはあれだ、やりすぎちゃったのさ」

そこにウィルが入ってくる。

「あ、ウィル君」

「どういうこと、ウィルパパ？」

「その決勝が終わる頃には試合会場は大きく損壊、というか大破。観客席も
　一部が崩落。後に調べたら建物の基礎にもヒビが入っていたんだと。大掛かりな
改修工事が終わるまで、その後のインターミドル都市決勝は別の場所でやって
　いたんだ」

「えっ」

「えー…」

「ママ？」

みんながじーっとメガーヌを見ると、

「…若気の至り、ってやつよー。うふふふ～」

と言った。

（わ、笑ってごまかした？）

みんなそんなことを考えていた。

試合の参加資格の話になるとメガーヌが重要なことを。

「『安全のためＣＬＡＳＳ　３以上のデバイスを所有していること』…これも今と変わってないわよね？」

「あ…」

この中で唯一デバイスを持っていないアインハルトはしょんぼりした。

「デバイス…持ってないです」

「あら、じゃあこの機会に作らなきゃ」

「その…でも真正古代（エンシェント）ベルカのデバイスは作るのが難しいと…」

「ならはやて達に頼めばいいんじゃないか？」

そこでウィルが助け舟を出す。

「そうだね、はやてちゃん達なら詳しいし」

なのはも同意する。

「……？」

はやてのことを知らないアインハルトは首をかしげている。

「ああ、はやては俺の妻でな、古代ベルカのことなら超詳しいんだ。ヴォルケンズも
協力してくれるだろう。今ミッドは早朝だから後でメール送っとくよ」

「は、はい…ありがとうございます」

「う～、それ私が言おうとしてたのに～」

隣でルーテシアがぶーたれていたのは多分気のせいである。

次の日。

Ｓｉｄｅ　アインハルト

私は今ルーテシアさんとウィルさんと一緒に居間に居ます。これから管理局の八神
司令とデバイスのことでお話する為です。ですが…どんな方なのでしょう。色々な
事件を解決した歴戦の勇士、という話ですしやっぱり怖い方かな？

「そう硬くなるなって。はやてはそんな怖くねえぞ」

隣にいたウィルさんがそう言ってきたのでとてもびっくりしました！　人の心も読めるんですか！？

「いや、そんなことはないよ」

「いやいやいやいや」

思いっきりわかってるじゃないですか。

そんなことをしている間にルーテシアさんがミッドとの通信を始めました。モニターに現れたのは赤毛の女性でした。

「あー、ルールー、オーッス！」

「おいーす、アギト」

どうやらお2人は仲が良いようです。

「デバイスの件だよね？　ちょっと待ってて」

「うん、お願い」

しばらくして現れたのは…たぬき！？

「はあーいルールー♪　お久しぶりやー」

「八神司令、お久しぶりです」

なぜあの人はたぬきのお面をかぶっていたのでしょうか？

「はやて、やっぱお面じゃつまらないってアインハルトが言ってるぞ」

「あちゃー、これじゃインパクト少なかったかー」

いえ、私そんな事言ってないんですけど…

「てことで、６課の時に使った俺特製の『狸薬』（番外編５参照）を使うんだ！」

「イヤや！　いろんな人に笑われて散々な目にあったやんか！」

「…どんな薬ですか、それ」

思わず口から思ったことが出てしまいました。

「ほら、アインハルトも知りたがっているし、それっ！」

そう言うとウィルさんはポケットから小さな小瓶を取り出して、ってあれ、消えました。

「うひゃあああああ！！」

すごい悲鳴が聞こえたのでモニターに視線を戻すと。

「またか！　またなのかあああ！！」

「あっはっはっはっは！！」

「はやてちゃんがまた狸になったです！」

大笑いしているアギトさんと銀髪の女性に、頭から狸の耳が生えている八神司令がいました。

「八神司令が狸にｗｗｗ」

「ごめんｗｗｗ手が滑ったｗｗｗ」

ルーテシアさんとウィルさんも笑っていて、思わず私も笑いそうになりましたが、それは失礼だと思いました。そこで咄嗟に顔面の筋肉に力を込めて、さっきと変わらない表情を維持するように心がけました―

「あああああ！！　しっぽまで生えとるやないか！　しかも前よりも立派や！」

―八神司令のスカートの端から飛び出している狸のしっぽを見るまでは。

「ふっ、ふふふ…」

ついに我慢できなくなって私も笑ってしまいました。

5分後。

「とまあ冗談はこれくらいにして」

「せやね」

さっきまで生えていた耳と尻尾は、もう消えてしまいました。ウィルさんいわく、

「以前よりもより狸っぽくなるが、有効時間はものすごく短い」

だそうです。

そして話は私のデバイスにうつりました。

「えと…その格闘戦技だけで戦いたいので武器型ではないほうが…」

「そーかー、格闘家さんやもんねー。ほんなら体の動きを阻害するような装着型も
良くないかなー」

聞くところによると、スバルさんのデバイスはとても重いそうです。

「ですから、そのこの子のような補助・制御型がいいかと」

そう言いながら私はヴィヴィオさんから借りたデバイス、セイクリッド・ハートを
持ち上げる。すると3人はすぐに納得して、私のデバイスの作成を

してくれると
言ってくれました。

「ありがとうございます！」

「まあ詳しい話も聞きたいから、合宿が終わったら一度うちか本局に遊びにおいで！
ウィル君に言えばなんとでもなるし」

「は、はい」

それぞれの目標と

それぞれの誓いを胸に…

予選開始まであと2ヶ月！

続く…

「ボクはスルーですか！？」↑ミウラ・リナルディ

「ひどいです！」↑シャンテ・アピニオン

「オレを無視するたぁ、いい度胸だな！！」↑ハリー・トライベッカ

「この私をスルーするなんて、無礼ですわ！！」↑ヴィクトーリア・ダールグリュン

「……」↑ジークリンデ・エレミア

「す、すいまっせーん！！」↑作者

第１２７話：楽しい合宿？その１０（後書き）

ゞミ　―――――――

ということも

―――――＼　　／　　―

―　　可能だろう・・・・・・・・・・・・ということ・・・・！

―　　―　　＼　　／　　―

―

めちゃくちゃですいません…。

次回は…いつになるかわかりませんが、時期的にアレですので、海の話でも書くかもしれません。

もしくは4巻が発売されるまで完全放置して、その間に新作を書くかも。今のところ考えているのはインフィニット・ストラトスですかね。最近ハマっているので。とはいっても例のごとく原作は読んでいないので、アニメ&ウィキのみで書くことになるかもです。絶対書く、とは決まっていません。私の気分次第です。

では

番外編１６：アインハルトの悪夢（？）（前書き）

久しぶりの更新なのに短い番外編。でもそんなの関係ねぇ！

合宿２日目の夜に起こったこととという設定で。

番外編16：アインハルトの悪夢（？）

～ホテル・アルピーノ、子供たちの部屋、早朝～

「……う……んっ……」

碧銀の髪と虹彩異色のアインハルト・ストラトスは、苦しげな声を上げながら
何度も寝返りをうっていた。

「アインハルトさん…」

それを隣で見ているヴィヴィオ。さっき起きてトイレから帰ってきたらアイン
ハルトがうめき声をあげていた。

（また覇王の夢を見ているのかな？）

だがヴィヴィオには何も出来ない。夢にまで介入することは不可能だからだ。
従ってヴィヴィオはアインハルトの手を優しく握ってあげることにした。

すると。

「……う……ん？……」

「え」

さっきまで苦しそうな表情だったアインハルトが、今は不思議そうな表情になっていた。

（どんな夢を見ているんだろう？）

その頃、アインハルトはというと、雲に覆われた薄暗い空と枯れ果てた大地、そんないつもの夢を見ていた。

（またこの光景…何回見ればいいんだろう）

そんなことを思いつつ周囲を観察すると、前とは違うものか見えた。

「……あれ？　ない」

何がないかというと、そこら中に転がっていた死体がないのだ。

ここは戦場のはず
なのにそれが1つもない。

（おかしい…いつもの夢じゃない？）

だが景色は古代ベルカのそれと同じなのでさらに混乱するアインハルト。すると、
遠くの方で大きな足音が長々と聞こえてきた。大勢の人々が列を作って歩いている
みたいだった。

（誰だろう？）

気になったので近くの丘に登ってみると、信じられない光景が見えた。

「……たけのこ？」

そう、彼らは皆たけのこみたいなヘルメットをかぶっていたのだ。

「なんで？　あんなの見たことない…」

それもそのはず、古代ベルカに筍なんかあるわけがない。そしてたけのこ軍団の先頭を
歩いていた男が何かを見つけたらしく、大声で後方の男たちに知らせた。

「敵だ！　きのこ軍を見つけたぞー！！」

「「「「「うおおおおおおおおおお！！！！！！！」」」」」

「ひいっ！」

男たちはそれを聞いた瞬間雄叫びを上げながら走りだした。

「なに、この人達…」

でも気になるのでついていくアインハルトだった。

やっとたけのこ軍に追いつくと、そこではすでにきのこ軍と乱戦状態になっていた。
だが、見たところきのこ軍の方が数も少なく次第に追い詰められていった。

「…ほんとにきのこだ」

きのこ軍はヘルメットがきのこの形をしていた。

（ていうか…なんできのことたけのこなんだろう……）

すると。

「きのこハンマあああああああああ！！！！」

ズドーンッ！！

「「「「「ぎゃあああああああ！！！」」」」」

1人のきのこ軍の兵士がきのこの形をした大きなハンマーを振り回してたけのこ軍の兵士をなぎ倒していった。

「ここでやられるわけには…いかんのだ！！　皆の者、俺に続けえええええ！！！」

「「「「うおおおおおおおおお！！！！！！！！」」」」

他のきのこ軍兵士もきのこハンマーを装備してたけのこ軍を倒していく。

（ハンマー無双ですね、わかります）

しかし黙ってやられるたけのこ軍ではなかった。

「くそっ！　総員ドリルを装備しろ！！」

「「「「「了解！！！」」」」」

隊長の命令に従い、たけのこ軍兵士は右腕に大きなたけのこ型のドリルを装備した。

（ドリル…なんか強そう…）

「おおおりゃあああああ！！！」

「「「ぎゃあああああああああ！！！」」」」」

実際強かった。たけのこドリルで攻撃されたきのこ軍兵士は遠くまでふっ飛ばされる。

その後も長い戦いが続いたが、戦場に立っているのは両軍それぞれ1人だけだった。

（あれ？　お、女の子！？）

防具などが壊れてその素顔が明らかになった2人をよく見ると、2人とも女だったのでアインハルトは驚いた。

「これで…決める！　カートリッジロード！！」

きのこ少女がハンマーを構えながら叫ぶ。するとカートリッジが5個ほど排出されてハンマーは大きくなり輝きはじめた。

「かかってこい！　カートリッジロード！！」

たけのこ少女もまたドリルを巨大化させ、高速回転させる。

（ど、どうなるんでしょうか…）

アインハルトもどきどきしながらそれを見つめる。

「はあああああああ！！！」

「うおおおおおおおお！！！」

2人は同時に走りだし、距離を詰める。

きのこ少女を細切れにしようとする超高速回転のたけのこドリル。

そんなたけのこ少女を叩き潰そうとするきのこハンマー。

2人がぶつかった瞬間、まばゆい光が広がってアインハルトの視界がゼロになった。

「うあああああ！！　目が！　目があああああ！！」

「うわあああ！！！」

ゴチンッ！

「いてっ！！」

「ミゲルッ！！」

飛び起きたアインハルトは突然額に強烈な痛みを覚えてのたうちまわった。

「姉上！！」

「お姉様！！」

どこからかカナリアとイクスの声が聞こえる。目を開けるとリオとコロナが心配そうにこちらを見ていた。

「アインハルトさん、大丈夫ですか？」

「ううう…なんとか…何があったんですか？」

コロナが丁寧に説明する。

「えっとですね、朝になってみんな起きたらアインハルトさんがうなされていて、
ヴィヴィオがずっと心配そうに見ていたんですけど、そしたらアインハルトさんが
突然飛び起きてヴィヴィオのおでこにぶつかっちゃって…」

「で、ヴィヴィオはそこで気絶してます」

「えええっ!?」

慌ててそっちを見てみると、おでこにでっかいタンコブを作ったヴィヴィオがひっくり返っていた。それをカナリアとイクスが介抱している。

ドドドドドッ、バタンッ!!

「何があったの!?」

「みんな大丈夫!?」

大声を聞いたのか、なのは達がすっ飛んできた。

「いや～、実は…」

一番年長のルーテシアがきちんと説明したので大人組はほっと一息。

「ヴィヴィオさん、本当にごめんなさい！」

「いえいえ、いいんですよアインハルトさん。ちょっとした事故ですから」

朝食後にアインハルトはヴィヴィオに謝罪していたが、当の本人は笑っている。

「でもどんな夢を見ていたんですか？」

「……笑わないでくれますか？」

「大丈夫ですよ！」

そしてアインハルトは真剣な表情で夢の内容を教えた。

「実は…きのことたけのこが戦争をしていまして…」

「…はい？」

「いえ、ですからきのことたけのこが戦争を…」

「「ぶーっ！！」」

すると隣にいたウィルとなのはが飲んでいたコーヒーを盛大に吹き出した。

「な、なのは！？」↑フェイト

「「「「なのはさん！？」」」」↑フォワード陣

「ウィルパパ！！」

「お母様！？」

「父上、汚いぞ」

「悪い悪い、でもよ…きのことたけのことかｗｗｗ」

「お腹が痛いのｗｗｗ」

2人は大笑いしている。それ以外の人達は、なんで2人が笑っているのかわからない。

ちなみに、この話を聞いたはやてとヴォルケンズも大爆笑した。

近い未来、アインハルトはみんなと一緒に地球へ旅行に行き、そこで「きのこの山」と

「たけのこの里」というお菓子と、両陣営との間で戦われている日本国最大級の内戦、

「きのこたけのこ戦争」のことを知って驚くのだが、それはまた別の話。

続く……

番外編１６：アインハルトの悪夢（？）（後書き）

勢いで書いた今回。良くないね。短いし。

早くＶｉｖｉｄ４巻読みたいなー。

次回はいつになるのやら。

では

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2059q/

魔法少女リリカルなのは 〜よくある転生のお話〜

2011年8月20日13時40分発行